
とある学園の無責任な日常

HVライナー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園の無責任な日常

【Nコード】

N8541M

【作者名】

HVライナー

【あらすじ】

この物語はいろんなアニメ・ライトノベル・漫画のキャラクター達が通う学園の高校の生徒たちの日常を描いた多重クロス、キャラ崩壊有り?のお話なのです。

“魔法”、“気”の概念は“魔法先生ネギま!”を参考にしています
この物語はフィクションですので大抵のことを大目に見てください

検索用

ハヤテのごとく 銀魂 ネギま アスラクライン バカとテス

トと召喚獣 SHUFFLE 生徒会の一存 けんぷファー オオ
カミさんと7人の仲間達 11eyes CLANNAD えむえ
むっ 迷い猫オーバーラン
FORTUNE ARTERIAL 恋姫無双 ONE PIE
CE ごくせん けいおん 神のみぞ知るセカイ とらドラ！ 緋
弾のアリア めだかボックス ISインフィニット・ストラトス
おまもりひまり とある科学の超電磁砲 とある魔術の禁書目録
リリカルなのは Angel Beats これはゾンビですか
僕は友達が少ない ハイスクールDxD C3 - シーキューブ -
境界線上のホライゾン Fate/stay night 真剣で
私に恋しなさい

プロローグ：まず、簡単な説明をしなきゃはじまらないでしょ

舞台となる桃源郷学園の簡単な紹介

ここは、神奈川の三浦半島の北三浦市にある南西を海に北東を山に囲まれ面積は東京ドーム158個分（約7.4平方km）の広い敷地をもつ学園。北三浦市は葉山町と逗子市・横須賀市の一部のこの物語オリジナルの市である

学校は3学期制で土曜日と祝日は一部を除いてお休み

授業は週32時間（体育会クラスなどの一部クラス除く）

飛び級制度がある。

生徒の総数は小中高併せて2万9千人以上であり中高生は希望者のみ寮生活が可能

（今回の舞台となる高校第一校舎だけで生徒数は1615名）

寮は男女完全分離制、一部屋4〜6人。ただし午前6時〜午後10時までの間は各寮への出入りが可能。門限は午後10時30分

生徒は学生証とICカードを所持することが義務付けられており、このICカードで買い物、図書館での本の貸し出し、鉄道・バス・タクシーなど公共交通機関の利用などが可能。ICカードの使用履歴はすべて学園で管理される

学園の地下には約2平方km深さ約50mの地下街が広がりそこに

は劇場・映画館、巨大図書館、生徒専用学習（自習）室、生徒専用のゲームセンター・スポーツクラブ・カラオケボックス・ボーリング場など様々な施設がある

この学園には日本の各地に同じ学校法人が運営している学園がある
場所：大阪・阪南市箱作周辺、三重・桑名市長島周辺、北海道小樽市銭函周辺、福岡・福岡市今宿周辺、宮城・利府町周辺、広島・安芸区安芸中野周辺、富山・高岡市西高岡周辺

これらの総面積は16.6平方キロ、全生徒数は10.4万人に及ぶ

なお、世界各地にも姉妹校がある

姉妹校のある国：トリニダード・トバゴ モザンビーク イタリア イギリス フランス カナダ アメリカ ベラルーシ マダガスカル ルワンダ ギニアビサウ フィジー
オーストラリア

寮の概要

20階建

一部の部屋を除き3DKの5、6人部屋 一部屋4〜6畳

築約10年

風呂は共同の大浴場のみ

トイレ・シャワールームは各部屋にある

バルコニー有

エアコン有

エレベーター有

B1階：駐輪、駐車場

1階：ラウンジ、大浴場・コンビニ

2階：食堂、生協・スーパ

あと、簡単なこの世界の歴史のお話（銀魂の世界観を基にしています）

幕末までの歴史：現在の日本の歴史と同じ

幕末：「天人」襲来。攘夷戦争に日本が敗戦の後、日本は天人による傀儡政治に

1940年代後半：第二次世界大戦に日本が敗戦。それにより天人は戦勝国であるアメリカ、ロシア（ソ連）などとの交易を重視。日本にいた天人の3/4が戦勝国へと移住。日本は大戦前まで幕府による政治が続いていたが敗戦を機に天皇制政治に切り替えられる

1950年代：西洋魔術文化が本格的に日本に伝わりはじめる。このため魔法や陰陽道などといった類はこの世界では認知されています

ここから先の歴史は現在の日本と同じである

この学園の歴史

1930年代後半：軍士官学校として開校。現在の地下街は元々銃火器、戦車、戦闘機、軍艦などの兵器を製造・備蓄・修理するための施設であった

敗戦後：現在の理事長の先々代が学校を買い取り、戦争色を一切排除して現在に至る

最後に

この物語はフィクションですので、
たいていの事は大目に見てくだ
さい

プロローグ：まず、簡単な説明をしなければいけません（後書き）

本編は次回から始まります

第一話：クラス発表

ワイワイガヤガヤ

急げ急げ~~~~

遅刻しちゃう~~~~

駅からのびる大通りに学生たちの賑やかな声が響く

まあ遅刻しないように急いでいるだけなんですけどね。

ここは神奈川県パラダイスの三浦半島の西側に位置する桃源郷学園。

「オラオラ、急げ~~~~遅刻すつぞ~~~~」

「皆さん急いでくださいね。あと今日はクラスの発表がありますのでその確認も忘れないでくださいね」

学園の高校第一校舎の前に二人の男性が立つ。

一人は銀色の髪、もう一人は赤髪の少年である

銀髪の方の名前は坂田銀時、赤髪の少年の方の名前はネギ・スプリングフィールド。いわずと知れた(?)銀魂とネギまの主人公です

ちなみにこのお2人はこの物語のメインとなる高等部2年A組とその隣のクラスB組の担任であるのです。

銀時は生徒からは銀さんなどと呼ばれ、ネギはネギ君、ネギ坊主などと呼ばれて親しまれている

ところで、なぜ学園の教師なのに銀八じゃなくて銀時なのかという
と……

ただ作者が小説版を持っていないだけです……はい……

「おはようございます。銀さん、ネギ先生！！ほらお嬢様もきちん
と挨拶してください」

「ん……おはようございます」

ネギ「おはようございます、綾崎さん、三千院さん」

ネギに名前を呼ばれた青髪の執事服風の制服を着た少年と金髪ツイ
ンテールの背の小さな少女の二人。名前は綾崎ハヤテと三千院ナギ。

この2人はこの第一話の主人公であります。

因みにこの物語は主人公が誰かということはまだ決めておりませ
ん。登場作品、登場人物が多いですからこうやってそれぞれのお話
ごとに主人公を変えろという手法をとらせていただきます。でも私
作者の好きなキャラや使いやすく動きやすいキャラの登場頻度が多
くなるのが目に見えています……

まあそんな設定の話はともかくとして……

ハヤ「銀さん、自分のクラスが書かれている紙ってどこで配られていますか？」

銀時「ああ、その紙なら昇降口の前で配られてっからさっさと取って早く教室に行け、予鈴が鳴るまで5分も無えぞ」

ハヤ「ありがとうございます！では行きましょう、お嬢様」

ナギ「ああ・・・そうするか」

ハヤテとナギは少しばかり急ぎめで歩いた後、昇降口に到着した

そこでは、一人の女性が生徒たちに次々とクラスが書かれた紙を配っている

ハヤテ「あつ、桂先生おはようございます」

桂雪路「おはよう、ナギちゃんに綾崎君。これがクラス表よ。さっき見たけど2人は同じクラスだったわよ」

雪路は2人に紙を渡した。ナギとハヤテはその紙に自分の名前を探す。

程なくして2人は自分の名前を見つけた。

ナギ「私とハヤテはA組のようだな」

ハヤテ「そのようですね、担任は銀さんですか・・・」

ナギ「ところで去年私たちの担任だった先生の名前がどこにもないが・・・」

ハヤテ「もしかして担任から降格されて非常勤の教師に!？」

雪路「違うわよ!! 私は3年生の担任になるようにいわれたのよ! それで今年は3年A組の担任よ」

ハヤテ「そうですか、なら僕たちは教室に向かいますんで」

雪路「頑張つてね〜」

雪路に見送られながらハヤテたちは教室に向かった

ここで一度、ハヤテたちのクラスメイトの皆さんを紹介しておこう

えっ・・・見たくない?

見たいの??

もう、ちょっとだけよ

加トちゃんみたいに言うのがポイント

ええ〜〜はい、自分でも分かっています。やらかしてしまいました。
第一話だというのに・・・

というわけでハヤテたちのクラスですがクラス表をご覧ください

綾崎ハヤテ 三千院ナギ 桂ヒナギク 西沢歩 愛沢咲夜
春風千桜 東宮康太郎 (ハヤテのごとく)
神楽 志村新八 (銀魂)
神楽坂明日菜 近衛木乃香 桜咲刹那 宮崎のどか 綾瀬
夕映 早乙女ハルナ 長谷川千雨 エヴァンジェリン 絡
繰茶々丸 (ネギま!)
黒崎朱理 佐伯玲士郎 沙原ひかり (アスラクライン)
吉井明久 坂本雄二 土屋康太 木下秀吉 島田美波
姫路瑞希 霧島翔子 木下優子 (バカとテストと召喚獣)
土見稟 芙蓉楓 リシアンサス ネリネ 麻弓IIタイム
緑葉樹 (SHUFFLE)
杉崎鍵 椎名深夏 (生徒会の一存)
瀬能ナツル 美嶋紅音 (けんぷファー)
鶴ヶ谷おつう マジョーリカ・ル・フェイ (オオカミさんと
7人の仲間達)
皐月駆 水奈瀬ゆか 百野栞 田島賢久 (11eyes)
坂上智代 (CLANNAD)
石動美緒 (えむえむっ)
更識楯無 (IS)
計47名

なお、“アスラクライン”や“オオカミさんと七人の仲間達”、“IS”など主人公・ヒロインの名前がないと思った方、安心してくだ
さい。このクラスは2年生であり、主人公たちは他の学年にいま
すから。そこらへんはきちんとしているのですよ

ハヤ「ここが僕たちの教室ですね」

ナギとハヤテの2人は教室へと入っていった。

どうやら2人が一番後だったらしく、教室内には賑やかな声が響いていた

ヒナギク「おはよう、ハヤテ君」

歩「おはようハヤテくん……」

ハヤテ「おはようございます！ヒナギクさん、西沢さん。お2人も僕たちと同じクラスだったんですね。嬉しいですよ」

ヒナギク・歩「（ハヤテくんが私と同じクラスで嬉しいって……）
私たちも嬉しいわ」

ナギ「私は嬉しくないがな……」

ハヤテ「ダメですよ、お嬢様。そんなことを言うては……」

ナギ「ふっ……んだ」

ナギはそっぽを向くと自分の机へと向かって歩き出していった

ヒナギク「相変わらずね、ナギったら」

ハヤテ「ええ、でも口ではああ言っていますが本心では嬉しいはずですから仲良くしてあげてくださいね」

歩「もちろんだよ、ハヤテ君」

ハヤテはしばらくヒナギクや歩と会話を交わした後、クラスの男子メンバーの元へと向かった

ハヤテ「おはようございます、皆さん」

雄二「よお、綾崎」

新八「おはようございます、ハヤテさんもこのクラスだったんですね」

ハヤテ「ええ、皆さんよろしくお願いしますね」

東宮「ああ、よろしくな」

ハヤテ「……………って東宮さんもこのクラスだったんですか！？」

東宮「そうだけど、僕と一緒に嫌なのか？」

ハヤテ「いえ、そうじゃありませんよ。東宮さんがいるということ
は変態さんも……………」

東宮「安心しろ、瀬川は双子仲良くB組だ」

ハヤテ「ふうそれはよかった……………」

ハヤテは安心して胸をなでおろす

秀吉「綾崎の瀬川への振舞いは常軌を逸脱しかけておるからのう」

賢久「俺は残念だけどな」その常軌を逸脱しかけている振舞いを見ることが出来無えで」

ハヤテ「勘弁してくださいよ、あの人はTPOも弁えずに好きだとか愛してるだとか言っただけで抱きつこうとしてくるんですよ。僕の身が持ちませんよ」

明久「でも仕方ないよ、綾崎の女装姿って秀吉に負けなくらい可愛いし……」

ムツリーニ
康太「……一部の男子生徒からの需要もあつて高価で売れてる」

ハヤテ「そんなんですか……って何勝手に売ってるんですか……」

ハヤテのツッコミがムツリーニに炸裂

康太「……でも売れているのは事実。この中にも買っている人がいる」

その言葉にハヤテは周りの人の目を睨みつける。すると一部の生徒は口笛を吹きながら目をそらすという分かりやすい行動を取った

「まったく・・・変態さんのほかにも興味を示している人がいたとは・・・」

ハヤテは小さくため息をついた

キンコーンカーンコーン

HRの合図である本鈴が鳴る

30秒ほどした後、担任である銀時が入ってくる

銀時「おゝい、チャイム鳴ってっぞ。さっさと席に着け」

ガラガラガラ（椅子に座る音）

銀時「今日からこの2年A組の担任をする坂田銀時だ。まあ大体の奴は1年のころ教えた奴もいるけど、それ以外の奴もよろしくな」

その後は、クラス委員などを決めたり、これからの授業の流れを説明だとかありましたがつまらないので略しますね〜

銀時「よし、今日はこれで終わりだ。めんどくせえが明日から授業もあるから教科書だとか忘れんじゃねえぞ〜」

銀時は頭をポリポリと掻きながらドアを開け外へと出て行くことしたが……

銀時「言い忘れていたが、綾崎、桂、神楽坂、桜咲、黒崎、佐伯、坂上。お前ら風紀委員ジャッジメントだよな？」

ヒナギク「ええ、このクラスのジャッジメントは私たち7人ですけど……」

風紀委員・ジャッジメントとは、“とある魔術の禁書目録”のものとほぼ同じで学生たちによるこの学園の治安維持機関。約300人前後で構成。選考方法は年に数回行われる『ジャッジメント選考大会』なる格闘大会で戦闘能力の高い生徒が選ばれる。主な仕事は校内のパトロールや不良グループの討伐などである。ちなみに選考の基準となる格闘大会は学校全体で生中継され、そこで上位者となる猛者をジャッジメントに入れることにより不良行為の抑制をしているのである

この学園には風紀委員のほかにも警護団アンチスキルがあり、銀時もその一人である

なお、アンチスキルを警備員と書かないのは学園がアルソックやセコムなどの警備会社から警備員を派遣してもらっているからである

銀時「今日からいきなり会合があるらしい。だから総合会議室Bに12時になったら行ってくれ」

「「「「「はい（分かりました）！！」「」「」「」

ハヤテは銀時が教室を出て行くのを見送るとナギの元へと向かい、

「とうわけで、僕は仕事があつてまだ帰れませんがお嬢様はどうしますか?？」

ナギ「んんんどうしよっかな」

彼女はしばらく考えた後、

「なら、私はSPと先に・・・」「部活に出ない?」「」

ナギの言葉を打ち消すかのように2人の女生徒がナギに声をかける

ハルナ「そんなに時間があるなら出ようよ、サブ研」

ナギ「って、今日からやるのか?」

紅音「そうです。新入部員の勧誘も必要ですし、あと春季新作アニメの感想を語り合ったりしたいですし・・・」

サブ研とはサブカルチャー研究部の略であり、紅音の発言で少しは理解できたと思うが、漫画、アニメ、ラノベ、ゲーム全般、フィギ

ユア、同人誌e t cといったオタク文化の好きな者が集まった部活である。

ナギ「・・・仕方ない。なら行ってやるか」

さっさと片付けを済ますと立ち上がり、

「というわけで、ハヤテ。私はこれから大事な部活があるから！ハヤテも大事な会合にきちんと出るのだぞ！！」

「分かりました。早乙女さん、美嶋さん、お嬢様のことよろしくお願ひしますね」

紅音「はい、任せてください」

ハルナ「じゃあ、サブ研へレッツゴー！！ほら、千雨ちゃんに千桜ちゃんに優子ちゃんも！！」

ハルナは千雨、千桜、優子の背中を押して連れて行くこととする。

千雨「ちょっと待て！！私はサブ研なんかには出ないぞ」

千桜「私もだ。サブ研には出ないから帰らせてくれ」

優子「言うておくけどね、私はアニメや漫画なんか興味ないわよ！

興味あるのは乙女小説くらいで・・・」

ハルナ「はいはい、言い訳はいいから!」

千桜、千雨、優子の3人の「離せ〜」の声もむなしく、ハルナのアーティファクト「落書帝国」によって作り出された触手に捕まれクラークンハンドナギ、紅音、ハルナとともにサブ研へと行かされた。

ハヤテ「では、僕たちも・・・」

明日菜「風紀委員の仕事に行きましょう」

朱湮「ええ、そうしましょう」

ハヤテたちも、風紀委員の仕事へ向かっていった。

第一話はここでおしまい。

次回はドキドキ?の女子寮のお話

第二話・女の子に好かれてるからって良い事ばかりとは限らない(前書き)

今回の話は、アニメ銀魂第62話“ミイラ取りがミイラに”を自己流にアレンジしたものです。

第二話・女の子に好かれてるからって良い事ばかりとは限らない

「はぁ……………」

2人の男の子が今、ため息をつきました。

ナツル「何で俺らがこんなことを・・・」

駆「めんどくさいのもあるが、もしばれたらどうなるんだ？俺たちは……………」

ナツル「さぁ、でもタダでは済まされないだろうな」

彼らが向かっているのは女子寮、しかし時間は10時半。男子が立ち入り可能な時間はとっくに過ぎていきます。

なぜナツルと駆の2人は寮の規則を破ってまで女子寮に向かっているのでしょうか・・・

それはすこし前にさかのぼります

~~~~~回想中~~~~~

30分ほど前、彼らは男子寮のラウンジでゲームをしていました。

そしてナツルと駆の2人はそろってそのゲームに負けてしまったのです。

賢久「さあて、罰ゲームは何がいいかな」

秀吉「罰ゲームは面白いものがないのう」

稟「そうだな、でも面白いものって言われると・・・」

新八「なかなか思いつきませんよね」

彼らが罰ゲームの内容に関して悩んでいると・・・

「お前らそこで何やっているんでさア」

賢久「よオ、沖田」

賢久に沖田と呼ばれた人物。それは“銀魂”の登場人物で風紀委員ジャッジメントの1番隊隊長で現在3年生の沖田総悟であった。

なぜ2年生の賢久が3年の沖田を呼び捨てにしているのかというと賢久は留年をしているからで現在20歳で18歳の総悟より年上であるからです

ちなみに風紀委員の1番隊は小中高のA組、J組の『ジャッジメント選考大会』成績上位者で構成されており、人数は約60人となっています。この物語では風紀委員は1番隊の姿を書くこととなります



秀吉「沖田先輩、実はゲームをしていてそれで負けた瀬能と皇月の罰ゲームを何にするか考えておったのじゃ」

稟「それで、面白いものをもって思ったんですけどなかなか面白いものって思いつかなくて」

総悟「おもしろいものねえ・・・」

彼は少し考えた後・・・何かを思い出してバツクから何かを取り出した

駆「・・・これって何ですか??」

総悟が取り出したもの、それはオレンジ色の円柱に細い棒の手が付いていて上部の半球型の突起物に死んだ魚のような目と口が描かれた物であった。

総悟「これはジャスタウェイでさア。今日、風紀委員の仕事で不良グループから取り上げたものでさア」

ナツル「そんな、ジャスタウェイなんて名前って言われても・・・何なんですか?何に使うんですか?」

賢久「お前ら、バカだなく。ジャスタウェイはジャスタウェイ以外の何物でもなく、それ以上でもそれ以下でも何でもねえんだよ」

駆「じゃあ、百歩譲ってこれがジャスタウェイだとしてこれでどうやって罰ゲームをするというんですか？」

総悟「そうだな、これを女子寮に仕掛けるっていうのはどうでエ？女どもが慌てふためくって姿を見るのもなかなか面白いはずだぜい」

賢久「そうだな、それがいい！」

稟「沖田先輩の話を聞いていると何かジャスタウェイがとんでもないようなものに見えてくるんですけど・・・」

秀吉「そうじゃの、“仕掛ける”なんて普通の日用道具には用いない動詞じゃしろう」

総悟「まあ、取り扱いを間違えなければ暴発することもねエから安心しろ」

ナツル「暴発って・・・これ武器か爆弾の類ですよ、コレ。そうですよね・・・」

賢久・総悟「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ジャスタウェイが何か知っているらしい2人は黙り込んでしまった。

ナツル・駆「何とか言えエエエエ!!!!!!」

~~~~~回想終了~~~~~

まあ、上記のようなことがあって、2人はジャスタウェイの正体を知らされぬまま持たされ、『ジャスタウェイを女子寮に置いてくる場所は食堂とラウンジ』というのが彼らの罰ゲームの内容となったのです。

回想しているうちに2人は女子寮に到着した模様です。

もちろん女子寮への男子の立ち入りの時間はもう過ぎているため玄関から入ることは許されません。

彼らは塀の中から登りやすそうな物を見つけ……

ナツル「侵入完了」

駆「だな……」

女子寮になんとか入ることが出来ました

男子寮もですが女子寮の内部には監視カメラがあり寮内の秩序と平安、公序良俗を守っているのです。

何度も言っていますが男子の立ち入りは禁止されているので監視カメラで監視し尽くされている女子寮の廊下を堂々と歩くことは出来

ません。

駆「どうする？」

ナツル「どうするって言われてもなあ……」

2人は女子寮を眺めてみる

すると……

ナツル「ここから入れそうじゃないか？」

彼が見つけたのは中肉中背の人なら難なく匍匐前進で入れそうな大ききの鉄格子であった

駆「ならこつから入るか」

ナツル「だな……」

彼らは鉄格子を開けるとそこから女子寮へ入っていきました

ところで、今の女子寮の様子を見てみましょう。

ラウンジや食堂では女生徒たちが仲良く話をしていて、大浴場では夜遅くなりつつありますがまだ大人数が入っています

ナツルや駆の入っていった先はガス管や水道管、下水管やらが詰っていてなかなかうまく動くことが出来ません。

そんな中、2人はある一室の真下にたどり着きました

そこから上の部屋の話し声が聞こえました

ナツル「この声・・・」

駆「どうやら、姫路と島田と霧島の部屋みたいだな」

ナツル「それに、吉井と坂本の声もする。姿が見えないと思ったらこんなところにいたのか・・・」

ここで、上の部屋の様子を見てみましょう。

瑞希「明久君、ちょっと待っててくださいね〜あともう少しで出来ますから」

美波「残さずに、きちんと食べるのよ。私たちがつくるんだから」

明久「あ・・・うん・・・楽しみに待ってるよ・・・」

口ではこういう明久。しかし、心の中では・・・

(美波の料理は問題ない。しかし問題は姫路さんの料理・・・食したら絶対臨死体験に違いない)

翔子「・・・雄二、今日こそ私と寝ましょ」

雄二「断る！手錠で拘束してここまで連れて来やがって・・・」

翔子「・・・お風呂も一緒がいい？」

雄二「無理だ。第一手錠をされたままじゃ服が脱げないだろ」

翔子「・・・それもそうね。なら手錠は外してあげる」

ガチャツツ

翔子は手錠をはずしてそれを箆笥の中に戻そうとしました。その瞬間

雄二（明久、今だ！今しかない！逃げるぞ！！お前、姫路の料理は食いたくないだろ）

明久（雄二！！そうだね、今すぐここを抜け出して平穩男の子寮な世界に帰ろう！）

彼らは脱兎のごとく逃げ出そうとしました。その瞬間！

シユンシユンシユン！！

グサリ！！！！

明久・雄二（（ギヤアアア！！！！））

瑞希、美波、翔子の3人は台所にあったナイフや包丁を明久たちめがけて投げてきたのです。

ナイフは明久たちが座っていた床と明久たちの進行方向の壁に命中。床下にはナツルと駆がいて

ナツル・駆（（ウワアアア！！！！））

あと2センチほど前に進んでいたらナツルと駆は串刺しになっていたでしょう

美波「アキに坂本、何で逃げるのよ」

瑞希「そうです、酷いです。そんなことされたら私、殺しちゃう泣いちゃういますよ

明久「ちょっとまってえ！！何で？何で、泣いちゃういますってところ殺しちゃうに殺しちゃういますって振り仮名が振られてるのさ！！！！」

翔子「……私も、泣い串刺しにちやう」

雄二「翔子!! お前もおかしいよ!! 文と振り仮名が全く一致してねえよ!!」

ナツル「……ここは危険だ。今すぐ逃げよう」

駆「そうだな、そのほうがいい!!」

ナイフがとり除かれると彼らは前に向かってゆっくりと進み始めました

瑞希「ちようど、料理も出来ましたし。帰るんでしたら、それを食べてから帰って下さい。明久君のためにシチューを作ったんですよ」

瑞希が器に盛ったもの。それは見た目は紛れもないシチューだが、中身は恐ろしいものが入っていて……

明久「ねえ、これってなんていう名前の拷問なのさ」

瑞希「拷問なんて酷いです。明久君、アーン……」

明久「う・・・うわああ！！」

明久は口元まで運ばれかけていたシチューを身体の防衛反応が働いたのか手ではじいてしまった

すると、明久の手は瑞希の持っていた器にも当たりシチューは床にこぼれた

床にはさっきのナイフで穴が開いていて・・・

ドロリ・・・ボタツツ

ナツル・駆「ギヤアアア！！背中に、背中に何かが刺さったアアア！！焼けるウウウ！！背中が・・・背中が焼ける！！劇物だ、間違いない。コレは何らかの兵器だ！！

間違いない、奴らは俺たちの存在に気づいて・・・

早く逃げないと、俺たちの命がアアア！！」「

瑞希の料理は化学反応で出来ていますからね、シチューの白色も無機化学の白色沈殿で出来ているのではないでしょうが

瑞希「こぼれてしまったものは仕方ありません。残りがまだあるんでとってきますね」

明久・雄二（（隙あり!!!））

明久たちはもう一度逃げ出そうとします。

瑞希・美波・翔子「逃げんって言うているでしょうがアアア
!!!!!!」

キャラ崩壊、しかけてますね・・・

彼女たちはもう一度ナイフを手に取るともう一度明久たち目がけて
投げつけました。

明久・雄二「ウワアアア!!!」

彼らは間一髪、それらを避けるとドアを開けて外へ飛び出してい
きました。

今回はいったんここで終了

はたして、ナツルと駆、明久と雄二の4人・・・いやちょっとお待
ちください

竜宮乙姫「太郎様~~~~今宵も私と~~~~」

浦島太郎「ヒイ・・・ヒイ・・・無理だあ・・・身が持たない!!」

野井原緋鞠「若殿、どうして逃げるのじゃ!!」

神宮寺くえす「そうですね、何で逃げるんですの!!」

天河優人「何でって僕の体内で危険を知らせる警報が鳴りっぱなしだからだよ!!」

どうやら、逃げている人はもう2人いるみたいですね。

6人は無事に女子寮から抜け出して男子寮に無事帰還することが出来るんでしょうか

次回へ続きます

第三話：可愛いは正義

優人・太郎「ハア・・・ハア・・・」

自分を好いている人から逃げている2人、どうやら逃げているうちに合流したみたい。

うらやましいやらうらやましくないやら・・・

乙姫「太郎様~~~~!!待って下さい~~~~」

緋鞠「若殿!待つのじゃ!!」

優人と太郎は廊下の角を曲がる

乙姫「野井原様に、神宮寺様。あの角で仕留めることにしましょう」

緋鞠「うむ!」

くえす「了解ですわ」

そして3人も角を曲がる。

しかし、そこに2人の姿はなかった

乙姫「一体どこに行きましたの！」

いったい二人がどこに行つたのかというと・・・

太郎「ハア・・・ハア・・・」

優人「助かりました、ありがとうございます」

ナツル「いいよ、別に気にすることねえって」

どうやらナツルと駆に助けられた模様。

明久「まさかこんなところがあるなんてね〜〜」

明久と雄二の2人も助けられたみたいです。
ちなみに彼らは天井裏にいます。

雄二「でもこれなら心配要らないな」

駆「こんなところに逃げるなんて誰も考えてないだろうし」

優人「ここなら、後は逃げるだけですわね」

天井裏に逃げ込んで安心しきっている4人。

しかし、それで無事に逃げてハッピーエンドというわけにはいきません。それでは話がつまらないですよ

翔子「……どうやら天井裏に逃げたみたいね」

乙姫「霧島様に姫路様に島田様！」

くえす「天井裏ってどういうことですか!?!」

美波「私たちも人を探してね、見失っちゃったんだけどあなたたちが追っていた2人が天井裏に逃げていくのを目撃したから確信したのよ。この女子寮には天井裏があるって……」

緋鞠「ならば私たちもすぐに追おうではないか!」

翔子「……ちょっと待って、その前に“アレ”を使いましょう」

瑞希「“アレ”って……もしかして」

翔子「……そう、そのもしかして。みんなついてきて」

翔子は5人とある場所へと連れて行った。

そこはどんな建物にでもありそうな変哲のない消火栓だった

翔子は消火栓を開けてノズルを除けるとそこには青色のボタンがあった

そして彼女はそのボタンを押した。

翔子「……これで雄二たちは……」

美波「ここから逃げ出すことは出来ないわね」

ファンフォンファンフォンファンフォン！！

太郎「なんだこのサイレンは？」

雄二「気にすんな、さっさと帰るぞ」

サイレンが鳴り終わると次のような放送が女子寮に響き渡った

“要塞モード発令！要塞モード発令！直ちに風紀委員及び、HOBは持ち場に着くこと！それ以外の者は各自自分の部屋に戻り待機の事！これは実践である、訓練ではない！！繰り返す、これは実践である訓練ではない！！なお、大浴場、共用トイレ、食堂は大変危険になるので近づかないこと”

乙姫「いったい何があったのでございますか」

瑞希「フフフ・・・それはですね〜」

「私が説明するわ！」

瑞希達の前に一人の女性が現れた

美波「仲村先輩！！」

彼女たちの目の前に現れたのは3年生の仲村ゆり。皆さんご存知、Angel Beats!のゆりっぺである。

ゆり「あなたたちが、要塞モードのボタンを押したのね」

瑞希「はいそうです。それで難ですが入ってきたばかりの1年生に要塞モードを教えてもらえませんか」

ゆり「いいわよ。この女子寮はね、幾多の女生徒が被害を受けてきたキモブタやキモオタ男子たちのストーカーや盗撮などといった犯罪行為から女生徒を守るためにコツコツと武装を重ねてきたの。そして、もはや要塞と呼ばれる代物になったわ。ネズミー匹すら逃げ出せない鋼の要塞にね」

その頃の男子たち

駆「な……なんだよこれ……」

ナツル「行きとは全く違うじゃないか」

彼らがいたのは駆とナツルが登って進入してきたはずの扉の前であった

しかし、その扉にはいつの間にか有刺鉄線と高電圧危険と書かれたコードが張り巡らされていた

優人「こんなんじゃない、逃げられませんよ！」

雄二「いや、探せ！どこかに逃げ道があるはずだ！！」

元に戻って・・・

くえす「なるほど・・・よく分かりましたわ」

緋鞠「ところでHOBとはなんなのじゃ？さっき放送で言っておったが」

ゆり「それはね、“変態お仕置き部隊”の略よ」

乙姫「それに食堂や大浴場が危険になるって何があるのですか？」

ゆり「・・・まあ、それは百聞は一見に如かずということで見てもらったほうがいいわね。それではまず、大浴場第一テレビにズームイン！！」

ゆりは朝のニュース番組ズームインの羽鳥アナウンサーや西尾アナウンサーのごとく監視カメラに向かって元気よくズームインをした

それにつられて瑞希や緋鞠たちも監視カメラに向かってズームインをしたのは言うまでもない

大浴場（更衣室）にいたのは紅葉知弦であった。どうやら危険なのは大浴場だけなようで更衣室は平気らしい

知弦「はい、こちら大浴場です。ここ大浴場では、要塞モードが発令されると4分後にシャワーからはアツアツの蝋燭が噴き出して、風呂のお湯は全て抜けてしまつて替わりにドロドロに融けた鉄や銅が湯船に張るわ。皆さん大浴場は大変危険ですから近づかないようにね」

ちなみに鉄の融点は1535 である。こんなもの皮膚に触れただけで死んでしまうのではないか・・・

知弦「それでは、共同トイレニコニコ放送にズームイン！」

彼女もまたズームインをする

共同トイレ

共同トイレにいたのは志村妙であった。

妙「はい、こちら共同トイレです。こちらのトイレで何が起ころのかというと・・・まず、ボールを個室の中に投げ入れてみましょう」

そういつと彼女はポケットの中からスーパーボールを取り出しそれを個室の中に投げ入れた。

美琴「あれって・・・“HOL”だっけ？」

黒子「そう、“HOL”です。あれは危険ですよ」

その頃、女子寮司令室

そこには情報部がメイジャー集まっていた。

情報部とは主に校内新聞や休み時間のラジオ放送、学園のHPの更新など様々な情報を発信するほか、ハッキングや情報操作による学園内の大衆操作などの任務もある

麻弓「タイム」そろそろ15分立つけど“HOL”どうする？」

朝倉和美「私は撃っちゃっても構わないけど、面白そうだし」

長谷川千雨「いいのか？これ撃ったら女子寮も壊れるかもだぞ」

麻弓「でも撃っちゃわない？HOLが撃たれるとこ、見てみたいし」

和美「よし、じゃあ撃つわよ」

初春飾利「はい」

マジョーリカ・ル・フェイ「了解ヨ～～～」

千雨（面白いや見たいっていう気持ちで撃つって・・・）

彼女たちは司令部の中央にある巨大なモニターの前に集まるとその
“HOL危険”と書かれたボタンをおした。

ファンフォンファンフォン！！

またサイレンが鳴り放送が入る

“HOL！HOL！外に出ている者は大変危険ですので今すぐ寮に
戻ること”

黒子「ほら、HOLがもうすぐ撃たれますの。今日はここで身を引
きましょつですの」

美琴「そうね・・・仕留められなかったのが残念だったけど」

美琴と黒子をはじめ風紀委員とHOBのメンバーたちは寮の中へと
戻っていった

乙姫「仲村様、何でございますの？HOLとは・・・」

ゆり「フッフ、まあ外を見ればよく分かるわ」

ゆり達7人は近くの窓から外の様子を眺めることにする

すると・・・・・・・・・・・・・・・・

コオオオオオ・・・・・・・・・・・・・・・・ドガアアアンンンンンン！！！！！

空からレーザーが降ってきたのである

くえす「あ・・・・・・・・HOLってこのことですか？」

ゆり「そう、わが女子寮の持つ最終衛星兵器“変態お仕置きレーザー”略して“HOL”よ！！」

その頃の6人・・・

「・・・・・・・・何なんだこりゃああああ！！！！」「」「」「」

べっちゃんHOLをまともに受けてしまったみたいですね

和美「ここまで、悲鳴が聞こえてくるわね」

麻弓「今撃つたところに集中砲火!!」

マジョーリカ「おまかせヨ~~~~、木っ端微塵にしてやるヨ~~~~
!!」

そして彼女たちはHOLのボタンを目にも留まらぬ早さで連打した

それに応えるようにHOLは次々とレーザーを駆たち目がけて撃つてくる

「~~~~ウワアアアア!!!!」

彼らはそれを只々、避けるしかなかった

雄二「畜生!!誰だよ、寮をこんなにするまで変態行為に及んだ奴はよオオオ!!」

「フハハハハ!!甘い、甘すぎる!!」

駆たち6人はどこからか声がしているのが聞こえた

するとそれは落とし穴から聞こえているのが分かった。その落とし穴の中にいたのは……

「フツッ！甘いな、こんな罠で俺の気持ち折れるとでも思っているのか！！」

また2人とは別の落とし穴から声が聞こえた。そこにいたのは・・・

緑葉樹「裏を返せばこれは俺の女の子たちへの愛の強さを試しているということ！！そうだ！そのように考えるんだ樹！！少しでもネガティブなことを考えてみる樹！！メガネの二の舞だ樹！！」

「「「「「ここにバカがいたアアア！！！！」」」」」

樹「その声は我が女神たちよ！！俺を助けに来てくれたんだな！！」

ナツル「ちげーよ、バカ！お前はメガネが取れたら耳まで遠くなくなるのか！！」

樹「女神たちよ！SMプレイをしたいのだな！俺にはわかる！！俺は女神たちのためならSでもMにでもなれる！！」

優人「何なの！このバカな先輩たち！落とし穴に落ちるバカは人を苛立たせるバカばっかってこと！？」

鍵「早く助けてくれ〜そうしないと生まれたての変態が死にたての・・・」

雄「ウッセエ！！てめえは黙ってる！！」

樹「フフ、そうやって焦らして楽しんでるんだろ。いいぞ、いつまでもそれにのってやる！！」

雄「てめえも黙れエエ！！」

このままでは埒が明かないので6人は3人を助けることにしました

いつの間にかHOLのレーザー攻撃も止んでいます

それでもって、各人は何で寮にいる羽目になったか状況説明することにしました

明久「それで最後は皐月さんと瀬能くんだけだ」

最後に説明するのは駆とナツルだったようです

駆・ナツル「俺たちはかくかくしかじか・・・というわけで」

すいません、略しました

太郎「なるほど・・・罰ゲームね・・・」

駆「そう、それでジャスタウェイっていうわけのわからんもの持た

されて」

ナツル「なあ、誰かジャスタウェイって何か知っている奴いないか？」

駆とナツルはジャスタウェイを手に取り皆に見せる

「!!!!それ知ってる!!!!」

雄二「本当か、ムツツリーニ!？」

どうやら康太はジャスタウェイが何か知っているようです

駆「で、何なんだ?このジャスタウェイって!!」

康太「・・・それは爆弾、それにとっても強力」

ナツル「なるほど・・・爆弾だったって訳か・・・」

駆とナツルはジャスタウェイが何か分かり心のもやもやが取れてすっきりした様子

優人「ちよつと待って、それならここから逃げ出すこと出来るんじゃないですか？」

こうして、彼らは無事に女子寮から抜け出して、安息の地男子寮へと戻ることが出来るのでした

めでたしめでた・・・

瑞希「自由ってどういう意味ですか？」

美波「説明してもらおうかしら、アキ・・・」

明久「げつつ・・・姫路さんに美波・・・」

翔子「・・・雄二探したわよ」

雄二「翔子オオ・・・」

乙姫「太郎様〜いつたいどこにいらしたのですか〜」

太郎「乙姫・・・」

緋鞠「若殿、探したぞ」

くえす「なぜ逃げたのか説明してもらいませんか？」

優人「緋鞠に・・・くえす・・・」

どうやら話はハッピーエンドにはならなかったようです。明久たち

こうして女生徒の皆さんは変態たちから自分たちの平和を守りきることに成功しました。

めでたし めでたし

おまけ

駆「なあ、瀬能……」

ナツル「なんだ？」

駆「この話、俺たちが主人公のはずだったよな……」

ナツル「ああ、そうだけど」

駆「ならなんで終わりがこんな終わり方なんだ？」

ナツル「こんなって、女が主役になって俺たちが悪役みたいになつた終わり方ってことか？」

駆「そうだ、俺たちが主人公のはずだぞ。この話は……」

ナツル「可愛い正義ってことだと思う、きっと……」

駆「……どつという意味だそれ」

ナツル「言葉の通りだ。可愛くない俺らは必然的に悪になって正義には勝てない。俺らは逆らっても無駄。ただただ嵐が過ぎ去るのを

待つしかないんだ」

深イイのかどうなのか分からないがこれは主人公キャラが一度は通る道を表した言葉だと思う

そして彼らはその言葉を心の中で噛み締めて・・・

ハア・・・

深いため息をつくのであった

おしまい

資料その1：生徒・教職員名簿& a m p ; O P、E D(前書き)

生徒名簿です

生徒・教職員名簿には出ていますが本編には登場しないことがある
かも知れません。ご了承ください

資料その1：生徒・教職員名簿& a m p ; O P、E D

2年A組 担任 坂田銀時：国語 学級長：霧島翔子 副学級長：
坂上智代

綾崎ハヤテ 三千院ナギ 桂ヒナギク 西沢歩 愛沢咲夜

春風千桜 東宮康太郎 (ハヤテのごとく)

神楽 志村新八 (銀魂)

神楽坂明日菜 近衛木乃香 桜咲刹那 宮崎のどか 綾瀬

夕映 早乙女ハルナ 長谷川千雨 エヴァンジェリン 絡

繰茶々丸 (ネギま！)

黒崎朱湮 佐伯玲士郎 沙原ひかり (アスラクライン)

吉井明久 坂本雄二 土屋康太 木下秀吉 島田美波

姫路瑞希 霧島翔子 木下優子 (バカとテストと召喚獣)

土見稟 芙蓉楓 リシアンサス ネリネ 麻弓IIタイム

緑葉樹 (SHUFFLE)

杉崎鍵 椎名深夏 (生徒会の一存)

瀬能ナツル 美嶋紅音 (けんぷファー)

鶴ヶ谷おつう マジョーリカ・ル・フェイ (オオカミさんと

7人の仲間達)

皐月駆 水奈瀬ゆか 百野栞 田島賢久 (11eyes)

坂上智代 (CLANNAD)

石動美緒 (えむえむっ)

更識楯無 (IS)

生徒数48名

2年B組 担任 ネギ・スプリングフィールド：英語 学級長：

雪広あやか 副学級長：久保利光

霞愛歌 鷺ノ宮伊澄 橘ワタル 瀬川泉 瀬川虎鉄 朝

風理沙 花菱美希 (ハヤテ)

雪広あやか 佐々木まき絵 和泉亜子 那波千鶴 大河内
アキラ 明石裕奈 村上夏美 朝倉和美 相坂さよ (ネ
ギマ)

清水美春 久保利光 工藤愛子 (バカテス)

都築巧 芹沢文乃 梅ノ森千世 霧谷希 菊池家康 幸

谷大吾郎 (迷い猫オーバーラン)

千堂瑛里華 支倉考平 紅瀬桐葉 悠木陽菜 八幡平司 (

FORTUNE ARTERIAL)

関羽愛紗 馬超翠 趙雲星 劉備桃香 (恋姫無双)

兵藤一誠 アイシア・アルジエント 木場祐斗 ゼノヴィア

紫藤イリナ (ハイスクールDxD)

宇佐見美々 地蔵亜美 田貫まこと (オオカミさん)

衛宮士郎 遠坂凜 間桐慎二 (Fate/stay night

ht)

モンキー・D・ルフィ ウソップ (ONE PIECE)

ヴィータ (リリカルなのは)

生徒数48名

2年C組 担任 山口久美子：数学 学級長：北村祐作

副学級長：阿久根高貴

沢田慎 熊井輝夫 内山春彦 野田猛 南陽一 (ごくせ
ん)

龍宮真名 長瀬楓 古菲 椎名桜子 釘宮円 柿崎美砂 (ネギマ)

中野梓 平沢憂 鈴木純 (けいおん！)

桂木桂馬 桂木エルシィ ハクア 中川かのん 小阪ちひろ 高原

歩美 寺田京 五位堂結 (神のみぞ知るセカイ)

高須竜児 逢坂大河 櫛枝実乃梨 北村祐作 川嶋亜美 (とらド
ラ！)

遠山キンジ 神崎・H・アリア 星伽白雪 峰理子 レキ ジャン
ヌ・ダルク 中空知美咲 武藤剛気 不知火亮 (緋弾のアリア)

直江大和 川神一子 椎名京 クリステイアーネ 風間翔
一 島津岳人 師岡卓也 (真剣で私に恋しなさい)
羽瀬川小鷹 三日月夜空 柏崎星奈 (僕は友達が少ない)
阿久根高貴 (めだかボックス)
星川輝羅々サラス (これはゾンビですか)
生徒数48名

1年A組 担任 月詠小萌：政経＋倫理 学級長：諸葛亮朱里
副学級長：吹寄制理

日比野文 シャルナ・アールラムギル (ハヤテのごとく)
大神涼子 赤井林檎 森野亮士 浦島太郎 竜宮乙姫 (オオカミさんと7人の仲間達)
夏目智春 水無神操緒 嵩月奏 アニア・フォルチュナ
樋口琢磨 佐伯玲子 大原杏 真日羽秀 (アスラクライ
ン)
近堂水琴 (けんぷファー)
椎名真冬 (生徒会の一存)
塔城小猫 ギヤスパイ・ヴラディ (ハイスクールD)
野井原緋鞠 天河優人 九崎凜子 神宮寺くえす (おまも
りひまり)
広原雪子 (11eyes)
砂戸太郎 結野嵐子 間宮由美 葉山辰吉 (えむえむっ)
固法美偉 (とある科学の超電磁砲)
上条当麻 土御門元春 姫神秋沙 青髪ピアス 吹寄制理 (と
ある魔術の禁書目録)
東儀白 (FORTUNE ARTERIAL)
諸葛亮朱里 張飛鈴々 (恋姫無双)
ティアナ・ランスタール スバル・ナカジマ (リリカルなのは)
黒神めだか 人吉善吉 喜界島もがな (めだかボックス)
楠幸村 志熊理科 (はがない)

生徒数44名

1年B組 担任 織斑千冬：数学 学級長：セシリア・オルコツト
ト 副学級長：平松妙子

織斑一夏 篠ノ之箒 セリシア・オルコツト 鳳鈴音 シャルロット・デュノア ラウラ・ボーデヴィツヒ布仏本音 更識簪 (ISインフィニット・ストラトス)

夜知春亮 フィア・キューブリック 村正このは 上野錐霞
桜参白穂 (C3・シーキューブ)

相川歩 吉田友紀 織戸 平松妙子 (これはゾンビですか)
ユイ (Angel Beats)

黛由紀江 (真剣で)
間桐桜 (fate)
生徒数20+ 1145名前後

3年A組 担任 桂雪路：世界史 学級長：桜野くりむ

副学級長：藤林杏

冴木氷室 (ハヤテ)

沖田総悟 志村妙 山崎退 柳生九兵衛 (銀魂)

三郷雫 (けんぷファー)

桜野くりむ 紅葉知弦 (生徒会の一存)

橋高冬琉 ?塔貴也 倉澤六夏 (アスラクライン)

桐木リスト 桐木アリス 吉備津桃子 (オオカミさん)

草壁美鈴 橘菊理 (11eyes)

音無結弦 仲村ゆり 立華かなで 日向秀樹 直井文人

野田 椎名 岩沢 (Angel Beats)

岡崎朋也 古河渚 春原陽平 一ノ瀬ことみ 藤林杏

藤林棕 (CLANNAD)

千堂伊織 悠木かなで 東儀征一郎 (FORTUNE AR
TERIAL)

時雨亜紗 カレハ (SHUFFLE)
高町なのは フェイト・テストロツサ 八神はやて ギンガ・
ナカジマ (リリカルなのは)
ナミ ロロノア・ゾロ サンジ (ONE PIECE)
リアス・グレモリー 姫島朱乃 (ハイスクールD)
生徒数44名

3年B組 担任 山中さわ子：音楽

葵・トリー ホライゾン・アリアダスト 葵・喜美 浅間・
智 本多・正純 シロジロ・ベルトーニ ハイディ・オーゲ
ザヴァラー トウーサン・ネシンバラ 点蔵・クロスユナイト
キヨナリ・ウルキアガ マルゴット・ナイト マルガ・ナ
ルゼ 直政 ネイト・ミトツダイラ (境界線上のホライゾン)
平沢唯 秋山澪 田井中律 琴吹紬 真鍋和 (けいおん!)
川神百代 (真剣で)
生徒数19 + 1145名前後

中等部

御坂美琴 白井黒子 初春飾利 佐天涙子 羽瀬川小鳩

初等部

犬上小太郎 高町ヴィヴィオ エリオ・モンディアル キャ
ロ・ル・ルシエ イリヤスフォール

そのほかの教師(一部)

高畑・T・タカミチ フェイト・アーウェルンクス 源しずな
西村宗一 高山マリア 黄忠紫苑 真儀瑠紗鳥 黄泉川愛穂
鉄装綴里 薰京ノ介 牧村志織 藤村大河 葛木宗一
郎 二階堂由梨 兎玉一郎 山田真耶 オリオトライ・真
喜子 シグナム ニコ・ロビン フランキー ブルック

ハンコック　イワンコフ　ミホーク　ジンベエ　アザゼル　ロ
スヴァイセ　e t c .

保健医

シヤマル　鬼瓦みちる

中学・高校第一校舎校長

近衛近右衛門

教頭

猿渡五郎

学園理事

天王州アテネ

三千院帝

荒神洋燈

お登勢

シルバ

ーズ・レイリー

アレイスター「クロウリー

桃源郷研究室

藤堂カヲル

木山春生

学園理事長

天神すすき

登場した、登場を検討しているキャラ

ハヤテのごとく：マリア　リイン・レジオスター

ネギま：ジャック・ラカン　アルビレオ・イマ　近衛詠春　カモ

銀魂：土方十四郎　近藤勲　松平片栗虎　桂小太郎　エリザベス

猿飛あやめ　神威　高杉晋助

F a t e：セイバー　アーチャー　ランサー　ライダー　キャスタ

ー　アサシン　バーサーカー

ONE PIECE：ガープ　センゴク　黄猿　赤犬　青雉　黒ひげ

とある：インデックス 一方通行 ステイル 神裂火織 打ち止
め

これはゾンビ：ハルナ ユークリウッド セラフィム
シーキューブ：人形原黒絵 サヴェレンティ
IS：篠ノ之束

ジャッジメント

風紀委員一番隊（隊長：沖田総悟 副隊長：仲村ゆり）

綾崎ハヤテ 桂ヒナギク 神楽坂明日菜 桜咲刹那 黒崎

朱湊 佐伯玲士郎 坂上智代 犬上小太郎 御坂美琴

白井黒子 固法美偉 吉備津桃子 沖田総悟 山崎退

倉澤六夏 草壁美鈴 高町なのは フェイト・テストアロツサ

ティアナ・ランスター スバル・ナカジマ 仲村ゆり 遠

山キンジ 神崎・H・アリア 篠ノ之篤 シャルロット・デ

ユノア ラウラ・ボーデヴィツヒ

生徒会役員

第一生徒会（一般的な生徒会の仕事を行う）

会長：橋高冬琉 副会長（3年）：千堂伊織 副会長（2

年）：千堂瑛里華

第二生徒会（魔法・魔術関連の案件について取り扱う）

会長：八神はやて 副会長（3年）：リアス・グレモリー 副

会長（2年）：近衛木乃香

第三生徒会（会計など金銭の仕事を中心に行う）

会長：倉澤六夏 副会長（3年）：冴木氷室 副会長（2

年）：沙原ひかり

総合生徒会（上記三種の生徒会の上に立つ）

会長：立華かなで 副会長：桂ヒナギク 副会長（1

年）：黒神めだか

寮長

男子寮：音無結弦

女子寮：悠木かなで

部屋割り

1年 女

0401：りんご、涼子 ラウラ、シャルロット ティアナ、スバル
0402：文、シャルナ 本音、簪 真冬、白
0403：めだか、もがな セシリア、鈴音 水琴、雪子
0404：朱里、鈴々 秋沙、制理 箒、緋鞠
0405：くえす、凜子 嵐子、由美 玲子、大原杏
0406：幸村、理科 乙姫、ユイ 友紀、妙子

2年 女

0301：ヒナギク、美希 瑛里華、陽菜 楯無、紅音
0302：ナギ、マリア ハルナ、千雨 翔子、優子
0303：刹那、真名 アリア、レキ 朱理、ひかり
0304：長瀬楓、古菲 ヴィータ、美緒 翠、星
0305：明日菜、木乃香 愛紗、桃香 シア、ネリネ
0306：まき絵、亜子 歩美、ちひろ 梓、純
0307：瑞希、美波 夏美、千鶴 ゆか、栞
0308：深夏、智代 美春、愛子 裕奈、アキラ
0309：白雪、理子 泉、理沙 美砂、桜子
0310：ゼノヴィア、アーシア 歩、円 川嶋亜美、実乃梨
0311：おつう、マジョーリカ 芙蓉楓、麻弓 あやか、和美
0312：愛歌、千桜 ジャンヌ、美咲 夜空、星奈
0313：咲夜、伊澄 のどか、夕映 京、結
0314：千世、叶絵 美々、地蔵亜美 輝羅々、イリナ

3年 女

0501：なのは、フェイト 悠木かなで、雫 くりむ、知弦

0502：はやて、ギンガ 亜紗、カレハ ゆり、椎名
0503：美鈴、菊理 藤林杏、諒 六夏、ナミ
0504：アリス、桃子 立華かなで、ことみ リアス、朱乃

1年男

0401：一夏、優人 琢磨、秀 浦島太郎、ギヤスパ
0402：砂戸太郎、辰吉 元春、青髪 織戸、善吉

2年男

0301：明久、雄二 ハヤテ、東宮 ルフィ、ウソップ
0302：孝平、司 駆、賢久 剛気、不知火亮
0303：利光、康太 キンジ、小鷹 玲士郎、虎鉄
0304：家康、大吾郎 ナツル、鍵 稟、樹
0305*：高貴、元士郎 祐作
0306：一誠、祐斗
0307(1DK)：秀吉、まこと

3年男

0501：総悟、退 サンジ、ゾロ 日向、野田
0502：結弦、直井 伊織、征一郎 陽一、リスト

*：他作品が登場した場合、追加の可能性あり

OP曲

指定が無い話 (一〜九、二十六)

1、『Can do! Can go!』V6
2、『無責任ヒーロー』関ジャニ
3、『over』V6 ドラマPU・PU・PU・主題歌
吸血鬼編 (十〜十三)

『Arrival of Tears』彩音 11eyesオ

プニングテーマ

ポケモン編 (十四〜十八)

『REAL LOVE: REAL LIFE』sphere いちばんう

しろの大魔王オープニングテーマ

試召戦争編 (十九〜二十五)

『Perfect-area complete!』麻生夏子

バカとテストと召喚獣オープニングテーマ

ED曲

指定が無い話 (一〜十八)

1、『負けない心』AAA ドラマ崖つぶちのエリー主題歌

2、『LIFE〜目の前の向こうへ〜』関ジャニ ドラマGM

〜踊れドクター主題歌

3、『黄金魂』湘南乃風 ドラマ交渉人〜THE NEGOTI

ATOR〜主題歌

試召戦争編 (十九〜二十五)

『HONEY BEAT』V6

オープニング曲やエンディング曲は選択肢がある場合は読者の皆様
が好きなものをお選びください。

知らない曲がある場合は、youtubeや歌詞検索サービスなど
でお調べください。

第四話：御伽銀行と第二ボランティア部、そしてヘタレ

学園の高等部第一校舎の近くにあるボロボロのプレハブ小屋。

この建物は絶対の信頼と恐怖でもってこの学園に君臨する何でも屋さん、正義の味方、学園の守り手、社会不適合者の吹き溜まり、学園学生相互扶助協会、通称御伽銀行の部室であるのです

なぜ、御伽銀行と呼ばれているのかといいますとここに所属している人たちの名前が皆さんの知っている御伽噺や昔話の登場人物に似ているからだとか

そんな御伽銀行に一人の男の子が入ってきました

しかし、プレハブには誰もいません。そこで彼は“誰も居なかったらこれを押してください”と書かれたボタンを押しました。

ビーーーーッ！！

3秒ほどの短いブザーがなった後、1分ほどして女の子が2人、男の子が1人どこからか現れました

りんご「いらっしやいませですの、お飲み物は何にしますの？紅茶やコーヒー、日本茶などがありますの」

「なら、日本茶を頼む」

りんご「分かりましたの。亮士君、日本茶と紅茶お願いしますの。涼子ちゃんは何にしますの？」

涼子「なら、オレはコーヒー」

亮士「はいっス、分かりましたっス」

亮士が机の上に飲み物を置くとりんごが口を開いた

りんご「私は赤井林檎と申しますの。隣に座っている可愛い女の子が大神涼子ちゃん。その隣でオドオドしているのが森野亮士君ですの。ちなみに亮士君は涼子ちゃんのが好きなんですのよ」

涼子「なッ！！てめえ、それは今関係ねえだろ！！」

そんな涼子のツツコミを無視してりんごは話を続ける

「ところで、あなたのお名前を聞くのがまだでしたの。教えてくれないませんか？」

「あつああ、僕の名前は東宮康太郎だ。2年A組の」

東宮康太郎、ハヤテのごとくのサブキャラで最近は全く原作では出番がない。

涼子「2年A組ってことはおつう先輩や魔女先輩と同じクラスだよな？」

りんご「そうですね」

亮士「ところで、依頼というのはなんなんっスか？」

東宮「ああ、依頼というのは・・・」

りんご「つとその前に、東宮さんはこの仕組みはご存知ですか？
知らないと言ってお受けできないですが・・・」

東宮「なんとなくは・・・確か、僕が力を貸してもらった変わりに何時か僕がここに貸しを返す・・・でいいんだよね？」

りんご「そうですね、私たちが貸した“貸し”をいつか私たちが必要になった時に返してもらいます。ただしそれは依頼に見合った程度で協力を求めますの。あと何か耳寄りな情報でも提供してください。さすればそれで相殺できますから覚えておいてくださいの」

東宮「ああ、分かった」

涼子「ところで、東宮の依頼ってというのは何なんだ？」

東宮「ああ、僕を強くして欲しいんです」

亮士「強くっすか・・・」

しばらく三人は東宮の姿を眺める。

そして亮士は東宮と目があうと「見ないで、見ないで〜」とへたれ状態になった

涼子「こいつのことは気にしないでいいから。いつもああだから」

りんご「でも強くというのとはどれくらいのものでしょうか？さすがにス

「パーサイア人を倒せるようになるまで強くなりたいというのは無理ですの」

東宮「そんなに強くしてもらわなくてもいいから、僕はある人に認めてもらいたいんです」

りんご「なんかとてもいい話にも面白い話にもなりそうです。ここは彼の話をよく聞く必要がありますの」

3人は身体を少々乗り出して東宮に注目する

そして彼は口を開き話し始めた

東宮「僕には好きな人がいるんです」

涼子「その好きな人が認めてもらいたい人か」

東宮「あつ・・・ああ・・・僕とその人は同じ剣道部なんだがいつも僕は負けてばっか良いところなんて全く見せてられないんだ。だから強くなってもう一度彼女と戦ってそして勝って彼女に僕は強くて一人前な男だって認めてもらいたいんだ」

りんご「分かりましたの、では今回の依頼は“剣道で強くなる”とということですよしいですね？」

東宮「いや、戦うのは剣道じゃない。決闘制度デュエルを利用して戦う」

決闘制度、それは遊戯王デュエルモンスターズで闘う・・・のではなく、毎週金曜日の放課後学園の総合体育館に設けられた舞台上で戦

うというものである。魔法や超能力なども使用可能で己の持つ全ての戦闘能力を用いて正々堂々と闘う。

ルールとしては15分間の制限時間内の「カウント10秒」「ギブアップ」「気絶」、タイムアップ後の学校ケータイサイトの試合視聴者からの投稿判定により勝ち負けは決まる

なお、決闘制度の試合状況は風紀委員選考大会と同じで学園内のインターネットテレビで生中継される。

もちろん決闘制度を利用するためには対戦相手との同意と5日前までに生徒会に決闘許可願を提出する必要がある。

涼子「・・・なるほどな、剣道じゃ勝てないから何でもありの決闘制度を利用するってことか」

東宮「そういうことだ、こっちだったらルールは剣道よりも圧倒的に少ないし勝ち負けが制限時間内で終われば勝ち負けがハッキリするからな。それに奇跡が起こるかもしれないし」

りんご「ところで、決闘制度はいつのものを利用するんですの?」

東宮「来週の金曜日のもものを利用するからそれまでに頼むな」

亮士「ということは今日が火曜日っすから10日後っすね」

涼子「あと、対戦相手は誰だ?対戦相手が分からないと対策がたてられないからな」

東宮「対戦相手は僕と同じクラスの桂ヒナギクさんだ」

りんご「分かりましたの、では明日から依頼はスタートさせて頂き

ますの。今日は強くなるための計画をたてますから」

東宮「ああ・・・なら今日は帰るから。10日間よろしく頼むな」

東宮はソファから立ち上がると外へ出ようとした

すると、

「ちょっと待ちなさい!!」

御伽銀行の入り口の前に女の子が一人立っていたのである
その女の子は背は小さめ、金髪のロングヘアである

「私は2年A組の石動美緒よ!そして第二ボランティア部の代表!」

涼子「その代表さんが何のようだ?っていうか、第二ボランティア部って・・・」

美緒「私はあなた達に大事な話があるの。だからまずはこの代表を呼んでもらえない?」

東宮「僕は帰らせてもらうぞ〜。関係ないみたいだし」

しかし、美緒は帰ろうとする彼の腕をつかみ

東宮「痛ッ!!石動、何すんだよ!!」

美緒「あんたも関係あることだからここにいなさい」

涼子「う〜ん、何かややこしい事になりそうだな・・・」

りんご「まあこういうことは頭取たちに押し付けますの。頭取は役立たずですからこういうときに働いてもらわないと」

というわけで御伽銀行の3人は地下にいる御伽銀行の頭取と副頭取である桐木リストと桐木アリスを呼んだ

リスト「お待たせして悪かったね〜？僕がここの代表桐木リストだよ？」

アリス「副代表の桐木アリスです」

美緒「第二ボランティア部代表、石動美緒よ。よろしく」

3人は握手を交わす

リスト「じゃあ立ち話もなんだからソファに座ろうか？あと飲み物飲む？コーヒーや紅茶、日本茶ならあるけど？」

ここで注意です。リストの語尾にはハテナマークが付いているがこれは責任逃れをいつでも出来るようにするためである。

美緒「なら、紅茶で」

リスト「分かった。アリス君は何にする？」

アリス「私も紅茶で」

リスト「うん、赤井君？お茶汲みお願い？あと僕はコーヒーで？」

りんご「わかりましたの」

しばらくして、りんごは紅茶をテーブルの上に置いた

リスト「・・・赤井君？僕のがないみたいなんだけど？」

りんご「仕事を滅多にしない人あげるコーヒーなんてありませんの」

リスト「・・・ひどくない？ねえアリス君、ひどいと思わない？」

アリス「順当な評価かと思われませんが」

リスト「ハハハ・・・そう・・・？とここで話を元に戻すと石動君は御伽銀行に何の用かな？」

美緒「なんもこうもないわ！あんたたちの御伽銀行と私の第二ボランティア部、設定が被りすぎなのよ！！」

ここで2つの組織について説明をしておこう。

御伽銀行はさつきもりんごのセリフで説明したが簡単に言えば“貸し”を返済することが必要な何でも屋さん。

第二ボランティア部は自称神様である石動美緒が人間のちっぽけな願いをかなえるというこちららも簡単に言ってしまうは何でも屋さんである。

どっちも胡散臭さという部分も被っているが・・・

美緒「なんか言った!?!」

リスト「なんか言ったかな?」

いいえなんでもありません・・・

美緒「それで、私は思ったのよ。一つの学校に同じような部活は二つもいらぬのよ!?!」

亮士「いや、ありますっすけどね同じような部活。硬式野球部と軟式野球部とか」

涼子「サッカー部とフットサル部とかな・・・」

美緒「うるさいわね、それとこれとは話が別よ!?!」

美緒は涼子と亮士を睨みつける。そして亮士はまた「見ないで、見ないで〜」とヘタレモードとなる

美緒「それでどっちが良い仕事をしてこの学園に相応しいかを決めるのよ!」

リスト「ところで、どうやって良い仕事をしているって判定するのかな?誰か第三者が居ないと判定できないと思うけど?」

美緒「それでそのヘタレの出番よ」

美緒は部屋の隅に立っていたもう一人のヘタレ、東宮を指差した

アリス「なるほど、依頼してきた彼に御伽銀行と第二ボランティア部が依頼を遂行してどちらが役立ったか彼に判定してもらおうわけですか」

美緒「そういうことよ」

リストは東宮を見ると

「東宮君だっけ？君は問題ないかな？」

東宮「え・・・はい、別に問題はないですけど・・・」

リスト「うん、ならその勝負受けて立つことにしようか？」

美緒「交渉成立ね」

リスト「ところで東宮君の依頼だけど・・・？」

りんご「“来週の金曜日に行われる決闘制度で剣道部の桂ヒナギクさんに勝つようにしてくれ”というのが依頼内容ですの」

リストは少し考えた後・・・

「ならこういふのはどうか？来週の金曜日まで10日間ある？決闘当日を除いて9日間だ？だから僕たち御伽銀行と第二ボランティア部が日曜を除いた一日毎で各部活計4日間ずつ彼を強くする？そしてその決闘後、どちらが役に立ったか彼に選んでもらうわけだ？」

美緒「・・・なんかあんた達のペースで話が進んでいるみたいだけ

どまあいいわ。その条件にのってあげる」

リスト「では明日は僕たちからでいいかな？」

美緒「いいわよ、10日後にギャフンって言わせてあげるわ！土下座をする練習でもしていることね！あと紅茶はご馳走になったわ」

彼女はそういうと外に出て行った

東宮「・・・僕も帰っていいですか？」

リスト「ああ、構わないよ？長居させて悪かったね？」

東宮も帰っていった

リスト「じゃあ、計画でもたてようか？」

リストたち御伽銀行メンバー5人は地下本店に向かった

それでもって地下本店、こっちは地上部分とは違い豪華絢爛な空間である

そこには5人のほかにその他のメンバー、鶴ヶ谷おつづ、マジョーリカ・ル・フェイ、浦島太郎、竜宮乙姫が揃っていた。

リスト「まず、依頼主の東宮君だけど？」

リストはパソコンを動かして東宮のデータを引き出す。残りのメンバ

彼らはそのデータを見てみることにした

涼子「逮捕理由は風紀委員メンバーに対する度重なる暴力行為か・
」

おつづ「そのような危険な方がなぜ釈放されたのでしょうか？」

りんご「釈放理由は・・・弱過ぎて危険性なしと判断とありますの」

涼子「弱過ぎって・・・」

亮士「どうやら、暴力行為の証拠VTRもあるみたいっすね」

リスト「ならそれを見てみようか？」

リストはVTRを再生した

そこに映し出されていたのは風紀委員メンバーであるティアナ・ラ
ンスター、スバル・ナカジマ、服部絢子、御坂美琴、白井黒子、犬
上小太郎を背中から襲う東宮の姿だった。

しかし彼は一撃も与えられずに一撃でノックアウトされたり、捕縛
されてしまっていた。

襲う相手の年齢を少しずつ下げている部分もヘタレを象徴している

乙姫「太郎様……」

太郎「ウツ……乙姫……」

乙姫はニコツと微笑み太郎の腕をつかむと隅の部屋へとつれていった

亮士「でもそうになると難しいんじゃないんすか？風紀委員ってことは戦闘能力を学園から認められているってことっすよね？」

リスト「そうだね〜？とても難しい依頼を受けてしまったみたいだね〜？どうしようか？？」

今日はこちらでおしまい。

果たして東宮はヒナギクに勝つことが出来るのか、それと御伽銀行と第二ボランティア部の勝負の結末は？

次回に続きます

第五話・ねずみ講じゃないから恥ずかしくないもん！(前書き)

こんなに長くなるとは思いませんでした

今回は下ネタが多めです。すみません。

今回参照にしたもの：えむえむっ！3巻第一章

アニメ銀魂「恋にマニュアルなんていらない(前編)」

第五話：ねずみ講じゃないから恥ずかしくないもん！

水曜日、修行一日目

東宮はいつも通り学校に登校してきた。
すると彼に近づく一人の女性の姿が・・・

「東宮様・・・」

東宮「あつ、鶴ヶ谷さん。何か用??」

おつう「ええ、依頼のことで話があり参りました」

東宮「その話って?」

おつう「私たち御伽銀行の判断としましては決闘に勝利するためには、体力づくりの他にも東宮様のヘタレな性格を変えることが必要と判断しまして・・・」

「それで・・・?」

「これから先、精神的に辛くなることがあるかと思われませんが、頑張ってくださいね」

「うん、分かった。ありがとう」

おつうは話を告げ終わると自分の机へと戻っていった

(でも、精神的に辛い出来事ってなんなんだろう・・・???)

そんなことを東宮が考えていると、すぐに答えが分かった

ピンポンパンポーン

教室のスピーカーから放送が聞こえた。声の主は銀時であった

銀時『生徒の呼び出しをする。ヘタレで剣道部最弱で真性包 な2年A組東宮！真性包 な2年A組東宮康太郎！！職員室まで！！』

東宮（！！！！なんだよこれ！！！！）

東宮は立つとすぐさまおつうを問い詰めた

「鶴ヶ谷さん！！これってどういうことですか！！」

おつう「これは東宮様を何を言われようとへこたれない強い精神力の持ち主にするために先生方に協力してもらっているんです。東宮様を呼ぶ際は最初に“ヘタレ”、二番目に“剣道部最弱”という言葉を付けて三番目に何でもいので東宮様を侮辱する言葉を付け加えて呼んでくださいと、それに2年A組で用事がある際は東宮様を中心に呼びつけくださいと・・・」

東宮「だからって真性 茎はねえだろオオオオ！！！！」

東宮は教室の中心で叫んだ

雄二「お前、真性　なのか？」

東宮「んなわけあるかアアアア！！！」

彼は急いで銀時の元に向かっていった

職員室

東宮「銀さん！！！」

銀時「おお、来たか。このプリント、今日の国語の授業で使うから教室に持って行ってくれ」

東宮「ハイハイ分かりました~~~~、って違うわアア！！！」

ノリツツコミをする東宮。芸が広いですね~~~~

東宮「何で僕が真性　茎なんですか！！もっとマシな侮辱の言葉は無かったんですか！！！」

銀時「だってなあ~~~~、そんな侮辱の言葉ってすぐに思いつかねえし、それにお前ってそういう顔してるし」

「そういう顔ってどういう顔だアアア！！！！！」

そしてその後も呼び出しは続き……

カス、ゴミ、バカ、マヌケ、将来の夢が女子校の便器、女の子に踏まれて快感を覚えるDM、スト マニア等々がヘタレと剣道部最弱の次に付け加えられた

言っておくがそんな事実は東宮には無い。というより最後の3つや真性 なんて性質のキャラが少年誌に居たらその少年誌は出版禁止になるでしょう

そして授業中も・・・

銀時「はい次の13行目から・・・ヘタレで剣道部最弱で真性包な東宮、読め」

東宮「だから・・・真性 じゃありませんって・・・そんなこと言うのやめてくれませんか？」

銀時「いいじゃねえかアレって日本人の1〜2%らしいよ。ステータスじゃん、希少価値じゃん。そんな言葉あつたよね〜」真性はステータスだ！希少価値だ！」って

麻弓「先生、それ“貧乳”の間違いです。っていうかこの言葉私が言い始めたんですから変な風に使わないでください」

銀時「そうか・・・でもどっちも大してかわんねえよ。どっちも役立たずだし」

美波「先生、それって私たちに喧嘩を売ってるんですか？」

銀時は周りを見渡してみる。すると美波を始めナギ、ヒナギク、夕映、美緒、麻弓が睨みつけていた。

銀時「ならさ〜、お前ら手伝ってあげたらいいじゃん。手術代を出してあげるとかさ。同じ悩みを持つ仲間として」

ヒナギク「何でそんな話になるんですか！アレと私たちの繊細な悩みを一緒にしないでください」

東宮「だから・・・ じゃねって・・・」

これ以上話を進めてもきりがないのでここでやめておきます

そして放課後。今日は御伽銀行

御伽銀行の東宮を強くするための方法の一つ目は体力と持久力強化のトレーニングであった。

やはり、体力作りを最重要課題においたのであろう

2時間後トレーニングは終わり東宮は疲れ果てていた

東宮「ハア・・・ハア・・・今日はこれでお終いか？」

リスト「何言ってるの〜？今日のメインはこれからだよ〜？」

限時間＋5分の20分で、月曜日からは20分で大神君に浦島君と森野君が加わってこのナックル攻撃するから覚悟しておいてね？」

東宮「な・・・なにイイ・・・？」

そして次の日

御伽銀行の東宮のイメージダウンキャンペーンはこの日も続いていた

東宮「な・・・なんだよこれ・・・」

彼が見たもの、それは・・・

“東宮はエンコーで女を買っている！！”

一口50万！！言う事を聞かない女は脅したり、無理矢理ホテルや人気の無い所に連れ込んでレイ に近いことを！！”

等々、根も葉もない言葉が黒板に書かれていたのである。その隣には写真が彼の貼ってあり誰だかすぐに分かるようになってある

鍵「すごいな・・・こんなこと書かれるなんて・・・」

ハヤテ「東宮さん、聞きますけどここに書いてあるようなことはしてませんよね？」

東宮「当たり前だろ！！誰がこんな犯罪行為！！なあ、信じてくれるよな！？」

雄二「ああ、俺らは信じるさ。だがあいつらは・・・」

雄二の目の向けるほうを東宮が見るとそこには東宮のほうを見て「ソヒソと話をしている女子たちの姿があった

東宮「ねえ、こんなこと信じてるの？ねえ、嘘だから・・・」

彼は彼女たちを説得しようとした。しかし・・・

深夏「近づかないでくれる？」

咲夜「そうやって、ウチ達も襲う気なん？」

東宮「だからこれは誤解なんだって!!」

彼は彼女たちに近づいた

楓「その汚れた身体で近づかないでください!!」

夕映「お金でしか恋愛が出来ないなんて最低な人です」

東宮「そんな・・・」

東宮は今起きていることが信じられなくなりその場に倒れかけてしまった

明久「東宮くん？大丈夫!？」

稟「心配すんな、これは噂なんだろ？信じる奴だけ信じさせればいい」

康太「……女は噂が大好き？だから仕方の無いこと」

男たちは口々に東宮を慰めはじめる

ハヤテ「あの……アレの事を言ったほうがいいのでしょうか？」

東宮「何だ綾崎？」

ナツル「止めとけ、綾崎。アレの事を言ったらもつとこいつは傷つく」

東宮「何か気になるか言ってくれ？そこまで言われたら何があるのか気になって仕方が無くなるから……」

ハヤテ「実は……この噂話、この学校の全てのクラスに書かれています」

東宮「!!!!」

彼はすぐさま飛び出して隣やその隣の教室や1年生、3年生の教室を見たところ確かに2年A組に書かれていたことと同じことが書かれてあったのだ

黒板の文字が消しているところでも消した所には書かれた跡がうっすらだが確認できる

そして、様子を見に行った教室でも女子生徒を中心に暴言を吐かれたとか

そんな東宮の心が酷く傷ついたその日の放課後

東宮は第二ボランティア部の部室にいた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼の目の先には、一人の少女がいた。第二ボランティア部の部長、石動美緒である。

「石動・・・お前・・・」

「何？私の前で切腹して死にたいわけ？」

「そうじゃなくて・・・」

「なら、舌を噛み切りたいの？」

「違う・・・」

「あんたが首吊っているところを見てもらいたいわけ？」

「いや・・・」

「なら首の動脈と静脈を・・・」

「ちげーよ！！何で僕を自殺志願者にしたんだよ！！」

「だってあんたがしょっぱい顔をしていたから自分のヘタレ具合に嫌気がさして自殺する気になったのかなって・・・どうやら女を金

で買う最悪野郎みたいだし」

「女を金で買ったことなんて一度も無いよ、僕は石動が何でそんな変な格好をしているのか気になっただけ」

美緒は今、本物の魔法使いでさえ着ないようなローブを羽織って尖がり帽子をかぶったこれぞ魔法使いといったような格好をしていた

「変な格好だと・・・？」

次の瞬間、彼女は東宮の首をつかんだ

「あんたのために着てやってるっていうのに何だその暴言はアア！」

「石動・・・人間の首はお前の思っているほど頑丈には出来ていない・・・そんなにしたら折れちまう・・・」

「折れても不可抗力！」

「どこが不可抗力だ!!！」

「むしろ折れたら世界平和」

「どついう意味だアア!!！」

しばらくして、彼はやっと首を離してもらえた

東宮は息を整えてから

「ところで、僕のためにそんな格好をしたってどういうことだ？」

「どういうことってあなたのそのキモくてグロいそのヘタレの性格を何とかしなくちゃ勝てないと思ったからその性格を変えさせるためにこの格好をしているのよ！」

「キモくて・・・グロい・・・」

「私は考えたわ、あなたはヘタレすぎる。その理由が何かを。そして一つの答えを導いたわ」

「その答えって・・・」

「あなたのヘタレは悪霊の仕業なのよ！！」

「・・・・・・」

彼は何も言うことができなかった

「あなたの祖先の親戚、東宮^{へたれい}経太令は極度のヘタレで自分の身内以外とは全く関わることが出来なかった。そしてそんなだから結婚どころか女と話すことも無くしんでいった。だから自分の親戚もヘタレにしてモテなくしてしまえという彼の呪いがあなたに降りかかっているという訳よ」

「なんなんだ、そのアホみたいなエピソードは・・・」

「だからまず今日はその経太令を取り除かねばならないの。本格的な修行は今度の土曜日からよ！」

東宮「なあ、石動っていつもこうなのか？」

東宮は隣で一緒に話を聞いていた砂土太郎に聞いた

太郎「……まあいつもこんな感じですね。無茶苦茶というかなんというか……」

美緒「ブタロウ（砂土太郎のこと）、聞こえているわよ。あんたとで下水で腸内洗浄してあげようか？」

太郎「先輩、それ洗浄じゃなくて環境破壊です。僕の身体の」

美緒「まあ、ブタロウは放って置くとして徐霊はじめるわよ」

そういうと彼女は部屋の床に布を広げた。なにやら幾何学的な模様がかかかれてある

太郎「先輩、これって……」

美緒「魔法陣よ。東宮、まずあなたはこの魔法陣の上で上半身裸になってブリッジしなさい」

東宮「ブリッジだと!？」

美緒「そうよ、早くしないとあんたも下水で腸内洗浄するわよ」

結局、東宮は美緒に逆らうことも出来ずに魔法陣の上で上半身裸になりブリッジをした

太郎「先輩、聞きたいことがあるのですが……」

美緒「何よ？」

太郎「先輩って靈感だとかあったり魔法使えたりするんですか？」

美緒「魔法なんて使えないし、幽霊も皆に見えている相坂さんやあなたのクラスの水無神さんぐらいしか見たことないし金縛りにあったこともないけど大丈夫よ」

太郎「いや、それ靈感ありませんって!!」

美緒「大丈夫よ、私は神様なんだから」

そついうと、彼女は東宮の額にお札のようなものを瞬間接着剤で貼り付け、身体の上にお灸を置いた

東宮は熱さを必死にこらえながらブリッジを続けている

美緒「準備完了ね。徐霊を始めるわよ」

美緒はすーはー、すーはーと深呼吸を何度か繰り返し、まるで見えないボールを包むかのように腰だめに構えると・・・

「あ~~~~く~~~~りよ~~~~う~~~~たいさ~~~~ん!!!」

ハアアアアア~~~~~!!!!!!」

勢いよく両手を東宮のほうへと向けた。傍からみれば「えっ、これなんてカメハ 波？」といったような動きであった

部屋に奇妙な沈黙が流れる

美緒「徐霊の第一段階終了よ、続いて第二段階!!」

太郎「ええっつ!! やっぱりこれが徐霊作業だったんですか!？」

美緒「そうよ、そして第二段階はこれを使っわ」

そういつと彼女はバッグの中から木の長い棒を取り出した

東宮「それは一体・・・？」

美緒「これは、徐霊棒よ! オカルト研究会から1万円で購入したの。この棒で霊の取り付いている人を叩くと霊が跡形もなく消えるらしいわ」

太郎「一万円って!! それ詐欺ですって!! 明らかに壺や聖なる水と同じ類ですよ!!」

美緒「ブタロウもあとで買いなさい。新たな人が買うとその人に紹介した人が100%の10000円もらえるらしいし」

太郎「それ完全にねずみ講ですって!!」

美緒「大丈夫よ・・・一万円もしたんだから・・・徐霊できるわよ・・・」

かのじよはそうブツブツ言いながら東宮の元へと向かい・・・

東宮「おい、お前それで本気で叩くのか!？」

美緒「死ねエエ!!ゴミ悪霊がアア!!」

「ギヤアツアアアアアア!!」

「悪霊退散!悪霊退散!!悪霊退散ツツ!!」

「ゲフツ!!ゴフツツ!!アツチョンブリケエエエー!!」

「死ねエ、経太令!!つていうか、東宮ごと死ねエエエ!!」

美緒は容赦なく攻撃を東宮に浴びせ続けた。

そして10分後・・・

東宮「ああ・・・もういつそ殺してええ・・・」

彼は不気味に痙攣しながら床に横たわっていた

「グヘエエエ!!」

突然東宮の腹部に衝撃が襲った

「遅くなりました〜。何この感触は・・・キヤアアア!!」

東宮の腹部に足を乗せているのは結野嵐子。嵐子も第二ボランティ
ア部の一員である。

ちなみに彼女は極度の男性恐怖症・・・ですから・・・

美緒「ちよつとやばくない？」

太郎「ええ・・・」

彼女に額にはビッシリと汗が流れ、全身が小刻みに震えその震えは次第に強くなつていき・・・

嵐子「イヤアアアアアアアアア！！！！」

彼女は甲高い悲鳴を出す。そして近くにあつた椅子と机を足場にして高く舞い上がり

「怖いよ怖いよ怖いよ！！！！！！」

「ゲツフウウウウウウ！！！！」

体重と重力を利用した必殺の両膝を東宮の腹部へとめりこませた。そしてマウントポジションをとると・・・

「男の子ふんじやった！男の子ふんじやった！男の子ふんじやったよー！！！！！！」

東宮「そんな・・・うん・・・ふんじやった・・・みたいに・・・言わないでくれ・・・」

彼女は顔に鉄拳を放ち続けた

嵐子に殴られ続けている東宮を美緒はゴミを見るような目で見つめ・・・

美緒「なによこれ、徐霊棒で殴った意味ないじゃない。攻撃を避けることもできないなんてヘタレが完治していないわ」

太郎「先輩、あの人はもう動けないんだと思います……」

しばらくして、嵐子は攻撃を止めたがそこには失神た東宮だけが残されていた

ちなみに、東宮が後で靈感のあると言われている鷺ノ宮伊澄に自分が霊に取り付かれていないか相談したところ、そんなことも無いしそんな形跡も無いと言った。

時間は流れて決戦前日の木曜日

東宮は御伽銀行と第二ボランティア部の臨死体験に近いような修行を毎日行っていたため彼の身体はボロボロになっており、とても闘えるような状況ではなかった。

しかし心配すること無かれ。決闘制度では対戦前に怪我から風邪、病気まで何でも治す完全治癒呪文が受けられるので修行での怪我が本番に影響することは無いだろう

御伽銀行

リスト「東宮君の噂の件なんだけど、どうかな？」

アリス「はい、東宮さんの援助交際で女を買っている、ヘタレで剣道部最弱だという噂の認知度は高等部では40%ですが高校第一校舎の生徒の認知率は98%と言ってもいいでしょう」

リスト「さがつてるね〜？東宮君の評判？」

涼子「一部女子生徒グループは噂を本気にして奴をどこかに転校させるよう、嘆願書の署名を集めているらしいな」

りんご「それに決闘制度のトトカルチョは東宮さんと桂さんの試合分は中止となりましたの。もちろん、桂さんに賭ける人が多すぎて桂さんが勝った場合の配当金額が1円にも満たないからです」

リスト「いいよ〜？これでこちらとしては出来る限りのことはしたね？あとは明日、東宮君が15分もつてくれる事と東宮君をギャップからヒーロー視する人がたくさん出ることを祈るだけだよ？」

はてさて、今回はここでおしまい。果たして東宮は明日の試合で勝つことが出来るのでしょうか？

続く!!

あとちなみにおまけ・・・

言い忘れておりましたが学校の黒板に援助交際疑惑を書いたのは御伽銀行の面々ではありません。それを指示したのは御伽銀行の面々なのです・・・

さて、誰が書いたのか見ることにしましょう

午後11時 インターネット掲示板 『桃源郷学園 真剣 侍しゃべり場』

すみません、まだ学園の名前が決まってるません

フルーツポンチ侍：ええい、また出てきたなフルーツチンポ侍！！

フルーツチンポ侍：紛らわしいんだよ！改名しろ！！』

フルーツポンチ侍：切腹しろ 切腹しろ 切腹しろ

フルーツチンポ侍：お前が切腹しろ

フルーツポンチ侍：いや、お前が切腹しろ

ここではなにやらくだらないことで誰かと誰かが喧嘩していました
まあネタばれしてしまうとフルーツポンチ侍が桂小太郎でフルーツ
チンポ侍が近藤勲なんですけどね。

りんご「・・・フフフ、いましたの」

そしてその掲示板を眺めるりんご。

りんご「この掲示板のフルーツポンチ侍とフルーツ侍は脅せばなんでもやってくれるということこの学園の中じゃ少しばかり有名ですの」

そういうと彼女はキーボードを打ち始め何かを書いていった。

アップル侍：この書き込みを見ている人にしてほしいことがあります
それはとある内容を明日の朝5時まで高等部の教室の黒板に書いて
写真を貼って行ってほしいのです。黒板に書く内容と写真は学園
駅東口コインロッカー0075番に入っています。

ちなみにこの依頼を断った場合、明日の朝5時1分、心臓発作で死ぬように私がデスノートに書いておきました。

実際、この書き込みを見た私の友達は書き込みを見た次の日に死んでしまいました

もちろんこんな書き込みを信じる人はいないだろう。しかし・・・

フルーツポンチ侍：なにイイイイイイイ！！！！

フルーツチンポ侍：なんだとオオオオオオ！！

フルーツチンポ侍：フルーツポンチ侍、いや桂！この掲示板を見て
いるか！？協力して学園に行つて書こうではないか！！

フルーツポンチ侍：御意、では学園駅東口コインロッカーに1時間
後の0時に待ち合わせということ！！

こうして、桂と近藤はりんごの書き込みをそのまま信じ込んで学園

に忍び込んでコインロッカーのメモに書かれてあった言葉“東宮援
助交際疑惑 e t c”を書いたのであります

なぜ、桂と近藤の学園の部外者が学園の掲示板にいるのかは・・・
あまり気にしないでくださいね

第六話：生物は死ぬ間際 子孫を残そうとする

金曜日の放課後 学園総合体育館 ちなみに現在16時

ヒナギクと東宮の試合は第一試合である。

『皆様おいでくださってありがとうございます。第一試合はまもなくの開始となります。』

決闘をご覧のお客様は選手関係者以外の方は・・・』

体育館に情報部からの放送による案内と注意事項が流れる

体育館にはすでに観戦目的の生徒が多数入っていた

東宮の援助交際疑惑の噂や放送による侮辱があったからだろうか、観客は高校第一校舎の生徒が多い。また、東宮が風紀委員を襲撃するという事件もあったため一番隊を中心とした風紀委員の姿も多数見られる

また援助交際疑惑があったからか一部の女子生徒は“東宮転校せよ！女の敵！！”などの横断幕を作ってスタンド席に広げていた

東宮側

彼の周りには御伽銀行と第二ボランティア部の面々と2年A組の一部男子生徒が集まっていた

東宮「みんな、僕なんかのために集まってくれてありがとう」

リスト「どうつてことないよ〜？東宮君の成長を見るためだからね〜？」

美緒「私たちとの修行の成果を発揮しなさい」

東宮「ああ、分かった」

ハヤテ「ところで東宮さんはヒナギクさんに勝てる確率はどれくらいだと思っっているんですか？」

東宮「・・・1%、もしかしたら0.5%も無いと思う」

駆「お前：そんなんでよく桂と試合する気になったよな」

秀吉「無謀すぎであろうに・・・」

東宮「でもこれは僕が桂さんに認めてもらうための試合・・・何が何でも勝ってみせる！！」

東宮の目はやる気と希望の火で燃えていた

おつう「東宮様、頑張ってくださいね」

亮士「僕たちとの修行の日々は東宮さんの力になっているはずっす！！」

砂土太郎「石動先輩の修行というより調教の数々を受けてきた先輩なら恐いものはないはずです！頑張ってください！！」

東宮「ありがとう・・・みんな・・・行ってくるよ・・・」

そういうと彼はリングへ向かって歩き出していった

和美「それでは試合を開始したいと思います！本日の司会は高等部2年B組朝倉和美、解説は高等部2年A組担任であり警護団でもあります坂田銀時先生にお越しくございました。よろしくお願ひします」

銀時「ああ、よろしく・・・」

和美「第一試合は2年A組桂ヒナギクvs2年A組東宮康太郎！お2人について担任の立場からどのような生徒なのか一言ずつ銀さん、お願ひします」

銀時「ツラ2号は剣道部で女8人衆と呼ばれる中の一人で剣道に関しては8人衆を除いたほかの剣道部員よりは圧倒的に強い、風紀委員の一員でもあるしな。東宮に関して言うことは・・・ただの真性
だな」

東宮「違っわアア！！僕は　なんかじゃねえ！！」

ヒナギク「銀さん、ツラ2号って言うのやめてくれませんか？」

ちなみに銀時が言っていた剣道部女8人衆というのは第4話のセリフでも出てきた、草壁美鈴、柳生九兵衛、橘高冬琉、桂ヒナギク、桜咲刹那、野井原緋鞠の6人と篠ノ之箒、関羽愛紗のことである。

和美『私たちからも言わせてもらいますと、これは全校中継されていますのであるでないに関係なく放送禁止用語は言わないでもらえますか？』

銀時『ああ、これ全校中継されてんだっけ？なら止めとくわ』

和美『それでは放送禁止用語が出てしまいました、気をとりなおして第一試合を始めましょう！！なお、審判はこちら側で勤めさせてもらいます！それでは第一試合の両選手、リング内に入ってください！！』

ヒナギクと東宮の2人は木刀を持ちリングの中に入る

ヒナギク「東宮君、あなたがどれほど強くなったのか見せてもらおうじゃない」

東宮「僕はあなたに勝つために修行・・・いや、臨死体験や調教の数々を乗り越えてきました！今あなたを倒して、あなたよりも強いことを証明して見せます！！」

和美『それでは第一試合FIGHT！！』

カアアアアーン！！！！

試合開始のゴングの音が鳴り響く

「ヤアアアアアアア!!!」
「ハアアアアアアア!!!」

2人の掛け声が体育館に響き渡る

最初に仕掛けたのは東宮であつた

東宮「ヤアアアアアアア!面ツツツツツ!!!」

一気に詰め寄り、ヒナギクに面を仕掛けようとした

しかし・・・

バシツツツ!!

それを木刀で受け止めるヒナギク

その後しばらくの後、鏝迫り合いが続く

東宮は力を入れ続けプレッシャーを与えようとしている

しかし、そんなこけおどしがヒナギクに通用するはずが無い

パシィィィン!!

小さく振りかぶり、東宮の木刀を力強く叩く

「なツツツ!!」

彼の木刀は左に弾かれてしまう

そして彼女は大きく振りかぶり・・・

「めエエエんツツツ!!」

東宮に力強く面を入れた

彼はその場に倒れこんでしまう

和美「おおおおおっと! 決まったアアア!! 開始1分で決まりましたアア!!」

銀時「意外とあっさり決まったな。って言うかこの展開ってハヤテの5巻と全く同じだよな」

和美「カウントを取らせていただきます!! 1、2、3・・・」

ヒナギク「東宮君、こんなんでも私に勝負を申し込んだのかしら」

和美「4、5、6・・・」

東宮「まだまだですよ、こんなんでもやられる僕ではありませんよ」

和美「7、8・・・」

ダッツ！！

彼は一度飛び上がり立ち上がった

オオツツツと会場からは驚きの声が多々聞こえる

明久「あの剣道部最弱の東宮君が！！」

ナツル「立ち上がったな！」

ハヤテ「あの面、結構力が入ってましたし木刀でしたからやられた
と思いましたがその心配はいりませんでしたね」

りんご「私たちの修行の成果が出ましたの。ちょっとやさつこのこ
とで気絶なんてしませんの」

涼子「何回もリンチしたからな」

美緒「それなら、私たちの修行の成果も出たってことだね。バット
で何回も叩いて嵐子に何度も殴られたもの」

嵐子「あれはただ私が男性の方が苦手なだけです・・・」

東宮「僕はまだまだやられるつもりはありません！いきますよ！！」

ヒナギク「分かったわ、来なさい！！（でも、今の面一発で気絶さ
せて試合終らせようとしてただけど、あれで気絶しないなんて・・・

・強くなってきたみたいね。私も本気で行かせてもらうわ！」

「ヤアアアアア！！！！」

「ハアアアアア！！！！」

もう一度、掛け声が体育館中に響き渡った

和美『おおつと・・・これは！！』

銀時『ツラ2号が圧しているな』

銀時の言うとおり、ヒナギクは猛攻を始めた。もちろん彼の気絶を狙ってである

しかしそれを東宮は手や腕で受け止めたり、打たれる場所を少しでも変えてダメージを弱くしたり、気絶狙いの面や胴を打たれ倒れこんだりしてもそれは一瞬でカウント3秒のうちには立ち上がり持ちこたえていた

和美『この粘り強さはまるで・・・』

銀時『ゴキブリの生命力としつこさに似てんな』

和美『あの~~~~、もう少し昆虫Gとか言っておブラートに包んでもらえないでしょうか・・・全校中継しているんですから』

ヒナギク（なんでこんなに打っているのに倒れないのよ！！一体どんな修行をしたって訳！？）

東宮（僕はこの10日間の間に何度も臨死体験を経験し乗り越えてきた、だから負けないのですよ桂さん！！）

6分半が経過し、いまだにヒナギクが優勢である状況は変わっていない。東宮は疲れ始めてきており最後の攻めは最初の1分のアレであり今はヒナギクの攻撃をかわしているのが精一杯な状況である。

「めえええんつつつ！！！！」

ヒナギクは力強く面を叩き込もうとする

しかしその木刀を片手で受け止める東宮

「グアツツツ！！」

東宮はその手を庇おうとする。その一瞬をヒナギクが見逃さない訳が無い

「めえええんつつつ！！！！」

「グアツツツ！！」

東宮はその場に倒れこんでしまう

和美『今度こそ決まったかカウントを取らせていただきます！1、2、3、4、5・・・』

銀時『ヤツ、もしかしたらヤベエことになってるかもな・・・』

ヒナギク「東宮くん、大丈夫？」

声をかけるヒナギク・・・

東宮「大丈夫ですよこれくらいで・・・」

東宮は立ち上がったカウント9秒ギリギリである

彼は左手で右手と右腕を摩っていた

ヒナギク「ねえ、東宮君」

東宮「何ですか？桂さん」

ヒナギク「あなたもしかして右の手と腕限界を超えているんじゃない？」

東宮「確かにさっきから右腕の感覚が無くなり始めているがそんなことありませんよ、続けましょう」

ヒナギク「それってやばいじゃない！骨折とかしてるんじゃないの！？」

東宮「だからそんなことはありませんって、そんなにゴチャゴチャ喋

っっていると襲いますよー!!」

東宮は木刀を大きく振りかざしヒナギクに面を入れようとした、左手一本だけで・・・

その一撃は簡単にヒナギクに受け止められ彼女に胴を入れられてしまう

東宮「グアツツツ!!」

ヒナギク「もしかして、腹部も大変なことになってるんじゃないの!?!」

東宮「大丈夫ですよ・・・マダマダ・・・いけます」

東宮は立ち上がるもののその足はふらつき木刀を杖の代わりに立つのが精一杯であるように見えた。その様子を周りの人々は心配そうに見つめている

8分半残り6分半である

和美「東宮君、大丈夫なの!? 試合中止にしようか!?!」

ヒナギク「そうよ、朝倉さんのいうとおりよ! 無理な意地張ってないで終わりにしなさいよ! 骨折しているんでしょ! なんならあなたが勝ちでいいから・・・」

東宮「まだ……まだ……」

おつう「無理をしてはいけません！」

秀吉「そうじゃ、ここは終わりにして……」

東宮「まだまだだっって言ってるだろ!!」

会場中に響くほどの大声で彼は叫ぶ

「まだまだ僕はやれますよ。桂さん来て下さい!!」

ヒナギク「でも、東宮君……」

『いいぞ、そのままやらせてあげたらどうだ?』

和美『ちよつと!何てこと言っているんですか!?銀さん仮にも先生でしょ?』

銀時『奴がやりたいって言ってたたら奴の言うとおりにすればいいじゃねえか。奴はやろうとしてんだぞ、身体中怪我まみれになつてもだ』

東宮「そういう……ことです……ですから……桂さん……来て……ください……」

ヒナギクは攻撃を再開した。この時点で9分15秒が経過

開始から1分30秒が経過

もう身体中ボロボロな彼は気絶を狙ったヒナギクの攻撃をまともに受けることが多くなり倒れたらカウント9秒まで起き上がれない状況がほとんどになった

会場からは「止めてやれ!」「もういいから!」「こんな見たくない!」との声が多数聞こえる

東宮は倒れながらも「まだまだ、桂さんに認めてもらうまでは……」と何度も呟いている

ヒナギク「ねえ、東宮君……」

東宮「何ですか……?桂さん……」

「何であなたはそこまで必死になるのよ!ボロボロになって息も整わなくなつて、そのままだと死んじゃうわよ!」

「何でつて……僕は……桂さんに……認めて……もらいたい……から……」

「どうして!何で私に認めてもらうためにそこまでするのよ」

「どうしてって僕が・・・あなたのこと・・・からに・・・
決まってるでしょ」

「えっ・・・今何て言ったの？」

「だから・・・だから・・・だから」

「本気で聞こえないんだけど」

「だから、桂さんの事が好きだからに決まってるだろオオオオオ！
！」

東宮はまた体育館中に響く声で叫ぶ

りんご「これって・・・」

美緒「もしかして・・・」

ハヤテ「はい、そのもしかしてでまさかの・・・」

和美『来ましたアア！！告白です！！愛の告白です！！全校中継さ
れているこの試合の最中にまさかの告白です！！』

銀時『ここで告白するとは驚きだな』

ヒナギク「ちょっと、東宮君!?!こっこんなところでそんな事言うだなんて・・・」

和美『おおっと、告白を受けた桂さんも戸惑っております!!!』

銀時『これはあれだな』

和美『あれとはどういう意味でしょうか?』

銀時『生物っていうのはな、自分の命に危険を感じたとき自分の子孫を残そうとするんだよ。だから東宮の場合ツラ2号・・・いや桂との間に子孫を残そうとして無意識のうちに大声で告白して自分の愛を伝えたんじゃねえか?』

和美『なるほど〜生物学的視点からの一言ありがとうございます』

東宮「だから僕は闘うんですよ。強くなってあなたを守りたいから、あなたの傍に居たいから・・・」

和美『まだ、告白は続いています』

ヒナギク「ちょっと、東宮君!!!」

彼女は東宮の言葉に顔を赤くする

東宮「僕は諦めません!あなたに認めてもらってあなたに振り返ってもらうまでは・・・」

彼は立ち上がると・・・

「桂さん！次で決着をつけましょう！！」

「いいわよ、その勝負受けてたつわ！！」

和美『おおっと、両者ともにフィニッシュ宣言！！確かにただいま
14分10秒！終了時間の15分も近づいております！』

東宮は左手と骨折をしているだろうと思われる右手の両手で木刀を
強く握り締める

東宮（不思議だ・・・痛みが全く感じない・・・）

「ヤアアアアアア！！！！」

「ハアアアアアア！！！！」

最後の掛け声が体育館中に響く

現在のヒナギクと東宮の間の距離は彼らは目の前の相手めがけて駆
けていく

「ウワアアアアアアアア！！！！！！」

彼らの声が共鳴する

その直後、

バタツツツ！！！！！

ヒナギク「東宮君！？」

東宮は大きく振りかぶった後、その場に倒れこんだ。ちなみにヒナギクはダメージを与えていない

和美「倒れてしまいました、東宮選手！！カウントを始めます。1、2、3・・・」

そして和美は高らかに10までを数えあげ・・・

『ただいまをもって第一試合の勝者が決まりました！！勝者、桂ヒナギク！！』

東宮はその場で倒れこんだまま起き上がってこない

東宮サイドの観客が東宮の元に近づいてくる

明久「東宮君大丈夫!？」

リスト「息は・・・しているね？」

アリス「とにかく今は保健室に行きましょう!!」

東宮は御伽銀行と第二ボランティア部のメンバーや2年A組のメンバーに付き添われて保健室に向かった。

そこで肋骨と腕と手の骨が折れていると診断され近くの病院に救急車で搬送された

「ん・・・うう・・・」

東宮が目を開けると病院の白い天井が広がっていた。

銀時「起きたか」

東宮「銀さん、ここは・・・」

りんご「病院ですよ」

亮士「東宮さんはあのあと病院に運ばれて手術を受けていたっス」

銀時「おい、俺のセリフ取るなよな」

東宮「そうか・・・それで今は何時だ？」

ハヤテ「もう23時過ぎてます。6時間近く寝ていたんですよ」

銀時「お前、少なくとも5日間は入院だそうだ。無理しやがって」

ヒナギク「東宮君・・・」

東宮「あっ・・・桂さん」

ヒナギク「ごめんね、こんなになるまで傷つけちゃって」

東宮「大丈夫ですよ、こうなったのも自分が意地張ってたせいですし」

ヒナギク「御伽銀行や第二ボランティア部の人たちから聞いたわよ。本当に臨死体験に近い事していたのね」

東宮「は、はあ・・・」

ヒナギク「あんなことやこんなことまでして・・・」

東宮「そこまで聞いたんですか」

あんなことやこんなこと・・・皆様の想像にお任せします

ヒナギク「それと・・・あのお話だけど・・・」

東宮「あのお話って?」

ヒナギク「だから、あなたからの告白よ!」

ヒナギクは顔を真っ赤にしながら言う

東宮「あつ・・・」

彼もまた顔を赤くする。ちなみに空気を読んだのか銀時やハヤテたちは外へ出て行っていた

ヒナギク「東宮君の気持ちは嬉しいわ。でも残念かもしれないけど、返事は今のところNOよ」

東宮「・・・そうですか」

ヒナギク「東宮君のことは好きよ。でもその好きって言うのは異性としてじゃなくてここにいる銀さんや吉井君、皐月君、鶴ヶ谷さん、魔女さん、石動さんや他のクラスの皆に対しても言える好き・・・つまり、クラスメイトの仲間意識としての好きなの。それでね・・・」

東宮「本当に好きな人がいる・・・ですよね」

ヒナギク「うん、分かってたんだ」

東宮「そりゃあ、ヒナギクさんのことずっと見ていましたから」

ナギクさんのことは何でも分かります。誰が好きなのかも・・・」

彼の目にはうつすら涙が流れていた

ヒナギク「東宮君・・・」

東宮「でも・・・」

ヒナギク「でも・・・何？」

東宮「でも・・・そのことを知っていても僕の気持ちは諦めることなく続いていた。だから・・・僕にもチャンスをまだくれませんか？」

ヒナギク「チャンス・・・？」

東宮「桂さんがその人と付き合い始めたら僕も身を引きます。でもそれまでは僕にも桂さんにまた告白できるチャンスが欲しいんです。僕もその人よりヒナギクさんを守るような甲斐性をもてるように努力しますから・・・」

ヒナギクは少し考えた後・・・

「その条件呑んでもいいわよ、でも彼を越えるとなると東宮君大変よ?。」

東宮「大丈夫です!!頑張りますから!!見ていてください、桂さん!!」

彼の顔は悲しい顔ではなく、またもや勇気と希望に満ちた顔になっ

ていた

今日はここでおしまい。

その後、東宮の援助交際などの噂は3日のうちに沈静化しました

まあ公衆の面前で告白した奴だという新たな側面で弄られる事となりましたが・・・

ちなみに御伽銀行と第二ボランティア部の勝負は東宮が負けたことにより依頼不成立のため引き分けとなって終わりました

第六話：生物は死ぬ間際 子孫を残そうとする（後書き）

次回（風紀委員SP編）と次々回（幽霊編）の予告をしようと思います。AngelBeats!風に

風紀委員SP編

「まさか打つとは」

「何勝手に編集してんのよ!？」

「知らねえのかよ!！」

「俺はただあの男を抹殺したいだけなんだよ」

「殺し屋、ゴリラ13と呼べ」

「お前らの30年後だ!！」

「私の部屋のテレビと同じテレビ!！」

「調教しておきましたぜ」

「ガタガタ言わずさっさと乗れよホルスタイン野郎」

「俺は愛の戦士マヨラ13!！」

「マヨネーズ足りないんだけどオオオオオ!!」

「死ねよ、土方アア。頼むから死んでくれよオオ」

「8人目・・・」

「金髪女アアア!!」

「うんとねえ〜工場長」

「悪気は無かったです。お金も無かったです」

「やあ、君たちも覗きに来たのか」

「トイレの入り口まで付いてきて」

「誰だてめえは!?!」

「フッフ、私の名は・・・」

第七話：とある風紀委員の日常

バラダイス
桃源郷学園。

ここには約3万人もの学生達が通っている

そして・・・

この学園には不良行為をするもの、及び学校に危害を加えようとする犯罪者から学園を守る学園直属の特殊武装学生集団があった。

それが風紀委員、通称ジャッジメントである！！

今回、私たち情報部メイジャーは風紀委員ジャッジメント1番隊に密着しその全貌を明らかにしていこうと思う！！

“完全密着！！風紀委員24時！！”

テテテレッテ〜テレテテテテ〜

なお、この番組は情報部が運営する桃源郷学園のHP上で放送するために撮られたものである

ハヤテ「ところで、何でこんな警察24時の丸パクリの番組のオープニングが情熱大陸のものなんですかね〜」

明日菜「ほんとよね、情熱大陸のオープニングじゃなくてどうせだったらあぶない刑事だとか、新参者だとかの曲を使えばいいのに・
」

ヒナギク「いいえ、それだったらキイナのほうがいいと思うわ。そのほうがインテリっぽく見えると思うし」

山崎退「いやいや、刑事ドラマといたら相棒でしょう!!」

ハヤテ「でも、相棒のオープニング曲僕たちには合わない感じですよ」

御坂美琴「ここは無難に踊る大捜査線のほうが・・・映画化するし」

玲士郎「いや、警視庁捜査一課9係にすべきだ」

朱湮「アンフェアよ、これだけは譲れないわ」

「あ~~~~~」

シャル「ここはシバトラがいいと思うな」

黒子「いいえ、ここは東京DOGSが1番にあうと思いますの」

六夏「ここはBOSSよ、なんか出来る女っぽいし・・・」

「あ~~~~~」

草壁美鈴「SPが1番いいと思うが・・・」

ゆり「みんな分かってないわね〜こころいうときは富豪刑事よ!」

「あの〜〜いい加減にしてもらえませんか!」

その声に今まで刑事ドラマ談義をしていた風紀委員が振り返る。

和美「そろそろ、取材を始めなくちゃならないんで」

初春「曲が気に入りませんでしたら、私たちのほうで変えておきますので・・・」

総悟「いやいや、ちょうどどの曲にするか決まったところでさア。

“警部補矢部健三”にしておいて下せエ」

ハヤテ「ちよつとー!ー!なんてドラマにしてるんですか!」
アリア「そうよ!ー!あれは確かに(コメディー的には)面白かったけど、内容はくだらないじゃない!」

「はい、分かりました〜」

智代「いいのか、そんな勝手に決めていいのか？」

というわけで、もう一度オープニングを変えてスタート

“完全密着！！風紀委員24時！！”

チャラチャラ〜チャ〜ラ〜チャ〜ラ〜チャ〜ラ〜ラ〜ラ〜ラ
ンラララン

ちなみに、OP曲は矢部健三の本家であるTRICKのテーマ曲も
のを使用することにいたしました。この曲の名前は“Mystic
Antique”といいます

美琴「・・・なんか一気に暗くなった感じがするわね」

固法美偉「そうね、これで見える人が少なくならなければいいんだけ
ど・・・」

吉備津桃子「心配要らないわん、だいじょうぶよん」

なんだかんだでプロローグ部分が長くなっちゃいましたがここから
が本編です

8：00 駅前大通り

風紀委員の朝は早い

ラウラ「いや、別に早くないと思うが・・・」

佐天涙子「そのところは、私たち情報部が情報操作しておきますから」

そして今日は服装検査の日。

そんな中に一人の男子生徒が現れました。

総悟「おい、てめえ服装ちゃんとしろや、シャツがズボンから出ますぜエ」

不良生徒（？）「うっせえな、てめえらの中にだって服装が乱れている奴がいるじゃねえか！その桃ちゃん先輩だとかよお」

不良と思われる生徒は桃子を指差した。

桃子はへそだしルックである。

総悟「あれは見た目はアレだけど立派な制服の内ですア」

ちなみにこの学校の制服は何種類かありその中でカラーバリエーションも豊富。高等部男子用の制服だけで30種類近くあります。基本的に制服を改造することもOK。

まあ改造制服を着る条件として校章を見える箇所に置くこと。それ

に卒業式や学校朝礼などの時には改造制服ではなく普通の制服を着ることがあげられる

総悟「ルールを守れねえ奴がルールを守ってる奴をあーだこーだ言っつてんじゃねえよ。この拳銃でド頭ぶち抜くぞ」

不良生徒「ああん？やれるもんならやってみろよ！」

パアアアアン！！

朝の賑やかな通学風景の中に響いた乾いた銃声

明日菜「ちよつと！！何本気で撃ってるんですか！？」

総悟「安心してくれ、頭はぶち抜いてねえ」

総悟は不良生徒を本当に撃ってはいません。弾丸は0.5センチ横を掠め近くにあつた木にめり込みました

総悟「でも・・・人間ってどうしてこんなに・・・」

総悟は近くで服装の検査をしていた美琴に銃を持たせ・・・

美琴「な・・・なんですかこれ・・・」

総悟「御坂、てめえがまさか撃つとは」

美琴「ちよっ！！私が撃つたみたいは何勝手に編集してんのよ!？」

総悟は大量の汗をダラダラと流す

美琴「何その汗!?!?すごくむかつくんですけど!?!」

総悟「みんな〜、御坂が・・・御坂が乱心して・・・俺もつづつすりゃいいか分かんねえよ〜。こころ〜さ〜れ〜る〜」

美琴「違いますよね!これあなたが撃つたやつですよね!!

総悟「た〜す〜け〜て〜」

美琴「沖田先輩、いい加減にしないと私も先輩に超電磁砲撃^{レールガン}ちますよ」

美琴はゲームセンターのコインを手に取るとそれを総悟に向ける

そしてそれを取材のためビデオで撮る情報部の人々

美偉「ちよつと何撮ってんの!?!?ここは撮るの止めなさい」

小太郎「そや、町中で銃を放つなんて明らかに犯罪や!そんな風紀委員の悪評に繋がるもの撮らせてたまるか」

小太郎はカメラを別の方向に向けさせた

そこには・・・

虎鉄「おはよう、綾崎」

ハヤテ「おはようございます・・・虎鉄さん・・・」

ハヤテは今とても不機嫌です。なぜならハヤテは虎鉄のことが大嫌いだからで・・・

虎鉄「今日は服装の確認の日か・・・なら俺のこと隅々まで見てくれて構わないぜ。お前に見られると俺は興奮するから・・・」

ハヤテ「うっせえ！！てめえはさっさと学校に行けエエエ！！！」

虎鉄「綾崎！人の頭というのはな、殴られ続けたらそのうち骨折して脳内出血するという・・・」

ハヤテ「てめえはそうしなきゃちつとはマシな考え方できねえだろオオ！！！」

美鈴「こっちも撮るな！！！」

カメラは強制的に停止させられた

そして時間は流れ20時過ぎ

駅前的大通りには居酒屋・ファーストフードをはじめ、飲食店が多数あり我が学園の生徒をはじめ様々な人々が集まってくる

無理も無い、ここは神奈川では横浜・川崎・大和に次ぐほどの人口密度の市でありその数は1平方キロあたり7500人を越える

そんな街の平和作りも風紀委員の仕事の一つである

私たちは学園の生徒が酒を飲み、タバコをしているとの情報を受けすぐさまその現場に向かった

その生徒たちは私たちの取材に対してこう応える

Q 未成年が酒を飲んだりタバコを吸ったりしてはいけないのではないですか？

「うつせえよ！誰が決めたんだよ、そんなくだらないホーリツをよお！？」

Q 風紀委員が来ますよ？

「風紀委員なんか俺らが全員ぶつ殺してやるよ」

「「「そーだ！そーだ！！」「」」

どうやらこの生徒たちは完全に出来上がっている様子です

そこには学園の守護者である風紀委員がすでに到着して・・・

(カメラが周りを見渡すが風紀委員は一人もいない)

到着して……

(反対側も映すがいない)

到着し……

(もう一度元の方向を映すがいない)

ダッダッダッ!!

今!? 遅いよ!! 風紀委員は私たちに遅れること5分で現場に到着した

朱涅「その酔っ払い。私たちにおとなしく捕まりなさい」

「んだと!? 誰が酔っ払いだこらあ!？」

酒を飲んだ生徒は勢いよく風紀委員に突っかかってくる

黒子「そのベロンベロンに酔ったあなたたちですの」

「うつせえよこんなの飲んだうちにはいらねえよ」

六夏「こいつらの事、銃でぶっ殺しても構わないわよね」

キンジ「落ちつけて。カメラもあるんだからそんなこと……」

「ウウウ……ウエエエレロオオオオオオオオオオオオオオオオ……」

酔っ払っていた生徒の一人が吐き出しました。キンジの足元で・・・
キンジ「おい・・・俺のズボンの裾に飛沫がかかったんだけど・・・
どうしてくれるんだアアア!!」

アリア「まずい!キンジを止めるのよ!!」

キンジ「いますぐこいつらに厳正なる処分をオオ!!」

退「ためです、カメラがまわってます」

六夏「撮ってんじゃないわよ!ぶっ殺すわよ!??」

ジジジジジ・・・ブツン!!

またもやカメラは止められてしまった

ヒナギク「ねえ、桜咲さん?」

刹那「どうしたんですか、ヒナギクさん?」

ヒナギク「今の上の二つの例って風紀委員のイメージを悪くしてる
と思わない?」

刹那「・・・確かにそうですね。なにか名誉挽回のいい機会があ

ればいいんですけど」

そんな風紀委員の中で比較的まともかと思われる2人が話をしている最中に風紀委員は集合が掛けられた

集合を掛けたのはこの地域の警察署の署長、松平片栗虎であった

ゆり「でも松平さんから直々に集合って・・・」

桃子「一体何があるのかしらん？」

風紀委員1番隊は学園の総合会議室に集められた

彼らが着席してしばらく経った後

松平「よぉ、待たせて悪かったなあ」

松平が現れた。隣には近藤勲と土方十四郎もいる

総悟「それでとつつあん、俺たちを呼んだのは何故ですかイ？」

松平「てめえらを呼んだのは他でもねえ、奴がついに動く・・・」

近藤「とつつあん、それは確かか？」

松平「ああ、間違いねエ。奴の周りには犬が張っている。奴もそれに感じてなりを潜めていたが我慢できずに動き出しやがった

だが奴が動き出したらそれに伴い奴らも動き出す・・・

俺はもう後手に回るつもりは無い。上の連中がガタガタ言ったら腹を切る覚悟だ

つまり、決戦だ」

決戦・・・その言葉に会議室の緊張感は強いものとなる

松平「奴についてくる奴らも、その奴らの企ても全て潰す!!」

勲「そうか・・・とっつあんがその覚悟なら俺たちの命もとっつあんに預ける。それでいいよな、お前ら」

うん、と会議室の中の人々は全員頷いた

松平「フツ、嬉しいこといってくれるじゃねえか。頼りにしているぜエ。」

あとこれは奴らが行くと思われる場所の地図だ。あと日取りは2日後の日曜日。出来るなら明日一日使って見回りしておけ。奴らはどこで何するか分かったもんじゃないからな

覚悟しておけよ」

そう言うと松平は人数分の地図を置き帰っていった

ゆり「ちょっと、情報部のみんな、今度の日曜日にここで何かあるか調べてくれる?」

初春「はい、分かりました」

しばらくして・・・

千雨「これを見てくれ」

千雨はリゾートパークのサイトを開いた

そこにはこう書いてあった

“湘南マリンリゾートパーク20周年式典まであと2日、今週日曜日!!”

土方「なるほど・・・こんな催し物があるってことか・・・」

近藤「それで、これには誰が出席するというんだ?」

小太郎「記念のコンサートには湘南乃風、ゆず、every little thing、いきものがかりとか色々出るみたいやな」

ヒナギク「俳優も西岡徳馬さん、小泉孝太郎さん、高島礼子さん、北乃きいさんに・・・」

明日菜「タレントは少年隊の東山紀之さんに石原良純さん、ベッキー、小森純、堀内健、矢口真里に……」

六夏「他にもスポーツ選手やら文化人やらたくさん来るみたいね」

総悟「全部、神奈川県出身の有名人でさア」

フェイト「そうになると、ここでテロを起こすという可能性が高くなってくる」

スバル「テロ……ですか……」

なのは「断定は出来ないけどフェイトちゃんの言うとおりかも、それに……」

なのはは出席する著名人の一番上の人物を指差した

ティアナ「この人って、平沼橋明雄!!」

ハヤテ「農林水産大臣で今、不正献金問題で取り沙汰されている人ですよね!?!」

近藤「このマリンパークは平沼橋大臣の土地と献金で出来ていたといわれている。だから出席するんだろう」

ラウラ「ヤミ献金で取り沙汰されている奴が人がたくさん集まるどころに来たら狙われやすいんじゃないか?」

土方「ああ……それに最近、代議士や官僚の襲撃事件が7件も起

きている。そのうち3件は代議士やその周囲にいた人が死亡している」

アリア「っていうことは今回の指令は“式典会場と農水大臣を警護せよ”ですいのね？」

近藤「たぶんそうだろう。相手は殺し屋にテロ組織だ!! 気を引き締めていけ!!」

「「「「「ハイ!!!!!!」」」」」

テツテツテツ!! テーテテツテテ!!

チャーチャラチャーチャーラチャーラーチャーラチャーラー

麻弓「テーマ曲を矢部健三からSPに変えておいたから」

涙子「お話的にはそっちのほうがぴったりですよね」

今日はこちらまで、果たして風紀委員^{シマツジメン}はテロ組織から式典会場を護る事が出来るのであろうか!?

次回へ続く!!

第八話：外見だけで人を判断しちゃダメ（前書き）

今回、参考としたもの：アニメ銀魂35話「外見だけで人を判断しちゃダメ」

智代「平沼橋大臣だな」

桃子「大臣、入り口に入るわよん」

土方「入り口周辺、異常ねえか？」

キンジ「入り口西側、問題なし」

美鈴「入り口北側、問題なし」

玲士郎「入り口東側、問題なし」

そんな中、大臣に近づく一人の男が・・・

キンジ「西側から要注意者、黄色ジャンパーの男、気をつける」

大臣はドンドンと大臣に近づいていき・・・

美鈴「固法、君の能力であの男を見てくれ」

美偉「はい、分かりました」

美偉には透視系能力という特殊能力があり、クレアポイアンス相手を透視することで
隠し持っている武器を発見することが出来るのである

美偉（・・・缶チューハイにカップ酒、サイフ・・・）

美鈴「どうだった？」

美偉「危険物は持つてはいないようですが・・・」

その直後！！

黄色ジャンパーの男は農水大臣の目の前に行き、喋り始めた

黄色ジャンパー「ヒック、てめえノースイデージンですか？」

ヒヒヒ、近くでえ見たらただのクソジジーじゃねえか

高そうな服着やがって、金返せゼーキンドロボ~~~~~」

キンジ「ただの酔っ払いだったようだ。西側、異常なし」

酔っ払いは大臣を警護していたSPにより遠くまで移動させられた後開放された。

大臣は異常なく最初の目的地へ向かっていく

松平「おい、トシ」

土方「なんだ、とっつあん」

松平「何であいつらは頼んでもいない農水大臣の護衛なんかしてるんだ？」

土方「何でって、これが今日の最重要任務だからだろ」

松平「何言つてんだ、ちげえよ。あんな農水大臣以上に要警護者が今日はこれから来るんだよ」

そういうと、松平はトランシーバーの電源を入れ・・・

松平『てめえら、勘違いしているようだから一度入り口に再集合だ！5分以内に戻ってこい！！』

そう言つてトランシーバーの電源を切つた

5分後

風紀委員はパークの入り口に集まっていた

今日の彼らは私服であり傍から見ればただの観光の団体客か修学旅行生にしか見えないだろう

近藤「とつつあん、今日の警護者っていうのは一体誰なんだ」

フェイト「相手が分からなくては私たちも警護のしようがないんですか・・・」

松平「ああ、今から説明するよって・・・噂をしようとするればなんとやらってやつだな」

風紀委員は松平の視線を追いかける

小太郎「あの老夫婦か？」

ゆり「違うわ、きつとあの家族連れよ」

などと彼らなりに予想を立てるが・・・

松平「てめえら、全く分かつちやいねえな。あの2人組だ」

松平はカップルらしき男女の2人組を指差した

スバル「・・・ねえ、あの人たち知ってる？」

ティアナ「知らないわ、どこかの政治家の子息なんじゃない」

朱湮「でもあんな子息、普通いるかしら？」

彼女らは2人組を観察しながら話す。女のほうはいたってまともだが、男のほうはサングラスに金髪、耳や鼻にピアスをして大きめのネックレスをかけるという見た目からは要警護者とは言えそうにも無い人である

ヒナギク「でも最近は大AIGOとかもいるし・・・」

なのは「あとユージっていう人もいるよね。どこかの国の大統領の孫だって・・・」

松平「ちげえよ、あんな奴が大統領や総理大臣の孫や息子であつてたまるか！」

ハヤテ「違うんですか!？」

松平は話を続けた

「あの野郎はな、手塩に掛けて育てた大事な娘の栗子を大事な一日をこつちやって無駄にしようとしているんだよお。」

娘の貴重な一日を奴の残りの人生できつちり償ってもらおう」

そついうと、背中から狙撃銃を取り出し、男の方へと向ける

松平「誰でもいい、あいつを撃つから土台になれえ」

土方「待たんかイイ！！奴つてあれか、娘の彼氏かよ！！」

松平「彼氏じゃねえ！！あんなチャラ男パパは彼氏だとは認めねえよ」

土方「喧しいわ！お前こそ警察署の署長だつて認めねえよ！！」

総悟「土方さん、俺もあんたが警察官だつて絶対認めねえよ」

土方「お前はだまつとれエエ！！」

六夏「ふざけないでよ。こつちだつてね、休みの日にわざわざ来てやったのに娘のデートを邪魔する？」

小太郎「くだらんなあ、帰らせてもらつわ」

松平「おい、俺がいつそんなことを頼んだ？」

ラウラ「違うのか？」

松平「俺はただあの男を抹殺したいだけなんだよ」

「「「もつとできるかアアアア!!!」「」「」

風紀委員全員で激しくツッコミ!!

松平「あの男が栗子を幸せに出来ると思うか？俺だって、娘の好きになった男は認めてやりてえよ？悩んで色々考えたさ。そして思った、もう抹殺しかないって・・・」

美琴「色々考えすぎですって!!」

ハヤテ「近藤さんからも、何かいってあげてくださいよ」

近藤「誰が近藤だ？殺し屋ゴリラ13と呼べ」

近藤も狙撃銃を手にして男に向けていた

黒子「何やってるんですの？それに13とは・・・」

近藤「傷の象徴だ。今年に入って13回お妙さんに振られた」

なのは「近藤さん、お妙ちゃんに13回も振られてたんだ」

フェイト「授業中にも押しかけていたからな」

美鈴「まあ当然の結果とも思うが……」

志村妙と同じクラスの3人は何度もお妙にプロポーズをしてくる近藤を目撃していたのである。

フェイトの言うとおり、授業中にもプロポーズをしてくるので嫌でも目に付いてしまう

近藤「おい、とつつあん！俺も手伝うぜ！俺は男のくせにチャラチヤラ着飾った奴が大嫌いなんだ！！」

松平「近藤オオ……」

近藤「小さい頃から妹のように思ってきた栗子ちゃんをあんな男にはやれん！行くぞ！！」

松平「オオオオオ！！」

松平と近藤は2人のあとを追って駆け出していった

土方「あいつら、マジで殺りかねえぞ。総悟、止めに行くぞ」

総悟「誰が総悟でエ、俺は殺し屋ソウゴ13だ」

刹那「沖田さん！あなたもですか！？」

総悟「面白そうなんで行ってきまーす」

総悟も松平と近藤の後を追って駆け出していった

土方「ハア、どいつもこいつも好き勝手やりやがって・・・」

ハヤテ「ところで、僕たちはどうすればいいのでしょうか？」

残されたのは土方と沖田を除いた風紀委員、それに取材に来ていた情報部である

土方「ああ、今日はこんなんのでめえら呼んで悪かったな。俺はあいつらが心配だから追いかけるが今日はここで解散とする。学園に帰ってもいいし、ここで遊びたきゃ遊んでもいい・・・まあ好きにしろ」

「「「は~~~~~い」「」」

返事をする風紀委員と情報部。傍から見れば修学旅行客にしかみえない

土方「じゃあねえ、追つか・・・」

土方は松平、近藤、沖田を追うためにリゾートパークに入っていく

土方「・・・って、なんででめえらもついてきてんだ？」

朱漣「何でって面白そうだからに決まってるじゃない」

ハヤテ「松平さんたちが万が一のことをしましたら僕たちも土方さんと一緒にあの人たちを守りますから」

麻弓「私たちは取材です。こんな面白くなりそうなこと」

和美「記事にしなくて何にするっていうんですか」

その後ろには他にもなのは、フェイト、ゆり、桃子、ヒナギク、アリア、美偉、小太郎、キンジの姿があった。

土方「他の奴らはどうした」

ゆり「私たち以外は一部は帰って殆どは土方さんの言うとおりで遊んでるわ」

なのは「今日一日まるごと予定空けちゃってたからね〜」

桃子「さあ、追うわよん」

「オオーーーーー!!!!!!」

(こいつら楽しんでねえか・・・??)

土方はそんなことを思いながら先を歩きながら松平たちを追いかけ

る風紀委員たちの姿を見ていた

松平の娘、栗子とその彼氏七兵衛は一目のアトラクションへと入っていった

土方「まずは、メリーゴーランドか・・・」

栗子達2人の4頭ほど後ろの木馬にまず松平たち3人が座り、その後ろに土方たちが木馬や馬車に座って様子を見守る

松平「野郎オ・・・やりやがるな・・・こんなものを選ぶとは・・・」

近藤「狙いがさだまらねえ・・・なんだか気持ち悪くなってきた・・・」

メリーゴーランドには木馬が上下するものとしらないものの二種が一般的であると思われるが、今松平たちが乗っているのは前者のほうであった。

狙撃銃で狙うものの自分も相手も上下してしまうので狙いが定まらない

松平「それより、この馬はいつになったらあいつの馬に近づくんだけ？距離が一向に縮まらねえぞ！！」

土方「縮まるかアア！！これはメリーゴーランドだ！土台ごと一緒に回ってんだよ！！永遠にまわり続けるわ！」

松平「遊園地なんて来たことねえからわかんねえよ！！大人の遊園

地なら行ったことはあるけどよオ・・・」

小太郎「早まったことはすんなや、要はあの2人の仲を裂けばええのやる?」

アリア「他にも方法はあるわよ。考えれば」

近藤「どくしたお前ら、仲間に入りたいのか?殺し屋同盟に入りたいのか?」

土方「ちげえよ!!俺たちはお前らが血迷った真似しないかどうか見張りに来てんだよ!」

メリーゴーランドは一定時間が経過し止った。

その次に2人が向かったのはコーヒーカップであった。

その様子を遠くの売店の前から見ながら話し始める

松平「おい、何でお前らはいつを殺すことに協力しないんだ?」

ハヤテ「僕たちはあなた達みたいに人を見た目で内面まで判断しないというだけですよ」

近藤「どう見たって悪い奴だろ!!穴だらけだもん、人間元々穴だらけじゃん!?それなのに自分で穴開けるって意味わかんねえよ!」

フェイト「近藤さんの言っている意味が分からないんだが・・・」

次回に続く！！

第八話：外見だけで人を判断しちゃダメ（後書き）

お詫び、感想の返事が出来ないことをここでお詫び申し上げます。

来るたびにきちんと見ています。

皆様からいただいた新しいキャラクターの案も参考にさせて頂いており、
（反映するのはまだ先になるかと思われませんが・・・）

第九話：自分の家のテレビと同じテレビを見つけたらテンションが上がる

水族館に入る栗子達2人を追いかける松平たち

水槽の中では魚が泳ぎまわっている

松平や近藤らは狙撃を試みるがなかなかそれが出来るような状態ではなかった

狙撃銃で狙おうとすると水槽に反射した姿が映ってばれてしまうからである

松平「畜生オ……狙いたくても狙えねえなア……」

総悟「早く誰もいないような場所に移動してくれればいいんですけどねエ」

近藤「それに今日は記念式典があつてその会場つてというのがこの水族館の内部……客が多すぎる……」

松平「式典ねえ……」

松平は何かを考えている様子。

館内には20周年の記念のイルカ・アシカショーが30分後に始まるという放送が流れている。

そして……

松平「オジサンちよっくらトイレいつてくらア。近藤、沖田、お前
らも一緒に連れションだア、来い!!」

近藤「ああ、俺もちよどしたいと思つていたところだ」

総悟「俺は別にしたいとは思つてはいやせんが、ついでには行きます
ゼイ」

松平たち3人はトイレへと向かつていった。栗子達や土方達を置い
たままで・・・

キンジ「どうします、追いますか？」

土方「いや・・・別に追わんでもいいだろ。とっつあんも歳だから
介護が必要なんじゃねえか？だから、ここで待つてようぜ」

土方の言つとおり、風紀委員と情報部は松平たちを待つことにした。

しかし・・・

5分後

小太郎「戻つてこおへんなあ・・・」

ハヤテ「トイレが混んでいるんでしょうか？」

それからさらに10分後・・・

キンジ「遅いな・・・」

土方「女でもないくせに何でこんなに時間がかかってんだ？」

ハヤテ「見に行ったほうがいいのでは？」

土方「・・・そうだな」

土方たち、男メンバーは松平たちが入ったと思われる一番近くにあるトイレに入ってしまった。

そのトイレはあまり混んでおらず空きも見つけられる程であった

小太郎「おらへんなあ〜」

キンジ「別のトイレに行ったのか？」

土方「いや・・・奴らはここに入っている・・・」

土方は洗面所のゴミ箱を見ながら言った

そこには松平たちが持っているはずのトランシーバーがあった。

トランシーバーにはGPSがついており何処にいるのかが把握できる。しかしそれは持っていればの話で持っていなければ話にならない

土方は3つのトランシーバーを回収し、自分のトランシーバーの電源を入れると

土方『とっつあんたちが居なくなつた!!あいつら何するか分からねえ!パークの中にいる奴全員で水族館を中心にとっつあんたちを探せ!!』

そう大声で風紀委員に伝えたと電源を切つた。

土方「探すぞ!!」

「「ハイ!!!!!!」」

トイレの外で待っていた女子たちとも合流し共に探し始める

しかし、松平たちの姿はなかなか見つからない

小太郎「アアアアツツ!!!!」

小太郎は何かを発見した様子。

フェイト「どうした?見つけたか!？」

小太郎「いや、姉ちゃんたちの30年後やな〜って思つて」

そこにいたのは・・・

トドであった

ボコスカドカ！！！！ 女にゲンコツされる音

ヒナギク「失礼ね！私たちだって大人になってももっと綺麗でいるわよ！！！」

ゆり「あんなトドみたいないな体型になってたまるかっていうのよ」

なのは「アアツツツ！！！」

今度はなのはが何かを見つけた様子。

土方「どうした？今度こそ！？」

なのは「にはは〜、あのサメの水槽の前にあるテレビが私の部屋のテレビと同じテレビだから……」

ハヤテ「関係ありませんよ！！そんな事よくありますよ！！！」

リゾートパークの中に残っていた風紀委員にも協力をしてもらったが発見の連絡はまだ無い……

フェイト「残るは……」

美偉「式典会場のステージだけですわね……」

土方「変な事……奴らがしなけりゃいいんだが……」

土方たちが式典会場に入るとちょうどショーが始まるころであった。

そこには、栗子達の姿もあり、護衛相手だと勘違いしていた農水大臣を含めた有名人の姿も多数あった

また、自由行動で別行動をしていたほかの風紀委員の姿もある

ビィィィィィー

ショーの開始の合図が鳴る

イルカやアシカなどの動物が次々とステージやステージ内の水槽に入ってくる

土方たちは人ごみに紛れて栗子たちを狙っているだろうと思われる
松平たちの姿を探した

ハヤテ「土方さん……あれ……」

ハヤテは何かを指差しながら土方を呼ぶ。

フエイト「ああ、松平さんたちがあんな事したからショーは中止になつて誰も居なくなつてる」

松平「なにい？つていう事は・・・栗子も？」

土方「そつだ、もう居ないからこれを期に諦めてだなあ・・・」

松平「栗子オオオ！！」

松平は出口へ向けて駆け出していった

土方「・・・まだ諦めてないのかよ」

松平たちが次に栗子たちを見つけたとき、彼女たちはジェットコースターに乗ろうとしていた。

近藤「次はジェットコースターか・・・」

松平「どうする？今度は外から走行しているジェットコースターに乗っている奴を狙うか」

土方「だから、何で殺すしか選択肢がねえんだよ！！もつと他にもあるだろ、見てみる」

総悟「あの男、コースターに乗りたくないみたいですねエ」

桃子「コースターが苦手なのかしらん」

土方「そう、だから奴を無理矢理コースターに乗せて大恥じかかせりゃいいんだ」

総悟「それなら俺に任せておいてくださいえ」

栗子「一緒に乗りましょうでございまする」

七兵衛「いいよ、俺はここで見てるからさ〜お前だけ乗って・・・」

総悟「ガタガタ言わずさつさと乗れよホルスタイン野郎」

総悟は七兵衛にだけ聞こえる声で彼の背中にナイフを突き刺し言った

総悟「騒いだらためえの心臓と肺にでっけえ穴を開けっぞ」

七兵衛「ヒイイイ・・・」

栗子「どうしたでございまするか？」

七兵衛「いや、何でもねえよ！！乗ろっ！！ジェットコースターに乗ろっ、今すぐに！！」

栗子「マジでございまするか！！」

どうやら、コースターに乗らせることに成功した様子

そしてジェットコースターの列に並び、栗子たちの順番となり2人と総悟それに風紀委員の何人かは乗り込んだ

ジェットコースターの座席表

| | 進行方向 | 出口側 |
|-------|------|-----|
| 入り口側 | | |
| 1 3列目 | 一般人 | |
| 4列目 | 七兵衛 | 栗子 |
| 5列目 | 総悟 | ゆり |
| 6列目 | 和美 | 美偉 |
| 7列目 | 松平 | 土方 |
| 8列目 | 近藤 | キンジ |
| 9列目 | 麻弓 | 桃子 |

松平「大丈夫か？本当にこれで成功するか？」

土方「大丈夫だ。さっきも見ていただろ、あいつのドSっぷりを・
・奴は人をいつも虐めるのが趣味な奴だからな」

総悟「……………しろ」

七兵衛「はい…………？」

総悟「ウ コしろ…………このコースターがここに戻ってくるまでに

ウ コしてなかったらぶつ殺す」

総悟はナイフを七兵衛に突きつけながら言った

七兵衛「ヒイイ……」

栗子「どうしたのでございまするか？顔色が悪いようございまするが……」

そんなに嫌なら降りようで……」

総悟「降りたら殺す」

七兵衛「ウルセエコラ！！乗るっていつたら乗るんだよ！！」

栗子「七兵衛さま……きゃあ！！」

ジェットコースターは勢いよく加速し始めた

松平「オオ……思ったよりもキツイ……」

土方「あいつ、大丈夫か？」

ビュウウウウウン！！

何かが土方と松平を襲ってきた

土方「何してんだ、総悟！！」

総悟「ベルト閉めるの忘れたアア……」

土方と松平、風紀委員の乗っている人は総悟に注目し、情報部である和美と麻弓はカメラを回し続ける

松平「なにやってんだコイツ・・・さつきとは別人じゃないか・・・テンパリまつくつてるじゃねえか・・・」

総悟「Sだからこそ打たれ弱いのだ!! ガラスの剣なのだ!!
なんとかしる土方アアア!!」

総悟は土方の髪の毛を掴む

土方「てめえエエ・・・」

そしてコースターは乗り場に戻ってきて・・・

栗子「アア〜恐かったでございませう〜
大丈夫でございますか？七兵衛さま・・・
七兵衛さま・・・座高が少し高く・・・」

七兵衛「ハハハ・・・お前絶対引くだろ・・・俺・・・少し・・・
漏らしちゃった・・・」

栗子「!!!! エエエ!!!!!!」

総悟の言葉のせいでウコを漏らす羽目になった七兵衛を土方たちは哀れみの感情で見ている。

土方「すまない、七兵衛・・・お前に恨みはないが・・・」

栗子「良かった〜」

「「「!!!」」」

栗子「実は私までございます。私だけだったらどうしようかと・・・」

（（（（（なアアアにイイイイ・・・）））））

土方たちは栗子の言葉にただ啞然とするしかなかった。

しかも、これで2人は仲がより深まったように見える

松平「おい、どういうことだ！？仲がより深まってんじゃねえか！
」！

土方「てめえの娘こそどういうことだよ！！普通漏らすか！？いつ
たいどついう教育してんだよ！！」

アリア「見て！次のアトラクションに行こうとしてるわ！」

ゆり「あの状態で!？」

土方「近藤さん！座ってないでさっさと・・・」

土方たちは近藤の座高が少し高くなっていることに気づいた

土方「近藤さん……まさか……」

近藤は涙を流し……

「みんな、誰にも言うなでございませう……」

「「「「「エエエー……ツツツ……」」」」

こっちにもただ驚愕するしかなかった

松平「まさか……あれでひかねえとは、我が娘ながらなんとも恐ろしい」

土方「いや、本当に恐ろしいよ」

松平「お前ら、このこと他に漏らしたら殺すからなあ……」

ハヤテ「でも、栗子さん漏らしてないのでは……?」

美偉「確かに……男の方は着替えているのに栗子さんは着替えていないわね」

松平「尻に挟んだまま歩いているんじゃないの？」

フェイト「……松平さん、自分の娘が可愛くないんですか……？」

土方「アタタの娘はな、あいつを傷つけたくないからあんな嘘をついたんだよ」

近藤「トシ、それはあれか？栗子ちゃんは脱糞なんかじゃ全くひかないってことか？お前らは俺が脱糞したときドン引きしていたのに……栗子ちゃんはそんな汚い部分を含めて奴を包み込むさういふことだな？」

小太郎「いや、脱糞されてドン引きするのは正しい判断やから……」

土方「こいつは伸引き裂くんだったら本気でやらないとな……」

総悟「オイ！！あれを見る！！」

総悟の視線の先には観覧車へと向かう栗子と七兵衛の姿が……

総悟「観覧車……マズイ、チュウするつもりだ！！観覧車といったらチュウしかない！あれはチュウするために作られたものだ」

近藤「チュ、チュウ！？そうなの？栗子ちゃんが危ない！！行くぞ！！！」

近藤を先頭に観覧車へと向かう総悟と松平。

ヒナギク「土方さん、どうします?」

桃子「あの人たち、何するか分からないわよん」

土方は呼びかけを聞かざること考えていた

見た目がいいからって近づいてくる女たち

そしてその女たちは自分が大好きなマヨネーズをぶっかけて食べる
ご飯にドン引きして去っていく姿・・・

土方「フフ・・・」

ハヤテ「どうしたんですか、土方さん?」

土方「愛なんて幻想かと思っていたがな・・・ここは俺がやる。お前らは黙ってそこにいろ」

土方はそついうと観覧車のほうへと向かっていった

一方、栗子と七兵衛の乗るゴンドラ

七兵衛「ハハハ、しかし栗子お前すげ〜よ。普通は引くぜ?彼氏が脱糞したら」

「フッフ、私はそれくらいで七兵衛さまのことを嫌いになったりは
しませんでございませう。それに七兵衛さまだって私が脱糞したと
いったとき引かなかつたじゃありませんか……」

「そ……それはだな……」

「それは……何でございませうか？」

「何って……そりゃあ……お前のことが……す……」

「す……?」

とてもいい雰囲気です。しかし……

ババババババババババ……

1機のヘリコプターが2人の乗るゴンドラに近づいてきました

そしてヘリのドアは開き3人の男の姿がありました。

もちろん、松平たちです

七兵衛「なんじゃありやああ!!」

近藤「殺し屋サムライ13……」

「「「お命頂戴!」「」」

七兵衛「な・・・何むちゃくちなことを・・・」

栗子「キヤアア・・・誰か助けて・・・」

その時、栗子は1つ先のゴンドラの上に立つ男の姿を見つけた

七兵衛「あれは!!!」

「「「トシ(土方さん!!)!!!!」「」」

土方「トシ?誰だそれは・・・俺は愛の戦士、マヨラ13!!」

人の恋路を邪魔するバカは消え去れエエ!!」

土方はマヨネーズのボトルの形をしたバツーカー砲を持つところから
ビームを発射!

ビームはヘリコプターのプロペラに直撃し、ヘリコプターは墜落!

七兵衛「マヨラ13・・・」

栗子「かつこいい・・・」

土方「2人いつまでも仲良くやんな、じゃあな」

退散しようとする土方、しかし・・・

栗子「あの!もうこんな脱糞野郎とは別れるでございまるから私

と付き合ってもらえないでございませるか!？」

観覧車のドアを開け叫ぶ栗子。七兵衛はドアに寄りかかっていた状態のためバランスを崩し下へと落ちていってしまいました。

土方のほうも突然の告白に驚いてバランスを崩し……こっちもゴンドラから落ちてしまいました

土方「愛なんて……」

というわけではいかがであったろうか、学園の諸君!!

風紀委員はこうして日々、学園や街の平和を護っているのである

本当か!?

完全密着!!--風紀委員24時!!-- これにて終了

おまけ この番組が学園のHPにアップされてから……
その1

不良「おい、お譲ちゃん。俺と仲良くしようぜ」

女生徒「離してください！！嫌です！！」

ティアナ「待ちなさい！！」

スバル「風紀委員よ！！」

不良「やべえ、風紀委員だ！！」

風紀委員の言葉を聴いて逃げ出す不良。

ティアナ「逃げ出したわね」

スバル「これでもう安心ですよ〜っっていない」

女生徒「キヤアア！！！！風紀委員よ！！！！きっと私も捕まってSMPレイであんなことやこんなことを！！！！」

助けたはずの女生徒まで逃げ出してしまいました

ティアナ・スバル「ちよつと！それは誤解だから〜！！！！！！」

明らかに、水族館のショーでの総悟の行為からきてますね・・・

その2

美琴「このエリアは異常ないわね」

黒子「そうですね、次のエリアへ行きましょうですの」

「「「ねえ、お姉ちゃんたち風紀委員?」」」

美琴と黒子に小学生1 2年くらいの子ども達が声をかけてきた

美琴「そうだけど、何か用?」

子どもA「うわあ〜それなら人殺しだ〜」

子どもB「街なかでテッポウ撃つやつは人殺しなんだぞ〜」

「「「「ヒトゴロシ!!ヒトゴロシ!!」」」」

街中で起こる小学生の人殺しコール・・・

明らかに服装検査のときのアレですよね・・・

こうして風紀委員は生徒たちに恐怖心を植え付けることによって生徒たちの不良行為を抑制していくのであった・・・

めでたしめでたし・・・?

もちろんこれで黙っている風紀委員ではなく、この後、戦隊物の劇をして悪いイメージをダウンさせようと努力したのはまた別のお話。

今回は幽霊編!!長編になるかも・・・

第十話：ベルトコンベアには気をつける！！

とある夜、男子寮のラウンジでは電気を消して怪談話をしていた

別に誰からというわけでもなく気がついたら始まって、それを聞く人また話したい人が集い40人くらいの男子生徒が集まっていた

語り手は秀吉であった

秀吉「この話はワシが伝え聞いた話なんじゃがな・・・今日みたい蚊がたくさん飛んでいるまだ春なのに暑苦しい夜のこと・・・

とある少年がスイミングスクールの帰りに自分の通う小学校の前を通ったのじゃ

その少年、帰りに友達とゲームセンターやモスバーガーに行っていたからあたりは真っ暗になって時間も11時を過ぎておった・・・母ちゃんにぶっ飛ばされるから早く帰ろうと思いつつその少年は急ぎ足で歩いておった

ふと小学校のほうを見ると真夜中にもかかわらず、そこには金髪の女がおったそうなの・・・

もう真夜中なのに何をしているんだろうかと思つてその少年は金髪の女に近づいていったのじゃ・・・

その少年は聞いた・・・こんなに遅くに何やってんの・・・

その金髪の女はニヤツつと笑つて・・・

土方「マヨネーズ足りないんだけどオオオオオオオオオオ！！！！」

「「「「ウワアアアアアアアアアア！！！！！！」」」」

誰かが急いで消してあった電気をつける

鍵「土方さん！何てことしてくれるんですか！！大切なオチを・・・

」

土方「知らねえよ、マヨネーズが切れたんだよ。せつかく食おうと思っていた焼きソバが台無しだ」

土方が右手に持っていたのは上から見ると8割以上がマヨネーズで塗りたくられた焼きソバ

朋也「もう十分だろ！身体壊すわ！！」

当麻「もう焼きソバじゃないよな！？もう黄色いヤツとしか言いようが無いよ！！」

音無「おい、春原・・・大丈夫か？」

音無の目の先には泡を吹いて倒れる春原の姿が・・・

朋也「こいつ！！マヨネーズで倒れやがった！？」

土方「たつくくだらねえ．．．どいつもこいつも怪談なんぞにはま
りやがって．．．」

幽霊なんて居るわけないっての．．．．」

土方は食堂に移ると当麻曰く黄色いヤツを完食し、学園のパトロー
ルへと戻っていった

土方（．．．しかし、まだ春だつて言うのに暑苦しいな．．．）

「死ね．．．死ね．．．死ねよ土方．．．」

土方は何処からか自分を呪うような声が聞こえた気がした

土方「ま．．．まさかな．．．」

「死ねよ、土方アア。頼むから死んでくれよオオ」

土方が男子寮から出ると．．．

総悟「死ね．．．」

そこには白装束を着て頭には2本の蠟燭をくくりつけ手に何かを持
った総悟がいた

土方「おい、お前何やってんだ？」

総悟「・・・ジヨギング」

土方「嘘つけ!! そんな格好で走ったら頭火達磨になるわ!! 儀式だろ! 俺を呪う儀式だろ!!」

総悟「ハア・・・本当に自意識過剰な人だ。そんなんじゃ、ノイローゼになりますぜ」

土方「何ツツ？」

「!!!!!!」

土方は何か気配を感じ、振り返った。

しかしそこには誰もいなかった

総悟「どうしたんでエ、土方さん」

土方「おい、あそこの街路灯の上に誰か居なかったか？」

総悟「・・・いや、何も」

土方（いや・・・確かにいた・・・）

キヤアアアア!!!!!!

その直後、女子寮から女生徒の悲鳴が響いた

翌日 高校職員室

銀時「んあ？女子寮の呪い？」

小萌「はいです。女子寮に幽霊が出て女子生徒を相次いで呪っているという話なのです」

呪われた生徒は寝込み続けているのです」

雪路「私のクラスにも寝込んでいるらしい人いるけど、それって相坂さんや村雨さんや水無神さんを見たんじゃないの」

愛穂「いや、それだったらもう皆存在を知ってるから退治するはずじゃん？」

小萌「それに寝込み続けている女子生徒は昨日で8人になってその女子生徒たちは皆口をそろえて金髪の女と言っているらしいのですよ」

銀時「8人目・・・金髪の女ねえ・・・」

「坂田先生・・・」

銀時は呼ばれたのに気がつき、振り向く。そこには教頭である猿渡がいた

猿渡「本日から10日間、2年B組のネギ先生が高畑先生と共に出

張に行きますのでその間2年B組のホームルームもお願いします」

銀時「・・・ネギ坊主、出張か？」

猿渡「ええ、詳しいことは分からないのですがね・・・

今日は第一女子寮の交流会の日です。問題を起こさないように、桂先生、月詠先生、しっかりと生徒たちを見張っておいてくださいね」この寮の交流会というのは普段寮で生活をしていない生徒たちが1日、寮で生活をするというものである。友達の部屋に泊まるのが一般的で、このイベントは一学期中に2回ずつ計6回ある。

猿渡「あとっておきますが、幽霊がいるなんていう生徒の噂を信じないように。きつと5月病で鬱になっているだけでしょう

ですから休んでいる生徒を早く登校させるように先生の皆さん促してくださいよ！」

そういうと、猿渡は自分の机へと戻っていった

銀時「いつもだけど、猿渡腹立つな〜」

(でも呪いか・・・)

時間は過ぎ放課後・・・女子寮

呪われたと思われる生徒は女子寮の空き室に集められていた

現在、呪われたと思われる生徒は次のとおりである

佐天涙子 九崎凜子 秋山澗 大原杏 ユイ 志村妙 椎名深夏
劉備桃香

芙蓉楓「みんな、うわ言のように金髪の女って言っていますね」

ゆか「駆くんたちが言ってたけど木下君がこの状況によく似た金髪
女の怪談話をしていたらしいみたいで、それと関係があるのかな・
・？」

千雨「幽霊なんてこれ以上いてたまるか！見えているだけで3人も
学校にいるのによお！」

知弦「でも、幽霊を甘く見ていると痛い目に遭うわよ」

くりむ「確かに操緒ちゃんたちは私たちと仲良くしてるけど、世の
中には悪霊もいるかもだからね〜」

紅音「もしかしたらこの寮は呪われていてとんでもない霊に取り付
かれてるのかもしれないね・・・」

セシリア「そんな非科学的な、くだらないですわ」

悠木かなで「みんな〜、連れてきたよ〜」

この女子寮の寮長であるかなでは3人の怪しい人物を連れてきた。

木乃香「この人たちなんなん？サーカスでも始まる気なん？」

かなで「違うよ、霊を払ってもらおうって思ってたね」

刹那「冗談ですよ？何かこの人たち胡散臭いですし・・・」

木乃香「一人はキョンシーみたいな格好してるし」

千桜「一人は顔を包帯で隠してますからね・・・」

その中の一番背の高い顔を包帯で隠した男が口を開いた

「まずは、ここにいる人をラウンジに集めてください」

怪しい人物のいうとおり、女子寮にいた生徒が集められた。その中には徐霊を見たいという男子生徒の姿もある

悠木かなで「どうにかならないかな？ここの中には恐くて夜中にトイレにも行けない人もいるっていうんですよ」

3人の中で一番小さいキョンシーのような格好をした女が言った

「まかせるネ〜私たちに任せれば大丈夫ネ〜」

およ、ちよつとそこの人・・・それにそこの人とそことそこの人・・・

「・

優子「私のこと？」

千雨「私もか？」

玲子「私も・・・？」

アリス「・・・私もですか？」

女「可哀想ヨ、とっても可哀想ヨ」

玲子「何が可哀想なのか言ってくれませんか？」

女「ヒソヒソヒソヒソ・・・」

キョンシーの格好をした女は包帯男に耳打ちで何かを伝える

包帯「うんうん・・・そうだな、あいつら生涯独身っぽいよな。あいつらもうダメだな」

4人「」「」「殺していい！？私たちあいつらを殺したいんだけど！
！」「」「」

包帯「まあ、冗談はこれくらいにしておきまして、ざっとこの屋敷を見させてもらいましたが、ここには相当悪質なユーレイがいます。とても強力なユーレイの波動を感じますな」

女「まあ、とりあえず徐霊してみますかネ、これは料金も相当

高くなるご利用ネ〜」

あやか「ところで、その幽霊というものはどういったものですか？」

女「うんとねえ〜工場長」

バコツツツ!!!

包帯男が女の頭を思い切り叩く

包帯「エエツト〜ベルトコンベアに挟まれて死んだ工場長の霊ですウ」

その言葉にラウンジはキョトンとする

美鈴「いや、みんなが見たって言っているのは金髪の女の霊なんだが・・・」

その言葉に最後の僧侶のような格好をした中肉中背の男が口を開く

僧侶「間違えました・・・ベルトコンベアに挟まれて死んだ工場長に似ているって言われたのが苦で自殺した外国人女性の霊です・・・」

美緒「長いわね!?工場長の件いらなくない!？」

包帯「とりあえずお前、名前をスギサキいうたな」

包帯男は立って様子を見ていた男子生徒の一人、鍵のほうを見て言う。

鍵「ええ・・・そうですね、ですけど何で僕の名前を?？」

包帯「私たちはなんでも見えマ〜スから不可能なことはありませんのデス」

僧侶「あなたの身体に霊をおろして徐霊します・・・」

包帯男、キョンシー女、僧侶男は杉崎を囲む

平沢唯「徐霊ってどうやってやるの〜?？」

包帯「この男ごとしばき倒しますっ」

鍵「なっっ!!そんなんだったら誰にでも出来るじゃないか!!」

女「フォツツツ!!」

鍵「グフオオオオオオ!!」

鍵は鳩尾をグーパンチでやられ気絶してしまった

包帯「ハ〜イ、入りましたよ〜!入りましたよ!!」

雄二「入ったには・・・入ったな」

駆「ああ、ボディーブローが入ったな・・・」

女は二人羽織の要領で気絶している鍵の腕を動かしながら言う

女「違うネ、私入りました。

みなさん、今日でこの工場潰れますが責任は全て私が取りまゝです」

「「「「工場長が入ったアアアア!!!!!!」「「「「「

いるはずの無い工場長の霊が入ったことにラウンジは騒然となる

包帯「バカ、何やってんだ！ベルトコンベアに挟まれて死んだ女だ、間違えてんじゃねえよ」

僧侶「ベルトコンベアに挟まれて死ぬ女なんているわけないでしょ！！ベルトコンベアに・・・あれ・・・？」

包帯「もういい、普通に女やって誤魔化せ」

女「むりヨ、普通に生きるってというのが簡単そつで一番難しいのヨ！」

包帯「いまは誰もそんなリアリティーを追及してねえから！」

女「うるさい、ミイラ男！お前の格好にリアリティーがなさすぎネ」

口論を始める徐霊師たち、周りにいる人たちはただそれを見つめる
包帯「何だとゴラ!? こういつの着けていたほうがミステリアスだ
ろーが!」

そして、取っ組み合いの喧嘩を始める

僧侶「アアアツツ!! お前らもう止めるヤアア!!! 仕事ですよ!! ちよつと聞いてんの2人とモ!」

スルリ

パサツツ

取っ組み合っていたため、顔を隠していたものが剥がれていく

「「「「「あ……………」」」」」

3人の正体は銀時、新八、神楽であった。

優子・玲子・千雨・アリス「「「「「これはどういつつもりでエエ
エすウウウかアアア!」」」」」

4人が銀時たちに問い詰める。まあ、あんな事言われちゃ黙ってる
はずがないですね

その後、3人はラウンジの衆人環視の中で逆さまで吊るされていた
新八「悪気はなかったんです……お金もなかったんです……
こんなに暑い夜が続いているし、幽霊噂があったから儲かるかな
なんて思いまして……」

銀時「それに、俺って幽霊見えるからさ……これをみんなのために
役立てたいって思ったんだよ

見えてるよ……紅葉や、霞や石動や赤井の後ろに恐ろしい顔をした
ババアの幽霊が……」

知弦「ああ……、わたしたちよく駄菓子屋でアイスの当たり棒よく
偽装していたから……」

銀時「心配いらねえよ、俺たちを解放して水を与えてくれたら退治
してやるよ」

愛歌「分かったわ、じゃあこれ鼻から飲んでくれる？」

愛歌はスプライトを取り出し、銀時の鼻の中にスプライトを流し始
めた

銀時「イタタタタ!!何コレ!?何この感覚、この懐かしい感覚!
昔プールでおぼれたときの感覚!？」

神楽「銀ちゃん、私頭が爆発しそうバーンって、死んじゃうアル・
」

銀時「おい、いたげな少女が頭爆発しそうだって言っているぞ！
！助けてやれよ！！この小説終わっちまうぞ！？」

美緒「大丈夫よ、次回からは私たち4人が主役の“Sな乙女たち”
を書かせるから」

りんご「皆さんに楽しみに待っていて欲しいですの」

新八「ダメだこの人たち、僕たちを殺すつもりだ」

銀時「ねえ助けてよ！！ねえ！！」

渚「皆さん、3人を解いてあげましょうよ」

木乃香「4人がドSに目覚めてしまつとちゃうのん？」

涼子「いや、りんごは元々こうだから」

嵐子「美緒さんも・・・元々こうです」

その後しばらくして銀時たち3人は解放された

神楽「ウウウ・・・気持ち悪いヨ・・・」

気持ち悪がる三人に一人の女性が声をかける。

第一生徒会会長、剣道部部長の橘高冬琉である

冬琉「本来あなたたちは敲き切られて当然だけど、今はあなたたちを相手にしている余裕なんてないの、帰ってくれる？」

徐霊は鷲ノ宮さんに任せるから」

冬琉の言つとおり、光の巫女である伊澄は寮内で数人と共に幽霊の搜索を続けていた

明日菜「伊澄ちゃん、幽霊いるの？」

伊澄「ええ、相当悪質な幽霊がいます」

咲夜「それでその幽霊はどこにおるん？」

伊澄「！！！！こつちです！！」

伊澄は何処かへ向かって走り出した

美波「こつちつて・・・」

愛紗「大浴場の方向だな」

伊澄たちは大浴場に到着した

伊澄「いました！！あそこです！！」

伊澄が指差す先、そこにいたのは！？

リン・レジオスター「やあ、君たち。お風呂に入りに来たのかい？」

リン・レジオスター、この学園で自縛っている元神父の幽霊である。しかし神父であったにもかかわらずその頭の中は・・・

ヒナギク「神父さん・・・一体何しているんですか？」

リン「なに、女風呂を覗こうとしていただけだ」

煩惱まみれであった

「「「悪質な幽霊がいたアアア！！！！」「「「

リンは伊澄たちによりボコボコにされて女子寮の外へと追い出された

明日菜「それで、ほかに幽霊の気配は？」

伊澄「残念ながら・・・それが、ないんです」

冬琉「分かったわ、ありがとう」

鷺ノ宮さんからの連絡だけど、幽霊はいないそうよ

だからあなたたちはもう帰って・・・」

冬琉は携帯電話の電源を切っている

銀時「でも大丈夫か〜？幽霊騒ぎがあった寮だぜ？怖くてまとも
に生活できないんじゃないの？」

神楽「トイレについていってあげよつか〜？」

六夏「なっっ！！私たちがバカにするんじゃないわよ！！」

くりむ「ありがと〜。トイレの前までお願い」

知弦「ちょっと、アカちゃん！？お願いするの！？」

くりむ「うん、だってずっと我慢してたんだもん」

神楽「ほら、行くヨ？」

くりむ「うん！！」

六夏「ねえ、桜野！あなたの人生それでいいの！？あなたの人生そ
れでいいの！？」

くりむは神楽に付き添われてトイレへと向かっていく

トイレ前

くりむ「待っててね、ここで待っててよ？」

神楽「分かったから、漏らすんじゃないヨ」

くりむはトイレの中へと入っていく

そしてトイレを済まして出ようとしたその時・・・

くりむ「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!キヤアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

寮の中に響くくりむの悲鳴

その声に生徒が集まってくる

神楽「どうしたの？生理で思ったより血が出たとか??？」

知弦「どうしたの!?アカちゃん、平気?」

神楽「生理で思ったより血が出たって」

銀時「ハア？なんだそりゃ」

冬琉「とにかく、このドアを開けてみましょ！」

バタンツツツ！！！！

そこには、くりむが倒れていた。

金髪の女、金髪の女と言いながら・・・

銀時「嘘だろ、幽霊はいないはずだって・・・」

幽霊は居ないと判断されたのに新たな犠牲者が・・・

一体、女子生徒を襲う犯人は誰だというのか・・・

次回へ続く

第十一話：お化けなんてなくいさ、お化けなんてウツンさ

くりむ「金髪の女アア・・・こつちに・・・くる・・・」

くりむは先に呪われたと思われる8人と同じ部屋に運ばれていた

知弦「しつかりして、アカちゃん。あと2年で二十歳なんだからみ
つともないわよ、寝言だなんて」

銀時「これは・・・あれだな。お前らが昔虐めていた女の幻覚でも
見ているんだろ」

知弦「アカちゃんたちがそんなことするわけないでしょ!!」

銀時「じゃあ、お前らが虐めていた女が嫌がらせに来てんだ」

六夏「そんなことしたことないわよ!!」

銀時「じゃあ、何って言うの?」

冬琉「知るわけないでしょ!!」

すると、部屋に一人の女が入ってきた

ヒナギク「今、刹那さんと龍宮さんに萱島君にも協力してもらって
幽霊を探してもらっているけど、現在のところ鷺ノ宮さんも含めて
4人とも幽霊は居ないって判断らしいわ」

新八「そうですか・・・誰が姉上をこんな事に・・・」

真冬「お姉ちゃん……」

鈴々「お姉ちゃん……早くよくなってほしいのだ……」

姉妹が呪われた者は真摯に兄弟たちの世話をしている

銀時「でも、幽霊が居ないなら一応は一安心だな。俺、行く場所あるから後は頼むわ」

初春「行く場所ってどこに行くんですか？」

銀時「大通りにある“スナックお登勢”だ。お前らだって知ってんだろ？今日は先生だけで貸切にしてもらってな、前々から飲むつもりだったんだよ」

優人「なっ……こんなときに何、酒飲もうとしているんですか！
！」

日向「先生、空気読めなすぎじゃねえか？」

銀時「何言ってるんだ。空気は読むものじゃなくて吸うもんだ」

律「これ以上、幽霊の犠牲者が出たらどうするんですか！！」

銀時「……分かった、ならここに連絡先書いておくからなんかがあつたらここに連絡するか、直接ここに来い」

銀時はスナックお登勢の住所と電話番号を書くと、

「じゃあ、待たせてっから」

酒を飲みに出かけていった

新八「これからどうするんですか？」

冬琉「どうするも、こうするも・・・」

立華かなで「私たちでこの寮を守るしかないわ」

美鈴「これ以上増えなければいいのだが・・・」

悠木かなで「そうだね・・・」

しかし、彼女たちの願いはむなしく脅威は少しずつ女子寮を襲い始めていた

金髪女「フフフ・・・これからが本番だ。これも私の計画のために・・・」

女は女子寮を眺めると・・・どこかへと消えていった

時間は3時間ほどすぎて21時半過ぎ

酒を飲みに行った銀時たちはまだ戻ってなく、一緒に酒を飲んでいたのである。寮の交流会の見回りに来るはずの雪路や小萌、愛穂たちの姿もない

今回の事件はいずれも女子生徒が一人にいるときに起きているので2人以上、なるべく多くの人数での団体行動をするように呼びかけていた。

また、このような非常事態に近い状態なので今の女子寮に居る男子生徒の人数はいつもの2〜3割ほど多かった

金髪女「こんなことをして生徒を守ったつもりか・・・焼け石に水だというのに」

女は大浴場を眺めながらそう呟いた

そのころの大浴場 更衣室

希「いやあ、文乃も早く。お風呂入りに行く」

文乃「ちょっと待って・・・私忘れ物しちゃったみたい」

叶絵「部屋までついていこっか？」

文乃「いいわ、叶絵たちは先に入っているわ。部屋まですぐだし」

千世「分かったから、早く戻ってきなさいよね」

希と叶絵と千世の3人は先に風呂へと入っていく。

この時、更衣室内には文乃を含め4人ほどしかいなかった

文乃（さて、取りにいかなくちゃ・・・）

更衣室のドアを開けて外へと出ようとする文乃。

その前に立っていたのは・・・

金髪女「2年B組、芹沢文乃か・・・」

文乃「だ・・・誰よアンタ。何で私の名前を知ってるのよ!？」

金髪女「さて、何故だろうな」

文乃「んむッッ」

金髪女は文乃の口を塞ぐ。しかしそれで黙っている文乃ではない

文乃「二回死ねェ!!」

彼女は口を塞がれながらも大声を出し金髪女に殴りかかろうとするが金髪女はそれをもう片方の手で掴む

金髪女「私に抵抗しようとしても無駄だ」

そういうと、金髪女は文乃に何かをした。

そして文乃は倒れてしまった・・・

涼子「・・・てめえ、芹沢先輩に何てことしやがった!!」

更衣室にいた残りの3人の内の1人涼子が金髪女に詰め寄る

金髪女「今度は1年A組、大神涼子が・・・」

涼子「てめえがああ金髪女か？」

金髪女「いかにも・・・それだったらどうするっていうんだ？」

涼子「どうするもこうするもただ倒すだけだ!!」

彼女も文乃と同様、金髪女に殴りかかろうとする。しかし、

「フッフ、殴りかかろうとするとはウチの学校には勇気のある奴が多いな・・・何も考えないバカで無謀な奴とも言えるが・・・」

金髪女はまた涼子に何かをして、涼子も倒れてしまった

金髪女「残りはお前らか・・・」

金髪女は残りの2人に目をやる

そこにいたのは

「島田美波・・・芙蓉楓・・・」

金髪女は2人の元へ近づいていく

金髪女の手により2人が目の前で倒されたのを目撃してしまったため、彼女たちは恐怖で何もすることが出来なかった

「「いやあああああああ！！！！！！！！！」」

悲鳴を上げる以外は・・・

金髪女「悲鳴を上げてても無駄だ」

金髪女は2人にも文乃や涼子にした事と同じことをして去っていった
そこには襲われてしまった4人の倒れた姿しか残っていなかった

そのころ、

明久「この声は、美波!？」

稟「楓の声もした!」

どうやら美波と楓の悲鳴は寮内に響いていたようで・・・

秀吉「金髪女が現れたのか？」

ハヤテ「とにかく行って見ましょう!!」

女子寮内にいた男子たちは声のするほうへと走り出した

新八「ええ!!金髪女だったらとっ捕まえてやりますよ!!」

巧「この声の方向って・・・」

亮士「大浴場っスね」

彼らが駆けつけたとき、大浴場の更衣室のドアは開いていた

そして彼らが見たものは!!

康太「・・・!!!!ブシャアアアアア（鼻血）」

浦島太郎「お・・・オオオ・・・なんて光景だ・・・」

「「「「「イヤアアアアアアアアアア!!!!!!」」」」」

大浴場から更衣室の悲鳴を聞きつけ更衣室にいた一糸纏わぬ女生徒たちの姿であった

ピンポンパンポーン

ただいま、女生徒たちによる男子生徒へのフルボッコタイムのお時間です。

しばらくお待ちください

しばらくして、襲われた4人はくりむたちと同じ部屋に運ばれていた

被害者看護室

立華かなで「今度は一度に4人も・・・」

六夏「これで13人目よ！一気にやられて団体行動もだめならどうすればいいのよ！！」

冬琉「誰か、このことを先生たちに連絡したのか？」

知弦「だめよ、スナックお登勢に連絡したんだけどお登勢さんが出て、どの先生も酔っ払っちゃってるみたい。電話の向こうから“ヒーーーー”って叫んでる声でしたわ」

神楽「イワさん（イワンコフ）も一緒に飲んでたアルか・・・」

知弦「それでお登勢さんに先生たちをこっちに來させるように頼んだんだけど、酔っっちゃってるからアテにはならないわね」

愛紗「このような、生徒の一大事だというときに暢気に宴会などし

て・・・」

千世「団体行動するのも駄目、先生たち呼ぶのも駄目ってどうすればいいのよ!!」

ネリネ「あの・・・」

ヒナギク「どうしたの、ネリネさん？」

ネリネ「私たちで犯人がどういった人なのか考えてみませんか？何か新しいヒントも出てくるかもしれませんし」

その部屋にいた者はしばらく考えた後、

美鈴「そうだな、今私たちに出来ることはそれしかないようだし」

彼女たちは今回の事件の犯人について考え始めた

りんご「まずは、その犯人の容姿ですの。容姿は髪は金髪で決定よろしいですね？」

立華かなで「ええ、鬘をかぶって犯行に及んでいる可能性は否定できないけど」

六夏「それ以外に、何か容姿に関する情報は無いの？」

初春「それがありません。何度も調べてみたんですが皆さんが襲われた場所の監視カメラが襲われた時刻の前後1分間人為的にストップしていたみたいで……」

知弦「でもそれって、犯人が監視カメラを操作できるってことは幽霊じゃないってことよね？」

ゆり「そうなるわね、幽霊だったら物に触れることは出来ないから」

冬琉「次は被害者の共通点から犯人を導き出してみましよう」

神楽「被害者の共通点アルか……特に無いと思うけど……」

知弦「性格もバラバラ、見た目もアカちゃんみたいなお子様体系の人から大神さんみたいな背の高い人まで……」

鈴々「胸のサイズもバラバラなのだ」

律「中の人、つまり声優さんも……一部除いてバラバラだね」

希「文乃と佐天さんは一緒だけど……」

ヒナギク「犯行時間も場所もバラバラね……」

悠木かなで「被害者にもこれといった共通点はなしか？」

紬「それって、無差別の犯行ということになりませんか？」

「『無差別の犯行……』」

紬が言った言葉をそこにいた誰もが呟いた……

誰もが恐れていたことであつたからだ

誰が襲われると分かつていたのなら対処はいくらでも見つかる

しかし、誰が襲われるか分からないとその対処の方法は激減してしまい、犯人を取り逃がしてしまう可能性が多いからである

冬琉「まだ何か、思いつくことは無い？」

瑞希「怪談話……木下君が昨日男子寮で話した怪談話がこの事件とそっくりだって明久君たちが言っていましたから……その怪談話にヒントが隠されているのではないのでしょうか……」

美鈴「なるほど……ではその木下という男をここに呼んできてくれるか？」

瑞希「はい！」

しばらくして、秀吉は瑞希に連れられやってきた。

知弦「木下君、君が昨日男子寮で話した怪談話、この事件にそっくりだそうね」

秀吉「う・・・うむ、なんかそのようじゃの」

立華かなで「私たちに、その内容を話してくれない？」

秀吉「わかったのじゃ」

秀吉は昨日話した怪談話を話し始めた

「今日みたいに蚊がたくさん飛んでいるまだ春なのに暑苦しい夜のこと・・・

とある少年がスイミングスクールの帰りに自分の通う小学校の前を通ったのじゃ

その少年、帰りに友達とゲームセンターやモスバーガーに行っていたからあたりは真つ暗になって時間も11時を過ぎておった・・・母ちゃんにぶつ飛ばされるから早く帰ろうと思いきその少年は急ぎ足で歩いておった

ふと小学校のほうを見ると真夜中にもかかわらず、そこには金髪の女がおったそうな・・・

もう真夜中なのに何をしているんだろうと思っただけその少年は金髪の女に近づいていったのじゃ・・・

その少年は聞いた・・・こんなに遅くに何やってんの・・・その金髪の女はニヤツつと笑って言ったのじゃ・・・」

美琴「それで・・・何て言ったの」

秀吉「お前を喰うためジャアアアア！！」と言ってその男の子の元に瞬間移動して羽交い絞めにして腹に大きな穴を開け内臓を食ってしまったのじゃ。まあよくある怪談話じゃな」

冬琉「なるほどね・・・でも今回の事件とは関係はなさそうね。被害者はうなされているだけだから・・・」

悠木かなで「となると、これ以上の手がかりは無くなっちゃったね」

六夏「そうね・・・」

部屋にいる人たちが新たなヒントが無いか考えていると・・・

プルルルル、プルルルルル

突然電話が鳴った。

知弦「沖田君からね」

電話を掛けてきた主は寮の正面玄関で見張りをしていた男子風紀委員の隊長、総悟であった。

知弦「もしもし、沖田君？」

総悟「ああ、桂先生や旦那（銀時）が戻ってきたんだが、完全に酔っ払って動けねえみたいだから介護お願いしまさア」

知弦「分かった、今から行くわ」

知弦は携帯の電源を切ると

「先生たちが酔っ払ってここに戻ってきたわ」

と言った。

六夏「たつく、何で使えない存在になったくせに戻ってきたのよ」

ヒナギク「お姉ちゃん・・・なにやってるんだか」

冬琉「仕方ないわね、私たちは先生たちの介護をしにいくから被害者の看病お願いね」

そういうとヒナギク、知弦、六夏、冬琉、立華かなで、悠木かなで、美鈴は酔っ払って動けない先生たちの元へと向かっていった

しかし、その間も金髪の女は活動を続けようとしていた

金髪女「まだ足りぬ、もっと欲しいな」

もう一度、被害者看護室にカメラを戻そう

残されている者で看病を続けていると、患者に新たな異変が見え始めていた

それは窓を開けて空気の入れ替えをしようとしたときのこと・・・

律「な・・・なんで・・・」

平沢唯「りっちゃん、どうかしたの？」

律「……窓にうつっているはずの澪たちの姿がうつって……ない……」

律の言葉に窓を見てみると外が夜で暗闇になり鏡のようになってい
る筈の窓に澪たち被害者の姿が全く写ってなかったのだ

初春「キヤアア!!！」

美琴「今度はどうしたの!？」

初春「飲み物を飲ませようと思って佐天さんの口をあけたら……
歯が……歯が……」

初春の言うとおり、佐天の歯を見ると犬歯が他の歯より大きくな
っていた

他の患者も診てみたところそれは全員に当てはまっていた

一階 正面玄関

ここでは酔っ払っていた先生たちの介護に負われていた

雪路「まだまだ、足りないわアア・・・もつと飲ませるオオオ・・・」

ヒナギク「お姉ちゃん！！二日酔いになるわよ！！！」

イワンコフ「そうね、このままじゃ二日酔いに・・・な・・・な・・・

ならなーーーーい！！！！！」

「「「「「ならないのかよ！！一本とられたよ！！！！！！！！！！」

酔っ払っているはずの先生全員でツツコミ

銀時「まだまだ・・・後10軒は梯子酒だ〜」

小萌「まだまだですね〜坂田先生。私はあと20軒はいけるのですよ」

美鈴「先生、いい加減にしてください」

愛穂「何いってんの、ちゃんとしてんじゃない！！しんぱいじゃないじゃない！！！」

冬琉「心配っていう字を平仮名で言う人をちゃんとしてるとはいえませんが」

総悟「この先生たち、殺していいか？」

悠木かなで「だめだよ、一応こんなのでも先生は先生なんだ・・・」

かなで「ヒナちゃん!!（陽菜のこと）」

それぞれ、倒れている者の名前を呼ぶが返事は無い

金髪女「ほお、皆さんおそろいか・・・」

冬琉「あなた・・・この子達に何をしたの・・・?」

女「何つて、こんな夜遅くまでこんなところで遊んでいたからお仕置きをしたまでだ・・・」

六夏「アンタ、金髪女ね?」

女「そうだ、いつもお前らが噂しているその張本人だよ」

知弦「何で、アカちゃんたちを襲ったの!?!」

女「それは私の計画のためだ・・・お前らの頭では理解できない偉大な計画のな」

銀時「誰だてめえは・・・」

雪路「私たちの生徒を傷つけて・・・」

小萌「許さないですよ」

美鈴「先生!!」

ラウンジの入り口の一番後ろにはさっきまで酔っ払っていたはずの先生たちがいた。

金髪女「フッフ、私の名前は・・・」

エヴァンジェリン・A・Kマクダウェル。ドールマスター人形使いの吸血鬼だ」

ハヤテ「エヴァンジェリンって・・・ウチのクラスの!?!」

新八「でも、身体のサイズが・・・」

たしかにエヴァンジェリンと名乗る女は身長が高く胸も大きい。いつものエヴァンジェリンとは違う

エヴァ「これは幻術だ・・・このとおりな」

ボンツツという音と共に彼女は元のサイズに戻った

総悟「なるほど・・・ウチの生徒だったって訳か・・・わりいが死んでもらいますア」

総悟は何処からかバツーカー砲を持ち出しそれをエヴァンジェリンに向けて撃ちつけた

しかし・・・

「「「「「私たちの主を襲^{マスター}う者・・・ユルサナイ・・・」「」「」

そこには、看護室で手当てをされていたはずの被害者13人の姿があった。

その手からは魔法陣が出ていた

冬琉「魔法障壁!？」

知弦「何でアカちゃんと深夏が魔法を使っているのよ」

エヴァ「さて、どうしてだろうな・・・」

冬琉「生徒会会長として学生生活の邪魔をするものは倒させてもらう!」

冬琉はエヴァンジェリンに斬りかかろうとする。冬琉には自信があった。なぜなら彼女は元演操者^{エクス・ハンドラー}であり、魔力を無効化するからであった。

ガシツツツ!!

しかし、斬りかかろうとした冬琉の手首を誰かが掴む

茶々丸「橘高冬琉さん、元演操者ですね。私がお相手いたしましたよ
う。ここで鬩えるのであればの話ですが・・・」

茶々丸はラウンジの様子を見ていた人混みに紛れていた。そのため
今の冬琉と茶々丸の周りには人がたくさんいる。

冬琉「くっつ・・・」

エヴァ「さて、今日はひとまずこれで退散するとするか。

この女共は私が預かっておく・・・行くぞ!!」

「「「「はい、マスター」「」「」

エヴァンジェリンと茶々丸と13人は倒れているナギたちを抱え
と魔法の射手でラウンジの窓を割り去っていった

今日はここまで

金髪女の正体はエヴァンジェリンであった。彼女の計画とはいった
い何なのか!?

被害者18人はどうなってしまうのか!?

次回へ続く!!

第十一話：お化けなんてなく、いさ、お化けなんてウツンさ（後書き）

ちなみに被害者18人がどうやって選ばれたのかですが、それには
きちんとした理由があります。それはこの幽霊編（・・・いやもう
吸血鬼編ですね）の最後に書こうと思います。
理由は至極単純なものです・・・

第十二話：モーセって潮汐作用を利用したんだと思うよ

金髪の女の正体はエヴァンジェリンであった。

次の日　　2年A組教室

銀時が教室に入ってくる

銀時「ホームルーム始めっから発情期みたいにギャーギャー騒ぐな・
・っつて、珍しいな。皆席に座って黙ってやがる」

確かに、教室の中はいつもの何倍も静かであった

新八「あんなことがあったんだから仕方が無いですよ」

ゆか「まさか、エヴァちゃんが真犯人だったなんて・・・」

ひかり「信じられないです・・・」

ホームルームが始まっても、襲われたナギや楓たちや事件の真犯人である、エヴァンジェリンやそのパートナーである茶々丸の姿は教室には無かった

47人中8人が欠席である

ハヤテ「銀さん、これからどうするつもりなんですか？」

銀時「どうするってたって・・・」

優子「どうするもこうするも、退学よ！クラスメイトに危害を与え
るなんて考えられないわ！！」

玲士郎「僕もその意見に賛成だ。誘拐された島田や椎名を解放した
後、その手段に出たほうがいいと思う」

智代「私も賛成だ。せっかく同じクラスの仲間となつたのに残念だ
が今はそれしかないだろう」

少しずつ出てくる、エヴァンジェリン退学賛成者。

しかし・・・

木乃香「エヴァちゃんは退学させることはできへんえ」

木乃香の言葉に、周りは一瞬、「この人は何言っているのだろう」
というような空気に包まれる

紅音「近衛さん、退学させることが出来ないって一体どういうこと
ですか？」

鍵「彼女も実は三千院だとかと同じ特待生で、学園側がどうしても
残っていて欲しいと思っっているとか」

明久「でもそうなら特待生はどんな罪を犯してもOKってこと
になるんじゃないの？」

リシアンサス（シア）「そうなるよね。でも悪いことをしたら裁かれるべきだし」

木乃香「ちやうちやう、エヴァちゃんは学校を出ることの出来ない魔法にかけられてしもつたんや。17年も前から」

歩「17年も前って、私たちが生まれるのと同じ頃の話じゃないかな!？」

木乃香「せや。そうやったなあ、明日菜、せつちゃん?」

刹那「ええ、そうです」

銀時「・・・おまえら、詳しく話してもらえるか」

明日菜「うん、分かったわ」

明日菜たちは教壇に立つと、エヴァンジェリンのことについて話し始めた。

明日菜「この話は、ネギから聞いた話なんだけど・・・」

17年前、真祖の吸血鬼である彼女は魔法世界では600万ドルの賞金首になるほどの恐怖の対象になっていた。それは寝ない子ども

を大人が『エヴァンジェリン闇の福音』が襲いに来るぞと言って寝かせるようにさせるほど・・・

けれども、ネギのお父さんのナギ・スプリングフィールドに悪事を止めさせるために「登校地獄」という呪いにかかれこの学園に封印させられた。ナギの魔力はとても強力で誰もその呪いを解くことはできずにナギ本人も失踪してしまったためこの学園に17年間女生徒として登校し続けているのである。

だから彼女は呪いのせいでこの学園の敷地から出ることが出来ないのである

ちなみに17年間となっているのはネギまのキャラクターは原作から2年が経過しているという設定だからである

朱湮「なるほどね、だから退学させたくても出来ないのね」

明久「登校地獄か・・・嫌だな、そんな呪いがかけられたら」

咲夜「寝ない子を大人がそんなふう言うって、ナマハゲみたいやな」

優子「そんな人が私たちと机を並べていたなんて」

おつう「でも、17年前に賞金首になっていたって・・・」

刹那「ええ、見た目は俗に言う幼児体型ですが不死身の体で何百歳も生きています」

「『『『えええー！』』』」

不死身であること、何百歳も生きていくということにネギまキャラ以外のキャラクターは驚いている。

明日菜「確か百年戦争の時代の生まれだつて言つてたよね？」

麻弓「百年戦争！？つて何時だつて？」

ネリネ「百年戦争は一般的に1337年のエドワード3世によるフランスへの挑戦状送付から1453年のボルドー陥落までの116年です」

明久「つてことは、もう1000歳は越えているつて事！？」

雄二「違えよ、600歳前後だ。お前どうやつたらそんな計算になるんだ！？」

銀時「吸血鬼の真祖か・・・それって俺らが知ってるような撃退法も効かないとしても強いんじゃないか？」

刹那「エヴァンジェリンさんはとても強いです。普段、魔力は呪いのせいで封じられていますドールマスターが、その最弱状態でも達人級の合気柔術が使えたり人形使いのスキルで人を操ることが出来たり、風紀委員・・・いやそれ以上の戦闘能力を持っています」

銀時「最弱でも風紀委員並みの強さかよ・・・」

ハルナ「確か、自分が本当の能力を取り戻したらチートレベルでの学園には私に勝る者はいないつて言つてたよね？」

雄二「チートって・・・」

エヴァンジェリンへ対する恐怖が次第に強くなっていく。

それを治めようとするかのように明日菜は話す

明日菜「でも、心配いらないわよ。ネギや私たちにキツかったけど魔法だとかの師匠になってくれたし、中3の京都修学旅行で木乃香がさらわれて私たちがピンチになるっていうことがあったんだけどそこで駆けつけて来てくれて悪党どもを退治してくれたことがあったわ。だからエヴァちゃんは根はいい子なのよ」

銀時「なら、何であんなことをしたんだ？」

明日菜「それが私たちでも分からないのよ。エヴァちゃんは女子供の弱者は襲わない主義って言ってたし・・・きっとエヴァちゃんのことだから何か裏があると思うけど・・・」

銀時「・・・なら、直接会って確かめるしかねえな」

賢久「銀さん、エヴァンジェリンの元に行くのか？」

銀時「ああ、誘拐された奴の無事も確認したいしな」

紅音「でも、会ってくれるかどうか分かりませんよ？」

銀時「だけどもまず会わなきゃ話は始まらないだろ？」

銀時の発言に触発されたのか・・・

新八「・・・僕も行きます。姉上を返してもらうために」

ハヤテ「僕も行きますよ。お嬢様が心配ですから」

雄二「俺も行く」

稟「俺もだ。楓を取り返さなくちゃな」

次々とエヴァンジェリンの元へと向かうと言う者が出てくる

銀時「よし、なら今日の放課後に早速行くぞ!!」

「「「「オオオオオオー!!!!」」」」

瑞希「ところで、気になっていることがあるんですが・・・」

夕映「どうしたんですか？」

瑞希「どうして美波ちゃんたちは昨日魔法を使っていたんでしょうか？」

鍵「確かに、それは俺も不思議で仕方が無かった。何で魔法使いない深夏が魔法を使っていたのか」

夕映「その事ですか。私が説明するです。

魔法というのは精神力と術法により空気や水などの万物に宿るエネ

ルギーを自らの力に変換したものが魔法となるです。魔法を自由に使うためには精神力などの修行が長時間必要ですが、魔法世界などの魔力で満ちた場所や魔法使いと契約するなどすると魔法の使いえない人でもそれが触媒のような作用をして魔法を使えるようになることがあるです。

椎名さんや島田さんたちの場合は後者となるです」

鍵「なるほど。そういう訳があったのか」

瑞希「エヴァンジェリンさんに血を吸われたから魔法が使いやすい身体になったというわけですね」

これで、深夏や美波が魔法を使えた理由が分かっていただけであらうか。

そして放課後、銀時たちは誘拐された者たちの救出およびその交渉、今回の犯行に至った理由を聞き出すためにエヴァンジェリンの家へと向かっていた。

銀時たち2・Aのクラスメイトのほかにも、冬琉、かなで、リリイたち生徒会役員、数人の風紀委員、その他諸々の姿があった。

山の中の舗装されていない土の道を歩くこと数分、エヴァンジェリンの家が見えてきた。

家は2階建てのログハウスのような木造の建物であった。

銀時「ここが、エヴァンジェリンの家か・・・」

木乃香「エヴァちゃん、家におるかな？」

明日菜「どうだろうね。別荘にいるかもしれないし」

総悟「別荘って、あの女そんなものまで持っているのか？」

刹那「ええ・・・この家の中に」

ハルナ「別荘っていうよりお城だけだね」

新八「・・・そんなものがあるようには見えないんですけど」

夕映「まあ、それは今回の話とあまり関係が無いので省略します」

冬琉「なら、呼び鈴鳴らすわよ」

リンリンリン

玄関の横にっていた呼び鈴用の鈴を鳴らす

しばらくして、ドアが開いた

「「「こんにちは、皆様方」」」

そこには、誘拐されたはずの文乃、美波、深夏の姿があった

その後ろにはその他の誘拐されたものの姿もある

茶々丸は家の中へ入っていく

ゴスロリメイドたちは映画『十戒』の紅海のワンシーンのごとく茶々丸に道を開ける

茶々丸「皆さんもどうぞ」

彼らは茶々丸に言われた通り、彼女の後に続く

リビングルームに入る。そこはファンシーグッズや人形などが置いてあり、とても吸血鬼の部屋とは思えない

そして、リビングルームのソファーには……

エヴァ「やはり来たか……」

真犯人、エヴァンジェリンがいた

次回へ続きます。

第十二話：モーセって潮汐作用を利用したんだと思うよ（後書き）

皆様の声にお応えして、キャラクターを少し増やしました

光軍さんのご意見より、めだかボックスのキャラクター。

バルディッシュさんのご意見より、吹寄制理（とある魔術）、ギンガ・ナカジマ（リリカルなのは）。

tamさんのご意見より、神のみぞ知るセカイのキャラクター。

を追加させていただきました。

本編で登場させるかは未定ですが・・・

なお、吹寄制理は原作を重視して、2年生ではなく、当麻たちと同じ1年生にさせていただきました。

また、生徒・教師名簿の場所にイメージOP・ED曲を書かせてもらいました。

そちらもご覧ください。

第十三話：己の魂を護るために

茶々丸「どうぞお座りください」

茶々丸に促されるように、銀時たちはエヴァと対面するような形でソファに座ろうとする。

銀時「お前ら、何か変な事はしていないだろうな？」

エヴァ「安心しろ、ブーブークッションを仕掛けたり、座る部分が突然抜け落ちるだとかの悪戯はしていないからな」

銀時たちは、少し警戒しながらも座った。

ソファに座る人数には限りがあるので、座るのは事前に決めておいた交渉役の銀時、冬琉、かなで、リリイと智代の5人が座り、その他はソファの後ろで立っている

エヴァ「来るのを待っていたよ。いや、待ちくたびれたと言っべきか」

リリイ「それなら話は早い。知っているんだろ、ボクたちが来た目的も？」

エヴァ「ああ、どうせ“生徒たちを還してくれ”とか言っのが目的だろ？」

リリイ「そつだ。なら話が早い。生徒たちを還してもらおうか」

エヴァ「断る。こんなに可愛いくて便利な人形たちを易々と手放されてたまるか」

「人形……」

エヴァの人質に対する人形扱いに周りの人々は声を低くしてその言葉を繰り返した

銀時「お前。こいつらを人形扱いする気なのか？」

エヴァ「ああ、実際今私が操っているからな」

智代「操っているだつて？」

エヴァ「私の人形ドールマスター使いのスキルを使っているからな。最大で半径3キロメートルの300体の人形を操ることが出来る。これくらい容易い御用さ」

立華かなで「ところで、あなたの昨日言っていた偉大な計画って何？」

エヴァ「この前も言ったが教えるつもりは無い。せいぜいお前らの平和ボケした脳で考えるんだな」

明久「世界征服でもしちゃうの？」

エヴァ「フツ、本当に平和ボケしたゲーム脳なんだな今の時代の者

たちは」

秀吉「いや、こんな深刻な時にこういう発想するのは明久だけだと思ふのじゃが」

ウンウン、と周りにいたものは頷いた

明久「ちよつと、何でみんな頷くのさ!？」

エヴァは明久が騒いでいるのを横目で見ながら、

「もし私が彼女たちを連れて世界征服をするとしてどうする?お前らも仲間にしてやるうか?今なら、世界の半分を……」

ドガッッッ!!!

突如、銀時はエヴァに襲い掛かった

しかし、エヴァを襲った木刀は彼女を囲う魔法障壁で跳ね返されてダメージを与えることが出来ない

智代「銀さん!何をしている!？」

銀時「何って、こいつが“世界の半分をくれてやるからどうする?”って竜王みてえなこと言いやがるからよお、バトルモードに突入する前に倒そうと思ってだな……」

冬琉「銀さんも立派なゲーム脳ね」

銀時「ゲーム脳で上等、平和ボケした脳で上等だ。今のこいつ等に俺が宙地大戦で見てきた惨劇やてめえが600年間生きてきた中で見てきた悲劇を見せさせてたまるか」

エヴァ「そうか、お前もたしかここの学生で宙地大戦へと出兵した者の1人であつたか」

宙地戦争とは13〜10年前の3年間、アメリカやロシア、ドイツ、フランスの4カ国を侵略しようと攻め込んだとある銀河系の星々の連合軍や宇宙海賊団“春雨”と地球軍との間で繰り広げられた戦いである

日本も諸外国から要請がありこの戦争に参入し、自衛隊のほか銀時や桂小太郎、高杉晋助などといった戦闘能力の高かった日本の一般市民も選抜されて戦地へと赴いた

この戦争では日本人だけでも約2000人、地球全体で約22万人の死者が出たという

銀時「そうだ。だからそんな目をこいつ等にも遭わせたくねえ。てめえがそういう目にあわせるつもりなら俺は無理矢理にでも奪い返してやる」

エヴァは銀時の目を見つめ、

「お前が生徒を守ると言うのか？」

「ああ」

「なら、その意志がどれくらいのものか見定めてやる。来い!!」

エヴァは目を見開いて銀時を強く見つめた

その直後、銀時とエヴァンジェリンは見詰め合ったまま動かなくな
った

かなで「何があつたの？」

ヒナギク「急に2人とも動かなくなつたけど…」

茶々丸「安心してください、夢見の魔法で坂田先生とマスターの意
識は幻想空間にいます。のどかさんの“いどのえにつき”なら、中
の様子を見ることは可能かと思われませんが」

明日菜「本屋ちゃん、お願い!!」

のどか「はい、アレイアット
来れ」

のどかはアレイファクトである“いどのえにつき”を召喚し、

「坂田先生、坂田銀時さん…様子をお願いします…」

すると、絵日記には文字と絵が浮かび上がり、残された者はそれを
食い入るようになら見つめた。

幻想世界

「な…此処は…」

銀時がいた場所は一度見たことのある場所であった。

それに今の銀時の格好はいつもの教師用の白衣や着物ではなく、白夜叉と言われていた頃の戦闘着である

銀時「この刀は…」

今、銀時が腰に挿している刀、それはいつもの木刀・洞爺湖ではなく銀時の恩師、吉田松陽から貰ったあの刀であった

エヴァ「どうだ？うまく再現できているかな、お前が白夜叉と云われて何人もの宇宙人を斬り続けたであろう場所を」

そう、幻想世界に映し出されていたのは銀時をはじめ、日本人の多くが派遣されていた戦時中の中央アジアの某国の様子であった。

其処には兵士や逃げ遅れた一般市民の屍が何体も転がっていた

「坂田銀時、お前が生徒を守る意志がどれ程あるのかを試すのに最高の場を用意した！幻想空間だから生徒たちへの被害は無い！全力で来い！！」

まあ、その分私も全力でいかせてもらう。お前も聞いたんだろ？私が600万ドルの賞金首の『闇の福音』として怖がられていた全盛

期のな。

魔法の射手！氷の17矢！！」

エヴァからは氷の鋭く尖った矢が放たれ銀時を襲った

ガキイン！！カキイン！！

銀時は持っていた刀でそれを必死に弾く

「てめえ、何で俺にこんなことをする？こんな場所にまで連れてきて」

「どうしてって、お前には無理だと思っからだ。誰かを守ることなんてな」

「理由はあるのか？」

「理由？そんなものは簡単だ、お前はかつて何百、いや何千もの命あるものを斬り続け、屍だけが残ったこの空気を味わっているからな」

「それが理由か？」

「ああ、戦地で死んでいった同胞や一般市民さえ護れなかったお前がなぜ生徒たちを護ると云うか。お前には誰も護ることなんて出来はしないんだよ」

エヴァは話しながらも無詠唱で魔法の射手を放ってくる

銀時はそれを刀で弾きながら話し続ける

「さて、お遊びはここまでにしておこう。ここからが本番だ

氷神の鉄槌！！」

エヴァは空に手をかざすとそこには巨大な氷の塊が生成されて

「お前もこれで終わりだ。誰かを護るといふ戯言をほざくのはな」

ドガツツツ！！！！

銀時へと撃ち付けた

「ゲアツツツ！！！」

銀時はそれを刀で割ろうとして見事割れたものの、破片が降り掛かったのである

「ほお、この程度で済ますとは。殺すつもりだったのに残念だ」

「ハア…ハア…殺す？とんでもねえこと言ってくるじゃねえか」

「まだ話す余裕があるのか…しぶとい奴だ。」

だがその余裕もあと何分もつか」

そこから、エヴァの激しい攻撃が続いた

エヴァは浮遊術を使っているため地上にいる銀時が攻撃をすることはなかなか出来ない。

“氷神の鉄槌”でできた塊を足場にして高く飛び上がり刀を振りかざすものの魔法障壁で阻まれ、ゼロ距離での魔法の射手を受けてしまっ

エヴァの猛攻が始まり、5分経過。

ダメージは銀時のほうが圧倒的に大きく、エヴァのほうは無傷といってもよい。

エヴァ「これで終わりだ!!」

無詠唱の射手が銀時の周りに撃たれる

(なっ…俺を矢の中に閉じ込めたのか!?)

そして、

「来れ虚空の雷薙ぎ払え！！」

雷の斧！！」

魔法でできた稲妻が襲った

「フアアアアツアアア！！！！」

この“雷の斧”が攻撃魔法において中の上レベルといえども、魔法障壁も無い銀時にとっては止めの一発となった。

銀時はその場に倒れこんでしまう

「どうやらその程度のようだ。お前の生徒たちを護る意志というものは…

でも5分も持った。気も魔法も使えないのにここまで持つとは私的には及第点を挙げよう。

だが、大事なものは護れなかったな。お前が護る護るとほざいていたものは…」

銀時はまだうつ伏せて倒れたままで何も言わない

エヴァはその姿を見ながら続けて言う

「どつだ？これを気に闘うのを辞めたら…楽になるぞ

誰かを護るなんて考えなくてもいいんだからな」

エヴァは銀時の刀を取ろうとする

しかし…

「てめえ…俺の刀を取るんじゃない…」

取ろうとしたエヴァの手を銀時が掴む

「むかし…ある人が言ってくれたんだ…

刀は敵を斬るためにあるんじゃない。弱い己を切るためにあるんだと

そして己の魂を護るためにあるのだと

確かにむかし戦争で同胞や一般市民を守れなかったかも知れねえ。

だからこそ俺は護るんだよ。そんなことを二度と起こさないために…
目の前で苦しんでる奴を縛り付ける鎖を断ち切るために…

それが俺の…侍の魂だ！！」

銀時は立ち上がった

エヴァはその姿にニヤリと微笑み…

「侍の魂ね…」

まだそのような魂を持つような奴がいたとはな」

「だから俺は己の魂を護るために刀は手放さない」

「お前、まだ闘えるか？」

銀時もニヤリと微笑み…

「ああ、まだまだいけるぞ」

「なら、お前の魂の強さ全てをその刀に注ぎ込み、来い！！」

エヴァは右手に魔法で剣を創り出した

「私もこの剣でいかせてもらう」

「魔法の剣か…面白れえ」

2人はしばらく見つめあつた後…

「ウオオオオオオオオオ！！！！」

「ウオオオオオオオオオ！！！！」

空に響く掛け声

互いに相手へと向かって駆け出していく

カキイイン！！

すれ違う刀と剣

バタツツツ！！

ダメージを受けたのか、片方は倒れてしまった

倒れたのは…エヴァであった

銀時「ハツツツ！？」

銀時とエヴァの意識は元の世界へと戻された

新八「銀さん！！大丈夫でしたか！？」

ハヤテ「幻想空間の中で戦いを繰り返していたみたいですけど…」

木乃香「エヴァちゃんと激しく戦こうて怪我とかしてへん？」

次々と生徒たちからかけられる銀時を心配する声

銀時「どうやら怪我はしていないみたいだ。ていうか、お前から見ていたのか？」

神楽「バツチリ見させてもらったネ。銀ちゃんがエヴァに立ち向かっていく姿」

千世「絵日記だったから臨場感や緊迫感とかは全く感じられなかったけど…」

りんご「坂田先生、ありがとうございますの。私たちを代表して闘ってくれて」

銀時はその声の数々を片耳で聞きながら、一点を見つめていた

もちろん、エヴァンジェリンをである

エヴァ「どうした、坂田銀時？」

銀時「てめえ、何で最後倒れた？俺にはてめえを斬った感触はこれっぽっちも無かったぞ。」

魔法障壁で防御していたんじゃないか？

神楽「姉御オオ!!!」

新八「姉上!!!」

涙を流しながら、妙に抱きつく2人。

妙「ちよつと、2人ともどうしたのよ？涙なんか流して」

真冬「お姉ちゃん!!!良かった!!!」

こちらも姉である深夏に抱きつく

深夏「どうしたんだよ、真冬。私はなんともねえから心配すんなって」

希「文乃、今までであったこと覚えてない？」

文乃「うん、金髪の女の吸血鬼に襲われたことまでは覚えているんだけど…そこから記憶がいきなりここに飛んじやってて何がなんだから」

初春「佐天さんも覚えてないんですか？魔法を使ったこととか」

涙子「魔法？私が!?!ちよつとそんな冗談言わないですよ」

美琴「冗談じゃないわよ、確かに魔法を使ってたわ」

どうやら、今回誘拐された人は襲われてから開放されるまでの記憶が残っていないみたいです

エヴァ「私が誘拐した奴は初心者レベルの魔法は使えるようになってる。

だが私は教えるつもりは無い。習いたかったらネギ先生にでも教えてもらうんだな」

銀時「あと、聞いておきたいことがあるんだけどよあ」

エヴァ「何だ？」

銀時「何でお前は今回の誘拐事件を起こしたんだ？それにこんなにいとも簡単に開放した？お前の偉大な計画って何だったんだ？」

エヴァ「計画？ああ、そんなものは無いさ」

「「「「へッッッ??」「」「」

エヴァの言葉に周囲は啞然となる

冬琉「なら、何でこんなことを？」

エヴァ「ああ、実はこのかの祖父であるこの学園の校長に頼まれてな。今の風紀委員や教師たちがどれ程の力があるのか検証してほし

いとな。だから本当だったら真の悪役となって誘拐した奴らを使ってこの学園を襲撃するはずだった」

神楽「ならどうして銀ちゃんと闘っただけで止めたアルか？」

エヴァ「実に気に食わない話なんだが作者の都合だそうだ」

新八「作者の都合…ですか…」

皆様、本当に申し訳ございません。もう少し長くなる予定だったのですが…

明日菜「でもまあいいじゃない。みんな無事に戻ってきたんだから」

木乃香「せやな〜。ところでこれからどうするん？よかつたら夕映やハルナが言ってた別荘に行かへん？」

エヴァ「おい、このか！！あの別荘はだな…」

ハルナ「いいわね。みんな〜今から南国リゾートの別荘に行くわよ〜！！」

エヴァ「駄目だ駄目だ駄目だ〜！！ここは私の家だ、お前らの好き勝手にはさせん！！」

明日菜「まあ、こんなことしちゃったんだからお詫びの気持ちで行かせてあげたら？」

茶々丸「言っている事とは裏腹に、マスター嬉しそうですよ？」

エヴァ「うるさーい!!」

こうしてこの後、エヴァの家に来ていた人たちは1時間が1日になるといふ別荘を思う存分楽しみましたとき。

めでたしめでたし…

おまけ

誘拐事件の後の被害者の一部やそれ以外で魔法に興味のある人はエヴァから言われていたとおり魔法をネギから習っていました

魔法を使う、その1

翔子「…雄二、今日こそ私と」

雄二「翔子てめえ人をロープで縛って何する気だ!？」

ちなみに今の2人は女子寮の翔子の部屋のベッドの上にあります。まあ、こんな状態ですって言ったら少年誌じゃ言えないようなことしかないと思いますけどね〜

雄二「ナレーターいや、作者も見えてないでこいつを止める!!」さも
なくば不純異性交遊が目の前で繰り広げられることになるぞ」

翔子「大丈夫、今からやることは純粹な異性交遊。浦島君と乙姫さんも毎日やってることだから」

雄二「あいつらを普通に考えるなアアア!!」

翔子「雄二、私を信頼して。大丈夫だから」

氷結「武装解除!!」

呪文が翔子の口から唱えられると雄二を縛っていたロープや着ていた洋服が凍って砕かれ一瞬の内に丸腰になってしまいました

雄二「魔法を使うなアアア!!」

まあ、これから先何があったかは皆様のご想像にお任せします

魔法を使う、その2

美琴「そういえば、佐天さんもネギ先生から魔法を習っているのよね?」

涙子「はい、まだ初心者レベルしか使えませんが…」

初春「どんな魔法が使えるか見せてくれませんか?」

涙子「オッケー」

涙子は折りたたみ式のステッキを取り出して、深呼吸を2、3回繰り返

り返すと…

「風よ!!」

ブワツツツ!!!!

涙子のステッキを中心に突風が発生した

そのせいで涙子を含め周りにいた美琴、黒子、初春のスカートは捲れてしまった

涙子「へえ〜今日はオレンジの水玉模様か〜」

初春「佐天さん!ひどすぎますよ〜!!」

どうやら皆さん、魔法をある意味有意義に使えているみたいですね

次回へ続きます

第十三話：己の魂を護るために（後書き）

今回のお話で、銀魂の吉田松陽先生の言葉を銀時のセリフ中で使わせていただきましたが、話の流れの都合上、一部を省略させていただきました。

第十四話：現実の時たまシユール

それはなんでもないある日のこと

その日2年A組は1時間目から体育でした

今日の体育はプールで水泳の授業です

まだ4月ですがこの学校には巨大な温水プールがあり、一年中泳ぐことができます。

それと、海が近いということもあり水難事故を起こさない為にも生徒は泳げるようにしておこうという学校の方針があるからです。

そのためこの学園には冬の寒い時期でも月8〜12回ある体育の授業の内2回以上は水泳を行わなければならないという義務があります

この温水プールを建てたのは学園の理事の1人である荒神洋燈であり、上記の義務を制定したのもこの人だという噂があります。それも自分の趣味でこの義務を制定したとか。

…年中、女子生徒の水着姿が見られますからね。

もちろんこの荒神理事は生徒から特に女子生徒からは『エロ爺』と呼ばれてあまり尊敬されていません。

でも学園男子生徒の半数近くはこの義務を制定した荒神理事に感謝しています

…年中、女子生徒の水着姿が見られますからね

という訳でそんな水泳の授業を見ていくことにしましょう

男子更衣室

鍵「俺たちは今…」

樹「感動している…！」

…痔によく効くボラギノールのCMではありませんよ…

ワタル「お前ら、嬉しそうだな」

浦島「そりゃあ、嬉しいに決まってるだろ！？2年のAとB組、それと我が1年A組が合同で水泳を行うからな」

ナツル「でも何で嬉しいんだ？泳ぐコースが限られるから身体を思う存分動かせないと思うけど…」

ハヤテ「確かにそうですよね…喜ぶ要素が何処にあるんでしょうか？」

そんなことを言う二人を見て鍵、浦島、樹はため息をついて

「…お前ら…なんも分かってないな

嬉しいじゃねえか！！合同で授業だぞ！？それだけ多くの女の子の水着姿が見られるんだぞ！」「…」

鍵「魔女さん、那波さん、関羽、嵩月、固法、野井原などに代表される巨乳から石動、綾瀬、宇佐見、赤井、佐々木、島田などの貧乳、鶴ヶ谷さん、芹沢、深夏などの美乳など様々な形のおっぱいが見れるんだ！」

樹「嬉しいだろ？美少女約100人の水着姿が見れるんだぞ？」

ハヤテ「…まあ、確かに」

ナツル「嬉しい展開と言ってもいいのかもな」

明久「ムツツリーニ、カメラの準備は大丈夫？」

康太「…心配いらない、この日のために防水カメラを用意して整備し続けてきた。だけど輸血パックが授業が終わるまで持つかどうか心配」

明久「心配いらないよ。ムツツリーニなら出来るさ」

鍵「いい写真、期待してるぜ」

ちなみに明久、康太、樹、鍵、浦島や東宮、亮土は学園の有志団体の一つ“学園紳士の会”というものに所属しています

この会は学園に变革を起こすために日夜活動をしているのです

その变革とは、学園の制定水着をいわゆるスクール水着から布の面積が全く無いようなヒモ水着だとか水の入っただけで肌の色が透けてしまうような水着に替えてもらおうと署名活動を行ったり、制服

を下着が透けやすいような色合いにして貰おうと校長や理事を説得したりなどしています。

さらに、この団体には大自然の力を利用して人体の神秘に迫るとい
う大きな計画があるのです。

簡単に言うとな風の力を利用してパンチラを見ようとしたり雨で濡れ
て透けて見えるブラジャーを見ようとしたりあとは着替えを覗こう
としたりしているだけです

そうです。つまりは変態さんの集まりなのです

樹「よし、決めた。今日の自由時間は女の子をたくさん誘って“水
中鬼ごっこ”をするぞ」

康太「！！！！何だそのとても楽しそうな遊びは！？」

樹「しかもただの鬼ごっこではない！！相手を鬼にするためには胸
かお尻を触らなければならないというルールも加える」

鍵「天才だ…ここにエロスの天才がいる！！」

明久「はいはい！！僕も参加する！！」

樹「言っておくが綾崎に上条に夏目、お前らも強制参加だからな」

智春「はあ！？何でそんな猥褻行為に参加しなくちゃならないんですか！？」

ハヤテ「そうですよ！絶対警察沙汰になってしまいますよ！！」

鍵「何でって…綾崎たち不幸体質だろ？その不幸体質を駆使して鬼ごっこに参加すれば絶対ポロリが見える！！」

「「「お前たちの力を使って俺たちにポロリを見させてくれ！！」」」

そう大声で言いながら土下座をする紳士の会の人々。

よくこんなことで土下座が出来ますよね〜、プライドというものがあるんでしょうか

あと大声で言ってますのできつと隣の女子更衣室に聞こえているはずです

ちなみに名誉のために言っておきますが、「ポロリを見させてくれ！！」と言ったのは明久、康太、樹、鍵、浦島の5人です。東宮、亮士の2人は紳士の会のメンバーですが言ってません。

そんな彼らに対して3人はというと

「「「ふざけんなアア！！人のコンプレックスを悪用すんなアアア！！」」」

フルボッコにしようと殴り始めました

明久「痛い、痛い！！人間の身体はそんなに丈夫じゃない！！」

そんな男子更衣室に新たに2人が入ってきました

銀時「おい何やってんだ？」

ネギ「皆さんどんな理由があるとはいえ暴力は駄目ですよ？」

「「「なんでもありません」」」

ネギの注意に笑顔で応えるハヤテ、当麻、智春の三人。

ネギ「そうですか、でも注意してくださいね」

元春「それにしても、何で銀さんとネギくんがここにいるんだにや
ー??？」

ネギ「はい、実は銀さんに生徒たちとの交流をかねて泳がないかといわれたので、1時間目に授業が入ってなかったので泳ぐことにしたんです」

銀時「早く着替えて泳ごうぜ？そうしないと水着姿を見る時間が少なくなるから…」

当麻「…銀さん、それが目的じゃないよな？」

銀時「何言ってやがる。9割方目的はそれだが残りの1割は泳ぐのが目的だ」

当麻「言い訳になってないからソレ……」

ネギ「あれ……おかしいなあ……」

銀時「どうした、ネギ坊主？」

ネギ「ロッカーの調子が悪いみたいでなかなか開かないんです」

ネギは何度の押ししたり引いたりしてみてもロッカーを開こうとしてみますがなかなか開きません

ハヤテ「僕が直しましょうか？」

ネギ「ハヤテさんありがとうございます！」

ハヤテ「誰かドライバーを持ってきてくれませんか？」

その呼びかけに2人の男が答える

当麻・智春「ドライバーならここに……」

2人が差し出したもの。それは人差し指がドライバーに変化した自分の右手であった

「……………なんじゃこりやああああ!!!」

ありえない光景に意識をしていなくても自分の右手を見て松田優作物まねをしてしまった2人。

玲士郎「…夏目智春、それはなんの真似だ？」

元春「カミヤん、幻想殺しだけじゃ足りなくてそんなものまで右手につけたのか？」

青髪「それじゃあぜんぜんインパクトたりひんで、カミヤん。腕をサイコガンにするくらいせえへんと」

当麻「ちげえよ!!!誰が好き好んでこんなことを!!!」

琢磨「何でこんな事になったのか分からないのか？」

智春「分かるわけないだろ!知らないうちにこんな事になってたんだよ!!!」

銀時「知らないうちについて、おいおい、宇宙人に誘拐でもされてキヤトルミューティレーションでもされたのか？」

当麻・智春「…もしかしてあの夢…」

ネギ「詳しく聞かせてもらいませんか？」

その頃、女子更衣室

女子の大半は着替えを終わらせて先にプールに向かっていました

あやか「それにしても遅いですわ。もう完全に遅刻ですわよ」

翔子「…確かに、早くしないと1時間目が欠席扱いになる」

朱里「いつもは遅刻しない人まで遅刻しているのは何かあったのでしょうか？」

あやか「事故や事件に巻き込まれていなければいいのですが……」

女子更衣室では各クラスの委員長が遅刻をした人の到着を待っていました

遅刻しているのは明日菜、ヒナギク、文乃、星、瑛里華、雪子、めだか、真冬の8人

ガヤガヤガヤ…

外から声がします。

明日菜「ごめん、いいんちよ。登校途中で眠くなっちゃって……」

めだか「私もだ、寝てしまつて遅刻とは一生の不覚」

あやか「明日菜さんに皆さん！？遅刻ギリギリですわよ…って」

翔子「…シユールな光景」

朱里「何で皆さんドライバーになつているんですか！！??」

8人は全員全身をドライバーに改造させられていました

男子更衣室に戻ります。

銀時「へえ〜DSでポケモンやりたがつてる宇宙人にドライバーに改造させられたんだ〜」

改造させられた理由を聞いて周りの人は目を背け必死に笑いをこらえています

智春「こつち向けよ！笑い事じゃないんだよ！！」

当麻「こんな指でどうやって生活していけばいいんだよ!？」

銀時「大丈夫、大丈夫。じきになれるって」

智春「慣れてたまるか!!」

銀時「ハハハ、DSのために身体をドライバーに…」

銀時は水着に着替えるためにパンツを脱ぐ

銀時「……………」

ネギ「銀さん、どうかしたんですか？」

ハヤテ「もしかして…」

銀時「そのまさかだ。宇宙人虐殺しても罪にならないよな？」

（（（（（銀さんのアナログスティックがやられたアアア（（（（（
）

場所を変えてプール

銀時「…神楽坂たちもキャトルミューテーションされたのか」

プールの一角に被害者たちが集まっていました

明日菜「うん、学校に行く途中でね」

真冬「突然眠気が襲って目覚めたと思ったらこんな格好になっていましたから」

瑛里華「それにしても、犯人の情報少なすぎるわね」

智春「はい、宇宙人で何処の星の人か今何処にいるのかも分かりませんから」

めだか「ただ一つ分かっているのは犯人がポケモンの最新作にはまっているということのみか」

当麻「ああ、奴らはDSからオンライン版に移り気しようとしていたな」

文乃「ポケモンってDSやその前のゲームボーイだけじゃなかった？」

真冬「それがつい先日、オンライン版が出たんです。DSのポケモンのカセットを機器に差し込むことにより、育てたポケモンをネットの中で他のプレイヤーと共に育成、対戦することが出来るんです。好都合なことにネットを使うオンラインだからこっちもネット内で網を張っていれば奴らに会えるはずですよ」

ヒナギク「つまり、私たちもポケモンのオンライン版をやると」

星「それ以外方法は見当たらない…そうするしかないようだ」

銀時「めんどくせえよ、ポケモンなんかしないでこっちから宇宙人片っ端からぶっ殺していけばいいじゃねえか」

雪子「銀さんの荒み具合ハンパないですね〜」

銀時「そりゃあ荒みもするだろうよ。俺は世界に一本しかないジヨ

イステイックをお釈迦にされたうえにボックスドライバーとか言う訳分からんものに改造させられたんだぞ!?

こうなつたら奴らを電脳空間から引きずり出してアナログスティックを八つ裂きにしてやる!!」

時間は流れて放課後 学校内のパソコンルーム

彼らは自分の持っていたものやクラスメイトから借りたDSのカセットを使いポケモンオンライン版を始めていた

ゲームをする者の周りには数人の野次馬がいて画面を見つめる

ようこそ、ポケットモンスターオンラインの世界へ

ここは世界中からトレーナーが集まりポケモンを育てあつたりバトルをしたり、協力してクエストをクリアしていく冒険空間です

くれぐれもネットマナーを守りプレイヤーの誰もが心地よくプレイの出来る空間作りにご協力をお願いいたします

簡単なゲームの説明

- 1、ここでは自分の分身となるアバターをつくり、職業とイメージカラーを決める
- 2、全てのポケモンのレベルは50に統一
- 3、ハートゴールド・ソウルシルバー版などと同じで先頭のポケモ

ンは一部のダンジョンや建物を除きモンスターボールから出ている
4、バトルの勝利数、クエストクリア数などでトレーナーランクが
決まる
5、ランクが上がれば上がるほどポケモンに持ち物を持たせたり、
伝説や幻のポケモンを手持ちにいれられる、行けるダンジョンが増
えるなど利点が多い

始まりの街：セントラルシティ

ポケモンセンター前には、当麻たちの分身のアバターが仲間達の到
着を待っていた

今回はここまで。

次回に続きます

第十五話：着信アリより数ヶ月も着信ナシの方が怖い

セントラルシティ

当麻たちは冒険に出る前に全員到着するのを待っています。

後は銀時だけです。

ちなみにここではネット内でのセリフは『』、現実世界でのセリフは「」で表示させていただきます

ここで、各キャラクターの職業、イメージカラー、使用ポケモンを紹介しましょう

ちなみに彼らのパーティの半数は作者が使用していたパーティです。それ以外は即興で作った物です

(1 使用キャラ名、2 職業、3 イメージカラー、4 使用ポケモン)

当麻

- 1、トーマ
 - 2、男ポケモンレンジャー
 - 3、青
 - 4、ゴウカザル、エレキブル、クロバット、フローゼル、ユキノオ
- 1、ガバルドン

智春

- 1、トモ

- 2、男サイキッカー
- 3、黒
- 4、リザードン、ルージユラ、ヨノワール、シャワーズ、ガブリアス、ヘラクロス

明日菜

- 1、アスナ
- 2、バトルガール
- 3、橙
- 4、ハッサム、オーダイル、デンリュウ、ネイティオ、マンムー、ヘルガー

ヒナギク

- 1、ヒナ
- 2、女エリートトレーナー
- 3、桃
- 4、コジヨンド、サザンドラ、ウルガモス、ドリユウズ、ランクルス、ウオーゲル

文乃

- 1、フミ
- 2、ウエイトレス
- 3、赤
- 4、ムクホーク、ルカリオ、ドタイドス、レントラー、バンギラス、ラプラス

瑛里華

- 1、エリ
- 2、お嬢様
- 3、金

4、エーフィー、ウィンディ、キングドラ、トゲキッス、ライボルト、トドゼルガ

雪子

1、ユキ
2、ナース
3、白
4、グレイシア、エテボース、メガヤンマ、フライゴン、スターミー、ドラピオン

めだか

1、クロ
2、女サイキッカー
3、紺
4、メタグロス、サウムラー、オムスター、ロズレイド、サンダース、オオスバメ

星

1、チセ
2、女ポケモンレンジャー
3、水色
4、エルレイド、ミロカロス、ドンカラス、ユキメノコ、ジバコイル、グライオン

真冬

1、マユ
2、ミニスカート
3、黄
4、ムシャーナ、デンチュラ、エンブオー、ゾロアーク、ココロモリ、ガマゲロゲ

文乃『あとは銀さんだけね』

明日菜『そうね、きちんとできているのかしら』

明日菜たちはタイピングの練習を兼ねて色々と会話をしている

真冬「銀さん、きちんと出来ていますか？あとは銀さんだけですよ？」

銀時「ああ、大丈夫大丈夫。うまくいつてる」

その時、明日菜たちのアバターの前に1人の舞妓さんの姿をしたアバターが現れました

舞妓『あの〜、皆さんグループなんですか？』

智春『ええ、そうですけど…』

舞妓『もしよかったら、仲間に入れさせてもらえませんか？』

当麻『どうする？仲間にするか？』

ヒナギク『でも、私たちには目的があるし…』

明日菜『そうね、それでこの子に迷惑をかけるわけにはいかないし』

銀時「ああそつだ。出てこいワルビアル」

銀時はモンスターボールの中からワルビアルを出しました。

舞妓「ワルビアル、トーマとトモに向かってどろぼう!! きんたまを奪え!!」

ワルビアルは銀時に言われた通り、当麻と智春のアバターの股間を何度も殴り始めました

当麻「銀さん何やってるんだ!? アナログスティック引きずりすぎだつて!」

智春「このゲームはポケモン同士を戦わせるゲームなんです! トレーナーからきんたま奪ってどうするんですか!」

当麻と智春は手持ちのリザードンとゴウカザルでワルビアルの攻撃を止めさせる

銀時「黙れ、ヤブクロン」

ヤブクロンとは…有毒のガスをゲップのように吐き出すという見た目がゴミ袋のポケモンである

文乃「それどういう意味!? 私たちがゴミみたいな存在って言いたいわけ!」

雪子『銀さん完全に八つ当たりモードですね〜』

星『それにしても、銀さん。何で女の格好をしているんだ？』

真冬『もしかして心のアナログスティックまで無くしちゃったんですか！？』

銀時『ちげーよ、誰もいじけてこんなキャラ作ったわけじゃねえよ
いいか？ゲーマーなんてどうせキモブタやキモヲタとか言われる女
に餓えた部屋中ティッシュにまみれたケツの青いガキだ。こっちは
俺も含めれば女が9人もいる。色気で行けばいちころよお

そつと決まればダンジョンに繰り出すぞ』

『『『『『はい！！行きましようー！！』』』』』

銀時たちはダンジョンへと続く道へと向かって歩き出した

『あの〜〜〜ちよつとすみません』

突然、後ろから1人の男が声をかけてきた

当麻『誰だ？この人・・・』

明日菜『もしかして私たちの仲間に入れてほしいとか？』

すると男は笑いながら

『いいえ、違いますよ。あなたたち、見たところこのゲームを始め
たばかりですよね？』

銀時『ああ、そうだけど…それがどうかしたか？』

『私はあなたたちのようなゲーム初心者の方々にとあるアイテムを
分けてあげているボランティアでしてね、あなたたちにもそのアイ
テムを分けてあげようと思ひまして』

ヒナギク『ありがとうございます。何ですか、そのアイテムって？』

男は笑いながらアイテムを取り出した

『これですよ、これ。きんのたまですよ。僕のきんのたま！！』

.....

本当だったら高額で売ることが出来てもらって嬉しいはずのきんの
たま

しかし、ネーミングがアレなので当麻たちの周りの空気は完全に凍
りつく

『出て来い、ワルビアル！！このジジイにどろぼうだ！きんたまを奪え！！』

『なっ！！まあいいでしょう勝負の宣戦布告と受け取らせていただきます』

男の方もモンスターボールの中からポケモンを出した

そのポケモンは色違いのタマタマ

ちなみにタマタマの色違いは、金色である

当麻『これ、狙ってるよな』

めだか『狙っているな』

星『狙ってるな、この男もゲームの製作者も』

銀時『俺をバカにするんじゃないやねエエエ！！』

ワルビアルはタマタマに向かってどろぼうをしました

どろぼうの追加効果でワルビアルはタマタマから何かを奪い取った。

“きんたまを奪い取った！！”

.....

銀時『いい加減にしゃがれエエエ!!!ワルビアル、タマタマを噛み砕け!!!』

ワルビアルはタマタマを噛み砕きました、急所に当たって効果は抜群!!!

タマタマはHPがゼロとなり倒れてしまいました

銀時『ああ~~~~ムシャクシャする!!!このジジイは放って置いて行くぞ!!!』

今度こそ、彼らはダンジョンに向かって歩き始めました

ちなみにきんのたまおじさんは銀時によって気絶させられてしまい、持っていたきんのたま50個ほどを全て奪われてしまいました

そんな銀時たちを見つめる一人の男。もちろんきんのたまおじさんではありません

『フツツ...なかなか面白い奴らが現れたじゃねえか』

銀時たちは森の中を歩いていた

ここはもう街の外なので先頭のポケモンはモンスターボールから出ています

智春『ところで、これからどうするんだ？』

ヒナギク『そういえば、私たちもそうだけど現実世界とこの世界じや姿かたちが全然違うのよね』

瑛里華『なら、あの宇宙人も姿が違っつてことね』

めだか『なら簡単だ。出会ったトレーナーを仲間にしていけばいい』

雪子『なるほど〜、そうすれば戦力と情報が手に入っちゃってー石二鳥ですよ〜』

星『あの宇宙人自体も仲間にすることが出来るかもしれないしな』

ガサゴソゴン…

銀時たちが話している後ろの草むらから何か物音がします

銀時『おっ、噂をすれば何とやらって奴か。勧誘してくる』

草むらから出てきたのは

ゴルーグ、キリキザン、エビワラー、ダゲキ

の4体のポケモンでした

銀時『あの〜〜、私たちがこのゲーム始めたばかりなんですけど
〜〜、仲間になってももらえませんか?』

当麻『銀さん、それ違うから!!人間に見えなくも無いけどそれポケモンだから!!』

銀時『何言ってるんだ。こいつらはれっきとしたトレーナー…』

ドガツツツ!!!!

真冬『銀さんのワルビアルが!!』

銀時のワルビアルはエビワラーの技、インファイトを受けて倒れて
しまいました

銀時『なっ!?!』

文乃『私たちも早く応戦しないと!!』

『待て、ここは俺に任せておけ』

突然、銀時たちとポケモンたちとの間に1人の男が立った

『出て来い！！カイリユウ、ダグトリオ、ポリゴンZ、ヤドキング
！！』

男は4つのモンスターボールを手に取るとそこから出てくる4体の
ポケモン

『カイリユウはエビワラーに空を飛ぶ、ポリゴンZはゴルージュに冷
凍ビーム、ダグトリオはキリキザンを中心にじしん、ヤドキングは
ダゲキにサイコキネシス！！』

カイリユウは空へと飛び立つと加速をつけてエビワラーへと攻撃、
効果は抜群！！

ポリゴンZは冷たい冷気で出来たビームをゴルージュに撃ちつける、
ゴースト・地面タイプのゴルージュに対してこちらも効果は抜群！！

ダグトリオは地面を揺らし始める、鋼・悪タイプのキリキザンに対
して効果は抜群！！

ヤドキングは強い念力をダゲキに送り攻撃、格闘タイプのダゲキに
対してやはり効果は抜群！！

突如現れたトレーナーの活躍により野生の4体は倒れてしまいました

明日菜『すごい…この人、一度に倒しちゃったわよ』

突然現れたトレーナー、果たして彼は一体誰なのか!?

そして銀時たちの身体は元に戻るのか!?

桂『正体は桂だアア!!!』

銀時『オイイイイ!!何勝手に正体ばらしてんだアア!!普通は次回に持ち越しだろ!!??』

次回へ続きます

第十六話：2m 2W

突然現れた男の正体は桂小太郎であった

桂小太郎

- 1、フルーツポンチ
- 2、バツクパツカー
- 3、黒
- 4、ポリゴンZ、ヤドキング、カイリユー、ダゲトリオ

銀時『おい、ツラ』

桂『ツラじゃない、桂だ。それにここではフルーツポンチの名を使っている』

智春『なら、フルーツポンチさん』

桂『フルーツポンチじゃない！桂だアア！！！！』

銀時『うるせえよ！！そんなことは分かりきってたんだよ！！』

当麻『ところで、桂さんは何でポケモンをしてんだ？攘夷活動しなくたっていいのか？』

桂『攘夷活動をしたいのも山々なんだが、身体をドライバーに改造されてな』

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

当麻たちは心の中で激しく突っ込み！！

雪子『桂さんも、宇宙人に身体を改造させられたんですか！？』

桂『ああ、ということは、銀時やその教え子も改造させられたのか？』

ヒナギク『ええ、一部の人だけです…』

桂『なるほど…ならば共にあの忌まわしきゲーム星人の駆逐に向かおう』

めだか『ゲームー星人…それが私たちを改造した者たちの正体なのか？』

桂『いや、俺が勝手にそう呼んでいるだけだ。その方が宇宙人というよりも分かりやすいと思うからな』

銀時たちは桂を仲間に加え、冒険を続けることにした

森の中を再び歩き始めようとすると…

『待て…』

1人の男が目の前に現れた

『てめえ、二度と面を此処に見せるなといったはずだ。来るならその名を捨ててからにしろと言ったはずだ、フルーツポンチ』

文乃『桂さん、このおじさんと知り合いなの？』

桂は苦虫を噛み潰し、怒りに満ちたような顔で言う。

桂『きつ…貴様は…』

フルーツチンポ!!』

.....

しようもない名前に桂とフルーツチンポを除く辺りの空気は一気に凍りつく

真冬『何ですかこの展開…ポケモンって一応全年齢対象のゲームなんですよ』

瑛里華『ねえ、名前をつけるとき放送禁止用語は自動的にブロックされないの?』

『ハハハ、全く当たらん。どこを狙っている！！フルーツポンチ！！』
今度はこっちだ、スカタンクはカイリユーにどくどく！！ケツキングはポリゴンZにギガインパクトだ！！』

威力の高い技で一気に攻め入るのと状態異常でじわじわと苦しめる作戦に出ているよう。しかし、こちらも当たらない

桂『ハハハハ！！！貴様こそ攻撃が当たらぬではないか！！一体何をしているフルーツチンポ！！』

近藤『ドライバーやってます』

フルーツチンポの正体は近藤であった

近藤勲

- 1、フルーツチンポ
- 2、山男
- 3、茶
- 4、ケツキング、スカタンク、カイリキー、ドクロッグ

(((((お前もかいいいい！！！！))))))

桂『何…！？フルーツチンポ…貴様も…まさか…』

近藤『フルーツポンチ、まさか貴様も…』

バ…バカな…俺以外にも…』

瞬間移動装置にドライバーが転がってんの知らなくて入って作動させて、遺伝子レベルでドライバーと融合してしまった人がいたなんてエエエ…！』

()()(ちげーよ！！なんでそんな初代ポケモンのマサキさんの事やってんだよ！！)()()

桂『ああ…あれには驚いたな(何言ってるんだコイツ)』

当麻『合わせたよ！！全くの別件なのに合わせたよ…！』

桂『とにかく我々は争う相手が違うようだな』

真冬『本当に違います。全く別の事件なんですから』

近藤『ひよつとして…君たちもか！？』

近藤は銀時たちのほつを見ながら言う。

星『まあそういうことだ。このゲームの中にいるゲーマー星人を捕まえよう。そうすれば何とかなるはずだ』

文乃『いや…この人の分はどうにもならないんじゃないの??』

近藤『でも、ゲーマー星人を探すって…一体どうやって

このゲームは銀河中のゲーマーがプレイをしているんだ。姿かたちも現実世界とは全く異なる!!どうやって人を探すというのだ!??』

桂『Tを探す』

雪子『Tって何ですか??』

桂『貴様ら、そんなことも知らないのか。』

“T”。この世界のすべてを知り尽くし、トレーナーランクは最高のSSS。四天王にも選ばれている最強のポケモントレーナーだ』

瑛里華『全てを知り尽くしたってことはゲーマー星人のことも…』

桂『たぶん知っているだろうな。確証はないがウーヌレディア山にTらしき人物がいたという噂がある』

近藤『ウーヌレディア山だと!? 個体値27以上の伝説を含めたポケモンが多数生息するこの世界で最も危険な場所じゃないか!!』

銀時『なら、そのウーヌレディアって場所に行けばいいんだな? さつさと行こうぜ』

銀時たちは桂の言っていたウーヌレディア山に行くために町に戻る

うとした

しかし…

桂『待て』

桂が止めました。

明日菜『どうしたのよ、桂さん？』

桂『俺もそうだが、お前らはウーヌレディアに行くことはできない。トレーナーランクを見てみる。ウーヌレディアはランクSS以上でないと行くことができない』

銀時たちはまだ冒険を始めたばかりなのでトレーナーランクは最低のE。

桂や近藤もまだCであり、SSには程遠い。

ちなみにランクは

E>D>C>B>A>AA>S>SA>SS>SSS

の10段階評価です

ヒナギク『それで、ランクSSにするにはどうすればいいのかしら？』

桂『簡単なことだ、街で受注されるクエストをクリアしたり、他の

トレーナーと対戦して勝ち続ければいい。

ちなみにSSの条件はトレーナーとの対戦での勝利数が敗戦数70回以内で130回以上勝つ、50個のクエストをクリアするというのが条件だ』

めだか『レベル高いな。何日かかるというんだ』

桂『ああ、そこで俺は一つの作戦を思いついた』

星『何なのだ？その作戦というのは』

桂『2m 2W作戦だ』

桂は2m 2W作戦の内容を話し始めた

2mのmとはminuteのm、2WのWとはWeekのWである

つまり、読者に2分間この話を読むのを中断してもらい、その間に自分たちは修行やクエスト、バトルなどをして読者が読むのを再会する2分後にはこの物語の世界が2週間後になっているという、どこかで聞いたことがあるような作戦である

銀時たちもその作戦に賛成した

桂『では2週間後、セントラルシティでまた会おう』

では、読者の皆さん。ここで読書を2分間中止してください

2分経ちましたら続きをお読みください。

それでは、ストーリーを再開します

2週間が経ち、銀時たち13人は無事にランクSSになることが出来た。

彼らはセントラルシティで合流した後、ウーヌレディア山に向かいました

ウーヌレディア山。そこは濃い霧が立ち込めて先を見通すことが難しい。

銀時たちはTを探す

文乃『気味の悪いところね』

桂『気をつける、ここに住むポケモンは全て種族値合計530以上、その上個体値合計162以上だからな』

当麻『なら、一撃で倒せる自信がなければ逃げたほうが良いってことか』

智春『すばやさの早いポケモンを先頭に出したほうがいいな』

彼らがウーヌレディアを移動するための作戦を話していると…

ウアアアアアアア

何かの叫び声が聞こえた

明日菜『とにかく、いってみましょー!!』

銀時たちは声のするほうへと向かった。

そこには、1人の女性がアリアドスとオクタンに襲われている姿だった。

銀時『あの女、手持ちのポケモンが全てやられたのか!?!』

星『とにかく、助けよう。エルレイド、アリアドスにサイコカッタ
ー!!』

めだか『サンダース、オクタンに10万ボルト!!』

アリアドスとオクタンは倒れ、女性の救出に成功。

雪子『大丈夫ですか！？』

真冬『一体何があったんですか！？』

女性は目を覚まし…

『余計なことすんじゃないやねーよ、せつかく手持ちのポケモンで束縛プレイ楽しんでたのに』

.....

猿飛あやめ

- 1、サルコ
- 2、テニスプレイヤー
- 3、銀
- 4、アリアドス、オクタン、モジヤンボ、ドククラゲ

銀時『TじゃなくてMじゃねえかアアアア！！！！』

文乃『冗談じゃないわよ！！この2週間のうち何時間ゲームしたと思ってるのよ！！』

明日菜『今度はコイツを締め付けてやりましょ！！！！』

次々と倒される彼らのポケモン

桂『何でこんな事に!!』

智春『僕たちここで終わるのか?』

彼らの頭の中に絶望の2文字が見えはじめた…そのときだった

キュルウエエエエエエ!!

またもや伝説のポケモンが現れた。今度はレックウザ、パルキア、アルセウス、デオキシス、ダークライ、ゼクロムである。

しかし現れたレックウザたちはギラティナたちと戦い始める

伝説のポケモン12体の戦い。それはまるで映画を見ているような光景だった

その争いにも決着がついた

勝ったのはレックウザたち6体である

???? 『よくやってくれた。私の大事な客にゲームオーバーになってもらつては困るからね』

後ろから男の音がするので振り返ってみるとレックウザたちは彼の持っていたモンスターボールに戻っていった。彼のポケモンだったのであろう

『やあ、僕がTだよ』

????

1、T

2、ベテラントレーナー

3、黒

4、レックウザ、パルキア、アルセウス、デオキシス、ダークライ、ゼクロム

次回へ続きます

第十六話：2m 2W（後書き）

オープニング、エンディング曲情報更新しました

第十七話：スコッチ暴露マンは鉄子にどうせ会えない

野生の多数の伝説ポケモンに襲われゲームオーバーになりかけた銀時たち

しかし、彼らの目の前に四天王の1人“T”が現れ、ピンチは免れた

近藤『もはや疑う余地もない。こんな真似が出来るのは数が限られる…』

この世界の全てを知り尽くし、全てを得た者。伝説のポケモントレナー“T”だ！』

智春『か…かつこいい、憧れる』

銀時『FFに出てた？あれ、FFに出ていたよね、ああいう人』

近藤『オ…俺、サイン貰っちゃおうかな？』

桂『何を舞い上がっているんだ貴様は。我々はそんなことをしに来たのではない』

すみません、T殿。ウチの娘と一緒に写真撮ってもらえませんか？』

桂は真冬と雪子の2人の肩を持ちTと3人で写真を撮ろうとする

真冬『娘って私たちですか！？』

雪子『誤解を招くようなことは言わないでくださいね〜?』

ヒナギク『すいません、私たち…』

T『何もいう必要はない』

『『『『!?!?!』』』』

『僕を誰だと思っている。全てを知る者Tだ。

お前たちが何故このゲームをしているのか、なぜ僕を捜しているのかもすべて承知している

僕は待つていたんだ。如何なる困難にも立ち向かい希望という明日を求める真のポケモントレーナーたちがやってくることを』

Tも仲間に加わり、ウーヌレディア山最深部へと向かう銀時一行。

瀕死になっていたポケモンはTの持っていた“げんきのかたまり”で回復させてもらった

T『最近、この世界に奇妙なトレーナーたちが増え始めていてね。他のトレーナーと対戦するわけでもない、ただ連中はある人物を探すことだけに勤しんでいる。そして連中が決まって言うセリフ…

ゲーマー星人を知らないか?』

銀時たちは話している間に神殿の入り口のような場所にたどり着いた
入り口の周りには銅像が何体も立ち並んでいる

T「ここに入り、しばらく歩くとあるトレーナーが待つ部屋がある。

そのトレーナーは6V（個体値オール31）、種族値合計660以上の伝説のポケモンを使う。

彼に勝つことによりSSSランクになれる。

ゲーマー星人はまだSSランク以下だと思われる。ここで見張っていれば必ず来るであろう

君たちは僕が真のトレーナーだと認めた連中だ。俺と共に戦ってくれるか？

これ以上この楽園を土足で踏みにじられるのを黙って見過ごすわけには行かない

共に行こう！！僕たちの楽園を取り戻しに！！」

（（（（（Tさん！！カッコいいです！！カッコよすぎます！！（（（（（

当麻たちはTのセリフがカッコよすぎたのでしょう感動してしまっています

『？塔貴也という引籠もりのダメガネ、オタクキャラに改造させられていたんだ』

どうやら、Tの正体は3年A組所属、科学部とサブ研の部長である？塔貴也らしいです。

ちなみに彼の言うとおり、塔貴也は引籠もり中ですので科学部は黒崎朱湮が、サブ研は早乙女ハルナが部長代理としてそれぞれの部活を束ねています

智春『それ（科学部）部長でしょ！！何、今の自分を捨てて新たな自分を手に入れようとしてるんですか！？』

真冬『伝説のトレーナーが（サブ研）部長だったなんて…』

銀時『成程、暇を持て余してゲームに逃避するうちに最強のトレーナーになっちまってたんだな。』

ネットゲーム内と現実世界のパラメーターは反比例する。ネット内で幅を利かせる勇者ほど現実じゃあ暇を持て余したダメ人間っていうわけだ』

ピョロ、ピョロ、ピョロ...

銀時たちの後ろから足音が聞こえる

現れたのは…

現れたのは、レジギガス、ランドロス、ギラティナ、グライドン、ヒードラン、ミュウツーの6体

ゲーマー星人たちと、伝説の6体は対峙する形となる

塔貴也『いいか、ともかくにも奴らに恩を売るんだ

行くぞ！！出てこい、アルセウス！！』

銀時『来い、オノノクス！』

ヒナギク『サザンドラ、出てきなさい！！』

雪子『グレイシア、出番だよ！！』

星『グライオン、行くぞ』

明日菜『マンムー、行くわよ！！』

塔貴也たち6人で現れた6体をたおそうとする。

しかし…

ヒョイ。

ゲーマー星人たちがレジギガスたちに投げたのはマスターボール

カチツツツツ!!

もちろんマスターボールですから簡単に捕まえることが出来ました

真冬『捕まえちゃった、みたいですね』

文乃『ちよつと!!どうすんのよ!? 私たち何もまだしてないわよ
!!』

ゲーマー星人A『あー、何かもう飽きちゃったな〜』

B『どうする、新しいゲームに移っちゃっう?』

A『最近のゲームって何あるよ?』

B『AKB48のギャルゲみたいなもの出ますからそれやりませんか?先輩』

A『AKBか〜、俺は大島優子が大好きなんだよな』

B『先輩はそんなんですか〜、僕は渡辺麻友ですよね』

桂『どうする？AKBのゲームに移り気使用としているぞ！！』

塔貴也『まずい、とりあえず彼らに話しかけ…』

現実世界。塔貴也は自宅に造られた核シェルターのような自室でゲームをしています

「塔貴也！！」

彼の部屋に1人の女性が入ってきました
その女性は橘高冬琉。塔貴也と冬琉は家がとなり同士の幼馴染なのです

塔貴也「どうしたんだ。それになんでこの部屋の鍵を…」

冬琉「鍵は作らせて貰ったわ

椎名さんや桂さんから聞いたわよ。あなたまた引籠もってゲームばかりしているそうじゃない！！この前、科学部とサブ研の人たちに引き摺り出してもらったばかりだというのに！！」

この前とは、塔貴也は数週間前までも引籠もりを続けており、冬琉が科学部とサブ研に

頼んで彼を引きずり出してもらったのです。それなのにまたもや引籠もりをするって…

塔貴也「まあまあ、冬琉。そんなにカッコしないで」

塔貴也は笑顔で宥めようとするが…

冬琉「煩い、引籠もり社会不適合者!!」

冬琉はそういうとパソコンの電源を切ってしまいました

ゲーム世界

Tさんからの通信が途切れしました

銀時『どうしたんだ、?の奴?』

真冬『さあ、どうしたんでしょうね〜』

真冬は少々腹に何か黒いものを含むような口調で言う。

無理ありません、塔貴也を引きずり出す際に色仕掛け作戦だといわれ、真冬やナギ、千世などといったサブ研の女子部員は際どい格好をさせられていたのです。そんな恥ずかしい思いをしたのにそれが無駄になってしまったのですから無理はありませんよね

猿飛『とりあえず、話かけましょ』

銀時『そうだな』

A『グランツーリスモの5も出るよな〜』

B『あと、モンハンのPSP版の3も出ますよね〜。悩みますよね〜』

銀時『ちよつと〜、アンタが声をかけなさいよ〜』

猿飛『いやよ〜、ギンコがあの人への触覚超ヤバイって言ったんだからアンタが声をかけなさいよ〜』

銀時『あつ、ヤバ。こつち見てる…』

あ〜、私たちもこの神殿の奥に行きたいんですけど〜私たちが2人だと不安なんで一緒に行きませんか〜??』

B『別に僕はかまわないんですけど先輩はどうします?』

A『別に…行ってもいいけど…?』

銀時と猿飛はゲーム星人と神殿の中へと入っていきました

当麻『どうするんだ? 銀さんたち、神殿の中に入ってたぞ』

桂『まずいな…あの先輩とやら、中二病患者で異性を意識してか後輩にしか心を開いていない』

智春『確かに、仲間になったっていつのに距離とりすぎてますよね』

ヒナギク『このままじゃ、オフ会に誘えないわね』

近藤『ここは中二病を逆手に取ろう。中二病は異性に対するATF』

イールドを厚くするが異性に対しては無防備になる』

雪子『ATフィールドって、中二病は近藤さんじゃないですか』

近藤『奴らに仲間意識を植え付けるために…何か共通点は…』

近藤はゲーマー星人と自分との共通点を探す

近藤『あつた!!』

そして、近藤は彼らの元へと走っていきました

銀時『まずいなあの先輩、一緒にやってきた後輩にしか心を開いてねえぞ』

猿飛『お堅い年頃なのよ、きつと』

銀時『何か心を開かせるような起爆剤になるもんを…』

近藤『あれ〜、先輩じゃないですか?』

近藤は全裸で銀時やゲーマー星人の前に現れました

近藤『俺ですよ、俺。中学のときに2こ下だった…覚えてませんか?この触…』

銀時『ギガインパクトオオオオオ!!!!!!』

銀時はオノノクスで直接近藤を攻撃。

銀時『すごくいい。これきつと新種のポケモンよ。ケッキングの進化形かしら』

B『いや、それトレーナーでしょ』

猿飛『何言ってるの。これ純粹なるポケモンよ。持ち物だって持ってたわ』

小さなキノコを手に入れた

銀時『これ、お近づきの印にどうぞ!』

銀時は小さなキノコ(近藤のアレ)を先輩に渡す

B『いや、別にいらないし。100円ちょっとでしか売れないし』

桂『フルーツチンポ!!! (笑)』

当麻『何で笑ってんだよ!』

星『でも4人の心の距離は次第に近づきつつあるな』

めだか『心を裸にしてぶつかっていけば相手も心を開くということだ』

桂『なるほど…こんなところで話しては、心は開かないということか。俺も彼らに心を裸にしてぶつかってくる!! 思いの丈を全て打ち明ければ必ず分かり合える!!』

桂もゲーマー星人の元に駆け出していく

桂『おーい!! 貴様らア!』

実は俺、シャワー浴びてる時小便をしちゃったりするけどそれって皆もしちゃうことだよな〜!!???』

銀時『もう一度、ギガインパクトオオオオオ!!』

() () () (全然関係のない思いの丈を暴露した!!???) () () ()

銀時『すごい。此処って新種のポケモンばかり出てくるのね〜』

B『いや、知り合いなんでしょ? さっきからやってくるの君たちの知り合いなんでしょ?』

猿飛『違うわよ〜、ほら』

ミックスオレを手に入れた

銀時『お近づきの印にどーぞ』

B『要るかアアア!!』

A『おい、さつきから黙って聞いてれば…いい加減にしるよお前ら…』

黙っていた先輩のゲーマー星人が口を開く

『コソコソ、人の周りを嗅ぎまわりやがって…
テメエラもひよっとして奴らの仲間か?』

銀時『何言っちゃってんの?意味わかんないんですけどオ』

A『だからテメエラが何者かって聞いてんだよ』

銀時『人にモノ尋ねるときはてめえから素性を明らかにしろよ』

A『ああん!?俺たちはな…』

ドライバーやってます』

先輩と後輩の正体は岡崎朋也と音無結弦であった

岡崎朋也

- 1、センパイ
- 2、バスケット選手
- 3、青
- 4、レジギガス、ランドロス、ギラティナ、マニョーラ、エンペルト、ボーマンダ

音無結弦

- 1、コウハイ
- 2、クラウン
- 3、茶
- 4、グラードン、ヒードラン、ミュウツー、ムウマージ、ブーバーン、ドサイドン

次回へ続く

第十七話・スコッチ暴露マンは鉄子にどうせ会えない(後書き)

こんなに長くなるとは…4話位で終わらせるつもりでしたのに…

第十八話：ハヤシライスとハツシユドビーフの違いって何!?

大通りにある焼肉店

ここでは銀時たちがオフ会を行っていた

彼らは黙ったままそこにいる人物を確認する

明日菜「ちよつと!!少しはなんか話そうよ!折角のオフ会なんだから」

銀時「オフ会つつつたつて:知ってるツラばかりなんだけど。知ってるバカヅラばかりなんだけど」

ここにいたのは最初に被害に遭った銀時たち11名、桂、近藤にその後、にゲーマー星人として現れた朋也と結弦の計15名。

銀時「第5話目になってんだよ!!こんなくだらないことに5話も費やしてんだよ!!それに5話も立ってないのに進んでないんだよ、悪化してんだよ!!何だったの俺たちの冒険、一体何を待たつて言うんだよ!!」

近藤「まあまあ、確かにゲーマー星人の有力な情報を得ることが出来なかった。けれども俺たちを同じ目的を持った仲間達を引き付けてくれたじゃないか。それが今回の冒険のゴールとしようじゃないか」

銀時「仲間って…こんなバカばつか集まったって箸にも棒にもひつかからねえんだよ。ゼロの連中が何人集まったって文殊の知恵にはなんねえんだよ!!!」

文乃「さつきから聞いてれば、バカバカって私たちバカにするのもいい加減にしなさいよね」

銀時「芹沢く、お前自分の姿を鏡で見てみたらくく???バカが写ってるから見てみたらくく」

朋也「チ コをドライバーに改造させられた奴よりかはマシだと思っけどな」

銀時「うつせえよ、お前らだって股間部ごと改造させられてんじやねえか」

結弦「まあ、みんな落ち着けて…とりあえずここまでの状況を一回整理しよう。」

俺たちはウーヌレディア山まで行ったけどゲーマー星人の情報を得ることは出来なかった。先生たちの方はどうだったんだ?」

めだか「私達の方も同じでゲーマー星人の情報は手に入れることは出来なかった」

雪子「ところで、何で岡崎先輩と音無先輩はゲーマー星人の格好をされていたんですか?」

真冬「そうです。私たち、そのせいでウーヌレディアまで行く羽目になったんですよ」

朋也「何でって、自分と同じ格好をした奴がいたら現実世界でも気になって仕方ないだろ。だから奴らから声をかけさせるためにあの格好をしてたんだよ。まさか、銀さんたちみたいなのバカ共が声をかけてくるとは思ってもみなかったけどな」

銀時「おい、誰がバカだとテメエ!!」

朋也「銀さんだってさっきからバカバカ言ってるだろ!？」

朋也と銀時はにらみ合ってしまう

桂「おい、ここは公共の場だ。喧嘩などするな」

桂が彼らを止めようとする

桂「ところで、この手錠はいつ外してもらえるんだ？」

彼には、手錠がかけられていました

ヒナギク「何でって、私たち風紀委員も桂さんたち攘夷志士の逮捕に協力するよう言われてるから」

当麻「っていうか、何で攘夷志士がオフ会に参加してるんだよ。バカだろ」

桂「攘夷志士だってオフ会に参加したいわ!!心をオフにして気持ちを休めたいわ!!」

智春「桂さんはいっつもオフだと思うけど……」

桂「馬鹿者共が…俺を捕まえたところで何も事態は好転せぬのだぞ。お前たちがドライバーだという事実は何も変わらないのだ」

星「桂さんだってドライバーじゃないですか」

桂「それどころか、お前たちは貴重な情報を手に入れるチャンスがなくすことになるのだぞ」

近藤「桂、もしやあいつらの情報を握っているのか!？」

桂はフツツと少し笑いながら、手錠をジャラジャラと鳴らし

「人に物を頼むときはそれなりの礼儀というものがあるであろう」

近藤「クツツツ!!!」

近藤は苦虫を噛み潰したような顔をする

めだか「近藤さん、気にするな。こやつは逃げたいばかりに口から出任せを言っているだけかもしれないぞ」

桂「疑うならまずこれを見てみる。二度と同じ口が利けないはずだ」

桂が取り出したもの。それは…

トラックのドライバーを募集しているチラシであった

桂「おつと…見せられるのはここまでだ。連絡先と面接会場が知りたければ…」

「」「ふざけんなアア！！」「」

当麻、文乃、明日菜が桂に何度も蹴りを食らわし続ける

結弦「何、ドライバーとして生きる決意を固めてんだ！！」

智春「そうですね！！それに、ドライバー違いですし！！ゲームー星人の情報は無いんですか！？」

当麻たちからの蹴りを受け終わり、息を整えると桂は再び口をあけた

「そんなものはある訳あるまい。この期に及んでもまだ現実から目を逸らそうというのか。

お前らだって気付いているのだろう。ゲームー星人を捕まえることは不可能であることを」

朋也「何言ってるんだ、こんな身体で生きていけるか」

近藤「そうだ！！俺たちは元の身体を取り戻す！！」

桂「では聞くが、何か得策があるというのか？」

.....

桂の質問に答えられる者はいなかった。口を噤んで黙ってしまった。

桂「もう、俺たちは真人間に戻ることは出来ない。ドライバーとしての現実を受け入れていくしかないんだ」

その言葉を受け入れようとしたのが、それともその言葉に絶望したのか。

オフ会が終わるまで、口を開こうとする者は居なかった

それ以来、彼らがゲーマー星人の事を口に出すことは二度と無かった

しかし、諦めていない女がここに1人…

猿飛「何よ！！みんな勝手に諦めて…信じられない！！私は必ず見つけたしてやるんだから！！」

オフ会が終わって5日が経ち、被害に遭ってから20日が経った。

彼らは自分の運命を受け入れてドライバーとしての人生を歩みながら学生生活を送っていた。

どうやら、卒業したら自分と同じような容姿の宇宙人の住む“ドラ

イバー星”や“ネジ星”に留学を決めた者もいるらしい

銀時は教壇の上に置いた椅子に座りながら、自習をしている2年A組の生徒たちの様子を見ていた

中間テストが近づいており、この学園の高等部にはテスト1週間前からホームルーム1時間前に集まり自習を行う“大自習会”なるイベントがある

2年A組の生徒もテストが近づいているためテスト範囲を見直している

ガラツツツ!!

自習をしているA組の教室に1人の女が入ってきた。猿飛である

「ゲーマー星人の居場所を見つけたわ」

「「なツツツ!!それは本当なの!?!」」

身体をドライバーにされた明日菜とヒナギクは猿飛に駆け寄る

「ええ本当よ。川崎の“串浜フーズ川崎工場”。最近、串浜フーズっていう会社自体が倒産して廃工場になっていたらしいのだけれど

その廃工場にゲーマー星人が出入りしているって」

明日菜「銀さん！私たちもそこに！！」

銀時「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は何も言わない。

ヒナギク「身体を元に戻す最後のチャンスなんですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わない

ダンツツツ！！！！

猿飛が教壇を叩く。

「それで、運命を受け入れたつもりなの！？それで現実を生きているつもり！？

本当の現実を生きたいなら現実と闘いなさい！！自分の運命を切り開いて自分の現実を創り出すのが生きるって事でしょ！！

たとえば、何になったとしても私は構わないから……だって私もチク……」

パライイイイイン

猿飛がなにか危険なことを言おうとしたところで銀時は彼女を外へと放り出す、というより投げ捨てる

銀時「喧しいメス豚だ…生徒達の前で放送禁止用語を言おうとしやがって」

そう言うと彼は何処かへ向かっていった

1分後

ピンポンパンポーン

高等部第一校舎全体に放送が流れる。

銀時“2年A組、B組、1年と3年のA組!!今日の午前の授業は特別授業だ!!宙地大戦に参加していた俺自ら、宇宙人の討伐の仕方教えてやる!!着いて来たい奴はドライバーを忘れんな!!”

銀時の呼びかけに、身体をドライバーにされた生徒たち全員が集まった

串浜フーズ廃工場

先輩「これで地球に思い残すことは無いな〜」

後輩「そうっすね〜。今度はどこの星にします?」

ドガツツツ

ゲーマー星人の乗っていた格納されたUFOに大きな穴が開けられる

先輩「何！！不審者か！？」

雪子「どうも〜、ドライバーで〜す」

当麻「上条さんたちのこと忘れては言わせねえよ」

めだか「私たちにおとなしく捕まってもらおうか」

先輩「さつさと離陸させるぞ」

後輩「ハイ！！」

グウォンウォン

ゲーマー星人のUFOは動き始めた

近藤「させるか！！動力源をぶっ壊すぞ！！」

桂「御意！！俺は右側をやる、貴様は左側を頼む」

カラン…コロン…

次々と動力源のネジを破壊していく桂に近藤、それに生徒たち

先輩「フッフッフ…」

ゲーマー星人の先輩はその姿を見て笑う

真冬「何がおかしいんですか」

先輩「いくら動力源を破壊したところでこの宇宙船をとめることはできない

メインブレインを破壊しなくちゃ。しかも、メインブレインはただのドライバーではこわせないぞ…?」

メインブレインのネジはボックスドライバーでしか壊せないものであった

銀時「そっか…、ならこれならどうかな…」

銀時はニヤリと笑いながらズボンのチャックを開ける

そこには光り輝くドライバーが

先輩「なツツツ…そのドライバーは…!」

第十八話：ハヤシライスとハツシュドビーフの違いって何！？（後書き）

ポケモン編はこれにて完結です。次回からは試召戦争編になります

第十九話： - カプロラクタムってなんかカッコいい（前書き）

まずお詫びが3件

第十八話でお知らせいたしました次回予告と違う話になってしまったことをここでお詫び申し上げます。

もう1つは登場作品の見直しを行いまして、登場しなくなった作品があります。その代わりに新たに登場した作品もあります…

3つ目は今回の話がデータやルール説明の文章ばかり、そして展開が早くてクオリティーがより低くなってしまつたということですが

それでは本編の始まりです

第十九話： - カプロラクタムってなんかカッコいい

ポケモン編から時間が流れ、今は月曜日から始まったテストが終わって水曜日に地域奉仕活動を行って2日ある答案返却日の2日目金曜日の帰りHRです。

ハヤテ「皆さん、テストどうでした？」

ナツル「言うな〜、その事はもう言うなよ…」

稟「俺もう終わったよ、もう留年決定だよ、何で数学があんなに難しいんだ」

明久「だよね！！何で最後の3問で京大と東工大と慶応大の過去問を出すんだらうね!？」

雄二「明久は最初の問題からできてなかっただろ、途中点で何とか点を稼いでいただろ」

明久「ウツ……」

どうやら図星だったよう。今回は数学が特に難しかったみたいです

因みにここでこの高校のテスト形式を簡単に解説しますと

国語<現代文、古文、漢文>200点80分

数学200点120分

英語記述200、リスニング50の計250点130分

社会科 倫理 + 政経 or 地理 100、日本史 or 世界史 100 の計
200 点 120 分
理科 化学 or 地学 100、生物 or 物理 100 の計 200 点 120 分

の合計 1050 点、570 分である。

銀時「オラオラ、席に着け〜俺だって早く帰りたいんだからさっさと HR 始めるぞ」

ガラガラガラ

生徒たちは席に着く

銀時「それじゃあまず、このクラスの成績上位者の発表を行おう。
霧島に坂上、これを適当なところに張ってくれ」

この高校では各教科の上位者 5 名ずつと合計得点の上位者 12 名が
掲示される

翔子と智代は銀時から上位者の名前が書かれたプリントを貰い、画
鋏で壁に貼り付けていく

ここでは、このクラスの合計得点上位 12 名を発表する

- 1、霧島翔子
- 2、姫路瑞希
- 3、ネリネ

- 4、杉崎鍵
- 5、三千院ナギ
- 6、桂ヒナギク
- 7、緑葉樹
- 8、坂上智代
- 9、近衛木乃香
- 10、木下優子
- 11、志村新八
- 12、美嶋紅音

因みに彼らは、合計点数1050点中800点を越えている

最低のほうは、合計点数で200点すら越えていない

銀時「言っておくが、吉井、土屋、神楽、島田、瀬能、土見、麻弓、シア、神楽坂、西沢！！てめえらは全員3割の350越えてねえけど、赤点にはしてないから心配すんな〜」

「○○○オイイイイ（チヨットオオオ）！！！俺（私）たちの点数を暴露しないでよ！！」

名前の呼ばれた者全員で銀時にツッコミをする

銀時「言っておくが上の10人の左から順に点数が低くなっている。最低の吉井は合計97点、その次は土屋で99点だ」

明久「ばらさないでよ！！プライバシーの侵害だよ！！」

康太「……公開処刑だ」

銀時「オイオイ、国語くらい出来るよ？折角今回のテストを2年前のセンター試験から借りパクしてきたのよオ。島田も含めて3人も10点台ってどういうことだよ」

美波「先生いい加減にしてよ！！点数ばらすのは！！」

シア「ってというか、国語ってセンターの問題だったの！？」

歩「確かに、全部記号問題だったけど…」

センターの過去問だったと気付かなかった者、特に国語で成績の悪かったものは驚いている。それに対して、

ナギ「なんだ、気付かなかったのか？」

ネリネ「どこかで見た問題だと思ってましたけどセンターの問題でしたか」

普段から勉強している者は気付いており、むしろ気付かなかったほうがおかしいという空気を醸し出している

明日菜「先生！！何でセンターから問題を出すのよ！！」

神楽「そうネ！！私たちにはまだ早すぎるネ！！」

凜「言ってくれば俺らだってもっといい点数が取れてたはずだぞ」

不平を言う成績の悪かった者たち

銀時「だって…めんどくさいじゃん。問題作るの。それに記述にしたらさ、内容や心情説明の問題とかで、かどうなのかいちいち考えるのもめんどくさいじゃん」

アア………ソーズスか………

銀時のめんどくさい発言に不平を言っていた者たちは呆れてしまい、何も言うことは出来なかった

銀時「もう何も言うことは無いな、てめえらもあと1年と数ヶ月で受験なんだからこれくらい出来るようになってよな。それじゃー、これで今日のHRは…」

終了と言おうとしたところで何かを思い出したのか、口を止めた

智代「先生、どうかしたんですか？」

銀時「忘れるところだったよ。このDVDを生徒に見させろってぬらりひよんに言われてたんだ」

ぬらりひよんとは、校長の近衛近右衛門の先生たちの間でのあだ名である

銀時は腰を上げて教室にある小型のテレビにDVDを挿入して電源を入れる

ちなみに同じ時間…

ネギ「それじゃあ、見てみましょう」

山口「じゃ、見てみっぞ〜」

2年B組とC組も同じDVDを見ようとしていた

まず始めに画面に映ったのは何処にでもあるような一般家庭のリビング

カメラの目の前においてあるソファーに一人の男が座った

身長は180ちょっと中肉中背といったところ、年齢は30代から40代くらいであろう。

顔は何故かオカメの仮面を被っており詳しくはわからない

??? 『はじめまして。私が誰だか分かるかな…まあ、仮面を被っているから分かるわけないか。ハッハ!』

声は一般的な男性と大して変わらない。しかし、笑うときとなると

声がソプラノレベルに高くなり鳩時計の鳩みたいに笑うためDVD
を見ている生徒たちはその笑い方にムカついている

??? 『ハッハ！ハッハ！！じゃあ僕の自己紹介をしよう。私の名
前は“天神すずき”こうみえてアラフォーの子持ちのこの学園の理
事長だ。ハッハ！！

何で僕チンが今日君たちにこれを見せているかというとね〜

聞きたい？聞きたいの？

聞きたいんだ〜〜エッチ』

「殴つていい！？ものすごく殴りたいんだけど！！何で変態扱
いされなくちゃいけないんだよ！！」

3つのクラスからほぼ同時にツッコミが浴びせられてそれは完全に
ハモった

天神『まあ、まずはこれを見てくれるかな』

理事長の天神はソファアの後ろのテレビをつけた

そこに映ったのは…

アウ…オウ…ノーーーーー

18禁のアダルトビデオだった。しかも老人男性のガチホモ系でしかもスカト という、誰に需要があるのか分からないとんでもない種類のものである

まあ、この理事長がこれを買っているということはこの理事長にはそういう性癖があるということになるのであるが…

ガハッゴホッ！！ウエツプ！！

「ふざけんなアア！！生徒に何とんでもない物を見せてるんだよ！！」

またもやツツコミ、しかもスカト なので完全に気分を悪くしている人もいる

「ハッハ！！ハッハ！！ハッハ、間違えちゃった。ごめんちゃいやい

今度はまじめに話そう。いいかい、ここからはまじめだよ？

なぜ、君たちにこれを見せているか…それは来年度から我が学園では今ある文化祭や体育祭、修学旅行やその他のオリエンテーション他に新たなレクリエーションを加えようと思ってね。君たちにはそのレクリエーションの体験をもらいたいんだ

そのレクリエーションの名前は…“試召戦争”」

ここから読者の皆様には、天神すすきに代わり私がルール説明します。

まず、この試召戦争とは“バカとテストと召喚獣”でお馴染みのあの試召戦争である

今回は各クラスの生徒全員で行われる

戦場となるのはこの学園の1平方キロメートル。戦場の敷地はほぼ正三角形の形をしている
ちなみに、1平方キロメートルはデイズニートとほぼ同じ大きさである

各クラスは陣地を持つ。陣地は正三角形の各頂点

今回の試召戦争で反映させられるのは前回の中間テスト

召喚獣の点数は英語と国語と数学は“点数×2”、それ以外の科目は“点数×4”の400点満点で計算

勝利条件は各クラスの陣地にいる他の2クラスの代表者を倒した場合

点数は攻撃を受けたり防御するごとに少しずつ減少する。0点になった場合、“戦死者”とみなされ戦争終結までの間、補習室で地獄の補習を受けることになる

相手が召喚獣を喚びだしたにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を

受ける

“回復テスト”があるが原作とはシステムが異なる

今回は総合科目での対戦はできない

各科目担当教師の立会いの元で召喚ができる。ただし選択科目の場合には違う科目でも召喚できる

(例、物理の教師の立会いの元で生物の点数で召喚。日本史の教師の立会いの元で世界史の点数で召喚 e t c)

その他にもテレビ番組“逃走中”にあるようなミッションが現れる

といったところである。

天神『分かってくれたかな。

ちなみに、このプレで優勝したクラスには一人当たり5万円相当の豪華な景品を与えるつもりだ。

この試召戦争のプレは来週の月曜に行く。うまくやってくれることを期待してるよ。』

ブツンツツツ!!

DVDは終わってしまった

銀時「試召戦争か…5万円相当の景品ってなんだろ…」

銀時の頭の中には景品のことしかなかった

次回へ続きます

第十九話： -カプロラクタムってなんかカッコいい(後書き)

この学園の理事長“天神すすき”はレギュラーキャラの中で唯一のオリジナルキャラクターです
名前の由来は福岡と北海道の歓楽街、“天神”と“すすきの”からです。

お知らせ

王蠱さんのご要望にお答えして“とらドラ”のキャラクターを2年C組に追加しました。

そのほか、キャラクターの一部見直しを行い登場作品の改正を行いました

また生徒の募集はこれをもって終了させていただきます

第二十話：キムタクって誰もが認めるイケメンだよ

そして、月曜日となり試召戦争当日

2年A～C組の各クラスはそれぞれの陣地で開戦を待っていた

各クラスの陣地は次のとおりで、陣地は直線距離で約800m離れている

A組 学園第五食堂1階

B組 学園中駅改札口

C組 学園第三体育館

今回試召戦争の行われる1平方kmの中は車の立ち入りを制限し、B組の陣地となる学園中駅は試合終了まで全ての列車を通過させ駅の業務を行わないこととなる。

あと各クラスの代表者

A組 霧島翔子

B組 霧谷希

C組 沢田慎

9：20 試召戦争開始10分前

陣地のテレビに映像が映る

そこに映っていたのは、理事長の天神すすきであった。今日はひよつとこの仮面である

天神『みんな、これを見ているかな？見ていなければ困るのは君たちなんだからしっかり見てくれなきゃ困るよ。』

はじめに、協力してくれた君たちには本当に感謝しているよ。どうも有り難う

後もう少いで開戦だ。準備はいいかい？

今回の試召戦争では時間制限がない、優勝のクラスが決まるまで続けられるよ。』

色々バリケードだとかを造ってもかまわないけど再起不能になるまで破壊しつくした場合はその者を失格させるからくれぐれも気をつけてね

今から10分後にチャイムが鳴るからそれが開戦の合図

健闘を祈るよ』

ザザザザザ...

放送が終わり、画面には砂嵐が起る

A組陣地 学園第五食堂

銀時「おい、てめえら準備はいいか？」

鍵「みんなオツケーですよ。あとは開戦を待つだけです」

歩「早く開戦時刻にならないかな〜」

神楽「私、凄くワクワクしてきたヨ」

深夏「他のクラスをコテンパンに叩きのめして優勝してやるよ。なあ」

ハヤテ「はい、僕たちには優勝の2文字しか見えてませんからね」

皆、開戦時刻を今か今かと待ちわびている

翔子「…もう一度、序盤の作戦の確認をしましょう」

ネリネ「そうですね、猪突猛進して大量の敵軍に囲まれてしまったらどうしようもありませんからね」

序盤の作戦は主に3つ。

1つ目、点数1/3未満の者はすぐに回復試験を受けに行き点数を稼ぐ

2つ目、いきなり闘おうとはしようと思わず、まずはB組とC組の間で戦わせて様子を観察する

3つ目、ミッションに参加する場合は必ず陣地に報告すること

である

まだ、最初のミッションが何なのか発表はされていない

分かっているのは開始と同時に最初のミッションのヒントとなる映像がテレビ画面に流れるということである。ミッションの具体的な内容が分かるのは開始5分後

銀時「何が何でも勝ってこい!!! いいな!?!」

「oooooooooooo!!!」「」「」

開戦10秒前、クラスは一致団結する

キンコーンカーンコーン

開戦のチャイムが学園中に響き渡る

美波「じゃあ、私たち回復試験に行ってくるわね」

凵「俺たちが試験受けている間にやられてるんじゃないぞぞぞ」

新八「心配しなくても大丈夫ですよ」

咲夜「せや、私たちに任せておき、頑張つてなー」

明久たち10名は回復試験を受けに外へ駆け出していった

ブツンツツ!!

チャイムが鳴り終わると、テレビ画面に映像が流れ始めた。

そこに映っていたのは学園内を走る京浜急行線の駅の一つ上大岡。学園から最速の列車で25分ほどの場所にある横浜市のベッドタウンの駅

玲士郎「これが、ヒントだということのか？」

賢久「電車が関係あんのか？」

画面に映像は上大岡のプラットホームを映していて、そのホームには行先表示が“団体”となった赤い京浜急行の列車が止まっていた。4両編成の新1000形車両である

パアアアアーン!!

パラリラリラ〜

その列車は警笛を鳴らしファンの間からはドレミファインバーターと呼ばれるモーター音を奏でながら走り出した

智代「この列車、この学園に向かっているな」

刹那「そうですね、列車が第一のミッションに何か関係しているのでしょうかね」

その頃、明久たちは回復試験の受けられる会場の一つに到着していた
そこにいたのは…

桂「来たか、回復試験を受けに」

教師でもない桂小太郎であった

シア「何でヅラさんがここに…」

明久「ヅラさん、教師じゃないでしょ？」

どうやら桂はA組の一部からはヅラと呼ばれているらしい

桂「ヅラじゃない桂だ。教師の奴らは召喚フィールドを造るのに忙しいからな。私がこの学園の理事長から直々に頼まれたわけだ」

ここで回復試験のルールを説明しよう

この試験では出される問題に1問だけ答えればよい。問題はほぼ常識問題である

問題に正解すると十面体のサイコロを振り、出た目に応じて点数)

400点満点)が増やせる

1の目、全教科+20

2の目、全教科+60

3～5の目、全教科+100

6～8の目、全教科+140

9の目、全教科+200

10の目、全教科+260

なおこの場合における期待値： $+126$ （ 1000 点換算で $+31.5$ ）

一度回復試験の問題に答えると一回以上参戦しないと次の問題に答える事はできない（初回を除く）

また点数が400点を超えてしまう場合、中間テストで満点を取っていない教科は398点となる

（これは満点を取っていないのに常識問題を答えたくらいで満点をとった気分を味あわせてはならぬという理事長の意向である）

桂「といったところだ。では誰から受けるんだ？」

明日菜「私から受けるわ。さっさと受けて早く参戦したいしね」

桂「分かった。第一問」

明日菜に出された問題はこれ

<次の読み仮名を書きなさい “風紀委員”>

明日菜（やった！！これなら解ける！！）

スラスラと解き、桂にフリップを突きつける

明日菜「これでどう!?!」

桂はそのフリップを見て言う。

桂「残念、不正解だ」

明日菜「ちよっと!?!どういう意味よ!?!“ふうきいん”でしょ!?!ふうきいん!?!何処が間違っているのよ!?!」

歩「もしかして“ジャツジメント”が正解なんじゃないのかな?」

桂「それも違う。答えは…これだ!?!」

桂はフリップに答えを書き、それを見せた

風紀委員^{カス}

明日菜「何処の国の常識よ!?!?!?!」

桂「まあ、攘夷志士の間では常識だな。他にもバカ、クズの集まり、何やってんのか分からないが正解となる」

明日菜「分かるわけないでしょ!?!そんな攘夷志士の常識なんて!?!」

桂「残念だったな、神楽坂。次は誰が受けるんだ?」

麻弓「次は私が受けさせて」
次に名乗り出たのは麻弓

そして、彼女に出された問題はこちら。

< 次の読み仮名を書きなさい “首相” >

麻弓（これは：普通に考えれば“しゅしょう”だけど、さっき明日菜はそのまま答えて不正解だった。つまりここは攘夷志士の気持ちになって答えればいいのよ。攘夷志士は日本を革命しようとしているから：今の政治を先導している首相はダメってことよね：貶す言葉を書けば正解よ！！）

そして麻弓はフリップに“ダメ”と貶す言葉を書いた

それを見て桂は

「残念、正解は“木村拓哉”だ。他にもキムタク、ゲッチュー、日本のイケメン代表、古代進が正解だ」

麻弓「何で漢字の読み仮名に漢字を使うのよ！！分かるわけないわよ！！」

桂「次は誰が受けるんだ？」

ナツル「なあ、もう止めないかこんな無茶苦茶な問題」

稟「そつだな、皆には悪いけど一問も解けなかったことにして…」

無茶苦茶な問題を出す桂に嫌気がさしたのかA組の陣地に戻ろうと

するナツルたち。しかし、

明久「ちよつと待ってよ！！諦めるのはまだ早いよ！！」

美波「アキの言うとおりだわ。ツラさん私たちに問題を出してください」

桂「うむ、よかろう。では問題はこれだ」

<ジャツキー・チエンを漢字で書きなさい>

美波（分かるわけないわよ！！普通に難しいんだけど！！映画ファンじゃなきゃ分からないわよ）

美波は結局分からず、白紙でフリップを出した

桂「ふむ…吉井、正解だ」

明久「本当に！？やったー！！」

美波「嘘！？何でバカのアキに分かるのよ！！ツラさん、正解はなんですか？」

桂「“鼻”だ。まあ一般常識だな」

明久「ジャツキー・チエンって鼻がでかかってよく言われるからこれが正解かな〜って思ってた」

美波「知らないわよそんな常識！！」

因みに本当の正解は“成龍”である。

無茶苦茶な問題だが、明久は答えることに成功したわけでサイコロを振る権利を手に入れたのである

明久「じゃあ、振るよ」

カランコロン…

明久の投げたサイコロが机の上で転がる

コロコロ・・・

やがてそのサイコロは静かにとまった。出た目は…

明久「やった！！9だ！！200点アップだ！！」

明久は見事9の目を出すことができた。全教科が200点ずつアップする

明久「諦めるのはまだ早いよ！！皆も解いてごらんよ」

ナツル「…そうだな、解いてみるか」

凜「吉井みたいに偶然解けるかもしれないしな」

その頃、正三角形をした戦場のほぼ中央にある会議室や各生徒会室、

図書室や食堂などが入ったのある24階建ての建物トルーマンタワーの前には…

(トルーマンタワーのトルーマン・N・シャルアは現理事長の祖父で、プロローグで話した通り、軍士官学校としてあった学園を買い取り、それまでの学園から戦争色を排除した人物である)

美緒『こちらA班、今トルーマンタワーの目の前よ、どーぞ』

翔子『…こちらA組陣地。了解。他クラスの様子を引き続き確認し倒してって、どーぞ』

美緒、ゆか、咲夜、ハルナがいた。

ゆか「ここまで敵クラスに一度も会わなかったね」

美緒「そうね、他のクラスは防御に徹しているのかしら？」

ハルナ「もしかしたら私たちは別の道を通っているのかもしれないわね」

咲夜「こっからどないする？B組とC組どっちに行ってみるん？」

美緒「そうね…まずはB組を倒して…」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

突然後ろから聞こえた声にハツとして、振り向くとそこにはB組の生徒たちがいた

愛紗「まず始めに私たちを潰すつもりか」

裕奈「でもそうはさせないよ」

美々「潰されるのは貴女たちのほうよ」

愛子「ボクたちに勝てるかな〜?」

最初の試召戦が開戦しようとしていた

その頃のA組陣地

ビーツ、ビーツ、ビーツ

テレビから警報音のようなものが聞こえる

新八「来た!!最初のミッションです!!」

ナギ「なんだろうな、めんどくさくなければいいが…」

テレビ画面に映ったのは理事長の姿。

『君たちが気になっていた。最初のミツシヨンの発表だ。その名も“列車を駅に停車させるな”だ』

このミツシヨンについて説明しよう

今、京急線を団体列車が学園に向かって走行している。この列車はちょうど20分後に学園入口駅に到着する

その中には“全宇宙の平和を愛するの会？”と名乗る集団が乗っており、この試召戦争に反対しており学園入口駅に到着次第、生徒たちの武力解体を行う。つまり強制的に捕まえるかタッチして全教科0点にしてしまう

彼らが動き出した場合の抵抗手段はまだない

これを止めるには方法は一つ、列車がホームに進入する前に駅の線路のポイントを切り替えて、列車をホームのない線路に通して通過扱いさせればよい

そのためには戦場内を歩いている駅員4人から10桁からなるパスワードを聞きだしそれをトルーマンタワーにいる情報部に伝えネットをハッキングさせてポイントを切り替えるのが唯一の方法

1人の駅員に聞くためには、1人が対価として各教科から-280点、若しくは2人で聞く場合は1人ずつ各教科から-140点しなければならぬ

また駅員は目印としてそれぞれ赤、青、緑、オレンジの帽子をかぶっている

忠告、駅員は1人2つずつしか番号を教えないため10桁の数字には分からない数字が2つ発生する。その2つは考えれば分かるはず

果たして、この超ハイリスクなミツシヨンに挑む者は現れるのか？

そして、咲夜やゆかたちの試召戦争はどうなるのか？

次回へ続く！！

第二十一話：南瓜は馬車にならないから煮物にしたほうが美味しい

A組陣地 学園第五食堂

ミッションの指令のVTRが流れ終わり、彼らが思ったのは同じことであった

ハイリスクであると…

のどか「どうします?」

紅音「このミッションに行ける人は限られますよね」

翔子「…確かに、全教科を7割以上とつていないとミッションには行けない。それにこのミッションを遂行する4人をここから出してしまったら、戦力を大幅に失うことになる」

優子「だからといって、ミッションが成功せずに時間を迎えたらそれ以上に戦力を失う…全滅するのが見えている」

ナギ「敵のクラスに協力を要請してみるか?」

玲士郎「それが一番いいのかもしれないがしかし相手側も戦力を温存したいはず、協力してくれるかどうかは分からん」

ピーッピーッピーッ!!

突然、TVから音が鳴った。この音はTV電話の音である。

TV電話は各クラス内で情報をやり取りするとき用いられる

新八「他のクラスが協力を求めてきたのでしょうか？」

鍵「とにかく出てみよう、俺が出る」

鍵はマイクをセットし、通話ボタンを押した
するとTV画面には他のクラスの様子が映った

B組は雪広あやか、C組は星伽白雪だった

鍵「もしもし〜？こちらA組の杉崎ですけど？」

白雪「こちらC組の星伽です」

あやか「よかった。皆さん出てくれましたわ」

鍵「もちろん出るよ。あなた達のような綺麗な女性と話せるんだっ
たら」

白雪「杉崎君の冗談は放っておいて、何ですか？やはり、あのミッ
ション…」

あやか「ええ、あのミッションは1つのクラスで行うとなるとハイ
リスクとなってしまう可能性が大。そうなってしまうとミッショ
ンに失敗してしまうと私たちは0点になるのをただ待たただけになっ
てしまいます」

そこで、このミッションを3クラスで協力して成功させたいのです』

鍵『なるほど…そういうことか。俺たちは構わないけど』

白雪『私たちも賛成です。だけど、ここで一つ問題が。このミッションに必要なのは4人。何処かのクラスが1人多く出すことになるのでは…?』

あやか『ええ、その1名は私たちのクラスから出しますので心配はいりません』

白雪『そうですか。なら交渉成立ですね』

鍵『そうだね、もうミッションまで16分しかない。急ごう』

ピーッピーッピーッ…

TV電話の電源が落とされた

ナギ『よかったな、あちら側から協力を要請してきた』

ヒナギク『でも、なんかB組のいいように事が進んでいる感じがしない?』

智代『確かにそうかもしれないがそれを気にする時間はないぞ』

翔子『…そうね、なら志村君行ってくれる?あと、美嶋さんも。何か異変があったら逐一情報を教えて。あと…』

新八「はい!!」

紅音「行ってきます!!」

2人は駅員を捜しに食堂を出て行った。何か忠告して

翔子「…あなたも行ってくれるかしら」

そのころ、トルーマンタワー前

小萌「承認します!!教科は政経+倫理or地理です」

「サモン試験召喚!!!!」

その声に対応して、幾何学の魔法陣が現れ召喚獣が姿を現す

『A組 愛沢咲夜&水無瀬ゆか&早乙女ハルナ&石動美緒

VS B組 関羽愛紗&明石裕奈

&宇佐見美々&工藤愛子

政経+倫理or地理 316&236&268&204 VS

208&256&228&320』

美々「フフ、ほぼ互角といったところね」

咲夜「12点差でウチたちが有利やけどな」

愛子「でもこの中で一番点数がいいのは私だよ？それにこの中で点数が低いのは石動さんのほうだし」

美緒「うるさいわよ！！やってみなくちゃ分からないわ！！」

まず最初に攻撃を仕掛けたのは美緒だった。武器は釘付きの金属バット

愛紗に襲い掛かるが大刀で攻撃を止められはじき返される

美緒「まだまだだよ！！」

もう一度、美緒は愛紗に襲い掛かるがさっきと同じで止められてしまう

愛紗「これも場数の違いというもの、闘いなれた私に勝てると思っただか」

バットをはじくと大刀で切りつけた

ダメージが大きく美緒の点数は0点となった

愛紗「フツツ…だから言ったものを」

ハルナ「愛紗ちゃん！！油断しちゃダメよ！！」

確かに始めての戦いで勝ったことに愛紗は油断したのかもしれない。

その隙をハルナは見逃さなかった。

ハルナの武器はアーティファクト「落書帝国」でスケッチブックに書いたものを召喚するというもの。召喚獣が召喚するというちょっとややこしい武器である

出てきたのは筋肉隆々の炎を身に纏った魔人

魔人は愛紗を殴る

愛紗も0点となってしまうた

西村「戦死者は補習だ!!!」

補習監督の西村が現れ、美緒と愛紗の制服の襟を掴むと補習室へ連行して行った

ハルナ「私たちも行く!!!」

咲夜「せやな、美緒さんの弔い合戦や!!!」

ゆかと咲夜の召喚獣が飛び出していった。武器は咲夜は鉄のハリセン、ゆかのは秋刀魚の形をした双剣であった

裕奈「私たちも行くよ!!!」

裕奈の武器はアーティファクトの「七色の銃」、愛子の武器は原作と同じで大斧、美々の武器は鞭であった。

遠距離の銃を持つ裕奈のいるB組の方が有利化と思われたが、ハルナが全攻撃無効化の「盾の乙女」を作り出して防御。

その間にゆかとか咲夜が攻め込んでいった。AとB両方ともほぼ同じペースで減っていく

そして…

『A組 愛沢咲夜&水無瀬ゆか&早乙女ハルナ

VS B組 明石裕奈&宇佐見美

々&工藤愛子

政経+倫理or地理 21&3&0 VS 0&0&0』

A組の勝利である。

西村「戦死者は補習！！」

0点になってしまったB組3人とハルナは補習室へと連行されていた

ハルナ「私はやられちゃったけど、二人とも頑張ってたね〜」

咲夜「ああ、任せとき！！」

その頃、ケータイには続々と駅員からの情報が集められていた

“B組の雪広あやかです。青色帽の駅員を発見し番号を確認。10桁の内下2桁は30ですわ”

“C組の阿久根だ。赤色帽の駅員の情報によると上2桁は64”

“B組の久保だ。オレンジ色帽の駅員に聞いた、上から3,4桁目は69だそうだ”

あとは、新八と紅音が聞くだけである

紅音「あとは緑色帽の駅員だけですわね」

新八「そうだね。何処にいるのか…アツツ!!」

新八は何かを指差す

そこには緑色の帽子をかぶった駅員がいたのだ

紅音「いた！早く聞きに行きましょう!!」

新八と紅音は緑色の帽子を被った駅員の元へと駆け寄る

新八「あの…!!すみません!!」

駅員「はい、何でしょう?」

紅音「パスワードを教えてくださいんですけど…」

駅員「はい、2人で聞くのでよろしいですね?」

「はい、僕はA組の志村新八です」

「私は同じクラス的美嶋紅音です」

駅員「分かりました、A組の志村新八と美嶋紅音…ですね?点数を差し引かせてもらいます。問題の番号ですが上から5と6桁目は6

と9です」

「分かりました。ありがとうございます!!」

新八と紅音は駅員にお辞儀をする。駅員の方も軽くお辞儀をする。何処かへと歩いていった

「あとはこれをメールで送信するだけですな」

紅音はケータイを取り出してメールを打とうとする。

しかし…

実乃梨「ちょっと待ってもらおうか!!」

泉「紅音ちゃんたちにメールは打たせないよ!!」

小鷹「メールを打つ前に俺たちが消す」

準「覚悟するんだな」

B組の泉と準、C組の小鷹と実乃梨の姿である

泉「ユキちゃん、召喚フィールドお願い」

雪路「承認するわ!教科は世界史or日本史!!」

「試験召喚!!!!」

4人の召喚獣が姿を現す。実乃梨はバットと硬式ボール、泉は光線銃、小鷹と準一はメリケンサックと鉄パイプである

敵が召喚した場合必ず召喚しなければならず、放棄してしまうと戦死者とみなされてしまう。

2人も召喚せざるを得なかった。新八は竹刀、紅音はガバメント系の銃である

『A組 志村新八&美嶋紅音

VS B組 瀬川泉&長瀬準一

VS C組 榎枝実乃梨&羽瀬川小鷹

世界史or日本史 184&192 VS 160&2

04 VS 232&336』

紅音「B組とC組が協力している？」

新八「そうみたいです。僕たちが番号を聞いてその番号を連絡するまでのわずかな間を狙ってきたんですね」

紅音「なるほど…連絡できなければまた新たに犠牲を出す必要がありますからね…」

小鷹「そこで話してる暇なんてねえぞ」

小鷹と準一が新八に襲い掛かる

その後ろからは泉と実乃梨が光線とボールを撃ちつける

前衛と後衛がうまくとれている

新八と紅音も必死に応戦するが…

新八「そ…そんな…」

まず新八が0点となった

紅音の点数も残り53点である

BとCの4人はまだ100点以上残っている

果たして紅音はこのピンチを切り抜けることができるのか!?

次回に続…

「イワンコフ「続かなーい!!まだ第二十一話は終わらなーい!!」
!」

「「「「「終わらないのかよ!!一本取られたよ!!」「「「「「

突然、イワンコフが現れた。紅音たち5人はツッコミをしてしまう

「私もいるヨー!」

「…ここは、任せろ」

イワンコフの後ろにはマジョーリカと康太の姿があった

「魔女さんに土屋君!!なるほど…」

紅音は何かを理解した様子

バチョーリーーン

突風が吹き、世界史or日本史のフィールドを造っていた雪路が吹き飛ばされる

この突風はイワンコフのただのまばたき“DEATH WINK”である

「ちょっと!!何すんのよ!!」

雪路は必死にイワンコフに抗議するが…

「今からここはヴァターシの物理or生物のフィールドになるわ! ヒーハーヒー!!」

物理or生物のフィールドが広がっていく、ちなみにイワンコフは生物の教師である

マジョーリカの武器はバズーカで南瓜型の爆弾を撃ちつけるもの。康太のものは原作と同じで小太刀の二刀流である

『A組 美嶋紅音&土屋康太&マジョーリカ・ル・フェイ

V S B組 瀬川泉&長瀬準一

VS C組 櫛枝実乃梨&羽瀬川小鷹
物理or生物 184&398&400 VS 200&176
VS 244&348

泉「400点と399点!!」

実乃梨「ずるい!!反則だよこれ!!」

準一「土屋、お前なんでこんなに成績がいいんだよ!?!」

康太「…今回の生物のテストの範囲が“生殖”だった。だから興味を持って勉強が出来て76点取れた。あとは回復試験に正解して3の目が出たから」

マジョーリカ「ここは私たちに任せるヨー!今の内にメールを打つヨー!」

「はい!!」

紅音はケータイを取り出して急いでメールを打つ

「…させるか!!」

小鷹と準一の2人が紅音に襲い掛かるが

「無理ヨー!お前らは私たちには勝てないヨー!!」

「…僕たちが負けるわけがない」

マジョーリカ「戦争とは残酷なものヨ！」

『A組 美嶋紅音&土屋康太&マジョーリカ・ル・フェイ

VS B組 瀬川泉&長瀬準一

VS C組 榎枝実乃梨&羽瀬川小鷹

物理or生物 184&398&400 VS 0&0 VS

0&0

A組の勝利である。

紅音「メール、送信しました」

メールも無事に打ち終わり、各陣地には分かる範囲の全ての番号が出揃った

646969 30

あとは7、8桁目の番号である

果たして7、8桁目には何が入るのか？

ミッション終了まで残り7分。ミッションには間に合うのか!？

今度こそ次回に続く!!

第二十一話：南瓜は馬車にならないから煮物にしたほうが美味しい（後書き）

後書き

瑞穂さんのご指摘により、登場作品の見直しを行いました

また吉井明久さんの要望にお答えして“僕は友達が少ない”のキャラクターを追加しました。

この吉井明久さんの分を持ってキャラクター要望は終了させてもらいました

ここから先キャラクター要望をしても受け付けません

番外編 バカテスト（前書き）

今回は試召戦争編の途中ですが“バカとテストと召喚獣”でお馴染みのバカテストを書こうと思います

なお第一問から第三問は他サイトで別名で書いたことがあり、それを読んだ方がいるかもしれません

番外編 バカテスト

第一問 化学

問 次の16族元素を原子量の軽い順に並べ、その名前も答えなさい
S Te Po Se O

姫路瑞希の答え

『 O S Se Te Po
酸素 硫黄 セレン テルル ポロニウム』

教師のコメント

正解です

土屋康太の答え

『 O S Se Te Po
おー すばらしい セツ ス ティーチャー ポルノ映画』

教師のコメント

並べ方はあっていますが覚え方を書けとは言ってません。それに書いている人に自粛させるような覚え方をするのはやめなさい

第二問 倫理

演繹法を使って物事を推察した文章を作りなさい

坂上智代の答え

「果物は樹木になる。 リンゴは樹木になる。 よってリンゴは果物である」

教師のコメント

正解です

綾崎ハヤテの答え

「人間は何時かは死ぬ。 虎鉄さんは人間である。 よって虎鉄さんは何時かは死ぬ。 ていうか何時かじゃなくてさつさと・・・」

沖田総悟の答え

「人は何時かは死ぬ。 土方は人間である。 よって土方は何時かは死ぬ。 さつさと死ね」

教師のコメント

正解ですが、そのような考え方を決して口にしないでください。 いじめへの第一歩です。

吉井明久の答え

「じゃんけんにおいて、グーはチョキに勝つ。 パーはグーに勝つ。 よってパーはチョキに勝つ」

教師のコメント

どこがおかしいと気付きませんか？

第三問 物理

ブルーレイディスクがなぜ“ブルーレイ”を使うのか理由を説明しなさい

瀬川虎鉄の答え

「DVDやCDに使う赤色レーザーよりも波長の短い青色レーザーを使うことにより、より多くのデータを読み込ませることが出来るから」

教師のコメント

正解です。さすがソニーの社長のご子息ですね。

瀬川泉・平沢唯の答え

「“ブルーレイ”って名前を使ったほうがカッコいいから」

教師のコメント

そんな単純な理由で使うわけ無いでしょ。瀬川さんはソニーの社長の娘さんとは思えない答えですね。

第四問 世界史

『新約聖書』の「福音書」などに伝わり、イエスに洗礼を授けた洗礼者ヨハネの首を求めた人物として、キリスト教世界では古くから名が知られ、その異常性などから多くの芸術作品のモチーフとなった“ヘロディアの娘”とも呼ばれる人物を答えなさい

宮崎のどかの答え

サロメ

教師のコメント

正解です。

主な異常性としてはユダヤ王ヘロデがサロメに踊りを踊るように告げ、その褒美として好きなものをそれが国の半分であったとしても与えると誓い、それに対しサロメはヨハネの首を求めサロメは首だけとなったヨハネを持ち上げ口付けをしたことが知られています

坂本雄二の答え

霧島翔子

浦島太郎の答え

竜宮乙姫

教師のコメント

先生は貴方たちが無事にここを卒業でき、天寿を全うできることを祈ります

番外編 バカテスト（後書き）

現在進行中の試召戦争編が終わった後は

- 1、文化祭各クラス企画決定（文化祭は時間軸で7月中旬を予定）
- 2、カップルおよびカップル予備軍に襲い掛かる紳士の会からの試練
- 3、“IS”、“オオカミさん”、“アスラクライン”のヒロインたち9人の目の前に現れたのはあの洞爺湖仙人！？
- 4、男の娘ナンバーワン決定戦！！
- 5、超短編。あいつの縦笛が盗まれたを書く予定です。

ちなみに2番で書くカップル・その予備軍は
ハヤテ×ナギ ヒナギク×東宮 雄二×翔子 涼子×亮士 浦島×
乙姫 結弦×かなで 朋也×渚 ユイ×日向
の8ペア。

3番に登場するのは

篠ノ之箒 セリシア・オルコット 鳳鈴音 シャルロット・デユノ
ア ラウラ・ボーデヴィツヒ 大神涼子 赤井林檎 水無神操緒
嵩月奏

の9人。

4番で書く男の娘は

綾崎ハヤテ 吉井明久 瀬能ナツル 夏目智春 桐木リスト 葉山
辰吉 砂土太郎 田貫まこと
の8人。なお、木下秀吉は殿堂入りとなっています

ここで皆さんにアンケートをとろうと思います。

1～5の内で皆さんが見たいと思うものを第3希望まで番号で一言

欄に書いてください。第1希望を2ポイント、第2・3希望を1ポイントとして数えます。投票は1人1回まで
期間は2月15日までです

第二十二話：コンビニは近藤さん家のビニールハウスの略じゃね？（前書き）

桂「さして今回のお話は

マツコデラックスの脂肪吸引生中継

あの不倫騒動から1年、タイガーウッツズの衝撃告白“私ゲイなんです”

海老蔵に聞く美味しい灰皿テキーラの作りかた

の3本だ」（サザエさん風に）

銀時「オイイイイイイ！！勝手なことを言うなアアア！！違うからね！？試召戦争編の続きだからね！？」

作者「という訳で試召戦争編四話目ご覧ください。あとアンケートも実施中ですよ、まだ投票してない方はドシドシ投票してください。詳しくは番外編バカテストの後書きを見てくださいね〜」

第二十二話：コンビニは近藤さん家のビニールハウスの略じゃね？

A組陣地

紅音からのメールが届き、番号と状況が報告された

ここに居るのは上位5人と雄二とハヤテだけである

雄二「分かる範囲の全ての番号が出揃ったが、恐れていたことが起こったな」

翔子「…そうね。B組とC組が協力している」

B組とC組が協力しているということも…

ネリネ「予想していたんですか？このような状況になるって…」

雄二「ああ、昨日。翔子と少し作戦会議をしたんだがな…地理的にBとCは協力しやすいんだ」

雄二と翔子の考えはこうであった

この戦場はJR線と京浜急行線の線路が戦場のほぼ真ん中を通っており線路で約半分に分けられている

戦場内で線路を渡るには2箇所の踏切と2箇所の地下通路、さつき咲夜やゆかたちの戦場となったトルーマンタワー前の橋上歩行者専用通路（ペデストリアンデッキ）の5箇所だけである

陣地の配置は線路の西側にA組、東側にB・C組である（B組の学

園中駅は西側にも出口があるが戦場外となり西側に行くことはできない)

BとC組が組み、上記の通路を高得点のメンバーで封鎖してしまえばA組は簡単に攻めることは出来ずに守りが厚くなる。

守りは厚くなるがBとCの60人以上の大人数で攻めこみ、回復試験を受ける隙も与えなければあつという間にA組は討ち取られる

そのため、BとC組が協力するのは十分にありえるのである

ナギ「なるほど…確かに通路を封鎖されては東側に行けなくなる」

鍵「だからと言って、そこに戦力を注いではこちらの防御が薄くなるからな…彼らは俺たちに攻撃させない気が」

瑞希「それよりも、今はパスワードの解読が先決です。誰か分かる人はいますか？」

しばらく彼らは考え込む…

翔子「…あつ…」

雄二「どうしたんだ翔子、思いついたのか？」

翔子「…たぶん7桁目が3で8桁目が2だと思う。1〜3桁目、4

6桁目のように区別して考えたら1と3番目は3に2番目は2にそれぞれ2と3を掛けたものだから…」

ネリネ「同じ法則性で出来ているとすると9桁目と7桁目は同じだ

から3、3は3×1だから8番目は1に2を掛けた2というわけですね

雄二「でもそれじゃあ在り来りじゃないか？」

ハヤテ「でも在り来りで良いんじゃないやありませんか？理事長さんも考えればすぐに分かりますと言っていましたし」

ナギ「それに64億6969万3230は10桁の数字の中でも特殊な数字だからな」

ハヤテ「どういう意味ですか？」

ナギ「64億6969万3230は素因数分解していったとき、全てがダブリのない素数になるんだ」

6469693230＝2・3・5・7・11・13・17・19・23・29ですからね、

もし、これが信用できない方は1から順に電卓で素数を掛けてみてください

鍵「じゃあ、その6469693230をトルーマンタワーの情報部に伝えよう。トルーマンタワーの近くには誰がいる？」

瑞希「さつき、遊撃隊の春風さんと黒崎さんがトルーマンタワーの前でゆかちゃん達に合流したといっていました。美緒ちゃんとハルナちゃんが戦死したとも言っていましたけど」

雄二「ならその4人に頼もう。あと5分だ」

翔子はメールに番号と現在の状況を書くとそれを送信した

トルーマンタワー前

朱湮と千桜は2人と合流していた

ピロリロ〜ン、ピロリロ〜ン

朱湮「メールが届いたわ。霧島さんからね」

朱湮の携帯にメールが届き、4人はそれを見る

“ 題名：パスワードが分かりました

本文：パスワードは6469693230だと思っ。

もし違う場合は急いでそれを報告して。

あと、B組とC組が協力しているから、それにも十分気をつけて”

ゆか「BとCが協力しているですか…」

咲夜「そうみたいやな…けど今は情報部に伝えるのが先や」

千桜「そうですね、行きましょう」

4人はトルーマンタワーの中へ入る

トルーマンタワーの中には2人の女の姿があり、4人は声をかける

朱湮「貴女たちが情報部でいいのかしら？」

初春「はい、電車のパスワード分かりましたか？」

涙子「正解でしたら私たちがポイントを切り替えます」

朱湮「OK、パスワードは6469693230よ」

初春「分かりました」

初春は起動させてあるパソコンを動かし、パスワード入力画面へと移る

そして朱湮に言われた番号を入力しENTERキーを押す

“パスワード正解です。ただいまより学園入口下り線ポイントは急行線に切り替わります”

キイイイ

学園入口駅の手前にあるポイントレールはホームのない急行線へと続く線路側へ切り替えられた。タイムリミット1分30秒前である

涙子「おめでとございます。ミッション成功です」

咲夜「よっしゃー成功や!」

ゆか「よかったです」

千桜「これも皆さんで協力したおかげですね」

朱湮「そうね、でもここからが本番よ、見て」

ゆか「うゆ?」

トルーマンタワーの入場口へと向かいながら朱湮は何かを指差した

千桜「あれは…」

入場口の前には4人の生徒と1人の教師の姿であった。生徒のほうはもう召喚獣を召喚している

さつきフィールドを作ってくれた月詠小萌ではない

朱湮「私たちが潰すみたいね」

千桜「そうですね、フィールドを通らなければ建物外へ出られませんしね」

咲夜「あれは…物理のフランキー先生やな…」

ゆか「教科は生物か物理だね」

4人が自動ドアを抜けると…

虎鉄「お前らをここで倒してやる」

ウソップ「覚悟しろよな」

朱理「BとCが協力しているのは本当だったのね」

白雪「ええ、協力してますよ」

夜空「まあ、私は協力するのは苦手なのだが…」

ウソップ「フランキー、フィールド頼むぜ」

フランキー「承認する！教科は物理or生物だ」

「「「試験召喚！！」」」

咲夜たち4人は自分たちの召喚獣を呼び出した

朱理はショットガンとミサイル、千桜はメイド服でクリームパイ型の爆弾を投げるといったものであった

一方敵陣はというと、虎鉄は巨大スパナ、ウソップは火薬星などのパチンコ、白雪は日本刀“イロカネアヤメ”、夜空は半月刀である

『A組 愛沢咲夜&水無瀬ゆか&春風千桜&黒崎朱湊

VS B組 瀬川虎鉄&ウソップ

VS C組 星伽

白雪&三日月夜空

物理or生物 302&224&288&252 VS 40

0&388 VS 380&380』

BとCの4人は満点の400点近い点数だがA組の4人の平均は約266点

A組で最高の咲夜でも80点以上の差の開きがある

なぜ、生物or物理を選んだのかというとB組の虎鉄とウソップが物理を満点近い点数を取っていたからである

そして戦いが始まった

まず始めに動き出したのはウソップであり、彼は4人に向かってパチンコで弾を撃ちつけた

着弾するとポンと音を立てて小さな爆発を起こし、咲夜たちの召喚獣の周りには濃い煙幕が広がる

濃い煙幕により操る4人からも召喚獣の姿は見えなくなる

その間にも接近戦用武器の3人は煙幕の手前に移動する。晴れると同時に攻撃を仕掛けるのである

パシユン、ピユン!!

煙幕が続く間もウソップは火薬星と鉛星を煙幕に向かって放ち続ける

それは当たっているのか、少しずつであるが4人の点数を減らしていく

ウソップ「どうだ？姿が見えないから攻撃が出来ないだろ？」

朱浬「そうね…だけど、私は見えなくても出来るのよ？」

ウソップ「何ッッッ!？」

煙幕の中から小型ロケット状の何かが出てきた

虎鉄「あれは、ミサイルか!？」

「ピンポーン、大正解。ミサイルなら目標物が見えていれば確実に攻撃できるでしょ？」

朱浬から放たれたミサイルはBとCの4人に向かって突っこんでくる

避けようとしても4人は捕捉されているため追ってくるのだ

着弾するとミサイルは爆発しダメージを与えた

煙幕も晴れてきてA組の召喚獣の姿も見えてきた

白雪「行きます！！覚悟してください！！」

白雪たち接近戦の3人と4人との間は煙幕で分からなかったが結構近かったらしく間をつめると攻撃の隙を与えないスピードでダメージを与えていく

その間にも朱湮がミサイルやショットガンでダメージを与えるがA組の攻撃といえればそれだけである

朱湮もウソップの火薬星や火炎星からの攻撃を受けて点数が減っていく

『A組 愛沢咲夜&水無瀬ゆか&春風千桜&黒崎朱湮

VS B組 瀬川虎鉄&ウソップ

VS C

組 星伽白雪&三日月夜空

物理or生物 0&0&0&0 VS 320&308 V

S 300&300』

A組の4人は負けてしまった

西村「戦死者は補習ウウウ!!!」

咲夜たち4人は補習室へと連行されていった

虎鉄「作戦成功だな」

ウソップ「ああ、トルーマンタワー前の連絡通路制圧完了だ」

その頃、他の場所でも制圧活動は続いていた

あやか「こちら南側地下通路です。木下秀吉さん、沙原さん、西沢さんを討ち取り朝倉さんとともに制圧完了です」

竜児「こちら北側地下通路、皐月と瀬能を討ち、北村と共に制圧完了」

桂馬「北側踏切。誰もいないので一先ず制圧完了」

星奈「南側踏切、こつちも誰もいないから制圧完了よ」

その頃、A組陣地である第五食堂入口周辺

ここには美波、木乃香、刹那、神楽、深夏、千雨がおり、敵が来るか監視をしていた

しかし、入口のドアの前に陣取っている訳ではなく階段や自販機の影やロッカーなどに隠れてもし敵が現れたら奇襲攻撃を行うつもりなのだ

6人は一緒の場所に隠れている木乃香と刹那以外、味方からも自分たちの姿は見えていない

千雨『みんな配置についただろうか？』

刹那『はい、お嬢様と共に問題ありません』

神楽『準備万端ネ』

美波『こっちも問題ないわ』

深夏『これで本当に大丈夫か？』

ちなみに彼女たちは現在無線機でやりとりをしています

千雨『もう一度、霧島から伝えられた作戦を確認するぞ

基本的には敵が来た場合、返り討ちにする』

深夏『ああ、だが10人以上の大人数で来た場合は一度入口を通してそこに待ち構えているヒナや本屋、木下さんたちと共に囲い込み攻撃でいいんだよな』

木乃香『みんな、気をつけてな〜』

刹那『各自異変があったら連絡をお願いします』

千雨『すぐ動けるように、準備しておけよな？』

『OK!~!』

『任せてください!~!』

『分かったわ!~!』

『Z~~~~~』

プチッ

(はあ、何で理事長はこんな事を考えるのか…よっぽどの暇人なのか…)

千雨は無線機の電源を切ってそんなことを考えながら監視を行っていた

(こんなことさせてる暇があったら学生なんだから勉強させるよな…まあ、勉強が苦手の私が言う筋合いはないけど…)

私たちだって暇になんだよ…さつきも無線機からイビキが…イビキ!?)

プチッ!~!

もう一度、無線機の電源を入れて怒鳴る

『オイ！誰か寝てる奴いないよな！？一人でも欠けたらここの防御は脆くなるんだぞ？もう一度点呼を取る！！』

『問題ないわ』

『ちゃんと起きてるって』

『Z~~~~~』

『せつちゃん、からあげクン何味食べよか？』

千雨『何勝手にローソン行ってからあげクン食べようとしてんだよ！？今攻め込まれたらどうするつもりだ！？今ローソンに行ってる奴今すぐ戻って来い！！』

美波『OK!!』

刹那『買い物済ませたら戻るから待っててください』

神楽『Z~~~~~』

深夏『ちよつと、誰か神楽ちゃん背負うの手伝ってくれない？私もう疲れたから』

千雨『全員ローソンに行つてんじゃねえか!! どういう神経してるんだよ! ?』

ちよつと待て! 神楽もしかしてローソンで寝てたのか! ? 一体どう
いう状況だよ! !

行くならいくで誘つてくれれば良いじゃん! 別に行きたくないけど
! !

そうだ、誰かしチキ買つてきてくれないか? チーズ味で良いから』

『 『 『 『 『 Z ~ ~ ~ ~ ~ 『 『 『 『 『 『

千雨のお願いに声はなくイビキだけが無線機から聞こえる

『 嘘ついてんじゃねエエエ! ! ! 』

ブツンツツツ! !

千雨は無線機の電源を切つてしまった

(なんだよ、あいつら! ! 頭にくるな! ! 人に仕事押し付けやが
つて、こんなのやってられっか! !)

千雨は隠れていた自販機裏から出てきてA組の陣地に戻ろうとした

しかし . . .

(なんだ…アレ…)

千雨が東側を向くとそこには二十数人の人間がこっちに近づいてくるのが見えた

ちなみにローソンは第五食堂から南側200mにあり方向が違う

千雨(とうとう、来やがったか…さて…どうする???)

食堂入口の護衛は千雨1人だけ、あとはローソンで買い物中

あの人影は誰なのか？千雨は陣地の入口を守ることが出来るのであろうか!!

次回に続く

第二十二話・コンビニは近藤さん家のビニールハウスの略じゃね？（後書き）

次回は急展開を考えています。たぶん次回で試召戦争編は1/2から2/3ぐらいまで行くと思います。そのため、次回は戦闘シーンばっかです

第二十三話：オリンピック作戦（前書き）

“美しい隣人” 本当にパネエ！！

浮気をわざわざばらした理由が“貴女のその（不幸な）顔が見たかったからだわ” って！！（笑）

人の不幸は蜜の味ってこの事なんですね。こんなこという私ってS
なんでしょうかね

皆様、投票ありがとうございました。アンケートの結果は後書きに表示させていただきます。またそれらの話のOP、ED情報も掲載
させていただきます

明日には国立大の受験もあるけど、合間を縫って書いた作品をご覧ください
ください！！

あと、ついにこの学校の名前が決まりました。すごい厨二くさいで
すが。

その名も桃源郷学園^{パラダイス}

第二十三話：オリンピック作戦

現時点での人数

A組… 35人

B組… 36人

C組… 34人

ほぼ同じである

なお、BとCの人数が少ないのは開戦直後に小競り合いをしたため、BとCが協力をし始めたのは第一のミッションの約5分後である

千雨の目の先に写る大人数の敵の姿

(団体さんでついに来やがった…一緒に居る教師は…織斑と高畑か、数学に英語だな)

千雨は敵の人数と同行していた教師、織斑千冬と高畑・T・タカミチの姿を確認するとヒナギクたちの元へと向かった。

その際、無線機の電源を入れて…

『おい!! ついに来たぞ、敵陣が動き出したんだ!!』

木乃香『あつ、千雨ちゃん? 実はしちきのチーズ味、売り切れてて無いんやて』

『しちきはもうどうでもいい!! だからさっさと!!』

刹那『千雨さん、お嬢様に強く言いすぎです。お嬢様は折角千雨さんのために…』

木乃香『せっちゃん、そんな気にせんでええって。今、救援で神樂ちゃんがペットの定春くんと共に向こうだから、私たちが戻るまで頑張ってるよ』

『さつさと戻って来いよ、でも神樂って寝てるんじゃない…』

千雨は神樂の心配をしながらも、入口で待機していたヒナギクやのどか達と合流した。

玲士郎『どうした？』

千雨『ついに敵が攻め込んできやがった。しかも大人数だな』

夕映『千雨さん、このかさんや刹那さん達はどうしたのですか？』

千雨『…それが、ローソンに行っている。たぶんすぐ帰ってくると思うが』

優子『ローソンって…一体何考えてるのよ…』

ワンワン

外から聞こえてくる犬の鳴き声

定春と共に神楽が戻ってきたのだ

「おい、神楽！寝てないだろうな!？」

千雨はそう言いながら、定春の背に乗る神楽に近づく

だが彼女の心配は的中してしまい…

「ZZZZ~~~~~」

「やっぱり寝てるじゃねえかアアアア!！」

ヒナギク「えっ?神楽ちゃん、寝てるの?」

「ZZZZ~~~~~」

のどか「寝てますね」

明久「神楽ちゃん?ダメだよ、今戦争中なんだから、命取りになるよ?起きないと…」

「ウルサイツツツ!!普段この時間、銀ちゃんの退屈な現代文の授業だから眠たいのヨ〜」

神楽は眠りを妨げられて不満なのか、明久の脳天にチョップをかます。そしてまた眠りについてしまった

「ギヤアア！！頭が！！頭が裂けるウウウウ！！」

眠っていて、力の調整ができていなかったのかそのチョップはとても強力で明久は頭を抱え身もだえしながらのた打ち回った。

神楽の寝ながらのチョップは無線機を破壊するほど威力がありますからね〜

ヒナギク「ちよつと！！吉井君大丈夫！？」

玲士郎「…吉井の心配をしている暇はなさそうだ」

「佐伯君！？それどういう意味？僕、頭が裂けるかと思ったんだよ！？」

夕映「確かそのようですね」

「酷いよ、綾瀬さんまで！！少しは僕の身体を気遣ってよ！！」

玲士郎「吉井よ、入口を見ってみろ」

「ふえっ??？」

明久は玲士郎に言われるがまま入口を見る

そこには、B組とC組の生徒がいたのである。

「ついに来たわね」

「そのようですね…目測で20人前後はいますね」

正確にはB組14人、C組7人の計21人だ。ちなみにここいるA組の人数は寝ている神楽を含めて8人である

織斑「試験召喚を承認する！！教科は数学だ」

「」「試験召喚！！」「」

ヒナギク達は自分たちの召喚獣を呼び出す。敵陣も召喚獣を呼び出している

ちなみに召喚獣のほうも寝ている

「むにゃ…サモン…」

神楽も偶然であろうか、寝言で“サモン”と言い召喚獣を呼び出した

ヒナギクの武器は木刀・正宗と白桜の二刀流、夕映はアリアドネー騎士団の剣と自身のアーティファクトの「世界図絵」、のどかも辞書形のハンマーと自身のアーティファクトの「いどのえにつき」である。千雨は魔法少女のコスチュームにハンマーとしても使える魔法ステッキ形のアーティファクト「力の王笏」、玲士郎の武器は機巧魔神「翡翠」、神楽は普段日傘として使っている銃器傘、明久と優子は原作どおりで木刀とランスであった

ヒナギク「それで、誰が私たちの相手をするのかしら？」

「俺らが相手だ」

「A組にはここで消えてもらおうぜ」

最初に出てきたのは内山春彦と南陽一、橘ワタルと都築巧である

『A組 佐伯玲士郎&木下優子&神楽&吉井明久

B組 橘ワタル&都築巧

C組 内山春彦&南陽一

数学 280&364&80&234 VS 278&160 V
S 120&50 『

玲士郎「こんな奴ら、僕一人で十分だ」

玲士郎の“翡翠”はブリザードを引き起こし向かってくるワタルたちの召喚獣にうちつける。ブリザードは少しずつではあるが彼らの点数を減らしていった

ワタル「だが、そっちには寝てる奴がいるんだ!!」

巧「悪いけど、まず神楽を倒させてもらおう」

ワタルと巧の召喚獣は未だに寝ている神楽の召喚獣を襲う

ワタルはの武器はメイス、巧の武器はケーキナイフのような形をしたロングソードである。

Cの内山と南はスパイクド・クラブと呼ばれる先端部に何本もの棘の打ち込まれた欧州を中心に使われた棍棒である

しかし…

ダンッダンッダンッ!!

銃の乾いた音が響く

「乙女の眠りを妨げるんじゃないヨ。それに、夜兔をそんなになめるんじゃないネ」

優子「神楽ちゃん、起きたの??」

神楽「もうバツチリヨ。それに、いつもこの時間は織斑先生の数学の時間だからどうしても目が覚めちゃうネ」

明久「織斑先生、授業中に寝るの許さないからね〜」

織斑「当たり前だ。授業中に寝る奴を許さん教師が何処にいる」

神楽「さて、ここから本領発揮スル、覚悟するヨロシ」

神楽は傘で攻撃を防御しながら、銃弾を身体に撃ちつける

ワタルと巧の点数はブリザードと銃撃により減らされていく、しかし神楽のほうも防御しているが点数は少しずつ減っている。神楽と巧の間にはダブルスコアの差があり、ワタルとは3・5倍もの差がある。

そして

神楽…0点

ワタル…0点

巧：0点

相打ちとなり、3人は補習室送りとなった

内山「畜生オオオ！！」

南「俺ら出番これだけかよ！！」

内山と南のほうも、優子と桂の問題に正解して点数のアップした明久によって撃退されてしまった

一方、高畑の英語側はというと…

ちなみに、こちら側は全員B組であった

『A組 桂ヒナギク&宮崎のどか&綾瀬夕映&長谷川千雨

B組 朝風理沙&馬超翠&劉備桃香&佐々木まき絵

英語 384&366&260&192 VS 130&170&
242&152』

点数ではAが圧倒的に有利である。しかしそうは問屋がおろさない。

パアアン！！パアアン！！パアアン！！パアアン！！

理沙の召喚獣は9mm拳銃のような銃であった。

銃弾をヒナギクたちの召喚獣に撃ちつけるが、彼女たちの点数は変化しない

その代わりに…

ヒナギク「私たちの召喚獣の動きが鈍ってる？」

理沙「ああ、麻酔弾を撃たせてもらったからな。完全に動きを封じることが出来ないが鈍らせることは出来る」

桃香「動きが鈍ればいくら強くても、攻撃はできませんよね？」

B組4人の召喚獣が襲い掛かる

翠の武器は十文字槍、桃香は自身の持つ宝剣“靖王伝家”、まき絵はリボンなどの新体操の道具である。

シユルルルピイインー！

「逃がさないよ〜〜！！」

まき絵はリボンでヒナギクとのかの右腕を封じる

ヒナギク「クツツー！麻酔弾にリボン…思うように動けないー！」

翠「総合生徒会副会長さん、いつもの実力はどうしたんだ？」

まき絵「私たちが倒しちゃうよ〜？」

ヒナギクはのかを庇いながら左手で白桜を使い、近接攻撃の桃香と翠にカウンター攻撃を仕掛ける

のかのアーティファクト“いどのえにつき”は相手の考えや思いが読める…つまり読心術のような物であり、4人が理沙の銃撃やまき絵のボール爆弾を避けることは簡単なことであった

しかし、麻酔弾で鈍っている身体である。何発も当たってしまう

夕映は剣を魔法で帯電させ、まき絵と理沙には魔法の稲妻を放射し

て大ダメージを与える

そして…

『A組 桂ヒナギク&宮崎のどか&綾瀬夕映&長谷川千雨

B組 朝風理沙&馬超翠&劉備桃香&佐々木まき絵

英語 51&47&0&0 VS 0&0&0&0』

何とか、A組は勝てたものの2人の犠牲に英語の点数大幅な削減という、大ダメージを受けたのも事実である

のどか「高畑先生、英語の召喚フィールドを解除してください」

「そうだね、このままじゃやられてしまうからね。分かった。召喚フィールドを解除しよう」

英語の召喚フィールドは消えて、織斑の数学の召喚フィールドが戦場全体を覆うようになる

「皆さん、お待たせしました!」

「ここは、私たちに任せてくれ!」

「数学なら、私得意なんだから!」

上から順に刹那、深夏、美波のセリフである。

ついにというか、やっとというか…ローソンに行っていた木乃香たちが帰ってきたのだ

今の状態は木乃香たちとヒナギクたちでB・C組を挟み撃ちにして

いる

「お姉さま!!! 私も待ちました!!!」

「ゲッツッ…美春…いたの?」

どうやら、B組の中には美波を心から愛している清水美春がいたみたい。

「お姉さま、私はお姉さまとは闘いたくはありません。でも…敵同士闘う運命ってことは、私とお姉さまはやはり、運命の仲なのですね!!!」

「運命の仲なんかじゃないわよ!!! そんな気持ちは私全然ないから!!!」

深夏と美波は数学の試験フィールドの中に入る

相変わらず、玲士郎の作り出したブリザードが吹きつけている。

「試験召喚!!!」

深夏と美波の召喚獣が姿を現す

深夏はメイス、美波はサーベルである

□ A組 佐伯玲士郎&木下優子&椎名深夏&島田美波&吉井明久
&桂ヒナギク

B組 清水美春&ルフィ&久保利光&千堂瑛里華

C組 中川かのん&中野梓&阿久根高貴

&五位堂結

数学 280 & 364 & 378 & 314 & 234 & 396

VS 172 & 136 & 368 & 388

VS 206 & 312 & 300 & 322 『

300点越えが現れ、BとCも本気を出し始めているのが分かる

ちなみに利光と高貴は第二十一話にあったように、第一のミッションに参加していた。それでおいて点数がこれほどとは10の目が出たのだろう。だが、ミッション参加前に彼らと戦っていたら脅威になっただけと言ってもいいのかもしれない。

ルフィは武器を持っていなく、自身のゴムゴムの実の能力で戦う（現時点では覇気は使えないことになっている。詳細はまた別のお話で）

瑛里華はサーベル、美春はグラディウス、利光は2振りの大きな鎌である。

かのかはネコの形をしたスタンガン、梓はシヨテルと呼ばれるS字に湾曲した剣、高貴は鉄製の鉄鋌を打ちつけた金砕棒、結は日本刀である

玲士郎やルフィの一部の攻撃を除けば接近戦になるのは言うまでもないだろう。

瑛里華「ルフィ君、佐伯君のを止めて!!」

ルフィ「ああ、このままだと点数が減っちゃうからな」

B・C組の攻撃第一目標はやはり、ブリザードを吹かし点数を奪っていている玲士郎であった。

優子「皆で佐伯君を護衛して!!」

美波「了解!」

美春「お姉さま!!それはどういう意味ですか!?お姉さまが守るのは私だけ十分です!!」

「いや、敵同士だから守れないし…」

その美波の言葉に、美春の瞳はハイライトがなくなり表情が無くなってしまう。そして…

「才姉サマハ私ダケノモノ、才姉サマニハ私ダケガ居レバイイ」

梓「あの…清水さん大丈夫ですか??」

かのん「ヤンデレだっけ?そんな感じがするけど…」

「私ハダイジヨウブ、今スグアイツラヲ皆殺シニシテ、私モ死ヌ」

結「本当に大丈夫!?試召戦争じゃなくて本気で殺す勢いだよ!」

「佐伯玲士郎ユルサナイ…私ノ才姉サマヲ…」

美春の召喚獣は顔が黒く影で隠れて目だけが赤く光る状態になり、玲士郎に襲い掛かった

彼女の召喚獣は召喚獣に理性があるのかどうかは分からないが理性を失い、一心不乱に玲士郎に刃を向ける

しかし、玲士郎はブリザードの他にも氷弾などの遠距離の攻撃も可

能である

美春の攻撃を避けながら何弾も氷弾を当てる

そして

清水美春：0点

「クツツツ！！そんな…私はお姉さまの為にしただけなのに」

美春は補習室へ連行されていった

「これで一まず安心だ…まさかあんなことになるとは…」

普段、澄まして眉目秀麗の言葉が似合う彼であるが、ヤンデレ状態の美春には恐怖を隠せなかったようだ。

数太刀の美春の攻撃を受けたらしく点数は200点ほどに減少している

だが、ほっとしているのもつかの間。

ルフィ「いくぞ！玲士郎！！ギア2ゴムゴムのJET銃乱打！！」

「クソツツ！」

ルフィからは高速で何本もの数え切れないほどのパンチが玲士郎に浴びせられる

玲士郎も氷弾を浴びせるが一発の重さがあるのはもちろん拳である

佐伯玲士郎… 0点

玲士郎は撃退されてしまったのだ

ルフィはまだ80点近く残っている

玲士郎が居なくなったためブリザードは止み、B・C組は攻撃以外でダメージ受けることはなくなった

ここからは、肉弾戦が続いた

剣と剣とが弾きあい、ぶつかり合う音が響く

また、新たにA組に救援が加わった。

「私に任せるヨー、数学も得意ヨー」

「…俺もいる」

さつき、泉や実乃梨たちを倒したマジョーリカと康太である。

マジョーリカ… 数学400点

土屋康太… 数学122点

B組にも救援が入る

「…私、数学得意だから」

瑛里華「紅瀬さん!？」

「俺も、数学は得意だ」

「おれは…微妙だな…」

紅瀬桐葉に、先ほど朱湮や千桜を倒した虎鉄とウソップが来たのだ
数学

紅瀬桐葉… 400

瀬川虎鉄… 390

ウソップ… 154

桐葉の武器は柳葉刀であった

マジョーリカやウソップなどが加わったことにより、爆音も響くよう
うになった

そして、C組にも救援が入る。

この救援が事態を大きく急変させることになるとは、まだ誰も思っ
ていなかった

現れたC組の救援は真名、楓、アリア、レキ、理子、キンジの5人
彼女たちはガバメントやデザートイーグル、ドラグノフ狙撃銃など
といった銃や手裏剣などを使う遠距離の攻撃を得意としている

数学

龍宮真名…262
長瀬楓…188
神崎・H・アリア…210
遠山キンジ…196
峰理子…240
レキ…390

「C組の奴ら！！よく聞け！！」

戦場内で大声で叫んだのはキンジ。

「今、C組はオリンピックオペレーション作戦を開始した！第一次侵略を開始したんだ！！」

説明しよう、オリンピックオペレーション作戦とはダウンフォール作戦の内の1つであり、太平洋戦争で1945年11月1日に予定されていたイギリス・アメリカ軍の関東上陸作戦コロネットの飛行場確保のための九州上陸作戦である

だが、知つての通り太平洋戦争は8月15日に終結した。もしも、これが実行されていたとしたら日本の被害はもっと深刻なものになつていただろう

ヒナギク「オリンピック作戦？」

ルフィ「何かの暗号か？」

オリンピック作戦がどういった作戦なのか分からないAとB組は混乱する

楓「行くでござるよ、戦闘開始でござる」

理子「OK、じゃあ作戦通りで」

アリアたちは数学の召喚フィールドに入ると、

「「「試験召喚!」「」」

召喚獣を呼び出し、攻撃を始める

B組に対して

銃弾やクナイをA組と鏝ぜり合いなどで対峙してアリアたちに背を向けているB組に撃ち放った

パンパンン!!ドキューンヒュン!!

ウソップ「おい!!A組を狙えよ!!なんでおれらを狙うんだ!?!」

アリア「何でって、B組を潰そうと思ってるからよ」

虎鉄「お前ら裏切ったな」

真名「自分の心配より、味方の心配をしたらどうだ?特にB組の陣地を」

瑛里華「何で裏切ったのよ？」

理子「まず、ミッションで貸しを作ったから協力してくれるって思っていたとしたらそれは間違いだよ」

アリア「なんかおかしいと思ったのよ。学園入口駅から一番離れているB組がミッションに参加するのは」

キンジ「そしたら案の定、B組は協力を要請してきた。だからそれを利用してもらったわけだ」

形勢は逆転した。さっきまでA組を襲っていた高貴や梓もB組のルフィや利光たちを襲い始めた

A組もこの形勢逆転に士気が上がり始めた

今まで、言い方が悪いかもしれないがA組がリンチ状態にあったが今度はB組がリンチ状態になる

ピンポンパンポーン

校内放送が入る

『速報、星伽白雪、桂木桂馬、三日月夜空、柏崎星奈たちC組生徒の活躍によりB組霧谷希が0点となりました。よってB組の全生徒は点数が0となり補習室送りとなります
ただいまより、AとCの残っている生徒は20分間の休憩に入ります。なお休憩終了時に第二のミッションを発表します』

B組、陥落

次回に続く!!

第二十三話：オリンピック作戦（後書き）

それでは、前書きでも言っていたようにアンケートの結果発表を行います

また1位と2位はあらすじとOP、EDも紹介します

1位：3番：“IS”、“オオカミさん”、“アスラクライン”のヒロインたち9人の目の前に現れたのはあの洞爺湖仙人！？

あらすじ：涼子、箒、操緒たちが目覚めるとそこには洞爺湖仙人がいた。木村カエラのリングゲインドンだとかのCMに1年の生徒を出演させようと洞爺湖仙人一家はCMのための必殺技を画策している。あの父娘愛を描いたブルース・ウィリス主演の映画のパロディもあります。

OP：資料その1の“設定がない場合”より好きなものをお選びください

ED：『Miss A Thing』 エアロスミス

2位：カップルおよびカップル予備軍に襲い掛かる紳士の会からの
試練

あらすじ：紳士の会は女子寮にある計画を立てていた。しかし亮士と東宮が涼子やヒナギクにうっかりばらしてしまい紳士の会のメンバーは怒り、その矛先はハヤテや結弦などといった彼女持ちにも向けられた。そんな怒れる紳士の会の人たちの目の前に現れたのはりんごで。りんごさん、御伽銀行の貸し作りに奔走します

OP：『チチをもげ！』 パルコ・フォルゴレ

ED：『夕焼けドロップ』 長野博&井ノ原快彦

3位：男の娘ナンバーワン決定戦！！

4位…文化祭各クラス出し物決定

なお、3年のAとB、1年のAとBはそれぞれ共同で出し物を出すつもりです

5位…あいつの縦笛が盗まれた

皆様、ありがとうございました

第二十四話：英語なんて言葉なんだ、こんなものやれば誰だってできるようにな

サブタイの元ネタ知っている人いますかね？

高校も留年することなく無事に卒業して、大学も国大はまだですが私大の合格もあり、自由な時間が多いので投稿の頻度が多くなるかもしれません。

今回もちょっとクオリティーは低いかも…

第二十四話：英語なんて言葉なんだ、こんなものやれば誰だってできるよにな

A組陣地、ただいま休憩時間です

ここには、残っているA組のメンバーが勢揃いしている。現在の残りは27名。

ちなみに残っているC組のメンバーは28人、A組が少々劣勢の状態にあります

休憩時間といってもこの時間の大部分は後半戦の作戦会議に当てられた

また、B組の敗北により戦場の面積はスタート時の1/3の大きさになり戦場の中央にあるトルーマンタワー以南は立ち入り禁止となった。

またクラス代表者も後半戦より戦場に出での移動が可能になりました

地デジカ『さあ！テレビ新時代。アナログ放送終了まであと4ヶ月』

銀時「なんだ？上の地デジカ」

ハヤテ「特に意味は無いんじゃないですか？」

ナギ「地デジカってなんかウザイよな、アニメやドラマに空気も読まずにシリアスなシーンに挿入されることがあるからな」

まあ、突如現れた地デジカは放っておいて作戦タイムです

作戦を考えたのは上位5人と雄二であった

雄二「作戦だが、第一にC組とB組が行った作戦を真似る」

明久「というと？」

ネリネ「戦場内を二分する踏切を制圧します」

ヒナギク「でも、それってあっちも同じことを考えるんじゃないのかしら？」

鍵「たぶんそうだろう、いや必ずそうなる」

翔子「…だけど、向こうはペストリアンデッキ側にも行く人もいるはず。だどこっちは制圧部隊の全員で踏切を攻めるわ。向こうが点数が良かったとしてもこっちは数で攻めて回復試験に行かせる暇を与えさせない」

雄二「制圧してもらおう人にはいち早く到着してもらおう為に走ってもらう。」

ナギ「制圧部隊は前衛と後衛のバランスよく構成する。相手が距離武器や遠距離武器のどちらが来てもいいようにな。この制圧部隊には上位5人以外の22人を割り当てる」

瑞希「陣地に残り、翔子ちゃんを護衛するのは成績上位者4名でいいですね？」

ナギ「ああ、それが一番良いだろう」

鍵「上位者5人は制圧部隊が踏切の制圧を完了した時点から制圧部隊と共に一気に攻め込む」

ピンポンパンポーン

ある程度、作戦の立て終わったところで校内放送が入る

ネリネ「連絡ですね、ミッションの発表でしょうか？」

生徒たちは放送に耳を傾ける。声の主は理事長であった

『休憩時刻も残りわずかだよ？もう準備はできてるかな。』

さて第二のミッションの発表だ。その名も“ゾンビ捕獲大作戦”だ

ゾンビ捕獲大作戦の説明

B組の生徒達は補習を受けているはずであったが、教師の一瞬の間を突いて44名全員が脱走してしまった

その44名がゾンビとなってトルーマンタワー周辺を徘徊している44名全員を制限時間内に捕獲しなければ優勝商品の1人あたりの金額が5万円から3千円へと大幅に値引きされることになる

なお、捕獲するためにはこれから支給する海水が混ぜ込んであるカラーボールを投げ、当てればゾンビは倒れるのでそれを使用すること。それ以外の方法で倒す方法は無い。

ゾンビはいかにもゾンビらしい動きをしているのですぐにわかるだろう

制限時間は後半戦スタートから15分後まで

『分かってくれたかな？賞品の値段を下げられなくなればすぐに向かうことだね。なお、15分までに決着がいたら金額は5万円だからね。』

あ…ここで賞品の話が出たから賞品について話すけど、1位のクラスにはとつても役立つものをあげよう、きっと皆もこれが無きゃ拗ねちゃうんじゃないかな？

2位のクラスにはね…“地デジ非対応のアナログテレビ”を教師含めクラス全員一人一台ずつ3千円で“買い取って”もらうから

頑張つてね〜〜』

ブツン

放送切れた。

「…ふざけんなアアアアア…!!」「」

A組の生徒達は絶叫を上げてこっちもキレた

明久「地デジ非対応のアナログテレビって明らかにゴミだよね!!」

ハヤテ「これってあれですよね、去年から今年にかけて色々な教室にあるブラウン管テレビが地デジ対応の液晶テレビに変わったからじゃないですか？」

優子「理事長、もしかして私たちにそれを無理矢理押し付ける気なの？」

ヒナギク「多分そうでしょうね、粗大ゴミに出してその分のお金が掛かるより、私たちに売って儲けようとするんですよ」

ナギ「だからさっきあの地デジカが出てきたのか!!」

銀時「おい、勝てよ!!今月俺ら教師、飲み会とかがたくさんあつてピンチなんだからよお、絶対に勝て!!お前ら俺に3ヶ月連続で家賃を払わせない身にさせんなよ!!」

ハヤテ「銀さん、3ヶ月も家賃払ってないんですか…」

ちなみに銀時はスナックお登勢の2階に住んでいます

瑞希「ミッションに参加するんですか？」

ネリネ「15分で終わる自信があるなら参加しなくてもいいんですよけど…」

雄二「いや、15分で終わらせる。だからミッションに参加する必要は無い」

翔子「…なんとしても勝つわよ、絶対に。ミッションの終了する15分後までにけりをつけましょ」

「オオオオオオオオ!!!!!!」

前半戦スタートの時の声よりも数倍声が大きくなっています

まあ、高校生にとって3千円って結構な額ですからね

あと皆さんも地デジの準備はお早めにね。あと4ヶ月ほどしかありませんから

キンコーンカーンコーン

後半戦開始のチャイムが鳴りました。後半戦スタートです

ヒナ「みんな、急ぐわよ!!」

制圧部隊はポイントとなる踏切に駆け足で向かう

30秒後、踏切の前に到着する。踏切は開いており、難なく東側に移動することができた

ヒナギク「今のうちに召喚獣を出しておきましょう」

ハヤテ「そうですね、いつでもあちら側が来てもいいように。銀さん、お願いします」

銀時「おう、試験召喚を承認!!」

「「「試験召喚!!」」」

制圧部隊の召喚獣22体が姿を現した

「「「試験召喚!」」」

東側からも声がした、C組も召喚獣を出したのである。

「A組 坂上智代&芙蓉楓&桜咲刹那&近衛木乃香&綾崎ハヤテ
&田島賢久&百野栞

C組 阿久根高貴&星川輝羅々^{サラス}&逢坂大河&龍宮真名&長瀬
楓&平沢憂

国語（現代文＋古文・漢文）

352&296&192&352&2
08&158&370 VS 278&29
6&200&250&168&
378

C組で踏切を攻めているのはここにいる人が全員らしく他の者はト
ルーマンタワー側に行きそこからA組を攻めたり、ミッションに参
加しているのだろう

智代の武器は薙刀、芙蓉楓と憂はフライパン型ハンマー、ハヤテは
投げナイフとフォーク、サラスは自らの能力で水で作られた刀、大
河は木刀、賢久は自らのパイロキネシス、木乃香は鉄製の扇、刹那
は真剣“夕凧”であった。

真名「刹那、こんな形とはいえお前と戦えて嬉しいよ」

刹那「私もだ、龍宮」

真名「…いくぞ!!」

彼女の言葉で戦いの火蓋は切って落とされた

智代「前衛と後衛の体勢を崩すな!! 点数が危険になったらヒナたちとバトンタッチして回復試験に向かうんだ」

長瀬楓「話をしていたら、足下を掬われるでござるよ」

智代「クツツ!!」

楓は一気に間合いをつめ智代に襲い掛かる。

「お主は拙者たちにとって脅威でござるからな」

ダツダツダツ!!!

至近距離でクナイを何発も打ちつける。薙刀で落とすものの、当たってしまうものもあり点数が減らされていく

真名「刹那、いかせて貰う」

ダアンダアンダアン!

シュンシュンシュン

刹那「無駄だ、神鳴流に飛び道具は効かない」

刹那は向かってくる銃弾を刀で切り落とす

真名「やはりな、お前とは戦わないほうがよさそうだ」

ヒュツツツ、カツツツ!!!

ダアアン、ダアアンダアアンダアアン!!

真名は背中に隠していたライフルを左手に取り出すと右手のライフルと共に銃口をA組生徒へと向けた

A組は人数も多く、また栞の魔法障壁や木乃香の回復能力（木乃香の点数と引き換えに点数ほど回復）などもあり、有利に進めることができた

しかし、闘い慣れをしている高貴、真名、楓の3人を倒すには困難を極めた

そして、

□ A組 坂上智代&芙蓉楓&桜咲刹那&近衛木乃香&綾崎ハヤテ
&田島賢久&百野栞

○ C組 阿久根高貴&星川輝羅サラス々&逢坂大河&龍宮真名&長瀬
楓&平沢憂

国語（現代文＋古文・漢文）

0 & 0 & a m p ; 0 & a m p ; 0 & a m p ; 0 & a m p ; 0 & a m p ; 0 & 0

V S 0 & a m p ; 0 & a m p ; 0 & a m p ; 0 & a m p ; 0 & a m p ;

0 & a m p ; 0
『0

全員0点となった。しかし、参加していなかったヒナギクやアスナたちがいるのでC組の生徒たちに勝ち踏切の制圧が完了した形となる

その頃、A組の近くのローソン前。ここには上位5人翔子たちの姿があった。

『A組 霧島翔子&姫路瑞希&ネリネ&杉崎鍵&三千院ナギ

C組 椎名桜子&釘宮円&柿崎美砂&川嶋亜美&中川かのん
&小阪ちひろ&高原歩美

日本史or世界史 396&396&388&388&388
VS 0&mp;0&mp;0&mp;0&mp;0&mp;0&mp;0
mp;0&mp;0』

トルーマンタワー側から攻めてきたであろうと思われるC組の生徒たちを完膚なきまでに叩きのめしていた

ローソンに隠れ、踏切の制圧完了を待っていたのだが見つかったしまったようだ

ナギ「しかし、C組の奴らも感じがいいな。私たちがローソンに隠れていたのを見破るなんて」

瑞希「そうですね、コンビニに隠れていけば見つからないって思っただんですけどね」

鍵「まあ勝てただから問題ない……」

ピロリロ〜ン

鍵の携帯が鳴った

「坂本からのメールだ。

“踏切前制圧完了！急いでこっちに来い！合流次第C組陣地に向かう。”

あと、俺たちの倒したC組の連中が私たちには1600がいる。あなたたちで倒せるかな？>と言っていた。注意しておけ”
だそうだ」

ネリネ「C組の1600…。さっき倒した川嶋さんたちも言っていましたよね」

瑞希「一体何なのでしょう？」

ナギ「もしかしたら、400点満点取っている奴が4人いるってことじゃないか？」

鍵「そうだとしたら、俺たちには脅威になるだろうな」

翔子「…それでも今はいち早く攻めきることが先決。タイムリミット ミッション終了まで8分半しかない」

ネリネ「そうですね、いきましよう」

翔子たちも踏切へと向かっていった

現在の人数、A組20名、C組15名とA組有利の状態！！

次回、試召戦争編最終回！C組の1600とは！？賞品単価5万円のタイムリミットまであと8分半、はたしてそれまでに決着をつけられるのか？負けてしまい、アナログテレビを買い取る羽目になるのか！？

地デジの準備はお早めに！！

次回へ続きます

第二十五話：ヒーローは最後に現れる

踏切前、タイムリミット7分15秒前

明久「遅いね、姫路さんたち」

雄二「そうだな…何かあったのか？」

まだ、翔子たち上位者5人は踏切に到着していなかった

その頃、翔子たちはどういうと…

鍵「クツツツ…」

ナギ「囲まれたな…」

慎「てめえらはここで終わりだ。そして試召戦争も」

第五食堂と踏切の間の中学校第六校舎前でC組の残りのメンバー、15人に周りを囲まれていたのだ

慎「ヤンクミ、数学での召喚許可を頼む」

山口ヤンクミ「了解だ、承認する！教科は数学だ！！」

「試験召喚!」「」

15人は召喚獣を出した。

ネリネ「どうします?」

ピッピッピッピッ...

“送信が完了しました”

瑞希「杉崎君、何をしたんですか?」

鍵「あらかじめ作っておいたメールを送信したんだ。“緊急事態発生、陣地に戻れ”って、ここは踏切と陣地の間だから絶対に坂本や吉井たちは戻ってくるはずだ」

夜空「でもその前に私たちが倒すけどな」

星奈「私たち“Cの1600”が倒してやるわよ」

翔子「...Cの1600?」

星奈「そう、私と夜空と沢田と桂木は数学400点満点なの。だから1600ってわけ」

慎「その他にも、380点以上の点数を持つレキと星伽がいるからな」

「『試験召喚!!』」

そして、戦いが始まった。

『A組 霧島翔子&姫路瑞希&ネリネ&杉崎鍵&三千院ナギ

C組 沢田慎&柏崎星奈&三日月夜空&桂木桂馬&星伽白雪
&レキ

数学 400&400&388&388&382 VS 400
&400&400&400&400&3
90&386』

翔子は日本刀、ネリネは魔法を操り、鍵は斧、ナギと瑞希は大剣である。

慎は金属のメイス、星奈はサーベル、桂馬はいわゆるライトセーバ―であった。

「ナギ!!霧島さん!!」

「ヒナギク!!」

踏切の方からヒナギク達制圧部隊13人が戻ってきたのだ。

「どつやらここで決着がつくようだな」

「そうみたいね」

「助太刀するわよ」

「『オオオオー！！』」

ヒナギク達は翔子たちの元に向かおうとする。だが…

熊井「慎ちゃんたちに手はださせねえぞ！」

キンジ「奴らの元に向かいたいんだったら俺らを倒すことだな」

理子「まあ私たちがそんな簡単に負けるわけないけどね」

C組の残りの9人が邪魔をして行くことができない。

「『試験召喚！！』」

こちらでも戦いが始まった

タイムリミットまでの時間がなくなっていく…

時間が経つに連れて明久、康太、明日菜、シア、麻弓、雄二と負けて補習室送りになる人が増えていく。

各クラス上位陣の方はというと…

ネリネ…0点

レキ…0点

最初に0点になったのはそれぞれの遠距離型武器、魔法の使い手であるネリネとレキであった

「…これで完全な肉弾戦になった」

「そうだな」

点数はそれぞれ近いこともあり、一回の攻撃では同じようなペースで減っていく形となる。

しかしそれはこの勝ちを宣言しているようなものだった

互いに点数を削りあい9人の点数はついに100点を切った

だが、Cが有利だという状況は変わらない

瑞希「どうするんですか、このままじゃ…」

ナギ「その先を言うな！そんな事分かってるぞ」

鍵「あと、3…いや4発受けたら…」

点数が高いため、攻撃力も高い。一太刀、一回のパンチだけで25から40減らされてしまう

「ゲアッッ」

「クッッッ!!」

「……これもゲームかと思つてたが所詮は現実^{リアル}だったか」

杉崎鍵、三千院ナギ、桂木桂馬0点

「翔子ちゃん!!」

「……クッッ!!」

取り残された残り19と17の翔子と瑞希。ヒナギク達は未だ闘つておりヘルプを頼めそうにもない

「これでしめーだ!!」

「私たちの勝ちですね」

慎、星奈、夜空、白雪はそれぞれの刀などの武器を高く振りかぶる

「……………」

翔子と瑞希は負けを確信した

ヒュンヒュンヒュン！！

ドッ！バァァン！！

突如、白雪と夜空の背中には氷の矢が、慎と星奈の後頭部には射出パンチ…いわゆるロケットパンチがお見舞いされたのだ

「な…なんなのよこれ！？誰よ私の召喚獣を襲ったのは！？」

「…あれは」

「エヴァさんに茶々丸さん！！」

そう、エヴァンジェリンと茶々丸が慎たち4人の後ろに立っていた

「お前の考えを訂正してやる、この戦争勝つのはAだ」

慎「まずい！霧島を仕留めろオオオ！！」

白雪と星奈と夜空は翔子に襲いかかる

だが…

「「させません！！」」

茶々丸のロケットパンチと瑞希の一太刀が3人に襲い掛かる

「そ…そんな…」

「私たちが負ける…なんて」

「…肉（星奈のこと）が悪い」

「ちょっと！この状態で何で私が悪いって言うのよ！！」

星伽白雪…0点

柏崎星奈…0点

三日月夜空…0点

3人の召喚獣は0点となったため姿を消した

「お前1人になったな。」

エヴァは巨大な氷塊を作ると…

「これでしまいだ」

慎にぶつけた

沢田慎：0点

ピンポンパンポーン

校内放送が入った。その内容はもちろん…

理事長『速報、霧島翔子、姫路瑞希、エヴァンジェリン、絡繰茶々丸の活躍によりC組代表沢田慎が0点となりました。』

よって勝者はA組！！

ただいまより30分後より表彰式を行います。表彰式は今から30分後の11時20分から高校第一校舎グラウンド3にて行います』

「「「「ヨツシャアアアアアアアア！！！！」」」」

最終戦の舞台となった中学校前、A組の補習が行われていた教室には歓喜の音が響いた

そして、表彰式

A組の代表であった翔子は理事長から賞状を貰う。その姿にも割れんばかりの拍手と歓声が響く

そして、賞品授与

『さて、A組お待ちかねの賞品ですがあちらをご覧ください』

理事長は校庭のある方向を指差した。そこには1台の4tトラックが止まってあった

「あの中に賞品が入ってるって訳だな」

「なるほど！でも学園のトラックだから何が入ってるか分からないね」

『A組の皆さんはトラックの前へ移動してください』

理事長に促されるがままA組の各々はトラックの前にやってきた

「ねえ、賞品って何かな？国産牛とかの高級食材とか？」

「普通のトラックだから食品じゃないんじゃない？」

「ならパソコンとか家電とかかな？」

A組の生徒達は賞品の中身に期待し胸を膨らませていた。

『トラックオープン!!』

トラックの積荷の扉が開けられ、次第に中身が見えてくる

「ウワアアアア.....あ.....?????」「」

トラックの中に入っていたのは、高級食材でも電子機器でもなく...

カップラーメンだった。一応大盛り一杯2000円のものである

.....

高級食材や電子機器などの高価なものを想像していた彼らからすれば、その落差は計り知れないものとなるう

銀時「おい...理事長...」

理事長「何かな？坂田君。数が足りないのばれた？

いや...今日は一人当たり20000円分の4800食しか用意できなくてね...残りの分は1カ月後と2カ月後に15000円分ずつ渡すからさ」

銀時「ちげーよ、何で賞品がただのカップヌードルなんだよ」

銀時をはじめ、A組の生徒は理事長に詰め寄る。落差が本当に激しかったのか怒りのオーラで満ち溢れている者もいる

「だつて〜〜、CMがあるじゃん？ 息子さんが中三で〜〜、受験勉強して〜〜た〜〜。夜食のカップヌードル、お母さん忘れ〜〜た〜〜。息子さ〜〜ん〜〜拗ね〜〜た」って

日清のカップヌードルのCMですね、ボンジヨビの替え歌の

「だからA組の生徒たちにはこれからも拗ねないで元気に勉学に励んでほしいからカップヌードルに…」

「〜〜ふざけんなアアアア！！こつちのほうがよっほど拗ねるわアアアア！！」「」

ボコツスカツドガツツ！！バゴツツ！！

理事長には30分にわたりランチA組一部生徒からの暴行が振るまわれ他のであった

そして次の日…2年A組

「HRはじめるぞ〜〜」

銀時が教室に入ってくる

「昨日はお疲れだったな〜、まああんな賞品じゃ仕方ねえか」

深夏「ホントだよ、あんな物を賞品にしやがって…」

明久「僕はとつても嬉しいよ？1か月分の食料をゲットしたわけだから」

「それでだが…」

ヒナギク「どうしたんですか？」

「霧島に坂上、これを配ってくれ」

銀時は翔子と智代にクラスの人数分の封筒を渡し、2人はそれ配っていく

明日菜「何、これ？」

「やっぱり、賞品がカップラーメンじゃ不満だろ？」

美波「そりゃそうですよ、あんないつでも買えるものなんか…」

「で、昨日でめえらが帰った後理事長と交渉したわけだ。カップラーメンじゃ不満だから何とかしろって。それでも賞品が届いちまった2万円分は返却することはできないが3万円分は何とかしてやるって交渉を呑んでくれてな、それが3万円分の賞品って訳だ」

賢久「中身見てもいいのか？」

「ああ、言っておくが俺も中身はしらねえぞ」

生徒達はゼロハンを外し包装を外して中身を取り出す

中に入っていたのは

楓「青春18きっぷ引換券と…旅行会社の旅行券…ですね」

説明しよう、青春18きっぷとはJRの普通・快速列車や一部の特急、宮島航路などが1日乗り放題×5、5日分乗り放題の切符である今回渡されたものは今度の夏休みに使用できる青春18きっぷの引換券であった

なお、実際には青春18きっぷの引換券はありませんのでご注意ください。
旅行券は2万円分であった。青春18きっぷは11500円、計31500円である

「理事長からの伝言だ

“あえて、どこに行くかは決めなかった。これは君たちの自主性を尊重するためにぜひ今度の夏休みにはこれを有意義に使ってほしい”
だそうだ」

歩「銀さん、何で青春18きっぷなんででしょうか？」

神楽「確かに旅行券3万円分でもいい気がするネ」

「ああ、そりゃあ作者が鉄道ヲタだからに決まってるんだろ」

「えっ…作者、鉄道ヲタなんですか？虎鉄さんと同じで…」

ハヤテは少し怪訝な顔をする。虎鉄と同類と見ているんでしょう。言っておきますけど私はホモじゃありませんからね〜

「だから青春18きっぷで鉄道ネタやりたかったんじゃないの？」

本当にそのとおりです…ハイ。

「まあこの旅券を無駄にするのもアレだから…夏休みどっか行くかハヤテ」どっかって、何処行くんですか？」

「そこら辺は俺もお前らの自主性を尊重するからその辺考えとけよな〜これでHRは終了!！」

というわけで、A組の生徒達は賞品はアレでしたが優勝することができました。

めでたしめでたし

第二十五話：ヒーローは最後に現れる（後書き）

2ヶ月半にわたる試召戦争編がやっと終わりました。

…早く試召戦争編を終わらせたいって気持ちが見え見えでしたね。自分でも手抜き感がしてなりません。ごめんなさい。最近謝ってはつかですね。

青春18きっぷ旅行編は作者が“忘れていなければ”小説内の夏休みのおいずれかで書く予定です

今回はやつと洞爺湖仙人のお話です
やつとインフィニット・ストラトスのキャラを出せる!!とつても嬉しいです。

ISでの戦闘は無い予定です…

第二十六話：リングゲインドンなんて歌なんだ、こんなものやれば誰だってでき

土曜日中に更新する予定でしたが、地震の影響で金曜日夜遅くまで
停電状態となりパソコンが全く使えずに日曜日の更新となりました。
お待たせして申し訳ございません

この物語はキャラ崩壊注意です

この物語の元ネタは銀魂第三百十二訓と映画アルマゲドンです

第二十六話：リングゲインドンなんて歌なんだ、こんなものやれば誰だってでき

時間は少しさかのぼり、中間テストが終わった火曜日の深夜…

“目覚めよー！”

何処からか聞こえる男の声

“目覚めよ！秘めし内なる力を解放するときがついに来たのだ”

篝（な…なんなんだこの声は…）

操緒（なんか…頭に直接語りかけられてる感じ…）

“そっと開くのだ。その目を…その閉じられた限界への扉を…”

ムクツツツ

謎の声に導かれて目を開けて腰を曲げ頭を起こす

セシリア「…何処なんですのこは…」

りんご「おはようございますの」

操緒「あれ…何で？私は鳴桜邸にいたはずなのに…なんで皆ここに
いるの？」

鳴桜邸とは智春と操緒、アニアの下宿先である

ラウラ「私たちは寮の自室で寝ていたはずなのだが」

奏「確かにおかしいですね、鳴桜邸にいるはずの操緒さんもいて部屋もバラバラな私たちがいつの間にか一箇所に集まっている」

涼子「何処なんだよ此処は…一面真っ暗でなんも見えねえし」

確かに辺り一面は真っ暗で何も見えない。

シャル「停電かな？」

鈴音「停電だったらおかしいわよ、私たちの姿はバッチリ見えてるし」

確かに箒たち9人の姿は光で照らされているかのようにはっきりと見えている。

だが、照らしている光源は見当たらない不思議な空間である

りんご「これは…夢ではないんですの？」

箒「夢か…確かにそれならこの事態は説明がつかない…」

奏「もしこれが夢でしたら…どうします？」

涼子「夢だったらって…寝かせてもらっわ、なんも起きないみたいだし」

涼子はまた自分の寝ていた場所に横になり寝始めた

セシリア「わたくしも寝かせてもらいますわ」

シャル「僕も寝てよ…」

涼子に続いて他の8人も続々と寝始めて、完全に雑魚寝状態となる

“目覚めよ!!”

またもや何処からか聞こえる謎の男の声

操緒「なんなのよ、このおっさんの声の目覚まし」

“目覚めるのだ!!”

鈴音「うるさいわね、今日は10時登校なんだからもう少し寝かせなさいよ」

“あの…ちょっと聞いて…:すいません、目覚めてください!!おーい、起きてくださーい…”

なかなか身体を起こさない9人に謎の男の声も命令から敬語でお願い

い口調になる

“目覚めろって言うてんだろオがアアア！！！！”

男はついにキレる

“何で異空間で二度寝！？少しは空気読め！！なんかいつもと違う感じがわかるだろうが、馬鹿者共が！！”

りんご「…うるさいですの…って涼子ちゃんにみんな、起きてくださいの。変なおじさんが！！変なおじさんがいますの！！」

涼子「変なおじさんって…志村けんが出てきたのか？」

篤「志村けん…ではなさそうだが…確かに変なおじさんだな」

9人の目の前に立っていたのは髪はボサボサで顎に長い髭を生やし、タイツっぽい服を着てマントを羽織り、額に“洞”という文字の書かれた男だった。

「ようこそ我が世界へ。汝らついに目覚めし時が来たのだ」

奏「あなたは…誰なんですか？」

「我か…我はお前らの学園の教師、坂田銀時の持つ木刀・洞爺湖に宿る…」

操緒「銀さんの木刀・洞爺湖の仙人ってこと？」

「ふむ…まあそういう呼び方でもいい」

ラウラ「で、その仙人が私たちに一体何の用だというのだ？」

「今日はな…汝たちに必殺技を伝授させようと思ひ来たのだ。どうだ？興味は無いか？？」

「」「無い」「」

「えっ……」

予想外の反応に仙人はあっけとなる

シャル「だって…ねえ」

セシリア「わたくしたちにはISがありますし…」

ISは最初に製造された第1世代の基盤となった白騎士でも各国の所有する戦闘機や戦艦などの軍事兵器を撃破していますからね。

操緒「私は智春トモの機巧魔神があるし…嵩月さんだってとても強いし」
奏「そんな…とても強いだなんて…」

涼子「どうせ、木刀の仙人だから剣道の必殺技なんだろう？ボクシン

グだったら少しは考えたけどよお」

りんご「私は口で争うのは得意だからそれでいいですよ」

「いや…必殺技とかあると便利だよ？君たちが思っている以上に必殺技というのは便利なものでねえ…使い回しができて簡単に見せ場が演出できて…」

仙人は必死に必殺技の利点をアピールするが…

第「必殺技は要らないから元の世界に帰してくれないか？」

鈴音「明日も学校があるからもう少し寝かせてよ」

彼女たちは全く興味を示さない

「これ、一回限りだよ？後で教えてって言われても教えないよ？いいのそれでも？」

便利なんだけどな〜、この機会逃すとかもつたいないな〜」

今度は一回限りって限定してプレミア度を高めてきましたよ

「な〜〜」

「ス〜〜ス〜〜」

だがそんな仙人を無視して彼女たちは三度夢の中へ…

「何で寝ているんだアア！！三度寝！？仙人の前で三度寝！？人の話はちゃんと聞けって

親に教わらなかつたのかよお前らアア…

もう、怒った…今から3秒以内に起きなかつたら腿に蹴りをパーンって入れるから

すっごく痛いぞ〜、歩けなくなるぞ〜」

なんなんですかこのおっさん。書いている自分でもこう思っています

「イーーチ、ほらほら…地獄へのカウントダウンが始まったよ〜」

二ーー、あと一秒しかないよ〜！！いいの〜！！？

サーーーン、いくよ〜腿にパーンっていくよ〜

5秒？5秒がいいのか！？5秒にしてやるつかアアア！！」

ピキッ！…！！

「」「」「」
「びるせエエー」（わいイイイ）！…！！」「」「」

「今…我にしたではないか…敵の腿を物凄い勢いで蹴る荒業のことよ…」

鈴音「こんなんが必殺技!？」

りんご「…下らない展開がみえてきましたの…」

「だが、本題はここからだ。汝らは死地を迎えている…迎えようとしているのに何もしていない。それでいいのか？」

呼吸が整ってきたのか、仙人は少しシリアス気味の口調になる

奏「死地って…なんのことですか？」

「アニメ…終わっちゃったし、終わっちゃうじゃん…」

「…何の話をしてるんだアア!!!」

想定もしていなかった仙人のセリフに9人は声を荒らげてしまいます

「必殺技はな、強くなりたいたとかそんなの関係なく必要なんだよ…
商売的に必要なんだ、必殺技というものは…」

セシリア「とんでもないこと言い始めましたわよ!!!この仙人!!!
商業的観点から必殺技を薦め始めましたわ!!!」

「今一度教えてやる必殺技の重要性を…」

知つての通りアニメというのは、漫画、ライトノベルにとって最大の宣伝媒体だ

汝たちの原作“IS”を見ても分かることだ。2009年5月の1巻発売後からアニメ放送開始前の5巻の累計が65万部だったのが、アニメ放送開始後1ヶ月の間で約2倍の120万部に到達しているからな。」

アニメの力がどれ程のものか分かりますね…

「しかし、アニメを作るには莫大な金がかかる。そのために必要なものがスポンサーだ」

ラウラ「…必殺技の話を全くしてないがいいのか？」

「スポンサーはアニメを作る際に多額の金を出してくれる。だがスポンサーもアニメを使用して自社の商品を宣伝して互いに利益を上げる。そういう仕組みなのだ」

シャル「どんだけ生々しい話なの！？アニメを作るときの必殺技聞いいてないからね!？」

「アニメ化に際して行われるグッズ展開もスポンサーによって行われる

グッズが売れなかった場合、商売が成り立たなくなるのでスポンサーがいなくなる。そしてアニメはできなくなる。

ではグッズ展開の中でとりわけ大きな利益を生むのは何か分かるか？

それは…ゲームだアア!!」

操緒「何なのこのおっさん、本当に何をしに来たの!？」

「ゲームは一個単位の単価が大きく、すなわち売れたときの利益も大きくなる。

ゲームの中でも売れやすいのは格闘ゲーム。これはとっつきやすく安定した利益を生み出す優れたコンテンツなのだ!!」

涼子「買う気無くすわ!! てめえのせいで優れたコンテンツが滅茶苦茶になってっから!!」

「そして、格闘ゲームを作るときに必要なもの。それが必殺技：つまり、必殺技は敵に掛けるのではない!! スポンサーに掛けるのだ!!」

第「こいつ、本当に仙人か? どこかの営業部の回し者じゃないのか!???」

本当に第の言うとおりですよ。この仙人…

りんご「でもちよつと待って下さいの。まだまだ続いている“IS”はともかく、私たち“オオカミさんシリーズ”は次の巻で終わりですよ」

奏「そうです。“アスラクライン”も2010年の2月で最終巻かと思われる14巻が出まますし…」

もう1年前の話ですか…作者の三雲岳斗先生も続きは「完全に白紙」と言っていましたからね…

「何を言う。売れ続けることが必要なのだ。昔、大事MANブラザーズバンドというグループが“それが大事”という曲で“負けないこと、投げ出さないこと、逃げ出さないこと、信じぬくこと”の他に“売れ続ける事”を歌詞の中に入れなかったがために一発屋になっってしまった」

鈴音「入れないわよ！！そんな生々しい歌詞！！」

「汝らも一発屋のアニメになりたいのか？知っているだろう、アニメが終わってしまったってラノベや漫画もなんか終わっちゃったなって衰えていく作品の数々を。“IS”もそうなりかねんぞ？

次は汝らの番だぞ！！」

セシリア「恐ろしいこと言わないでください！！」

ラウラ「でも私たちだけが必殺技を覚えても仕方がないのではないか？」

「その点については抜かりは無い。ついて来い」

仙人は何処かへ9人と連れ出した。

たどり着いたのは、大きなモニターの前

「応答願います。こちら洞爺湖仙人」

ジジジ…

モニターに映像が写る

『ハイ、こちらゾンビ仙人』

モニターに映ったのはパーマをかけて洞爺湖仙人と同じ髭とメガネをかけた額に“ゾ”と書かれたお婆さんの姿だった

「どうだ、調子は？」

『あの男、筋は悪くないからすぐに必殺技を習得すると思うわ』

それと…滝に打たれている相川歩の姿

セシリア「あれって、相川さんですわよね!？」

りんご「どうなってるのですの一体!!!？」

「あの仙人はあやつ、相川歩に住まうゾンビ仙人だ」

シャル「それって仙人じゃなくて守護霊…!」

「いや仙人だ。お主らがウカウカしている間に他のものはどんどん強くなっていったるぞ。このまま置いてけぼりになっていいのか？」

『一度やってみよ!』

歩『はい!』

歩は必殺技を出し始めた

歩『リングデインドンドンリングデインデインドンドン、リングデインドンドン
リングデインデインドンドン』

腕を下にまっすぐ伸ばし手は地面と平行、首を左右に振りながら叫ぶ

「「「何の修行をしてるのよオオオ！」「」」

「携帯会社のスポンサーを獲得するための必殺技の修行だ」

第「どんな必殺技だ！！CM狙ってるだけじゃないか！！」

『もっと可愛く！！そんなんでカエラに勝てると思ってんの！？』

『ハイ！！リングデインドンドンリングデインデインドンドン！！』

操緒「勝てるわけ無いから！！そんな気持ち悪いケータイ持ちたくないから！！」

ラウラ「必殺技の話はどうなったんだ？こんなものどうやってゲーム化するんだ？」

「これはほんの一例だ。次は複数のキャラで繰り出すコンボ技を見てもらう」

そういつと画面手前のパネルを操作しはじめる。

「幻想殺し仙人応答願います」

『はい、こちら幻想殺し仙人だ』

出てきたのはモニターに映ったのはパーマをかけて洞爺湖仙人と同じ髭とメガネをかけたおばさん…ゾンビ仙人と大して変わらないおばさんの姿だった

涼子「これさっきのおばさん使いまわしているだけだよな！？額の文字書き換えてるだけだし！！」

唯一変わっているのは、額の文字が“ゾ”から“幻”に変わっているだけである

「ちがうこれは、お母…幻想殺し仙人だ」

「お母さん！？今お母さんって言ったよ！？」

シャルルや涼子のツッコミに動じず洞爺湖は彼のお母さん（？）の幻想殺し仙人と会話を続ける

「どうだ、調子は？」

『今練習中よ、今から見せるから』

幻想殺し仙人の後ろには当麻、元春、青髪、秋沙、制理、御坂美琴、黒子の姿があった

「今から見せるのは学生向けの会社のスポンサーを得るためのコンボ技だ。よく見ておけ」

緻密にして熱いリングディンドンに死角なし。上条当麻先生（英語）

『成績を伸ばす一番簡単な方法は、1、リングディンドン』

毎年3万人のリングディンドンを大改造。青髪ピアス先生（英語）

『リングディンドンなんて歌なんや、こんなもんやれば誰だってできるようになる』

数学的リングディンドンを高い次元へ。姫神秋沙先生（数学）

『リングディンドンを…どう解釈していくかということ』

東大などリングディンドン難関大合格者が続出。吹寄制理先生（数学）

『リングディンドンを瞬時に動けるように!!』

東大リングディンドン系合格者から圧倒的支持。土御門元春先生（物理）

『リングディンドンが少しでも曖昧だと、途中からおかしくなってくるぜい』

過去20年間の入試分析に基づく「マドンナリングディンドン」。

御坂美琴先生（古文）

『リングディンドンは基礎が怖いってことを何度も言っておくわよ』

東大・京大のリングディンドンを突破せよ。白井黒子先生（現代文）

『いつリングディンドンをやるか…今しかないですの』

「結局、リングディンドンしか言っていないじゃねえかアアア！
！」「」

書いているこっち側もリングディンドンがゲシュタルト崩壊を起こしてきました

リングディンドンで成績が伸びたら誰も苦労はしませんよ

言っておきますけど、大学試験にリングディンドンの試験はありませんからね？

9人もリングディンドンから話が進まないことに口調も少しずつ変わって来てます

第「ところで一夏たちはどうした？どこにいる」

奏「夏目君もこんな真似をしているんでしょうか…？」

「ふむ…なら今度はお前たちの物語の主人公たちの様子を見ることにしよう。白式仙人！！」

白式仙人って名前だけは強そうですね

操緒「智春と森野君も白式仙人のところにいるの？」

鈴音「ISに仙人がいること自体が不思議で仕方ないんだけど」

『ハイ、こちら白式仙人よ』

出てきたのはまたもやさっきのおばさん。違っているのは額の文字が“白”になっているところだけ

シャル「白式仙人は何のCMの必殺技を教えるの？」

りんご「もう、リングディンドンは飽きたですよ？」

「保険会社のCMを獲得できるような修行だ。白式仙人、彼らに一度必殺技をやってもらえー！」

『OK！やってみなさいー！』

ツーチャツーチャツーチャツーチャ

ネコとアヒルが力を合わせて皆に幸せを~~~~

まねきねこダック

『『『ニヤンニヤン』』』

アフラックのCMですね

そこにいたのは、全身白タイツで顔に白粉を塗りたくり白のネコ耳をつけて股間部には白鳥パンツならぬアヒルパンツを履いた一夏、智春、亮士の姿があった

「「「ネコ耳つけた志村じゃねえかアアア！！！」「」」

『もつと可愛く！！モノホンに勝てると思ってるの！！？？』

『『『ハイ！！ニヤンニヤン！！！！』』』

ラウラ「勝てるわけ無いだろ！！」

涼子「ドリフに出てた方がよっぽどマシだわ！！」

その後も、竜宮家のラブホに宿るラブホ仙人（さっきのおばさん）が教える乙姫と浦島の世田谷自然食品のグルコサミンのCMのパクリだとか…

琢磨のカメラに宿るカメラ仙人（おばさん）が教える琢磨と大原杏のロッテのフィッツのCMのぱくりだとか…

真日羽の使い魔^{トフター}ヴィヴィアンに宿る風仙人（やっぱりおばさん）が教える秀、アニア、玲子、ヴィヴィアンによるソフトバンクの白戸家のCMのパクリだとかを見せられた

そして…

「これが最後だ。酒仙人、応答願います」

操緒「酒仙人ってただの酔っ払いだよな？」

『ハ〜〜イ！お父さんだよ〜〜！！』

鈴音「お父さん！？お父さんって言ったよこの人！？」

ラウラ「結局家族でやり繰りしてるだけだろ！！」

自分のことをお父さんといいながら出てきたのは、頭ははげ散らかってネクタイを頭に巻き、洞爺湖仙人と同じ髭とメガネをした酔っ払いのおっさんの姿であった

「酒仙人だ！！」

『メンゴメンゴ！！酒仙人で〜〜す。今彼らの教師に必殺技を伝授しているところであります。リングディンドン？』

セシリア「何でリングディンドンが「どーぞ」みたいな使い方になっていきますの！？」

「首尾の方はどうだ、リングディンドン？」

操緒「この人達、リングディンドン使いたいだけだね…」

『いや〜〜必殺技教える景気付けに酒飲んでたらね〜〜御摘みに悪魔の実が入っていたのか…三大将並みの強さになっちゃったんだけど大丈夫かな？』

涼子「強さのバランス滅茶苦茶になってるからアア！！」

お酒仙人の後ろにいたのは氷結人間と化した山田真耶、光人間と化した月詠小萌、マグマ人間と化した織斑千冬の姿だった

ジジジ…

『ちょっとオオ！！なにやってんのよ！！』

とつぜんモニターの映像が半分に分かれ、映ったのはゾンビ・幻想殺し・白式・ラブホ・カメラ・風仙人のおばさんである

りんご「お母さんが割り込んできましたの」

『いい年してそんな女の人と仲良くして父親として恥ずかしくないの！？』

「落ち着け！お母…風仙人、父親じゃなくて酒仙人ね」

『仕方ないだろ、こつちだって仕事なんだからさあ母ちゃん』

「母ちゃんじゃなくて風仙人だから！！」

もう、9人や他の必殺技を伝授されてた人たちは完全に放つたらかして夫婦喧嘩を始める酒仙人と風仙人とそれを止める洞爺湖仙人

第「これ…どこの家庭だ」

奏「もうツツコミするのも疲れましたね」

山田『落ち着いてください!!』

『うつせえよ!! てめえらに何がわかるってんだ!?!?』

唯一止めようとしているのが、織斑たち3人の教師の姿だった

小萌『冷静に話し合えば分かり合えますです』

『黙れ!! お前らに何がわかるんだ!!』

パライイン

お酒の入っていたグラスが割れる

織斑『落ち着けって言うのが分からのか!?!?』

織斑は右手をマグマに変えてそれを酒仙人の胸に貫通させる

それはまるで、ルフィを守ろうとしたエースとそれを死に至らしめた赤犬の姿のよう

「お父さんんんんんんんん!!!!」

シャル「認めたね、お父さんだつて」

画面には砂嵐が起こり、状況が読めない

「リングディンドンリングディンディンドン、リングディンディンドン、リングディンディンドン」

必死にリングディンドンで通信を試みる洞爺湖仙人。しかしなにもおこらない

「か…完全に酒仙人からのリングディンドンが途絶えた… 私たちは仙人をも倒すモンスターを作り上げてしまったのかもしれない」

涼子「お前らが悪いんだろ、小萌先生たちに悪魔の実を食べさせたんだから」

鈴音「なんで悪魔の実がおつまみで出てきたのよ」

『洞爺湖仙人応答願います！洞爺湖仙人応答願います！！』

モニターの砂嵐が止み、人影が写る

「母さん！！！」

ここからはエアロスミスの“ミスアシング”を聞きながらご覧になるとよりムードが出ると思います

『洞くん…元気…？』

必ず帰ってくるって約束したけど…』

「どじいじいこと？」

『その約束は守れそうに無いわ。身体もボロボロだし』

お母さんの身体は左半分が凍りつき、身体の一部がレーザー光線で貫かれている

「お母さん…俺、嘘ついてたんだ…」

お母さんやお父さんみたくならないって言ってたけど…俺お母さんやお父さんにそっくり…

俺のいいところは全部お母さんとお父さんから貰ったもの。

心から2人を愛してるよ。誇りに思ってるよ

だけど怖いんだ…凄く…」

別れに口調が大幅に変わる洞爺湖仙人、親との今生別れってこういうものなのだろうか

『分かるわ、その気持ち…だがその恐怖はじきに消えるわ』

第「なにアルマゲドンのパクリをやってるんだ」

『子供は神様のくれた真冬に咲くバラだって言うけど…洞くんはめい一杯咲くバラよ。』

私たちに数え切れないほどの幸せをくれた

お前とAJの結婚式が見たかったわ』

奏「AJって誰ですか？」

『これからは…空からお前とAJを見守ることにする』

操緒「だからAJって誰？」

『あのモンスターを倒さなければ地球は滅亡するわ』

ラウラ「人の教官をモンスター呼ばわりするな…お前たちのせいだろ」

『だから彼女たちに伝授するのよ…あのモンスターを倒せるくらいの必殺技を…
もうこれで別れね…』

「母さん!!待って!!」

ジジジジジ...

通信が完全に途絶えた

「母さん…父さん…」

.....

両親との別れにすすり泣く洞爺湖仙人。そしてそれを見て何も言えなくなる9人

「聞け！！お前らアア！！目覚めのときが来たのだアア！！」

両親を失った悲しみの反動か…それとも憎しみがそうさせるのか

洞爺湖仙人は今までに無いほどの迫力になる

「この必殺技で…地上を！！スポンサーを勝ち取るのだ！！」

（（あ…スポンサーのことは忘れてないのね…つっこまないけど）
）

心の中で思うだけにしておく9人

カツツカツツカツ…

いつの間にか洞爺湖仙人と9人の後ろには三大将並みの力を持った
教師3人の姿があった

「見ておけ！！これが最終奥義！！」

すいませんっした！！！！

教師3人に対して頭を地面につける立派な土下座

「しかと目に焼き付けたな…これが最終奥義

“ DOGEZA ”だ」

「「「いるかアアアア！！！」「」」

という夢を見た日の朝…

1年A組では、9人が集まっていた

シャル「あの夢…見た？」

操緒「見た見た！！あの洞爺湖仙人の夢でしょ！？」

涼子「お前らも見たのか…」

セシリア「どうやら夢の中に出てきた9人は全員見ているようですわね」

「おっ…こんなところにいたのか」

「どうしたんだ？みんな集まって」

「涼子さんおはようございますっスー！！」

9人に近づくと一夏、智春、亮士の3人

「何か面白い話でもあったんっすか…アツツツ!!!」

亮士は机の傍においてあつた鞆に躓きバランスを崩し一夏と智春にもたれかかる

「森野!!!」

一夏と智春もそのせいでバランスを崩しそのまま9人のほうへ倒れていく

ドオオオン!!!

教室には倒れたものの音が響き渡る。机や椅子も何個か倒れています

りんご「森野君たち!!!大丈夫ですの…って」

鈴音「これはこれは…」

第「なんともラッキースケベな状態だなあ?一夏」

シャル「…一夏のエッチ…」

一夏はシャルロットのスカートの中に顔を埋め、智春は奏の胸に顔を埋め、亮士は涼子の胸を揉むというなんともうらやましい状態になったのだ

箒・鈴音・ラウラ「くくくー夏アアア!!」「くくく」

涼子「亮士イイイ!!」

奏「夏目君!!」

パシコオオオーンンンン!!!!

3人の腿にモモパーンがお見舞いされる

どうやら無意識の内に覚えたみたいですね

こうして、9人はDOGGEZAは断つたもののモモパーンを覚える
ことができたのでした

また、モモパーンはしばらくの間、女子生徒の間で流行ったとか

めでたしめでたし

第二十六話：リングゲインドンなんて歌なんだ、こんなものやれば誰だってでき

このお話で言いたかったこと

“IS”の二期がありますように！！

皆さん、ミスアシングと共に読んでみて少しは感動できましたかね？

あと、皆さんに質問なんですけど原作ではお妙がドラゴンボールのフリーザレベルに強くなってましたが、フリーザと三大将どっちが強いんでしょうかね??

次回、紳士の会の復讐劇でございます

第二十七話：山川豊のお兄さんは鳥羽一郎

男子寮会議室1、時間軸的には試召戦争前日の日曜日夕方

その入口には“関係者以外立ち入り禁止”と書かれたメッセージボードがかけられており、その中にいるのは約50人の男子生徒の数々

サンジ「さて、今回の議題は“女の子の夏服と水着への正しい萌え方”の予定だったが…」

紳士の会の会長であるサンジが壇上に立ち話し始めるがなんて議論をしてるんでしょうね…

家康「夏服か…半袖になるから肌の露出が増えてくるな」

康太「……ブフォツツッ！！！（鼻血を放出させる音）」

鍵「さらにウチの夏服はほとんど白や水色、桃色といった薄めの色だから濃い色の下着を着ていると下着の色が透けてくるな」

織戸「白とかの下着でも形が透ける事があるからな…」

康太「……ブシャアアアーーーー！！！（またもや鼻血）」

明久「それに6月からは代表候補生だとかの元から受けている人も含めて女子生徒の希望者を募ってISの機動訓練をやるそうだね」

樹「それは男子生徒も見学可能なのか？」

てきた女子寮要塞モードの事です

康太「……あれは酷い目に遭った」

鼻血を流していた康太はいつの間にかケロッと復活していました

明久「そうだったね……思い出したくも無いよ」

樹「下手すれば死んでいたからな……」

あの時、ふざけている様にしか見えなかった樹も命の危機を感じていたんですね

鍵「俺たちでここ数日間、聞き込みを行ったところ女子寮の兵器の数々は衛星兵器、青酸カリ、竹槍の落とし穴など我々を死に至らしめる物ばかりと判明した」

サンジ「そこでおれたちは考えた……これは行き過ぎではないのか！？」

「……そーだそーだー……やりすぎだ……」

サンジの問いかけにそこにいた生徒達は女子生徒たちへの怒りをあらわにする

「このまま男は黙ったままで良いのか！？いいわけないだろ!？」

「『『そーだそーだ！』やりすぎコージ最高だ！』」

やりすぎコージを3回くらいしか見たこと無い作者がこんなことかいてていいんでしょうかね？

サンジ「ここからが重要だ。よく聞け…」

明後日の火曜日早朝4時。我々紳士の会は女子寮に奇襲を仕掛ける。目には目を、歯には歯をだ」

ドヨドヨ…とその言葉に一度騒然となる

サンジ「だが、我々は“紳士の会”だ。我々は美しく可愛い女性たちを痛めつけることなど言語道断だ」

明久「なら、どうやって？僕たちは殺されかけたんだよ？」

確かに殺されかけた明久たちが受けたことを女子寮の生徒たちにするとなると、少なからず彼女たちを痛めつけることになる…矛盾しています

サンジ「当日決行するのは今から説明する3つの作戦だ。よく聞いとけ」

壇上に家康、鍵、樹の3人が立ち説明を始めた

家康「まず一つ目は“トイレットペーパー逆さま作戦”だ」

「ウオオオオオ！！！！何だそれは！！！！」

家康「フッフッフツ…女子寮に設置してあるトイレットペーパーの引く所を奥にするように細工！！快適にトイレを使用させなくするのだ！！延々と途切れないトイレットペーパー地獄に陥れる！！」

「素晴らしい！！女共めザマーミロってんだ！！！！」

鍵「そして2つ目は、“ポットに冷水作戦”！！」

「それも面白そうだ！！で何だそれは！！！！」

「男子寮もそうだが女子寮でホットコーヒーやコーンスープなどを食堂で飲むときはインスタントのものをポットのお湯で溶かす。

そこでそのポットのお湯を捨ててコンセントを外し、その空っぽの中に冷水を入れる

彼女たちはこれからほんの少ししか溶けてないスープやコーヒーで朝を迎えることとなるのだ！！」

「ハハハハハ！！！！面白い！！！！」

「そして3つ目、“バナナの皮撒布作戦”！！」

女子寮の入口に大量のバナナの皮を撒き学校へ向かう女子生徒たちは大量のバナナの皮で転んでしまう。そして何度も転ぶのでなかなか前には進まない。そして渋滞が起こり遅刻
彼女たちを遅刻地獄に陥れるのだ!!」

「……ワハハハハ!!それはいい!!」「」

よくまあこんなバカなことを次から次へと思いつきますよね
ですが、書いたように彼らは紳士ですから!!女の子を傷つけたり、
襲うようなことは一切しませんから!!

サンジ「では、火曜日早朝作戦を決行する!!掛け声いくぞ!!せ
ーの!!」

「……エイエイ、オッパーーーーーイ!!!!」「」

…ほんと何やってるんだか。男子寮中に響くオッパイと叫ぶ声に会
議室にいなかった人たちは“何だ。何だ”と騒いでいます
でもまあ、これが思春期の男子、そしてこの学園の男子寮の日常の
姿なのかもしれません

時間は少し過ぎて、月曜日13時半過ぎ

高校第一校舎内にある学生食堂

普段13時半は午後の授業はあるものの、中学高校の第一校舎は試召戦争があつたため授業は無かつたのだ。

では、試召戦争に参加していなかった生徒達は何をしていたのかという中生継の映像を見続け休憩時間には召喚システムの説明を受けていたのだ。

「こんにちはっス、東宮先輩」

「よお、森野」

「こんにちはですの、東宮先輩に桂先輩。ここよろしいのです?」

「ええ、良いわよ」

亮士、りんご、涼子の3人はヒナギクと東宮の座っていた隣の席に座る

なお、3人の座った反対側にはハヤテやナギもいる。

どうやら、亮士と東宮は第四話、第六話のあの一件以来、意気投合して話すことが多いみたい。

「森野君と東宮先輩、ヘタレのダメ人間同士で仲がいいですね」

「.....」

りんごの毒舌に黙り込んでしまう2人。もうちょっとオブラートに包むとかしましょうよ

りんご「そんなことより試召戦争お疲れ様でしたの、優勝おめでと
うございますですの」

話はまず今日の試召戦争の話から入ります。3人も見ていたんですね

ヒナギク「ありがとう、どうだったかしら？」

涼子「面白かったですよ。私も早くやってみたって思いましたし」

りんご「桂先輩と三千院さん大活躍でしたのね」

ナギ「まあな、成績の良い私にかかれば襲ってくる敵の1人や2人
楽勝だ」

ヒナギク「そうね、日ごろから真面目に勉学に励んでいるおかげよ
ね」

ナギとヒナギクは褒められて無い胸を張っています

「「「「ああん!!??」」」」

すみません…何でも無いです。っていうか地の文ナレーションにキレるの止めて
くださいよ。涼子とりんごもキレてますね…理由は明白なんではない
ませんが

涼子「でも、それに比べると東宮先輩と綾崎先輩はあまり活躍して
なかったな」

「ええ…僕もお嬢様たちみたいに活躍できればと思ったのですが…」

ハヤテは苦笑いしながら

「東宮さん出番一回も無かったっすからね。一体何処にいたんスか？」

東宮「一応、前半戦は遊撃隊の中にいて、後半戦はハヤテや桂さんと一緒に制圧部隊にいたんだぞ？出番無くて一度も召喚してないけど…」

「この役立たず（東宮）は別として、ハヤテは私には活躍していたと思うぞ？」

だから…あ〜ん」

ナギは箸で自分のお弁当箱に入っていた唐揚げを掴むとハヤテの口元へと持ってきたのだ。

「お嬢様、これは…??」

「ハヤテが今日頑張ったご褒美だぞ」

「そうですか、では（パクッ）」

ハヤテはその唐揚げを食べ笑顔になる

「では僕からも。お嬢様、今日は頑張っていましたね」

ハヤテも箸でお弁当箱に入っていたポテト数本を掴み、ナギの口元へと持ってきた

そしてナギはそれを食べて…

「ングング…うむ、美味しいぞ。あ〜んって実にいいものだな。いつものポテトより何倍も美味しい!」

「僕もそう思います」

彼らはお互いに見つめあうと微笑み合った

「ラブラブですね〜、見せつけられているこっちはムカつきますのよ?」

ハヤテとナギの姿を見てりんごは率直な意見を述べた

「あつ、そう見えます?」

「実際そうなんだけどな、私たちは愛し合っているぞ?なあ、ハヤテ」

「ええそうですとも」

ハヤテとナギは少し顔を染めながらも自分たちが愛し合っているということを断言したのだ

(ほら、森野君に東宮先輩も…)

りんごは亮土と東宮にアイコンタクトで“お前らもあ〜んをしてあげたらどうだ?”と促す

それに気付いたのか、東宮は餃子を亮土は小さく切ったハンバーグを箸で掴むと…

「桂さん、今日とっても頑張っていたと思いますからどうぞー!」

「涼子さんもいつも頑張ってるっすから、どうぞっスー!」

それぞれヒナギク、涼子の口元へと持っていった。

しかし、ヒナギクと涼子は彼らと付き合っているという訳でもなければ“愛してる”と胸を張って言えるような恋愛感情を抱いているわけではない

“ちよつと気になる”位のレベルなのだ

ヒナギクの恋愛感情の90%以上はまだハヤテが占めていますし、東宮なんてせいせい3〜5%でしょう

ですから…

「ありがとね、東宮君の気持ちだけは受け取っておくわ」

「オレも気持ちだけ受け取ることにしとく」

彼女たちは目の前に差し出されたものを食べずに彼らのお皿に乗っかっていた餃子とハンバーグを食べたのだ

「……………なあ、僕たちってそんなに好かれてないのかな……………??」

「……………そうっすね…きっと食べてくれると思っていたんすけど」

彼らは俯きながら2人だけにやっと聞こえるような声でそう交わした

これがカップルの男女とそうでない男女の差なんでしょう

(……森野君に東宮先輩頑張れですの。私は応援してますから!!)
りんごは心の中でそう呟いた。

何でりんごが東宮を応援しているのかというと、亮士と涼子、東宮とヒナギクのカップルってそっくりだからだと思われませう
男の方はヘタレだし、女2人は声優が一緒(伊藤静)で胸の無いツンデレですからね

そして昼食を7人は食べ終わり…

「じゃあオレたちは御伽銀行に行きますから」

「ええ、また一緒に食事しましょうね」

涼子たち3人は御伽銀行、ハヤテたち4人は剣道部に行く為に剣道場に行こうとしたが…

「あつつ、東宮さん!!」

亮士が何かを思い出したのか、東宮の方へとやってきたのだ

ハヤテ「どうしたんですか？」

涼子「どうしたんだ、亮士？」

「東宮さんは明日の早朝のアレ行くんスか？アレ自由参加で殆どのメンバーは行くらしいっスけど…」

アレ…では東宮だけには伝わるだろうが、その他のハヤテたちには何の話だか分からない

ヒナギク「アレって…何の事??」

「アレって言うのはですね…」

彼らは話し始めた女子寮の兵器の数々に男子生徒が怒っていること、そしてその復讐のために奇襲するトイレットペーパー、ポット、バナナの皮の事

要するにあのふざけているとしか思えない計画の全てを

りんご「なるほど…そんな事が計画されていたですね」

涼子「何って言うか…アホらしいつか、バカらしいってつか…」

まあ、計画自体馬鹿げた物なので重大な事というより話のネタ程度で5人は受け止めていた

ナギ「ところで2人とも…」

「なんだ（何っスか）??」

「この計画は私たち女にばらしちゃまずいんじゃないか？」

「アツツツ!!!」

気付いたときには時すでに遅し、紳士の会の計画は女子生徒に伝わっていったのです。

そしてその情報はりんごの力で女子生徒の間で少しずつ広まっていくのでした…

まあ、この学校には他の学園にもあるように裏掲示板・裏ツイッターがあります。第五話の『桃源郷学園 真剣 侍しゃべり場』もその1つです。

その中には男子専用、女子専用の掲示板があつてりんごは女子専用のツイッターに書き込んだのだ

果たして、紳士の会の計画は成功するのかそれとも失敗か！？
次回に続く

第二十七話・山川豊のお兄さんは鳥羽一郎（後書き）

なるべく1週間以内に投稿しようと思っていたのに月曜日になってしまった

言い訳をするなら計画停電とか…モンハン（未だに2ndG）やっているとかが上げられますが…

本当に更新速度を上げるって言ったのに有言実行されてませんね

次回ですが、二十八話の前に番外編をやるかもしれません…っていうかやります。今回の番外編は“頭の体操”です

番外編 頭の体操（前書き）

今回は前回の後書きで言っていた通り頭の体操…というより、なぞなぞをやりたいと思います。問題は全部で五問です
答えは同日掲載の二十八話の前書きに書きます

番外編 頭の体操

第一問 難易度：

ある日、インデックスと当麻の飼っていた三毛猫スフィンクスが何処かに迷子になってしまい見つからなくなってしまった。それを知り、偶然スフィンクスを見つけた近藤勲が捕まえて当麻たちのところに持ってきたところ、インデックスは「ダメなんだよ、ゴリラを連れてきちゃ」と言いました。近藤は怒って「これはゴリラなんかじゃない、君たちの飼い猫だろ」と反論。しかしインデックスは「そんなこと分かってるんだよ」と言いました。さてインデックスは続けてなんと言ったでしょう??

第二問 難易度：

シャル「ねえ、セシリアに箒。なぜなぞ出すよ？」

箒「何だ、急に？」

セシリア「いいですよ、ちょうど暇してましたし」

シャル「フランス語と英語と日本語の違いは分かるよね？」

箒「バカにするな、そんなの小学生でもわかるぞ」

シャル「「ハロー」は英語、「おはよう」は日本語、「テレビアン」はフランス語だよ？」

セシリア「分かってますわ、バカにしていますの？」

シャル「それじゃあ問題ね。「グッバイ」は何語？」

セシリア「英語に決まっていますわ!!」

シャル「ブー、はずれ。グッバイは日本語だよ」

箒「待て!!何故グッバイが日本語なんだ!？」

シャル「じゃあ、“ありがとう”は？」
セシリア「……日本語と見せかけて英語とか？」

シャル「ありがとうはフランス語だよ〜。“ごめんね”は何語？」
篤「……日本語」

シャル「よく分かったね、正解だよ！！」
セシリア「篤さん、分かりましたの？何か法則性がありますの？」
篤「何で当たったのかが分かんらん」

さて、ここで問題です。“こんにちは”と“ニーハオ”は何語でしょう???

鈴音「分からない人にヒント！！“ごめんね”は日本語だけど“ごめんなさい”は中国語だからね」
ラウラ「さらにヒントだ。“グッバイ”は日本語かつドイツ語だ。これで分かったも同然だな」

第三問 難易度：

ある日の2年A組男子生徒の下着をチェックしたところ、トランク
ス派とふんどし派に分けることができました
土見稟はトランクス、緑葉樹はふんどし
臯月駆はトランクス、田島賢久はふんどし
吉井明久はトランクス、坂本雄二はふんどし
瀬能ナツル、佐伯玲士郎は2人ともトランクス

では綾崎ハヤテと杉崎鍵はそれぞれどちら派だったのでしょうか？

第四問 難易度：

フジテレビの人気番組“とんねるずのみなさんのおかげでした”のコーナーの1つ、“新・食わず嫌い王決定戦”に出るときの事を考えます

坂田銀時はノリさん側、桂小太郎はタカさん側

平沢唯はノリさん側、秋山澪はタカさん側

平沢憂はノリさん側、中野梓はタカさん側

御坂美琴はノリさん側、上条当麻はタカさん側

白井黒子はノリさん側、初春飾利はタカさん側
となります

ここで問題、織斑一夏VS篠ノ之箒、桂ヒナギクVS三千院ナギはそれぞれどっちがノリさん側、タカさん側でしょうか？

第五問 難易度：

学園でくじ引き大会があり、その賞品は“笑っていいとも！観覧券”でした

このくじ引きには当たりとハズレしかありません

沖田総悟は当たったが、山崎退はハズレ

日向秀樹は当たったが、仲村ゆりはハズレ

高町なのは当たったが、フェイトはハズレ

橘菊理は当たったが、草壁美鈴はハズレ
でした

ここで問題、平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬、真鍋和の中で唯一当たった1人なのは誰でしょう？

ヒント：“笑っていいとも！”と言えは…

第二十八話：トロといえば中トロ（前書き）

頭の体操の答え

第一問：「猫スフィンクスに向かって言ったんだよ」と言った

第二問：こんにちは フランス語、ニーハオ 日本語

3文字 えいご 4文字 にほんご 5文字 ふらんすご 6文字
ちゅうごくご

第三問：綾崎ハヤテはトランクス、杉崎鍵はふんどし

名前の中に濁点、半濁点が入っていればふんどし。入っていなければトランクス

第四問：織斑一夏と三千院ナギがノリさん側、篠ノ之箒と桂ヒナギクがタカさん側

名前の漢字の中に木が入っていればタカさん側、入っていなければノリさん側となる。だってノリさんは木梨憲武（木梨 木無し）ですからね

第五問：田井中律

名前の中に“た”が入っていれば当たり、そうでなければハズレ
“笑っていいとも！”のスタジオと言えばスタジオアルタ（有る“た”）ですよ

皆さんは何問正解したでしょうか？

というわけで、紳士の会の奇襲作戦の始まりです

深夜から早朝にかけては、正面玄関は使用できないため彼らは裏口から入ることになる

裏口はICカードをタッチして合言葉を音声入力するだけで入ることができるのだ

サンジは持っていたICカードをパネルにタッチする

『山』

パネルから機械的な声が聞こえてくる

「川」

『豊のお兄さんは？』

「鳥羽一郎」

あらかじめ聞いておいたのであろう、合言葉を難なく入れる

彼らは一度エントランスホールに出た。ここに出ないと他のフロアに行けないからだ

明久「さっきの入口にバナナの皮を撒いたよ」

康太「…正面玄関にも撒いてきた」

ら。ごめんね〜」

なのはは右手を一度上げると下に振りかざす

パンパンパーン!!!

それと共にバズーカから放たれる何発もの弾

その弾の中には網が入っており、まさに一網打尽となった

「グアア!!!」

「何だこれは!!!」

ドテツツ

「イテエ!!! 転んだ!!!」

捕らわれた紳士の会のメンバーはのた打ち回って脱出を試みるが出ることはいできない

「どっつする、これ?」

「ん〜ん〜、いつまでもここに置いておくのもアレだから…気が済むまでサンドバック状態で、その後適宜開放でいいんじゃない? …まだちよつと眠たいね」

「そうだね、もう少し寝てよっか」

「うん!」

なのはとフェイトは自分の部屋に戻っていく

そして残された女子生徒たちと紳士の会のメンバー

ギヤアアアアアア！！！

なのはの言った通り、彼らは人間サンドバック状態となった日ごろからストレスの溜まっている女子生徒たちの怒りの捌け口になったのであろう。それとも学校のある日にこんな朝早く起こされたことに怒っているのか…

明久「ゲッツ！！グハッツ！！ダメだ、死にそう…」

サンジ「何を言っている、ガッツこんなことで死ぬな！！」

鍵「そうだ、ボフォッツ死ぬならあの偉大な武蔵坊弁慶や一エドワード・ニューゲート（白ひげ）の如く立ったまま死ぬのだ！！それが男の生き様つてもものだろ！！」

康太「……ゴホッツ、身体は立てないが股間が勃ってきた」

樹「俺もだ、ボッツなんか気持ちいいな」

織戸「ウアッツ何かに目覚めそんな気がする！！」

こいつらときたら…こんな状況の中で身を立てずにナニを立ててMに目覚めようとしていますよ。

このまま彼らをMに目覚めさせるのも悪くは無いですが、ここでやめておきましょう

そしてその日の夕方。何処かの空き教室。紳士の会は不定期で場所を変えているのですが、どうやら今回はちよつと様子がおかしいみたい。覆面と黒いマントで身体を隠して手には鎌や剣、蝋燭に無知などと言った思い思いの武器を持っている

異端審問会モードになっています

ここにもばらしてしまった2人の姿が無い。また、浦島太郎の姿も無い

鍵「俺たちの奇襲作戦は失敗に終わってしまった。なぜこうなったか分かるか？」

「「「何故だ！？何故だ！！」「」」

樹「何故ならば、裏切り者がこの計画をばらしたからだ！！」

「「「なんだとオオオ！！！？」「」」

家康「裏切り者の名前は東宮康太郎と森野亮士だ！！聞いたところ彼らは最近仲良くしている女の子たちに話してしまったんだ！！」

「「「何イイイイ！！！？」「」」

樹「許せるか！？女の子と仲良くしていることを！！」

そっちですか。

「「「許せるわけ無いだろオオオ！！」「」」

鍵「俺たちが女の子で妄想しているときに奴らは女の子とイチャイチャイチャイチャイチャ……」

「「「腹が立つてきた！！許されるまじ！！」「」」

「それはだな……」

樹がカップルの仲を滅茶苦茶にする計画を言おうとしたその時だった

「ちよつと待つて下さいの！！！！」

バタンツツツツ！！と大きな音を立てて教室のドアが開かれる

織戸「赤井、何でここにいるんだ？」

明久「ここは女子禁制だよ??」

そこにいたのは、りんごだった

「話は最初から最後まで聞かせてもらいましたのよ。カップルの仲を滅茶苦茶にしたいんですね?」

家康「確かにそつだ。女の子とイチャイチャしている男が憎い」

「りんごちゃんって言ったかな、君は何がしたいんだ?俺たちの計画を邪魔する気??」

鍵の質問にりんごはニコリと微笑みながら答える

「そんなつもりは全くありませんの。私はあなたたちに協力をしにきたんですのよ??」

樹「じゃあ聞くが仲を滅茶苦茶にする方法を考えてあるのか?」

「もちろんですの、そしてあなたたちにも目茶苦茶にできる他にメ

リットもありますのよ?。」

サンジ「メリット……何だそれは??。」

りんごはフッフ、と笑ってから

「そろそろ、水着の恋しい季節になってきたですよね〜」

窓から顔を出して、十四話にも出てきた温水プールを見ながら言ったのであった

その日の夜の9時過ぎ、ハヤテ、東宮、雄二、亮士、浦島太郎、結弦、日向、朋也の8人は食堂に呼び出された。呼び出したのはもちろんりんごである

日向「それで、何で俺たちはここに呼び出されたんだ?。」

「皆さんは今日あった紳士の会の奇襲作戦はご存知ですか?。」

ハヤテ「ええ、知ってますけど……」

朋也「あれって失敗に終わったんだよな。んでもってボロボロになつて帰ってくるって見たぞ」

雄二「誰かが女にばらしたってあいつ等言ってたぞ。それが失敗の原因じゃねえか」

「まあばらしたのはその2人ですけどね……」

りんごは亮土と東宮を見つめながら言う。それにつられて6人も2人の方を見る

「ヒイイ！見ないで見ないで〜」

「で！！僕たちがそれと何の関係があるんだよ！！」

見つめられて居心地が悪いのか東宮は話を元に戻そうとする

「話を続けますと、失敗したのは2人のせい…となるはずだったのが、あの人たちは女の子とイヤイヤ出来てる男たちが悪いという結論に達しましたの。皆さんには彼女や仲のいい女性がいますのよね？」

「ああ、かなでがいる」

「僕にはナギお嬢様がいます」

それぞれ、自分の彼女や仲のいい女性を上げていく

「紳士の会はあなたたちの仲を引き裂こうとしましたの」

日向「はあ！？」

朋也「それって完全に八つ当たりだろ！！」

浦島「こいつらのせいで、俺らは恨まれなきゃならねえのか！？」
雄二「東宮、ふざけてんじゃねえぞ？」

雄二は東宮の胸倉を掴み、朋也と浦島と日向は亮土を睨みつけた

「ウアア！！ゴメンゴメン！！許してエエ……」

「ヒイイイ！！御免なさいっス！！だから見ないで〜」

2人とも完全にヘタレモードです

「そこで、私は紳士の会の人たちにある提案をしましたの。“私の考えた方法で仲を引き裂きましょうですの。御伽銀行に借りを作ればそれを手伝いますのよ”と。それで紳士の会の皆さんは了解しましたの」

「ちよつと待て…」

結弦がりんごの話を止める

「赤井は紳士の会の計画を止めたんじゃないのか？なぜあいつらと協力することを態々言いに来たんだ」

「私は紳士の会にも協力しますし、皆さんが御伽銀行に借りを作っていたのであれば皆さんにも協力しますの。皆さんが借りを作れば紳士の会の計画をすべて話しますし、貸しを作らなければ仲が引き裂かれるのをただ待つだけですの。それでもいいですの」

りんごの言葉に顔を見合わせながら考える8人。

ハヤテ「僕は借りを作らせてもらいます。お嬢様との仲を引き裂かれないですし」

最初に名乗りを上げたのはハヤテだった

朋也「俺も作らせてもらう。こんな事で引き裂かれてたまるか」

日向「俺も作るぞ、結婚するって約束しちまったからな」

次々と名乗りを上げていく。そして最後には全員が御伽銀行に借りを作る形となった

「まいど〜ですの〜」

りんごは一度に8人に貸しを作ることが出来ましたから満面の笑みで完全に喜んでいきます

紳士の会もあわせれば1日で60人近くに貸しを作りましたからね

「りんごさん、その紳士の会の計画とは一体…??」

浦島の質問に笑みをこぼしていたりんごはコホンと一度息を整えて

「簡単ですの、皆さんが浮気をするようなシチュエーションに仕向けようとしているだけなのですの」

ハヤテ「浮気ですか??」

結弦「いや、俺たちは浮気なんか…」

「では聞きますけど、エロ本を見たことは一度もありませんの?」

「ウツツツ……」

りんごの言葉に息を詰める。彼らだって健全な思春期の男の子ですからね、そういうことも1度や2度ある事でしょう

「風が吹いて彼女以外のスカートがめくれそうになったときそれを見ようとしてしまったことは産まれて此の方一度もありませんのよ

ね？」

「「「……………」」」

まあ男の子ですからね、あったのでしょ

「要するに彼らは皆さんが彼女に一途かどうかを試そうとしてますの。何があっても一途に思い続けている彼女がいるのに他の女の子でナニをオツ勃てるなんて彼氏失格ですよ」

りんごさんは女の子として失格だと思いますけど。上のセリフを見れば分かります

浦島「確かにな……」

雄二「赤井の言うことには一理あるな」

「自分よりも可愛い子、家事の上手な子、勉強が出来る子、お金を持っている子、胸の大きい子はたくさんいますの、だけどその人たちに見向きもしないで、一途に思ってくれるところに女の子の乙女心はキョンキョンなりますの」

東宮「なるほど……………」

「ですから、皆さんには彼女や仲のいい子に一途だということこそ紳士の会の皆さんに見せ続ければいいですの」

「……………分かった。ずっとユイだけを思い続けてやる」

雄二「簡単じゃねえか、こんな試練」

「俺も涼子さんだけを見続けるっス!!」

それぞれの燃える思いを顕わにする8人

朋也「じゃあ、景気付けに一回団結するか。俺たちが一途だって見せつけてやる」

「「「エイエイ、オオオオオオー!!!!」」」

こっちはオツパイじゃなく普通の掛け声で団結しました。

こうして8人の紳士の会との戦いは幕を切ったのであります

今回はここまで

次回、最大の試練が彼らに襲う!!

第二十八話・トロといえば中トロ（後書き）

同日掲載のクイズもぜひご覧ください

第二十九話：恋の仕方は十人十色（前書き）

このお話の元ネタ オオカミさんと七人の仲間たち10巻“亮土くんピノキオと一緒に 人間をめざすことになる”
いまさら気付いたけどエンディングの歌詞でどんな展開になるか殆どばれちゃってますね

また、なるべく感想の一言欄に書かれた質問には返信するようにしたいと思います。感想には滅多に返信できませんが、ちゃんと見ているので！！

また、一部のクラス変更・追加を行いました。詳しくはクラス表をご覧ください

第二十九話：恋の仕方は十人十色

8人が団結したあの日から、紳士の会の試練が続々と彼らを襲ったのであった

…といつても彼らの前で素敵^{エロ}な本を読んだり、それを見せようとしていたり、思わせぶりなことを言ったりなど陰湿なものではなく愉快なものですけどね。

また、この試練を知った一部の女子からは色仕掛けもあつたりしてそれに目を向けないようにもする必要があつて…また、色仕掛けをしなくても風に吹かれて自然に起こったパンチラだとかも見ないようにはしたりと…気付いたら彼らの周りには敵が沢山いたのでした

しばらく経つたある日の放課後、彼らは温水プールの前に集められていた

「来たか…」

温水プールの建物の中からサンジが出てきた

結弦「サンジ、一体何をやる気だ？」

日向「こんなところに呼び出して、泳げばいいのか？」

サンジは8人全員が揃っていることを確認すると、

「まあついて来い。お前たちの愛を試す場に連れてってやる」

再び、プールの中へと入っていった

雄二「俺たちの愛…」

ハヤテ「ですか…」

建物に入り、サンジの指示で貸出用の水着に着替える。トランクスタイプである

着替え終わり、彼らが連れてこられたのは25mプールであった。

この学園の25mプールは学園内の人数の多さをカバーするため16レーンもある。まあ、それは今は関係ないが。

そしてそこには、紳士の会の面々が何故か水着姿になっていた。

8人と一緒に着替えていたサンジが紳士の会側に回るとコホンと咳払いをして話し始めた

「今日、お前らをここに呼んだのはほかでもない。お前らは俺たちとは違う…リア充の道を歩み始めている。だからこそ、俺たちには何ができるかと考えた…そしてひとつの結論に達したのだ。仲間の門出を祝い、壁を乗り越えるのを手伝うのが朋友、同志の俺らのすることなのだ。」

つまりこれは、俺たちからお前らに送る手向けなのだ…！」

「…そうだ…！そうだ…！頑張れよお前ら…！」

なんとも素晴らしき友情ですね

朋也「実際のところどうなんだ？」

「モテない男の僻みだ!!」

「『『『そうだ、そうだ!! 羨ましいんだよ!!』』』」

素晴らしき友情、5秒で崩壊しました

「『『『帰るわ…』』』」

その変わりように呆れたのか、8人は帰ろうとする

家康「まっつ!! 待て!!」

樹「そうだ!! まだ始まってもないぞ!!」

鍵「俺たちはこの日のために御伽銀行に借りを作っただぞ!!」

紳士の会の面々は更衣室への道を塞ぎ帰らせないようにする

「それに、見届け人だっているんだぞ? ほら」

サンジが指差した先には…

りんご「皆さんこっちですの〜〜〜」

ナギ「何なのだ? こんな所に呼び出すなんて」

ユイ「あたし、これから軽音楽部なんだぞ〜〜〜」

かなで「赤井さん、私とヒナギクさんもこれから生徒会が」

満面の笑みのりんごとそれに連れられてやってきた8人のパートナ
ーの姿であった。彼女たちは全員水着は着用せずに学校の制服です

「涼子さんなんでここに？」

「何でつていわれても…りんごがなあ」

「翔子！！何でここにいるんだ！？」

「……私も連れてこられただけ。何かあるのか分からない」

「渚！！！」

「朋也くん、何で水着姿なんですか？」

「桂さん」

「東宮君！？何でここにいるのよ？」

8人は突然現れたパートナーの姿に寝耳に水といった驚きようだ。まだプールに入って泳いでないので実際には入っていないのですがね。パートナーの方も含め混乱している16人を無視しながらサンジの話は続いた。

536

「というわけで、“女だらけの水泳大会、ポロリもあるよIN桃源郷学園”を開催する！！」

「……な…なんだってエエエー！！！！」

名前だけで伝わってくる素敵イベントにお約束な感じで声を上げる8人

「と、したいところだったがおれたちにそんな（ポロリの水泳大会に出るよう女の子に頼む）力は無い。殴られて終わるのがオチだ」

っというか、そんなに仲のいい女の子がいたら話し合っって机上の空

論なんか立てずに実践で経験値をつんでるはずですよ

鍵「だから、今回はこの学園の女子生徒たちによる“今年の新作水着ファッションショー”をしたいと思う」

ちなみにこれから出てくる女子生徒の皆さんは

“写真を2、3枚撮られるだけ。選んだ水着は自分のものにしていい。また浮島にいる8人を1人でも落とすことが出来たら御伽銀行に借りを1つ作ることが出来る”

としか聞かされてません。

ちよつとした詐欺ですね。だって女に餓えている紳士の会の皆さんがいるんですから。

写真を撮るのは情報部の方々と康太です

樹「だがお前らは、そのファッションショーを見ることは出来ない」
康太「…いや見ることは出来るが、それは同時に彼女たちを裏切ることとなる」

「乙姫たちを裏切るだど？」

「プールを見てみる、浮島があるだろ？」

サンジの言うとおり、8人がプールを見ると5 12レーンに人が1人立てるほどの浮島が浮いていた。簡単に動いたりしないように重りや紐で支えられている

「この試練、その名も“愛のバランスアイランド”！！！！」

わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~
わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~
わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~
わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~わ~~~~

紳士の会の皆さんは大盛上がり。完全に一昔前のお色気バラエティのノリです

「人はバランスを取るとき手を広げるが、遠くを見ることにより、よりバランスが取り易くなる。自転車に初めて乗る時のコツもそうだな」

樹「8人にはあの浮島に乗ってもらう、電光掲示板側を向いてな。掲示板側にはお前らのパートナーがいる。それを見続けなければならない。康太「……だが、反対の飛込み用プール側では刺客たちのファッションショーが行われる。お前たちが身体を180度回転させてそちら側に意識を集中させればバランスを崩しドボンってことだ」

「ちなみに発案は御伽銀行赤井林檎さんだ」

「りんご、またためえか!!」

涼子が叫ぶがりんごは天使の笑みでそれをスルーし、

「紳士の会の皆さんに頼んだら、一晩で用意してくださいましたの〜〜」

「いやいや、沢山の女の子の水着を…じゃなかった、友情のためならばこんなことの一つや二つ」

「さすがですの〜〜」

「フッフッフッ…」

「おほほほ…」

どう考えても悪役なサンジとりんごに8人のパートナーたちは思った
()(下らない…どうしてこんなことばっか)()

というわけで始まった愛の試練という名のバカイベント
ナギたちは電光掲示板の下の椅子に腰を下ろす

「お嬢様、行ってきます」

「頑張るのだぞ。必ず帰ってこい」

「…雄二」

「言うておくがあんま期待はすんなよ。俺は止めたいときに止める
から（だけど明久や杉崎に緑葉たちの思う壺になるのはな）」

「桂さん！僕やりますから！」

「そう…ならせいぜい頑張って」

「涼子さん！！見ていてください！」

「あっそ」

「太郎様、私信じてますから」

「ああ、俺の事を待っていてくれ」

「渚、俺はやる。お前のためとあいつ等に一泡吹かせるためにな」

「朋也くん、頑張ってください！！」

「かなで、心配するな」

「うん分かった。結弦を信じてるから」

「ユイ、絶対戻ってきてやんよ！！」

「先輩、落ちたりしたら絶対に許さないのでからね！！」

これから暫く会話は禁止となるのでそれぞれ最後の会話をする。ま
るで戦地に向かう兵士とそれを見送る婚約者のよう。これある意味

死亡フラグですね

サンジ「これから、プールに入ってもらうがその前にお前らが彼女たちを愛しているかどうか簡単なテストをする」

明久「お入りください!!」

「誰じゃ、わらわより美しいと申している輩は？」

やってきたのはボア・ハンコック。自分の美貌を鼻にかけて自分勝手に振舞っている美術教師である

織戸「先生、この人たち先生の魅力に全く気付いてません」

鍵「先生!!この人たちは先生なんかよりこっちに座っている8人のほうがよっぽど美しいって言ってます!!」

ハンコックの怒りを焚き付ける紳士の会の人たち。彼らはそんなこととは言ったことありません

「何イ?そなたら、わらわのことを美しくないと申すのか？」

家康「でも、本心ではどう思っているのかどうか、試してやってください!!」

「うむ、私がこのような女よりも美しいのは当然の事!!」

ハンコックはかなでたち8人を見下し指差しながら後ろにのけぞった

「」「」
「おお!!見下しながら逆に見上げている!!」「」「」

紳士の会の皆さん、ノリノリです

織戸「やっちゃってください！！例のアレを！！」
鍵「奴らの邪心を顕わにしちゃってください！！」

「よろしい。

わらわに見惚れるやましい心がそなたの身体を硬くする…

“メロメロ甘風^{メロウ}！！”

ハンコックは両指でハートマークを作りそこから光線を放った

ピキピキピキ

8人の周りにいた紳士の会のメンバーは石となった。そう、この光線はハンコックへ邪心を向ける者を石としてしまうのだ

だが…

「…邪心を打ち消したか」

彼らは石となっていなかった。

雄二「どうだ、石になってねえから疚しい気持ちになってねえてこ
とだろ？」

日向「こんな事でゲームオーバーになってたまるかよ」

結弦「光線を受ける直前に身体に激痛を与えれば石にならないから
な」

亮士「激痛が邪心を上回ったって事っス」

そう、彼らは光線を受ける直前に自らの手の甲や頬を抓ったりこめかみを殴ったり、指や腕に噛み付いたりと身体に激痛を与えた。それが邪心を上回ったのだ。

東宮「まあ、これくらいでアウトになるとか話にならねえからな」
朋也「石になる奴がいたらそいつ見てみてえよ」
ハヤテ「そうですね〜アハハハハハ」

浦島「……………（絶賛石化中）」

「……いたアアアア……！！！！」

いましたよ、邪心に負けて石になった奴が
彼の目はマンガでよくあるようなハートマーク状態。メロメロだということがよく分かります

「ハンコック先生、彼らを元に戻してくださいまし」

乙姫が言う。今の彼女は何故か笑顔であった。きっと怒りを通り越してしまったのでしょう

ハンコックもいつまでも彼らを石にするわけにでもいかないの石になった浦島や紳士の会の皆さんを元に戻していった

「太郎様……」

「乙姫どうしたんだ？」

「今何があったのか、覚えていらっしやいませんのか？」

「…ああ、さっぱり分からないんだ」

「ならちよつとこちらに…」

乙姫は浦島の腕をギツチリと掴み外へと連れ出して行った
浦島太郎OUT

次回、紳士の会からの試練完結編

1人がOUTとなったが残りの7人は大丈夫なのか!?

第三十話：臭い物には蓋をしる

1人脱落してしまいましたが愛のバランスアイランドの始まりです

「ではまず2人の美少女に来てもらおう。どうぞー!!」

家康「我ら2・Bの誇るロリ2人組だ!!」

最初に現れたのは…

美々「なかなか面白いことになってんじゃない」

千世「私たちが悩殺してやるわ!!」

ツインテールのロリでDSで毒舌という誰かさんにキャラ被りな美々と、

「被ってないわよ!!」

「被ってないですよ!!」

まあ2人は放つて置いて…

こちらもロリ体型で金髪のがままなお嬢様、千世であった

「「「おおおおおー!!!!」」」

2人の水着姿に紳士の会の皆さん（ロリコン派）は声を大きく上げる

康太「…こつちにポーズを!!」

美々「ハイ、ごうかしら?」

千世「こっぴつのもどろっ?」

「「「オオオオオオオー!!!」」」

美々と千世がポーズをしていくたび、ロリコンの皆さんは大きな歓声を上げる。可愛いロリの水着姿が見れてロリコンの皆さんのテンションは最高潮だ

しかし、7人はというと…

「「「……………」」」

彼女たちに見向きもせず、ただ目の前にいるパートナーの姿を見続けている

「これでどろっ?」

「「「オオオオオオオ!!!」」」

「やらにこれは!?!」

「「「オオオオオ!!!」」」

だが、聞こえてくるのはロリコン野郎の歓声だけ。そしてついに…

千世「もうなんなのよ!!! 私たちに悩殺されなさいよ!!!」

美々「折角私たちが披露してあげてるっていうのに!!!」

ロリ2人組はキレた。

美々「キイイイ！私たちの何が不満ってわけ！？」
千世「そうよ、こんな美少女2人の水着姿なんて滅多に見られないわよ！？」

地団駄を踏みながら怒りをぶつける2人に対して、そちらを見向きもせずに

雄二「俺ら、ロリコンじゃねえからな」

東宮「お前らに興奮したら、犯罪者になるんだろ」

朋也「子供体型に興味もてねえから」

と告げる3人。

千世「それなら、綾崎や音無や日向はどうなのよ！！何でメロメロにならないのよ！！」

美々「そうよ、あんたたち完全にロリコンじゃない！！」

結弦「偶然だ。かなでの背がちょっと小さかっただけだ」

日向「俺ら別にロリが特化して好きって訳でもねえし」

ハヤテ「ロリコンとかそんな考えとか無視してお嬢様は特別な存在なんですよ」

彼女たちに背を向けながら真顔でこもつともな意見を述べる。

7人が全く自分たちのほうを見ないことにイライラしている千世と美々を見ながら、りんごはニヤニヤしながら言った

「それでは前座はこのあたりで終了ですの」

「ちょっと待ちなさいよ！！何で私たちが前座なのよ！？」
「どう考えたってメインでしょ！？」

キャラが被っているからか近親憎悪だかなんだか分かりませんがその合わない美々がこんな扱いなのでりんごは大喜びです。千世は完全に巻き添え喰らってます

「ふっ」

りんごが2人を見て鼻で笑いました。物凄い性格の悪さです

「むき〜〜なんなのよ！！何なのよあの笑みは！！」
「腹立つ！！なんなのよ〜〜！！」

「まあまあ落ち着いてください」
「2人には僕たちがいますから」
「俺たちは大好きですよ？」

そんな2人を紳士の会のロリコンたちが慰める

「あんたたちに好かれたってちつとも嬉しくないのよ！！」
「そうよ、あんたたちみたいなのロリコンやらオタクやらになんかね
！！」

2人はギロリと睨むがそれは彼らにとって快感にしかない。どうやらDMという性癖も持ち合わせている連中のようだ

「ハアハア…いいなあ、このきつさ」
「そのドSな言葉が俺たちの生きる糧となる」

美々「もう！！なんで私たちに近づく男っていうのはこんな変態ばかりなのよ~~~~！！」

「お2人さん、邪魔ですの。後がつかえてますのでさっさと出ててくださいの」

千世「むき~~~~。後で覚えときなさいよ！！」

ロリコンに囲まれ慰められながら2人はプールを出てっていったちなみにこの後千世と美々が“打倒りんご同盟”を結成したのはまた別のお話

「それでは続々とどうぞ！！」

ここからは主に乙姫の弟子たちや、新作水着がタダで貰えると話を聞きつけた人などが水着を着て現れました

乙姫の弟子というのは御伽銀行に借りをすることにより乙姫から美容・肉体改造テクニクや男を落とす振舞いや料理のレシピなどを学んでいる人たちのことである。

乙姫は自分に自信の持てなくて助けを求める女の子を、過去の太ってドジでいじめられていて自分に自信が無かったころの自分の姿を投影してしまうので、自分の持つスキルを満遍なく教えてしまって完璧な女性となるのです

そのため、この乙姫さんの女を磨く講座は第一校舎の女子生徒の1/4 1/3が受講している大人気の講座なのです。

2Aからは歩、明日菜、木乃香、刹那、美波、優子、シアの7人
Bからは泉、理沙、まき絵、亜子、裕奈、愛子、美春、叶絵、桃香、
翠の10人

Cからは、桜子、円、美砂、エルシイ、ちひろ、歩美、実乃梨の7人
1 Aからは水琴、杏、雪子、鈴々、制理、ティアナ、スバルの7人
Bからは鈴音、ラウラ、本音、友紀の4人
3 Aからはくりむ、ゆり、かなで、亜沙、カレハの5人
Bからは唯、律、紬
の3人が参加したわけだが…

彼女たち43人をして7人を振り向かせることは出来なかった

撮影の終わった彼女たちはバスローブを羽織り、雑壇に座って様子を見続けることにしていた

サンジ「ならば今度はレア度で勝負だ!!」

「レア度…??」

「一体何をするんですか？」

鍵「そう、なかなか生で水着を見たくても見られない。そんな女の子たちが水着を着て現れるのだ!!」

織戸「それではお入りください!!我が紳士の会内の人気投票で各クラスの1位となった者たちよ!!」

家康「そして、トップスター中川かのんちゃんと、モデルの川嶋亜美!!」

現れたのは2 Aで2位となった深夏と、各クラスの1位の瑛里華、星奈、奏、シャルロット、なのは、澪の7人とかのんと亜美であった。

なお、2-Aの1位はヒナギクであったため、2位の深夏が登場する形となった

なお、この人気投票には作者の独断と偏見がほんの少し入っています

ある意味、漢おとこですな

「かのんちゃん、こっちにポーズを!!」

「はい、こっち?」

「川嶋さん、こっちにも!!」

「こっちでいいの?」

「オオオオオオ!!」

彼女たちがポーズをするたびに、上がる歓声

「……………」

彼らの様子を見てみると…

「…(ニコッ)」

ナギの心配を消すかのように彼女に笑いかけるハヤテ

「……………」

“心配するな”とそれぞれかなでとユイを真直ぐ見つめる結弦と日向

「あいつら、後でぶっ殺そう」

紳士の会メンバーに対して怒りの感情を芽生え始めさせた雄二と朋也。無理ありません、彼らが時々紳士の会の方を見るとニヤリと笑って“見れなくて残念だったな、ざまあ”と言っているようなドヤ顔をする人がいるのですから

そして…

「「ううう…（見たい!!!）」」
水着姿を見たいと思い始めている亮士と東宮がいた。彼らも一応紳士の会のメンバーですし自分の投票した人がいたのでしょよね

顔をそちらに向けない7人。いつの間にか撮影タイムも終わってしまいました。

彼女たちも雛壇に腰を下ろして様子を見ています

「これでもダメか…」

「ならば、最終兵器の出番だな」

朋也「最終兵器だあ？」

「そう、我が学園の誇る最終兵器…お入りください!!!」

「は~~~~い」

「フッフ、ここか。私の肉体美を披露できる場所というのは」

「「オオオオオオオオ!!!」」

ついに真打が登場しました。桃ちゃん先輩こと吉備津桃子と総合生徒会1年副会長の黒神めだかである

水着も真打ということもあり凄い、めだかは一般的な競泳用水着であるのだが、桃子はスリングショットとも言えるようなヒモ水着だったのです

それでも胸の大きくスタイルの良い2人に会場は大いに盛り上がった

ている

「なあ、森野」

「なんスか東宮さん」

「ここからが正念場だぞ」

「分かってるっス。頑張るっス」

こんなこといつている時点でダメだと思えますけどね
しかし、彼らのパートナーの2人は桃子とめだかに度肝を抜かれて
いたので聞かれてませんでした

その後、ノリのいい桃子と露出狂の気のあるめだかは嫌がることも
無く次々とポーズをしていく

「……………」

康太は終に出血多量で倒れてしまいました

「視線をこっちに下さい!-!」

「ふむ、こづか?」

「腕を組んで!-!」

「こづかしらん?」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐ」

「ぎぎぎぎぎぎぎぎ」

見たいという思いが齒軋りを起こさせ始めました

（（そんなに見たいならリタイアすればいいじゃねえか…）（）

歯軋りの聞こえてくる結弦たち5人はそんな事を心の中で思う

「おっおれはもう無理っス」

「耐えるんだ森野！！お前の大神への思いはこの程度か！？」

「くっ…涼子さんは世界一、宇宙一！！」

「その意気だ。だがこのままではキツイ。禁じ手を使うしかない」
「禁じ手スか？」

「大神の水着姿を頭の中で思い描くんだ！！僕には桂さんの水着姿が、お前には大神の水着姿が一番だろ！？」

「その通りっス！！」

「行くぞ！！ウオオオオオ！！！！」

「オオオオオオオオオ！！！！」

主人公が必殺技を繰り出す際にパワーをためる時に出しそうな雄叫びを上げる2人
バトル物にありそうな展開ですが、脳内で最愛の人をひん剥いて水着にしているだけです

（（もう、見たらどうなんだよ）（）

残りの5人は完全に呆れています

そんな中、今日最大の歓声がプールに響いた

「2人さん、雌豹のポーズを頼む！！」

「こつでいいのか？」

「こつかしらん？」

「ウオオオオオオオオオオ！！！！！！」

雌豹のポーズは四つん這いになるポーズなのですが、巨乳の人がやるとすごいのですよ

プールの窓も振動して水面も揺れ始めています

「クツツ…負けてしまいそうだ」

「でも、負けるわけにはいかないっス！！」

「最後の力を！！」

「振り絞る！！」

これもバトル物にありそうな展開だが桃子とめだかを見ないように耐えているだけ

「うおおおおおお！！！！」

「はああああああ！！！！」

2人は、気や魔力をまとって光ることはありませんでしたが、いつのまにか穏やかな悟りを開いたような顔になっていました

「おお、アレこそ！！」

サンジが驚愕の表情を浮かべながら言う

サンジ「穏やかな心を持ち、激しい愛に目覚めたスーパー紳士だ」

家康「おお……」

樹「あれが…伝説の……」

そんな盛り上がり上がっている紳士の会の皆さんに…

「…なんだそれ…聞いたことねえよ…」

残りの5人と、ヒナギクと涼子、そして雛壇で見ていた女子生徒は呆れ顔でそう言った

そして穏やかな顔になった2人はそれぞれのパートナーに対して…

「桂さん…僕のためにISのスーツを着て僕だけに見せてください」

「涼子さん、おれは涼子さんの水着が見たいっす」

より、ダメになってませんか？

「ISをそんな目で見ないでほしいよ…」

雛壇にいたシャルロットも呆れています

「もういいのではないか？」

どこからか聞こえてくる声に全員は頭をキョロキョロさせた

「…」

いつの間にか、りんごの後ろに立っていたその人はこの学園に自縛している幽霊神父、ラインであった。彼は2人に感銘を受けているように

「彼らの勝ちでいいのじゃないか？彼らは誘惑や幻惑に惑わされず

に本能に打ち勝ち彼女たちしか見えていないのだから」

「たしかに、オレらの方を見ているけどよ……」

「あんなことを穏やかな顔で言うなんてダメになってんじゃない？」

ナギ「そうだ、齒軋りもしていたしな」

「……ずっとこっちを見てくれていた雄二たちのほうが何倍もマシ
ごもつともな意見です」

「何でじつとかなでたちだけを見続けた俺らより、2人のほうが評
価されてんだよ」

「ですよね…納得がいきませんよ、僕たちは一途なんですよ？」

残された5人は納得のいかない様子

ユイ「あの2人、桃ちゃん先輩たちの方見たくて仕方なかったみた
いですしね……」

「否!!断じて否!!」

神父は反論する。

「胸、腰、尻、指、太もも、うなじなど…女性は存在自体が芸術な
のだ!!我らが女性のことが気になり語らうのも当然のこと。絵画
や彫刻について語らうことと同じなのだから。だがそこに邪な気持
ちがあることは認めよう、我らは男なのだから。だが女の子を傷つ
けることは一切しない…何故ならば我らや2人は紳士だからだ!!」

芝居がかった動作で2人を指す

「彼らもそうだ…いや彼らは辛い戦いを強いられているんだ。彼らは好きな女の子を…欲望の矛先を見つけてしまったのだから。だが紳士である彼らは好きになった女の子を傷つけることを良しとせず意識を他に向ける。そして故に好きな女の子に似たスタイルや性格の子が好きになる

そう、運命の女神を見つけた男はすべてのエロスを全て脳内で好きな女の子に変換しているのだ！！それはその5人も当てはまる！！だから聞いてほしい！！彼らがエロ本やアダルトサイトを見ることがあるだろう！！」

ハヤテ「ありませんよ」
雄二「…否定はできません」

「だがその映像や画像は脳内で君たち女神に変換させられている。つまり、君たちのことを思っているのだ！！」

目を見開き叫ぶ！！

「故に彼女たちに意識を持っていかれそうになっても君たちへの思いが嘘だという事にはならないんだ！！！！」

が：最後の“だ！！”と云ったところで涼子、ヒナギクと桃子たちを見比べて…

「すまん、無理があった」

「オイ！！どういう意味だ！？」

「説明しなさいよ！！」

明らかにアレの大きさが違いますしね。

「それにだ!!」

神父はスルーしながら続ける

「彼らはもう君たちしか見えてないだろう」

確かに亮士と東宮は何も見えていないかのように涼子、ヒナギクだけを穏やかな表情で見つめ続ける

「君たちしか見えていないからのあの言葉だ。男が持つ欲望をよそに向けないということは君たちだけに注ぐということなのだから。だから多少のセクハラ発言や行動はあるだろう。だが心配は要らない、彼らは紳士だから君たちを傷つけることはしないし、意志の力で欲望を抑え続けるからな。真の紳士だよ」

明久「もれた残滓であれだけなんて……」

サンジ「さすがはスーパー紳士だ……」

パチパチパチパチパチ

紳士の会の皆さんは拍手を捧げる

そして黙っていた東宮が再び口を開いた

「桂さん…確かに僕は桂さんが好きと言いながら、他の女の子に目を向けることがあるかもしれませんが…でも、僕にとって桂さんが一番なんです。桂さんだけを見続けますから、傍に居させてください…貴女の魅力によって湧き上がる欲望には耐えてやりますから」

そんな告白に等しいような思いの丈を述べた東宮に対して…

「ハア…分かったわよ。あなたの気持ちはよく分かったわよ」

「ほっ…本当ですか、桂さん!!」

「ヒナギク」

「へっ??」

「これからは、私のことをヒナギクって呼びなさい、東宮君」

「はい!!ヒナギクさん!!」

大喜びの東宮、名前で呼んでいって言われることは彼にとって大きな進歩ですからね。でも浮島の上なのでガッツポーズだけにしておく

「涼子さん…おれの言いたいことは東宮さんが言ってくれたんすけど…」

亮士は涼子を見つめながら言う

「おれにとっても涼子さんが一番。涼子さんが望むなら他の女の子を見ないようにするっす。でも、その代わりに…涼子さんを見つめ続けてもいいっすかね…?」

彼は期待と不安をこちゃ混ぜにした表情で涼子を見る。

涼子はむくくと上目づかいで亮士を睨みつけるが彼はウルウルした目で彼女を見つめる。まるでチワワです

「……分かったよ!!だけど…お前も分かっているだろうな!??」

どうやら亮士に根負けした様子。あんまりよそ見をするなっこと
でしょっね

「ありがとうございますっスー!!」
「……ふん」

希望やら愛やらなんやらできらきらしている亮土君と、真っ赤になっ
っている涼子

いい光景です。

そんな姿を見ながらりんごはサンジと神父に言った

「これで涼子ちゃんの王子様願望というか、潔癖症気味のところは
緩和することが出来ましたの。…私としてもとても楽しめましたし
大成功ですの。これもサンジさんたちのおかげでしたの」

サンジはフツツ…と笑いながら

「いや、それはこちらのセリフ…いいものを見せてもらったからな。
水着…いや、ツンデレ少女がデレはじめる瞬間を。面白かった」

でも本当は最初に言おうとして取り消した“女の子たちの水着姿を
見れてよかった”ことがいいものなのでしょうね

神父「でもそれは男にとっても当てはまることだ。少女たちが王子
様を求める心は分からないでもない。男も理想を求めるからな…で
も理想は理想、現実^ニは現実。…そう、現実の人間なんて全て変態な
んだ、だから問題はその欲望を押さえつけられるかどうか。そして
彼らは見事押さえつけてみせた。中身がいくらド変態であろうとそ
れを表に出さなければ恥じることはない。心の中は読心術者でもな
いかぎり見えないからな」

要するに臭い物には蓋をしろということですよ

「いい話ですの〜」
ハンカチで目を押さえ涙をふき取るりんご…本気か!?
しかしまあ、試練は終わり浮島から降りて泳いでそれぞれのパート
ナーの元に戻っていく7人。

「お嬢様、やりましたよ」

「ハヤテ…」

抱き合う2人

「……雄二、これからエツチな本を読んでも構わない」

「!?!?どうしたんだよいきなり!?!」

「……だって雄二がエツチな本を読むのは写真のモデルを脳内で私
に変えて私の事を思っているから…でしょ?」

「……まあ、そう???だな(そんな訳ないけど一応そういうことに
しておこう)」

「…でもそうじゃなかったら許さない」

翔子も今の神父の言葉で少しは優しくなったよう

その他も試練をクリアしたことを喜び合い、日向とユイも抱き合っ
ています

ところ変わってりんごは紳士の会の皆さんに忠告する

「見ての通り、彼らはもう簡単には壊せない仲になっていますの。
リア充死ねって思いはあると思いますが、彼らの仲を傷つけるよ
うな事はしないでほしいですの」

そんなりんこの言葉にニコツと笑い

織戸「分かってるさ」

鍵「もう彼らの仲は壊せない、俺たちは他のリア充たちの仲を壊すことにするよ」

樹「女の子と付き合っている男の中で浮気をする奴もいるだろうしな」

明久「ハーレムが目標の2人には壊されたくないだろうけどね」

りんごは紳士の会の皆さんの方から雛壇とあと試練に耐えた7人、そのパートナーたちの方を見ると…

「今日はこのプールを貸しきってますの、皆さんご自由にどうぞですの」

サンジ「オオ!!」

「…俺たちも泳いでいいのか？」

康太、いつの間にか復活してました

「あなたたちはダメですの。何をするのか分かりませんし、雛壇で待機ですの!」

第十四話では胸と尻をタッチして鬼にする水中鬼ごっこを考えてましたからね

今まで様子を見ていた人たちはバスローブを脱いでプールに入るための準備運動を始めた

「涼子ちゃんたちも水着を着替えに行きましょうですの」

今、水着を着ていないりんごや涼子たちも水着を選びに行こうとしたそのときだった

「あれ、皆さんなにやってるんですか？」

「あつ、ネギ先生」

やってきたのはネギ。

「それがね……（略）……というわけよ」

「それで、それが終わったからこれから泳ごうってことになったわけ」

「ネギ君も一緒に泳がない!？」

準備体操をしながら説明する

彼女たちの誘いに笑みを浮かべながら……

「いいですね、僕も……ふへえええ……

はつくしょおおん!……!……!……!」

ネギは鼻に埃でも入ったのかクシャミをしてしまった。ただのくしやみならばいいのだが、彼のくしやみは突風が巻き起こるのだ

そして……

「くくくく……」

水着を着て準備体操をしていた女の子たちの水着は一瞬にして花弁のようになり……

身体を隠す布が全て無くなってしまった

ハヤテ、雄二、朋也、結弦、日向を除く“全て”の男子生徒の視線が彼女たちに注がれる

「……イヤアアアアア！！！！」「」

「……オオオオオオオオオ！！！！」「」

パライイイインンンン！！！！

水着を失い全裸となった女子生徒の悲鳴とそれを見たハヤテたち5人以外の“全て”の男子生徒の歓声が響きそれはプールの強化ガラスをも割ってしまった

「退場！！！退場ですの！！！」

イヤアアアアア…と悲鳴を出しながら更衣室へ逃げていく女子生徒たち

ちなみにナギたち7人は脱げてません。あと男子生徒たちもご都合主義というやつです。男の全裸なんて見苦しいだけですからね

「ちょっと、2人ともなにやってますの！？」

桃子「だって減るもんじゃないしねえ」

めだか「私は見られても全然構わない。むしろ見られたいからな」

「退場ですよ！！！退場！！！」

水着がなくなっているにもかかわらず平然としている桃子とめだかの手を引いて強制退場させる

「「「あざああああつつつす!!!」」」

“ハヤテたち5人以外の男子生徒全員”から女子生徒へのありがとうの言葉。ここまで心のこもったありがとうはなかなか聞けませんよ最後の桃子とめだかがいなくなってから皆さんは口々に感想を述べる

鍵「いやあ…いいものを見た」

樹「俺様はこの光景を一生忘れない」

「本当にいいものを見たなあ…」

「本当っスよ…」

「東宮君??」

「亮士……」

「「あつつ……」」

“ハヤテたち5人以外の男子生徒全員”と言ったように東宮と亮士も見てしまったようです

ジリ…ジリ…ポツチャアァン!!!

2人から逃げるように、少しずつ後ろに下がっていきプールに落ちてしまった2人。そしてプールから上がった2人が見たものは…

「「……」」

氷点下のヒナギクと涼子の視線だった。一応このプールは温水なの

ですが2人はガタガタと震えだす
2人を見続けると言った直後にこれですからね。

「……………」

ヒナギクと涼子の2人は無言でその場を立ち去っていった

「ヒナギクさん!!行かないで!!」

「涼子さん、戻ってきてくださいっス!!」

そして翌日…

試練を乗り越えた5ペアはいつもと変わらない…というより、いつもよりイチャイチャしていました。

東宮と亮士はというと…

「なあ、森野。大神と話したか」

「口も利いてくれないし、目もあわせて貰えないっス」

「僕もだ……………」

「……………ハア……………」

東宮と亮士は思いつきり打ちひしがれていた

そんな2人になにやらニヤニヤした紳士の会の皆さんが近づいてくる

樹「こんなこともあるって!!」

鍵「お前たちには俺らがいるから頑張れって!!」

家康「いざとなったら俺らみたいにギャルゲーや二次元の女の子に

逃避すればいいわけだしな!」

康太「……女は星の数だけいる。掴めるかどうかは別。……むしろつかめないから星」

明久「人の夢って書いて儂いつて読むしね」

織戸「辛いに一本足せば幸せって言う字になるしな」

どこかで聞いたことがあるようなセリフばかりで酷いです。言葉はとても軽く、慰める気はゼロです
相変わらずもてない男の僻みは醜い

「涼子さん……」

「うっ…ヒナギクさん……」

というわけで、しばらくの間、自分の女神たちから無視られ続けることになった2人なのでした

めでたくなし、めでたくなし

第三十話：臭い物には蓋をしる（後書き）

今回は、誰得の“男の娘ナンバーワン決定戦”です。作者は男の娘より女の子のほうが好きです。だって男の娘にはいくら可愛くてもナニがついているんですから……

第三十一話：鬼嫁にも愛情はある、なければDV（前書き）

活動報告にもありましたが内容を変更させていただきました

“ 男の娘ナンバーワン決定戦 ” は文化祭の1イベントとしました。
期待していた皆様申し訳ございません

第三十一話：鬼嫁にも愛情はある、なければDV

5月下旬のある日のLHR

銀時「は〜い、今日の議題は“文化祭のクラスの出し物について”です。今日中に書類を提出しなくちゃならないらしいんでさっさと決めろや」

神楽「銀ちゃん！！文化祭までまだ2ヶ月もあるネ。まだ決めなくても大丈夫ヨ」

銀時「何言ってるんだ、文化祭の前には1学期の期末テストがあるんだよ」

7月の大まかなスケジュールを説明しますと…

第一週火〜木：期末テスト

第一週金と第二週月：返却

第二週火〜木：文化祭準備

第二週金〜第三週月の4日間：文化祭

といったようにテストが終わるとすぐに準備・文化祭といった多忙なスケジュールなのである。

文化祭も4日間の96時間ぶつ通しで行われる。

まあ深夜は一般クラスや部活動の出し物はなく有志で徹夜ライブや情報部の24時間テレビならぬ72時間テレビなどが行われるくらいだが、そこは若さあふれる中高生である。金曜日午前9：00の開会式から日曜の夜まで寝ないのが全体の8割もいるとかいないとか…

「それに、この文化祭だけで一日で千万単位の金が動くらしいから早めに出し物を決めてどんな金の動きがあるか予測させなくちゃならねえそうさ。だからさっさと決めろ！」

「銀さん、一応大まかな内容はもう決まっている」

副学級長の智代が手を上げて言う

「何するんだよ？」

「演劇だ。今日のLHRはその内容を決めようと思っていたんだ」

「劇か…じゃあさっさとその内容を決めろ」

翔子と智代の2人が前に出てきて黒板に演劇と書いた。

「…演劇といっても色んな物語がある。皆は何がやりたい？」

「ハイ！！！」

大きく手を上げて立ち上がったのは鍵だった。

「俺がハーレムを作る物語がいいと思います！！」

「それなら俺様を主人公にしろ！！」

樹も立ち上がって鍵に対抗するように言う

「チツツツ……」

「「え……………」」

2人の意見に聞こえてきたのは舌打ちだけだった。

「……………消える」

ボソツツと誰か酷いことを言いました。“死ね”じゃなかったのがせめてもの救いなのでしょうか

「オイ、誰だ！？今消えろって言ったのは！？」

智代「なら、ハーレムの物語は無し。他の意見を聞け」

「それよりも誰が酷いこと言ったのか探すほうが先かと思うけど！
！」

しかし、そんな鍵の意見はスルーされて…

「ハイ」

手を上げたのは神楽であった

「カッコいいのがやりたいネ、例えば必殺仕事人とか」

銀時「必殺仕事人？」

「そうネ…」

神楽は自分の頭の中にある内容を話し始めた

“ 現代版必殺仕事人

鍵「俺たちが、レイ 犯！？ふざけんな！！」

「でも、2人のほかに犯罪者が思いつかなかったヨ」

「他にもいるだろ！！綾崎とか、あいつは児童ポルノ法違反だぞ！！」

鍵はハヤテを指差しながら言う

「なっつ！！なんてこと言ってるんですか！？」

「私たちは愛し合ってるから問題ない！！」

ハヤテとナギは立ち上がって反論する

樹「愛し合ってるから、問題だ！！」

鍵「ム力つくんだよ！！目の前でイチャイチャしてられると！！」

この2人、やっぱり変わりません。前話でりんごに仲を壊してはいけないといわれていたはずなのにね。

「……他に意見は？」

この2人に構ってる時間は無いと判断したのでしよう。翔子は黒板に必殺仕事人とかいて他の意見を求めた

「はい」

次に手を上げたのはまた鍵

智代「またハーレムだとかなんだか言うんじゃないだろうな？」

「まさか、一度駄目だと言われたものをまた言うほど俺もバカじゃねえよ。“鬼嫁日記”はどうだ？そう……」

鍵は内容を話し始めた

“鬼嫁日記

夫：東宮

妻：ヒナギク

「ただいま〜」

「お帰りなさい、もう夕ご飯出来上がってるわよ」

「本当か？もうおなかペコペコだよ」

見る限りなら変わりのない平凡な家庭。東宮は部屋着に着替えてリビングの椅子に座った

「お待たせ、今日はビーフステーキとコロッケよ」

「なんか今日は豪華だ…」

ヒナギクの持ってきたお皿に盛ってあったもの。それは、ビーフステーキでもコロッケでもなく…

「これ…僕が誕生日にあげた牛革財布に束子だよな…」

「そうよ、食べられないの？私が作った手料理を？」

「これは食材じゃないし」

「食べなさい！！ホラ！！ホラ！！」

牛革財布をナイフで切り分けフォークで刺すと口元へ持っていく…

それだけではなかった。真冬の夜中の0 近い寒さだというのに夜にシャツ一枚で外に出されたり、「死ぬ」といわれるのは日常で、熱湯を浴びせられたり、ナイフで動脈近く切りつけたり…“

「「「止めてエエエ!!! 本当の鬼嫁になつてるウウウ!!!」」」
今度止めたのは、クラスの一団だった。鍵はまた滅茶苦茶にしようとしてますよ
財布ステーキにたわしコロツケって何ていう昼ドラですか?? 牡丹と薔薇ですか。

美波「鬼嫁日記はねえ、確かに酷いことすることもあったけど、それは夫のことを思つての愛情があつてのことなのよ!!!」
明日菜「これまったく、愛情が感じられない!!! もうDVとしか言いようがない!」

「この物語はDVの悲惨さを伝える物語なんだ」

新八「ならせめて最初か最後にDV相談センターの電話番号とか書きましようよ!!!」

「私、こんなキャラじゃないわよ!!! 杉崎君殺されたいわけ!?!」

ヒナギクは鍵の胸倉を掴む

「ヒナギクさん、僕と結婚してもこんなことしませんよね!?!」

そんなヒナギクに涙目になりながら訴えかける東宮に対して彼女は
というと...

「何であなたみたいなお人と結ばれなくちゃならないのよ。2人とも、このバカは放っておいて劇の内容を決めちゃいませよ」

ヒナギクは一度も東宮の方を見ることもなく続けるようにと翔子と

智代に言った

前話のことを気にしているみたいですね

「……分かった、なら次の意見」

「おい、ちよつと待て」

翔子が意見を求めようとしたところで銀時が止めた

「言っておくけどなあ、上の2つみたいな酷い物語は出来ねえぞ。知ってるだろ？この学園が5年後に変革を起こすってことをよお」

朱涅「知ってるわ、今の第十五と十六校舎を一般生徒の入学を止めるんでしょ？」

瑞希「確かそれで十五校舎は魔法全般、十六校舎はIS専門の高等学校になるんですね」

ひかり「ISが学べる学校は世界でここだけだつて」

歩「西洋・東洋の両方の魔法が学べる日本初の学校にもなるんだよね」

どうやら、今は一部時間でしか行われないISの授業やネギがほんの一部の生徒に教えているだけの魔法の授業が5年後から本格的に始まるみたいです

「……よく知ってるじゃねえか。だから不祥事を起こすようなことはすんじゃねえぞ。この学園の信用に関わるからな。そこんとこ頭に入れて置け」

銀時の忠告を受けてその後、様々な意見が出た

「色々な意見が出たな」

「ここからどうするんですか？」

「…みんなの意見を総合した脚本を作る。それが一番いい」

「脚本は早乙女さん、美嶋さんに頼んでいいか？」

「もちろん、面白いの書くわよ!!」

「頑張ります」

脚本作りは図書部とサブ研の掛持ちをしているハルナと紅音に任せました

まあ、こうして2年A組の出し物は演劇になりました。

なおこの演劇は作者のほぼオリジナルです

では、その予告編を…

出てくるセリフは台本を読んだ2Aの人たちの感想です

永遠を誓い合った2人は喻えあえない日々が長くても

「これを見て泣けない奴はホモじゃない!! Y・K」

その果てない思いは決して消えることはない

「勉強の出来ない僕でもこれのおかげで英語がペラペラに!? A・

Y」

女と男のLOVEと書いてこれを革命と読む

「お寿司をチーズフォンデュに漬けて食べようと思いました。A・N」

Girl Loves Boy から始まるこの物語は世界を変える

「動物園のゴリラに糞を投げられる回数が多くなりました。S・S
(男)」

これは1人の少女と騎士ナイトのお話

「ピラフ食いて〜」。銀髪天パー教師」

『愛・革命』乞うご期待!!

一方その頃、笑点では…

「はい、喜久扇さん!!」

「私の娘は……………あのねえ……………」

「きちんと頭の中で整理して言いなさい!山田君!!座布団全部も
つてつて!!」

じゃなかった。『他のクラスは一体何をやるのか』ですよ

そこで他のクラスの様子も見ることにしましょう

ここは1年A組の教室

1Aの生徒のほかにも1Bの生徒もいる。第二十三話の後書きでも書きましたがこの2クラスは合同で出し物をするみたいです。まだ決めている最中ですが…

それぞれのクラスの学級長である朱里とセシリアが教壇に立ち、意見を聞いていく。人数が多いとその意見をまとめるのも大変みたいです
ですね

朱里「他に意見はないですか……?」

黒板には出されたのであろう様々な意見が書かれていた

ベタなところでお化け屋敷、メイド喫茶、演劇。他にもAKB48ならぬPHG48ライブショー、スワット演習場、大食い選手権といったものまである

PHG48というのは、きっと

P…パラダイス

H…学園高等部(High schoolのH)

G…ガールズ

のことであろう

ちなみにここには1A、1Bの生徒の他にもなぜか(これはゾンビですか?)のハルナやインデックスがいた。スワットや大食い選手権はこの2人から出されたのであろう

しかし、この学園の生徒は適応力が早いというか誰とも仲良くなりやすいような感じがしますね。

学校の生徒でもないハルナやインデックスがいても誰も突っ込まな

そんな皆さんにりんごさんはささやくように言っ

「今をときめくとれとれぴちぴちの女子高生が、その手に何もつけずに目の前で握ってくれるんですよ?」

智春「とれとれぴちぴち……」

当麻「なにもつけずに……」

優人「目の前で握ってくれる……」

「さらに言うと、人間の手のひらには菌がたくさんいますの。入念に洗った手でも」

りんごは、手の平を見せながらちよつとしたトリビアを言う

「でもその殆どは身体に害をなさない菌ですの。特に女性は乳酸菌が多いらしいですの。漬け物をつける糠床が人によって味が違うのは人の持つ乳酸菌がそれぞれ違うためといわれていますの。そして女性の握ったおにぎりはその乳酸菌のおかげで腐敗しづらいといわれていますの

……まあ、こんなうんちくはともかく、女性がおにぎりを握ると……きになるあの子の乳酸菌が身体の中に!!!!!!」

ガタガタガタ!!!!!!

「!?!?」「!?!?!」

机が揺れ、感嘆符を浮かべる(一部除く)男子生徒の皆さんと(一部の)女子生徒の皆さん。それほどの感銘を受けてしまったようです

「……夏(さん)の身体に私(僕)の乳酸菌を!?!?!」

上のセリフは言うまでも無くISの専用機持ちの5人

「『若殿（優人・ゆうちゃん）に私の乳酸菌……』」
上は、緋鞠と凜子とくえすの3人

朱里「それでは、赤井さんのおにぎりやさんも含めて多数決をとります」

パチッパチッ…

男子生徒の中で交わされるアイコンタクト。言いたいことはもちろんあれしかないでしょうね

セシリア「最後に、おにぎりやさんをやりたい人…」

結果は、男子生徒全員と一部の女子生徒が投票したおかげで“おにぎりやさん”となりました。

また、この結果に納得のいかない一部の女子生徒が小萌たち教師に抗議した人もいた。動機が少々不純ですが、
ですが、特に害もないということとその訴えは棄却されました

なお他のクラスは何をするのかというと、

2 B…お化け屋敷風アーケードゲーム

2 C…ホストクラブ

3 A B…カジノ

ちなみに2 Bのアーケードゲームは東京フレンドパークのアーケードゲームシリーズをイメージしてください

そして各クラスの皆さんは文化祭に向けて準備を始めていくのでした

第三十一話：鬼嫁にも愛情はある、なければDV（後書き）

次回は、時間を遡ってこの前の中間テストの様子を見てみることに
します

第三十二話：試験監督は長時間暇で仕方ない（前書き）

今回は下ネタが多めです。それが嫌な人は戻ってください

第三十二話：試験監督は長時間暇で仕方ない

これは2年A組で行われた。数学のテストの間のお話である。生徒たちは着席をして解答用紙と問題用紙を受け取り、始まりの時間を待っている

黒板には試験科目と試験時間、それと不正類似行為・カンニング厳禁と書いてある

「あともうちつとで始まるけど、せいぜい頑張れや」

銀時は数学の問題用紙の後ろにジャンプを隠しそれを読みながら試験開始の時間を待っていた

数学の問題用紙は紙4枚しかないので、ジャンプを読んでいるのはバレバレである

キーンコーンカーン

9：00 チャイムが鳴ってテストが始まった

問題を最初からやり始める者、一度全部の問題を見て自分の解けそうなものからやり始めている者、時間配分を考えてから解く者、やる気にならずにもう机に伏している者と様々である

ピンポンパーン

アナウンス用のチャイムが鳴る。この学園はテスト中でも連絡事項はよほど個人的な事で無い限り放送で連絡するのだ

「1年A～Fの物理のテストを受けている者に連絡する」

声は物理教師のフランキー
自分のクラスのことではないので、2年Aの生徒は耳をあまり傾け
ずにテストに取り組む

『問題に訂正があった。』

訂正箇所は第4問の(1)、“30度の傾きで98m/s投げ出さ
れた出川哲朗は着地までの間何を作っていたでしょう”という問題
だが…』

(((! ! ? ?)))

「何だこの問題は」という疑問が頭の中に浮かぶ
普通なら“30度の傾きで98m/s投げ出された出川哲朗は再び
地面に到達するまで何秒かかるでしょう”という問題が聞かれると
思うが…

その頃の1Bの教室

ここでAとBの物理選択者は授業を受けているのだ
こっちでも、全く物理と関係ない問題に驚くと共に、訂正内容を聞
こうとしていた

『出川哲朗のところを、I K K Oに変えてくれ』

ピンポンパンポーン
放送が終わった

「ハアアアアア!!!??」「」

1Bにいた者は声を出して突っ込んだ

「静かにしろ、テストの最中だ。0点になりたいのか？」

試験監督のシグナムが注意を呼びかける

当麻（どっちも大して変んねえよ！！しかも古いし！！）

相川歩（IKKO！？投げ出されたIKKOが作っていたもの！？）

一夏（30度の傾きで98m/sで投げ出されるってことは横方向にcos1/6で時速305km/hってことだよな……）

智春（新幹線以上の早さでIKKOが作っていたもの……）

当麻の回答“ミートボール”

歩“サザエの中身”

一夏“ソーセージ”

智春“油揚げ”

やっぱり、IKKOということもあり…なんか…下を連想させるような答えが目立ちますね。玉IKKOと言われてたこともありましたから…

サザエの中身なんて人間が作り出せるようなものじゃないですし、油揚げというのは…御稻荷さんの皮と言いたいのでしょうか…ちなみに、この問題の回答は“ドラえもん”だったとか

再び、2Aにカメラを戻そう

ピンポンパンポーン

またもや、アナウンス用のチャイムが鳴った

『もしも〜し〜し』

声の主は雪路だった。どこかに電話をかけるみたいだが…

ヒナギク（何！？お姉ちゃんは何がしたいわけ！？）

『もしも〜し〜し、もしも〜し〜し、もしも〜し〜し！！！』

あれ……………おつかしいなあ…

一方的に言うけど！！又焼麺とミニ炒飯のセットと缶ビール10本、出前お願いしま〜す。

お金は桃源郷学園にツケで！！

フィック…ヒツキウ…』

ピンポンパンポ〜ン

（（（出前を頼んできたアアア！！しかも酔ってるウウウ！！）））

どうやら雪路は電話とアナウンス用の機械を間違えたらしい

ヒナギク（何やってんのよお姉ちゃん！！こんな時にこんな放送して！！しかもまだお酒を飲もうとしてるし！！少しはTPOを弁え

なさいよ!!!(

雪路の注文から5分後

ピンポンパンポ~~~~ン

次の放送が入った。

~~~~~

聞こえてきたのは倅田來未の曲の1つ“キューティーハニー”でサビから流れ始めた

しかし曲が“ハニーフラッシュ”の決め言葉を言おうとした直前で途絶えた。その後、真儀瑠の声で放送が入る

『今、頭の中で“ハニーフラッシュ!!”って思った者、職員室に  
来い!!!』

( ) ( ) 思うわアアア!!! 行くかアアアア!!! ( ) ( )

だって、子供の頃にアニメもやってましたし、2004年には実写映画がやっていましたからね

「お~~~~い、居ないのか~~~~? ハニーフラッシュって思った奴?」

銀時は教室を見回しながら言う



「行けよ〜〜、ハニーフラッシュって思った奴！〜どっせこん中にも居るんだろ??」

カリカリカリカリ…

「居るんだろ〜〜、黙ってやり過ごそうなんてそうは問屋があるさねえよ??」

カリカリカリ…

2Aの面々は銀時の言葉を聞かないようにしてテストに取り組んでいる

「居るんだろ??行けよ〜行けよ〜行けよ〜行けよ〜」

「「「うるせエエエエエエ!!!誰が行くかアアアアア!!!」

!」「」

ついにキレル人が出た

銀時「おい、今試験だよ?いいの〜〜??」

新八「誰だっと思うわアアアア!!!」

ハルナ「見てたからね!!!子供の頃見てたからね!!!」

深夏「倅田來未のCDも持ってんだよ!!!」

10分後…

ピンポンパンポーンとチャイムと共に再び放送が入った

『連絡だ！！』

声の主は生活指導及び補習担当の西村であった。しかもその声は怒っているように聞こえる

『今まで黙っていたが、私の職員室の机と高畑先生の車に“生活指導のバカ野郎”と落書をした者がいる！！この中にいる場合はすぐに名乗り出ること！』

ピンポンパンポーン

「しっかし世の中には酷いことをする奴がいるもんだねえ。まさかと思うが、このクラスにいねえよな？吉井？」

「何で僕なんですか！！」

明久は立ち上がって抗議する

「おめえ、観察処分者で西村先生から目をつけられてるじゃねえか」

「他にもいるでしょ、雄二とか！！他のクラスにもルフィとか沢田君たちとか岡崎先輩とか！！」

明久は不良と呼ばれている雄二や慎、朋也や自分と同じく観察処分者であるルフィの名前を挙げる。高畑と西村はそれぞれ“死の眼鏡”、“鉄人”と呼ばれている生活指導の教師で一部の生徒からは恐れられていますから、恨みを持っていて悪戯した人がいたのでしょう

「お前も何でこのクラスで俺の名を上げる!？」

雄二は座り、問題を解きながら明久に言う

雄二「明久、お前その状態だとカンニング疑われるぞ？成績のいい奴お前と席近いし」

どこの学校もそうであると思うが、テストの最中はこの学校は出席番号順であり、明久の近くには12位以内に入った紅音やのどか、それに入らなかったが高得点の栞がいる

「おいおい、お前カンニングすんのか？するなら目立たずにやれよ、観察処分者でカンニングって救いようがねえぞ」

目立たなければいいってことになっちゃいますよ？今の銀時のセリフだと。

「しっつしません、しません!!やだな〜もっ…」

明久は苦笑いで手を横に振りながら席に座って再び問題にかかり始めた

なお、この時点ですでに明久は解ける問題は解きつくしていて残りの七十分以上はボーツとしているだけだったという

「カンニングはすんじゃねえぞ〜、したらこの前のめちやイケのスペシャル(2011/04/09放送)の重盛みたいに警察…いや風紀委員に通報すつからな〜。しかもただの風紀委員じゃない。お前らの中で女がカンニングした場合、DSの沖田君に身柄を引き渡してメス豚として調教してもらつからな〜。例えば猿ぐつわをして三角木…」

ピンポンパンポ〜ン

銀時が怪しげな道具の名前を言おうとしたところで放送が入った

『連絡だ!!!』

声の主は、さっきと同じ西村

「落書の犯人が見つかったのか??」

『落書の犯人だが、さっき天神すすき理事長が大泣きしながら名乗り出てきた。以上だ』

ピンポンパンポ〜ン

「……理事長かよオオオオオオオオ!!!!!!!!」

2Aのクラスだけではなく、他のクラスからもツツコミの声。ツツコミがハモりました

ピンポンパンポ〜ン

10秒もたたないうちに次の放送が入った

『私です。猿渡です!!!』

声の主は猿渡教頭。こっちも怒っているみたいだが…

『誰ですか!!私の机の上で八岐大蛇ヤマタノオロチみたいな大きなウコをした

のは!!今すぐ名乗り出てきなさい!!」

ピンポンパンポ〜ン

「「「本当に誰だアアアア!!!!」」」

またもや、全クラスから聞こえてくるツツコミの声。もうテストの最中だつてこと忘れてるんじゃないでしょうか？

明日菜「もう、やめようよ!!この試験!!」

シア「さっきから邪魔ばっか入ってきて集中できないよ!!」  
歩「このままじゃまともな点数出ないんじゃないかな!？」

一部では、話し始める人も出てきましたよ。もうカンニングどうこうというレベルではありません

稟「銀さん、このテストのやり直しを請求する」

ナツル「集中できないよ、こんなんじゃない」

康太「……というより難しすぎ」

といつても話し始めたのは殆どが成績下位者なんですけどね。

ピンポンパンポ〜ン

『ええ〜、私です』

再び、猿渡の声で放送が入った

『さっきのウ コの話ですが…理事長が“私が犯人です”と大泣きしながら名乗り出ました』

「「「結局、理事長かよオオオオオ!!!」」

まあ、これが、この学園のテストの風景だということであ…

でも、この中で数学の満点をとった翔子や瑞希、マジョーリカ、Bの桐葉、Cの慎、星奈、夜空、桂馬ってすごいですね…

**第三十二話：試験監督は長時間暇で仕方ない（後書き）**

次回は感想のページでも言及している“戦争編”の導入部分を書こうと思います。ですが、敵キャラは一人も出さない…出るとしても台詞ゼロの名前だけにするつもりです

第三十三話：5月24日（前書き）

今回のお話は、大量の人が死ぬ描写、また大変に残酷な描写があります。ご注意ください。

心の弱い人は食事中、お菓子を食べながら見たり、寝る前などの閲覧をお控えください





バリバリバリバリ…

その戦闘機は銃弾を向かって撃ちつけてきたのだ

銀時はそれを間一髪のところまで避けて路地裏に隠れた

銀時がさつきまでいた通りからは「イヤアアアアア！！」「助けて！！」と悲鳴が聞こえてくる、生きていた人がいたのだ。

銀時が戦闘機が通り過ぎたのを見計らって通りに顔を少し出して様子を見るとそこには新たな死体が増えていた。今の機銃掃射でやられたのだろっ

(ひでえ…誰が一体こんなことを…)

戦闘機はあの一機だけだったらしく、その姿も見えなくなったので銀時は通りに出てもう少し様子を見ることにする

道路には周囲の建物のガラスが散らばっていてそのガラスが頭部や胴体に突き刺さっている死体もある

道路や建物には爆発があったのだろっか、真っ黒く焦げたような箇所もある

銀時は生きている人を探した。何があったのか聞きたかったからだ。だが、銀時の向かうところに悲鳴どころか断絶魔すら聞こえず生きている人は無かった

ギョオオオオオオオ！！

何か後ろからけたたましい獣の啼く声があったので振り返ってみると…

そこにいたのはまさしく恐竜といえるような20m近くの巨体を持

つ化け物であった

この化け物は巨大な頭で棘に覆われた下顎と、首の近くまで裂けた大きな口を持ち、前足が非常に小さくティラノサウルスに似ているような姿をしていた

(おい…何やってんだ…)

化け物は道に転がっていた死体を食べ始めたのだ。大人でも洋服ごと一口で丸飲みしてしまう

「やめろオオオオオオオ!!!」

化け物に何もできずに人々が喰われていくのが耐えられずに銀時は洞爺湖の刃をその化け物に向ける

ギユオオオオオオオオ

化け物もこっちに気づき再びけたたましい咆哮を上げる

次の瞬間

(なツツツ!!早い!?)

銀時は化け物の短い前足に捕まってしまった

「離せ!!このオオ…このオオオ!!」

必死に抵抗を試みるがその前足の力は思うより強く抜け出すことができない

化け物はその歯を銀時に向け、そして……

「！！！！！！」

銀時が再び目を開けるとそこには真つ白な天井に電灯、横を見ると薄茶色の革の生地…彼はソファに寝ていたのだ  
はあ…はあ…と息を絶え絶えにしている

「どうしたんですか？」

銀時に新八が声をかける。

「新八みたいにエツチな夢見てたアルか？」

「ちよつと！！見てないからね、僕エツチな夢なんて見たことないから！！」

「うっさい、新八（童貞）」

「黙れエエエエ！！もうそのネタ古いんだよ！！もう“にじファ”の他の小説で使い倒されてんだよ！！」

いつもと変わらぬ風景に銀時は安心しふつと笑みを零した。いつもと変わらぬ学園の風景…

明日菜「どうしたのよ、銀さん」

木乃香「息を切らしたり、突然笑ったり…どうしたん？」

「いや…なんでもないことが一番だと思ってな」

「銀さん、それなんて高橋ジョージ？」

「だけどそれが一番よ？なんでもないようなことが幸せなんだよ。作者だってロードの歌詞を13章まで全部読んで泣いてたしな」

銀時は周りを見回してみる。ここは第一校舎の食堂、壁に掛けられているデジタル時計を見ると5月24日、20:30と表示されてあった

「なあ、何で俺ここにいるんだ？」

ハルナ「何でって、試召戦争の優勝祝賀会じゃない」

「…そうか、祝賀会ねえ…」

夕映「と言ってもあとちょっとで終わりですけど」

テーブルの上には何枚も皿があるがその上には銀紙やチキンの骨、バランや爪楊枝だけが残っているだけである

「オイオイ、俺の分残してねえのかよ」

ヒナギク「残してないって…銀さん祝賀会始まってから、お姉ちゃんや月詠先生たちと一緒に酒飲んでその時も結構食べてたのよ？」

「……そういや、腹が膨れてるな」

どうやら銀時は酒を飲んで寝てしまったみたい

「おい、ほかの先生はどうしたよ？」

「桂先生たちなら、2次会に行ったわよ」

「何で私たちの祝賀会に関係のない先生たちが宴会すんのか謎なんだけど」

「ちくしょー、寝るんじゃないかった…」

銀時は寝てしまって2次会に行けないことに後悔しているようだ。そんな銀時にハヤテが声をかける

「まあまあ、銀さん。お酒はないですけどなにか作りますよ」

「そうか…なら、なんか簡単に食えるものを頼む」

「はい、ならちよつと待つててください」

ハヤテは調理のために、厨房へと入っていった

その間、暇だったので銀時は点いていたテレビを見ることにした

放送していたのは東都関東放送の生放送のスペシャル番組“オールスター春の祭典”という番組である。この番組は平均視聴率が25%を超える大人気番組である。オールスターということもあり、俳優やスポーツ選手、芸人、歌手、アイドルなど出演している人数は250人を超える

「それでは、次のコーナーに参りましょう、“クイズ、これって誰のイメージ!”」

司会補佐の東都関東放送専属の大塔アナ(31)が大きな声でコーナー名を言う。彼女はお笑い芸人の国立と結婚しお腹には5ヶ月の胎児がいる身である

「クイズ、これって誰のイメージ!”はインターネットのYahooやGoogleの検索エンジンで…」

司会のお笑い芸人島本(55)がルール説明を始める

このゲームはある有名人を検索したときに出てくる関連ワードのうち、無作為に選ばれた5つから連想される有名人を当てるといってものである。

ISで例えるならば“2組だからいない”となれば鈴音が正解だし“1組だけどぼっち”となれば篤が正解となる

テレビにはキーワードが映し出される

逃亡 変装

シア「ねえ、なんだと思う?」

稟「俺は…あれだな、市橋 也」

朱湮「私はあれね、福田 子」

咲夜「どつちも出るかアア!!何で犯罪者の名前をゴールデンで出すんや!?!」

ナギ「なら、酒井法子」

賢久「押尾学も考えられるな」

新八「でねーよ!!何で犯罪者の名前しか出てこねえんだよお前らの頭は!!」

確かに、上の2つからは犯罪関連のことを思いついてしまうのが大多数であろう

だが、その次に M-1 準決勝 愛妻家 シュノーケリング などのキーワードが表示され、犯罪者でないことがわかる

銀時「田代ま しじゃね?」

新八「いい加減にしろオオオ！！でねえんだよ犯罪者の名前は！！」  
咲夜「田代M 1に出てへんわ！！出られるか！！」

『それでは正解の発表にまいりたいと思います』  
大塔が言ったその時…

ガッシャーーーーン！！！！！！

何か機械や金属が倒れる音が聞こえる

『どないしたんや！？』

島本が音のした方を向きそのほかの芸能人やカメラ、観覧客なども  
そっちを向いた

そこに立っていたのは刀や斧、機関銃などの武器を持った10人の  
男。透き通るような肌をして背中には傘を背負っていた  
その男たちの周りには刀によって切られたカメラ、これが落ちたの  
がさっきの音の原因だろう、それと血まみれで倒れ動けなくなっ  
ているカメラマンやスタッフ7人だった

「な…なんなのよこれ！！」

「分からない…一体何が起きてるっていうのよ！！」





大塔の夫でありこの番組に出演していた芸人の国立が男に向かう。だが国立の前に拳銃を持った男が立ちはだかり、銃床で殴り倒し頭部を陥没させ銃を向けると胸をぶち抜いた

『やアアアアアアア……』

悲鳴を上げる大塔に男は刀で胸と腹を切り、切った腹の中に手を入れる。そして胎児を抜き取って片手で潰した。

ほんのちよつと前まで楽しい番組を放映していたスタジオは10分にして地獄絵図のような様相を呈した。

セットの下敷きになって圧死、銃弾を浴びて脳味噌が飛び散り、腹部から臓器が飛び出して死体もある

そしてそのスタジオ内で立っているものは謎の男10人だけとなった男たちはすでに動かなくなっている人たちにも頭や心臓を刺したり撃つたりなど止めの一撃を刺した

その惨劇の様子は漏らすことなく日本中へ流されていた  
生放送で事件があると普段ならCMを流すであろう。だがそれは出来なかった。

なぜならこの20:30時点でこのテレビ局のあのスタジオ以外にいた全ての人物が殺されていたのだから…

この事件はスタジオだけで400名、テレビ局全体で850人近くが死亡するという未曾有の大惨劇となった

その頃、東都関東放送の屋上へリポート

一隻の宇宙船が停泊している。その前には、派手な着物を着てキセ

ルを啜え左目に包帯を巻いた男と、オレンジ色の髪で一つの三つ編みをした男がいた

「地球の喧嘩師さんはどう？俺的には上出来だよ、実験動物を試すことが出来たし」

「…上出来だ」

「でも夜兎族の血は強いね、他の種族とのハーフのクーロンでも10人だけであんな惨劇が出来ちゃうんだから。

それにしても、あの侍さん元気かな？」

「学校で教師をしている。忠告するが闘うなよ？」

「分かってるって。まだ7か月もあるんだ、それまでに俺たちも力をつけておかないとね」

5月24日、クリスマスの7か月前の事だった

第三十三話：5月24日（後書き）

次回の内容は未定。資料その2を書くかもしれません

### 第三十四話：食事は腹八分目にしておけ（前書き）

活動報告に書いた通り、改正を行いました詳しくは資料その1のク  
ラス表をご覧ください。今回改正した理由は、これから先の革命編  
の事を考えたからです。

元ネタを見て無性に書きたくなつたものなんです。

今回の元ネタは“うる星やつら”アニメ168話です  
キャラ崩壊注意です

### 第三十四話：食事は腹八分目にしておけ

このお話の時間は少しさかのぼって中間テスト2日目  
今、カメラの目線は宇宙にあり地球を写しています

コオオオオオオオオオ!!!

どうやら、何かが地球に向かっていている模様です

所変わって、上条当麻の部屋

ニャーン!!ニャッツ、ニャッ!!

インデックス「とうま!!とうま!!スフィックスの様子がおかしいんだよ!!」

「静かにしてくれ、今試験の内容を一つでも覚えようと必死なんだよ」

ニャッニャッ!!!

確かに、インデックスの飼っている三毛猫スフィックスは鳴きながら自分の尻尾を追いかけています。

「確かに様子がおかしいな…朝飯あげたか？」

「うん。折角お腹が空いていると思って私が全部食べようと思ったツナ缶を1/5もあげたのに…」

「不満だったんじゃないか？」

またまた、所変わって銀時の家。銀時の家は“銀魂”と同じでスナックお登勢の2階にあり銀時が保護者という形で神楽と同居しています

神楽「銀ちゃん、定春の様子がおかしいネ、さっきから空に向かって何度も何度も吠えてるヨ」

バウツバツ！！

こちらでも神楽の言うとおり、定春は空を見上げて何度も何度も吠えています

「心配すんなって、散歩中に見かけたどっかの可愛いメス犬と付き合いたいって嘆いてるだけだって」

「それならおかしいヨ、この前も同じことあったけどその時は元気なくて食欲なかったケド、今回は食欲も変わらないし元気なままヨ？」

どうやら何か起きそうな予感…

当麻が登校してきたのは8時40分、ホールの5分前

元春「ヨオ、カミちゃん」

青髪「どや、今日のテストは？」

当麻「どうって…終わったな…ってというかハードすぎ」

なおこの日の1年A、B組のテストのタイムスケジュールはというと  
9時～ 化学or地学 (60)  
10時15～ 日本史or世界史 (60)  
11時30～ 英語 (リスニング有130)  
13時55～ 数学 (100点満点60)

という昼食の休憩もない相当ハードなものである

「そついや今日、森野が面白くなりそうな話を話していたんだけど  
にゃー」

「森野が？どんな話なんだ？」

「まあ、本人に話させるんが一番早いな。オーイ、森野」

青髪に呼ばれて、亮士が当麻たちの元にやってくる

「何か用っスか？」

「ああ、さつき話してた森野の愛犬がおかしい様子をカミちゃんにも  
話して欲しいんだぜい」

「分かったっス。実は今日の朝、下宿先で飼ってるエリザベスとフ  
ランソワを朝の散歩に連れて行こうと思ったんスけど、青空を見上  
げて何度も吠えてばかりで散歩に行かなかつたんスよ」

青髪「どや？天変地異の前触れかと思わへん、カミちゃん？」



当麻「確かに…うちのスフィックスも様子がおかしかったし…」

元春「スフィックスってあの三毛猫か？」

当麻「ああ、朝っぱらから鳴きながら自分の尻尾を追いかけてんだ」

青髪「なるほど…本当に天変地異起こるかもな」

小萌「みんな…HRを始めるのですよ…」

1年A組の担任である小萌が教室に入ってきた

生徒たちは席に着く

元春「せんせ…カミヤんと森野が天変地異が起こるからテストをしたくないって言ってるにゃー」

小萌「上条ちゃんに森野ちゃん、それ本気で言ってるですか？」

クラス全員の視線が当麻と亮士に降り注ぐ

「ヒイイ！！見ないで…見ないで…」

亮士は大量の視線に耐え切れずヘタレモードになる

「俺そんなこと言ってねえ！！ただ飼い猫の様子がおかしかっただ

けでー!!」

「そんなこといったってテストは中止にならないのです。もう1教科目の問題も持ってきてるのですよ」「

青髪「残念やったな〜、カミヤん。テストが中止にならんへんで」  
当麻「お前ら…」

当麻は少々の憎しみを込めた顔で青髪と元春を睨みつけた

小萌「テストが終われば明日は授業がないですから今日一日頑張つて欲しいのです」

そしてテストが始まった

時間が流れ14時25分。数学の試験の最中

数学はA組とB組を合わせてグレード別になっている

下位グレードの試験監督は銀時である

グーグーグー…

グーグー…

教室に流れるのは時計の針の音と鉛筆とシャーペンの音。そしてグーグーという何かの音

銀時「オイオイ誰だ〜？居眠りしてんのは？」

当麻「居眠りだと！！」

一夏「こんなにお腹が空いてるのに眠れるわけないだろ！！」

凜子「銀さん！！今何時だと思ってるの！？」

鈴々「お腹が空いてテストに集中できないのだ！！」

生徒たちはよつぽどお腹が空いていたのか、席を立ち上がって抗議をはじめめる

銀時「うるせえよ、俺だってひもじいんだよ。それなのにヨォ…テストの監督なんてめんどくせえのを我慢してお前らに付き合ってたてんだよ。少しは感謝という言葉覚えてろ！」

友紀「先生が食事を許可してくれれば感謝するけど…」

水琴「今先生に対して感謝の気持ちは無いんだよ」

銀時「たく…今試験中だぞ？ガタガタ騒いでつとお前ら全員カンニングとみなして数学0点にするぞ！！」

「」「ウツツ！」「」

その言葉に生徒一同は唖る

銀時「どっちがいい？昼食と0点と…」

ガタツツガタツツ…

生徒たちは0点が怖いのであろうか席について再び問題を解き始めた

銀時「それでいいんだよ…」

銀時も席に着こうとしたが…

ドゴオオオオーンンン！！！

教室に轟音が響き渡る

当麻「何だこの音！！」

元春「校庭の方から聞こえてきたぜい」

轟音に生徒たちは音のした校庭を見ようとするが…

銀時「待て！！席に着け。席に着かない奴は0点にしてやる  
俺が様子見てくるから…お前らはテスト解いとけ」

銀時は教室を出て校庭の様子を見に向かった

一夏「一体何があつたんだ！？」

亮士「早く見てみましょうっス！！」

生徒たちは全員窓から校庭の様子を見る

そこにあつたのは…

半径25mほどの大きな穴であつた

鈴々「なんなのだ！？あの大きな穴は！！」

緋鞠「きつと隕石でも落ちてきたのじゃろ…」

元春「よかつたな〜カミヤんに森野。天変地異が起こつたぜい」

亮士「別に嬉しくないっス…」

智春「もうテストどころじゃないよな…」

当麻「行くぞ！！」

当麻たちBグレードの面々も校庭へと走り出した

AグレードはBグレードと違い、真面目にテストを受けていたがBグレードからの誘いもあり、隕石に興味があつたのか誘つてから5秒でテストを中断しBグレードと合流し向かつた

グツグツグツ…

「これは…どうなつてんだ」

銀時は落ちてきた物を見ながらなにやら考え込んでいた。

間もなく、A組とB組の面々は巨大な穴に到着した

そこにあっただのは、グツグツと煮込まれている鍋とそれを見つめる  
銀時

ギョルルルルル…

昼食抜きでテストを続けてこんなものを見せられて、生徒たちの腹の音の合唱が起こる

そして…

「」「」「銀さん！……」「」「」

スバル「私たちが我慢しながらテストを受けていたというのに！！」

篤「先生だけこんなところで食事をしようとは…」

涼子「一体どういう根性してやがる！！」

怒りをあらわにしながら、銀時に詰め寄る

銀時「お前ら…何を言ってるんだ…違うよ…これは俺のじゃねえよ」

くえす「惚けないでくれます！？」

ティアナ「億が一、これが銀さんのものじゃないとしてこの鍋は何だと言うのよ！？」

りんご「こんなおいしそうな鍋1人で食べようだなんて不届き者で

すのー!!」

ラウラ「詳しく、説明してもらおうか」

一歩、また一歩と詰め寄る生徒たち

「こ…これはだな… たった今空から降ってきたものなんだよ…」

一夏「貴様ア…」

善吉「非常識なウソを…」

当麻「こうしてくれるー!!」

ボコツスカツドガツツ!!

男子生徒と女子生徒の一部は銀時をランチし始める

織戸「空から落ちてくるのは美少女で十分なんだよ!!」

青髪「そつや、鍋なんか空から落ちてきてたまるか!!」

まあ食欲は人間の三大欲求の1つですからね。無理も無いでしょう

「ちょっと待って下さい!!これは地球外物質です!!」

銀時が空から落ちてきたと言い張る鍋を見ていた朱里が声を上げた

しかし、その声にも耳を貸さずランチは終わらない

25分後

浦島太郎「何ですって！？それは本当ですか、朱里さん！！」

銀時を殴っていた彼らはやっとその手を止めた

朱里「ええ、前に本で読んだことがあるのですが…これは宇宙の鍋です。なぜ落ちてきたかは分かりませんが…」

鍋を見つめながら語る

美偉「でも、これが本当に地球外物質だとすると…」

雪子「まさに天からの贈り物ですね」

彼らの視線は鍋一点に集まる

鍋には牛肉、エビ、白菜、長ネギ、椎茸、春菊、豆腐に白滝が入っておりとてもおいしそうである

シャルロット「ねえ、これって食べられるの？」

水琴「食べられるよ、だって地球の鍋と大して変わらないよ？」

ギョルルルル…

響く腹の音



当麻「俺…もう食べちゃおっかな…鍋なんて全く食べてないし…」  
朱里「だめです!!地球外の物質で地球人に毒のものが入っていたらどうするんですか!!」

真冬「あの椎茸とか…もしかしたら毒キノコかもしれないですし…」  
身体に毒なのかどうなのか分からない以上、どうすればいいのかわからずただ目の前の宇宙の鍋を見つめる

そのとき

ガツガツガツバクバク…

鍋を両手で掴み一気に食べ始めた猛者が現れた

当麻「おい…インデックスさん…ここで何をやってんのかな??」

そう、インデックスである

鍋の中にあつたものを流し込むように自分の口の中へと入れる

ガランコロン

全部を食べ終える

秋沙「すごい…軽く5人前はあつたのに」  
元春「まるでブラックホールみたいだぜい」

インデックスは食べ終えるとニコツと笑いながら当麻の方を向く

しかし…

「ウツツツ…と…とうま…」

「どうしたんだ、インデックス!!」

「とうま…と…と…」

制理「本当に毒が入ってたの!？」

朱里「すぐに保健室に行つて先生を!!」

インデックスの異変に周囲は騒然となる

「と…とうま…と…」

とおつても美味しかったんだよ!!」

ドガアアアアンンン!!

予想の斜め上に行く答えにズッコケてしまう

当麻「食えるのか!!あの鍋食えたのか!？」

「うん、食材はみんな新鮮で出汁もよく効いててこんな鍋を食べたのはうまれて初めてだったんだよ」

歩「食えたのか…惜しいことしたな…」

青髪「美味しそうな鍋やったな…あれ」

ギョルルル…

時間は15時もう子供だったらおやつ時間です

奏「おなか…空きましたね…」

白「そうですね、私オムライスが食べたいです」

友紀「オレはラーメンが食べたい」

涼子「今ならマクドのダブルクォーターパウンダーをLのセットで食べれる気がする。飲み物はコーラ」

鈴々「鈴々はすき家の三種のチーズ牛丼のメガ盛が食べたいのだ！」

各々が自分の食べたいものを口にする

すると…

オムライス、ラーメン、ダブルクォーターパウンダーLのセット、  
三種のチーズ牛丼メガ盛り

鍋の中に口に出された料理が沸いて出てきたのである

その頃、宇宙では…

宇宙警察本庁

センゴク「何？“炊き出し鍋”が1つ行方不明だと？」

ガープ「ああ、だけでも心配は要らぬ。もう場所は判明してある」  
センゴク「何処だ、その場所は？」  
ガープ「ルフィが今いる学校じゃよ」

センゴク「あの鍋がむやみに使わなければいいが…あの鍋は我が宇宙警察が所有する“炊き出し鍋”…見た目はただの土鍋だが、その土鍋の周りで料理の名前を言うと一瞬の内にその料理が現れる。食料は宇宙警察の食料庫からレポートで出される。貧困で悩む星や国の飢餓を救うために開発されたのだが…」

ガープ「心配せんで構わんよ、ルフィやその仲間たちなら上手に使うはずじゃ」

学園の校庭に戻ります

さっきの中身は捨てられた。まあ、コーラとラーメンと牛丼とオムライスとハンバーガーが混ざってますからね

制理「みんな、よく聞いて!!」

セシリア「この鍋は餓えた私たちに神様が与えてくれた贈り物ですわ」

朱里「そこで注文は単独で順番に行くこととしましょう」

妙子「さっきのような悲劇は起こしてはいけませんから…」

各クラスの学級長と副学級長が変な料理にしないためにも注意を呼びかける

杏「そうだよね〜レバニラの大福とか…」

鈴音「酢豚のパフェとか…」

理科「ステーキの酢の物はさすがに」

砂戸太郎「餃子みそ汁とか食べたくないな…」

亮士「カレーに刺身も言語道断っス」

ゴポゴポゴポ…

レバニラ大福、酢豚パフェ、ステーキの酢の物、餃子みそ汁、刺身  
カレーが沸いて出てくる

セシリア「口に出さないでください!!」

このごちゃ混ぜ料理（約5人前）も生ゴミとして捨てられた

この鍋はさつきセンゴクが言っていた通り、飢餓の国の人々に向け  
て作られたもの。

こんな料理を無駄にするために作られたものではありません。

飽食の国日本だから出来ることですよね…

気を取り直して、1人ずつ料理を注文していくことにした

鈴々「じゃあ、国産牛のステーキなのだ!!」

智春「なら、焼き鳥のモモとねぎまとレバーを塩で3本ずつ」

美偉「私はお好み焼き」

当麻「国産ウナギの蒲焼」

嵐子「梅と鮭とツナマヨのおにぎり」

雪子「なら私はカレーパンとホットドック」

影響が及ばないように汁物とスイーツを避けてなるべく固形物なものを注文していく

朱里「あと1人分空いてますけど…」

銀時「なら、おしるこ」

目の前のおにぎり、ホットドック、お好み焼き等々がおしるこに染まった

.....

凍りついてしまうー同

当麻「ふざけんなアアア!!」

智春「銀さんがおしるこなんていわなければ食べれるものになったのに!!」

この料理も生ゴミとして処分された。もう20人前近くが生ゴミとして処分されています

妙子「もう一度仕切りなおしです」

インデックス「卵かけご飯」

卵かけご飯が鍋に現れる

卵かけご飯は半液体状と言ってもいいだろう。次から言われる食材は卵かけご飯の影響を受けてしまう

卵かけご飯に影響を受けながらもそれでいて美味しく食べられるもの…

それを頭の中で全員が思いをめぐらす

朱里「すき焼き用の牛肉」

“すき焼き”という言葉にハツとして…

りんご「長ネギですの!!」

文「ふあい、焼き豆腐!!」

幸村「糸こんにゃく!!」

箒「お麩!!」

そう、彼らはすき焼き風雑炊を作り出そうとしていたのである

そして…

銀時「いちご牛乳ウウウ!!」

.....

すき焼きが一瞬にしていちご牛乳味に染まった

セシリア「何ですか!! どうしてそんなに甘いものばかり!!」  
朱里「糖尿病になっちゃいますよ?」

銀時「仕方ないだろ、最近甘いもの食べてねえし…それに糖尿病に  
関してはもう気にしてないから、太く短く生きようって決めてっか  
ら」

制理「…ちよつと、聞いて」

制理は学級長と副学級長の3人を集める

「このままじゃ、銀さんが邪魔して一向に昼食にたどり着けないわ。  
だから、まず銀さんの料理を最優先にさせましょ」

「そうですね…坂田先生もあの土鍋の量のスイーツを食べれば私  
たちの邪魔をしないでしょっし」

朱里「バニラアイス」

制理「ポッキー」

セシリア「チョコレートクリーム」

妙子「いちご」

彼女たちがスイーツの名前を言うたびに土鍋にはそれが現れ、少し  
ずつ土鍋パフェが作られていく

「おお…これは…」



銀時は目の前で作られていく土鍋パフェに感動しているようだ

妙子「先生、これ全部食べていいですからちょっと待っていてください」

制理「OREO」

セシリア「メロン」

そして……

「マヨネーズぶっ掛け!!」

土方が現れて言った。パフェは一瞬にしてマヨネーズ味も加わったのだ

「土方くウウん??何やってくれてんのかなアア??」

銀時はせっかくの巨大パフェが全て無駄になってしまったのがよほど惜しいのであろう、洞爺湖で土方を斬ろうとした

「うっせえ、マヨネーズはなどんな食材にも合う黄金の調味料なんだよ」

ギユウウウウウ

またもや鳴る彼らのお腹、もう限界に達していたのだ

「もう俺は食うぞ、味なんてどうでもいい」

「胃の中に入れちまえば全ては同じだよー」

彼らから味という概念がなくなってしまった

「まったく、腹を空かした人間は見るに堪えないな」

「それにしても、どこからこんなにあくさんの料理が出てくるんでしょうね？」

Aグレードのほうで試験監督をしていた織斑と山田は呆れながらもその様子を見ていた

ルフィ「ここで腹いっぱい食べるって本当か!？」

ルフィたち2年生や3年生も噂を聞きつけてこの大きな穴の中へと入ってくる

インデックス「親子丼」

ハルナ「ラザニア」

鈴音「冷やし中華」

ルフィ「牛丼特盛!」

文「クリームソーダ」

一誠「カツライス!」

ハヤテ「うな重」

当麻「キムチ鍋!」

翠「レバニラ炒め」

もがな「麻婆茄子!」

楯無「マルゲリータピザ」

銀時「しるこオオオオ!」

友紀「味噌ラーメン!」

水琴「カレー!」

ナミ「餃子!!」  
「キンチヨール」  
古菲「回鍋肉!!」  
千桜「チヨコテイラミス」  
雄二「サバの味噌煮」  
桂「もつ鍋!!」  
早乙女ハルナ「松坂牛のステーキ!!」  
泉「まぐる漬け丼」  
エルシイ「カルボナーラ」  
ルフィ「天心飯」  
裕奈「若鶏のグリル」  
星「メンマ」  
箒「茶わん蒸し!!」  
一夏「手羽先」  
ラウラ「シュニツツエル」  
幸村「もんじゃ焼き」  
アリア「ももまん」  
退「あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん  
あんぱん…」  
ウソップ「ビーフシチュー!!」  
大河「フライドチキン」  
スバル「担担麺」  
希「シヨートケーキ」  
竜児「煮込みうどん!!」  
黒子「豚肉の黒酢炒め」  
理子「おろしハンバーグ」  
虎鉄「ソーキ蕎麦」  
美波「エビフライ!」  
湊「カツオのカルパッチョ」  
神楽「シーフードピザ」

理科「杏仁豆腐」  
インデックス「ビッグマック」  
妙「チーズinハンバーグ」  
「バルサン!!」  
愛子「皿うどん」  
律「カキフライ!!」  
唯「カスタードプリン」  
サンジ「チキン南蛮」  
ゆり「春巻き」  
土方「マヨネーズぶつ掛け!!」  
立華かなで「麻婆豆腐」  
夜空「豚汁」  
歩美「Wモスバーガー!!」  
真冬「チーズスフレ」  
セラフィム「かき揚げ蕎麦」  
白雪「ちらし寿司」  
なのは「ミートスパゲッティ!」  
鈴々「北京ダック」  
はやて「チーズフォンデュ!!」  
美琴「エビピラフ」  
明久「ハーブソーセージ」  
フェイト「コーンスープ」  
まき絵「ドトールのミラノサンドC」  
亜紗「エビチリ」  
九兵衛「エビグラタン」  
アキラ「シーザーサラダ」  
文乃「ペペロンチーノ」  
明日菜「ハッシュドポテト」  
西沢歩「しゃぶしゃぶ」

どんどんと、自分の食べたい料理を挙げていき食料で水深2m近くまで達した。あっ、上の中で食べられないものが2つ上がりましたが何かわかりましたかね？なお、食料の名前しか書いてありませんがその後には全て5〜50人前と言っています

銀時「すげえ、食べ物で泳げるぞ!!！」

サンジ「この食い合わせなかなかいけるな」

ハヤテ「こつちもなかなかいけます!!！」

西村「お前ら、注文をやめろ!!！」

ネギ「このままでは食べ物で溺れますよ!!！」

しかし、そんな先生たちの忠告も空しく生徒たちは注文を続けていく

ヴオオオオオオオオオオ...

そんな中やってきたのはこの穴の大きさほどある巨大な宇宙船

『ダイヤモンドヨリ、鍋ノ回収ヲ行イマス』

一筋の光が土鍋を照らして土鍋は宇宙船へと戻っていく

「土鍋が!!神からの授かりものが!!！」

『鍋ノ回収完了。食料ノ回収ニ移リマス』

ビイイイイ…ギョオオオオオオ…

バキュームのような音を立てて食料を回収する宇宙船。その中には銀時たち桃源郷学園の生徒や教師たち約300名がいることも知らずに

『食料回収OK、タダイマヨリ本部二帰還シマス』

宇宙船はゆっくりと動き出すと、そのまま空の彼方へ飛び去って行った

穴の跡にはだれ一人いなかった

数時間後…

ウウウウン、ウウウウン…!

宇宙船にはサイレンが鳴り響く

『船長…!ダメです…!食料庫のメーターがどんどんどんどんどんどん減っていきます…!』

『そんな…1万人前はあるはずだぞ…!?』

その頃食料庫では…

「食えエエエ力の限り食い尽くせエエエ…!」

「食って食って食いまくるんだアア!!」

未だに喰い続けていた。もう満腹なはずだが、食べなければ溺れてしまふという恐怖感がそつさせているのだらう。

宇宙船船長『本庁、本庁、応答願います。応答願います!!』

地球にて新生物発見!!地球にて新生物発見!!

我々は、これを暴食ネズミと命名。

S O S、S O S、S O S、S O S、S O S………』

その後、食料庫の食材を一夜にしてすべて食いつくし、センゴクやガーブなどといった宇宙警察幹部から彼らが大目玉をくらったのは言うまでもない。あと彼らが平均6kg太ったということも……

第三十五話：着ぐるみの中には人間じゃなく夢が入っている（前書き）

今回のお話は、リリカルなのはなのはとスバル、ISのシャルロットとラウラ、緋弾のアリアのアリア、Angel Beats!のゆり、アスラクラインの六夏が好きの方は見ない方がいいかと思えます。なんとというか…女を捨てているので…





ここは桃源郷学園、初等部第一校舎体育館

ここにいるのは200名を超えるほどの小学生たち、低学年が中心で防災ずきんに座っています。防災ずきん…懐かしいですね

ステージには何かセットが建てられていて何か劇があるのであろうと想像できる

「緊張するね〜」

「大丈夫だよ、小学生相手だしさ」

「なんかへま起こさない限り失敗することなんてないって」

「始まるわよ」

バツ・・・

体育館の照明が消されライトでステージが照らし出される

フハハハハハハハハハハ……

聞こえてくるダースベーターのような声色の笑い声

舞台上に現れたのは天狗のお面をかぶり、黒いマントを羽織ってマントの中は鎖帷子を着こんで唐草模様の風呂敷を背負ったなんとも変態っぽい男二人の姿

その正体は、ハヤテとキンジである。声はボイスチェンジャーを使っている

「フハハハハ、私たちは悪の組織“ワースト団”!!」

「今日も最悪最低な方法を使って世界征服を目論む悪の秘密結社なのさー!!」

ダンッッッ…

ハヤテとキンジの2人はステージから飛び降りて小学生たちへと向かう。ライトも2人を照らしている

「キヤアアア~~~~~」

「すっげ~~~~変態だ~~~~」

「きもちわる~~~~い」

「よくあんなことできるよね~~~~」

「~~~~バ~~~~カ~~~~」

2人に浴びせられる悲鳴と罵声の数々

キンジ(……誰も好き好んでこんなことやってねえっての!!…このガキども…)

ハヤテ(遠山さん、我慢です。僕もつらいですから…)

その罵声にしん心を傷つけながらも一歩また一歩と子供たちへと近づく

「な…なにするんだよ!!」

「おれたちをどーするきだ!？」

「ウウ…やっぱり、こわい…」

ですが、ここはやっぱり子供。2人が近づくほどに少しずつ怖がっていきます

「ニヤツツツ……」

そんな子供たちを見て2人は笑い…

「フハハハ、君たちにはこれをあげよう」

「みんなで仲良く食べればいい!!」

2人は背負っていた風呂敷を床に置いて結び目を開ける。

「うわああ〜お菓子だああ〜」

「フハハハ、一人ひとつまでだ」

「お菓子は早い者勝ちだ。ほしいものがあればさっさと選ぶんだな」

「わ〜〜い、ありがとう〜」

子供たちはまさか悪の組織からお菓子をもらえんと思っておらず、驚くとともに大喜びです

「フフフ、作戦成功ですね」

「まずは…このガキどもを…」

どうやら何かがあるらしい

「待ちなさい!!」

子供たちがお菓子を選んでいるとステージ上から大きな声が聞こえてきた

「『善人面して子供を丸め込もうとしてんじゃねエエエエ！』」

そして7人の影がステージに現れたかと思うとその7人はハヤテとキンジにとび蹴りを加えた

グハアアアアアア

2人はとび蹴りをまともに喰らってしまい弾け飛んで転がった

「『グハツツ…誰だお前らは！』」

吐血しながらも2人は自分らにとび蹴りを喰らわした7人に聞く

なのは「誰だつて？」

ゆり「いいわ、特別に答えてあげる」

バツツツ！！

再びステージ上をライトが照らす。そこにあつたのは7人の戦士の姿

「三軒茶屋の定食屋でバイト、風紀レンジャーリーダー風紀ナス！」

紫色の戦隊スーツを身にまとったゆり

「雑司ヶ谷の古本屋でバイト、風紀レンジャーサブリーダー風紀トマト！！」

赤のスーツをまとったなのは

「津田沼で清掃員のバイト、風紀ハウレンソウ！！」

緑のスーツをまとった六夏

「北千住のファミレスでバイト、風紀バンバンジー!!!」  
白色のスーツをまとったラウラ

「和光市で家庭教師、風紀トロ!!!」  
ピンクのスーツをまとったアリア

「田園調布でメイド、風紀バッテリー!!!」  
青のスーツをまとったスバル

「鶴見で小工場勤務、風紀オムレツ!!!」  
黄色いスーツをまとったシャルロット

「『『7人合わせて、風紀レンジャー!!!』』」

なのは「悪事を行う悪者たちよ!!!」

六夏「さっさとGO TO HEAVENしちやいなさい!!!」

ババン!!!という音とともに決めポーズを決めた7人

「ぎゃああ~~~~風紀レンジャーこわい~~~~」

「風紀レンジャーの方がよっぽど悪役だよ!!!」

「こわい、助けて~~~~風紀レンジャーに殺される~~~~」

普通のヒーローショーならここで歓声が巻き起こるはずだが、やっ  
てしまったことがやってしまったことなので7人は完全に子供たち  
から恐れられているようだ

「ちょっと待ちなさいよ!!!」

だがそのゆりの言葉も空しく、子供たちはワースト団の味方に付いた

「ちよつと、集合!!」

この事態に危機を感じたのかゆりが集合をかけた

シャル「どうしよう、このままだと」

六夏「さすがにこれはまずいわね…」

スバル「完全に私たちが悪役になつてる…」

ゆり「こうなつたら、奥の手よ。この籠手の力を使うの」

ラウラ「なるほど…この籠手の変身能力で…」

説明しよう、風紀レンジャーのスーツの籠手にはルビーのように赤く輝く石が内蔵されておりそれを額に当てて強く念じることによつてなんでも好きな姿に変身することができるので!!

彼女たちが念じた結果、7人はピンク色のスモックを着た幼稚園児の姿になった

といつても、すぐ変身したわけではなく一度ステージの裏に隠れて着替えたのですけどね

アリア「お兄ちゃん、おかしちゃん、おかしちゃん!!!」

なのは「私たちもおかしたべた〜い」

7人は幼稚園児のふりをして2人に近づいてお菓子をもらおうとした

「そうか、お嬢ちゃんたちもお菓子食べたいか」

「ならあげよう、仲良く食べるんだぞ?」

ハヤテとキンジは幼稚園児の格好をした7人に不審がることもなくお菓子を渡していく

7人はそれを食べて……

ゆり「ゲロゲロ、まっず〜〜い」

六夏「こんなゴキリの餌食わしてんじゃないわよ!」

口に入れてすぐに吐き出し、それを何度も履いていた上履きで踏みつける

ラウラ「しかも、このうまい棒、賞味期限がとっくのとうに切れている!〜!〜!という魂胆だ!」

うまい棒のラベルには安政2年7月と書かれてある。…: どんだけ前のうまい棒なんですか、そんなに前からうまい棒って存在していたんでしょうか?

「うとううう〜〜お腹痛いよ〜〜」

突如、お腹を押さえて倒れこみ腹痛の演技をするアリア

なのは「アリアちゃん!〜!アリアちゃん!〜!」

シャル「どうしよう、お菓子のせいでアリアちゃんが食中毒になっちゃったよ〜〜」

スバル「どうやって責任とってくれるのよ、ああん!」

もう手口がヤクザですね

ハヤテ「どうしましょう、親分」

キンジ「俺たちは昨日駄菓子屋でこのお菓子を買ったばかりだぞ!」

「そうですね…: ってことは!」

「言いがかりだ!〜!おい、ガキ共!〜!妙な言いがかりは…: !」

「お〜い、ワースト団のオッサンたち〜」



続きを言おうとしたところで何かを持ったゆりと六夏がとめた

「誰がオツサンだ!!」

「喰らえ!!」

手に持っていたのは風船。どうやら何かが入っているようだが…

パアアアン!!!

風船はハヤテとキンジにあたると破裂した

ハヤテ「ウエオツプ!!」

キンジ「くせえ!!何だこりゃア!？」

「どう、私たちの秘密兵器“風船爆弾”の威力は」

「風船の中にはね、賞味期限が1か月も切れた牛乳と生卵が入っているのよ!!」

正義のヒーローとは思えない兵器ですね

「逃げろ!!!」

7人は2人が風船爆弾で苦しんでいるのを確認するとステージの裏へと隠れていった

キンジ「畜生…まだ臭せえ…」

ハヤテ「あのガキ共…マジで許さない…」

2人は風船爆弾を受けてしまった事にイライラしている様子

「……わ……い、ワースト団のお兄ちゃん！！お菓子ちよーだい！  
！」  
ですが、そんなこともつゆ知らず新たな子供たちが2人にお菓子を  
貰いにやってくる

「……うっせえ、黙れ糞ガキ共！！俺たちはガキが大っ嫌いなんだよ  
！！！」

2人はやってきた子供たちに強く当たってしまった

「うああ……ん、ワースト団やっぱりこわい……」

「やっぱり悪の組織だったんだ……わああ……ん！！！」

子供たちはその姿を見て泣きながら逃げ出していった

アリア「今よ！！！」

なのは「ついに本性を現したね、ワースト団！！！」

それを待っていたとばかりに、再び戦隊スーツを着た7人が姿を現す

スバル「幼気な子供たちに糞ガキ共だつて！？」

ラウラ「この2人は、真性の悪者だったようだ」

ハヤテ「ちよつと待って、俺たちは何にも……」

キンジ「ていうか、お前らさっきのガキ」

ゆり「うっさいわね、悪はおとなしく正義に潰されてればいいのよ、  
ハーゲー！！！」

ヒーローとは思えないような口のききようです

「……そんな奴らには必殺技マウストウガス！！！！」

彼女たちはお笑い芸人がよくやる“鼻でうどんを食べる”要領で鼻からホースを入れた。ホースは口から出て、腐卵臭のする気体を放出しだした

説明しよう、必殺技マウストゥーガスとは鼻から口に通したホースを通じて口から硫化水素ガスを放出し、相手に吹きかけるといってもない技なのである！！

言っておきますが絶対に真似しないでくださいね、実際に温泉地で硫化水素の事故やこれを用いた自殺も起こってますし…

コホオオオオオオオオ！！

硫化水素ガスをワースト団に吹きかける風紀レンジャーたち。女が鼻から口にホースを通して毒ガスを吐くって女捨ててると思うのは私だけでしょうか？

ハヤテ「こんな手で…ハア…仕掛けてくるとは…風紀レンジャーめ…」

キンジ「今日は…ヒイ…ここまで…ヒイ…しておいてやる…覚悟しておけ…」

そういうと、ワースト団の2人はステージ裏へと逃げ去っていきました。とつても苦しそうで必死に呼吸しています。

だから硫化水素を人に浴びせるといふ真似はしないでくださいね、絶対！！

スバル「これでまた一つ悪が滅びたね」

シャル「子供たち、大丈夫？」

風紀レンジャーは笑顔で子供たちの方を向くが…

「「「おやあああ〜〜風紀レンジャー怖い〜〜助けて〜〜」」

「泣き喚きながら風紀レンジャーから逃げていく子供たち。なんと  
うか……自業自得といった感じですね

こうして、風紀レンジャーたちは姑息な方法で子供たちからの人  
気を下げながらも悪を退治していくのでした。  
めでたしめでたし……なのか？

風紀レンジャー役の7人のファンの皆様、御免なさい

### 第三十五話：着ぐるみの中には人間じゃなく夢が入っている（後書き）

今回は2年のあの女生徒と、同じく2年のあの変態がお見合いというお話

その次は、今回のこれといい、7〜9話といい、風紀委員のカッコいい姿がまったく描けてないと思うので何かサスペンシ的なものを書いてみようかなと考えてます。その場合、元ネタは劇場版“交渉人”（米倉涼子が主演の奴）や交渉人真下正義（ユースケが主演の奴）やドラマSPや作者の尊敬する作家・西村京太郎さんの作品になるかと思えます。ちよつと長くなるかも…

また、12月の革命戦争編では劇場版SP〜革命編〜のような展開を入れてみたいと思ってます

革命戦争編のイメージOPは、オルトロスの犬主題歌である滝沢秀明の“ヒカリひとつ”&ウルトラマンティガのOPであるV6の“TAKE ME HIGHER”

EDはドラマSPのEDである“way of life”です。皆さんにyoutubeなどで聞いてもらってイメージを持ってもらえれば幸いです

ウルトラマンティガ懐かしいですよね、ね？

第三十六話：親孝行したいと思った時には親はいないのが殆ど（前書き）

東北新幹線全線再開記念、今回の話のメインは鉄道オタクなアイツです

作者は東北地方の一日も早い復興、東北地方の鉄道のいち早い再開を願っています

そういえば、焼肉屋の食中毒で感染者の出る数日前に“深イイ話”がこの焼肉店を取り上げてたみたいですね。そういえば、紳助がONE PIECEのOP曲を原作まったく見ずに書いたと言ったのも“深イイ”でしたよね。一体何やってるんだか

### 第三十六話：親孝行したいと思った時には親はいないのが殆ど

ここは女子寮の0305号室

シア「えっ、お見合い？」

木乃香「せや、おじいちゃんったらまたウチにお見合いせえって言うんや」

明日菜「校長、お見合いさせんの大好きよね〜」

「まだ高校生やから結婚なんてまだ早いのに…」

ネリネ「でも、16って結婚はできるんですよ、日本の場合」

桃香「そういえばそうだったね〜、普段全く考えもしないけど」  
愛紗「でも、木乃香さんには刹那がいるんじゃないか？」

この部屋には上記の明日菜、木乃香、シア、ネリネ、愛紗、桃香が住んでいます。なおネギは現在、小太郎と共に生徒用の男子寮で暮らしているのです

愛紗の問いに木乃香は強く頷いて

「ウチにはパートナーのせっちゃんがおるって何度も言ったのに、おじいちゃんったら男のパートナーも一人くらいいてもいいんじゃないかって言うんや」

「ふ〜ん。で、そのお見合い相手ってどんな人なのよ？」

「今朝写真が届いたばっかでウチもまだ見てへんのやけど、これがその写真や」

木乃香は封筒に入った釣書を取り出す

「ちょっと、見てみない？」

「私もちよつと気になるかも」

シアと桃香は興味津々のようだ。まあこの年齢でお見合い写真や釣書を見る機会なんて滅多にありませんからね。

「ウチは全然構わへんけど…明日菜たちも見る？」

「木乃香がいいなら見るけど、相手の歳はいくつだつて？」

「今回はウチたちと同じ高校2年生やつて」

「な〜んだ、30過ぎのオジサマじゃないんだ」

「オジサマ…つて」

「明日菜さん、年上の男性大好きですからね」

愛紗とネリネは苦笑いをしながら言った

「じゃあ、見てみよか」

木乃香は釣書を開く。そこに書かれていたのは、相手の生年月日、学歴、家族書などを含めたプロフィール。そして一枚の写真

「ねえ、この人つて」

「うん、あの人だよね？」

「人間違いじゃないの？」

「でも、家族構成も合ってるし、プロフィールも」

中身を見た6人は困惑の表情を浮かべてお互いに顔を見つめあう。

「…瀬川（君）……」



その日のHR前、2Bの教室

ドガツツツツツ!!!

教室に大きな音が響く

「「「なんだ!!!なんだ!!!?」「」  
「「「喧嘩!?!」「」

音を聞きつけて隣の2Aや2Cからもやじ馬たちがやってきている。2Bの教室には黒板に向かって投げ飛ばされて身体を打ち蹲る男と、その男をじつと見つめる女の姿とその2人を見つめる2Bの生徒の姿があつた。突き飛ばしたせいで机や椅子も何脚か倒れている

「痛…桜咲、何をしやがる?」

男は痛みを堪えながら聞く、どうやら男を突き飛ばした女というのは刹那だったようだ

「貴様こそどういうつもりだ、瀬川」

刹那は怒りと殺気に満ちた声と表情をしながら男に聞いた。どうやら、男というのは虎鉄だったようだ

「どういうつもりって、何の事だかさっぱりわからないんだが?」

「貴様、しらばっくれるな!!!」

刹那は声を荒らげて虎鉄の胸倉をつかみ黒板に押し付けながら言う  
普段のクールな彼女と比べたら大違いです

「桜咲さん、虎鉄君が一体何したの!?!」

虎鉄の双子の妹である泉が恐る恐る、刹那に近づいて聞く。

ギロツツ

そんな泉を殺気をそのままにした目で一瞬だけ睨みつけて再び虎鉄の方を向いた

「ヒツツ!!」

泉はそんな目で睨みつけられたので近くにいたハヤテの後ろに隠れるようにして逃げた

「桜咲さん、ダメですよ！いくら虎鉄さんがうじ虫と同じくらい気持悪いからといって殺しちゃ。こんな人のせいで人生を棒に振るんですか!?!」

：ハヤテも人の事言えないと思いますけどね。何回か殺そうとしてたし。ていうかうじ虫と同レベルに考えていたんですか

「綾崎君、君なんかと一緒にしないでくれ。私は大義のために殺すんだ」

虎鉄「大義のためだど??」

「私とお嬢様の幸せという大義のためだ。これを言ってもまだなぜこんな目に合うのか分からないのか?」

「分からないな」

「ならばやはりここで死んでもらう!!」

刹那は虎鉄を手から離すと間合いを取って愛刀“夕凧”を大きく振り上げる。虎鉄はさっきのダメージがあるのか動くことは出来ない。

「死ねえ!!」

そして、自分のすべての力を込めて振り下ろした

ガキキキイイイン

しかし次の瞬間聞こえてきたのは、身体を斬る音ではなく金属と金属がぶつかるような音

「刹那さん、なにやってんのかしら？」

「僕のクラスメイト殺さないでくれるかな」

「こんな奴でも一応私たちの仲間だからな」

ヒナギクが白桜で刀を受け止め、刹那の後ろで木場祐斗とゼノヴィアがそれぞれの持つ聖剣を刹那に向けていた

「これはいったい何の真似ですか」

未だに殺気を込めた目で刹那はヒナギクに聞く

「何って、風紀委員の仕事を全うしているだけよ。生徒の安全を守るっていうね」

「ならば、彼を殺して！！」

「刹那さん、何で瀬川君を殺さなきゃいけないのか理由がわからないわ。瀬川君があなたの物を盗んだり、あなたに痴漢をしたというのなら分かるけど」

ゼノヴィア「その時は私もこいつを殺してもいいと思うぞ」

祐斗「殺すってそんな軽く言うもんじゃないと思うけど」

「だから刹那さん。理由を教えて、ね？どんな理由であれ刹那さんを責めたりしないから」

ヒナギクは微笑みながら刹那に言った  
刹那はその顔を見てしばらく考えたのち、少々不服そうな顔をしながらも語り始めた

「実は…」

「「「エエエエ〜！！近衛（木乃香）と瀬川（君）がお見合  
い！！！？」「」

ハヤテ「それって何ていう罰ゲームですか、誰だっけたくありませんよ！ゴキリ  
を手で掴む方がマシですよ」

.....

ハヤテのオブラートにも包まない直球ストレートな意見に周りの者は若干引いている

ハヤテ「あれ、どうしたんですか皆さん？？」

「まあハヤテ君はいつもの事だから放っておいて、刹那さんはそれだけで瀬川君を殺そうとしたの？」

「それだけじゃありません。今朝、お嬢様たちから話を聞いてすぐにおじいさま…校長のところに向かったんです。そしたらこう言われました

“相手先がぜひそちらのお嬢様とさせてほしいと言っておる。相手もいくつもある見合い写真のうちからすぐに選んだほどの熱の入れようじゃ。”と……」

「うわあ、虎鉄さんに選ばれるなんて一番最悪ですよ。僕だったら自殺しちゃいますよ」

ナギ「おい、ハヤテ」

「何ですか、お嬢様？」

「その気持ち分からんでもないが言いすぎだ。私も引くぞ？だからそういうこと言うのはやめろ」

「????分かりました」

「だそうだけど、瀬川君は身に覚えはないの？」

ヒナギクは虎鉄に聞く

「…確かにお見合い写真は選んだ。だがこれは偶然なんだ」

「偶然、これどついう意味なん？」

「貴様！まだ!!」

「まあまあ刹那さんも落ち着いて。で、どついうこと?」

まだ怒りの収まらない刹那を宥めながら明日菜は聞いた

「それなら私が説明するよ、私もその場にいたし。確かに偶然だったな」

虎鉄の隣にいた泉が話し始めた

〳〳泉の回想〳〳

これは、約1か月前のゴールデンウィークの事

泉と虎鉄の2人は久々に自宅に帰っていた。ちなみに2人の家は結構大きくて、

2人のお父さんはソニーの社長さんらしいですよ

「虎鉄、私の部屋に来なさい」

リビングでゆっくりしていた虎鉄は父親のストリンガーに呼ばれて部屋に向かった。

「お父さん、私も行っていい??」

「…まあいい、泉も来たかったら来なさい」

父は少し考えたのち、何も問題はないと思ったのだらう。泉も部屋に入れた

「そこに座りなさい」

2人は父に言われるがまま、座布団に座った。

2人が座ったのを見ると、父も2人と向かい合うようにして座った。

その隣には何か冊子のようなものが積み上げられている

「親父、なんだこれは?」

気になっていたのだらう、虎鉄は冊子の中身を聞いた

「これはな、お前のお見合い相手の写真だ」

「ええええええええ、虎鉄君お見合いですんの!?!?」

父の言葉に驚いたのは虎鉄よりもむしろ泉のほうだった

「断る!!俺には心に決めた人がいるんだ」

「虎鉄、その心に決めた人、男だろ?」

ギクツツツツ！！！

「そ…そんなことは…」

虎鉄は汗をダラダラ流しながら答える

「あるよ、隣のクラスの綾崎ハヤテ君だよ」

「おい、泉！！」

言い訳しようとしたが、泉に本当のことを言われてしまった

「だが何が悪い、俺は綾崎の事を本気で愛しているんだ！！誰が誰を好きになるうなんて関係ない話だろ」

あつ、開き直りました

「だいいち、親父だって泉の事ばっか構いやがって！！俺の事なんかまったく考えてねえくせに、俺に話があるから行ってみりゃ綾崎と別れるだ！？」

言っておきませんがハヤテと虎鉄は恋仲になったことなんか一度もありませんよ」

「はあ…」

そんな虎鉄を見て父はため息をついて

「なあ、虎鉄よ。お前は母の事を覚えているか？」

と聞く

「お母さんって私たちの？」

「当たり前だ、泉。他に誰がいる」

「あんまり覚えてねえ、物心つくかつかないかの頃に亡くなってたしな。で、その母さんがどうしたんだよ」

ちなみに泉と虎鉄の母については原作であまり設定がないので、オリジナルで進めさせてもらいます。

「お前らが生まれた頃だったか…私は母さんに聞いたんだ。虎鉄にはどんな子供になってほしいって。もちろん泉の分も聞いたぞ？」  
虎鉄「で？」

「母さんは、何にも高望みはしない。一人前の男になってくれればあとは何もいらぬ」って言ったんだ」

泉「…お母さんそんな事言ってたんだ」

「ああ、それに最近この頃の夢ばかり見る。それは天国の母さんが虎鉄に“一人前の男になれ”と言っている気がしてならないんだよ」

「……………」

反抗的だった虎鉄もこんな話をされてか黙って聞いています

「そこで私は考えた、一人前の男が何なのか…」

「それでたどり着いた結論がお見合いってこと？」

「ああ、虎鉄が結婚して孫をつくって一家の大黒柱になって家庭を守る姿を母さんに見せれば母さんも虎鉄が一人前になったねと言う気がするんだ。だから虎鉄、一度お見合いしてみないか？」

父は虎鉄の目を見ながら言う。その目は少し濡れている感じがする…そんな事を虎鉄は思った

「はあ、まあいい…こんな話をするだけ時間の無駄だったというところか」

何も言わず、黙ったままの虎鉄を見てまたため息をついて父は立ち上がった

「お父さんどこ行くの？」



「お見合いの仲介業に退会の連絡をしにいくんだよ」

そう言い、襖を開けようとしたその時

「親父!!」

「どうしたんだ虎鉄？」

「(そんなこと言われたら…)俺、この人とお見合いする」

虎鉄は積み上げてあった物の一番上の釣書を取ってそれを渡した。  
一度も釣書の中身を見ずに

~~~~~回想終了~~~~~

「っていうわけ。だから虎鉄君は誰とお見合いをするのか知らなかつたんだよ」

「…なるほど、そういう訳でしたか」

刹那も今の話を聞いて冷静さを取り戻しています

「なあ、近衛」

「どうしたん、瀬川君？」

「近衛が嫌なら、俺はいいぞ？見合いをやらなくても」

明日菜「だそうだけど、木乃香どーすんの？」

「ん~~~~~」

木乃香はしばらく考えた後

「ええよ、お見合いしても」

「「「ええ!?!?!」」」

「お嬢様、そつっ…それはどういうことぞ?!?!」
刹那も大慌てで噛み噛みになってます

「お見合いしても結婚せなあかん訳ないんやろ?ウチも知らない人
やったら嫌やつたけど同じ学校の仲間やからな。それに…」

木乃香は虎鉄を少し見たあと…

「瀬川君、なかなかええ男やしなあ」
微笑みながらそう言った

刹那「お嬢様!?!(いや、まさかな…あんな変態にお嬢様が…)」

刹那の不安を残して、次回に続きます

第三十六話：親孝行したいと思った時には親はいないのが殆ど（後書き）

次回“三つ子の魂百まで”

なお、今話にも出てきた部屋割りですが、現在2年女子の分だけできております。次話を投稿する時には完成させて資料に貼っておきたいと思っています

第三十七話・三つ子の魂百まで（前書き）

ドラマ「生まれる。」の主題歌“365日家族”っていい曲だなっ
て思う。当たり前の事なただけどそれがいい。早くCD発売しない
かな…クレヨンしんちゃんのT・W・Lは買いました

どうやら、ネギまとハヤテが同時上映で映画を公開するみたいですね

活動報告でも書きましたが、資料その1に寮の部屋割りを書きまし
た。一つの部屋には同じ作品のキャラは2人までとしています
あと、そろそろ何かアンケートをするかもしれませぬ。内容につい
ては未定です

第三十七話・三つ子の魂百まで

前回のあらすじ：虎鉄を女と結婚させたい瀬川家父ストリンガーが持ってきたお見合い写真の中から虎鉄が選んだのは木乃香だった

そんでもって、お見合い当日

女子寮のラウンジ、時刻はお昼の12時をちょっと回ったくらいここには、

ヒナギク「そういえば、今日だけ？あのお見合いって」

瑛里華「ねえ、みんなって瀬川君の事どう思う？」

楯無「瀬川君ね〜、顔はいいのよね〜」

陽菜「料理もおいしいですし、運動や勉強もできるみたいですし」

理子「だよね〜、この前のティーパーティーのお菓子もとっても美味しかったし」

ティーパーティーというのは、女子寮の中で週に数回行われている集いの事でお菓子は買ってきたり、自分たちで作ったり、上記のように虎鉄やハヤテやサンジなどが作ってきてくれるのだ

「でも、ねえ」

「鉄道オタクなんだよね〜」

「キレると怖いし」

桜子「そういえば私、瀬川君にキレられたことがあるな〜」

ヒナギク「えっ、どうして？」

明日菜「詳しく聞かせて」

桜子「1年くらい前だったかな、私たち渋谷まで行こうと電車を駅で待ってたのね」

美砂「そしたら、ホームの端っこの方にカメラを持った瀬川君がたっていたのよ」

円「それで、電車が来て私たちが乗ろうとしたら『邪魔だ!!んな所から乗ってんじゃねえよ、考えるよクズ!!』って言ったのよ」

「……うわあああ……」「」

このエピソードに完全に引いています

紅音「普通に電車に乗ろうとしてただけですよね？」

桜子「うん、それなのに瀬川君は電車の写真を撮りたいからって、私たちに電車に乗るなって」

明日菜「酷くない!?全然悪くないじゃん、それなのに一方的に怒鳴られてたまつたもんじゃないよね」

本当、世の中には酷い鉄道オタクがいるものですね。自分はまだ遭遇したことはありませんが。

ちなみにyoutubeで“罵声大会”と検索すれば今の虎鉄の酷さがどれほどのものか分かります

理子「私も瀬川君に怒られたことがあるな〜」

紅音「何ですか？」

理子「私ね、1年のころ瀬川君と同じクラスで12月のクラス別遠足で同じ班になったの」

12月のクラス別遠足というのは、その名の通り高等部の全学年がクラス毎に予算（一人当たり交通・施設費7000円前後）の範囲内で行きたい場所を決めて行くというありがちな遠足である

理子「それでお土産買いに行つて15時までには買い物を買ませるよ
うに決めてたんだけど、10秒だけ遅れちゃつたの。10秒だけだ
よ。」

それなのに瀬川君は「10秒遅刻だ、もし電車に乗ろうとしていた
んならお前は一人ホームに取り残されている。3分前には来るよう
にしる」って」

歩「瀬川君、細かいところあるよね。私も同じ班だつたけどその後も
グチグチ言つてなかつたっけ？」

理子「そうそう、鉄オタだからかなんだかしんないけど」

理沙「そういう面が彼をダメにしてるよな、ホモだし」

瑛里華「顔やスキル面はいいのにね、それらのせいで全部台無しに
なつてるわよね」

楯無「それはそうと、誰かお見合いを監視とか行つてないの？もう
時間的にも始まつているはずだけど？」

美希「行つてないぞ」

楯無「えっ！？こんなに面白くなりそんな事なのに!？」

美希「だが、心配はいらない」

そう言つて、美希が取り出したのはケータイ。Webを立ち上げて
彼女がアクセスしたのはツイッターだった

美希「泉も虎鉄や虎鉄ヒゲたちの父親と共にお見合いのある料亭にいる」
理沙「その場にいる泉に実況してもらおうということだ」

明日菜「それなら、確実に何やつてるか分かるわね」

瑛里華「もうつぶやかかれてる？」

「ちよつと待て…今読むから」

美希が一番上に書かれたつぶやきを読んだ。4分前に書き込まれたとある

「えっと…料理おいしいなう」

理沙「…その前のつぶやきはどうなんだ？」

「ん〜…11分前の書き込みで“よく当たるっていう心理テストと占いを教えてもらった〜”、20分前の書き込みで“今自己紹介中”、25分前で“今始まったよ〜”とあるが…」

明日菜「瀬川君と木乃香の間に進展はないの？」

「聞いてみる」

美希は「2人の間に進展はないのか？」と書き込み、送信した

数分後、泉の新たなつぶやきが公開された。美希が書き込んだ分がリツイートされている。

「なになに…“虎鉄君、完全ぼつちなう。今、鉄道ダイヤ情報読んでも”だそうだ」

「…お見合いしている意味ねエエエ!!」

お見合い相手ほったらかしで雑誌読んでるってそんなお見合いあってもいいんですかね？実際は泉と木乃香が、近衛校長と瀬川父が話していてどっちにも入れずにその結果、雑誌を読んでもただけなのが。

ちなみに鉄道ダイヤ情報とは、臨時列車やイベント列車などダイヤ

の情報が満載の鉄道オタクに親しまれている雑誌の一つです

明日菜「ねえ、本当にお見合いなの！？ただのお食事会の間違いじゃないの!？」

円「メインの瀬川君放っておいて話に花を咲かせるってどんだけ!？」

美砂「なんか、今の瀬川君の状況を想像したら悲しくなってきたんだけど」

チャラララ〜ン、チャラララ〜ン

そんな中、誰かのメールが鳴った

「私のケータイだ」

鳴ったのは理沙のケータイであった

「ハヤ太君からだ。なにになに…“ちょっと今から手伝ってください。他に数人呼んでくださると幸いです”」

「何だ？このメール」

その頃、お見合い会場

虎鉄たちは会場の庭にいます

近衛校長「そろそろ、若い2人同士にしましょうかの」

瀬川父「そうですね、泉はこっちだ」

校長「刹那君もじゃよ。陰から見ているのじゃろ?」

刹那「……ばれていましたか」

虎鉄と木乃香がお見合いをしていた部屋を見下ろせる木の上には刹那がいた

「お嬢様、この変態に変なことされてませんよね？」

「大丈夫やて、せつちゃんも見ていたんやろ？」

「それはそうですが…」

「木乃香の言う通りじゃ、刹那君も今は見守ってあげたらどうじゃ？」

「じゃあ、瀬川君。行こっか」

「あつ、ああ。そうだな」

木乃香と虎鉄は散歩に歩き出した

「フオツフオツフオツ、それじゃあ僕たちも…」

校長は瀬川父にお茶に行こうと提案しようとしたが…

（虎鉄、絶対に決めるんだ!!!）

瀬川父は、木の陰に隠れて熱い視線を虎鉄に浴びせ、虎鉄たちを尾行しようとしていた

（……………）

虎鉄はそれに結構なプレッシャーを感じていたとか

歩き出して数分、まだ会話はゼロ

「なあ、瀬川君？」

木乃香が口を開いた

「どうしたんだ、近衛？」

「ウチといえるの退屈なん？ずっと浮かない表情しとるえ？」

「そんなことはない、こんなこと初めてだからただ緊張しているだけだ」

「そっか、ウチもなちよつと緊張してるんや」

微笑みながら木乃香は言った

!!!!

その屈託のない笑顔に虎鉄は少しだけドキツツとした

「なあ、瀬川君？」

「何だ？」

「瀬川君って好きな人とかいないん？」

「バカなことを言うな、知っているだろう。俺が好きなのは綾崎ただ一人だ!!」

彼はなんら躊躇う素振りもなく堂々と答えてのけた

「ちゃう、女の子で好きな子はおらへんのかって聞いてとるんや」
「普通はそつでしようね」

「女の子で、か……考えたこともなかったな」

「えつつつ!?!」

その言葉に木乃香は一瞬、ギョツと驚いてしまう

「瀬川君って、真性のホモ?」

「なつつつ、何言ってるんだ!?!さっきの言葉は“綾崎を好きになつてから考えたこともなかった”ということだ!?!」

「あ〜…そう…(よかつた〜)」

木乃香は内心ほつとしていているようだ。真性のホモやゲイじゃ救いようがありませんからね

「じゃあ、綾崎君を好きになる前はどんな女の子が好みやったん?」

「綾崎を好きになる前か……」

虎鉄は考え始めた。好きな異性のタイプは普通ならすぐに出てくるはずだが、ハヤテの事を考えすぎているのである。答えが出るまで少し時間がかかった

「…可愛いタイプの子が好みだったかな。あと俺は話しかけるのが苦手だから気軽に話しかけやすい子もな」
「だつたつて何で過去形なんですか」

「他には?」

「…メイド服」

「メイド!?瀬川君ってそんな趣味やったん!?!」

「な…なにを驚いている!?!綾崎を初めて見たときにメイド服を着

ていたからでだな!!」

そりゃ、メイド服が趣味だっていきなり言われたらコスプレが趣味なのかって誰だって誤解しちゃいますよ

「でも本当に瀬川君の心の中には綾崎君があるんやな。好きな女の子の話をしとるのに綾崎君の事が出てきとる」

「フッフ、そうだな。だが俺はそれを誇りに思っている」

ドガツツツ!!!

「グハツツ!!!」

カッコつけながら言った虎鉄の頭を何かが襲った

「瀬川君大丈夫!?!」

木乃香は突然何かに襲われた虎鉄を見て慌てている

「お…お父さん?」

「な…なぜかな…この手が勝手に…石を」

虎鉄を襲ったのは石だったしかも野球ボール大の大きさのある。しかもそれを投げたのは瀬川父。

「待っててな、今傷を治すから…」

木乃香は魔法のステッキを取り出して虎鉄に治癒魔法をかけた。石が直撃してできた虎鉄の傷は見る見るうちに消えていく

「これで大丈夫なはずやけど…」

「ああ、大丈夫みたいだ。すごいな、魔法の力は」
「せやる〜？でもウチもまだ修行中の身なんや」
「そうなのか、頑張れよ」

その後は自分たちの趣味や好きな音楽やTVや食べ物のお話をしたり、木乃香が虎鉄に“はどうか”などとさっきの虎鉄の好みに合うようなクラスの女の子を提案したりなどといった普通の会話をしたそんなことをしているうちに虎鉄の心情にある変化が生まれた

（女と付き合うのも悪くないのかも…）
と。

時間も40分ほど経って2人はある場所にたどり着いた

「あれは、教会やな」

「そうみたいだな。人がたくさん入って賑わってるみたいだな」

「結婚式でもやっとなるんやろうか？ウチたちも行ってみいひん？」

「ああ、別にかまわんぞ」

2人は結婚式がやっているであろうと思われる教会の中へ入っていった

「見て、ちょうど指輪交換の最中や」

「ああ、そうみたいだな…！？」

虎鉄は自分の目を疑った。なぜなら、目の前で指輪交換をしているのは…
ハヤテとナギだったのだから

その頃、理沙と美希。他にもさつきまでラウンジにいた生徒や他の生徒男女合わせて40名くらいがいる
彼らがいるのは先ほど虎鉄と木乃香がたどり着いた教会。

「なんだ、手伝いというのはエキストラになれってことだったのか」
「エキストラといってもとっても楽だな。座ってるだけでいいんだから」

「それにしてもお似合いだね〜、ハヤテ君とナギちゃん」

「ホントだよ。これが本当の結婚式にしちゃってもいいって位にね〜」

「でもこれって教会の宣伝の撮影なんだよね〜」

そう、これは教会の宣伝動画を撮影しているのである。そのためこの結婚式はハヤテとナギの本番の結婚式ではありません

「それにしてもハヤ太君とナギ君はとても輝いているな」

「まあ撮影とはいえ結婚式をするのだからな」

そんなことを知らない虎鉄は…

（な…なぜ…綾崎があのがキと！？それに…何で綾崎はウエディングドレスじゃなくてタキシードを着てるんだ！？）

完全に本当の結婚式だと誤解しています。ハヤテはまだ16歳でナギはまだ13歳ですからまだ結婚できない年齢ですのにな

プルプルプル…

虎鉄は震えている

代わりにウエディングドレスを着る

だからこのガキと結婚しないで俺とオランダで同性結婚してくれエ
エエ！！！」

ガシツツツ！！！！

虎鉄はハヤテの腕を思いつきり掴むと外へと向かって全速力で駆け
だしていった

ナギ「ハヤテーーーー！！！！」

理沙「大変だ！！新郎が連れ去られたぞ！！」

美希「ああ、変態に連れ去られた！！」

明日菜「誰か捕まえて！！」

陽菜「瀬川君、お見合い中じゃなかったの？」

横から虎鉄を止めようとして襲い掛かる者が出てきたが、彼はそれ
をうまく避けてしまい止めることが出来ない

そして虎鉄がハヤテを連れて教会を出た瞬間

「虎鉄！！！！」

グギョツツツ

「グハツツツ！！！！」

瀬川父が虎鉄の首にウエスタンリアットを仕掛けたのだ。それは
見事命中し、彼はハヤテを離して口から血を吐きながら気絶してし
まった

「すみません、すみません…」

瀬川父は虎鉄を引きずり、何度も謝りながらその場を後にしていった

その姿を見ていた木乃香、泉、刹那、校長の顔は青褪めていたとか…

ヒナギク・歩「……………出番とられた」

虎鉄はこの模擬結婚式に乱入しようとしていたヒナギクと歩の出番も奪ってしまったみたいですね。

んでもって、翌日

虎鉄「おはよう、綾崎!!」

ハヤテ「…おはようございます」

「昨日のアレ、バイトだったんだってな。俺、ホツとしたよ!!」

「そーですか、っていつか近づきすぎですよ!!」

虎鉄はいつもと変わらず、ハヤテに付きまどっていた

そして瀬川家では…

プルルルル

瀬川父「はい、瀬川です。

近衛さん!!昨日は本当に申し訳ございません…

ええ、お見合いの件は…はい…

無かったことに…はい…」

どうやら破談してしまったようです

こうして、虎鉄と木乃香のお見合いは失敗で幕を閉じたのでした

めでたくなし、めでたくなし

第三十七話・三つ子の魂百まで（後書き）

次回はねずみの嫁探しのお話です。元ネタはオオカミさんと7人の仲間たち4巻です。ただし、オオカミさんのキャラはあのネズミと執事以外、登場させません

第三十八話：人を見るときは欠点を長所に変える

ここは理事長室。

「やあ、来たみたいだね」

相変わらず、理事長はお面を被っている。今日はカトちゃんのお面だ
ここには、数名の生徒が呼び出されていた

「お呼びですか、理事長」

「おれたちに何の用だ？」

ここに呼び出されていたのはサンジに鍵、一誠といった紳士の会の
メンバーである。一体、理事長はこの変態たちに何の用があるのか
…理事長は呼び出した3人を見た後

「君たち、女の子や女性が大好きなんだよね？」

「ああ、そうとも！女の子が大好きだ」

「ハーレムを作るのが俺の夢です！！」

「俺もハーレムを作りたいんです！！」

「フッフ…アハハハハ！！」

3人の女の子大好きハーレム最高発言を聞いて理事長は大いに笑っ
ている

「…いやあ、君たちが女好きだっていうのは本当だったみたいだね
エ」

サンジ「理事長、おれたちに何の用なんだ？用がなければ帰るぞ」

「誠「もしや、俺のハーレム作りを手伝ってくれるんですか!？」
鍵「マジで!? 理事長、俺の分も手伝ってくれ!！」

「いやいや、全然違うよ。でも君たちが適任だったみたいだね」

理事長は笑いをヒクヒクと堪えながら言う

「ところで君たちは根角住宅ねすみという会社は知っているかい？」

「ええ、一応知ってますけど」

サンジ「あのネズミが出てくるCMの奴か」

「誠「その根角住宅がどうかしたんですか？」

「ああ、その根角住宅の次期当主の少年からの依頼でね、あることを手伝ってほしいっていうんだ」

「あることってというのは…?」

「ん~~~~嫁探し」

約10分後、3人は理事長室でその根角住宅の次期当主、根角忠太郎とその執事のハーメルと会い、ある場所に向かっていた

「ところで、君の依頼だけど」

「嫁探しじゃ!！」

「でも、君みたいはまだ小学生の子が嫁探しなんて早いんじゃないか？」

「それには、理由がありまして、根角家では御年十二で婚約者を決めるという決まりがあるのです」

「なるほどねえ」

「だから嫁を探しに来たのじゃ。我は今十一、早急に決めねばならぬのじゃ。来週には我の誕生日がある」

「「「なつつつ……」」」

3人は忠太郎の言葉に耳を疑った

「そ…それはまた急な話だな…」

「そんなの分かってたなら前もって相手を決めておけば良かったんじゃないかねえか？」

「そのとおりだ、君そういう相手いないの？」

鍵の問いに忠太郎は不服そうな顔をして

「いないから、こつやつて恥を忍んで頼みに来たのじゃ!!まさか、こんな変態を体現化したような奴らと肩を並べて歩くことになるとは思っておらんかったわ!!」

()()なつつつ…変態を体現化した奴らだと!?()()

忠太郎のものすごく失礼な言葉に3人は一瞬怒りを覚えたが、相手は一応大会社の次期当主である。それを飲み込んで大人の対応に努めた

「ところで、どこに向かっているのでしょうか？」

というハーメルの問題にサンジが言った

「女の子たちがたくさんいる場所だよ」

「…ここは全て共学のはずでは？」

「まあいいからついてこい」

数分間歩いて、たどり着いたのは学園の中にある広いスタジアム、イメージとしては長居スタジアムや日産スタジアムをイメージしてください

「ここに、私の嫁候補がいるというのか！？」

「まあ相性が合えばの話だがな」

サンジたち5人は観客席に入ってフィールドが見渡せる席に座った

「…それにしてもいい光景だな」

「同感だ」

「あんな水着みたいな恰好をした女子をこの目で眺めることが出来るなんて！！」

ちなみにここで何をやってるのかと言うと、二七話で明久が言っていたISの機動訓練である。今日はその適性テストで、女子生徒たちは次々と鎮座しているIS“打鉄”に手を当てていく。

ISの人気はこの学園では高いらしく、学園の女子生徒の8〜9割が来ている。

つまりこの学園の殆どの女子生徒がここにいるということである

サンジたちはISの体のラインがはつきりと出るスーツを着ている女子たちの姿が見れて満足しているようだ

「たしかに、ここには沢山の女子がいますな」

「ここで、見ているだけではつまらぬ、私もフィールドにいつて間近で嫁を探すのじゃ!!」

「坊ちやま!!」

「「「あのガキ!!」」」

忠太郎は突然走り出して、フィールドにつながる階段を駆け下りて行った。根角^{ネズミ}なだけにすばしっこい奴だと3人は思いながら、執事のハーメルとともに忠太郎を追いかけた
フィールドに降りてきた忠太郎を珍しそうな様子で女子生徒たちは見ている

「貴様ら、何をしている？」

忠太郎とそれを追いかけてきた4人に1人の女性が近づいてきた

「お…織斑先生…」

「今日も美しい…」

「だから何をしている、子供をこのような場所に連れてきて」

「それは…ですね…」

サンジたち3人は何故ここに来たのかを説明した。

「……なるほど、嫁探しか

まあいいだろう。邪魔にならないようにするのならな」

ここの現在の責任者である織斑の許可をもらい本格的に忠太郎の嫁探しが始まった。

「ところで、どんな女がいいんだ？」

「そうじゃのう…我は根角を背負って立つ人間。それをサポートできる仕事が出来そうな頭のよい嫁がよいのう、あと年上の女房は金のわらじを履いてでも探せというから年上がよいのう…」

「」「」……「」「」

少年の打算的で子供らしくない花嫁の条件に3人は啞然とした

「俺らがこいつくらい頃ってこんなだったか??」

「少なくともこんな風だった記憶はない」

「仕事が出来そうな人が…」

鍵は少し考えた後、ある2人の女子生徒を呼んだ

「…なんの用ですか？」

「私たちをいきなり呼び出して」

呼び出されたのは、喜界島もがなと吹寄制理。どちらも、見た目的にも実際に仕事のできる女性である。

「ほほう、この者たちが仕事ができるという者か…!」

呼び出されて困惑している2人をジロジロと忠太郎は見る

「実は……」

そんな2人にサンジは何故ここに来ているか、このガキが誰なのかを簡単に説明した

制理「この子供の嫁探しね」

もがな「…根角住宅か（大企業だよね、立候補してみようかしら¥）」

もがなの目が¥マークに一瞬なつたことは誰も気づかなかつたとか

「ほほう、確かにこの人たちは仕事ができるみたいですね」

ハーメルは何かのファイルを見ながら言った

「あの…そのファイルは一体…？」

「あなた方の理事長から女子生徒の情報を買っていたのです」

理事長外道ですね、それまでして成功させたいというのでしょうか

「なるほど、このお二方、仕事がよくでき頭もよく美しい。いわゆるできる女とはこのお二方のような女性をいうのでありましような」
ファイルの情報を見ながらもがなと制理を褒めまくる。

「…ありがとうございます」

そんなストレートな褒め言葉に2人は困惑しながらもお礼を言った

「2人とも生徒会に所属していたり、クラスの副学級長をしているようですし仕事も完璧。将来大多数の人間を導けるリーダー力も期待できるでしょう。また坊ちゃんまのサポートも可能なはずですよ」

それを聞いた忠太郎は、2人の手を取り求婚をしはじめた

「お主ら、我が嫁になってくれぬか!？」

厚かましいというか、身の程知らずというか、女性2人に同時に求婚するなんてどういう神経してるんだと様子を見ていたサンジたちは思った

「しかし!?!」

執事のハーメルは大声で叫んだ

「誠「どうしたんだ?」

「彼女たちを秘書にするのならいいのでしょう。ですが嫁にするのなら話は別です。真面目な方の方のようですからいろいろと管理されて気苦労の絶えない事になるでしょう。将来はヒステリーばあ間違いなしで、どこで買ったんだと聞きたくなるような三角眼鏡をかけて何々ザマスという語尾をつけるようになってPTA会長で教師に文句を言いに行くモンスターペアレントの典型になること間違いありません!?!」

「なに、PTA会長のモンスターペアレントの典型じゃと!?!?嫌じゃ!?!あとザマスも嫌じゃ!?!」

「そうでございましょう、そうでございましょう!?!」
一転してもがなと制理はこき下ろされた。もちろんこの暴言は2人にはばつちりと聞こえていて2人はプルプルと震えている。いきなり呼び出された結果これですよ。もう殴っても問題ないはずですよ

「ヒィ!」

2人から漂い始めたドス黒オーラに鍵は悲鳴を漏らした

「ちよつ、誰かヘルプミー、この二人を落ち着かせて!!」
サンジの助けを求める声にめだかと秋沙がやってきてもがなと制理は2人に宥められながら退場していった

「余計なお世話よ!!何がモンスターペアレントPTA会長よ!
!ザマスって何よ!!キイイイーーーーー!!!!!!」

「ほら、私の言った通りでございましょう、もうヒステリーになっています」

「そのようじゃな、選ばなくて正解じゃった!仕事のできる女は無
しじゃ」

退場させられながらも言った2人の叫びにハーメルは昂然とした様子
子でいて忠太郎も納得しているようだ。ドス黒オーラを身にまとっ
ていたのを見たというのに彼らは涼しい顔をしています。 図太すぎ
です

()()お前らが悪いんだろうが!!!()()

ごもつともな考えを3人は心の中で思うだけにしておいた

「.....」

「?」

サンジは何かの視線を感じて後ろを振り返った

「どうしたんですか、先輩?」

「いや、何か座敷童みたいな女の子がこっちを見ている気がしてな」

「座敷童？」

「ああ、おかつぱに着物を着たな」

一誠と鍵も振り向いてみたがそこに着物を着た女の子は居なかった

「ところで、次の条件じゃが…」

忠太郎はさっきのようなことがあったにも拘らず、まだ花嫁探しを
続けようとしている

「仕事のできる女性がダメなら、家庭的な女性がいいの。家事万能
で家庭を守ってくれそうな」

「家庭的な女性ね…」

そして、彼らが思いついて呼びされたのは…

「何の用ですか？」

芙蓉楓と、白雪であった。

ちなみにこの2人を呼んだ理由として2人が稟やキンジに毎日猛ア
ピールしているのが羨ましくて仲を引き裂けないかと考えて呼んだ
のは3人だけの内緒である

「実は…というわけで」

「あの〜、私には稟君がいるんですけど…」

「私にもキンちゃんがいるからそのお願いは無理…」

「ふん、そんなもの私の魅力でそ奴らに興味をなくしてくれる！」

楓と白雪の無理だという言葉にせずに堂々と言ったのける

サンジ「……その自信どつからでてくるんだらうな」

一誠「俺もほしいよ、そういう自信」

ハーメル「この情報によると、芙蓉楓様と星伽白雪様。家事万能で奥ゆかしく夫の3歩後ろを歩くような古き良き日本の女性といったところ。それに今の発言でも分かる通り一途である」

「なるほど！！」

「彼女たちのような人を娶ることが出来れば、家をしっかりと守ってくれて後顧の憂いなく仕事に打ち込めることでしょう」

「それはすばらしい！！ぜひとも私の嫁に！！」

ガシツツと楓と白雪の手を握りまたもや2人同時に求婚する忠太郎ですが、またもやハーメルが入り込んでくる

「しかし、しかしです！！一途さも度が過ぎるとただの重い女です。いわゆる地雷女というやつですな。彼女になつたわけでもないのに恰も自分が彼女だと言い張って彼氏や周りの迷惑を考えなかったり、ストーキングした挙句にバレンタインに手編みのセーターを送ってしまうタイプですよ」

「……それは、キツイのう。周りの迷惑も考えられぬとは。手編みのセーターもキツイ」

2人の会話に楓と白雪はショックを受け始める。どうやら思い当たる節があるのか

「重い……地雷女……稟くん迷惑……」

「キンちゃんに迷惑かけてたの…私…？」

2人の目には次第に涙がたまっていき…

「「うっ…うわ…うわ…うわ…んん！！」」
泣きながら走り去っていった

「…今度、あの二人に謝っておこう」

「そうだな、土見や遠山にも彼女たちを慰めておくように言っておくか」

「ああ」

はああ、とため息をつきこんなこと止めたいと思い始めた3人だったが、

「さて次はどのような女性がいいですか坊ちゃま」

「うむ、次はのう」

どうやら止める気配もないようだ

その後も続く忠太郎とハーメルは無双状態

「笑顔の可愛い女性がいい！！」

と言っもんだから、まき絵、瀬川泉、悠木かなで、くりむ、鈴々、ユイ、本音を連れてきてみれば

「彼女たちの明るい笑顔はバカがそのまま顔に出ている単純すぎる物。笑ってりゃあいいと思っっている思考回路の少ない女です」

と言っ彼女たちをシヨックにさせてユイは発狂して大暴れするし

「話していて楽しくなれる女性がいい」

と言っもんだから、咲夜、桜子を連れてきてみれば

「毎日朝から晩まで話しては気の休まる時間がありません。疲れの取れない家庭なんておかしいでしょう」
と言って否定するし

「なら、寡黙な女性がいい」

と言うもんだから、伊澄、レキ、百野栞、秋沙を連れてきてみれば
「夫婦で会話なくてどうするんですか。鬱になります」
と言って否定するし

「スポーツのできる女性がいい」

と言うもんだから、明日菜、美波、裕奈、歩美、スバルを連れてきてみれば

「彼女たちはきつと脳みそまでも筋肉でできています」
と言って否定してサンジたちは5人に殴られて

「大人っぽい女性がいい」

と言うもんだから、朱湊、那波千鶴、紅葉知弦、妙、朱乃を連れてきてみれば

「大人っぽいというよりオバサンじゃないですか。今の歳でこんなに老けていたら30、40年後はどうなっているんだ」

と言って、サンジたちは5人にどこかに連れて行かれて尻に何十回もネギを刺されて…

等々…

と100人以上紹介してみたが何でもかんでも否定されて一向に花嫁候補が見つかる気配はない

「……童貞よりも先に処女を奪われちゃった…長ネギに…ぐすつ」

あと、3人は泣いていました

ちなみにサンジや忠太郎たちの周りでは制理や白雪、明日菜、咲夜などといったハーメルにさんざん否定された女たちの姿があった。きつとどんな女がこの執事とガキの眼鏡にかなうのだろうか見ようとしているのであろう。その気持ちはサンジたちにもあった

「さて次は…」

「お待ちください、お坊ちやま」

次の条件を言おうとしたところでハーメルが止めた

「僭越ながらわたくしめが意見を申し上げてよろしいでしょうか」

「聞こう。お前は嫁に何が必要だというのじゃ？」

「このような話をご存知ですか？」

“ある男が3人の女性の中から結婚相手を選ぶとした。男は女性たちに同額のお金を与え使い方を見て選ぶことにしたのだ。一人はそのお金で宝石や洋服を買い自分を着飾るために使った。別の一人はそのお金で男のほしいものを買ってプレゼントした。また別の一人はそのお金を投資して増やした”

そして男は考えた末… “ ”

「考えたすえ…??？」

「 “ ” 考えた末に…???’’ “ ” “ ”

答えを溜めるハーメル、忠太郎やサンジたちをはじめ周りの者たちは息をのむ。

「そして…」

「『『『そして…』』』」

「3人の中で一番おっぱいの大きな女性と結婚したのです!」

ずててーっ、と思わずっこける一同。その動きは目を見張るほど統一されたものであった。

「けつきよくそれかよ…」

普段はオツパイ星人でこういう話題が大好きな一誠も今日ばかりは呆れている

「なるほど!おっぱいか!」

「そうです!おっぱいです!男はみんなおっぱいが好きなのです!あなたわわにみのったおっぱいには夢と浪漫が詰まっているのです!」

「おい、そこのお前!はやくおっぱいの大きいおなごを紹介してくれ!」

11歳のガキがとんでもないことを言っています

「サンジさま、心当たりはありませんでしょうか?」

「はいはい、おっぱいの大きな女の子…」

数分後、サンジが連れてきたのは、リアス、ナミ、美偉、箒、セシリアだった

「どうしたのよ、サンジ君?」

「いやあ、嫁探しをしていて…」

「嫁探しってこの子の？」

「はい、色々悩んだ拳句部長たちが一番いいという結果になったんです」

「へえ、私たちが理想の女ね」

「なるほど、そんなに私たちがいいのか」

「美しさって罪ですわね」

自分たちが理想の女性像だと言われて嬉しいのか、彼女たちは胸を張ってとても誇らしげだ。今、ISの専用スーツを着ているため体のライン、特に胸の大きさもはつきりとわかるため執事とガキはおうと声を漏らす

「すばらしいの！！おつきなおっぱいと言つものは！！」

「そつでございませすそつでございませす！！理屈などすべて吹き飛んでしまつほどに！！」

だが、後ろにいる今までにダメだしされ続けてきた女たちは目が怖くジツと睨みつけている。無理もありませんよね、巨乳が一番いいなんてことになったんですから

「うむお主らよ、ぜひ我らの嫁に！！」

と忠太郎が言おうとしたところでまたもやハーメルが止めた。

「確かにおっぱいは素晴らしいもの。しかし巨乳には一つ問題があります」

「なんじゃそれは！？」

「なぜならばこの世には重力と言つものがあるのです！！」

くっ…と心底悔しそつに絶望を顔に張り付けてハーメルは言った

「あの見事なおっぱいも時が過ぎれば重力に耐えられなくなりどん
どんダルダルに垂れていき、あの美しさ、あの張りも無くなってし
まうのでございます」

「それは、もつたいのないのう。気持ちも悪いし」

「はい、もつたいのうございます」

もつたいない、それは日本が世界に…いや全宇宙に誇れる言葉

ナミ「はあ！？そんなことあるわけないでしょ！！」

リアス「気持ち悪い？この胸が気持ち悪くなるっていうの！？」

セシリア「私が重力ごときに負けるはずがありませんわ！！」

ガキと執事のバカ主従の暴言に彼女たちは何度も胸を揺らしながら
抗議をする

鈴音「あらあら、大変じゃない。箒にセシリア」

ラウラ「まったくだ。同情するよ2人とも」

小猫「部長にも同情します」

そんな中現れたのは鈴音やラウラ、小猫、美琴に黒子といった胸が
小さい者たち

箒「なつ、鈴はともかくラウラまでそんなことを言うのか！？」

貧乳たちの下剋上を喰らって5人は狼狽している

「ふっふっふっ、負け惜しみなんて見苦しいわよ、御坂さんに白井
さん」

巨乳の5人は強がってみせるが、身体がプルプルと震えている

美琴「頑張ってください、固法先輩ならあと10年は大丈夫ですから」

それは暗にそれ以降は知らねえけどなという言葉が隠されているの
でしょうね

「頑張ってくださいの、私も応援していますわ」
ガンバツとガツポーズで励ます黒子

励ましている鈴音や小猫、黒子の顔は本当に心配そうな本当に励ます
顔で励ましている

だからこそ、5人は心に大ダメージを受けた

「ふざけないで！！そんなことあるわけないわ！！そんなわけ
……」

貧乳の皆様止めを刺されてしまった5人は蹲ってブツブツ言い始
めてしまいました

一夏「おい、なんだよ鈴」

鈴音「いいからアンタも箒とセシリアを慰めてやりなさいよ」

ラウラ「お前から慰めてやるのが彼女たちにとって一番だと思っぞ」

一誠「なっ、どうしたんだ小猫ちゃん！？いきなり俺の腕をつかんで」

小猫「イツセー先輩も部長にやさしい言葉をかけてあげてください」

彼女たちは自分たちだけで哀れもつとするだけではなく一誠やはた
から見っていた一誠までも巻き込んで哀れさせてさらに大ダメージを
与えようとしているようだ

いや〜醜いですね〜

「誠」うづうづう~~~~アアアアア~~~~俺はいつたいどうすればいいんだアアアアッア!!!!!!」

慰めるか否か本気で悩んでいる一誠をしり目にハーメルの言葉は続いた

「ですが、重力に打ち勝つ胸がるのです。あちらをご覧ください」

ハーメルが視線を向けたのは美琴や鈴音だった

「……ふむう」

「何よ？」

「ちよつと、そんなにじろじろ見ないでくれる？」

忠太郎の胸を見る熱い視線に思わず彼女たちは胸をガードしてしまう

「重力に打ち勝つ胸、それは貧乳でございます!!垂れるものがないければ重力などおそるに足らず!!」

そしてハーメルはバアアアアン!!と美琴たちの胸を指差した

「その姿威風堂々!そびえたつ凹凸のないそのシルエットはどんな風にも揺るがない壁のごとく!!そう、貧乳とはどんな環境にも強い耐性を発揮し、経年劣化が最低限に抑えられ、スタイルを維持し続けていれば年をとっても変わらないのです!!」

「なるほど!!あの乳は重力どころか雨にも風にも雪にも夏の暑さにも負けることはなさそうじゃな!!」

ハーメルの言葉に忠太郎は心底納得し、

「~~~~ぶつ殺す!!!!」

鉄壁の胸を持つ鈴音や美琴たちは一瞬にしてぶち切れた

一夏「おい、鈴やめろ!!」

「煩いわね、私はこの二人を殺さないと気が済まないのよ!!」

「お姉様も落ち着いて!!」

「これで落ち着いていられますかってのよ!!」

一誠「ゲフウウ…小猫ちゃん、何で俺を殴るの?」

「私のはらわたが煮えくり返っているからです。それ以外に説明のしようがありません」

何度もその容姿からは想像できないような怪力で小猫から殴られる

一誠

「なあじいよ、同じ貧乳としてもどのようなおなごを選ぶのがよいのかのう?」

「一般論ですが、どうせなら若い方を選ぶのがいいのでしょうか」
「なら、そちらのおなごか?」

忠太郎は黒子に近づいていき…

「へっ?私ですの??」

「お主、我の嫁に…」

と言おうとしたところでまた止める

「いいえ、ダメです。彼女は見た目は若くとも実年齢はいつてます。賞味期限切れですな」

「!!!!!!FUCKYOU!!!! SON OF A BITCH

H!!!!」

黒子はハーメル言葉にキレてとんでもないことを言い出した

皆さんはこのような言葉を人に、特に外国人に向けて言うては駄目ですからね、絶対ですよ！！

「てめえら、ふざけてんじゃねえぞ！！」

「いい加減にしなさいよね！！」

「さつきから好き勝手言いやがって！！」

後ろで様子を見ていた者たちもこれでついにキレたのかハーメルや忠太郎に物申そうと言い寄ってくる

サンジ「痛い！！止めるオオオ！！」

鍵「危険だ、お前らも見えてないで止めてくれエエ！！」

鍵は観客席で様子を見ていたに助けを求める

そして助けに入っていく勇者たちであるが怒り狂ったモンスターと化した女たちにスタボロにやられてしまう

それを見ながらも全く動じていないハーメル。ハヤテといい虎鉄といい、執事つてすごい職業ですよ

「坊ちやま、このように嫁にするには様々な条件があります

ですが、どんな大富豪や権力者でも後から手に入れようとしても絶対に手に入れることが出来ない条件があります」

「????なんじゃ、それは??？」

「それは、幼馴染でございます」

はっつっ！！と、忠太郎は何か気づいたようだ

「坊ちやま、そもそも嫁探しをしようと思ったのは何故でしたか？」
「…それは、家のしきたりで…」
「そうではありません。あの方のためでしょう」

ハーマルはある一点を見つめていた。忠太郎もハーマルの視線の方を向く。

そこには、さつきサンジが一瞬だけ見つけた。座敷童のような女の子がいた

「初華!!」

「忠ちゃん!!」

初華と呼ばれた女の子は忠太郎のもとへと駆け寄ると、ギョツツと彼に抱きついた。その目には涙が

「何故泣いておる!？」

「忠ちゃん、何で…なんで私と結婚するのが嫌なの!？」

涙を流す少女を見てハーマルはもう一度忠太郎に聞いた。

「坊ちやま、もう一度お尋ねします。なぜここに来て急に花嫁探しをするとおっしゃったのですか？」

「…初華には好きな男があると風のうわさで聞いたから、だけど我と婚約してしまうとその思いを踏みにじってしまうことになるから…」

「そんなの必要ない!!だって、私が好きなのは忠ちゃんなんだもん!!」

「!!」

「私は忠ちゃんのお嫁さんになれるって聞いて本当にうれしかった

「！！たとえ親同士が決めたことでも忠ちゃんの方が好きだったから！！」
でも忠ちゃん、婚約の話聞いてから嫁探し始めて…私のこと嫌いになったの！？大きくなったら私をお嫁さんにしてくれるって言葉は嘘だったの！？」

少女の激しく気のこもった言葉を受けた少年はしばらく熟考したのち…

「そんなことはない、そんなことはないぞ。我もお前の事が…」
「忠ちゃん…」

そして少女と少年はお互いを強く抱きしめあつた

「坊ちやまの間違ひは、人のうわさに流され初華様の意思を確認なさらなかったことです」

「うん…」
「始めから嫁など探す必要などなかったことです。掛け替えない宝は坊ちやまのすぐそばにあつたのですから…」

すれ違って遠回りをして、ようやく思いを交わすことのできた2人は手に入れた大切な宝を離さないというほどに強く抱きしめあつていた

「……な……………」

まさかの急展開に周りにいた者たちは口をあぐりと開けて唯々2人を見ていた

「少年と少女はお互いを思い合っていた。だけど相手を思うが故にすれ違ってしまった」

突然、彼らの後ろからする声に振り返ってみる

「……理事長……」「……」

そう、理事長であった

「家同士で決めた婚約、政略結婚と言えば聞こえは悪いけど、お互いを思う気持ちがあればそこら辺の出会いとなんら変わらない。そう思わないかい？」

「そうですね……でも、何で理事長がここに？」

「あの子、初華ちゃんをここまで連れてきたんだよ」

「ということとは、これは理事長とあの執事の計画通りだったってことか？」

「あつ、バレちゃった？ハッハッ」

特徴のある鳩時計のようなソプラノ声で笑う理事長

「近づきすぎて気が付きにくいものだけれど幸せは何気ない日常にあるもの……本当に大切なものはすぐそばにあるという事だね」

そして、仲良く手をつないで歩いていく少年と少女の姿をじっと見つめる

彼らは遠回りをしながらも大切なものと巡り合えた。たとえこれからどんなに困難なことがあっても道を誤ったとしても彼らは問題ないだろう。だって大切な人が傍にいるのだから……

めでたしめでたし…

「……な……んて、ハッピーエンドで終わってもいいと思ってるわけエエエ?????」「」「」

せつかくいい雰囲気が終わろうとしていたのに、大勢の音がそれを止めた。その主はもちろん、女子生徒の皆さんである

少年に大切なものを気づかせる為の犠牲となった皆さん、その引き換えに彼女たちのプライドはスタボロです

「君たちの尊い犠牲のおかげである少年たちは大切なものに気づいたわけだよ？いい仕事をしたと思わないかい!?」

「……アアン!!??」「」「」

もう口調がヤクザっぽくなってます、しかも鬼の形相で。周りにいたサンジたちや一夏はブルブルと震えています

「ハツハツ……いや~~~~」

笑ってごまかそうとしたがその形相に恐怖を感じたのか自慢のソプラノ鳩時計笑いも止まってしまった

「…君たちにもお世話になったことだし、何か好きなものを買ってあげるよ。ねえ?」

その瞬間、女子生徒たちの目が光ったのをサンジたちは見逃さなかった。

後に情報部の取材に1年I・Oはこう答えたという

“アレは人間の目じゃない、肉食獣の目だった。下手していたら俺も食われていたかもしれぬ”と…

その後、数千万円あったと言われていた理事長の銀行口座の一つの残高が一夜にして0になったとか…

そして今度こそ、彼女たちの傷ついた乙女心は買い物によって癒され、このお話で不幸になったのは預金が空っぽになった理事長だけだったという

めでたしめでたし

第三十九話：もうなにもこわくない（前書き）

今回はダークカブトさんのご希望にお答えして“フルメタパニック
ふもっふ”最終話のパロディをお送りいたします。

人気投票の結果は作中の文化祭4日目の大イベントに関係します。
つまり、得票数が多ければ多いほど文化祭4日目の出番が増える
という事です

第三十九話：もうなにもこわくない

駅前大通りのとある居酒屋

「う…ウソだろ…何で俺が…」

パライイン!!!

銀時は手に持っていたグラスを落とし、その場に倒れてしまった

雪路「銀さん!？」

薫京ノ介「銀さん、どうしたんだよオイ!？」

小萌「坂田先生すっかりしてなのです!?!」

織斑「おい、坂田先生!？」

翌日 2 - Aの教室 HR前

「……………」

そこには教壇の上に置いてある写真に向かって手を合わせる雪路の姿が。

その写真には銀時の胸から上の肖像が写っていた。写真の前には花束が供えられている

ドドドドドドド…

「桂先生!?!」(ユキちゃん!?!)「「「「

2Aの生徒他にも2BC、1AB、3ABの生徒合わせて約100

名近くが教室に入ってくる

明久「本当なんですか…？」

「ええ…」

美波「何で、どうして銀さんが!？」

歩「昨日まであんなに元気だったのに…」

新八「苦しんだんですか？」

「ええ、とても苦しんでいたわ」

ハヤテ「ひどい…できるなら変わってあげたいです!!」

咲夜「何でこんな目に銀さんが遭わなくちゃならないんや!!」
当麻「俺許せねえ。銀さんをこんな目に遭わせたのを!」

雄二「俺もだ…」

「でも、今はもう安らかに眠っているわ。今は私たちに出来ることをしましょ…」

おつう「そうですね…グスツツ」

木乃香「銀さんなら生まれ変わっても銀さんのままだよね…グスツツ」

刹那「ええ、空から私たちの事を見守ってくれてるはずですよ」
涙目になりながら言う

楯無「銀さんなら、大きな星になってるはずよ」

秀吉「そしていつまでもワシたちの事を見守ってくれてるんじゃない」

「みんな…手を合わせてあげて…」

「…ハイ…」

雪路の言う通り、彼らは4列ずつに並び写真に向かって順に手を合わせていった

銀時は、あれでも生徒のみんなから信頼されていたんですね

「ところで、いつ退院アルか？」

居候ではあるが一緒に住み、本来なら一番悲しむであろう神楽がコンビニのコツペパンを頬張りながら言った

「今日の昼には退院するって」

「…へっ！？退院！？」

銀時が亡くなったと思っていた彼らにとっては予想外の言葉であった

瑞希「ちょっと待って下さい、銀さんは亡くなったんじゃないんですか？」

「そんなことあるわけないわよ。尿管結石よ、尿管結石。昨日居酒屋で飲んでたら急に激痛が襲ってそのまま救急車で運ばれたのよ」

明日菜「尿管結石って…」

ヒナギク「尿路に結晶が出来てしまっつていうアレよね」

朱湊「原因はビール等のアルコールの大量摂取や塩分と砂糖と脂肪分の取りすぎじゃなかったっけ？」

「そうそう、つい1週間前に酒と揚げ物とスイーツのおいしい食べ放題・飲み放題の居酒屋が出来たから先生たちで5日連続で行っちゃったのが原因かな」。銀さんビールやフライドチキンに特盛パ

フエたくさん食べてたし」

アルコールの中でもビールが一番尿管結石に悪いらしいですね。ちなみに入院が半日だけで大丈夫なのかと思う方もいるかもしれませんが、最近では医療技術の進歩のおかげで結石も通院での治療も可能みたいですね。まあ詳しくは調べてみてください

「「「それ、自己責任じゃねえかアアア!!!」「」」

というわけで、銀時は尿管結石で昼過ぎまで入院。自業自得な銀時のいない2Aの物語の始まりです。

「でも結石なだけに欠席か」

誰かがダジャレを言った気がしますが、それは華麗にスルーさせていただきます

時間が流れて昼休みの終わり

生徒たちは会話をしたり、次の授業の準備をしたり、ゲームをしたり、教壇の上に置いてあった銀時の写真に落書きをしたりと思いの時間の過ごし方

「銀時はいるかアア!?!」

そんな中、一人の男が大声で叫びながら入ってきた

「あつ、ツラさん」

「ツラさん、こんにちは〜」

「ツラさん、今日は何しに来たんですか？攘夷活動はいいんですか？」

「ツラじゃない桂だ。何度言えばわかる」

どうやら入ってきたのは桂のようだ。隣にはエリザベスもいる

楯無「だって、このクラスにはヒナちゃんがいるし」

鍵「俺ら男子生徒の殆どが彼女の事を桂さんって呼んでいるからややこしくなるって」

「むう…なら桂ヒナギク！」

「…なんですか？」

「お前は今からハゲ鬘ヒナギクに改名しろ！！そしてあだ名はハゲツラだ！」

ビシィ！！とヒナギクを指差しながら桂は言い放った

「嫌です」

「なら、あだ名を風紀委員ツーラに…」

「痛い目に遭いたいんですか？」

ヒナギクは笑顔のまま、白桜を桂に向けた。

「ツラさん、今日は何でここに来たんですか！？」

ヒナギクの危険なドス黒オーラを感じ取ったのか、ハヤテが話をそらそうとする

「今日は銀時に会いに来たのだ。銀時はおらんのか？」

神楽「銀ちゃんなら、結石で入院中ネ」

エリザベス『結石で欠席』

明日菜「そうそう、私も思った。みんなこれ聞くと最初にこう思っ
ちやうみみたいだね」

歩「銀さん、これ狙ってんのかな？」

アハハハハハハ…とクラス中で起こる笑い声、当の本人は激痛でた
だ事ではないのにな

「まったく情けない…俺がせっかく面白いものを持ってきたとい
うのに」

ハヤテ「面白いものですか？」

「だが、ここに今あるコレは別だがな。間違つて配送されたらしい」
桂は何かポットののようなものを出してそれを持ちながら言った

ナギ「何を持って来ようとしたんだ？」

「“全自動バナナの皮散布機”だ」

咲夜「…なんやねんな、それ」

「ここにはないがその機械にバナナの皮を入れるとだな、その機械
が部屋の状態を瞬時に分析しその部屋の中で人間が一番通ると思わ
れるであろうルートの上上にバナナの皮を散布するのだ

我々は今度これを使い、総理大臣を始めとする政治家がバナナの皮
で転ぶ姿を動画に撮りニコニコやyou tubeに投稿しようと
思う」

新八「…なにやろうとしてんですか。攘夷活動しなくていいんですか？」

「何を言う、これも立派な攘夷活動の一つだ。映像を動画投稿サイトに投稿することによって彼らの支持率を大幅に下げなのだ。フハハハハ！！！」

自分の見事だと思っっている作戦に酔っっているのか桂は高笑いをした。そんな彼を見て生徒たちはもっと他に方法はないのかとか、何歳児の発想だよとかを心の中で思っていた

新八「じゃあとこでそのポットは何なんですか？」

歩「見た感じ結構頑丈そうだけど」

「当たり前だ、ちょっとやそつとのことでは壊れては困るからな」

ナギ「で、何が入ってるんだ？」

「それはだな…」

桂が机の上に置いたポットの中身を言おうとしたその時、

「いたいた、桂ア。まさかこんなところにいたとはなア」

総悟が現れた。右手にはバズーカ砲を持ち、桂を狙っている

「死ねエエ！！」

そして何の兆候もなくバズーカを桂に撃ちつけたのだ

「フハハハ、そんなものが当たるかアア」

桂は砲弾を右に軽く避けてしまった。しかし…

パアアアアン！！！！

砲弾は机の上に置いてあった桂の持つてきたポットに当たり、ポットは中身ごと破裂してしまった

『桂さん!!!!!!!!!!』

「なっつ……」

桂は驚いているのか、凍りついたように破裂したポットを見ていた。ポットからは中身の抹茶よりも濃い緑色をした液体が流れ出ていた

愛子「どうしたの……?」

千世「ものすごい爆発音がしたけど」

爆発音を聞いてか、ほかのクラスの生徒たちも集まってきた

秀吉「その水筒の中身ってなんだったのじゃ?」

ハヤテ「高級なお茶とかですかね……?」

美波「見た目的にジューズもあり得そうだけど」

麻弓「ツラさん、自分がせっかく飲もうって思ってたのに水筒が壊れてこぼれちゃってシヨック受けてんのかな?」

稟「たぶんそうじゃないか?」

「……………」

だが、桂は未だに凍ったように動かない。

「桂ア、今日こそ風紀委員の名に懸けて、てめエをブタ箱に……」

総悟は桂の腕をつかみ外へ連れて行くこうとするが、

バツツツ

「桂、何しやがる?」

桂は総悟の手を振りほどくと、

「エリザベス、手伝ってくれるか?」

『了解』

桂とエリザベスは零れた液体を雑巾で拭きとり、その雑巾をビニールに入れ、窓や扉にガムテープを張る

「ねえ、ヅラさん。何してるの?」

だが彼女の言葉に何も言わずに桂は作業を続ける

「おい、桂。何やって…」

実乃梨「ヅラさん、このままじゃ私たち外に出られないんだけど」

川嶋亜美「あとちょっとで5時間目が始まるのよ!? 遅刻しちゃうじゃない」

全ての作業を終えて、桂は教壇の上に立った

落書きをされ尽くした銀時の写真を黒板にどけて壊れたポットと雑巾の入ったビニール袋を机の上に置いた

「諸君、今日の5時間目の授業は急遽、中止させてもらうことにした」

優子「ハア!？」

黒子「何てこと言ってますの!？」

明久「授業がなくなるのはうれしいけど」

桂の言葉にザワザワし始めるが、桂はそれを無視して話し続ける

「この教室内で重大な災害が発生した。
某国の研究所で試作された細菌兵器が専用カプセルから漏洩した」

あやか「細菌兵器…ですか？」

「ああ、最先端のバイオテクノロジーが生み出した非常に危険なバクテリアだ。貪欲にして獰猛、人体に空気感染したら獲物を喰らい尽くすまで決して活動をやめない…マニュアルにはそう書いてある」

「それが…この教室に…？」

「ああ」

「感染してるんですか？私たち…」

「おそらく、残念だがな」

イヤアアアアアアアアア！！！！

あやかの悲鳴と共に、教室中は大騒ぎとなる

「落ち着くんだ、騒いでも事態は解決しない」

明日菜「落ち着ける訳ないでしょ！？」

「第一何でこんなもの持ってきたのよ！？」

美琴「そうよ、死んじゃうんでしょ！！」

当麻「そんな野蛮なもの持ってきてんじゃねえよ！！」

「…さつきヅラがそのガムテープをしたり、教室から出るなど言ったのは空気の汚染が広がるのを心配したから」
雄二「確かに…このまま出て行ったら学校中が細菌兵器で汚染になる」

新八「そうなんですか、エリザベスさん」

『その通り』

リンチを受けて気絶をしている桂の代わりにエリザベスが答えた

「でも、私たちにどこも異常は…」

瑞希「細菌兵器の特徴は発症までに潜伏期間があるって聞いたことがあります」

夕映「インフルエンザでも2日間くらい潜伏するっていうですし」
希「エボラや天然痘なら一週間近くは潜伏するって」

神楽「インフルエンザならまだしも、エボラや天然痘だったら危険すぎるネ」

深夏「どっちも致死率は50パーセントやそれ以上なんだよな」

新八「もしそれだとしたら、僕たち只じゃ済まされないだろうね」
東宮「バ…バカな」

大河「私、死にたくない!!」

話をしているうちに怖くなった生徒たちは一目散に教室を出ようとした

ガムテープが張られて動かなくなっているのも忘れ、何度も開けようと試みているが空かない。それほど混乱しているのであろう

「…みんな落ち着いて、待って!!」

「やめるんだ、話を聞いてなかったのか!!」

「外に出たら他の人も感染しちゃうわ!!」

ギヤアギヤアギヤア

学級長と副学級長の翔子と智代、ヒナギクが止めようとするが彼らは耳を傾けるそぶりを全く見せず、いち早くここから脱出することしか考えていないようだ

「いい加減にしなさい!!!!」

キユウウウイイイイ!!

ヒナギクは耳栓をして（智代と翔子も）、爪を黒板に当てるとそれを強く引つ掻いた。高音が教室中に響き渡る

イヤアアア!!

高音が耳に響いたのか、いち早く教室から出ようとしていた者たちはその場につづくまった

「もう一度言うわ、見苦しい真似はやめなさい!被害が広がるだけなんだから!」

「考えてみる、この災害を後の歴史がどう判断するかを、被害を広めた私たちを世間や歴史はなんとするかを!!」

ヒナギクと智代の話聞いて反省しているのであろう。生徒たちは下を向きつつむく

翔子「…怖いのは私たちも一緒。まだやり残したこともやりたいこともたくさんある」

智代「ああ、だけど私たちはもうすぐで死ぬかもしれない。その現実を私たちは受け入れることが大事なんじゃないか？」
ヒナギク「そう、そして今自分に何ができるのかを考えるのよ」

雄二「その…通りだな」

ひかり「もう、みつともない真似はやめましょう」

瑞希「こうやって喚いていても何も変わりはないんですから」

鍵「死ぬのは怖い、だけどみんながいる」

マジョーリカ「最後の悲しみと苦しみを分かち合える仲間がいれば怖くなんかないヨ」

もう、なにもこわくない。

荒れに荒れた教室が初めて一体になった瞬間だった

教室にいるのは桂やエリザベス、他クラスを含め約60名
しかし、不幸なことに治癒魔法の得意なシア、木乃香、アーシア等は教室にはいない

果たして彼らは助かるのか！？
次回に続く！！

第三十九話：もうなにもこわくない（後書き）

次回、謎の細菌はたぶん完結。

その次のお話はNHKの“サラリーマンNEO”や、知らない方が大多数だと思いますが“V6病棟”のパロディをやるうかと思いません。

今回のお話の最初の1000文字はとある番組のパロディなのですから分かる人いましたかね？

答えは次話で発表しようと思います

あと、今回は希望がありパロディをやらせていただきましたが、今回以降はそのような申し入れをしても、それを書くことは無いと思います。ご了承ください

第四十話：人はいつ死ぬか分からないからこそ一生懸命生きている（前書き）

前話の最初の約1000文字が何の番組のパロだったかということ、
ドラマ“BOSS”第2シーズン4話でした。

第四十話：人はいつ死ぬか分からないからこそ一生懸命生きている

前話のおさらい

銀時が尿管結石で入院して、桂が謎の細菌兵器を2-Aに持ち込みそれが破裂し2-Aが細菌の汚染地域になってしまった。

恐怖に怯える中、彼らが導き出した答えは“みんながいるからもうなにもこわくない”だった

グスツツ…ウウツツ…

もう何も怖くないと思おうと強く胸に誓った一同であったが、目に零れるものがあつた

やはり恐怖から来るものか、それともとても強い友情・団結を感じ感動しているのか。

「お主ら、そこで何をしている？」

リンチにされて気絶していた桂がようやく起きて、泣き合っている生徒たちに聞いた

美琴「煩いわね、私たちは人間の良心を噛み締めているんです」

黒子「ツラさんはそっちで死んでくださいですの」

「そもいかん、まだワクチンの話をしていないからな」

新八「ワクチンですか？」

「細菌兵器のワクチンだ、非常時のために添付してあつた」

桂は何か液体の入った注射器のような入れ物を取り出した

「ほら、この通り。たった一人分だがな」

たった一人分…その言葉がクラスを変えた

ザワ…ザワ…ザワ…

まるであのカイジを彷彿とさせるようなオーラが教室中に巻き起る。人間の良心なんて何処へやらと言った感じだ
疑心暗鬼、一言でいうのならそれが当てはまる
それぞれ一定の距離を離れて何かブツブツと言っているのがやっと
聞こえる

キラアアアーン

彼らの目が桂の持つワクチンに集まる

「どうしたんだ？」

「……あなたって人は！！！」

「本当に物事をややこしくする天才ですよね…」

ヒイ…ヒイ…ザワ…ザワ…

「……バトルロワイヤルの開幕じゃアアアアア！！！」
誰か数名が大声で叫んだ！！

ダン！！！！！！！！

だがその声の直後、黒板を強く叩く音が教室に響いた

ヒナギク「くじ引きで決めるわよ！！それで恨みっこなし！！！」

くじ引き…それが一番公平なやり方であろう。
バトルロワイヤルなんかやっていたら残る人、すぐに殺されてしま
う人はある程度想像できちゃいますしね

くじ引きのルールは簡単だった。“あたり”と書いてあるくじを引
いた人がワクチンをゲットできるのである

次々とくじを引いていく生徒たち

あたつく

あたふた

あたしのお墓の前で泣かないでくださいb y千の風

あたかも

あたたかい

あたっしゅけーす

あたっちめんと

あたご

あたしんち

あたまごなし

あたって砕ける

どのくじもややこしいですね。っていうか、生死を決めるくじでな
に遊んでるんですか…

歩：あたまきん

「…外れちゃった」

ヒナ「歩……」

「でも、後悔なんてないよ。とっても愉快で楽しいクラスだったし」

「ハヤテ君はいいの？ハヤテ君と結ばれたかったんじゃない？」

「そつだよ。でも…」
歩が視線を移した先には

ハヤテ：あたかのせき
ナギ：あたがわおんせん

「お嬢様」

「ハヤテ、5か月か…」

「何がですか？」

「私と出会ってからだ。ずっと一緒だと言ったがこんなにも早く終わりが来るとはな」

「何を言っているんですか、たとえ死んでしまっても、天国でも生まれ変わってもずっと一緒ですよ！！」

「そつだな、ずっと一緒だ」

お互いに涙目になりながら抱き合って、悲しみを必死に堪えようとするハヤテとナギだった。

「あんな感じじゃ、私たちの入る隙がないよ。それに…」

「それに？」

「私、今のハヤテ君にとつての幸せってナギちゃんと一緒に天国に旅立ることだと思っただよ。だから…いいんだ…ハヤテ君にとつての幸せは私にとつての幸せだから…」

「歩…」

いいお話ですね…今、床に倒れている一誠、鍵、樹とは大違いです
なぜ、3人が倒れているのかという細菌のせいじゃなくて、3人ともはずれで“どうせ死ぬなら、おっぱいに顔を埋めながら窒息死したい”と言いだしてこのクラスにいた胸が大きい皆さん（ハル

ナ、和美、瑞希、朱湊、深夏、マジョーリカ、楯無、文乃）に手当たり次第襲い掛かるうとして返り討ちに遭っただけです

死に方ひとつ見ても、それぞれ個性が出るんですね

「お姉様!!」

こっちはレズの人、黒子である

黒子「お姉様、わたくしはずれでしたの、お姉様は？」

美琴「私もはずれだったわよ。こんなに早く死ぬなんて、まだ思い残したことたくさんあったのに…すべてはこいつが悪いのよ!!」
当麻「上条さんを恨むなんてお門違いじゃありません？御坂が追いかけてこなければこんな事にならなかったのによオ…不幸だアアアアア!!」

なぜ、1年の当麻や、中等部の美琴や黒子がここにいるかというとなぜ、美琴が偶然食堂で当麻を見かけた。声に出して何度か呼んだものの気付いてもらえずにそれに腹を立ててビリビリと電気をまといながら当麻の元に怒り顔でやってきて、当麻はなぜ怒っているのか分からずに追いかけてこがスタートしてこの教室に逃げ込んだ。黒子は美琴にただ付いてきたのだ

「何よ、そんなに私と一緒に死ぬのが嫌なわけ？」

「違いよ。お前だって言っただけだろ、思い残したことが沢山あるって」

「そりゃあ…そうだけど…」

「でも、わたくしは嬉しいですよ。お姉様と共に黄泉の国へ旅立てることが出来る」

「黒子、アンタはそれでいいの？思い残したこととかないの？」

「わたくしにだってありますのよ、例えば…」

「ストップ!!」

黒子が思い残した事の例を挙げる前に美琴が止めに入った

「どうしましたの、お姉様？」

「私との18禁な行為はその例から除外してから挙げなさい」

「え…ええ…ええっと…」

しばらく考える黒子。そして、

「まったくありませんわ!!!」

「無いんかい!!!」

黒子も死ぬ間際になんてことを考えてたんでしょうね。でもそれが彼女の個性なんですよね

そして、時間がたちくじの残りもあと10本近くになってきた

「次は誰だ？」

「桂さんも、一応引いとく？」

「む、俺も引いていいのか？」

「まあ、桂さんの分も作ったからな。一応引いたらどうだ？」

「ではとりあえず…」

桂はくじの入った箱の中に手を入れる。そしてその中から1枚の紙を取り出した。

“あたり”

桂の引いたくじにはその3文字が書いてあった

「あたりのようだ」

「…あたり？」

「うむ、あたりだ」

“あたり”という言葉に、教室中にいた生徒たちの視線が桂に集まる

「というわけだ、すまん」

玲士郎「よりにもよって…貴様が…」

朱涅「諸悪の根源があたりを引くとはね…」

大河「なんかさ、めっちゃくちや納得がいかないんだけど…」

ナツル「たいていの事は納得いくけどよオ、こればかりは…」

のどか「細菌に犯されて死ぬその前に、この宇宙の不条理で狂い死にしそうです」

教室は明らかに殺気立っている。

しかし、空気が読めているのかいないのか桂は口を開けた

「気持ちわかる。だが約束しよう、俺はこの悲劇を決して忘れない。兵器の開発者にデータを送り、2度とこのような事態が起きないように厳しく通達しておく。だから…」

「…ダカラ…ナンダ…!!???’’」

「運命を受け入れて心静かに…」

「…テメエが死ねエエエエエ!!!’’」

何度も言いますが、銀時は死んでません！！尿管結石です

「「銀さん！！今から行くから待っててね！！」」

「って、誰が死んでるかアアアア！！！」

ドオオンという音と共に開かれたガムテープで固く閉じられたはずのドア

そこに立っていたのは、

「銀ちゃん……」

そう、銀時だった

ハヤテ「あれ、おかしいですね……」

咲夜「天国に行ったはずの銀さんが何でここにおるん？」

「死んでねエエ！！っていうか、誰だ！！俺の顔に落書きした奴！！」

銀時が最初に目をつけたもの、それは落書きされ尽くした自分の肖像だった

「ちよび髭に額に肉マーク、ボーボーの鼻毛に、目の周りを（デーモン小暮）閣下メイクってどれだけやりやあ気が済むんだ！！」

「そうだ、銀さんは死んでない……でも……」

「ドアが……開いちゃった……空気感染なのに……」

総悟「旦那……よくも俺らの努力を……」

「もう汚染地域がどうか知ったことかアアア！！！！」

ウオオオオオオオオ!!!

一部の生徒たちは雄叫びをあげながら外へと駆け出して行った

「…死ぬ前に盗撮写真の処分とハードディスクの中身を消去しておこう」

康太も思い残した事をしに行きました。

「僕、トイレ行きたかったんだよね〜」

「僕もです」

ハヤテと明久は、用を足しに行きました

智代「銀さんどうしてくれるんだ!!!」

ヒナギク「空気感染なのよ!!!みんな外に出て行っちゃったじゃない!!!」

「何わけわからねえ事言つてやがる。俺は1時間前に退院したばっかなんだよ」

「実はですね、銀さん…赫々云々」

様子を全く呑み込めていない銀時に対して新八が説明する

「成程なあ…ってツラ何しやがったアアア!!!」

いつものノリで桂にとび蹴りを喰らわそうとした銀時だったが

「ウウウウ!!!」

「銀さん駄目ですよ、結石なんですからそんなことしちゃ」

とび蹴りをしようとした時に、激痛が下腹部を襲いその場に蹲って

しまった

「情けないな、銀時」

「う…うるせえヅラ…テメエを結石にさせてやる」

「ハイハイ、結石にでもなんでもさせていいですからおとなしくしててください」

「それにしてもよく学校に来たアルな。そんなにワタシたちに会えなくて寂しかったアルか？寂しさで号泣して涙で海を作っちゃったアルか？」

まだ痛がっている銀時を新八が宥め、神楽がからかう

「で、その細菌の正体っていうのはまだ分かっていねえのかよ？」

「ええ、細菌の情報を知ってるのも桂さんだけだし、桂さんも今解読中で何が何だかさっぱり」

「！！！…これは！？」

『どうかしたんですか？桂さん』

桂が何かに気づいたようだ

「こ…このままでは、大変なことになる」

その頃、別の場所では…

「…雄二」

「なんだ、翔子？」

翔子と雄二は今、屋上で2人きりでいます

「…私たち、死んじゃうの？」

「多分な」

「…雄二、教えて？」

「何をだ？」

「…雄二の本当の気持ち。私のことどう思ってるの？」

「どう思ってるって言われてもだな」

雄二は困り顔になりながら後ろに立っていた翔子の方を向いた

「…私、怖い。雄二の本当の気持ちを聞けないで死んじゃうことが」

その顔には涙があふれ、その顔を見たとき雄二は言葉を失ったのであった

（こいつは誤解とはいえ俺の事を死ぬまで愛してくれて今も俺のために…いや、俺のせいで涙を流している。俺のせいでまた涙を…俺が素直になればいいだけの話なのによ…）

「翔子、一度しか言わないからよく聞け！俺の気持ちを素直に話してやる！！」

一度、大きく深呼吸をして

「…雄二」

「俺はだな…お前の事が…」

「…うん」

「お前の事が…お前が…」

すつきりする

「…雄二、どういう事？」

突如意味不明な発言をした雄二に翔子はキョトンとした顔をしている

「いや…なんか、爽快感が身体を突き抜けるっていうか、肩や腰やらの調子がおかすつきりしてだな…」

雄二は肩を回したり、腰を伸ばしたりしてアピールした

「一体何が何だか…ってウワァー!!」

次の瞬間、雄二の来ていた制服が見る見るうちに分解し始めた

「…これって」

「翔子!!お前も!!」

翔子の衣類も雄二に遅れること数秒、分解し始めた

「…雄二のエッチ」

ギョツツ…とほとんど裸になってしまった翔子はこっちもほとんど裸になってしまった雄二に抱きついた

「今抱きつくお前が変態だアアアア!!!!」

2 - Aの教室に戻って

ハヤテ「じゃあ、この細菌の正体って…」

「近年、石油製品を分解するバクテリアが注目されていてな。これはその一種だ。」

こいつは撰氏36 付近、つまり人間の体温レベルで驚異的に増殖・活性化する。そうだったが最後、特定の石油製品詳しくはポリエステルやナイロンを徹底的に食い尽くす性質がある。そういう意味ではとてつもなく獰猛な細菌なんだ」

ナギ「対策はないのか？」

「ない、ワクチンだけだ。2時間後には死滅するがそれまでは石油製品を身に着けては駄目だ。天然繊維の衣類を着ることだそうだ。しかも一度発症したら付近の人間は誰彼かまわず被害に遭うだが喜べ、副作用は肩こりと腰痛が取れることだそうだ」

「ということば…」

「少なくとも命に関わることは無いそうだ」

新八「そうなんですか…」

ハハハ…ハハハ…ハハハ…

彼らはただ苦笑いするしかなかった。自分たちが命の危険もないウイルスに罹ってする必要のない大暴れをしてしまった事に

「だが…」

「どうしたのよ？」

「俺の命が長くないことは確かだな…」

ワーーーーキヤアアアア!!!!!!

外から聞こえてきたのは、悲鳴と怒号

そう、外に細菌の漂う空気が漏れだしてしまったせいで第一校舎の生徒・教員が全員感染してしまったのだ。何も知らない生徒や教師たちの衣類は次々と侵されていき分解されてゆく

そして、次々と出てくる被害者たち。

一誠、鍵、樹の3人は死ぬ前に女の子の着替えが見たいと言って更衣室に忍び込んだ瞬間に衣類が解け始め、そこには着替え中の3年生の女子生徒たち姿があり彼女たちに全裸を見せてしまったり、衣類が解け始めたせいで余計に過激になった黒子と美春に美琴と美波が襲われて濃厚レスプレイをすることになったりといろいろである

『逃げましょう、桂さん』

「そうしよう、エリザベス。では諸君、また今度も面白いものを持ってきてやる」

そういうと桂はガムテープを剥がし窓を開けて、エリザベスと共に外へと逃げに行った

「「「2度と来んなー！ー！ー！！！！」」」

2 Aの教室からはそう声が響いていたという

「この学園に入り浸っている攘夷志士の桂のせいらしいぞ！！」

「あの桂のせいだと！？」

「逃げたらしい！！」

「探せ！！桂を探せエエ！！」

「出てこいコノヤロオオオ！！！！」

その後、桂は全教員と風紀委員、それと一部の生徒たちに周囲を完全に囲まれて御用になり、土方たち警察に引き渡されたという

めでたしめでたし…なのか？

おまけ、その1

細菌騒動から5日後の事…

「銀さん何の用だ？」

「俺たちを呼び出して」

ここには、雄二、当麻、ハヤテが呼び出されていた

「いやあ、お前らに渡したいものがあってよあ、手だせ」

「「「???」」」

ハヤテたちは何を渡されるかさっぱりわからないままそれぞれの右手を出した

「ほらよ」

ハヤテたちが渡されたものを見てみると、そこにあっただのは5mm程度の小さな石のようなものだった

「…銀さん、まさかこれって」

「俺の尿管に詰まっていた石ころだ。10分前に出たばかりの出来立てホヤホヤだ」

ハヤテは俺が入院したって知った時に代わってやりたいって、坂本と上条は俺を入院させた奴が許さねえって言ったそうだな。」

「だからって、俺らにどうしろと?」

その質問に銀時はニヤニヤ笑って、

「お前らの好きにしていどうぞ？ハヤテは詰めてみるか？坂本と上条は石を煮るなり焼くなり好きにしる」

「……」

その言葉に怒りを感じつつも、3人はお互いに顔を見合わせ1回頷き、職員室の窓を開けると

「……空まで飛んでけスパークキング！！！！」

結石の石を思いつき外に投げ捨てた。石は校庭のその他大勢の砂利に紛れて消えていった

おまけ2

ハヤテたちが石を投げてから5時間後の22時過ぎ

ピーポーピーポーピーポー……

街に救急車のサイレンが響き渡る

救急車は程無くして学園近くの救急病院に到着した

雪路「銀さん！！」

小萌「坂田先生しっかりしてなのです！！」

織斑「坂田先生！しっかりしろ！！」

ストレッチャーに乗ってるのは銀時

……デジャヴを感じますね。しかし、今度は意識がある。とても苦しんでいます

「今度はどんな患者かね？」

救急外来の入り口にいたのは“冥土帰し”の異名を持つカエル顔の医者だ

「彼は……」

医者はストレッツチャーに乗って運ばれてきた銀時を見て怪訝な顔をした。なぜならば、銀時の尿管結石の治療をしたのも彼であったからだ

「彼に一体何があったんだ？」

医者は付添として来ていた先生たちに事情を聴いた

さわ子「だからやめなさいって言ったのに……」

小萌「銀さんはウイスキーを一本丸飲みしてしまったのですよ」

フランキー「快気祝いだ……とか言いやがって」

シグナム「酒のせいであんなことになったばかりだというのに」

「……急性アルコール中毒の可能性もある。その場合、命に関わるかもしれない」

医者は大急ぎで救急外来用の治療室に入って検査と処置にあたりはじめた

数時間後、

「坂田先生、君には酒は控えるようにと言ったはずだよね？」

「いや……その……」

カエル顔の医者の強く怒っているような視線に銀時は汗をダラダラと書きながら斜め下を向いた

「酒を止めなかった結果がこれだ。今度は手術してもらうことになるよ?」

「なっ!? 手術!??」

「ああ、手術だ。そうしないと治らないよ、今回の場合は」

「勘弁してくれよ、手術とか考えられねえって…」

「仕方ないだろ、ウイスキーを一本丸飲みしたんだからホラ」

カエル顔の医者は銀時に一枚のレントゲン写真を渡した。

そこに写っていたのは、銀時の胃の中にあるウイスキー（瓶ごと丸々一本）だった

ハハハハハハ!!

処置室の中で巻き起こる笑い声

黄泉川「だから、飲むなつて言ったじゃんよ!!」

ブルツク「ヨホホホ、まさか本当に飲むとは思っていませんでしたよ!!」

「水…水かお湯を飲ませて…」

ロビン「水割り。坂田先生、体の中で水割りを作ろうとしてる」

「水割りにするから早く水を…!!???生まれる!!」

西村「大変だ、出るぞ!??」

「分娩室を用意するか!？」

シヤマル「出産はここからが大変よ!！」

「ラマーズ!ラマーズ!ヒッヒッフー、ヒッヒッフー、ヒッヒッフー、ヒッヒッフー……」

処置室には、その後しばらくラマーズの音が響いていたという

第四十話：人はいつ死ぬか分からないからこそ一生懸命生きている（後書き）

次回、“変な感じの先生”が登場。変な感じになってしまった空気をさらに変な感じにしています。それプラス、短編をお送りいたします

人気投票の投票結果について…前話でも書きましたが投票結果は文化祭4日目のイベントに関係してきます

イベントの内容（予定）

6名1グループのチーム（同じチームに同じ作品のキャラは2人以上入れない）を作りチーム対抗戦のレクリエーション。内容はmissionV6だとかのパロディーを予定しています

第四十一話：桃源郷学園NEO part1（前書き）

皆様の応援のお陰でお気に入り登録数がついに100件を超えました。ありがとうございます！！

第四十一話：桃源郷学園NEO part 1

Episode . 1 : 上条当麻の今日も不幸だいんトイレ

「フウ」

当麻は今トイレにいる。今ちょうど小を済ましたところだ

ジャー…

洗面台に行き、蛇口を回して手を洗い始めた

ブルルル…

当麻の携帯電話が鳴る。

(メールか?)

当麻は右手の水気を払い、ケータイに手を伸ばす

(…なんだ、インフォメーションのセールスか)

特に重要ではないメールと知り、後ですぐ見れるようにケータイのストラップを歯で噛みながら手を洗い続けた

「よお、上条」

そんな当麻に、トイレに入ってきた一夏が声をかけた

「おお」

それに応えるように当麻も一夏に声をかける

ポチャン

とっても盛り上がっています。衣装は青山やコナカだとかで買っ
じやなくて自分たちで作るみたいですね。青春って感じです

美砂「でもよかったね〜、予定よりも5日も早く終わったわ」

理子「これもみんなが協力してくれたお陰だよ」

星奈「あと私の活躍のお陰でもあるわね！みんなもそう思うでしょ
!?!」

猛「…そうだな」

竜児「柏崎もがんばってたからな」

星奈のナルシスト気味な発言に若干引いています

「あれ？亜美ちゃんは？亜美ちゃんも衣装担当だよね」
理子が話を逸らしました

憂「川嶋さんなら今日もモデルのお仕事だつて」

「仕方ないわね、なら私が電話しといてあげるわ」

そういうと星奈はケータイを取り出して亜美に電話を掛ける

ちなみに何で友達の少ない星奈が亜美の電話番号を知っているのか
というと、彼女の事ですから“私のケータイの電話番号とアドレス
をあなたたちが知りましたそうだから教えてあげるわ”と高飛車かつ上
から目線で相手の意向を無視して教えて交換していたのでしょ

『おかけになつた電話番号は現在使われておりません』

星奈のケータイからはそういう機械の音声が流れてきた

「あれ…つながらないんだけど」

白雪「川嶋さんならケータイの番号変ったって言ってたよ？」

「えっ…なんで星伽さんだけ知ってるの？」

美砂「私も知ってるわよ、連絡先変ったって。一週間くらい前かな？」

理子「そうそう、一斉送信で来たよ」

「一斉送信!？」

美砂（バカ!!）

竜児（それ言っちゃダメだろ!!）

今の理子の発言に心の中で注意する

（しまった…言っちゃった…）

理子も今の自分の過ちに気づいたのか心の中で反省する

「何で私だけ知らないのよ？何で私だけに教えてくれないのよ？」

星奈が周りを見るが誰も目をそらして答えるそぶりはない。

静まり返る空気

ガラガラガラ

突然、その空気を壊すかのようにドアが開いた

「真儀瑠先生？」

そこにいたのは、国語教師の真儀瑠だった

「柏崎は、完全に川嶋に嫌われているな」

憂「ちよつと、先生。変なことを言うのはやめてください！」

「場の雰囲気を変な感じになっているのを、君たちが必死に取り繕おうとしているのもっと変な感じにしてやろうと思っただな」

白雪「何でそんなことするんですか、先生には関係ないですよね？」

「君たちは川嶋から新しい番号とアドレスを柏崎に内緒にするように言われている事を隠してんだよな？」

猛「それは…そうだけだよお…」

「そつなの!？」

美砂「ちよつと、野田君!!」

「あつ!!悪リイ…」

白雪「違うよね？」

竜児「ああ、そんなことあるわけないよな」

憂「先生なんなんですかあなたは？」

「なんなんですか、あなたはですか。なんなんですか、あなたはですか」

そつだ。私が変な感じの先生だ

変な感じの先生、変な感じの先生……」

変なおじさんのダンスをしながらそう歌う。

「変な感じの先生つたら、変な感じの先生なのだから

朝は毎日2分遅刻くくく」

憂「なんか変な空気になってきたね……」

「変だし……パクリだし……」

変な感じの先生こと真儀瑠は呆然としている星奈たちを見ると話を続けた

「川嶋がよく柏崎の悪口を言いまくっていることを、何故彼女に伝えないんだ？」

亜美が星奈の事を嫌っているのは同族嫌悪的なものでしょうね。

「それって本当……？」

「そして、君たちも彼女の悪口を言い合って悪口に花が咲いたことも」

憂「先生、言いすぎです……！」

猛「柏崎、こんな変な先生の言う事なんて信じるんじゃないぞ」
美砂「そうよ……！」

白雪「私たちそんなこと一度も言ったことないんだから」

「変な先生じゃない、変な“感じ”の先生だ」

竜児「どっちも変わんないとおもっが」

「……………」

突っ込みをした竜児をジッと見つめる真儀瑠

……………

流れる沈黙

「ところで、この後は柏崎を無理やり帰したあと」

(何もないんかい!!)

そう、心の中でツッコむ竜児

「川嶋と合流してカラオケに行くことは内緒なんだよな？」

「へっ!?!? そうなの!?!」

理子「先生止めて、本当に変な感じになっちゃってるよ!!」

「それじゃあ私はこれで帰るから」

ちなみに、頑張ってる君たちに青汁を買ってきてやったから

それと、君たちのカラオケの予約を取り消して代わりにフットサル場を予約しておいたから」

竜児「だからどうしろと？」

憂「何、余計な事してるんですか」

美砂「どこまで変な感じなのよ」

真儀瑠は缶の青汁を人数分置き、再びここにいる星奈たちの顔を見る
そして、何か言いたそうに口を少し開けて何か考え事をした後、

スタスタスタ…

ドアから出て行ってしまった

猛「何も言わないのかよ！！」

美砂「独特の間だね…アレ」

竜児「そうだな」

理子「星奈ちゃん、大丈夫？」

「……………ウウ」

星奈の目からは涙が零れはじめていた。高飛車な割には撃たれ弱い
んですね

憂「柏崎さんもカラオケ…じゃなかった、私たちとフットサルしに
行こう？ね？」

「グスツツ…いいの？」

憂「いいよ、大歓迎だよ」

竜児「人数も多い方が楽しいしからな」

美砂「うん、だからさフットサルに行こう。もうこうなったら、ク

ラスのみんなも呼んじゃおっか!!」
白雪「そうですね、そうしましょう」

周りの憂たちはなんとか星奈を宥めようとしている

ドツツツ

突然した何かがドアにあたる音。その音が何なのかたちはドアの方
を見てみた

そこには帰ったはずの真儀瑠の姿があり、じつと彼女たちを見ていた

視線が合い、三度流れる沈黙……

Episode . 3 : たらい回しの現実

Side土方

この日、土方はいつもの通り駅前周辺をパトロールしていた

(あっ……)

どうやら何かを思い出したようです

(この前、風紀委員の奴らが駅で痴漢の冤罪逮捕しやがった時の謝
罪文まだできてなかったな……しかたねえ、書くように忠告させとく
か)

土方はケータイを取り出しある人物へ電話をかけた

『もしもしっ……』

「ああ、俺だ、土方だが仲村か？」

『ええ、そうですけど何ですかこんな夜に？』
電話をかけた相手はゆりのようだ

「この前、お前ら駅で痴漢を冤罪逮捕したことがあっただろ？」

『そんなこともあったわね〜』

「お前ら反省してんのか？冤罪で大問題になったぞ」

『反省してますって。で、その冤罪事件がどうかしたんですか？』

「お前らのせいで加害者になりかけた男子学生の家族が謝罪文を書けて言ってるんだよ。総悟に書かせたらとんでもねえ事になりそうだから副隊長のお前に頼むわ」

『分かりました。任せてください！！』

「なら、なるべく今日中に書け。明日の朝にその家族に渡すからな」
土方はそういうと電話を切った

S i d e ゆり

(謝罪文か…めんどくさいわね)

ゆりは電話の切れたケータイを持ちながらそんなことを思っていた

(謝罪文なんて私に任せないで土方さん自身が書けばいいのに

……)

ゆりはケータイを見ながらあることを考えた

プルルルル…

『はい、綾崎ですけど』

どうやら、ハヤテに責任を押し付けるつもりみたいですね

「もしもし、綾崎君？」

『仲村さん、どうしたんですか？』

「今どうしてるの？なんか音楽が聞こえてくるけど」

確かにハヤテのケータイからはAKBのヘビーローテーションが聞こえてきます

『えっと…カラオケですけど』

「なら、暇ね」

『暇じゃないです。カラオケで盛り上がってるじゃないですか！！これから僕もAKBの“あいたかった”を…』

「煩いわね」

ハヤテの言葉を一方的に無視して話を続けるゆり

「この前の駅の痴漢冤罪の学生の家族が謝罪文要求しているらしいからそれを今日中に書きちゃいなさい。いい、今日中よ!？」

ピッ… ツーッ

ゆりは用件だけを言うたさつさと電話を切ってしまった

S i d e ハヤテ

(エエ~~~~!?!マジですか!?)

マジなんです。

(やらなくちゃいけないことだけど、カラオケ皆さんオールする勢いだし…)

折角HIKIKOMORIなお嬢様に友達と遊ぶ楽しさを分からせ

てあげようとしていたのに…)

プルルル…

次の瞬間、ハヤテはある人物へ電話をかけていた

「もしもし、神崎さんですか？」

ハヤテが電話をかけたのはアリアでした

『綾崎君？どうしたのよこんな遅くに』

「神崎さん、今何してますか？」

『何って、ももまん食べてるところだけど』

「よかつた〜、要するに暇なんですね！」

『ハア！？ちよつと待ちなさいよ！！』

暇だと言われて彼女は腹が立っているようだ。だがそんなことも知らずにハヤテは話を続ける

「この前の痴漢冤罪の家族に明日までに謝罪文を書いてきてください。僕カラオケでできないんで、よろしくお願いします」
プツッ、ツーーッー

ハヤテもゆりと同様、用件を伝えるとさっさと電話を切ってしまった

S i d e アリア

(綾崎君に絶対風穴開けてやる！！)

アリアは今のハヤテの発言に心底腹を立てているようだ。

(何よ、人がせつかくももまんを食べて幸福気分になっていたのに無理やり仕事を押し付けて、その理由がカラオケしてるから！？ふざけんじゃないわよ！！)

「キンジ！！バカキンジ！！」
アリアは近くにいたキンジを呼び出した

「何だ、っていつか何もしてないのにバカって呼ばれる筋合いはないぞ？」

「煩いわね、綾崎君と一緒に風穴開けるわよ」

「だから、俺は風穴開けられる覚えは何もねえって！！」

「いい？明日までにこの前の冤罪騒動の謝罪文を書いちゃいなさい。私はももまんで幸福気分になるのに忙しいんだから」

「待て、第一俺はあの時現場に居なかったぞ！？」

「アアン！？」

アリアはヤクザが出しそうなドスのきいた声を出しながら、キンジを睨みつける。よっぽど邪魔されたのが不満だったのだろう

「分かったよ、やるよ…ハア」

キンジはため息を吐いて、反論するのを諦めることにした

（しかしどうする。俺もアリアもあの時現場に居なかったから全く分からないぞ。事件の内容も又聞きしただけだし）

しばらく考えた後、キンジがたどり着いた結論は…

（現場に居た人に頼めばいいんだ）

とてもシンプルかつベストな答えだった

プルルルル…

『はい、こちら沖田のケータイだけど？』

「遠山ですけど」

『遠山か、何の用でイ？俺に調教してほしい女でもいるのか？あの神崎とか。あの女の調教してみたいんだよなア』

「いや、全然違いますから。沖田先輩、この前の痴漢騒動の時現場にいましたよね？」

『あア、居たけどそれがどーした？』

「その時の冤罪の謝罪文を書いとけって言われたんですけど、その時現場に居なかった俺が書けるわけがないのでお願いできますか？」

『……………』

沖田はしばらく何かを考えているようだったが…

『いいぞ』

「ならお願いします」

仕事を怠けがちな総悟が引き受けてくれたのだ。キンジは多分やってくれないだろうと心の中思っていたので少しうれしかった

S i d e 総悟

「やて…」

ピッ…

ケータイの電話を切ると総悟は近くにいた人に向かって歩き出した

「土方さ〜ん」

そう、土方である。総悟も彼と一緒にパトロールをしていたのだ

「ん？何だ総悟？」

「この前の駅での冤罪の件の謝罪文書いってくださいよ〜」

「!?!?!」

土方は総悟の言葉に唯々耳を疑うしかなかった

“情けは人のためならず。めぐりめぐって己が為”という言葉があります。これは全くの逆パターンですね。

第四十一話：桃源郷学園NEO part 1（後書き）

サラリーマンNEOみたいに今回のお話の出演者の“ええねん”

当麻「ケータイ今年で3つ壊れたけど、もう」ええねん

一夏「千冬姉みたいに強くなれたら」ええねん

星奈「小鳩ちゃんが」ええねん

真儀瑠「購買のパンが美味しくて」ええねん

憂「お姉ちゃんとずっと一緒に居れたら」ええねん

野田猛「姉貴が危険な男がタイプだけど」ええねん

竜児「家が綺麗になったら」ええねん

美砂「シヨタでも」ええねん

理子「ゲームや映画は1作目が」ええねん

白雪「キンちゃんは私と結ばれれば」ええねん

土方「マヨネーズが」ええねん

ゆり「傍若無人って言われるけど」ええねん

ハヤテ「お嬢様が」ええねん

アリア「ももまんとレオポング」ええねん

キンジ「ヒステリアモードにならなければ」ええねん

総悟「土方が死ねば」ええねん

文化祭にやると書いた男の娘No.1決定戦ですが、内容を大幅に変更するかもしれません。男の娘の話はきちんとやります！

第四十二話：未来は分からないから面白い（前書き）

今回のお話は作品を超えたカップルが多数誕生するようなお話になりそうです。そういうお話が苦手な方はみない方がいいと思われるかもしれませんが無理があるだろうというカップルも誕生するかもしれません
本当にこれは好みが大きく分かります

ちなみにこういうお話では読者の方々にカップリングを募集するかどうかと思いますが、このお話は少々特殊なため募集は致しません。

第四十二話：未来は分からないから面白い

ハヤテ「えっ？ラブラブ万華鏡ですか？」

新八「っていうか何ですかそれ？」

ハヤテと新八を含める2Aの生徒十数名は銀時の持つ万華鏡を見た万華鏡は半分から左が青く、右が赤くなっている

「この万華鏡は中身を見ると未来の自分の結婚相手がこの中に現れるという道具だ」。男は青い部分ののぞき穴から女は赤いのぞき穴から見れば見れるよ」。

銀時はドラえもんを彷彿とさせるようなダミ声で持っている万華鏡の説明をした

ちなみに男が赤いのぞき穴から、女が青いのぞき穴から見ってしまうと同性の結婚相手ではなく自分の姿が映るようになっていたのだ。もし、一生結婚しない場合誰も映らないようになっていた

ナギ「…こんなもので本当に見れるのか？ただの万華鏡にしか見えんぞ」

明日菜「なんか、胡散臭いわよ」

だが、彼らはその万華鏡に半信半疑だ

「大丈夫だよ、飲み屋で知らないおじさんから枝豆と…」

新八「テメエ、またそれかよ！！そういう話原作にもあったよな、オイ！！」

あの定春が大きくなっちゃった話ですよ

ヒナギク「ところで、銀さんはもう中身を見たの？」

「いや、まだ見てねえ」

新八「そんなんじゃない信用できませんって」

「けど、渡してくれたオッサンはこれを見てみたら自分の奥さんが写ったそうだぞ？」

翔子「…それでもまだ信用できない」

「誰か他にも…」

彼らはこの万華鏡の信憑性を確かめるために誰か実験体となる人間を探した。

「君たち何やってるのかね？」

そんな中、一人の男が銀時たちのもとに現れた

「「「理事長先生」」」

そう、この学園の理事長である天神すすきだった

「そうだ。理事長、この万華鏡の中身を見てください」

理事長は結婚して子供もいる。実験にはちょうどいい相手だった

「別にいいけど〜ん〜ん????」

理事長はハヤテから万華鏡を受け取り青の方ののぞき穴から中身を覗いた

そして中に映っていたのは…

「おお、これは去年ルワンダ校の視察で出会ったチンパンジーのチンパンちゃん（現在2才）じゃないか!!」

チンパンジーだった

雄二「本物だ」

銀時「だから言ったじゃねえか、本物だって」

朱湊「本物のようね」

のどか「本物ですね」

秀吉「本物のようじゃの」

康太「…本物」

理事長の結果に一同は納得し、これが本物であることが分かりました。ちなみに理事長は結婚して奥さんもいますが、なぜこんな結果になったかという点、察してください。奥さんが…てるという事です

「「「……………」」」

理事長は帰ってしまい、机の上に置かれた万華鏡を見つめる銀時達。この万華鏡が本物だと分かった今、どうするか悩んでいるのである

「誰か見る人いないの??」

「見たいっちゃ…見たいけどね…」

「でもこれを見たら将来の相手が分かるんでしょ?」

「確かに未来のことが分かるのは怖いわよね」

彼らはまだ高校生で結婚もしていない。結婚と言えばまだまだ先の遠い話という感じなのであろう

そんな先の事が分かってしまったらという恐怖感が彼らの心の中にあった

「なら、銀さん。銀さんが初めて見てくださいよ!!」

誰も一向に見ようとしていないので銀時が見るように新八が薦めた

「何で俺が見なきゃいけないエんだよ？」

「だって、銀さん。もう結婚適齢期のはずですし、いつ結婚するなんてことになるなんて分からないんですから見ていた方がいいんじゃないですか!？」

適当な理由を作って新八が薦めようとする

「……」

銀時もまさか自分が見ることになるなんて思っていなかったのである。彼はこれをハヤテたちに覗かせ誰が映ったか言わせて、からかうつもりだったのだ

「……」

手にとってはみるものの、それを見つめるだけで覗こうとはしない
そんな銀時に業を煮やしたのが、

「ウジウジしてないでさっさと見るヨ!!ホラ!!」

神楽が無理矢理万華鏡を銀時から取ってその青色ののぞき穴を銀時の目に押し当てたのだ

「なっ!!何しやがる!!」

銀時は後ろに退いたが、一瞬中に映ったのを見てしまった

「な…な…マジかよ…」

銀時は映し出された女性の姿に恐れおののいている

「銀さん中身見たの？」

「一体誰が映ったの？」

「いや…何でだ？何であの女が…」

ハルナ「銀さん誰が映ったのか教えてよ!!」

明久「秘密にするからさ!!」

「おい、神楽。もう一度見たいから貸してくれないか？」

「いいヨ?はい」

銀時がもう一度中身を見た。そこにはさっきと変わらない一人の女性の姿が映し出されていた

「織斑…」

「『エエエエ』!!?? 織斑先生!!??」

どうやら、銀時が万華鏡の中に見たのは織斑千冬だったようだ

智代「本当に織斑先生だったのか!？」

「……コク」

静かに無言で頷く銀時

優子「まさか、銀さんの結婚相手が織斑先生だったとは、驚いたわ」

深夏「似合わない感じがするから意外だな」

美波「性格もほとんど正反対だしね。厳格な織斑先生とグータラな

銀さんじゃあ」

「な…なあ」

感想を言い合っていた生徒たちに銀時が声をかけた。その身体は小刻みに震えている

鍵「何ですか？銀さん」

「お、おれ、どうすれば、いいかな…??」

ヒナギク「どうするって言われてもねえ？」

千桜「そんなこと、私たちに聞かれても」

銀時からの突然の相談に彼女たちも困ってるようだ。実際にこんな“まだ付き合ってもいないのに結婚相手だ”なんて言われることなんて親が勝手に決めた許婚という事例以外で滅多にありませんからね

瑞希「とりあえず、お食事にも誘ってみてはどうですか？」

紅音「そうですね、織斑先生もお酒が好きみたいですから一緒に居酒屋に呑みに行くとか」

「そういうもんなのか？」

ハヤテ「そうですねよ、友達からなんて恋愛じゃベタなパターンだし、呑み友達から始めるなんていいと思いますけどね。お酒で自分の言いたいことを素直に話せるんですから」

新八「でも飲みすぎは駄目ですよ、銀さん酒癖悪いんですから」

「…そ、そつか。ハハハ、じゃあ行ってくるわ」

銀時は心ここに非ずといった感じで笑いながら教室を出て行った。その原因が結婚相手が織斑だったからなのか、じぶんが結婚も考え

ていなかったのにこんなことになってしまったからなのかは知る由はない

「次は誰が見るの？」

しかし、誰も万華鏡を取ろうとする者はいない

「ねえ、次はナギちゃんが見たらどうかかな？」

歩はそう言い出すと万華鏡を手に取り、ナギに渡そうとした

「なっ！？なぜ私が見なくてはならないのだ！！私はハヤテと結婚するのは決まってるから別にいいのだ！！」

しかしナギは必死にそれを拒む

「だって、今はハヤテ君と付き合ってると言っても、そのまま結婚するとも限らないし」

「どういう意味だ！！どういう！！」

ドンツツツ！！と大きな音を立てて机をたたき歩に反論する

「ナギちゃんみたいなワガママすぎる女の子じゃハヤテ君もいつか呆れて去って行っちゃうんじゃない？」

今日の歩の発言はどこかトゲを含んでいるようだ

「んなことあるか！！いいだろう、この万華鏡を見て私とハヤテが結ばれるという事を証明してやる！！」

売り言葉に買い言葉といった感じでナギは歩から万華鏡を奪うとのぞき穴から中身を見た

そして映し出されたのは…

「私の姿なんだが!!」

自分の姿であった

「お嬢様、反対です。それ男性用のぞき穴ですから」

「わっ、分かっておるわ!! 試してみただけだ!!」

絶対試したというのは嘘でしょうね、それほど歩の言葉に血が昇っていたのでしよう

そして改めて一度深呼吸をして気を落ち着かせ、赤色のぞき穴から中身を見るナギ

ブウォンと小さく音を立てて少しずつ姿を現す男の姿

「な…な…」

カラン

ナギは中身を見て驚いているのか、万華鏡を床に落としてしまった

「お嬢様、大丈夫ですか!？」

「な…何で…? なんで、アイツなのだ？」

ナギはハヤテの問いかけに対して何も答えようとはしない。

「もしかして、本当にハヤテ君じゃなかったとか!？」

「やめてくださいよ西沢さん、そんなことはありませんよ。ねえお嬢様?」

ハヤテはもう一度ナギに聞いたがナギは顔を逸らしてしまう

「そんな、僕とお嬢様は結ばれる運命なんですよ!?! ほら!?!」

ハヤテはナギと結ばれる未来を信じ、のぞき穴を覗いた

ブウン

映し出される女性の姿

「!?!?!」

ハヤテは映し出された女性の姿に驚き一度顔を万華鏡から遠ざけたが、もう一度覗いてみることにした

そこにはさつきと変わらない女性の姿が映っている

「明日菜、さん？」

ハヤテは映った相手の名前をポロリと零してしまった

「『エエエエ』、神楽坂（明日菜）!?!?!」

「私!?!」

周りも驚いているが、一番驚いているのは明日菜本人であろう

木乃香「本当に明日菜なん？」

刹那「綾崎さん、本当ですか!?!」

「え…ええ…」

「そ、そんなことあるわけ…」

明日菜はハヤテから万華鏡を奪い取ると、赤色ののぞき穴から覗いた

ブウン…

映し出される一人の男性の姿

「う…うそ…何で綾崎君が…」

どうやら明日菜のものに映っていたのはハヤテだったらしい。まあ結婚相手という事なので当然かもしれないが

「お嬢様!！」

ハヤテはナギに迫っていた

「お嬢様が見たときはいつたい誰が映っていたというんですか!！」
ハヤテは強く迫るがナギは黙ったままで話す気配は一向にない

「お嬢様!！」

ハヤテが名前を叫んだ瞬間、彼はあることに気づいた

ナギが泣いていたのだ

「私だって、嫌なのだ、ぐすつ…私だって、ハヤテと結婚したいし、ずっと添い遂げたい…うう…でも、これが…この万華鏡が…」

「お嬢様…ご免なさい。気持ちを考えないで強く迫ってしまつて。僕だって同じ気持ちですよ?」

「うう…ひつく…ぐすつ…」

だが、ナギはまだ嗚咽を漏らしている

「お嬢様、嫌なら言わなくてもいいですから、もしよければ誰が出てきたのか教えてくれませんか?」

「……………」

ナギは嗚咽を漏らしながらも何かを呟いた。けれども声が小さくて聞くことが出来ない

「誰…なんですか？」

さつきとは違い、やさしく声を小さくして聞くハヤテ

「……………」

またも何かを呟くナギであったが今度はハヤテがナギの口の傍まで耳を持ってきたため、誰の姿が映ったのか聞くことが出来た

「せ…が…わ…」

虎鉄である

その3文字を聞いた瞬間、ハヤテは立ち上がった。その顔にはナギを慰めようとしていたついさっきまでの優しい笑顔はなかった

「お嬢様、虎鉄さんと結婚なんて嫌ですよね？」

「嫌に決まっておるわ！！誰があんな変態なんかと！！」

「分かりました、じゃあお嬢様はここで待っていてください。僕には用事が出来たので」

ハヤテは教室から外に出ようとした

「ハヤテ君、どこに行くの？」

「決まってるじゃないですか〜〜〜 殺しに行くんですよ〜〜〜」

ヒナギクの問いかけに対してハヤテは笑顔で答えた

ハヤテの目は所謂ヤンデレの目になっていた

30秒後、隣の教室からは虎鉄のものと思われる男性の悲鳴が聞こえていた

そして、

「「「面白い道具があるって本当!?!?!」」」

噂を聞きつけたほかのクラスの生徒たちが駆けつけてきたのだ

(…なんだか大波乱の予感)
ヒナギクと智代は頭を悩ませていた

第四十二話：未来は分からないから面白い（後書き）

次回さらに波乱の展開に

あの女が生涯独身で、あの男がハーレムを作る展開に！？等々を予定しております

収束に向かわなそうですが、向かうと思います…多分

なぜカップリングの募集を行わないかは次回のお話を見れば分かります

第四十三話：恋と変という字は似ている

ギヤアアアアー

これは校庭でハヤテの乗るMTBにロープで括り付けられて引き回しになっている虎鉄の悲鳴である

2Aの教室では…

「…という訳よ」

と、ヒナギクがやってきた他のクラスの生徒たちに対してラブラブ万華鏡の説明をしていた

「なるほどね〜」

「もう、中身見た人はいるの？」

木乃香「うん、明日菜が見た時は綾崎君が映って、綾崎君は明日菜、ナギちゃんは瀬川君、銀さんには織斑先生が映ったんや」

「そっか、だからさつきハヤ太君が虎鉄君をボコボコにしてたんだね」

「綾崎君とナギちゃんラブラブだから仕方ないよね」

「で、次は誰が見るんだ？」

今、万華鏡を持っているのは何故かナギ。その目は明らかに復讐に燃えているような策士の目だった

「まさか、私だけな訳にはいかせまい。お前らも未来の結婚相手を知って未来に絶望するがいいわアア！！」

完全に悪役ですね。それほど虎鉄がパートナーとなるのは嫌だった

のでしょうか

「じゃあ、まずはヒナギクお前だアア！！」

「ちよつと、なんで私なのよ！？」

ナギが最初に選んだのはヒナギクでした

「フッフ、お前もハヤテと結ばれないと分かった今、誰と結婚するのか知りたくならないのか？もしかしたらお前は姉みたいに行き遅れのババアになるかもしれないからな」

酷い言いようです。言っておきますけど雪路はまだ30超えてないですからね

「誰が行き遅れのババアになるですって！？お姉ちゃんと一緒にしないでよー！！」

雪路と一緒にされるのが不快なのか青筋を立てて反論するヒナギク

「怒ったらだめですってヒナさん。これを見ればどうなるか分かるんですからね、ね？」

それを宥めようとしている歩

「いいわ、見てやろうじゃない！！私だってお姉ちゃんじゃないんだから行きそびれたりなんかしないわよ！！」

そして、ヒナギクはナギから万華鏡を取るとその中身を見た

（（（もしかして、俺（僕）が映ってくれたりしないかな？）（（（
周りにいた鍵たち男子生徒はそんなことを思ったりしていた

万華鏡の中を見るヒナギク。そして…

(…これって、どういうことよ?)

ヒナギクは目を万華鏡から離して、一旦気持ちを落ち着かせるともう一度その中身を見た

(…おかしいわ、何で?)

そして、もう一度目を離すとなぜが男性用の青色ののぞき穴から覗き始めた

(何で?何で、青色から見たら私の姿が映るのに、赤色から見たら誰も映らないのよ!!)

どうやら、赤色ののぞき穴から覗いたところ誰も映らなかったみたい

「どうしたんだ、ヒナ?青色を覗いたって自分の姿しか映らないぞ?」

「わっ、分かってるわよそんなことくらい!!試してみただけよ!」
「そうよ…試してみただけ…」

何か、デジャブを感じますが美希の問いにそう答えるヒナギク明らかに動揺しています

「どうしたんだ、ヒナギク?そんなに動揺するなんてお前らしくもない」

そんな彼女を見てニヤニヤしながら言うナギ

「どっ、動揺なんてするわけじゃない!!高々、誰も映らなかつたくらいで!」

「誰も映らなかつた!?」

(!!しまった!!)

そんなナギに反論したヒナギクであったが、その過程でとんでもないことを言ってしまった。完全に自爆です

誰も映らないという事は生涯誰とも結婚しないという事...

「あ...えつと...その...」

ヒナギクになんて声をかけていいのか、周りにいる人たちは困っているようだ

瑞希「まあ、ねえ、女の幸せって結婚だけじゃないし...」

理沙「ずっと仕事に生きるっていうのも悪くないと思うけどな」

歩「結婚って人生の墓場っていうからね、寧ろしなくて正解なんじゃないかな?」

そして、何とか言葉を見つけ慰めている

「ハハハハ、まさかとは思ったが本当にヒナギクは一生独身なんだな!!ハハハハ...」

そして、ヒナギクが一生独身で自分よりも不幸な身になると知ったナギは涙を流しながら笑っている。さつき虎鉄と結婚するのではないかと不安になった時の涙とは全く別物である

プツ...あの...が...一生独身...

何処からか小声の噂話や笑い声も聞こえてきます。完璧超人の生徒副会長と呼ばれる人が一生独身って判明しましたからね

「これはいいネタになりそうね」

「生徒会副会長桂ヒナギク、仕事は完璧だが私生活は全然ダメ”
って見出しにしない？」

情報部の和美と麻弓は早速これを今度の新聞のネタにしようと打ち
合わせをしています

「そんなことあるわけないだろ！！」

ですが、そんな小声を打ち消すかのように大声で反論する声が響く

ナギ「なんだよ、東宮？」

まあ、彼なんですけどね

「ヒナギクさんは僕と結ばれるはずなんだ。だから心配はいりませ
んよ、ヒナギクさん」

「だけど、ヒナが見た時は誰も映らなかったじゃないか？」

「そうだよ、残念だけどヒナちゃんは独身が決定したんだって」

反論し、ヒナギクを慰めようとする彼でしたが美希や泉に正論を言
われてしまう

「それはなんかの間違いだ！！見てろよ、僕が今から見てこの中に
ヒナギクさんの姿を映してやる」

だが、彼はめげなかった。好きな人と結婚できるかどうかがかかっ
てますからね。

彼は置いてあった万華鏡を取るとその中身を一気に覗き込んだ

ヴォン

音と共に少しずつ映し出される姿。その姿は誰なのか…

「（…何で？）何で二人も映ってるんだ？」

誰かは分かりませんが、2人同時に映ったみたいですよ

「2人だと!？」

「これどういうこと!? 結婚相手を映すんじゃないの?」

「まさか、彼、重婚するとか!？」

2人同時に映ったという彼の発言に辺りは一時騒然となる。無理もないだろう、だってこれは結婚相手を映す道具。映るのは1人のはずであるから

「待ってる、今から読むからな」

説明書を読んでいた千桜が声を上げる

「今から読むところよく聞くんぞぞ。」

“この製品は一夫多妻が法で認められている某銀河系で製造されている製品であり、一夫一妻制の星や地域でも2人以上が同時に現れることが多々あります。その場合は一夫多妻が容認されている星や国や地域に移動を考えてみてはどうでしょう?”

だそうだ」

彼女は説明書に書いてあった文章をそのまま読み上げた

歩「ってことはつまり?」

咲夜「重婚も一夫多妻も十分にあり得るってことやな」

ちなみには語りませんでした。再婚の場合も2人以上映るんじゃないかと思うかもしれませんが、再婚の場合は万華鏡を見てから最初に結婚する人・見た時に結婚している人の姿が映るのである。つまり、彼らはまだ結婚してないのでハーレム結婚以外は1人しか映らないのだ

理沙「で、誰が映ったんだ?」

美希「ヒナは映ったんだろうな？お前がそれほど豪語するからには」

「いや…」

泉「映らなかつたの？」

「じゃあ、誰が映ったんだ？」

美希の問いに少し彼は躊躇ったがしばらく間を開けた後、口を開いた

「早乙女と椎名（深夏）」

「……なにイイイ！？」「」

「東宮君それ本当なの！？」

「東宮、それを貸せ！！」

当の本人のハルナと深夏は東宮から万華鏡を奪うとそれを覗きこんだ

「……」「」

彼女たちは覗き終わるとそのまま黙り込んでしまった

「ハルナ、彼が映ってたですか？」

「お姉ちゃん？」

「……」「」

夕映と真冬の問いに2人はボンヤリとした様子でコクリと頷いた

「……異端審問会ジャアアアアアア！！」「」

樹、鍵、一誠、明久、サンジたちはいつの間にか覆面と黒いマントを羽織った異端審問会モードになっていた。そして東宮を逆さ磔にしようとしたが、

「ちよつといいかしら？」

ヒナギクが止めた。その顔は笑顔であったが何故か心は笑っていないように見える

「東宮君、話があるんだけどいいかしら？？」

「えっ？何ですか？」

その答えを言う前に彼女は彼の首根っこを掴むと何処かへ連行していった。まあ三十話で告白に等しいようなことを述べていましたし、あと彼女の一生独身というのが重いのでしょう

だがこの時、5人とハーレム婚になるかもしれない強者がこの中にいるという事をまだ誰も知らなかった

「で、次は誰が見るアルか？」

万華鏡を手にした神楽が周囲を見回しながら聞く。

だが、中々見ようとする者は現れない。まあさっきの虎鉄とナギや今の東宮と重婚することになったハルナや深夏の事を考えて“必ずしも自分の好きな人と結婚できるとは限らない、いや結婚したくない人と結婚するかもしれない”という考えが芽生え始めているのであろう

「なら、新八お前が見るヨ」

誰も見ないというのもつまらないので神楽は新八に万華鏡を渡した

「何でさ、神楽ちゃんが見ればいいじゃないか」

いきなり渡されて彼も困っているようだ

「私はまだ興味ないネ。それに新八は怖くない力？」

「怖いって何が？」

「お前、一生独身って感じがするアル」

「どんな感じだアアア！？分かったよ、僕だって結婚できること証明してやるよ」

「またもや、売り言葉に買い言葉といった感じで新八はその中身を見ようとした」

「ちょっと、その頭の中を覗いてみましょう」

(…もし、お通ちゃんだったらどうしよう？グフフフフ…)

「お通ちゃんと結婚か〜、結婚ってことはあんなことやこんなことまで〜」

「完全に変態さんな考え方で、取らぬ狸の皮算用をしています。あんなことやこんなこととは何のことでしょうね？皆さんの想像にお任せいたします」

「ウツヒヨ〜」

「妄想で何か楽しいことを考えたのか奇声を上げてその手にある万華鏡をのぞきこんだ。妄想で奇声を発するとか気持ち悪いですね」

「ヴォン」

「万華鏡の中には女性の姿が映され始める、新八も結婚できるようだ」

(キタキタキターー！！お通ちゃん！？)

「そしてくっつきりとその姿が映し出された瞬間…」

「嫌アアアア」

新八は持っていた万華鏡を思いっきり自分の目の前に投げつけた

「おい、アブねえだろ？」

目の前にはルフィがいて、一つ間違えれば彼に当たるところであった。彼がキヤツチしたので問題はなかったが

「嘘だ！ウソだ！うそだ！嘘だ！！」

神楽「どうした新八？」

泉「もしかして誰も映らなかったとか？」

ブンブン…

彼は首を横に振り否定した。だけど彼の様子はあからさまに怪しい

「ウワアアアアア！！僕はお通ちゃん一筋なのに…何で、どうして

…」

ヒステリーになりながら頭を抱えてのた打ち回る新八

神楽「そんなに結婚したくない人が映ったアルカ？」

ブンブンと、今度は首を縦に振って肯定

「何で…何で…

何でお通ちゃんじゃなくてかのんちゃんなんだアアア！！！！」

新八に見えたのは人気アイドルの中川かのんだった

「…それ、寧ろ良いだろオオオ！！！！」

周りにいた者たちは正論でツッコむ。スーパーアイドルと結婚でき

ることなんて滅多にないことですからね

「嫌だ、僕はお通ちゃんがいいんだ！！お通ちゃん以外のアイドルなんて全部糞喰らえなんだ！！」

「だけどさ、かのんちゃんの方がアイドルとしては何十倍もいいと思っよ？」

「何だっけ？あのお通ちゃん自身が作詞した曲…」

「“放送コードがなんぼのもんじゃい”だ！！」

「そうそう、それ只の放送禁止用語の羅列じゃない」
「つていうか、放送禁止用語の羅列にしたのはお通自身じゃなくて銀時たちなんですけどね」

「それに、その前の曲も耳を疑うような曲名ばっかだし」
「そんな曲を歌うアイドルなんかよりはかのんちゃんの方がいいって、人気もあるし」

「人気の有る無しで比べてんじゃねエエエ！！」
新八は声を荒らげ叫んだ

そして約30分間、世界一どうでもいいような“お通ちゃんの良さを知ろう”という授業が新八を講師に繰り広げられたのだがそれは丸々カットさせてもらう

そして、30分後

「ねえ、次は秀吉が見てみてよ」
そう言ったのは明久だった。

「む？なぜワシが見るのじゃ？」

「だって、秀吉がどんな男の人と結婚するのか気になるじゃないか」

明久は屈託のない笑顔でな秀吉に言った。万華鏡を秀吉に渡そうとしているが、赤色の女性用のぞき穴を秀吉に向けている。まるで“赤色のぞき穴を覗いてみて”と言っているかのような

「明久よ、何度も言うようじゃがワシは男じゃぞ！」

「そんな〜恥ずかしがらなくてもいいのに」

「恥ずかしがったくらいで性別を偽る者がどこにおるといっのじゃ！？」

居ると思いますけどね〜

「でも、見てみたらどうだ？」

そう言ったのは意外なことに雄二だった

「雄二まで一体どういう！？」

「待て、秀吉。お前が男だと証明するいい機会じゃないか。赤色のぞき穴から見て自分の姿が映ればお前が男だという証拠。そうなれば明久たちも男だと認めざるを得ないんじゃないか？」

(…なるほどのう。それは一理ある)

秀吉は雄二の言葉を受け止め、熟考すること1分

「分かったのじゃ、見てみることにするかの」

万華鏡を赤いのぞき穴から見てみることに決めたのだ

「はい、秀吉。いい人が映るといいね」
まだ、赤色ののぞき穴に秀吉の将来の相手が映ると信じて疑わない
明久である

(だから、ワシは男じゃというのに…)

秀吉は明久に呆れながらも赤色ののぞき穴から見ることにした

ヴォン…

中に誰かの姿が現れ始める

「おお…おお」

中に映し出された者の姿を見て声を出す秀吉

明久「で、誰が映ったの!？」

「秀吉、自分の姿じゃないって言うんじゃないでしょうね!？」
双子の姉の優子が秀吉に詰め寄る。彼女もこの結果が知りたくて仕
方がないようだ。もし本当に結婚相手が映ってしまったら、女だっ
てことになってしまいますからね

二へへへ

万華鏡から目を離すと、珍しくゆるみきった笑顔で詰め寄ってきた
優子の方を向く秀吉

「ど、どうしたのよ。気持ち悪いわよ?」

「ワシは真正銘男じゃ!!ワシの姿しか映らなかったのじゃ!!」
どうやら、万華鏡の中に映ったのは秀吉自身の姿だったようだ

「そ、そう。それは良かったわね。(よかった)。まあ当然の事

「なんだけど心配しちゃったわ」
優子も内心ホツとしているようだ

「ちえ〜、つまんないの。絶対（結婚相手が）映るって信じてたのに」

あからさまにガツカリする明久。その横では何故か康太もガツカリしていた

「さて、ついでじゃし青色ののぞき穴も見るとするかのかの」
そんな2人をしり目に青色ののぞき穴を見始める秀吉

ヴォン

その中には女性の姿が現れ始めた

（誰かのう、ワシの結婚相手になるのは…

む…何じゃ！？何が起きているというのじゃ！？）

秀吉は突然、万華鏡から顔を遠ざけた。その顔は青褪めている

「どうしたのよ？」

「いや、姉上。なんでもないのじゃ…（そうじゃ、これは何かの間違いか幻覚じゃ…最近、部活とクラスの劇の稽古と指導で疲れておるからかのう）」

スーハーと秀吉は深呼吸をすると、もう一度万華鏡の中を覗いたしかし、そこにはさつきと変わらぬ女性が映し出されていた

「な、な…なぜじゃ！？5人も映っているのじゃ！？」

「『5人!?!?』」

秀吉の言葉に周りの者たちは耳を疑った。無理もない、5人同時に映ったという事は、5人とハーレム結婚するという事なのだから…

次回、秀吉の5人の嫁の正体とは!?!?さらにもう1人、5人の女を娶る男がいた。その正体とは!?!?

第四十三話・恋と変という字は似ている（後書き）

次回、秀吉の5人の嫁の正体とは！？さらにもう1人、5人の女を娶る男がいた。その正体とは！？

意外な男がハーレムを作ると書いてしまいましたので、誰が一番意外かと考えたところ、木下秀吉がハーレムを作ることにしちやいまして。どんな感じでしょう？

あともう1人の5人とハーレム婚をする男は多分皆さん予想できると思います。今回のお話で妻にする数の最大人数は5人で秀吉とその1人だけが5人を娶ることになります

本当は今回で終わらせるつもりでしたが、こんなに長くなるとは…あと1話…いや2話くらいやるかもしれません

第四十四話：幸せと辛いという文字も似ている（前書き）

このお話に登場するラブラブ万華鏡の元ネタは、うる星やつらのラブブキャッチボールです。

第四十四話：幸せと辛いという文字も似ている

前回までのあらすじ

チンパンジーは俺の嫁 BY天神すすき理事長

明久「まさか、秀吉がこんなことになるとはね」

瑞希「でも意外です。女の子に興味がある素振りがなかった木下君が重婚するだなんて」

美波「確かにそうよね。木下が女の子の事で噂になることなんてまず無いからね」

「……」

当の秀吉本人は、黙っていて時々、「これは何かの間違いじゃ」などとブツブツ呟いている

「でも良かったな、秀吉。男だって証明できて」

そんな秀吉に雄二が声をかける

「それは、そうじゃが……こんなことになるのは嫌なのじゃ」

秀吉は元気なさげにそう答えた

樹「でもよ、よく考えてみるよ木下」

鍵「ハーレムだ、男のロマンだ！何でそんなに憂鬱そうな顔をするんだ!？」

一誠「いいじゃん、“いちご100%”に“TO LOVE”みたいになるんだぞ!!うらやましーな」

鍵「“TO LOVE”は“TO LOVE”でも、ダークネスの方だったりしてな」

一誠「何!?!木下、ダークネスな方になったら体験談を俺らに教え

てくれよな!!」

康太「…いつでも聞く準備をして待っている」

こいつらは相変わらずです。一体聞き出してどうする気なのでしょうね

「…意味わからんのじゃ。お主らは本当に呑気でいいのう。ワシの気も知らんで」

秀吉はそんな彼らを見て心底呆れている。

「ところで、秀吉の万華鏡に映った女の子たちって誰だったの?」

「全員、木下君の知ってる子?」

「…そうだったのじゃ」

「もしかしてその万華鏡に映った子、この中に居たりする?」

「……」

情報部である和美の質問に、秀吉は何も答える気配はない。だが、

チラ、チラ

と時々どこか2方向を見ているのは感じられた。その視線の先に相手が居るとでもいうのだろうか?

タイミングを見計らい、秀吉がその2方向を見た直後に彼女もその方向を振り向く
そこにいたのは…

「相手つてもしかして更識さんに、理子?」

「あつ!!」

秀吉は声を漏らした、どうやらそうなのだろう。

普段はポーカークフェイスな秀吉も今日はなぜか動揺しまくりだ。

「何々？」

「もしかして、秀吉君のパートナーって理子？」

和美に名前を呼ばれた2人は秀吉の元へとやってくる

「そ、それはじゃな…」

バレてしまったものの、まだ誤魔化そうとしている

「もう、往生際が悪いよー？そんな子はごうだ…」

楯無はワシヤワシヤと手を動かし始めた。そして、

「ひゃっ！！や、止めるのじゃ！！くっ、くすぐりたいのじゃ！！」
秀吉の身体をくすぐり始めたのだ。制服中の下着のシャツの中に手を入れている

「わゝ、面白そう。理子もやる…」

彼女もまた秀吉の身体をくすぐり始めた

「やつ、アツハハハ、腹が、ひいいい」

「止めてほしい？」

くすぐりながら聞く楯無

そんな問いに秀吉はコクコクと笑いながら、頷く

「なら、私たちが映ったかどうか本当の事を言ってくれる？あと残り3人誰が映ったのかもね」

「ヒイイ、わかった、アハハハ、のじゃ。確かに映っておった！！アハハハ、もうやめいて！！」

「で、私たち以外で秀吉君のハーレムに入ってるのは？」

「そ、それはじゃな…」

秀吉は残りの3人の名前も2人の攪り攻撃に耐えられず白状してしまった。残りの三人というのは、

「私が木下君の…パートナー…」

「冗談じゃないわ！何で私がハーレムの1人にならなくちゃならないのよ！！」

「私が木下君のね」

上から順に芙蓉楓、文乃、朱乃の3人である

「雄二に明久よ！！ワシはいつたいどうすればいいのじゃ？全員ばれてしまったわい」

秀吉は完全に元気がなくなっている。どうやら、最初に楯無と理子の2人しかバレなかったのは5人も一度にバレてしまったら自分の身が持たないと判断して2人しかバラさなかったようだ。

明久「どうするって言われてもね〜」

「いつその事、5人と付き合い始めたらどうだ？」

雄二はとんでもないことを言い出した

「雄二よ、なぜそんなことを言い出すのじゃ！！ワシは杉崎や兵藤と違ってそんな願望などないのじゃ！！」

もちろん、そんな提案に秀吉は反論する

「あれをしてみる」

秀吉にある方向を見させる雄二

そこにいたのは、万華鏡の中身を見ているナギの姿だった

「三千院は時たま、ああやって中身を見ている。もしかしたらハヤテが映るんじゃないかと思ってだろう」

そう、ナギは東宮と新八の間や、新八が“お通ちゃん”の良さを知ろう”の講義を行っている間も万華鏡を何度か見ていたのだ

泉「きつとハヤ太君もナギちゃんと虎鉄君が結婚しないようにあんなことをしてるんだと思うよ」

歩「でもナギちゃんのあの顔を見ると、事態は変わってないみたいだね」

ナギは万華鏡を見た後も暗い顔をしている。映っている人物が変わっていないのだろう

明久「ハヤテがあんなことをして、瀬川君と三千院さんを近づけないようにしても変わらないという事は…」

明日菜「多分、どう足掻いても結婚相手は変わらないってことでしようね」

「だから、木下君にはハーレムエンドしかないんだから、その現実を受け止めるしかないみたいね」

「そんな…、理不尽じゃ！！ワシにはハーレムを作りたいという願望は無いというのに！！」

「アンタは芙蓉さんたちを説得すりなりなんとかして認めてもらうしかないのよ」

美波「それもそうね、ハーレムなんて一朝一夕で出来るもんじゃないから」

サンジ「でもこんなに巨乳や美乳な子が集まったら“おっぱいパラダイス”が出来るな」

おっぱいパラダイスというのは多数の女子に一度に顔をおっぱいに埋めてもらうというものらしい。

一誠「それこそハーレムだからできること!!木下、もしそんなことになったら感想を教えてくださいよな!!」

康太「…期待している(トプトプププ…)」

こいつらは本当に相変わらずです。ムツツリーニはその“おっぱいパラダイス”を妄想して鼻血を流しているようだ。

「…ワシにはその道しか残されておらぬのか」

秀吉はしばらくの間、優子たち言葉を受けて(鍵たちの意見はほとんど無視で)何か考えていたようだが、

「決めたのじゃ!!」

姿勢を正して大きく深呼吸すると、集まっていた理子たち5人の元へと向かっていく。その姿には威風堂々としたいつもの彼とは違う男らしさというものがあつた

「おっ、お主ら!!」

理子「どうしたの、ヒデ君？」

「ひ、ひで君じゃと？」

楯無「そう、秀吉だからヒデ君。私たちが決めたんだ」

「そ、そうか」

朱乃「で、私たちに何か話ですか、ヒデくん？」

「突然、こんな事になってしもつて、ワシもじゃがお主らもとても動揺しておると思う。それに好きな人がおる者もこの中におるじゃろ？」

だから、強制もせんし無理強いもせん。じゃから、ワシと…」

「ワシと、何ですか？」

「友達から始めてくれぬか？」

「友達から…ねえ」

「ワシにはまだ5人全員どころか女子1人の面倒を見る甲斐性もないのじゃ。じゃから、ワシも努力してお主ら5人を面倒見れるように努力する。」

それまで、待つてくれぬかの？」

秀吉は力強く床に手を置くと頭も地面に当てた。そう、土下座をしたのだ

土下座をするまで彼も精神的に追いつめられている部分もあったのである

その証拠に約1分間土下座したのち、楓たちに言われ顔をあげた時彼の目からは零れるものがあつた

(((! ! ! ? ? ?)))

その姿を見た5人は皆同じことを考えた。

「……か、可愛い(です)…」

こんな、秀吉が真面目に土下座までしているときにこんなことを考えるのは不謹慎だと5人は思った。だが、美少女顔の少年が涙目で(土下座をしているので)上目づかいになっているという秀吉の今の姿はどこか母性をくすぐる物があつたのである

「ヒデくんって本当にかわいいですね」

そういうと、朱乃は彼を立たせて彼の身体をそっと抱きしめた。そして子供をかわいがるように彼の頭を撫ではじめた

「先輩ずる〜い、理子も理子も!」

「私もヒデ君の頭をナデナデしちゃおっかな〜」

朱乃に続き、理子や楯無も彼の頭を撫ではじめる

「うわ〜、ヒデ君の髪の毛超サラサラだ〜。文乃ちゃんやカエちゃんもさわってみてよ」

理子に促されるまま、文乃と楓も彼の頭を撫でてみることにした

「うわっっ、本当に木下の髪サラサラ：男の子とは思えないわ」

「いつも思うんですけど木下君ってズルいです。男の子なのに髪もサラサラで肌も綺麗で、何かしているんですか？」

文乃と楓の2人はまだヒデとは呼んでいない。きつと巧や稟の事を思い続けているのでしょうかね

「とくには何も…」（田貫）まことと同じシャンプーやボディソープを使わせてもらっているだけじゃ」

ああ、なるほどと楓たちや、その他の周りにいた女子生徒たちは思った。（田貫）まことは男であるのだがそれに逆らい、美しくあるために爪の先まで手入れをし、食事に気を配り、スタイルを保ち、細やかな動作まで気を配るなどといった努力をしていると聞いたことがあったからだ。

そのままでも十分かわいらしい秀吉が寮の同じ部屋で生活をしているまことにつられて知らず知らずのうちに女性らしくなっていたのかもしれない

「お主ら、ワシの話の事じゃが…」

「私は全然構わないよ、ヒデ君なりに考えてくれたみたいだし」

「私も構いませんわ、1人の男子高生が5人の女性の相手だなんて無謀な事。ですけど逃げ出さずに努力するといったことは称賛しますわ」

「私たちに出来ることがあったら言つてよね。勉強だつて見てあげるし、強くなりたいなら稽古だつてつけてあげるよ？」

「私も稟君のと一緒に朝食やお昼のお弁当を作ることはできますから」

文乃「私もアンタが欲しいっていうのなら差し入れくらいは作つてきてあげてもいいわよ。どうしてもってっていうのならね」

「お主ら、良いのか？」

秀吉は彼女らの発言を怪訝に思いそう聞いた

理子「何言つてんのさヒデ君。夫婦つていうのはお互い支え合つていくものだと思うな」

楯無「ヒデくんが一人前になるまで時間がかかって行き遅れちゃうのも困るし、頑張りすぎて過労死しちゃっても困るからね」

「お主ら…」

彼は感極まって再び涙を流している

「ねえ、ところでヒデ君」

「なんじゃ、り、理子？」

「私、ハーレムエンドって大っ嫌いなんだけど」

この人、今とんでもないこと言いましたよ。そりゃあハーレムエンドが好きな人なんて滅多にいないと思いますけど、今ここでいう事ではないはずだ

「お主、今までの話はウソじゃったと言うのか!?!」

「嘘じゃないよ、ただど〜私を本妻にしてあとの4人は妾にしちやえって提案してるのだよ」

「妾!?!?!」

理子はこの時周りに朱乃や楯無がいる中で言っただけだったので彼女たちが聞き漏らすはずもない

文乃「峰さん、それどういう意味!?!」

「どついうつてそのままの意味だけど? 理子がヒデ君のお嫁さんで〜その他4人がヒデ君の愛人ラメンって事」

朱乃「峰さん、何を冗談を言っただけじゃありませんの? ヒデくんの本妻は私に決まっていますわ。明日も私とデートの約束をしていますのよ?」

「朱乃さんよ、ワシたちはそんな約束は一度も…!」

理子「奇遇だね、私もヒデくんと明日デートするのに」

「理子よ、ワシはそんな約束は!?!」

楯無「あら、私も明日ヒデ君とデートすることになってるのよ?」

「楯無よ、お前もか!?!」

文乃「私だつて!?!」

楓「私もです!?!」

「お主らまで!?!お主らには都築や土見があるのではないのか!?!」
きつとデートをしなかったら愛人扱いをされてしまつと微かながら考えているのでしょうか

こんなことになってしまったから、聞かれる質問はただ一つ

「ヒデ（木下）（君）って誰を本妻にしたいですか（の）？」

「そ、それはじゃな…」

完全に空気が一変。秀吉に誰が本妻になるかという究極の選択が迫られることになった

逃げ出したくても八方ふさがりの状況でそれが出来ない

彼女たちの顔色を窺うと笑顔な4人と明らかに不満だという表情をしている文乃。笑顔な4人ももし選ばなかったら何かをしそうな勢いである

秀吉は教室の中にいた当麻を見つけた。彼に（お主の言葉、使わせてもらうぞい）と心の中で言うと

「不幸じゃあああああ！！！！」

と叫んだ。

そして秀吉争奪戦の火ぶたが切って落とされたとか…

次回、もう1人のハーレム男の正体も判明、あと皆さんが気になっている唐変木な奴らがどうなるかも分かるかも？？

次回に続く！！

第四十四話：幸せと辛いという文字も似ている（後書き）

次回でラブラブ万華鏡の話は無理矢理終わらせると思う。そのため今回は薄っぺらくなるかもしれませんが

その次は人気投票の結果発表。もしくは、ハヤテが虎鉄へ対する振舞いに反省をするお話（先に言っておくがドッキリではない）と思われず。

人気投票の結果発表の時に文化祭4日目の大イベントのチーム分けを出来たら発表しようと思います

人気投票最終投票は終了いたしました。

第四十五話・ラブラブとトラブルという文字も似ている、つまりはそっくりし事

皆さま、沢山の投票ありがとうございました

次回、人気投票の結果発表をいたします

第四十五話：ラブラブとトラブルという文字も似ている、つまりはそいつの事

「さて、次は誰が見るんだ？」

自分の結婚相手が分かるラブラブ万華鏡。それは波乱を巻き起こしていた。

ナギが見た時は虎鉄が映り、ハヤテは虎鉄をナギに近づけさせないため血も涙もない行為を虎鉄に働いた

ヒナギクが見た時は誰も映らず、彼女の事が好きだと言っていた東宮は他の女2人と重婚することを知りただいま彼女は彼へ拷問している最中だ。

秀吉は赤いのぞき穴ではなく青いのぞき穴に結婚相手が映り彼が男だと証明はされた。しかし、その相手が楓、楯無、文乃、理子、朱乃の5人でありひょんなことから彼を巡る争奪戦が始まった。

理事長にはチンパンジーが映り……まあ、これは放って置くとして

その波乱を見てか、万華鏡に手を伸ばす数は少なくなっていた

「なら俺がみてやるぜい」

そんな中、見ると言い出したのは総悟だった

「沖田先輩、いいの？」

「なに、さっきの木下の話を聞いていたんだが早いうちから意識しておくのもわるくねエと思っただけだ。木下も言っただが今すぐ付き合い始めなくてもいいからなア」

総悟は机の上に置いてあった万華鏡を取ると青色ののぞき穴を自分

の目に当てた

ブォオン、と音を立てて映し出される女性の姿

「……」

無表情で一度万華鏡から目を離すともう一度その中身を見た。しかし映し出された女性の姿は変わらない

「どうやら俺も5人の女を娶るみたいでさア」

再び万華鏡を目から離れた総悟の第一声はこれだった。どうやら、2人目の5人とハーレム結婚をする男というのは総悟のようだ

「……なにイイイイ!?!?!?」「」「」

「で、誰が映つたの、ねえ!?!」

「沖田君が2人目のハーレム婚する人だったとはね……」

「誰って言われても名前分かるの仲村ぐらいしかいねえから、誰か女に詳しい奴いねえか?」

「わっ、私!?!?私が沖田君のパートナー!?!?」

総悟に突然名前を言われてゆりは戸惑っているようだ

「どうやらそうみたいだ。こん中に仲村の姿が映ってたからな」

「そ、そう……で、残りの4人は誰なのよ?」

彼女の頬は少し赤くなっていた。彼の事を少なからず意識しているのであるつか?

「さっきも言ったが、誰だかは分からねエ。だが、この学校の生徒

ってことは違いねえようだ。どれも見知った顔だからな」

「…ならばこれを」

残りの4人が分からないという総悟に康太はとある表を取り出したその表にはクラス毎にそのクラスに所属している女子生徒の名前と顔写真が載っていたのだ。総悟はそれを順に見て自分の万華鏡の中に映った人物を探した

「おっ、居やがった。コイツとコイツと…」

彼は万華鏡の中に映った人物を見つけると指差していった

程無くして総悟の万華鏡の中に映った残りの4人が呼び出された

呼び出されたのはセシリア、ハクア、星奈、亜美の4人だった

「で、私たちが沖田先輩の相手ってワケ？」

「アア、そうだ。俺も正直驚いてるんだがな」

「沖田先輩はそれでいいのです？好きな人はいませんか？」

「今ん所はいないから別にいいと思ってる。それに、さっき同じハイレム婚の木下の姿を見ていたが俺もこうなっちまった以上責任を取らねエとな」

「責任って？」

「その責任について話があるからついてこい。俺とこれからの事について話をさせてくれ」

総悟は何処かに5人を連れて行った。5人はこれからの事という事

もあるので付いていくことにした

しばらく歩いたところで着いたのは薄暗く誰もいない空き教室だった

「こんなところで話って」

「先輩、場所変えられないの？」

「だってこれから話すことプライベートな事だろ？だから他の誰にも聞かれないように場所を選んだんだ。あと、これをつける」

そういうと、総悟はポケットの中から何かを取り出した

「これって…」

「首輪よね、どっからどう見ても」

彼女たちの言うように、総悟が取り出したのは紛れもない首輪だった。リードもばっちりとしている

普段から彼はこのようなものを持ち歩いているのだろうか??まあ、持ち歩いているからここにがある訳なのだが。

「まず手始めにそれをつける」

総悟は強く彼女たちに言い放った。その目はまるでメス豚をみるかのような目をしていた

「嫌よ、こんな恥ずかしいこと」

「そうですね！私たちは先輩のペットではないのですのよ!??」

勿論、そんな要求を簡単に呑むような彼女たちではないので反論している

「グチグチ言っつてねエでさっさと着ける、メスが」

総悟の口から問題発言が飛び出しました。今完全に「メス」と言い

ましたよ。

「さもねえと…」

「「「さもないと…??」「」」

薄暗い空き教室に訪れる沈黙

果たして彼女たちの運命はいかに!?

教室に視線を戻してみると新たななる波乱が次々と巻き起こっていた

一夏が万華鏡を見た時、その中にはなんと黒子が映っていたのだ

「ま、まあいきなりこんなことになっちまったけど宜しくな？」

と、一夏は笑顔で接しようとして握手を求めたのだが

パシッ！とその伸びた手は弾き返され

「貴方のせいで私はお姉様と…お姉様と…結婚できないのですわアアア!!!」

と黒子は半狂乱になってしまった

その姿を見て危機を感じ、一夏は逃げ出そうとしたが黒子は一夏の動きを先読みしてレポートを行い一夏の逃げようとする場所に現れ彼を殺そうとしていた。

一夏がいなくなれば結婚できなくなり運命が変わると思っているのだらう

「おい、筈たち助けてくれよ!!!」

と一夏は逃げながら篝たちに助けを求めるものの、

「ロリコン」「」

と、篝・鈴音・シャルロットには罵られ

「まったく、なぜ私と結婚しないんだ。一夏は私の嫁だろ?」

「ラウラ!! 助けてくれ、頼むよ!!」

「裏切り者に用はない」

と言ってラウラも一夏の話の聞かなかった

そして彼と黒子の鬼の見えない、捕まったら殺される鬼ごっこが始まったのだった

鍵に映ったのは何と翔子だった

「霧島さん、いや翔子。俺と君は結ばれる運命にあつたみたいだね」
翔子に近づきキザな言葉で彼はその事実を伝えた。しかし、

ドゴツツツ!!

「グハツツツ!?!」

鍵は彼女が何故か持っていた釘が打ちつけられたバットで一撃必殺
その場に倒れこんでしまった

「…雄二、浮気は許さない」

「何で俺が追いかけられるんだアアア!?!」

そして雄二と彼女との追いかけてこが始まった

当麻の場合、映ったのは…

お登勢だった

小萌「上条ちゃん、頑張るのですよ。私は何があっても上条ちゃんとお登勢さんの仲を応援するのですよ」

元春「カミヤんがそんな年上イケるとは思ってたぜい」

青髪「カミヤんってそんな趣味あったんやな〜」

美琴「もう結婚というより介護よね。（何で私よりそんな年上のおばあさんを選ぶのよ、頭がおかしいんじゃないの!?）」

インデックス「とうまがそんなことになっちゃうなんて私どうすればいいのか訳が分かんないんだよ!!!」

色々な人からかけられる慰めや驚きの言葉

インデックスも普段なら噛みつくところだがいきなりそんなことを告げられて混乱しているようだ

「不幸だアアアアアアア!!!」

当麻のこの叫びは悲壮感がいつにもましていたという

等々あって、2Aのクラスは現在大惨事の一步手前まで荒れていた

「大変みたいだな〜どいつも」

「そうアルナ〜」

荒れている当麻や明久たちを見ながら試召戦争の時のカップラーメ
ンや焼きそばを頬張るルフィと神楽。

彼らは色気よりも食い気、花より団子といったところでしょうか

「うう…ひどい目に遭ったのじゃ…」

「どうしたのよ秀吉？」

優子が秀吉に声をかける。彼はどことなくやつれている感じがした

「誰を嫁にしたいのかと迫られたのじゃ。でもワシは選べなかった
のじゃ

そのことをはつきり伝えたのじゃが、芹沢は百回死ねと言いながら
平手打ちをしてくるし、楯無はISを（部分）展開して、理子は銃
を突き付けようとして、朱乃さんは手に作った魔法の弾を外しはす
るものの撃ちつけてくるし、芙蓉は庖丁を持ちながらブツブツ何か
を言っておって…といういろとひどい目に遭ったのじゃ」

「…ちくしょ〜こんなはずじゃなかったのによオ…」

今度は半ベソでやつれている総悟が帰ってきた

「どうしたの、総悟君？」

「んア？高町か…聞きたいのか、俺の話を」

彼は元気なさげになのはに聞いた

「総悟君がそんな表情するの珍しいから何かあったのかな〜って
思っただけになっちゃって」

「でも、沖田君が嫌なら話さなくてもいいよ？」

「…俺は、仲村たちを調教す（かわいいが）るつもりでいたんでさア」
「ねえ、聞きまちがいかな？変な言葉に“かわいいがる”ってルビ振ってあつた気がしたんだけど」

「首輪をつけるところまでは上手くいった。その次にあいつらの身体にボディペインティングをしようとした

1人目のオルコット、2人目の川嶋、3人目の柏崎までは上手くいったんだ。だが4人目のハクアに手を伸ばそうとした瞬間、首に違和感を感じた

そう、俺に首輪がつけられていたんだ。その首輪は仲村のモンだった。俺は仲村から俺と同類の視線を感じた」

同類の視線というのは、きっとDSな視線のことでしょうね

「その目を見た時にはもう遅かった。あいつ等は俺の目の見えない場所でコソコソと俺に復讐する計画を立てていたらしい。その後は残りの4人も仲村の味方に付いて、俺が持ってきていた（ピーー（や）（ピーー）で俺の身体を……」

「なんとというか…」

「因果応報だね」

まったく、なのはの言う通りである。さっきも言ったがなんという物を持ってきているんだと言いたくなります。

そんな荒れに荒れていた教室の中で誰かがリモコンのボタンを押したのか、TVのスイッチが入った

『次のニュースです。葦山さんお願いします』
この時、やっていたのはニュース番組だった

『はい、続いてはこちらの万華鏡の話題です』

「おお、このテレビの万華鏡、ラブラブ万華鏡ネ。ズゾゾゾ」
葦山というアナウンサーが手にしていたのは神楽の言うように騒動を巻き起こしたラブラブ万華鏡だった

「すげえな、テレビで取り上げられるほど人気なのかコレ？ズゾゾゾ」

『この万華鏡、日本で昨日発売されたラブラブ万華鏡と呼ばれる自分の結婚相手分かるものなのですがとんでもない欠陥が発覚したのです』

「「「欠陥!?」「」」

葦山キャスターの言葉に、今まで暴れていたたりしていた人たちは手を止めてそのテレビに注目するようになった

『で、その欠陥とは一体何なのですか?』

『はい実はこの商品、地球の地磁気だとかのなんやかんや地球の影響を受けてしまふんです』

『なんやかんやって何ですか?』

『なんやかんやは、なんやかんやです』

『そのなんやかんやの影響を受けてしまった場合、その万華鏡はどうなるのですか?』

『結婚相手ではなく、“結婚したら自分が不幸になる相手”が映っ

てしまうようになるのです』

その後も葦山アナによる説明は続いた。結婚したら自分が不幸になる相手なので相手が見たら自分が映るとは限らない事、また誰も映らない時はそれなりに幸せな生活が送れるという可能性もある事等々

当麻「つてことは…」

ナギ「あの変態と結婚しないで済むのか!？」

神楽「そうみたいネ、よかつたなナギ」

ナギ「ああ、早速ハヤテに知らせてくるのだ!！」

そういうとナギはハヤテが未だに虎鉄にお仕置きをしていると思われる校庭に向かって駆け出して行った

「そうか、ワシもハーレム婚せずに済むのか!！」

「あの女共と結婚しないで済む」

秀吉と総悟は嬉しそうだ。

「ヒデ君、私と付き合つのがそんなに嫌だったの？」

「私傷ついちゃうな〜」

「そんなわけではないぞ、ワシだってあの告白は真剣だったのじゃ!」
「!」

「「なら私と付き合っちゃおっか?」」

「で、でもワシが不幸に…」

「たとえ不幸になるとしても男の子なら好きになった女の子を一生愛し続けるべきだと思っな〜」

「別にワシはお主らの事は」

「好きじゃないの？」

「好きじゃないというわけではないのじゃが…（さっき、抱きつかれた時も少しだけじゃが興奮してしまったからの）」

「なら私たち2人でヒデ君争奪戦開始だね」

「負けないよ、楯無ちゃん」

「私だつて負けないんだから」

笑顔でライバル宣言をする理子と楯無

「ところで、残りの3人はどうしたのじゃ？」

「カエちゃんや文乃ちゃんたちなら」

「それはそれで悲しいがのう。真剣にしたのにお座なりに扱われてしまうのは」

確かに“友達から始めよう”と言ったもののその先にある物を加味していたつもりでいた秀吉にとってその告白をお座なりにされてしまったのは何とも言い難いものがあるのかもしれないね

その頃の銀時と織斑千冬はというと…

「トイウコト、スマナカタ銀サン」

こちらもラブラブ万華鏡もといトラブル万華鏡を銀時と交換した才

ツサン（宇宙人）から話を聞いていた
ちなみに、オツサンが見た時映っていたのが奥さんだったのは地球
じゃない他の星で穴を覗いたからである

また、理事長が見た時映っていたのは本当の奥さんではなくルワン
ダで出会った本物のチンパンジーである。いくら自分の奥さんがチ
ンパンジーに似ているとはいえ見間違える事はないだろう

「あ、そ、そう。ハハハハハ、そうか、そうか。アハハハハ」

銀時は苦笑いをしながら千冬の方を見た

ちなみに現在の状況はというと、銀時と千冬の2人きりで居酒屋の
カウンター席に座っていて彼がいつ万華鏡の事について話そうか迷
っているときに、銀時に万華鏡を渡したオツサン（宇宙人）が来て
万華鏡がトラブル万華鏡であることを伝えたのだ

「ほう、その顔から察するに坂田先生は私にプロポーズをしようと
こんな居酒屋に連れ出したのだな？」

「いいえ、滅相もございません！！確かに映ったには映ったけどそ
んなプロポーズだなんて高尚なことを」

鬼と呼ばれるほど厳しい事で有名な千冬を目の前にして何をされる
か分からないと思った銀時は思わずも敬語になっている。しかも土
下座までするほどです。どれだけ恐れているんでしょうね

「坂田先生、何時まで土下座をしている？顔を上げてくれ」

「ハ、ハイ！！」

銀時は千冬 of 言葉に恐る恐る顔をあげてみる

「もう一度飲み直そう」

「へ？」

「だから、もう一度飲み直そうと言っているんだ。早くしないと私が全部飲むぞ？」

そこには日本酒グラスを手で振りながら呑もうと誘っている千冬がいた。千冬の顔を銀時は注意深く見てみたが特に怒っている様子もない

「お、おう。なら…」

銀時も正座状態から再び立ち上がり、再びカウンター席に座ると改めて2人は飲み始めた

「言っておくが坂田先生。私は坂田先生でも…」

「んあ、何か言ったか？」

千冬が何かを言った気がして銀時は彼女の方を見る。ビールを勢いよく口の中に含みこんでいた銀時は千冬が何かを言っているのはわかったが何を言っているのかは分からなかったのだ

「いや…秘密だ」

そこには、何かを含んだような微笑みでそう言いグラスの日本酒を飲む千冬がいた

第四十五話：ラブラブとトラブルという文字も似ている、つまりはそついでいふ事

ラブラブ万華鏡もといトラブル万華鏡のお話どうだったでしょうか。もつと他の人の分も書きたかったのですが…

時間がだいぶ開いてしまつてすみません

言い訳をしますと色々あったのです。大学のテストやレポートだったり、ドラマ“BOSS 2nd SEASON”や“交渉人？”のノベライズ本や西村京太郎先生の作品を読んだり等々です

皆さまご投票ありがとうございました。投票総数460票です
結果は近いうちに発表したいと思ひます

投票結果発表の次はハヤテが虎鉄への振舞いに対して反省をするお話にするつもりです。

番外編：人気投票結果発表と文化祭予告（前書き）

今回は5月23日～7月15日まで行われた人気投票の結果発表で
す

番外編：人気投票結果発表と文化祭予告

それでは、1～5票獲得した面々をから発表していきましょう

1票獲得者 第70位

文乃 霧谷希 真冬 くりむ 真儀瑠 ヴィヴィオ シグナム
お登勢 緋鞠 織斑千冬 鳳鈴音 更識楯無 吹寄 秋沙 さわ子
鈴木純 真鍋和 桂馬 エルシイ 竜児 吉備津桃子
山崎退 土方 近藤 明久 美波 雄二 康太 咲夜 アテネ 雪
路 瀬川泉 橘ワタル
夕映 まき絵 のどか 千雨 雪広あやか 村上夏美 早乙女ハル
ナ 大河内アキラ 那波千鶴
鬼瓦みちる 阿久根高貴 諸葛亮朱里 愛紗 亜紗 美緒
以上の48名

2票獲得者 第46位

布仏本音 セシリア 篠ノ之束
沢田慎 ルフィ レキ 大神涼子 森野亮士
八神はやて フェイト・テストロツサ スバル・ナカジマ
黒崎朱湊 沖田総悟 木下秀吉 人吉善吉
月詠小萌 土御門元春 青髪ピアス 近衛木乃香 桜咲刹那
中川かのん 椎名深夏 坂上智代 千堂瑛里華
以上24名

3票獲得者 第38位

日向秀樹 サンジ 霧島翔子 瀬川虎鉄 東宮康太郎
逢坂大河 高町なのは インデックス 白井黒子
以上の9名

4票獲得者 第31位
神楽 古河渚 春原陽平 仲村ゆり 綾崎八ヤテ 西沢歩 平沢憂
以上7名

5票獲得者 第19位
織斑一夏 ユークリウッド 相川歩 瀬能ナツル 三郷雫
嵩月奏 夏目智春 ユイ 音無結弦 草壁美鈴 遠山キンジ 秋山澪
以上12名

でした

その次は惜しくも10位以内に入れなかった方々をご紹介します

第15位 6票獲得
志村新八
岡崎朋也
星伽白雪
桂小太郎

第14位 7票獲得
神楽坂明日菜

第13位 8票獲得
ネギ・スプリングフィールド

第11位 9票獲得
神崎・H・アリア
杉崎鍵

それではトップ10の発表にまいりましょう

第10位 11票獲得

篠ノ之箒

第8位 12票獲得

平沢唯

桂ヒナギク

第7位 15票獲得

ハルナ (これはゾンビですか?)

第6位 18票獲得

立華かなで

第5位 19票獲得

御坂美琴

第4位 20票獲得

上条当麻

そしていよいよトップ3の発表となりました

第3位 23票獲得
シャルロット・デュノア

第2位 28票獲得
三千院ナギ

そして堂々の第1位は

34票獲得

坂田銀時

でした。銀さんが堂々の第1位です。そして唯一の30票以上獲得者でもあります
優勝した銀さんには何か1位だと思えるようなものを作者の心の中で贈呈いたします!!

そして次はこの結果を基にした文化祭4日目のイベントのグループ分けの発表です

A イメージ車両：JR九州885系かもめ
銀時 ナギ シャルロット 当麻 かなで ハルナ

B 京急2100形
御坂美琴 ヒナギク 平沢唯 篠ノ之箒 アリア 明日菜

C JR九州883系ソニック

M JR東日本E653系
青髪ピアス 時雨亜紗 ウソップ 夜空 リアス 明久

N 東急5000系
くりむ 朱乃 星奈 緋鞠 アテネ めだか

O JR東日本185系踊り子
土方 山口久美子 竜児 ナミ 咲夜 エルシイ

P 北越急行683系はくたか
織斑千冬 島田美波 宮崎のどか くえす 朱里 雪子

Q E233系東海道
千桜 優子 理子 藤林杏 村正このは 遠坂凜

R 京成スカイライナーAE形
芙蓉楓 乙姫 フィア セイバー 川神百代 ホライゾン

S JR東日本E257系あずさ・かいじ
りんご 川嶋亜美 ジャンヌ 夕映 黛由紀江 葵・喜美

T JR四国8000系しおかぜ・いしづち
近藤 康太 一誠 小太郎 直江大和 葵・トリー

選抜方法

2票以上獲得者はそのままチームに振り分け

1票獲得者の中から2票以上獲得したキャラの居ない作品の中から優先的に選抜

上記で登場していない作品のキャラの中から1〜2名選抜して振り

分け

残りの1票獲得者・投票されてないキャラの中で作者の好きなキャラを作者の任意で振り分け
つまり最後の方のチームは作者の好みが入っています。Qチームは完全に作者枠ですし…

文化祭4日目のイベントではこのような企画を予定しています

6人で答えを合わせろ

(例題、可愛い動物の定番と言えば？ 学生食堂の定番料理と言え
ば？)

逆に(6つしかない物の中から)6人で別々のものを選び

(例、6つの更衣室に赤・青・黄・白・黒・緑のTシャツが用意されて同時に着替えて6人別々の色を着る)

2択クイズ

(例題、年上なのはどっち？ A徳光和夫 B松形弘樹 この場合はAが正解)

分以内にサイコロのお題をすべてこなせ

(例、6分以内にサイコロに書かれたメニューを食べる。何度同じものが出ててもそれを食べなければならぬ)

6分以内に をしろ

(例、ダブルプレー・超デカ盛り料理(約40人前)を完食)

等々、6人のチームワーク・絆が試される企画をするつもりです。

2択クイズとか例外がありますが…

他にも企画を検討中です

このイメージ車両を用いたイベントも企画中ですなので楽しみに！

！

第四十六話：誰もが一生に一度は病院の世話になる（前書き）

注意）今回はちょっととした医学ネタです。でも作者は医者でも医大生でもないので無理矢理なところ、実際の症状との誤差があると思います。

例として、脳震とうは脳がダメージを受けた直後に起こる物なのですが、このお話では展開上数時間後に発症することになります

第四十六話：誰もが一生に一度は病院の世話になる

ここは男子寮0301号室で今は夜7時、ちょうど夕食時です

「「「いただきまーす!!!」「」」

どうやら、ここの住人であるハヤテやルフィたちも夕食を食べているようです。ちなみに今日の料理は鶏のから揚げです。

ルフィ「うひょ〜、このから揚げうめえな!!」

ウソップ「ああ！衣はサクサクだし味付けも最高だな」

チョッパー「うめえ、ハヤテの作る料理はいつもおいしいな」

「ありがとうございます」

このから揚げを作ったハヤテらしく褒めてもらってとてもうれしそうだ。

チョッパーはこの0301号室で飼われていて昼間は保健室で治療のお手伝いをしています

「ハヤテ、後でこれの作り方教えてもらっていい?」

「俺も気になるな、教えてくれるか?」

「ええ、いいですよ」

食卓を囲み和気藹藹と食事をとる。本当の家族ではありませんが一家団欒と言ってもいいですね

コンコン

しかし、このノックの音がこれから始まる悲劇のイントロであると
はだれも思っていなかった

明久「誰だろ、こんな夕食時に」

「僕が出ますね」

そういうと、ハヤテは玄関に向かった

ハヤテがドアを開けた時、そこにいたのは

「……お邪魔する」

「いい匂いがするけど夕食中だったかい？」

0303号室の利光と康太^{ムゲンルーニー}だった。

「どうしたんですか？こんな時間に」

「……多分時間を争う一大事」

「一大事？何かあったんですか？」

「ああ、でも何があったか分からないんだ。チヨッパ^君に診てもらわないと」

「ん〜、オレがどうかしたか？」

自分の名前を利光に呼ばれ、チヨッパ^君も玄関へとやってくる

「チョッパー君、今から僕たちの部屋に来てくれないか？」

「いいけど何があつたんだ？」

何があつたのか聞かされていないチョッパーは首をかしげながらそう言った

「…瀬川が倒れた」

康太から発せられた言葉は誰もが思つてみなかったことだった

場所は変わつて0303号室

チョッパーを含めた0301号室の面々が部屋に入ると目に飛び込んできたのはトイレの前で頭を抱え込み腹を押さえて項垂れている虎鉄の姿だった。ウウウ…とうめき声のようなものもあげている

「オイオイ、一体何があつたんだ？」

「いや、分からない。だからチョッパーを呼んだ」

「食事の最中に吐き気を訴えてたからトイレで吐くように言ったんだ」

「その後、何か物音がしたから様子をみたらこんな事になっていた」

「一時気絶していたみたいで揺すつてもしばらく起きなかつたんだ」

「なっ!?!?気絶までしていたのか!?!?」

チヨツパーは恐慌をきしたような顔で聞いた

「あ…ああ。だけど頬を強く叩いたら起きて今みたいに腹と頭の痛みを訴え出した」

「オイオイ、気絶ってヤベェんじゃねえのか？」

「おいチヨツパー、こいつ何でこんなことになってんだ？」

「分からねえ。気絶と腹痛から銀さんと同じで結石が考えられるが…」

チヨツパーは一つの可能性を提示してみた

「それは無いな。」

「ああ、あんなことになってから食生活には気を付けるようになったからな」

あんなことというのは銀さんの尿管結石の件でしょうね。

銀さんが荒れた食生活で結石になってからより一層生徒たちは油物を食べ過ぎたりしないなど結石にならないよう心掛けるようになっているのです

「よく白雪や理子から話を聞くが、こいつは銀さんの一件の前からも食事に気を使っていたらしい。だからこんな事になるなんて考えられないぞ？」

「瀬川君、僕たちの食事を作るときも栄養面の事もよく考えて作ってくれるからね」

虎鉄は泉の執事をしているので泉と同室の6人の食事をよく作っているのです。

こつやつて見てみると、虎鉄ってあれでも執事の仕事をがんばってるんですね

「やっぱりそうだよな〜。なあ、なんかコイツに変なことが無かったか誰かわからないか？」
チヨッパ―は周りを見回して聞いてみた。

「アツツツ…」

「どうしたんだハヤテ？」

「いや…まさかとは思いますが、僕今日虎鉄君にいつも以上にしくく付きまとわれて一回こめかみを思いつきり殴ってしまったんですよ…」

「なっ、お前そんなところを殴ったのか!？」

「えっ、ええ。でも仕方なかったんですよ。この人何回言っても聞かないで迫ってくるから…」

「もしかしたら…」

「何かわかったのか？」

「もしかしたら、脳震とうかもしれない」

「脳震とうってよくプロボクサーとかがなるアレか？」

脳震とうとは簡単に説明しますと頭部に衝撃を受けることにより起こる、一過性の神経機能麻痺で、一般的なものは数分で治る、外傷性のももあるといったようなものです。

「マズいな…」

ウソツプ「何がまずいんだ？ナレーションでも言ってるが数分で治る物じゃないのか？」

「一般的にはな。だけど気絶するようになるとタチが悪いんだ。今すぐ救急車を呼んだ方がいい。医療機器の整った所で治療を受けた方がいいからな」

医者であるチョッパーの言葉もあり、虎鉄はそのまま救急車で運ばれた

だが、彼にはまだ疑問が残っていた

「脳震とうじゃ、嘔吐もしないし腹痛もない。この2つはなんなんだ？」

そして場面は救急病院へと移ります

ハヤテたち0301号室の面々やキンジたち0303号室の面々は処置室の前で待機していた。

話を聞きつけてか担任のネギに泉たち女子生徒の一部もいる

「ねえ、本当なの？虎鉄君が危険な状態だつて」

ハヤテ「まだ分からないです。いまカエル先生とチョッパー君が詳しい検査をしてるのですが…」

ネギ「で、瀬川さんの容態はどうなんですか？」

「まだ激しい頭痛と腹痛は続いているらしい。救急車の中でも一度出したとか。カエル先生の初見だとチョッパーの言ってた脳震とうとストレスが原因の胃炎だろうつて」

ネギ「ストレスの胃炎？何で瀬川さんが…？」

「…何でつて…」

明久やキンジたちは一点に視線を移した

「……って！！何で僕の方を見るんですか！？」

そう、ハヤテである

「だって、脳震とうになった原因はお前が殴ったからだろ？」

「それに日頃からハヤテが瀬川に暴力や暴言を吐いているのは見慣れてるしな……」

「もしかしたらそれがストレスになってたのかもしれないぞ？」

確かにこの物語の中だけでも第七話で頭部を殴る、第三十六話で“ゴキブリを触る方がマシ。虎鉄に選ばれるなんて自殺したくなる”と言ってますからね

840

「彼は綾崎君と仲良くしたいだけだったはずなのにね…僕だって…」

「???どうしたの久保君？」

「いや、なんでもないよ」

利光が何かを言いかけてましたが深追いはやめておきましょう
「さつきも言いましたけど、あの人は本当にしつこすぎるんです！
！それに僕が嫌だって分かっているのにそれでも付け回してくるんですよ！？皆さんだっていやでしょ、付き纏われるのは！！」

「…確かにそうかもしれんな」

「…俺も何となくだが、気持ちにはわかる」

雄二とキンジには思い当たる節があるようで少し納得しているようだ

「けどこんなになるまで殴るなんて…ひどいよ、ハヤ太君」
そう言ったのは意外にも泉であった

「私、救急車で虎鉄くんが運ばれて本当に心配したんだよ。死んじやうんじやないかって」

彼女の目にはうっすらと涙が光っていた

「瀬川さん…」

「お母さんが死んじやって、お兄ちゃんまで死んじやったらどうしようって…」

「泉、泣くな！あの虎鉄なら死なないって」

「虎鉄が泉を残して先に逝くわけないだろ？」

美希と理沙の2人は泉を慰めている

（確かに僕が悪いのかもしれない。

面と向かって話し合えば分かり合えたり、お互いに納得のいく方法を導けたり出来たかもしれないのに…

僕が一方的に殴ったり暴言を浴びせたりして虎鉄さんの言う事を聞かないで…

自分の感情のままに虎鉄さんを否定し続けて…

そのせいで虎鉄さんがこんな事になって、泉さんを悲しい目に遭わせてしまった…

なんて僕は浅はかなんだろう…）

ハヤテは泉の姿を見てこんな事を思い始めていた

ウィーン

処置室のドアが開いた。中からチョッパーとカエル顔の医者が出てきた

「先生！お兄ちゃんは!？」

「彼なら心配いらないよ、命に別状もない。それに胃炎でも脳震とうでもなかったよ」

「ごめんな、心配かけて。オレもまだ医者として半人前だな」

「気にすんなつて。で、アイツの病名は何だったんだ？」

「……」

ルフィの問いに医者とチョッパーは顔を見合わせて何も言わない

「ま、まあ、命に関わるような重い病じゃないことは確かだから気にすることは無いんじゃないか？」

と言うチョッパー。明らかに何かを隠しているようだ

ガチャンガチャン…

ストレッチャーに乗って虎鉄が運ばれてきた。だが、彼は目を閉じたままだ

「心配しなくていいぞ、ヤツは落ち着いて眠っているだけだからな」

虎鉄はそのまま、病室へと運ばれていった

数時間後、虎鉄が目を覚ました。

本来なら面会時間は過ぎており面会できないはずではあるが、彼を心配している泉と彼に謝りたいというハヤテは特別に許可が下りた

「なあ、ハヤテ」

病室に入ろうとしたハヤテにチョッパーが声をかけた

「どうしたんですかチョッパー君？」

「お前はこれから起こる事に驚いたりするかもしれない。けどな、何があってもヤツの前では暴れたりしないでくれよな？」

「????？」

ハヤテはチョッパーの言っていることが分からなかった。死と直結する病じゃないのになぜこんな事を言うのだろうかと…

病室のドアが開けられ、2人は中へと入って行った

「虎鉄君!!！」

「どうしたんだ、お嬢？いきなり抱きついてくるなんて」

「心配したんだよ！虎鉄君が救急車で運ばれて…でも安心した」

「そうか、心配かけて悪かったな…」

虎鉄は自分の胸で泣いている泉の頭をそっと撫でてあげた。

しばらくしてその様子を見ていたハヤテと虎鉄の目があった

「綾崎も来ていたのか」

(謝るには今しかない!!)

ハヤテは意を決し、腰を90度曲げて頭を深々と下げると

「ごめんなさい虎鉄さん!!今まで酷い事ばかりしてしまつて…

泉さんを含めて皆さんに言われたんです。

それに泉さんの泣く姿を見たら…自分がどんな酷いことをしたのか」

自分の今の謝罪の気持ちを述べていった

「綾崎」

「なんですか、虎鉄さん」

虎鉄に呼ばれて頭を上げるハヤテ

「俺は気にしてない。こうなったのも自業自得だと思ってる。だから気にするな」

虎鉄はハヤテを元気づけるように言った。その表情に起こっている様子は微塵もなく、寧ろ慈愛に満ちた表情ともいべきだろう

「虎鉄さん…」

「なあ綾崎、手を出してくれないか？」

「手ですか??いいですけど」

ハヤテはちよつと疑問に思いつつも虎鉄に自分の右手を差し出した

虎鉄はその右手を自分の右手で掴むとそっと自分の腹の上へと押し当てた

そして彼は微笑みながら言った

「喜べ、このお腹の中に俺と綾崎の子供がいる」

そう言うと虎鉄はハヤテの手で自分の腹をさすり始めた。

「お父さんの手だぞ〜、温かい手だなあ？」

なあ、子供の名前はどする？綾崎が決めていいぞ？
どっちに似てるかなあ？まあどっちに似てても可愛くて元気な子供になると思うがな…」

と、虎鉄は妊婦のような言葉の数々をしゃべり始めたのだ

「ねえ…虎鉄君。それ本気で言ってるの？」

泉は訝しげな表情で聞いてみる

「ああ、本気だ。正真正銘、俺と綾崎の子供だ」

病室の前では…

「「想像妊娠!?!」」

こっちも驚きを隠せないようだ

「そう、あの頭痛も嘔吐も腹痛もすべて想像妊娠から来る悪阻だったんだよ」

「何で男が妊娠するんだ?」

ルフィのストレートな疑問。だが、誰も答えることはできない。だってこんなこと初めてなのだから…

「男性が悪阻を起こすケースは時々あるんだ。でもそれは“ともづわり”といってその男性の奥さんが悪阻の時に同じような症状になるだけだ

ここまで酷いケースとなると日本では、いや世界初で学会で発表することになるかもね」

カエル顔の医者は苦笑いしながら言った

ガチャッ

病室のドアが開いて出てきたのは泉だった

「……………」

その目はボンヤリとしていて心ここに非ずといった感じである

「…ねえ、ヒナちゃん」

「どづしたの泉?」

「虎鉄君と兄妹の縁を本気で切りたいと思ったんだけどどうすればいいかな？」

「……」

泉の口から発せられた思いもよらぬ言動に周りの者たちは啞然となつた。

彼女がこんな事を言うなんてそれほどのことなのでしょうね

ガチャ

泉に遅れること約1分、病室からハヤテが出てきた

「……ムツツリー二君、虎鉄さんの抱き枕ってある？」

ハヤテは唐突に康太に聞いた

「……あるけど、何に使う？」

康太は虎鉄の抱き枕カバーを取り出した。一応、彼も顔はいいですからそういう需要は女子生徒からあるみたいですね

「代金は後で払いましから貸してください」

ハヤテは康太から虎鉄の抱き枕カバーを受け取ると何処かへ去って行った

数分後

ドスウウン！！ドスン！！

突如、激しい何かを殴りつけるような物音がし始めた
その衝撃で病院も微かにではあるが揺れ始めている

まあ、この犯人は言うまでもなくハヤテであり…

「畜生！人が謝ってりや何が妊娠しただ！？ふざけてんじゃネエぞ
ゴルアア！！！」

クレヨンしんちゃんのネネちゃんのパパよろしく、抱き枕カバー（
中に使用済み衣類などが入っている）を壁に押し当てて何度も何度
も殴りつけていた

「いつものハヤ太君じゃない…」

「いいえ、いつも通りよ。あの様子だと」

次の日、虎鉄は精神科へと移されて約1週間ほど医師の治療と医師
や父や泉から、「男なんだから妊娠するわけがない」と言い聞かせ
られ続けた

一方ハヤテはというと…

早乙女ハルナ「ねえ、どうなのよ？瀬川君とそういうことになった
感想は？？」

真冬「私、綾崎先輩と瀬川先輩の体験談を書きたいんで取材させて
ください！！」

理科「でも意外です。私はてっきり瀬川先輩×綾崎先輩かと思って
いましたがまさか、綾崎先輩×瀬川先輩だったとは」

と、腐女子の方々から色々と聞かれていたという

言っておきませんが、ハヤテと虎鉄は一切性的な関係になったことはありませんからね！！

その後、ハヤテが虎鉄に暴力を振るったり暴言を浴びせることは少なくなつたが、その代わりにハヤテはあの抱き枕に怒りをぶつけ続けたそうなの

…次いつてみよ〜〜！！って次まだ執筆中で無いんですが

第四十六話：誰もが一生に一度は病院の世話になる（後書き）

近年滅多に見ない酷いオチでしたよね…我ながら反省しています
次回、桃源郷学園NEO part2「バカと宿題とテレパシー」
他3本をお送りいたします

第四十七話：桃源郷学園NEO part2と6月24日

Episode . 1 : カーテンの向こう側

ここは駅前大通りにあるレンタルショップタチバナ

(ん〜、中々面白そうなものが見つからないのだ)
鈴々がやってきているのが見たいようなDVDが見つからないよ
うだ

(ん？なんなのだここは？)
そんな彼女は歩いているうちにとある場所についた。

(18歳以下の方々は入ってはいけません？)
カーテンに書かれてあった文言を読んだ。
もうお分かりであろうと思うが、鈴々がたどり着いたのはアダルト
ビデオなどが陳列されているゾーンの入り口のカーテンの前である

(でも、ちょっとくらい…)
入ってはいけないと言われたら入りたくなくなるのが人間の性。彼女も
入ろうとしたが…

「何やってるんですか、鈴々ちゃん!!」
「!!!!!!」

突如後ろから聞こえた大声にハッとす。その声の主は朱里だった
「なっっ…なんで鈴々ちゃんはこんなところに入ろうとしているん
ですか!?!」
そう聞く朱里の顔はトマトのように赤くなっている

「入っちゃいけないって書かれてあるから、中がとつても気になったのだ」

「本当にそれだけですか？」

「うん、朱里はこの中に何かがあるのか知っているのか？」

「ええそれは…って駄目です！！鈴々ちゃんは一生知らなくていい事です！！」

兎に角、この中に入っているのは女性の敵の悪い人達ですから絶対に入っちゃだめですよ！！」

「悪い奴なのか？悪い奴なら鈴々がやつつけてやるのだ！！」

「もう、そんなこと言っていないで早く借りるものを決めてください」
「は～～～い」

朱里と鈴々はカーテンの前から離れていった

その2分後…

(フッフ…今日は記念すべき初レンタル日だ。手始めにこの…)

カーテンの奥から出てきたのは近藤。どうやらレンタルの会員証を作ったばかりらしく、アダルトビデオを借りれて嬉しいようだ

「あ～～～、悪い奴発見したのだ！！」

「???君は確か高校の…」

「喰らえ～～～」

だが、鈴々は間髪も入れずに近藤に襲いかかった

「ギヤアアアアアア!!!」

「どうしたんですか、何か断絶魔のような声がしましたけど?」

「悪い奴がいたから退治してきたのだ!」

「ゲフツツ…悪い奴か…」

遠くから聞こえてきた鈴々の声を咀嚼する近藤

「……………」

そして自分の借りようとしているDVDをもう一度見てみる

「もっとソフトな奴にするか」

そういうと、近藤はもう一度カーテンの奥へと入って行った

Episode・2：バカと宿題とテレパシー

この日、鉄人こと西村教諭は補習監督をしながら宿題の採点をして
いた。

(次は吉井の分か。やってくるとは珍しい…な???)

「吉井、ちょっと来い」

「はい、何でしょう?」

「吉井、お前が久々に宿題を提出したのは認める。だが何で半分も
やってないんだ」

この日の宿題は問題集を出来るところまでやって出来ないところは
解答解説を見て赤ペンでそれを写してくるというもの。つまり全て
やってなければおかしいのだ

「だって、まだやってませんもん」

「なっ…貴様、これは途中なのか」

平然とした表情でやってないと言いのけた明久に驚いた表情で西村は聞いた

「はい、途中です」

「途中なのに提出したのか？」

「何か問題でも？」

明久はな表情をしながら聞く、そんな明久に頭を自分の頭を押さえながら聞いた

「宿題の提出期限を守れと言ったよな」

「はい、だからこうやって提出したんですけど」

「なのに宿題は半分も終わっていない。なのになんで出したんだ？」

「だって今日が提出日じゃなですか。提出日までに出さないと怒られるじゃないですか」

彼はヘラヘラとしている。まるで出したことを褒めると言っているかのようだ

「それはそうだが…」

「出さない方がよかったですか？」

「それは、出した方がいいに決まっている。だがな…」

「よかったです」。だって鉄人、この宿題を出さなければ強制補習だって言ったから頑張ったんですよ？」

「…吉井、聞くがお前は中学校や小学校の頃の先生に提出物の期限は守れと教わらなかったか？」

「ええ、教わりましたけど…」

「あんな、その言葉には“中身を全て終わらせてから”提出するよ
うにという意味が込められていると思うんだ」

「ええ！？そうだったんですか！？」

「ああ…そうだ…」

明久はその誰もが分かるような事実を知らなかったようで、その姿
に西村は心底呆れている

「でもそんなことまで分かるなんてまさか鉄人…」

テレパシーが使えるんですか！？」

「何！？」

「すごいじゃないですか！！テレパシーまで使えるだなんて、体力
だけじゃなかったんですね〜」

「もういい。この宿題を今日中に再提出出来るか？」

「はい、大丈夫ですよ。」

だってテレパシーがあるんですから」

明久はヘラヘラ笑いながら頭の上に人差し指を伸ばした如何にもテ
レパシーを出すかのようなポーズをしていた

(……………こいつには何を言えばいいんだ)

鉄人こと西村教諭の悩みの種が一つ増えた

今日明久が学んだこと

『鉄人はテレパシーが使える』

Episode . 2 : 人には適材適所がある

「え〜今日の授業ですが、防犯訓練をしま〜す」

銀時によると今日の2Aの国語の授業は防犯訓練をするようだ

“こいつらには必要ないんじゃないかね？”と思ったその人！気にしないでください

「暴漢役は…誰かやるやつはいないか？」

銀時があたりを見回してみるものの、率先してやると言い出す者は居ない。暴漢役となると、押さえつけられたりいろいろ大変ですからね

「…しかたねえ、じゃあヒナギク、お前がやれ」

「何で私なのよ！！嫌です絶対嫌です！！」

突如指名されたヒナギクであったが、もちろん猛反対だ

「銀さんがやればいいでしょ？」

「俺そついうの嫌いだからやりたくねえ」

「私だつて嫌いよ」

「…なら時間も無くなって昼休みに食い込むのもめんどくせえからじゃんけんで決めるぞ」

今は4時間目、昼休みが少しでも長引くと食堂で食事にありつける時間が長引きますからね。てっとり早くじゃんけんで決めることになりました

あまり強くない女子を除いてじゃんけんが始まりました

「「「じゃ〜んけ〜ん……………」」」

その結果、

「……………」

ヒナギクが暴漢役になりました。彼女は今ヘルメットをかぶり、右手に金属バットを持っています

「次は暴漢を押さえつける役だが、誰かやりたい奴はいないか？^ア警護^{チスキル}団からこれを借りてきたから」

銀時は扉に立てかけていたさすまたを手を取った

「これテレビで見たことがある！！私これやりたいネ！！」
そう言い出したのは神楽

「神楽か、別にいいぞ」

「やった〜〜」

ヒナギク「ちょっと待って下さい、他の人がやるべきです！！」

「何だよ？っていうか、さっさとしないと授業時間がなあ……………」

「大丈夫ネ、私テレビで見たことがあるから問題ないヨ！！」

「テレビで見たことは理由にはなんないのよ！！なんか…危険なフラグのおいもするし…」

「いいじゃねえか、学校に女ばつかで残ってることもよくあるだろ？」

「そうヨ。ヒナギク、人には適材適所があるから私に任せるアル！」

「私は暴漢には適してないわよ！！」

そんなヒナギクの叫びも空しく、彼女は暴漢役をすることになった
シチュエーションとしては、ハヤテとナギのバカツプルぶりに怒りを燃やして暴漢と化したヒナギクを神楽がさすまたで取り押さえて動けなくなつたところを全員で取り押さえると云つたところだ

「それじゃあ、防犯訓練はじめるぞ〜、てめえらは普段通りしてろよな」

そして始まつた訓練。残りの生徒たちは自習をして机に向かっている

「全員動くなー！ー！ー！！！！」

そんな中に、暴漢と化したヒナギクが入ってきた。金属バットで黒板や机を壊れない程度にたたいている

「お前ら静かにしろー！ー！ー！！！！」

「ウオオオオオ！！！！」

神楽は壁に立てかけてあるさすまたを手にとると…

「ウオリヤアアア！！！！」

「コペエツツ！？」

さすまたの持ち手の棒の部分（Yの別れてない方）をヒナギクの鳩尾にねじ込ませる一撃！！

そして何度も持ち手の部分で彼女を叩いた。もちろんこれが正しいさすまたの扱い方ではない

「神楽、ちよつとストップ…ハアハア…」

鳩尾に一撃を喰らつたものの苦しいが、息も絶え絶えになっている

ようだがヒナギクは止めた。

「あなた、何で棒の方でたたくのよ？」

「だって撃退しないと…」

「さすまたはね、V字に分かれている方で壁とかに押さえつけるものなのよ！！テレビで見たんじゃないの！？」

「そうだったアルか。いや〜使い方までは見てなかったヨ」

「あなたねえ…やるならやるでちゃんとやりなさいよ！！」

ドン！！ヒナギクは持っていた金属バットで思いつきり黒板を叩いた。叩かれた黒板にはヒビが入っている。

「すごい！本当の暴漢みたいアル！！」

その姿を見た神楽が無邪気な笑顔のまま言った

「何ですって！？このオオ！！」

そんなことを言われて怒りが頂点に達したのかヒナギクは神楽に襲いかかるうとした

「ストーップ！！ストップ！！」

だが、それは銀時の声と機転を働かせて止めに入ったハヤテや明日菜たちによって止められた

「もう一回やるぞ。やらないと昼休みに入れなからな。神楽も今度こそは正しい使い方をしろよ？」

「ちゃんと習ったから大丈夫！任せるネ」

T A K E 2

今度も残りの生徒たちは自習をして机に向かっている

ガラガラツツと大きな音と共に扉が開く

「全いん…」

「ウオオオオ！！！」

机に向かわず、扉の前で待機していた神楽によって一瞬にして廊下へと押し出されてしまったのだ

「退治完了アル！！！」

「ちょっと待ちなさいよ、神楽あなた早すぎよ！？」

「ありがとうネ！！！」

早いと言われて彼女はともうれしそうだ

「誰も褒めてないわよオオ！！！」

ドンドン！！！と今度も金属バットで机や黒板を叩く。その姿に2 Aの生徒たちは完全に怯えてしまっている
もう完全にヒナギクが暴漢ですね

「ハア…ハア…」

悪いけど、暴漢役は降ろさせてもらっわ！！！」

ヒナギクは息を整えると金属バットを床にたたきつけながら言い放った

「昼食食べに行ってくる」

ヒナギクはそういうと財布を持ってさっさと扉から出て行った

キンコーンカーンコーン

ほぼそれと同時に授業の終わりのチャイムが鳴った

「よし、昼休みになったから防犯訓練終了！おめえらもメシにしていいぞ〜」

というわけで、2Aの防犯訓練はヒナギクが怒り狂って暴れただけで終わった

今日神楽が学んだこと

『ヒナギクと暴漢はちよつと似ている』

そして6月24日（金）

「お前ら、あの旅行券一度も使ってないよな？」

この日のHRは銀時のこの一言から始まった

「あの旅行券って、試召戦争の時の賞品のですか？」

「ああ、今日理事長に朝早く呼ばれてな。カップラーメンの分はいいから、旅行券を使っていなかったら他のものとトレードしようと言われたんだ」

「何ですか、他のものって？」

「もしかしてカップ焼きそばとか…」

「いや、うまい棒3000本ってことかも…」

「イギリス、そして魔法世界への研修旅行だそうだ」

「魔法世界！？なんでまた？」

「アリアドネーって言う所の魔法学校との姉妹校の締結とオステイアってところで開かれる終戦記念式典への参加とそこでの魔法世界とこっちの世界の友好のスピーチが目的そうだ」

ハルナ「アリアドネーの魔法学校って夕映が一時期お世話になったところよね」

夕映「ええ、そうです」

新八「大丈夫なんですか？僕たちだけでそんなところに行って」

「ネギ坊主も行くらしいしこのクラスには神楽坂たち魔法世界経験者がいるから何かあつたらお前らに任せる気だろ」

木乃香「理事長、大事なところは丸投げなんやな」

明日菜「でも、私たちの世界と魔法世界をつなぐ“橋”って壊れるはずじゃなかったっけ？2年前の事件で」

2年前の事件とは原作“ネギま”のネギたちとフェイトたち「完全なる世界」の戦いの事です

のどか「ネギせんせーの話だと、今年の8月には復旧しますと断っていましたからいけると思っています」

深夏「でも大丈夫なのか？2年前に大きな戦争のあった世界なんだろう？」

智代「そうだな、それも不安材料の一つだ」

夕映「大丈夫です。これもネギ先生から聞いた話ですが、今は平和と世界消失への防止に一丸となっているらしいですから」

鍵「まあ、俺らを行かせて魔法世界が安全だって言わせたいんだろ

うな」

紅音「私たちみたいな平凡な高校生が行ってくるだけで十分に安全のアピールになるからね」

夕映「魔法世界の学校と姉妹校の締結って地球初の取り組みになるです」

明日菜「…私たち、もしかして重大な任務を負ってるの？」

刹那「かもしれないですね」

「理事長の話だと他にも行く奴らがいてそいつらと俺ら2A合わせたら160人近くなるらしい」

「その行く人って誰ですか？」

「理事長は教えてくれなかったが読者はもうわかってるだろうって、最近チーム分けされた17チームのメンバーと俺ら2A+ だってよ」

もう、行くメンバーはお分かりですよね？ “+” 分は現在検討中ですが…

「でも、魔法世界か〜〜」

ハヤテ「楽しみですね、お嬢様！！」

ナギ「うむ、ドラクエやFFみたいな冒険の旅が待っていると思うとワクワクするぞ！！」

千雨「言っておくが、そんなファンタジーな世界じゃなかったぞ？」

神楽「なんだよつまらないな〜」

ハルナ「だけど、ドラゴンや巨人兵とかは居るわよ」

神楽「それでも十分ヨ！！私闘ってみたい！！」

ナギ「ハヤテはもちろんドラゴンにも巨人兵にも勝っちゃうよな？」

刹那「戦ったら、死んじゃいますよ？」

等々と魔法世界への期待を膨らませていた

その夜：

東京の新橋・御徒町・新大久保・赤羽・下北沢、京都祇園、大阪北新地・道頓堀、福岡天神、北海道すすきの・函館にて20：00～23：00にかけて無差別通り魔殺人が発生。金曜の夜の人込みでにぎわっていた繁華街での事件となった
警察官など含めた一般人計491名死亡

御徒町・祇園・北新地にて犯行グループの3名が警察官と銃撃戦になり死亡、身柄を確保したものの身元は不明。残りの犯行グループメンバー8名の消息も不明

「今月もまた無差別大量殺人、一体どうする気だい？」

「政府の様子を見ているのさ。まだこの国を預けられるほどの価値があるかどうかを」

「この国はどうかしてるからね、責任のなすりつけ合いに有耶無耶で事態が一向に良い方向に進まない。バカな俺でもわかる」

「来月にもう一度事件を起こす。それで最終的な判断を下す」

「なら今度は日本の発展の象徴を壊すっていうのはどうかな？」

「日本の発展の象徴？」

「聞いた話だと、侵略者とその国の象徴を壊すのが征服のセオリーらしいから。俺たちが日本を壊す前祝いにどうかなって。たとえばああいうの」

彼らの目には線路を走る新幹線の白い車体と高速道路を走る車の数々が映る

「そういえば、あのお侍さん」

「銀時の事か？」

「そう、噂だと8月に魔法世界に行くらしいよ」

「…魔法世界か」

「俺たちも行ってみない？魔法の国に」

「フツツ、いいかもなア。銀時、2か月後を楽しみにしてるぜ」

第四十七話：桃源郷学園NEO part2と6月24日（後書き）

前半がコメディ、後半シリアス展開でしたけどどうだったでしょうか？

魔法世界編は文化祭編の後しばらくしてからやろうと思います。

魔法世界の内情についてはネギま未読の方には分かりづらかったと思います。詳しくはネギま21巻からお読みください。

元ネタ

Episode 1：同タイトル 2010/06/24放送
Episode 2：天然日和 2010/06/17放送
Episode 3：天然日和 2011/08/02放送

第四十八話：どこの店にも明らかにポツタくりだと思えるメニューがある

「「「いただきま〜す」「」」

ここは学生食堂、今は昼食時なのでとても賑わっている
さて、学食といえど様々なメニューがあり値段はピンきり。

サイドメニューを含めず主食で一番安い掛蕎麦で180円、一番高
い井ぶりや定食となると900円、5倍以上の差となる。

今日はそんな学食の格差のお話である

「銀ちゃん…」

「何だよ？」

「私も400円定食とか食べたいヨ。毎日毎日掛け蕎麦や掛けうどんばかりじゃ飽きちゃうネ」

掛け蕎麦をズゾゾ…と食べながら不平を漏らす神楽

「仕方ないだろ金がないんだからよオ。何ならお前、購買のパン1
個だけにしてもいいんだぞ？それに教室にはカップめんがあるんだ
から腹が減ったらそれ食べばいいじゃねえか」

この食堂の隣には購買部があつてカップめん各種（160〜250
円）にパン各種（100〜150円）やお弁当（250〜500円）
が売られている

「あのカップめんたちにももう飽きたヨ。それよりも偶にはエビ天
そばやかき揚げそばも食べたいヨ」

もう掛け蕎麦を食べ終えて汁も飲み干してしまった神楽はまだ掛けうどんを食べている銀時の腕をつかみ玩具を欲しがる子供のように揺らす

「あのなあ、そいつら幾らすかと思っただ。300円だぞ、300円！！高だかエビ天ならまだしも野菜のかき揚げに120円も払ってられるかよ」

「野菜だってワガママ言わないから、残しもしないから！！っていうか、かき揚げ1枚食ったぐらいで腹の空き具合は変わらないから！！」

「まだ、子供のようなおねだり作戦を続ける神楽。だが、神楽は今とんでもないミスをしてた」

「フッフッフ、神楽、お前は今重大なるミスをしたことに気づいてないな？」

「何ヨ？」

「お前は“天ぷら1枚食べたぐらいで腹の空き具合は変わらない”と言った！！つまり、お前にとっては180円の掛けも300円の天ぷら付も変わらないことになるのだよ！！」

「な…なんだってー！！？」

「だから、明日俺はエビ天そばを食べるがお前は明日も掛け決定な！！」
「言いくるめてしてやったり顔をしている銀時は神楽を腕からさっさと離すと掛け蕎麦を食べ続けた」

「銀ちゃん悪かったヨ、天ぷらでも腹の足しになるアル！！0・1%くらい」

「ほんのちょっとしか変わらねえじゃねえか」

「なら100%」

「すごいね〜お前天ぷら1枚でお腹いっぱいになるんだ〜それなのに何でいっつもカツカツ食ってるんだろうね〜」

「ウウウウ〜…」

自爆して言いくるめられて何も言い返すことのできない神楽。

「どうしたんですか、銀さんに神楽ちゃん？」

そんな2人の元へ新八がやってきた

「新八〜、銀ちゃんが意地悪して明日銀ちゃんはエビ天そば食べて私には掛けしか食べさせないつもりアル!!」

「何があつたか知りませんが、銀さんも神楽ちゃんに他のものを食べさせてあげたらどうです？毎日掛けじゃ、うどんとそばを交互にしても飽きますって…」

新八は持っていたお盆を机に置きながら言って座った

「でもよお、コイツ言つんだぜ？天ぷら…」

「どうしたの、銀ちゃ…」

銀時と神楽は言葉を失ってしまった。それは、新八のお盆に乗った料理を見たからである。

「お…お前、それ…」

「ええ、これですか？ステーキカツ定食ですよ」

ステーキカツ定食とはサイコロステーキとカツ丼がセットになって味噌汁とお新香がついた料理である

「な…なんで、新八君がそんなものを食べてるのかな…？それ、一食700円もするやつだよ？」

銀時は声を震わせながらステーキカツ定食を指差して聞いた。700円、銀時達の掛け饅頭・蕎麦の約4倍もの値段

「あれ、知りませんか？このステーキカツ定食は“敵に勝つステーキ(カツ定食)”ってことで語呂がいいので試合前や試験前に食べる人が多いですよ。明日剣道部の試合がありますから。それに姉上がくれたんです、このお金で明日のためにステーキカツ定食を食べなさいって」

見てみると確かに同じ剣道部の東宮やヒナギク、冬琉、美鈴、篤などや同じく明日試合があるバスケット部の裕奈、水泳部の愛子とアキラ、野球部の日向、それに応援に行くと思われるチアリーディングの円美砂、桜子などその他それらの部活のモブキャラがステーキカツ定食を食べているではないか

ちなみにステーキカツ定食は量の少ないSサイズもあり600円、それでも掛けの3.3倍である

「てめえら、俺らが10日間連続で掛け蕎麦・饅頭食ってるの知っててわざと食ってんのか!？」

「違うつつつの、銀さん。俺ら野球部明日県予選だし」

「私たちはその応援」

「私たち剣道部も試合がある。というより、掛けそば饅頭10日間連続は食いすぎじゃないか？」

その頃神楽は…

「……………(ジーーー)」

「神楽ちゃん、食べにくいんだけど…」

チアの3人のステーキカツ定食をじっと眺めていた

「ねえ、くぎみー」

「くぎみー言うなー!」

「そのサイコロステーキちよつとちようだい?」

「まあ、ちよつとだけならね。はい」

くぎみーこと円は優しく神楽にサイコロステーキの乗ったお皿を渡してしまった

次の瞬間!!

ガシツと両手でそのお皿を握るとステーキを飲むかのように口に流し込んでしまった

「ああ!!私のサイコロステーキが!?!」

「ちよつとだけ、食べちゃったヨ」

「ちよつとだけって…全部じゃない!私まだ2、3切れしか食べてなかったのよ!?!」

「でも私の中ではこれがちよつとネ」

確かにちよつとの量というのは人によって違うと思う。神楽の場合のちよつとの量というのは皿1枚にもなってしまうのだ

「……………」

神楽から返された付け合せのレタスだけが残った皿を見て呆然としている円

「お〜い？大丈夫か〜？」

「私のステーキ少し分けてあげるから食べる？」

美砂や桜子の呼びかけにも応じずしばらくこのままだったという

「なあ、日向」

今度は銀時が日向に声をかける

「何ですか、銀さん」

「俺にそのカツ丼少し分けてくれないか？俺も掛けうどんだけじゃ腹が減っててよお」

「今それ言えるか！？ついさっきそこで神楽ちゃんがちょっと言っただけで皿丸ごと食った中で！！」

「ダイジョーブダイジョーブ、俺そんな真似はしないからな？」

日向の全部食ってしまうのではないかという心配をよそにカツ丼を分けてくれとせがむ銀時。年上や教師のプライドと言うものはないんでしょうか…

「なら、少しだけですよ？」

日向も渋々銀時にカツ丼の器を渡してしまった

「オウサンキュー…（ニヤリ）」

日向は銀時の受け取った瞬間のにやけ顔を見逃さなかった。しかし時はすでに遅し…

ガツガツガツガツ…

カツを食っていたのだ

「銀さん、何やってやがる!?!」

「ぶへへへ美味かった。ごちそーさん」

銀時から日向へ返された井ぶりの中にはごはんしか残っていなかった

「言ったよな、神楽ちゃんと同じことはするなって!!」

「ああ、だからステーキには手を出してないよ? 同じことをするなってステーキを丸ごと食うなって事だろ?」

…こいつら酷すぎですね。確かに日向の説明不足かもしれませんが…これはやりすぎです

「にしても銀ちゃん」

「ん〜なんだ?」

「私もう少し食べたいネ」

「そうだな〜〜だれか分けて…」

神楽と銀時が見まわしてみるものの、さっきの事があってか完全警戒モードに移っており、必死に生徒たちは自分たちの昼食を守っている

そんな中、レジの方からある声が聞こえた

「うな井定食900円ね」

夏季の食堂内の最高額料理うな井定食が出たのである。ウナギのか

ば焼きが2枚乗ったその丼ぶりは900円掛けそば・うどんの5倍になる

「誰だアアア、うな丼を食う輩はアア!!??」

ウナギを分けてもらおうとしているのである。銀時と神楽はうな丼の会計を済ませた者の元へ瞬く間に駆けつけた。

「どうしたんですか、銀さんに神楽ちゃん？」

「ハヤテか、うな丼を頼んだのは？」

そう、以外にもうな丼を食べようとしているのはハヤテだった

「何でハヤテのくせにこんな高い物を食べられるアルか？」

「実はですね…」

ハヤテはうな丼を食べられるようになったいきさつを話し始めた

今朝の事…

「はい、ハヤテ君。今日の昼食はこれを使ってください」

「マ…マリアさん！これ1000円札ですよこんなにいりませんって!!」

「ハヤテ君、何時も頑張っているからそれでエネルギーになる物がガッツリ食べてください。これはご褒美なんですよ？」

「ありがとうございます!!」

というわけで、ハヤテはマリアから昼食代にボーナスとして1000円を貰ったので、うな丼を食べようとしていたのだ

「ねえハヤテ君？」

「な、何ですかいきなり猫なで声で」

「私たちにもそのウナギちよつと分けて貰えないアルか？」

「だめですよ、こればかりは出来ませんって」

見ると銀時と神楽は両手に箸を持っていてその姿、螻蛄の如しその異様さを察知したハヤテはその場をさつさと去ろうとするが

「「ちよつとぐらいいいじゃねえかよオオ」」

箸で井ぶりの中のウナギを襲い始めたのだ
ハヤテはその箸攻撃をひたすらに避けていく

「危ないですって!!」

「止めてほしけりや俺にウナギを1枚くれ!!」

「私それでも足りないネ、3枚は欲しいアル」

「2枚しかありませんから無理ですって!!」っていつかこんなところ
で暴れたら…」

ドゴツツツ

何かがぶつかる音がした

ハヤテたちが音の方を見てみるとハヤテの持っていた盆が食堂の柱に当たり、盆はバランスを崩しうな井は盆から離れ始めていた

(((しまったア!?))))

と、思った時にはすでに遅く…

パライイイン

と音を立てて井ぶりは割れ、中身はあたりに散らばり、その上に定食のお味噌汁も毀れ…

散々な状態となった

割れてしまった井ぶりと辺り一面に毀れたうな井を見てハヤテにとある記憶がよみがえった。

それはまだ彼が幼くてあのギャンプル好きで散財な両親と暮らしていた十数年前の夏の頃…

「ねえ、お父さん」

「ん〜何だ、ハヤテ？」

「夏になるとウナギを食べるらしいけどウナギって何？」

「ハヤテ、ウナギも知らないのか。ウナギっていうのはな、とっても苦くてな危ないものなんだ。梅干しと一緒に食べただけで死んじやうからな。お前は一生食べなくていい」

勿論そんなことは無い

「へ〜、そんな危険な食べ物だってしらなかつたよ〜」

「夕ご飯買ってきたわよ〜」

ハヤテと父が話しているとそこに母が帰ってきた

「今日はお父さんとお母さんがコレ。国産のものよ。ハヤテは煮干

しよ」

「お父さん達が食べるものってなあに？」

「これはとつても苦い薬のようなものだ。ハヤテが食べる必要はない。ハヤテ、久々の魚だぞ」

「うん、煮干しいつただきまゝ〜す」

だが、彼はそれからの十数年で知っていた…

「あの薬とか何とか言ってたヤツ、完全にウナギじゃねえかアアアアアア！！！！」

食堂全体に響き渡る声で叫ぶハヤテ

両親に煮干し（5匹）を食わされその両親たちは国産ウナギを食べる。これはハヤテが16年間生きている中で屈辱的な出来事の一つとなっていた。

次の瞬間、ハヤテは銀時と神楽をジツと見つめた
その目は人を殺しかねない狂気に満ちていた

「才前ラモ、僕ニ、ウナギヲ食ワセナイツモリカ？」

「わ、悪かったよハヤテ。謝るからな、な！？」

「そうだ、銀ちゃんの掛け蕎麦の残りあげるからそれで許してヨ！！」

「んなもんで許せられつかゴルアアアア！！！！」

その後、昼休みの終わりの鐘がなるまでハヤテと銀時、神楽の追いかけて続いた

次の日とその次の日、銀時はハヤテにうな井を奢ることとなった。

1日奢っただけではハヤテの怒りが収まらなかったからだ

食べ物の怨みは恐ろしいもの。皆さんも気を付けましょう

第四十八話：どこの店にも明らかにポツタくりだと思えるメニューがある（後書

今回はサブ研の文化祭出品用ライトノベルのお話。誰も面白くてサブ研部員全員の希望を叶えるような物語のラノベを作ろうとしますが…

第四十九話：想像は経験に基づいている

この物語は会議の一部始終をとりまとめたものであり、行動描写表現が少ないことをここに明記しておきます

文化祭1か月前 サブ研部室

「というわけで、今年の文化祭の小説の中身だけど…」

部長代理の早乙女ハルナが仕切っている。本来の部長の塔貴也は今も絶賛引籠り中…ではなく、引籠っていた分を取り戻すための補習中でいない

「なかなかいい案が思いつかないわね〜」

「今まで出た案を総合してみると…」

ハルナはホワイトボードに出ている案を書いていった

- ・ハーレム展開（主に家康と鍵の意見）
- ・BL要素あり（主に優子と真冬、ハルナの意見）
- ・部活のお話

「正直言って、最近のアニメやラノベのテンプレだよな〜」

「そうね〜、でもだからこそ何かすごい展開を作れば一躍大人気になるんじゃないの？」

「すごい展開か〜」

「っていつか、すごい展開を考える前に部活の話ってなんの部活にするか決めないとだめじゃないのか？」

「あ…そういえば、決めてなかったわね」

「じゃあ、まず何の部活にするかを決めるとしますか」

1、何の部活にするか

「まず、ハーレムものにするんだったら女子の部活だよな」

「主人公の男子はどうやって入れるんだ？」

「まあ“ロウキューぶ”みたいにコーチって設定もいいんじゃないのか？」

「なるほど…コーチなら女子たちにHな指導も出来るからなあ…」

と、勝手に話を進める鍵と家康を中心とした男子たち

「ちょっと待つて下さい！！それでは杉崎先輩と中目黒先輩のBL展開が出来なくなります！！木下先輩も何とか言ってく下さい！！」

「わっ！？私は…別に…」

だが、BL押しの実冬が止めに入った。優子に協力を要請したが突然名前を呼ばれて困っている

ハルナ「でも、確かに勝手に話を進めてもらうのは困るわね。これはみんなの意見を取り入れる同人小説にするんだから」

「だが、BLを少し置いておくとして杉崎君たちの意見（ハーレム展開）を取り入れた部活物となったらスポーツ物になるよな」

「ゆるゆり」や“ひだまりスケッチ”や“GA”みたいな文化系の日常物でそこに男子が1人ポツンと入れさせられたら違和感ありまくりだもんね」

「女の子たちの楽しい日常を描きたいのに一人いるせいでなんか変わっちゃももんね」

その後も少しずつ意見交換がなされて文化系の部活ではなくスポーツ部の物語となりました

「スポーツでも色々あるわよ？」

「折角書くんだったら、在り来りのじゃなくて他のライトノベル作家が手を出してないようなものをやりたいわね」

簪「でも1巻で完結するようにしなくちゃならないからあまり多くの人数は出せませんよ？女子サッカーや野球、ラグビーですか」

「確かにそれは一理あるな。1巻で十数人を深く掘り下げるなんて出来たとしても話の内容が薄っぺらくなるからな〜」

「それは残念ね〜、折角なでしこジャパンがワールドカップで優勝したんだから女子サッカーがいいって思ったんだけどな〜」

千桜「なら、そこまで多くは無いにしろ“ギャルゲやハーレム系作品の攻略人数の法則”に従ってみたらどうだ？」

優子「…なに、その法則？」

千桜「ギャルゲやハーレム作品と言うものは“アイマス”や“ドリムクラブ”だとかの例外や、2作目や続編、リメイク版・移植版を含めない無印を考えたら殆どが、攻略対象が4人から多くて7人の間だと思える。私の考えた法則だ」

千雨「お前、よく見てるよな〜」

巧「でも確かに2作目や移植と違ってサブキャラで人気のある奴がたされていく感じが殆どだからな」

鍵「それが嬉しいんだけどな。何で攻略できないのって思えるキャラがよくいるからそれが移植版や続編で攻略できるようになるともう歡喜余って泣いちゃうよな」

「なるほど、ということとは4〜7人の間の部活って事か…」

「バスケットボールは、“ロウきゅーぶ”があるからな…それと被っちゃうかんじがするから今回はナシとして」

「他に4〜7人の競技ってなんかあったっけ？」

「ハンドボールや、バレーボールがあるけど」

「ハンドボールにバレーボールねえ…」

ハルナ「この2つのうちでやるとしたらどっちがいい？今から多数決するから手を上げて」

そして多数決の結果…

ハンドボール 0

バレーボール 12

となった。その理由としては“体育の授業でやってるからルールはある程度知っている”“ハンドボールは一時期流行ったけどそれまですだったし、ルールもよくわかんない”というのが主たるものだったというわけで、部活は女子バレーボール部となりホワイトボードにはその旨が書かれた

「次は“どんな登場人物にするか”ね」

2、登場人物

真冬「もちろん、ボーイズラブ要員は入れるんですよね!？」

ハルナ「ええ、そのつもりよ。そうしないとこのサブ研らしさが出ないもの」

ナギ「ちよつと待て!どこがサブ研らしさだ!?BLが好きなのはお前と真冬と優子と千桜くらいだぞ!？」

千桜「ナギも待て!私がいつボーイズラブが好きだとハルナや優子

みたいに公言した!？」

優子「わ、私だって公言してないわよ!!」

「だってお前、ハヤテと瀬川や東宮が仲良くしているのを見たら顔を少し赤くして目を背けていたではないか」

「ぐつつ…」

言い返せない様子、どうやら千桜にもボーイズラブ好きの気があるみたいですね

「だけど、登場キャラって作品の流れが決まってから決めた方がいいんじゃないのか？」

「主人公や他のキャラとの関係性も物語と大きく関わってくるからそうしたほうがいいのかもしいわね」

「でも、どんなキャラを作るとしても意外性が欲しいわね」

「意外性？」

「そう、例えば…そうね、“クールでカッコいいイメージのある織斑先生やロビン先生、橘高生徒会長、三郷先輩、桐木先輩に篠ノ之さんが毎晩毎晩、シルバニアファミリーやリカちゃん人形でおままごとをしてたらどう思う？」

「…とても意外。っていうより想像しにくいし」

ナギ「ブハツツ!!」

「どうした、三千院!？」

「織斑先生がシルバニアファミリーでおままごとをしている姿を考えたら笑ってしまった」

紅音「雫さんがシルバニアファミリー…クスツツ」

「ちよつとさ、自分のクラスで一番人畜無害な人を挙げてみて？」

千桜「私たちのクラスは沙原でいいんじゃないか？」

紅音「そうですね、可愛くて守ってあげたくなるような小動物ってイメージですからね」

鍵「おつうさんも人畜無害じゃないか？あの恩返しのためのご奉仕…」

千雨「いや、アンタがそのご奉仕でエロい妄想をしている時点で人畜無害じゃなくなってるから」

「私たちのクラスはアーシアね」

「そうか？和泉も良い線いってると思うけどなあ」

真冬「私のクラスは東儀さんです」

簪「私のクラスだと平松さんかな」

ハルナ「もし！その子たちが陰湿な嫌がらせ、例えば嫌いな人の机に噛んだガムを付けたり、その人のバイトのタイムカードを改竄したり、ネットに悪口を書き込んだりしてるとしたら…」

「嫌だ！！考えたくないわ！！」

「やめて！！これ以上言ったら彼女たちのイメージが！！」

「っていうか、ああいう人って嫌いな人居ないんじゃないの？」

「あとは、お金持ちなナギちゃんや千世ちゃんやセシリアさんやいんちよが毎晩死んだ魚のような眼をしながら時給500円の刺身のツマを作る機械に延々と大根を入れ続けるようなバイトをしていたら…」

「何があったのって思うな、没落したのか。それとも社会経験を積むためにやっているのか」

「つまり、ギャップが欲しいってことが言いたいのか？」

「そう、そういう事」

千雨「でもよお、ギャップって後付けで出てくるものじゃないか？
真冬「???どういうことですか？」

千雨「可愛らしい女の子がいたとしてその子が実は腹黒キャラだったっていう場合、インパクトがあるのは登場してすぐ腹黒になるよ
り、時間が経ってからなった方だろ？今言ったのも織斑先生や沙原の本来の姿を知っているから言えることだし」

「なるほど、頭いい!!」

「…ギャップは今考えずにいた方がいいって事ね」

ということ、キャラは決めず展開を先行させて考えることになった

3、展開

「こつちも読者の予想の斜め上に行く展開が欲しいな」

「読者が誰も思いつかないようなね〜」

「誰も思いつかないような展開、そして面白い展開…」

「例えば…」

お登勢さんやキャサリンさん、藤堂研究室長、大通りの花屋の屁怒
紹さん、鉄人にブルック先生たちがAKBのヘビーローション
をあのPVのコスプレをして踊るとか…」

「…ギヤアアアアアア!!」「」「」

想像してしまつたらしく、彼らはとんでもない吐き気を催してしま
つた

まあYouTubeだとかでヘビーローションのPVを見て

それをお登勢たちに置き換えてみるとその大事故さが分かると思います。

入浴シーンや水着にネコミミランジェリー姿がありますからね

「頭の中に悍ましい光景が広がっていく!!」

「お登勢さんとキャサリンさんの百合キス……」

「言つなアアアア!! 想像しちゃっただろ!？」

「変えるのよ!! 何か別の人たちに!!」

「別のものを妄想するのよ!!」

……

発言を止めて、精神を研ぎ澄まして別のものを妄想する部員たち

鍵「2・Aの女子たちのネコミミランジェリー……」

家康「2・Bの水着も悪くないと思うぞ？」

どうやら、家康と鍵はヘビロテのままAKBを自分のクラスの女子に置き換えているようだ

鍵「杉崎先輩と中目黒先輩のキス……」

優子「吉井君と坂本君のキス……悪くないわね」

千桜「綾崎君と東宮君のキスか」

ナギ「千桜!! なんてことを考えているのだ!？」

星奈「まずいわ、このままじゃヘビロテ呪縛から抜け出せられない」

千世「秋元康……恐ろしい曲を作ったわね」

恐ろしいのは彼らの妄想力だと思いますけどね

「もうこうなったら奥の手よー!!」

「奥の手?」

「そう、端から順に面白くなっていきそうなワードをどんどん言うていくの。そうしたら絶対滅茶苦茶だけど面白くなっていくから!」

「奥の手っていうより投げやりですね」

「まあ、何時までもへビロテの妄想をしても終わらないですからね」

「じゃあ、時計回りにナギちゃんから!」

ナギ「ん~~~~、ヒロインの1人は48つ子で紅白に出ている!」

千桜「ヒロインの1人は福山雅治口調」

千雨「1人はムーンウォークでしか歩けないし走れない」

星奈「ヒロインの1人はみさくら語を使っているのはどう!」

紅音「1回のアタックで体育館が全壊しちゃうというのはどうです?」

家康「パンツじゃなくてノーパンだから恥ずかしくないもん!」

鍵「5ページごとに濡れ場がある!」

巧「ヒロインは全員、鼻でうどんが食べれてそれがデフォルト!」

千世「主人公のお母さんは実はオカマで男!」

簪「主人公はもうヒロイン6人のうちの1人と結婚している」

優子「だけど、主人公の本命は幼馴染の男の子!!」

真冬「全国大会決勝前日でその幼馴染の男の子と同衾しているのがバレちゃう!!」

ハルナ「結局はオリンピックで優勝して金メダル!!」

等々、意見が出た。ここにいる13人がサブ研の部員である。他にも幽霊部員として塔貴也、桂馬、小鳩がいるが…

「ふう、これで完璧ね〜」

「色々と案が出ましたからね〜」

「これでは、この小説を書く杉崎君の力量に任せられるって事ですね」

「杉崎、大丈夫か？」

「大丈夫だよ、もう話なんて出来上がってるようなもんだしあとはそれに肉付けをしていけばいいんだからさ」

「……じゃあ、頑張ってるね〜」

時刻はいつの間にか7時を回っていて今日はお開きとなった

「…」

鍵は帰り道、今日出てきたことがメモ書きされた骨子を見つめた

「これ、本当に大丈夫か？」

鍵は一抹の不安を覚えていたのだった。

果たして、小説はどうなってしまうのか？それは、まだ分からない…

「やめんかボケエエエ!!!」

「ポペッツツ!!!」

ネットで有名なルイズのコピペの改造版で木乃香への愛情を爆発させていた刹那に咲夜が突っ込みを喰らわせた

「!!!???わ、私は何をしていたのでしょうか!?!」

「なんだかよく分からないけど、刹那さんが木乃香を愛しているのはよ～～～く分かったわよ?」

「なら役の変更は…?」

「出来ないわ、決定事項だからね」
きっぱりとハルナが断った

「私が他の人たちより未熟だから駄目なのでしょうか?」

「未熟ってどういうことアルか?」

「実は前に柳生さんや白井さんたちと話す機会があつて上のルイズのクラス一文も、柳生さんから教わつたんです

しかも、清水さんや赤井さんや花菱さんは島田さんや大神さん、ヒナギクさんの日々の下着の色を把握しているって聞きましたし、白井さんに至っては御坂さんの下着を口に含んだことがあるって言つてました」

「なつっ!?美希、何してるのよ!?!」

「ヒナはまだいいわ!何で同室じゃない美春が私の下着の色を全て把握してるのよ!?!」

「私もこんな事をしなければ私のお嬢様への愛情は皆さんに伝わらないんでしょうか?」

「「いいわよ！！そんなことしなくて！今の刹那（桜咲）さんで十分愛情は伝わってると思うわ！！」」

変態になりかけようとしていた刹那をヒナギクと美波が止めました。これ以上変態が増えても対応に困るだけですしね

「でも、刹那さんって木乃香とキスしたことがあったんじゃないかってっけ？」

「はい、そのことを話したら皆さんとても羨ましそうにしています」

刹那はその時のことを思い出しているのであろう、笑顔で語った

「なっ！？何でそんなことしたのよ！？そんなことしたら美春にキスしてっって迫られちゃうじゃない！！！」

「私だって美希に何させられるか分かったもんじゃないわ」

「でもウチとせっちゃんはお互いにパートナーやって認め合ってる仲やし。なあ、せっちゃん？」

「ええ、お嬢様！！！」

刹那と木乃香に文句を言おうとしたが木乃香と刹那の2人はバカップルの様でそれを深く受け入れようとしていない

「認め合ってるあなたたちはいいかもしれないけど、私たちはね…」

「ヒナ！！！」

「お姉様！！！」

ヒナギクの言葉を遮るようにして、美希と美春が現れたのだ。

「なっ、何なのよ美春！私はアンタとキスはしないわよ！？」

「キスしたいのも山々です。だけどその前に私には滅ぼさなければ

ならない人がいるんです」

「私もだ、ヒナに近づく怪しい奴がいると聞いてな」

「そんな人なんていないわよ、ヒナには東宮がいるけど」

「なっ！！私は彼とはなんともないわよ！！」

「あんなヘタレのチンカス野郎はどうでもいい。ヒナ、今度のA組の芝居で誰と結ばれるんだ？」

「お姉様も私を差し置いて誰とカップルの役になるんですの！？」

美希がとんでもないことを言ったような気もしますが、彼女たちは芝居の配役が気になっていてみたいですね

「私が主人公でヒロインはおつうさんだけど……」

「私の彼女役はシアだけど……」

「ってあなたたちもしかしておつうさんやシアちゃんを怪しい奴呼ばわりしているんじゃないでしょうね」

「その通りだ！！おつうさんは居るか！？」

「私のお姉様を寝取ったシアさんも出てきてください！！」

2人は教室全体に響き渡るような声で言った。隣のBやC組からも何事だと様子を見に来る人が出てきた

そんな2人に少々ビクついた様子でおつうとシアの2人はやってきた。決してシアは美波の事を寝取ってませんからね

「……ふっふん」

やってきた2人をジロジロと観察する

「シアさん？」

「な……なにかな？」

「シアさんはお姉様をどれくらい愛していますの？」

「おつうさんも、私のヒナをどれくらい愛しているんだ？」

「どれくらい愛してるって言われても……」

「ええ、クラスメイトの友人としか……」

突然そんなことを聞かれて2人は心底迷惑しているようだ

「なのに何故！？私はお姉様の写真に毎晩毎晩ディープキスして、
毎日の下着の色を把握しているというのに」

「なっっ！？アンタなんてことをしてるの！？」

「私もヒナの健康管理を毎日毎日ヒナの履いたパンツの匂いを嗅いで
しているというのに……」

「「「……」」」

美希のしていることに完全に周りの人たちは引いています

「ねえ、美希。毎日そんなことしているの？」

「ああ、だがこれはヒナの事を思ってたことだ！」

彼女は無い胸を張りながら言っている

「やはり、私も花菱さん清水さんのようなことを……」

「「しなくていいから……」」

美波とヒナギクが諫めました。

「そういえば、桜咲さんは近衛君とキスしたんだっけか？」
刹那の姿を見た美希がふとそんな言葉を漏らした

「そついえばそのような話を聞きましたけど本当なんですか!？」

「ええ、これが証拠ですけど……」

刹那はポケットから仮契約カードバクティオを取り出した

「こつ…これが……」

「近衛君と桜咲君がキスをした証拠……」

「私もお姉様とのコレが欲しいです!!」

「ですけど、ヒナギクさんと島田さんは魔法使いではないですから、キスをしてこのカードは出てきませんよ?」

「な…そんな…だけど、何か方法はあるはずだ」

「普通のキスじゃ駄目ならディープキスを試みるのはどうでしょう?」

「ディープキス……」

その言葉を呟くと次の瞬間、美希と美春の目は一瞬にして獲物を狩る肉食獣のような眼になっていた

「お姉さま!!」

「ヒナ!!」

「な…何よ…?」

「私とディープなキスをして一生のパートナーとして認めてくれ
(下さい)!!」

彼女たちはそれぞれヒナギクと美波に飛び掛かり無理やりキスをしようとした

「出てけエエエ!!!」

美希と美春はヒナギクと美波の怒りをかってしまい、しばらくの間2-Aの教室への出入りを禁止となってしまう

「刹那さん」

「何でしょう、明日菜さん？」

「やっぱり刹那さんは今のままでいいと思うわよ。あんな風になつて木乃香の部屋に出禁になるのは嫌でしょ？」

「確かに…そうですね、今のままでいいと思います」

刹那は美希と美春の姿を見て心底そう思ったという

次回、少し時期外れだけど怖い話。当麻が学校へ行く途中、市松人形を拾った。その人形が文化祭準備中の1年A組に飾られてから不可思議なことが起き始めて…では次回の予習に私の知っているお話を一つ。

これは私の親戚から聞いた話です。

当時彼は5人組でよく心霊スポットに行つて遊んでいたようです。ある日彼ら5人は山の中にある廃病院で肝試しをすることになりました

この病院は比較的大きく屋上に行くルートは3つあります。彼らは2人組2つと1人に分かれてどれが一番早く着くか賭けをしました。親戚のおじさんは籤の結果、1人で行動することになりました。彼が移動することになった階段はこの病院で唯一、霊安室のある地下へつながる階段でした

そんなこともあり彼は霊安室も見ることになりました。彼が霊安室を見たところ、不可思議な現象は何も起きず彼は早く抜け出そうと

屋上へと繋がる階段へ向かい始めました。

半分まで行った頃でしょうか、彼が階段を上っていると“マツテ、ヒトリニシナイデ”という女性の声が出たとのこと。おじさんは悪戯だと思いネタばらしをしてやるうと携帯電話で別ルートを歩いている友達へと電話しました。

しかし、女友達と共にいた友人は既に屋上に着いて女友達はここにいるとのこと。それではおじさんの後をつけているのはいったい誰なのか。

彼が携帯で話している間にも女は近づいてきていた。

彼は怖くなり必死で屋上へと向かおうとしました。だが、謎の女の方もこつちを追いかけてくるのではないか。屋上まであと数段といったところで彼はその女に足を掴まれ転んでしまった。その女は彼に覆いかぶさり口をふさいだ。

彼が目を開けて女の容姿を見た。その女は別行動をしていた女友達だった。何で…彼女は別行動をしていたはず…

“クチヲアケロ”その女はおどろおどろしい声でそう彼に命令をしました。その声は知っている女友達の発する声ではなかった。彼は必死に口を開けないようにしましたが女は彼の口に手を入れると開けようとした。

彼も抵抗しようと突っ込まれた手を噛んだ。しかし女は血を流しながらも怯むことなくポケットから何かを取り出すと彼の口に含ませた

それは、キャンデーだった

その味は甘くてクリーミーで、こんな素晴らしいキャンデーをもらえる彼はきつと特別な存在なのだと行ってました。

今、彼はその女性と結婚してお父さん。息子や娘にあげるのもちらんヴェルターズオリジナル。

なぜなら彼らもまた特別な存在だからです。

1 A Bの生徒全員「「「全然怖くねエエエエ!!!」」」

第五十話：愛情も芸術も爆発が大事（後書き）

皆様の応援のお陰で五十話に達することが出来ました。ありがとうございます。この小説を書き始めた時はこんな小説読んでくれる人はいるのかと思っていましたが少しずつユニーク数やお気に入り登録数が増えていって読んでくれるという事が数という形ですが分かって、さらには毎回感想をくれる人もいてそれが励みになっています

文化祭で男女2人ペアのイベントを書く予定です
現在出場が決まっているペアは、

ハヤテナギ ヒナギク東宮 雄二翔子 日向ユイ 朋也渚
浦島太郎乙姫 亮士涼子 結弦かなで

の27〜30話の試練篇のカップリングと、

ゆり野田 銀時千冬 康太愛子 智春奏
を予定しております
アンケートは終了しました

第五十一話：半額という事はいつもの二倍食べれるという事（前書き）

今回は1 - A Bの生徒に起こった怖いお話。この作品では呪いによるキャラ崩壊が発生します。それと残酷な描写があります。

なお、呪いの人形の声のイメージは遊戯王のマリック・イシユタール（闇人格）でお願いします

あと、アンケートも実施中です。詳しくは五十話あとがきをご覧ください

第五十一話：半額という事はいつもの二倍食べれるという事

江戸時代の日本の某地方のとある殿様が孫の誕生日に1体の市松人形を作らせました

その人形がお城に飾られてからと言うものの、生まれたばかりの赤ん坊は重い病気にかかり、他の子供たちも川で溺れたり、使用人たちの間で不治の病が流行するなど災難が続いた

そんなある日のこと、殿様の火の不始末が原因で城が火事となり殿様の家族と使用人は全て火に呑みこまれて何もかもを焼いてしまつた。

だが、その市松人形だけは不思議なことに焼け残り笑みを浮かべていた。

その後、人形は各地を転々としたがそれを乗せた船が氷山にぶつかったり台風で沈没したり、それを飾った村で猟奇殺人が起こったりなど怪事件は相次いで…

その人形は今も何処かに新品同様の姿であるという…

「ゆでたパセリ~~~~ゆでたパセリ~~~~」

この日、当麻はいつものように学校へと向かっていた。

“マツテ、私二氣ツイテ”

当麻は誰かが自分を呼んでいるような気がした。その声は脳に直接訴えかけられたような声だったという。

誰だ！？と、彼は振り返って辺りを見回してみるものの、誰もいない。

気のせいだと思ってその場を去ろうとした当麻の目に次の瞬間、ある物が入った

それはゴミ捨て場に置かれたおかつぱ黒髪の赤く綺麗な着物を着た40?ほどの市松人形であった。しかも、首を上げて怪しげな笑みを浮かべ当麻の方をじつと見ているではないか。

(もったいねえな〜、新品同様じゃねえか。着物にも身体にも汚れなんて全くないし)

“アリガトウ私二気ツイテクレテ”
また当麻の脳に声が聞こえた

(まさか、この人形が俺に声をかけているのか)
次の瞬間、当麻はこの人形をカバンの中に入れていた。きっと、いつものような困っている者を見過ごせない性格から来る行動であろう。

それと、今日は缶瓶・ペットボトル・金属の収集日で普通ごみの収集日ではなかったのも、一つであろう

「フーことで、カミヤんはこの人形を拾ってきたわけか」

「ああ、なんか見過ごせなくてな」

「それにしても、なんか気味悪いな」

「まあ、日本人形だからこんなもんじゃないの？」

人形は1Aに飾られることとなった

だが、これが悲劇の始まりだとはまだ誰一人として気づいてなかった

《ククククク…侵入成功だア。私の呪いでこの学校にいる奴らを皆殺しにしてやる。ククククク》

人形はそんなことを思っていた

《私は今までに呪いで2千ものクズな人間どもを殺してきたア。私に罹ればこんな学校すぐに血の海だ》

「さ〜とて、HRと1限の授業を始めるのですよ〜」

ガラガラと音を立ててドアが開き、小萌が入ってきた。

「あれ？今日はナカジマちゃんはお休みなのですか？そんな話は聞いていないのですよ？」

全員の顔を見回していた小萌が異変に気付いた。

「大丈夫ですよ、先生。スバルったら朝食の後、5分だけ二度寝するから先行つてて”って言ってましたからたぶんまだ夢の中だと思えます」

「そうなのですか、ランスターちゃん。ナカジマちゃんには後でお仕置が必要ですね〜」

《さて、まずは小手調べだアア》
人形はそんなことを考えていた

その人形は自分を誰も見ていないのを確認すると、

チャラチャラチャラ

自分の隣に置いてあった画鋏を念力で床にまいたのだ

《足に何本もの画鋏を突き刺し、地獄の痛みに悶え苦しむがいい！
！フハハハハハハハ…》

10分後、

《フハハハハ…》
まだ笑っていた。

《ふう、何か疲れるし笑うのもやめとこ》
人形はそんなことを思い始めていた

タツタツタツ…
だがそんな矢先、廊下からこちらに駆けてくるような音が聞こえ始めた

《フフフ、来た来た!!》

ガラツつと大きく音を開けて画鋏がちりばめられている方の扉が開く

「すみません、寝坊しました!!」
元気よく、だが苦笑い気味に笑いながらスバルは教室へと入っていく

《そうそう、そうやって…》

「ナカジマちゃん、ダメなのですよ?二度寝するにしてもきちんとして
タイマーを掛けるなりしておかないと」

「はい、反省してます」

だが、スバルは何もなかったかのように教壇の小萌と話をしている

《な、何故だ!?何で痛がらない!?上履きを履いていたとしても
十分に痛みはあるはずだ!》
人形は痛がらずに話をしているスバルを見て戸惑っている

だが、その理由は至極単純なものだった。

「って、ナカジマちゃん。校舎内でのローラーブーツの使用は禁止なのですよ？」

「ごめんなさい、今履き替えます」

スバルはそういうと上履きをバツクの中から取り出して履き替えはじめた。そう、ローラーブーツだったからローラーに刺さったとしても靴底には刺さらなかったのだ

「あれ？何でだろ、ローラーに画鋐が刺さってる？」

その後、ドアの前に散らばった画鋐は「誰よ、こんな所に画鋐を撒いたのは！！危ないじゃない」と言いながら吹寄が塵取りで収集し元のケースに戻してしまった

《クツツ、運のいい奴らめ…だが、今度は邪魔はさせない！！》

時間が少し経って3時間目

この日の3、4時間目は文化祭の準備であった

《この学校じゃあ小細工は通じないか…なら私の本領を發揮してやる！！》

又又又又又！！！！》

「！！！！！！！！！！」

次の瞬間、1Aの教室で作業をしていた者たちを何かが襲った。

「ウウウ~~~~、何かダリ~~~~…」

「なんでこんなに疲れてるんだろ…」

「しかもなんか、イライラするし」

それは、極度の倦怠感とストレスだった。目は虚ろで焦点が定まってい

「なんか、ダリいな…」

「さつきから、怠い怠い煩いわね、そんなに怠いなら止めれば？」

「アア？そこまでは言っていないだろ？何だよその言い方は…」

「ほんとのことじゃない、さつさと帰って一人で寝てればア？」

「さつきからさ〜、てめえ私たちに命令しつぱなしでスゲエウゼエんだけど」

「それわかります〜ウ。自分が偉いとも思ってるんですかねえ」

「大して偉くねえくせにいい気なもんやなア？」

「仕方ないでしょ、私たちがリーダーなんだから…」

「皆さんは私たちの言う事を聞いてればいいんですわア…」

「ウゼエ、この2人殺さなきゃ俺らの気が済まねえ」

次の瞬間、彼らは鋏とカッターナイフを持ち、それを吹寄せとセシリアに向けていた

彼らは人形によつてもたらされた倦怠感とストレスで些細な、普段喧嘩にならないような事でも喧嘩の原因になっていたのだ。しかもその沸点は非常に低く“怒りの矛先”殺しても構わない相手”と思うほどだった

《殺せ！互いに憎しみ怨み合い殺し合うがいい！！殺せエ、殺せエ、殺せエエエ！！》

「ウガアアアア!!!」

彼らが人間とは思えない奇声を上げて殺し合いが始まった

が、

「何をしている貴様ら!!!」

「織斑先生……」

千冬が入ってきたのだ。

《チイツ、邪魔が入ったか。この催眠は簡単な邪魔で解けてしまうのが欠点だったな……》

「あれ、本当に何しようとしてたんだろ？」

「数秒前の事なのに全く記憶がないんだけど」

生徒たちは千冬の一喝により、人形の催眠から解けていた。しかもその時の記憶は消えているようだ

《次は……ウヌヌヌヌヌヌ》

またもや、念力を起こし、呪いをかける人形

「!!!」

念力に反応したのは鈴音、スバルの2人だった

《2人だけか……まあいい。こいつらから殺してやるよオオ!!!》

「おい、聞こえているか。バカ共。お前らはバカだ。そして私の下僕だ。私の言うことは何でも聞くウ。」

コクリ、と2人は頷いた。

「ならば開いている窓から飛び降りてしまえエエ!!」

人形は催眠をかけた2人の頭にこう囁く

「ワカッタ」

「トビオリレバイイノネ」

3人は今までしていた作業を止めて、窓の方へと歩き始めた。

シャル「鈴、どうしたの？」

ティアナ「スバル、どこへ行くつもり？」

「……」

だが、2人はシャルロットやティアナの呼びかけに反応することなく、一步一步、窓へと近づいていく

《飛び降りた直後、私は催眠を解く。そしたらどうなる。あの2人は死ななくても痛みに苦しむこととなるだろう!!フハハハ!!
!》

2人は窓を開けて足をかけた

「何やってるの!!」

「危ないよ!!」

「止める!!死ぬぞ!!」

1 Aの教室は5階、そんな所から落ちたらひとたまりもないだろう

「……」

そして、2人は…飛んだ

《今だア、催眠を解いてつと…》
人形は2人に掛けていた催眠を解いた

「「なツツ!?!」」

スバルと鈴音が気づいた時には、すでに重力による等加速度運動が始まっていた

《そろそろだなア、人間が地面にぶつかる心地よい音色が聞こえてくるのは…》

《何故だ!?!グシャリだとか、ドガツツだとかの音がするはずだろ!?!》

人形はまた戸惑っているようだが、皆さんはもうお分かりであろう

「…危うく死ぬところだったわね」

「でも何で、飛び降りようと思ったのかな?」

鈴音はISを展開し、スバルはウィングロードを創り出していたのである

「良かった、二人とも無事みたいね」

「心配かけさせんじやないわよ!?!」

キーンコーンカーンコーン、4時間目終了のチャイムが鳴る

「そつだ!?!」

「どつしたのよ?」

「今日は一学期に一度の“食堂先着200名全品半額キャンペーン

”の日だった!!”

「そう、なら急ぐしかないわね!!」

「ティア達も急がないと間に合わないよ～～!!」

「私たちは先に行かせてもらうわ!!」

そう、窓から顔を出しているティアナ達に向かって叫ぶと2人は食堂に向かって駆けていった

《畜生！運のいい奴らめ！！私の呪いと催眠をうまく避けやがって
エエエ！！》

どんな策を講じても失敗してしまうこのクラスに人形は怒りを覚え
始めえていた

《次は……！！！？？》

次の作戦を考えていたところで、人形は強い視線を感じた

《何だ！？誰か私の正体に気づいたとでもいうのか！？》

…まさかな、こんなクズばかりにそんな奴がいるわきゃあない《
人形は特に気にすることもなく、そのままやり過ごしてしまった

「あの人形が怪しいというのか」

「ああ、禍々しい気があの人形から発せられている気がするのではな

話をしているのは緋鞠とフィアである。

ちなみに、今回のお話からC3 シークューブ が新たに仲間入り
しましたよ～～

「どうするのじゃ？話しかけてみて確かめてみるか？」

「いや、今はその必要はない。こういう物に適した奴がいる。日本

ではこういつそうじゃないか、餅は餅屋、せんべはせんべ屋と」
ファイアは煎餅を食べながらニヤリと笑い言った
「…後者のせんべ屋は聞いたことは無いがな」

その日はそれ以降特に特筆するようなことは無かった

そして次の日…

「これが、ふいつちー（ファイアの事）の言つとつた人形か」

「ああ、もともと人形だったクロエなら何か聞き出せるかもしれないからな」

「ふむ、ならば聞いてみるとするか。ふいつちーやハルの通う学校で人形の呪いのせいで事件が起きたと聞きたくないからの」

「よろしく頼みます」

「おい、人形。お前は何故ここにいる？ここにいる目的は何じゃ？

私も仲間だ。なんなり自由に申すがよい」

と黒絵は人形を持って問いかけた

《仲間ア？こいつも人形だったのか？呪いの力で人間の姿になれる人形もいると聞いたが、まあ私はそんなことしないけどなア。人を操って殺し合いをしているのを見るのが好きだしなア》

人形はそう考えているだけで黒絵の問いに答えるつもりはないらしい

「どうやら、答える気はないようじゃの。」

黒絵は息をついて人形を机の上に置いた

「私たちはどうすればいいのだ？」

「簡単な事よ、奴がまた念力なり催眠なり呪いを使った瞬間を取り

押さえて自分の正体を吐かせる。私の予感がはずればよいのぢやが……」

「予感？」

春亮は黒絵に聞こうとした時、

「夜知にファイアちゃん、この人形借りてもええか？」

青髪が人形を手を取ってしまった

「別にかまわんが、何をする気だ？」

「いや〜、実は昨日一晩中考えとったんやけど、やっぱりこの人形怖いな〜って思ってたな。少しイメチェンさせたることにしたんや」

青髪はマジックでよく使われるBGM（オリーブの首飾りと言うそうです）をかけると、ある物を取り出した

「はい、よってらっしゃい！見てらっしゃい！！今からこの人形の髪の色を一瞬で金髪に変えるスーパーマジックを披露するで！！」
彼は教壇に人形と黄色いペンキを置いた。：もう、やることはお分かりですよね

《やめろ！！このクズ！！やることは一つしかねえじゃねえか！！》

ポチャリ

皆さんの予想通り、青髪は人形の髪の色をペンキにつけてしまったのです

「「「オオオオオオ！！！！」」」

「さらに、今回は出血大サービスでメイクも行っちゃうで！！」

「それなら俺も手伝うぜい」

「私もやる〜」

「私も〜」

と、次々と人形にメイクという名のいたずら書きをする生徒たち

「そのメイクだと、この衣装に合わないね〜」

「新しい衣装作っちゃおっか!」

どうやらメイクは着物に合わないらしく、着物を脱がせ裁縫の上手な人たちが新たな衣装を作りました

20分後:

「出来た!」

その肌雪のごとき白色、その目鋭く鷹の如し、その髪金色、額には全てを呪う“殺”の文字!!

その衣装、黒と白のマントを羽織り、骨を彷彿とさせる外観!!

要するにヨハネクラウザー2世のようになってしまったのである。

『テメエラアアア、いい加減にしるよなアアア!』

「人形が喋った!」

「この人形、妖怪だったのか!」

大声を出して不気味な黒いオーラを放ち、人形は宙に浮かびはじめたのだ

突然そんな風になった人形に生徒たちはパニックになっている

『テメエら、私が誰か知っているのか？私は何百年間にわたって何千もの醜い人間を殺してきた呪いの人形“蛇ダイク亜狗”だアア！！』

「やはりの…」

「知っていたのか、クロエ？」

「人形の禍具ワースの中では有名な話よ。悪の市松人形蛇亜狗、数々の災害を引き起こしてきたのだ。なんでも約100年前の豪華客船沈没、約75年前の集落大量殺人、約60年前の台風海峡船事故、25年前の飛行機墜落事故はこの人形呪いと噂されちよる」

「なるほどな…」

「だけど、こやつは禍具でない。こやつは最初に飾られた城の当主に恨みを持ったまま死んだ魔術師での、その当主たちを殺した際に殺人の快楽を覚え、以降、自分の念力と魔力で呪いや催眠をかけて大量殺人を行ってきた悪霊よ」

禍具というのは、人間の負の思念を受けて負の方向に変質して呪われ、所有者や周囲の人間に悪影響を及ぼす代わりに、不思議な力を発揮するようになった道具の事である

『おい、そのの髪が長いの』

「私のことかの？」

呪いの人形“蛇亜狗”は、黒絵を指差した。

『テメエも私の仲間とか何とかほざいてやがったが、テメエは髪は伸びるのか？』

「ああ、伸びるわ。それがどうかしたのか？」

『いいよなア、テメエはそんな便利な機能が付いていてよオ！！私はずっと伸びないからこのままだよ！！一生！！何百年にもわたって綺麗な黒髪を保ち続けていたというのによオ、この馬鹿共のせ

いでその髪もオジャンだよ!!」

人形は髪型を変えてしまった青髪たちを睨む。

「ヒイイ!!」

呪いの人形だけでも怖いはずだが、ヨハネクラウザー風の化粧がよ
り怖さを引き立たせていた。

「もういい!! テメエらを今からまとめてぶつ殺してやる!!!」

この技だけは使いたくなかったが今が使う時のようだアア!! 私が
何千人と殺し続けてきた何百年という歴史の中で初めて使う技だ覚
悟するがいい!!」

その言葉に、当麻や緋鞠、くえす、ファイア、黒絵は戦闘態勢になる

「必殺!! 皆殺しハリケエエエン!! まずはテメエだ、ツンツン
頭野郎オオオ!!!」

ポコポコポコポコ...

人形はその小さな腕を高速で回すと、その腕で当麻の頭を何度も何
度も叩いた

「つて、しょお〜もなすぎるわアアア!!!」

1Aにいた全ての者が人形にツツコミをして当麻が人形の頭を掴む
と自慢の右手で人形の顔にめり込む一撃を与えた。

蛇垂狗は念力で人形を動かしていたため、当麻の右手のパンチを受
け抵抗することができなかった

パライイン！！

人形はガラスを割って、外へと吹き飛んで行った

その頃…

「あゝすつきりした。さすがに脱糞はまずいとおもったけど、最寄りのトイレまで持たないし、誰も見てなかったから別にいいよな」
どうやら近藤がトイレまで間に合わず、脱糞してしまったようです

「それにしても、ウエットティッシュで尻を拭くとやっぱりスースーするな」

って、そんな情報誰得なんですか

「さて、今日もお妙さんの所に行くか…」

その10秒後…

ヒューーン、ベチヨツツ

当麻によって殴り飛ばされた人形がどこかに落下しました

《ま、まさかとは思うが…この感触とこの臭い…まさかアアア！？》

そう、人形は近藤が脱糞したところに落ちてしまったのである

「おーい、あつたぞー！！」

数分後、飛ばされた人形を探しに来た当麻たちが見つけたようだ

「でも…」

最初に見つけた当麻が、人形の髪を持ちながらそれを生徒たちの方

へと向ける

「……ウツツツ……気持ち悪っ！」「」

その人形を見た者たちは顔を背けたり、口を押えている

「……………」

「おい、何か人形が言ってるぞ」

人形は耳を近づけないと聞こえないレベルの声で何かを言っていた。当麻が近づけると、その声を聞くことが出来た

『私を……早く捨ててくれ……もう、この学校嫌だ……』

人形からはさつきまでのようなオーラや威圧は全く感じられなかった

その夜

「おとな……になった……ら……ら……オカマになりたいな……」

この日、銀時は飲み会の帰りで酔っ払っていた。

“マツテ、私ニ氣ツイテ”

銀時は誰かが自分を呼んでいるような気がした。その声は脳に直接訴えかけられたような声だったという。

誰だ！？と、彼は振り返って辺りを見回してみるものの、誰もいない。

気のせいだと思ってその場を去ろうとした銀時の目に次の瞬間、ある物が入った

それはゴミ捨て場に捨てられたあの市松人形であった。髪型も化粧もヨハネクラウザー2世のままで、所々茶色くなったままである。

きつとついでしてしまった部分がシミになってしまったのだろう
人形は首を上げて怪しげな笑みを浮かべ銀時の方をじっと見ている。

（うっぷ、汚ねえ。しかもウ　コの臭いすんじゃねえか）

「オカマになつたら〜お釜のごはんたらふくいただきま〜す
銀時は人形を捨つことなくそのままほろ酔い気分で帰って行った」

その後、悪霊の市松人形“蛇亜狗”伝説は2011年7月をもって
途絶えてしまったという
めでたしめでたし？

第五十一話・半額という事はいつもの二倍食べれるという事（後書き）

次回、文化祭の準備期間中に大事件発生！？ハヤテが！？サンジが！？さらに　　がキス魔になっちゃった！？

第五十二話： コアラ大明神！！

我々の住む青く美しい星、地球。

地球には約150年前の天人襲来以来、数々の宇宙人が来訪し、居を構えている

近年50年ほどでは襲来の時のような侵略するという目的で来る者は少なく、そのほとんどが地球人と友好関係を持つようになったがまだ侵略をしようと思っっている宇宙人がゼロになったとは言えない。地球は今も侵略者によって狙われているのである

この日もまた、地球に侵略者の魔の手が…

「隊長！！大丈夫ですか！？」

「一人では危険すぎます！！私たちも一緒に！！！」

「心配いらぬ。こんな星、私一人の力で十分だ」

無線機のようなもので通信を取っていた隊長と呼ばれていた人

（こんな星一つ、物の5分で侵略してくれる！！）

どうやら、地球侵略を考えているようだ

『結野アナのブラック星座占い！！』

そんな侵略者が電器屋の前を通りかかったところ、展示されているテレビで結野アナの占いがやっていた。

（星座占い？この星でもあるのか…私はしし座だが。まあ景気づけに見ておこう）

『しし座の人、特にこれから地球を侵略しようとしている身長170?ほどでケンタウロスのような容姿をしている肌色の髪の毛をして褐色の肌を持つあなた!!』

「…まるつきり、私の事ではないか」

そう、この侵略者は結野アナが言っていたような容姿をしていた。ちなみにこの侵略者の名前はスーン・ケタロと言っそうです。まあケンタウロスのアナグラムなんですけどね

『今日死にまゝす』

「何イイイイ!!!??」

『ラッキーカラーは青。何億回殴られてどんなに酷い青痣が出来ても言い訳ができるよう、顔に青い絵の具を塗りまくっておきましょう』

「何とかしろよ!!何で殴られたの前提なんだよ!!殴られる前に何とかしろよ!!」

まあ、何とかするのはあなたの方だと思いますけどね

(でも、たかだか占いであろう。それにこのような辺境の星の占いなど信用できるものか)

けれど、彼は気にしないようにするみたいですな

(まずは…)

スーンは侵略作戦を立てていた

「よし、これで買うものは全部だな」

そんなスーンの目に入ったのはホームセンターから出てくる布や画

用紙などをビニールに詰めて学校へと戻るサンジの姿

ちなみにこの日は文化祭準備の1日目である

(ちょうどいい、あのオスを利用させてもらおう、ツツツツツ)

ツツツ、と笑いながらスーンは前を歩いているサンジへと近づいていった

「おい、そのオス!!」

スーンはサンジへと声をかける

「んあ？誰だおめーは？全然見たことねえような姿してるが」
呼ばれたサンジは振り返り、スーンの姿を見ていった

だがその次の瞬間!!

ブチューー

スーンはサンジの顎を両手で掴むと自分の唇とサンジの唇を重ね合わせたのだ

バタリ、とサンジは気絶してしまった

(ツツツツツ、お前の姿、しばらく借りさせてもらう。俺たちは生物の口に吸い付くことによってその生物に変身することが出来るのだ。そして俺が変身している間、その生物は気絶をし続ける。それが俺の能力の1つ目だ)

どうやら、サンジが気絶してしまったのは男とキスをしてしまった

悲劇からではなく、スーンの能力から来るものようだ。スーンの容姿はサンジの姿になりきっていた。

ちなみにスーンの星の人たちが真似できるのは容姿と声までで特殊能力はコピーできないとのことだ

(さて…降り立ってみたはいいものの、どこに何があるのかも分からないぞ？地図もこの星の言語で書いてあるから読めないからな…)

まあいい、とりあえずこの男が歩いて行こうとした方向へ歩いてみるか)

スーンは気絶しているサンジを近くのゴミ捨て場のポリバケツに入れたサンジが歩いて行こうとした方向へ歩いてみることにした

そして5分後…

(ここは…?)

スーンは桃源郷学園に着いていた。文化祭の準備で大変賑わっている。それにこの学園では生徒たちの出し物はもちろんのこと、父母の会やOB・OG会の出し物も多くいつもより人が多いのだ

(ずいぶんと賑やかで派手な装飾…祭りでもやるのか?)

面白い!!この祭りに来たものすべてを洗脳してやる!!ウツツツツツツツツツ!!)

彼は高笑いをしながら歩き始めていた

「あれは、サンジか?」

「なんでこんなところで高笑い?っていうか変な笑い方だな」

もう一度言っておくが、今のスーンはサンジの姿である

（もう一つの俺の能力、口づけをし尚且つ舌を絡ませ俺たちの身体から分泌される洗脳液を送り込むことにより、洗脳は完成する。俺たちの星の特権階級にしかできぬ荒業よ！！）

スーンが洗脳方法を脳内で確認しているふりをして読者の皆様に教えている間に彼はとある場所に着きました

（…ここは…）

スーンの目に入ったのは音楽室であった。ここでは軽音楽部がライブに向けて準備をしている。

（ほう、音楽か…）

「あつ、サンジ君だ！！おーい！！」
音楽室の様子を見ていたスーンを見つけた唯が彼を呼んだ

（サンジ？俺が今姿を借りている男の名か？）

「おいでよ、サンジ君！！今日もお菓子作ってきてくれたの？」
自分が呼ばれたのか戸惑ってるスーンの手を握り、室内へと招き入れた

「おつ、サンジじゃん」

「今日も差し入れ作ってきてくれたの？」

「みんな〜サンジ君が来てくれたから一度休憩にしましょ」

サンジ（スーン）が来たことにより一度準備を止めてティータイムの準備をするメンバーたち。

「…差し入れ？」

「何言ってるんですか、いつつも作ってきてくれるじゃないですか」「今日はクッキーですか？それともケーキとか？」

「（クッキー？ケーキ？何の事だ？飲物の用意をしているから何かお茶請けが欲しいのか？）あいにく、作ってきてないのだが」

「そうなんだ…残念」

「折角、楽しみにしてたのに」

「じゃあ、サンジは何をしに来たんだ？」

「聞きたいのか？」

「それは私たちのセリフじゃないの？私たちの音楽を聴きたくてきたとか？」

「違う、俺はだな…」

スーンは一番近くにいた岩沢に顔を寄せると

「なっ、何だ？」

レロと舌を出した

「俺と舌を絡ませ合おう…！」

ドガッッッ！！！！

次の瞬間、彼には岩沢の右ストレートがさく裂していた

「なっ…何故だ!?!」

スーンは何故殴られたのか意味がさっぱり分からないようだ

「サンジ君、悪いけど部活の邪魔をするんだっいたら帰って…」
サンジを

「なあ、いつものサンジと様子が違うくないか？」

「そうか?いつもと一緒に見えるけど…」

「いつもと一緒にの変態で救いようのないサンジ先輩です」

それにしても酷い言われようですね

その間にもサンジの格好をしたスーンは、亜子、関根、エルシイ、歩美、唯、円、梓、結、ひさ子とディープキスを迫っては殴られたり椅子で頭を何度も叩かれたりしている状態が続いている

「何故だ!?!俺と舌を絡ませ合おうとしない!?!」

スーンは堂々と言ってのけているが、地球では完全に変態行為です。まあスーンの星では彼の行動を見る限りキスやディープキスが愛情表現ではないみたいですね。

それに既に50回近く殴られたり叩かれたりしていてももう止めるよ
と思いますが、止めないその(侵略への)心意気はすごいですね…

「ねえ、ちょっと先生呼んで来よう!?!」

「そうだね!?!」

「ちょっと、私たちを置いていかないでよ!?!」

「このままじゃサンジさんに犯されちゃう!?!」

目の前にいる偽サンジことスーンに恐怖を覚えた軽音楽部のメンバ

「私たちは音楽室から急いで逃げて行った

「待て！！ただ舌を絡ませ合うだけだぞ！！」

「まだ、口づけして舌を絡ませ合う事の重要性に気づいていないスー
ンはとんでもないことを言いながら逃げるメンバーたちを追いかけ
ていく

「「「変態だアアア！！！！」」」

「これもう警察呼んだ方がいいんじゃないですか！？」

「そうだな、あと風紀委員も呼ぼう！！」

「ちょっと待って、アレ！！」

岩沢は逃げている途中で目の前を歩いてくる1人の男を見つけた

「あれは、ロロノアか」

そう、ひさ子の言う通り見つけたのはゾロ

漣「ロロノア、助けてくれ！！」

細「サンジ君が私たちにディーブキスをしようと迫ってくるの！！」

「はぁ？サンジが？」

訝しげにゾロがサンジの容姿をしたスーン方を見てみると彼は舌を
レロレロと上下左右に不気味にさせながらこっちを見ているではな
いか

「テメエ、何の真似だ？答えようによっちゃ叩き斬るぞ？」

「ちょっと待て

どうもさっきから妙だと思っていたんだが……」

「何が妙なんだ、明らかにテメエのやってることの方がおかしいじやねえか」

「なにを言う。俺はただメスの唇に吸い付いて舌を絡め合わせようとしただけだぞ!？」

「あいな…」

「それは、ここでは悪い事なのか？」

「あつたりめえだ!! 出会いがしらに女の口に吸い付こうとすれば誰でも叩かれるわ!! バカでもチョンでも分かるわ!!」

ゾロは怒鳴った

「…そうだったのか。」

いや、貴様に会えなかったら同じ過ちを繰り返すところであった。感謝するぞ」

そういつてスーンは自分の両手でゾロの両手を握ると…

ブチュウウ… チュパニユプ

口付けを交わしたのである。しかも舌を絡め合わせるとも濃厚な物

何度も言うが、スーンはサンジの姿である。

「…サンジ（先輩・君）とゾロ（ロロノア先輩・君）のキス…」

ゾロの後ろに隠れるようにしていた軽音楽部のメンバーはそれをありありと見てしまった

後に、軽音楽部メンバーは語る

“ あれは、見るに堪えないものでした ”

“男同士のディープキス、生まれて初めて見ました”

“私の中で何かが芽生えそうでしたがそれは完全に闇に葬り去りた
いです”

「テメエエエエ!!!」

突然キスをされたゾロはスーンを突き飛ばした

「貴様、言っていることとやってることが矛盾しているではないか
!!!!」

「てっ、てめえはもっと早くに殺しておくべきだった!!!」

ゾロは身体を気持ち悪さでブルブルと震わせながらもスーンに刀を
向けた

「殺す!!!!」

そして当然のこと、スーンに切りかかった

(ま、まずい!!!)

スーンもゾロの殺気にようやく危機を感じたのか逃げはじめ

(こ、このままでは殺されてしまう!!! 誰か別の者に変身しなけれ
ば!!!)

ドガッ

そんなことを考えている矢先、スーンは曲がり角を曲がろうとして
ある人物にぶつかった

「……ッテテテテ、サンジか。何してるんだいきなりぶつかってきて」

（そつだ、この男に化けよう。ウツツツツツツツ）

次回、まだまだ続くよ侵略者スーンのお話。果たしてスーンとぶつかり彼が変身しようとしているのはいったい誰なのか？

第五十二話： コアラ大明神！！（後書き）

前回のお話は皆さんお気づきの通り、クレヨンしんちゃんのパロディーでした

今回は、うる星やつらアニメ190話です。

この侵略者スーンの話が終わったらやっとかさ文化祭の前夜祭！！
これからの事について面白おかしく（？）エヴァンジェリンの別荘
で話し合います

今気づいたんだけど、この軽音楽部には3人の“ゆい”がいるのね…
けいおん！の平沢唯に、Angel Beats！のユイに、神のみぞ知るセカイの五位堂結

ちなみに、この作品の軽音楽部はGirls Dead Monsters・放課後ティータイム・でこぴんロケット・2B PENC ILS（エルシィ達では2Cですが、原作に沿う形で2Bのままにしました）の4グループで構成されています

第五十三話：突拍子もない豊後（前書き）

気持ち悪くて申し訳ないです。ですけどあと一人だけ、このお話で
スーンが変身する4人中1人だけ同性同士のディープキスシーンが
2回あるのでご了承ください

第五十三話：突拍子もない豊後

前回のあらすじ……サンジとゾロのディーブキス、その一言に尽きる

(ウツツツツツ…変身完了!!)

スーンはぶつかった男と口付けし、変身を済ませていた

気絶した男は掃除用具入れに押し込められていた

ゾロ「あのエロガツパ!!八つ裂きになっている!!」

そう言いながら変身したことに気づかず通り過ぎていくのを確認したのち、新たな行動を始めた

(…さて、さっきの緑髪の話だとメスに口付けするよりかはオスに口付けをした方がいいという事か…)

スーンはゾロの言葉を加味しながら新たな洗脳相手を探していた

(それに、いきなり襲うのではなくこの変身相手と知り合いの者から洗脳していった方がいいな…)
そんな事を考えていると

「お〜い、音無!!」

(…俺の化けている男の事か?)

スーンはそう思い、振り返った

「探したんだぜ、一体どこに行つてたんだよ?」
そう言いながら、近づいてきたのは日向。

今度、スーンは結弦に変身しているみたいです

「貴様に聞こう。俺の名前は音無と言うのか？」

スーンは本物の結弦だと思って近づいてきた日向に自分が変身している者の名前を聞いた

「…？何変なこと言ってんだ？」

日向は突然変な事を聞かれて戸惑っているようだ

「だから、俺の名は音無でいいのか？」

「…音無は苗字で名前は結弦だろ？本当にどうしたんだ？記憶喪失にでもなっちゃったのか？」

日向は不可解に思いながらもスーンに苗字と名前を教えてあげた。

「成程…音無結弦か……」

「お前、本当にどうしちゃったんだ？何か口調も変わってるし」

「気にするな、一過性の風邪みたいなものだ。ところで、貴様と俺の関係は？」

「関係って、お前、親友に向かって何てこと聞いてんだ？」

「親友か？」

「おうよ！」

「ならば話は早いな。ウツツツツ」

スーンは変身している音無の知り合い、しかも親友と豪語している日向と出会い嬉しさのあまり高笑いしてしまった。

(こやつとなら簡単に舌を絡ませることが出来そうだ)

「なんだ、その笑い方？理事長並に変だぞ？」

「だから気にするなと言っておろうが。」

まあよい。貴様を俺の親友と見込んでの話がある」

「何だ？」

「俺と舌を絡ませ合ってくれ！！」

そう言い、スーンは舌を出して両手で日向の肩を掴み舌を出して口付けをしようとした

だが…

「いきなり何すんだ！」

日向は右手を口の前に持ってきて自分の口の貞操を守っていたのだ

「何って舌を絡ませ合おうと！！」

「お前なあ、俺に散々ホモだとか同性愛者だとかの疑いをかけておいてそれって…」

「何を言っている！俺にはそんな気はない！！」

スーンは同性愛者と言われて、驚いたのかそれを否定した

「そんな気がないんならディープキスするか普通？」

「ディープキス？」

どうやら、スーンはディープキスの事を知らないようだ

「お前が今俺にやろうとしたことだろ？」

「…舌を絡ませ合う事はこの星ではディープキスと言っのか…」

「何初めて地球に来た宇宙人みたいな事言っただ？」

「なっ！？そんなことは無い！！俺は音無結弦だ！！」

「まあいいけどよ…一回本気で保健室で見てもらった方がいいんじゃないの？」

「だから俺は健康で…」

「どうしても男同士でディープキスがしたいっていうんだったら、あいつに頼んだらどうだ？俺にはユイがいるから。お前にも奏ちゃんがいるんだからよ、奏ちゃんを泣かせることはするんじゃないぞ？」

そう言っただけ日向はスーンの肩をポンと軽く叩いて去って行った

「あれ、音無さん？日向と何を話していたんですか？」

そう言っただけ日向と変わるようになってきたのは直井だった

日向、完全に直井に任せて逃げましたね

「なにも、ディープキス？についての話をしていただけだ」

スーンは初めて使う言葉に戸惑いながらも日向とのやり取りを簡潔に説明した。

「ディーツ！？ディープキスですか！？」

直井は予想もなかった言葉に驚きを隠せないでいるようだ

(うおのれえ、日向アア…僕を差し置いて音無さんとそんなワイ談をしようとは…)

そして日向に一方的な怒りを燃やしていたりもしました

「その結果、俺はお前とディープキス?をした方がいいという結論がああ男から出た」

(又アアアアアイス!!日向、ナイス!!!)

ですが、スーンの言葉で怒りは称賛に変わっていました

「と言う事だから…」

音無の姿をしたスーンは直井の肩を掴むと

ブチューー…

またも、躊躇うことなく口付けをしたのだ

直井は硬直したまま、動こうとはしない。きっと頭の中が嬉しさや戸惑い等で混乱しているのであろう

(ウツツツツ、こやつが洗脳者第1号か…あとちょっとで洗脳完了だ!!!)

スーンは洗脳をしながらも、勝利の余韻に酔っていた

バツツツ!!!

しかし、あとちょっとという所で直井はスーンから離れた

(む、どうしたのだ?あとちょっとという所だったのに。まさか、バレたのではあるまいな…)

スーンが直井の様子を見てみると、下を向いたままブツブツ何かを言っているようだ

「どうしたのだ？」

と、心配したスーンが直井に声をかけた瞬間！！

「ウオオオツシャアアアア！！！！僕の時代がついに来たアアアアアア！！！！」

そう言いながら直井は言葉通りに狂喜乱舞し満面に笑みを浮かべて廊下を走って行った

「…なんだったのだあいつは？洗脳が失敗してしまったではないか」

そんな直井の一方、スーンは不服だった。折角洗脳に成功したと思ったらこの様である

（まったく、何なのだこの星の者は！！高々舌を絡ませるくらいだぞ！？何でそれくらい的事で殴ったり怒ったり将又喜んだりするのだ！訳が分からん！！）

そんな愚痴を漏らしながら、スーンは新たな洗脳相手を探していた

「おい、音無！」

しばらくして、また変身している音無が呼ばれた。今度は野田だった

「何の用だ、貴様」

「さっきの直井とのディープキス見ていた。お前、ゆりっぺが折角風紀委員として校内の風紀を正すため頑張っているというのにお前

はそれに刃向うつもりか？」

この小説の中で風紀委員がまともに仕事をしていること見たことありませんけどね。ゆりも仕事をハヤテに押し付けていましたし

「ゆりっぺに刃向う奴は俺が倒す」

そう言っつて野田はハルバードの刃をスーンへと向けた

（なんなのだ、この男。いきなり現れて俺を倒すだと？

まあいい、この男も洗脳してくれる。見る限り腕っ節はよさそうだからな、ウツツツツツ！）

「音無、ゆりっぺに刃向うつもりなのか？答える！！」

野田は叫ぶ

そんな野田にスーンはニヤリと笑い

「いいだろう、答えてやる」

といった直後一瞬で間合いを詰め、

ブチューー

またもやディープキスをしてしまったのだ

ドガツツツ！！！！

だが、野田は

「何をする貴様！！」

スーンは突き飛ばされたことに文句を言おうとした。だが、彼のあの変化を目の当たりにした

「お前、泣いているのか？」

そう、野田の目からは微かに涙が零れていたのである

「貴様！！おつ、俺のファーストキスは…ゆりっぺに…捧げるつもりだったのに…」

チクシヨオオオ！！

殺す！！殺す！！何があっても殺してやる！！」

一瞬の内に野田は怒りと憎しみの赤黒いオーラに包まれた。でも、捧げるって決めていたって彼も一途ですね〜

「き、貴様！！何でそんなに怒っているか分からないが、とにかく落ち着け！！」

そんな野田に危機感を感じ、スーンは必死に宥めようとするが、

「問答無用！！お前を殺す！！」

野田は聞く耳持たずにハルバードを振り回し、スーンに襲いかかった

(まずい、この身体もここまでか！！早く次の身体を探さねば！！)

スーンは音無の身体に限界を感じ、野田から逃げつつ、次の身体を探し始めた

しばらくして、

「あれ、どうしたんですか音無さん。そんなに急いで？」

野田から逃げている音無に誰かが声をかけた。彼には野田の姿が見

えていないようで、つまり野田から一定距離離れることが出来たのである。

（今がチャンスだ！！）

スーンはこの機会を逃さず、話しかけてきた男に口付けをし、変装した。

「待てエエエ！！音無！！俺の貞操を奪いやがって！！」

そんなスーンに気づかず、野田も彼の目の前を通過して行った。

（全く、この星の者はなんなのだ。彼らの感情に付き合っていると一向に洗脳が出来ないではないか）

（決めた、奴隷とする者たちの感情に左右されてどうする。初心に戻って、無理矢理洗脳してやる。さつき（サンジの時）は選んだ顔が悪かっただけだ）

スーンは今度は無理矢理することにしたのだ。

だが、この選択が彼の運命を大きく変えることになるとはまだ彼は気づいていなかった。

（なるべく人が居ないところに隠れて襲おう）

そして、彼が隠れた場所も彼の運命を大きく変えることとなった。

10分後…

ガヤガヤと外が少し騒がしくなってきた。

(騒がしくなってきたな。)

ガチャ、とスーンが隠れていた扉があいた

そこにいたのは桃香だった

「……………」

ガチャ、桃香はスーンと目を3秒ほど合わせた後、もう一度戸を閉めた

ガチャ、10秒後もう一度ドアを開けてスーンがいるのを確認したのち……

「キヤアアアアア！！綾崎君が！！綾崎君がこの中に！！」

その部屋に響くような声で叫んだ。どうやらスーンが化けていたのはハヤテだったようだ

「綾崎君！？」

「こ…このロッカーの中です」

「何で綾崎君が女子更衣室のロッカーの中に隠れているのよ！？」

そして、彼が隠れていたのは女子更衣室のロッカーの中

(メス、叫びやがって。まあ良い、片っ端から洗脳して行ってやる！)

「というわけで、メス！！俺と舌を……」

ハヤテに変身したスーンは桃香の両肩を掴みながら舌を出してその顔を近づけていった

ドゴオオオオ！！

だが桃香の隣にいた愛紗と翠が彼の頬へフックを喰らわせたのだ

(まだまだ！！まだまだアア！！)

今度、彼が目を付けたのはその周りでコスチュームに着替えていた
2Bの生徒たち

けれども…

「この変態！」星のストレート

「キヤアアア！！」亜美のフック

「誰がキスするか！！」裕奈のアッパー

「……！！」桐葉のダブルストレッジハンマー

「女の敵！！」千世のオーブンハンドブロー

「100万回死ね！！」文乃のボディブロー

「このブタ野郎！！」美春のナツクルアロー

「カスが私にキスしようとしてんじゃないわよ！」美々のヘッドロ
ックパンチ

が炸裂し、誰一人として洗脳することは出来なかった

そして、

「き…貴様を…」

ヴィータに近づき、口づけを求めようとした。それでもやっぱり、

「消えるこの変態！！」

グパアアア！！

彼女のグラーファイゼン ギガントフォーム による打撃がスー
ンの頭頂部にお見舞いされた

『しし座の人、今日死にまゝす』
結野アナの言葉がスーンの頭の中で繰り返される

(あ…俺、死んだな)

2・Bの女子生徒たちにボコボコにされたスーンには限界が訪れていた。

長年の侵略者生活は知らぬ間に彼の身体をボロボロにしていたのかもしれない

それと重なるように今回の地球侵略での失敗。彼のプライドもまた傷ついて何のための侵略だか訳が分からなくなっていた

けれども、それと同時に彼の心の中には悔しさも残っていた

こんなはずではなかったと……

(立て、立つのだ俺!!!この難攻不落の星を落としたとき我には全
ての地位と名誉が約束されているはずだ!!!

くじけるな、頑張るのだ俺。俺はダークサイドヒーローだアアア
!!!)

その悔しさをバネとして、スーンは立ち上がったのだ

彼は殴られていた際に足を少し痛めていたため立ち上がる補助のよ
うなものに手をかけた

で、その補助にしたのは

「キヤアアアアア!!!」

明日菜の下着だった。彼はいま、彼女のスカートの中へと手を入れ

てしっかりとパンツを握っていた

「ちよつと、離して！！キヤッツ！！」

ドガッツドガッツ

「ゲハッツツ！？」

明日菜はスーンを払いのけようと何発か蹴りを喰らわせたが4発目でバランスを崩してしまい転んでしまった

ハヤテに変装していたスーンはガツチリと下着を掴んでいたため転んだ拍子にずり下げられてしまった

「つていうか。アスナってまだパイパ だったんだ」

「へえ…アスナさんパイ ン…意外」

そして、明日菜のコンプレックスとも言えるパ パンが露わになってしまった

「ブシャアアアアア！！！」

「ムツツリーニ、何があつたの！？ゲハッツツ！！」

「どうした吉井に土屋！？ブハッツツ！！」

「杉崎まで！ダパッツツ！！」

その場に偶然居合わせたムツツリーニ、明久、鍵、一誠の4名はそれを見てしまい鼻血を出して気絶してしまった

「イヤアアアアアア！！！」

明日菜に“学校の廊下で下着を脱がされ、パ パンが丸見えになってしまうという”新たな黒歴史が生まれた。ネギまの女子校状態でしたらまだ救いようはありましたが、今は共学ですからね…

「ハアアアヤアアアテエエエ〜〜〜!!」
後ろから自分が今変身しているハヤテを呼ぶ声がしたのでスーンは振り返った

そこにはどす黒いオーラを放ち、金髪のツインテールが怒髪天となつてしまっているナギの姿があつた

「貴様、私というものがありませんながら女子更衣室に隠れて大多数の女性にディープリキスを迫つてたそうじゃないか!!」

しかもここで神楽坂の下着をずり下げるほどの変態だったとはな…
もう完全に怒つてます。ナギがハヤテに貴様なんて言葉滅多に使わないでしょうに

「くおの〜〜〜」

ナギとスーンの追いかけてここが始まった

ここだ!!

スーンはナギから逃げるために、とある一室のドアを開けその中へと入った

ナギも入ろうとしたが、入ることは出来なかつた。なぜなら…

「ハヤテーーーー!!男子トイレに逃げ込むなんて卑怯だぞ!!」
そう、スーンがはいったのは男子トイレだったのである

「出てこい!!!卑怯者!!!浮気者!!!」

「あれ、どうしたの？ハヤテ？」
ハヤテに変装しているスーンに誰かが声をかけた

一方その頃、生徒会会議室では第一・第二・第三・総合生徒会の役員と各クラス学級長が会議を終えて束の間の休憩をしていた

「なあ、ヒナちゃんって同じクラスの東宮君の事が好きなん？」

ブーーーーッ！！ケホッケホッ

ヒナギクは突然はやてからそんな事を言われて飲もうとしていた紅茶を吹き出してしまった

「にやつ、にやんで私が彼の事にやんか！！？」
完全に噛んでしまっています

「学校中で噂になってるからね。先月（試練篇の事）と4月、みんなの前で告白してたし」

「その後、綾崎君や吉井君に料理習って時々お弁当を作ってきてくれるんだよね」

「いい旦那さんだと思うけどね、愛する人のためだったらなんでもする一途な心を持って」

「めっ、迷惑よー！！」

「」「迷惑？？」

「そりゃあ、作ってきてくれるのはありがたいし、料理もおいしいし、私のために頑張ってくれてるし、剣道も頑張っているみたいだし嬉しいけど迷惑なの！！恩着せがましっていつか！！」

「恩着せがましいねえ」

「なかなかいないと思うけどね、彼みたいに一途で金持ちで顔も悪くない」

「知らないわよそんなの!!」

「そうだ。今からヒナ以外の女の子で一斉に東宮君に“私、前々からあなたの事が好きです”ってメールしてみない？」

そんなヒナギクの様子を見ていた楯無が突如そんな事を言い出した。もちろん冗談であるが

「ダメエエー!!!」

ヒナギクは普通の教室の2〜3倍はあると思われる会議室全体に響き渡る声で叫んだ

伊織「何で駄目なのかな？」

「遊びだよ？それにヒナが迷惑だと言っててるからあわよくば2人の仲を離そうとしているだけなのに」

「迷惑なんだろう？だったらさっさと引き離してもらえばいいじゃないか」

「それに万が一付き合うつてことになっても彼の事だから一生その人を愛してくれるんじゃないか？」

「べつ別にそんなお願いした覚えはないわよ!!それに、きつ、きつとヘタレでモテなくてとつても初心ウラな彼の事だから知恵熱だして倒れちゃって入院するわよ!!だからダメ!!何があつても絶対!!」

「なら、別にいいけど」

「ならもう休憩は終了!!仕事を進めましょ!!」

ヒナギクは変な事を聞かれる前に無理矢理休憩を終わらせて仕事に

取り掛かった

(これ以上聞かれたら、何話すか分からないもの。特にこの前の日曜…)

どうやら、ヒナギクと東宮との間には何かがあった様子。だけど深く考えないようにして書類に手をかけたその時、

ガラガラガラ!!

大きな音を立てて、会議室の扉が開いた。そこにいたのは2 - A副学級長の智代だった

「どうしたの？」

「どうしたもこうしたもない！ヒナ、いったいどうい教育をしているんだ!？」

智代は机に向かっていてヒナギクの前へとやってきてバンと一度机を叩いて行った

「東宮が色々な女の子とディープキスをしようと迫っている。トイレから戻ってきたと思いきや、私や綾瀬や神楽や春風にキスをしようとして撃退したんだが、2 - Cに移って神崎や三日月や平沢にキスを迫ってたんだ。」

スーンは今、東宮に化けている模様です

「へえ〜〜、彼がねえ…」

ヒナギクは耳も貸さずに仕事を続けようとした

「もしかして、ヒナちゃんが相手してくれないから他の女の子に走っちゃったとか？」

バキツツツ！！

上の音は伊織の発言に反応したヒナギクが持っていた万年筆を握り割る音である

「今のNGワードだったかな、征？」

「そうだろうな」

「私以外の女の子にねえ……」

ブツブツと何かを呟きながら扉の方へと向かっていくヒナギク

「どこ行くの？仕事は？」

かなでがヒナギクに聞いたのだが、

「東宮君はとおってもキツイお仕置きが必要みたいだからしてくるわね」

ヒナギクは心は全く笑っていない満面の笑みでそう言うと東宮の元へと駆けていった

残された人たちはヒナギクのツンデレにニヤニヤしながら

「ねえ、どう思う？やっぱり好きなのかな？」

「もう好きでいいんじゃない？」

「私もそう思うわ。今の桂さん完璧にキス魔になった東宮君に嫉妬しているもの」

六夏「畜生…賭けが、私の千円が！」

氷室「この賭けは僕たち“桂ヒナギクは東宮康太郎が好き”に賭けた人の勝ちのようだね」

はやて「この結果、賭博サイトで公表するで」

「どれくらい人数集まったの？」

「ちよつと待って………すごつ、500人は超えてる」

噂になっているところかこの人たちヒナギクが東宮を好きかどうか

を賭けていたみたいですね。しかも2、3人の間での賭けじゃなくてサイトを立ち上げてまで大々的にしているようです

ちなみに全投票者556人中“好き”に投票したのは117人、“そうでない”が439人。1000円一律で配当はなんと約4.752倍。ちなみに2 - A B C、1 - A B、3 - A Bの生徒の9割がこの賭けに参加していたとの事。

その頃、皆さん色々あつてお忘れかと思いますが本物のサンジはというと…

(畜生、化け物とキスしちまいやがった。しかもあれ男だったしな…)

気絶から復活したサンジが荷物をもって学校に戻ってきたのだ

(不意を突かれたとはいえ、腹が立つな…)

謎の宇宙人、しかも男にキスされたことにサンジは苛立っている様子

(…こうなったら、誰かで口直しせねば…誰かとキスを…)
ですが、こっちもキスの事を考えていました

「~~~~」

そんなサンジの目の前をナミが歩いていました

「ナミすうわ~~~~ん!!俺と熱いキスを!!」

バシイイーン!!

サンジはナミにルパンダイブでキスをしようとしたましたが、平手打ちで叩かれてしまいました

「なっ、なにするんですか！？いきなり叩くことは無いでしょう！
！」
サンジはいきなり叩いたナミに文句を言う

「何言ってるのよ。サンジ君、軽音部のみんなと無理矢理キスしようとしたそうじゃない」

「ナミさん、俺は今戻ってきたばかりで…」

「まあいつものサンジ君だからとやかくは言わないけど

あっ、あとゾロがね…」

「ゾロが？」

「テメエ！！殺してやる！！！！」
ナミが説明をしようとした瞬間、さっきに満ちたゾロがサンジを見
つけ襲いかかってきました

その頃、屋上では

「なんなのよ、いきなりこんな屋上に連れ出して」
美琴が自分を屋上へと連れ出した男へ問いかける

「なにっつて、貴様が追いかけてきたのではないか。俺は貴様と俺が
知り合いだと思いきょうやって人気のない場所に連れ出ただけだ」

「ハッ！？なっ、何てこと言ってるのよ！！！！」

スーンという言葉に美琴は完全に動揺して顔も完熟トマトのように真っ

赤である。どうやらスーンは今当麻に変身しているようだ

「でっ、で、アンタは私に何がしたいって言うのよ?」

「貴様とディープキスがしたい」

「ドイツ!!ドイツ!!ドイツ!?!」

「してくれるか?」

スーンは美琴に顔を近づける

「なっ、何で!?!何で私がアンタとしなくちゃならないのよ!?!」

「何でって、俺が貴様にしたいからだ」

美琴は心臓がバクバクと大きく鼓動を打ちながらも何とか立っている。少し気を抜いたら嬉しさと恥ずかしさで倒れそうなのである

「ねえ」

「何だ?」

「今はここでもいいけどさ、今度するときにはもっとロマンチックな場所でしなさいよね」

「?????まあいいだろう?」

(ウツツツツ、これならうまくいきそうだな!?!このメス、ロマンチックだとか訳の分からぬことを言っているが気にする必要はない!)

今度こそ初の成功を確信したスーン。

だが、

「アンタ、上条じゃないでしょ!!」

先ほどまでの嬉しさや恥ずかしさ紅潮していた様子とは打って変わって、鋭い視線でスーンを睨みそう言い放つ美琴

「な、なにい？」

「自分でいうのもなんだけど、私とこの馬鹿との仲は誰から見たって恋人関係になってるとは言えないわ!それに…」

ガシツと、美琴は当麻に化けているスーンの両手を握り

バリバリバリ

高圧の電流を発生させてそれを直接スーンの身体に流し込んだのだ

「ぐあああつ x f け s r d t f y ぐいこう y t g」

スーンは言葉にならないような断絶魔をあげた

「本物なら、私の能力を打ち消しちゃうのよ!!何故だか知らないけど」

「くっ…これ以上化けていても仕方ないという事か…」

スーンは最後の力を振り絞り、立ち上がった

スーンは当麻の姿から元の自分の姿へと戻る

「アンタ何者よ?見た目とっても気持ち悪いんだけど」

「俺の名はスーン・ケタ口。この星を乗っ取る侵略隊長だ!!」

「へえー、宇宙からの侵略者ねえ」

「今度こそ貴様を洗脳してやる！！観念しろオオ！！」
スーンは美琴に襲いかかった

だが、

「侵略者だか何だか知らないけど、よくも私の乙女心を弄んでくれたわね。」

そんな輩は死んでその罪を償えやゴルアアアア！！！！」

ドゴオオオオオオオン！！！！

美琴は超電磁砲を打ちだしそれが見事スーンに命中。彼は星となった

「ったく、ふざけんじゃないわよ！！あーむしゃくしゃする！！」
超電磁砲を撃つたもののまだ彼女の中には怒りが残っていた

かくして、スーンの侵略作戦は失敗のまま終わった

「おつかし〜〜な〜、確かにすごい数の生物反応があったのに」

「隊長、本当にいなかったんでしょ〜〜ね〜〜？」

「くだいわ！！さっさと帰るぞ！！我が星へ！！」

こうして、いつものごとく

サンジ「誰がテメエなんかとキスするか！！」

ゾロ「キスしたその口でほざいてんじゃねえ！！」

ナギ「ハヤテ！！どういうつもりなのだ！？」

ハヤテ「だから僕は何もしてませんって」

ヒナギク「東宮君もどういっつもりなのかしら？私というものがあ
りながら女の子たちとキスしようとしたそうじゃない」

「だから僕はハヤテとしかキスしてないって！！」

「綾崎君、この落とし前どうつけてもらおうかしらね？」

「だから僕はアスナさんにそんなことはしてません！！音無先輩に
襲われてキスしただけです！！」

「ひどいよハヤテ！！僕とキスしてくれたのにそれを忘れちゃうな
んて！！」

「おのれ、ハヤテ！！お前BLに目覚めたのか！？」

「目覚めてませんってば~~~~！！」

「フッフ、音無さんが僕にキスしてくれた」

「うおのれ、音無イ……」

「なあ、日向。直井がさつきからにやけ顔でこっちを見てくるんだ
が。それに野田も親の仇みたいな感じで睨んでるんだけど」

「自分の胸に聞いてみたらどうだ？」

「御坂！何で追いかけてくるんだよ！！」

「煩いわね！！アンタを10発ぐらい殴らなきゃ気が済まないのよ
！！だから殴らせなさい！！」

「不幸だアアア！！」

いつもと同じように地球は、桃源郷学園は平和なままなのであった。

めでたしめでたし

第五十三話：突拍子もない豊後（後書き）

次回、一応文化祭の前夜祭です。でもその次は文化祭に入らない可能性が大了！

Youtubeでうる星やつらを見ていたら是非ともパロにしてみたい面白い話があったので。

その話にはCLANNADの渚の父秋生さんやバカテスの美春の父や迷い猫の都築乙女等が出てくるつもりです

話は変わりますが、秋アニメが始まりましたね。多分今季が今までで一番見る数が多いと思います。といっても10本未満ですけど…夏季は少なすぎ（2本だけ）でしたが…

もちろん、この小説に登場したシーキューブと僕は友達が少ないは見逃しませんよ！！

あと、カップルの募集も次回の投稿時で終了します。

第五十四話：プロジェクトP 挑戦者たち 『買い食い巡る死闘 開戦』(前)

今回は活動報告に書いた通り、買い食い編を先にお送りいたします。
また登場作品が一挙に3作品増えました

境界線上のホライゾン fate/stay night

真剣で私に恋しなさい
の3本です

このお話の

OP 「LIVE for LIFE 〈狼たちの夜〉」 ア

ニメ ベン・トー OP曲

ED 「15の夜」尾崎豊

今回のお話の元ネタはアニメつる星やつら69話です

第五十四話：プロジェクトP 挑戦者たち 『買い食いを巡る死闘 開戦』

神奈川県北三浦市桃源郷学園

総生徒数は3万人近く、広い敷地で伸び伸びと生徒たちは日々生活している

この学園は一つの問題を抱えていた

食堂のキャパシティである

2011年6月初旬現在、12時15分の4時間目終了チャイムが鳴ると同時に一斉に食堂に生徒たち（全生徒の8割近く）が集中していた。

しかし、麺類3名、定食3名、丼ぶり・カレー類2名、購買（パン・おにぎり・カップ麺・お菓子・お弁当・惣菜）2名のパートを雇い調理・販売を行っている食堂ではそれを捌ききることは出来なかった

960

それに加え、席にも問題があった

食堂で食べる生徒の数は座席の数の2.2倍

昼休み開始から終了まで常に50名近くが盆を持たまま席を探したり通路上で立ちながら食べているという光景が見られていた

そんな時、生徒たちはどうしていたか…

買い食いである

しかし、校則には次のような記述があった

“ 食事は弁当持参、購買・食堂での購入が原則。HR開始時刻（8：45）から授業終了時まで学校の外へ出歩いて食事をする事、また出前を頼む事を禁じる”

だが、この校則は食堂が出来た1970年前半（それまでは弁当持参）から破られ続け卒業までに昼休みを含めた授業時間中に歩き買い食いをした経験のある者は食堂開店当時から今までの中学高校全生徒数のうち95%が経験していた

さらに、学校側は買い食いを助長しかねない行為に打って出た6月7～16日までの10日間、食堂・購買の利用を諸事情により禁止するとの事。またその期間を『買い食い取締り強化週間』として買い食いを行った者に通常以上の罰を与えるということである

その知らせに生徒たちは怒った

生徒たちは決めた

“ 買い食いをしてやる”と

その情報を手に入れた教師陣も黙っているわけはなかった
すぐに生徒会・風紀委員及び一部生徒に買い食い阻止の協力を要請した

しかし、それらのグループ自体、今回の件に関しては離散の危機に立たされていた。なぜなら生徒会・風紀委員の中にも買い食い賛成派が多数いたからである

けれども、教師陣は持てるすべての力を集い少数精鋭“反買い食い派”グループの生徒を招集した。その中には報酬目当てで反買い食い派に回った生徒もいた

そして6月7日戦いの火蓋が切つて落とされた

これは6月7日12時20分から15時まで約3時間の記録である

ちなみにこの日は通常時間割であり午後も授業があつたことを注意されたい。つまり…言いたいことを分かつてほしい

6月7午前8時 HR 45分前

“買い食い派”の生徒たちが校庭に集まっていた

ルフィ「お前ら!!こんなことが許されていいと思つてんのか!? 学生だからという理由だけで、買い食いが禁止されていいと思つてんのか!?!」

「『そーだ、そーだ!!いいわけないだろオオオ!!!!』」

神楽「昔の人は言つたヨ!“人間、弁当のみに生きるに非ず。腹の減りは何が何でも満たしていけ”と!!!!」

買い食い派代表となつたルフィと神楽が壇上に立ち勇ましく猛弁する

「昼休みまで弁当を残しておく奴が何処の世界にいる!?!」

「居るわけがないネ!!学校は横暴すぎるヨ!!!!」

ちなみにこの学園における早弁率は77%そのうち昼休み前までに
完食してしまう割合は95%である

「「「異議なし!!」「」」

「おれたちは何があっても自由と昼飯のために戦うんだ!!」

「「「オオオオオ!!」「」」

ちなみにこの日の4時間目の授業は異例の全クラス自習

これが教師たちが補導の配置に着くための時間であるということ
は誰もが分かっていた

12時15分時点で全ての教師が校舎内から姿を消していた

そして12時20分 4時間目終了のチャイムが鳴った

「出陣じゃアアア!!」

「行けエエエエ!!」

「戦争じゃアアア!!」

「「「ウオオオオオオオ!!」「」」

生徒一人一人の声が合わさり怒号となり地面を、建物を揺らす
第一校舎の生徒約1600名が同時に昇降口から姿を現し、校門へ
と向かっていく。それはまるで本物の合戦のよう。またその中には
中等部や初等部の生徒たちもちらほらと確認できた

パアアン!!!パアアン!!

「何だこの音は!?!」

「何があった!?!」

聞こえてきたのは何かが打ちだされたような音。銃・火器類の発砲音とは違うような音である

「1年から3年の9〜12組が昇降口を抜けた直後、巨大な網で捕縛された!?!」

「畜生、こんな所にもトラップが仕掛けられていたか!?!」

「みんな、怯んじや駄目よ!?!これくらい想定内なんだから!?!」

ドゴオオオオオオ!?!

今度は何かの爆発音がした

その音はしばらくした後キーンという甲高い音に代わり走っている彼らの耳を劈いた

「クツツツ!?!今度はなんだツ!?!」

「耳がおかしくなりそう」

「鼓膜が破れそうだツ」

「緊急報告!?!緊急報告!?!1〜3年の6〜8組の生徒の9割方が地雷原突っ込み地雷等の爆発に巻き込まれた模様!?!」

「何て事をしやがる!?!奴ら、本当に教師かよ!?!」

「死者とか出ていないでしょうね?」

「死人は出てないらしい、それに怪我をしている人もいるけど障害が残るほどの大けがでもないって」

「人が死ななきゃ何でもいいのかよ!?!」

「それにしても、モブのクラスばかり潰れていくな」
「まあ仕方ないんじゃないかね。俺たちを潰してモブ残しても後の展開に困るだけだ」

「ご都合主義という奴ですね」

「この状況を踏まえて、一句できたぞ
買い食いに 儂く散りし モブの花
どうだ？」

「在り来りすぎ。山田君！！座布団全部持っていきなさい！！」
「山田君居ねえよ！！」

走り続け、彼らの目の前には校門が見えた

セイバー「大丈夫ですか、この人数」
インデックス「第一校舎の校門はここ一つしかないから一気に人が集まっちゃうかも！」

この校門の幅は6.5m、それを一気に越えたとすると人が集中してしまい突破するのに時間がかかってしまう

「構わないヨ！！走り続けるネ！！」

(やけに、足への反動が軽いな…)

そう思った次の時だった

「「「！！！！？？？」」」

突如、地面が抜けて先陣を切って走っていた大食漢5人（神楽、ル
フィ、インデックス、セイバー、スバル）は重力に逆らえずに落下
してしまった

「イタタタタ、尻もちついたかも」
スバル「ってこれ、落とし穴!？」

そうコンクリートを剥がし、校門の幅いっぱい落とし穴が作られ
ていたのだ

「……お前たちはここで終わりだ!!!」「」「」

落とし穴に落ちたルフィや神楽たちを校舎とは反対側から見下ろす
者が現れる

「おめえらは!!!」

ルフィはその立っていた面々に驚き声を上げる

「私たち? 私たちは学園の生徒の中でも一層の模範生が集い結成さ
れた」

「……真・風紀委員!!!」「」「」

「何だ、ただのお金目当ての集まりか」

確かに、その面々を見てみると模範生や生徒会所属のヒナギクや冬
琉、玲士郎、玲子、制理、雪広あやか、久保利光、セシリア、錐霞
などの他に金に細かい・守銭奴・金の亡者とも言われているシロジ
口、ハイディ、六夏、冴木氷室、龍宮真名、遠坂凜、喜界島もがな
の姿があるではないか

「違つわよ！！模範生の集まりよ！！」

「何言つてんだヨ、嘘ついてんじゃないネ。学園の犬が、どうせ懸^{ボーナス}賞金目当てなんだろ？」

ルフィ「そうなのか？」

「銀ちゃん言つてた、この闘争で生徒を補導すれば5人につき1万円が、さらに賞金首を捕まえればその強さに応じた懸^{ボーナス}賞金が出るつて。お前らもそれ目当てじゃないのかヨ？」

「……そんな訳ない！！」「」「」

と強く言い放つた真・風紀委員の面々だったが…

()(左向いてるウウウ!!)()
左を向いてしまっている

スバル「じゃあ聞きますけど、仮にもし私たちが1億円あげると言つたら…」

「……買い食い派につく!!」「」
学園にお金で雇われたのであるう六夏や氷室たちはあっさりと言いつつ放った

冬琉「貴方たち、何簡単に断言してるのよ!!」

あやか「買い食い派の人たちにバカにされてしまいますわよ!!」

「煩いネ、金の亡者のくせに」

「……私たちは金の亡者じゃないわよ!!」「」

同じ扱いにされたくないのであるう、ヒナギクたち本物の模範生は断固としてそういわれるのを拒否していた

セイバー「それにしても、いいのですか？」

凜「何よ、セイバー？」

「私たちにばかり構っていると…」

セイバーは横をチラリと見ながら言った

それにつられて反買い食い派の面々も横を見ている

「「「あああーーーーー！！！！」」」

なんと、生徒たちが壁をよじ登ったり、ジャスタウェイで壁を爆破して穴をあけたりと次から次へと抜け出しているではないか

「追え、今すぐ追うのよ！！」

「つて、こつちもいなくなってる！！」

穴に落ちていたはずのルフイたちもいつの間にか居なくなっていた

そして彼らは今、満腹という名の桃源郷パラダイスを目指して走り始めたのであった！！

現在の買い食い派の残り、全高校第一校舎1615人中345人

（この1615名は高校第一校舎の全生徒であり反買い食い派も含まれた数である。また残りの人数にはインデックスやセイバー、美琴などの買い食い派協力者も含まれている）

果たして、ルファイたち買い食い派の面々は無事に食事にありつける
ことが出来るのであろうか！？
次回に続く。

なお、活動報告に書いていた通りこれからの展開について楽しく会
議する話は買い食い編の後に書きます

モッピー「モッピー知ってるよ。これからの事について話し合っ
て言ってるけど下ネタばっかだっただけ。下ネタの限界に挑戦する
ってこと」

タマ「しかも、けしからんことに混浴ハーレムな話になるぜ」

カモ「おっぱいパラダイス！！」

松風「おうおうまゆっち、大和にアピールするいいチャンスじゃね
えか！！」

シラヌイ「ニヤーン、ニヤー…」

チヨッパ「今のシラヌイの言葉を訳すとだな、おっぱいと恋と
喧嘩は三浦の華(字余り) だそつだ。ってこの作品に出てくるマ
スコットキャラろくな奴が居ねえ！？」

ゲコ太「オメエ、コロス」

ノイちゃん「オメエ、ブツ飛バス」

レオポン「頭力チ割ル」

チヨッパ「こつちの人形3体もキャラ崩壊で人面石くんみたいにな
ってるウウウー！！」

黒藻の獣『じかい おたのしみに』

第五十五話：プロジェクトP

挑戦者たち

『買い食いを巡る死闘

圧力』

(前

皆さんお待ちせしました!!

第五十五話：プロジェクトP 挑戦者たち 『買い食いを巡る死闘 圧力』

前回のあらすじ

学園が食堂を休業させ買い食い強化週間なる運動を始めた。それに怒った生徒たちは第一校舎全クラスをあげての抗議活動（買い食い）をはじめたのだった

12時20分が鳴り、生徒たちは一斉に買い食いへと走り始めた
ルフィたちはまず、一番近い駅前通りの商店街へと向かっていた

神楽「ルフィ！どこか当てがあるのかヨ？」

「そんなものはない！！先生のいねえ店を片っ端から食べていく！！」

セイバー「ここから一番近い店はなんですか？」

スバル「フォルクスだよ！！」

「フォルクスか…ステーキとハンバーグを腹いっぱい食うぞ！！」

「……オオーーーー！！！！」

ルフィたちはまず、フォルクスに向かう事にした

そして1分もしないうちにフォルクスの焦げ茶色の建物と看板が見えてきた

けれども、様子がおかしい。生徒たちの人だかりは出来ているものの誰も中には入ろうとはしていない

「とうま！！何があったの!？」

先に到着していた当麻にインデックスが声をかける

「インデックス。これを見てみる」

当麻は扉に張られてあった一枚の張り紙を指差した
そこには、次のような文言が書かれてあった

“ 申し訳ありませんが、本日から6月日までの間の開店時刻は18時、桃源郷学園の生徒の立ち入りを禁止いたします。その間は料理や飲み物をお出しすることはできません。18時以降にお越しください”

インデックス「これってつまりどういうこと!？」

当麻「どうもこうも、レストラン側も協力してるんだ。学園側にな」

ルフィ「なんだよ！！それじゃあステーキくえねえのか！？折角楽しみにしていたのによオ！！」
ナミ「そうなるわね」

瀬川泉「それより、私走ってきたからのどが渴いちゃった」

美希「私もだ…ここら辺自販機なかったか？」

西沢歩「自販機ならあの駐車場の前に三つ…って…あれ？」

指差した。だが、彼女の記憶の中ではあったはずの自販機はそこにはなかった

「ここに自販機なかったっけ!? コカコーラとダイドーの!?!」
はジェスチャーをしながら言った

理沙「ああ確かにここにあった。何でないんだ？」

ウソップ「って、あっちの交差点の角にあった自販機も無えぞ!?!」
神楽「あそのマンシヨンの前にあった奴も無くなってるヨ!」

そう、この時点でサントリー、コカコーラ、ダイドー、アサヒにキリン。つい数時間前までそこらへんに設置されていたありとあらゆる飲料メーカーの自動販売機がこの街からひとつ残らず姿を消していた

この日の神奈川東部の最高気温は23 ほどであったが、湿度は70%を超えてジメジメとしていたのだ

(本当です。実際に2011年6月7日の神奈川の天気を参照しました)

一般的に人が快適に過ごせると言われている湿度は40〜60%だそうです。70%を超えると人は不快感を覚えるようだ

そのような気候の中で飲み物なしで走り回るのはきついであろう

スバル「先生たち、私たちに飲み物も飲ませないつもりなの!?!」

大和「きつとそうだろうな。長時間空腹で走らせて、さらにこのジメジメとした天候で飲み物も飲ませず俺たちをイライラさせる」

結弦「イライラがピークに達し自棄になったところを捕まえる。人は冷静さを失うほど畏にかかりやすいつていうからな」

日向「あとは買い食いを諦めて降伏するのを待っているんだろうな」
スバル「つまりこれって全部、先生たちの作戦の内って事?」

「ああ」

「む〜〜〜〜〜!!!」

インデックスはレストランの中で食事をしている人たちを強く睨みつける

「おい、インデックス。みつともないからやめろ」
当たり前だが、当麻はそんなインデックスを止めた。自分がやらねたら不快なだけですからね

「だって悔しいんだもん！ 私たちはお腹が空いてるのにあの人たちだけおいしそうに食べてさー！！
私もステーキ食いたいよー！！」

「うつまそ〜〜」
ヤモリのように手や顔や体を店のガラスに張り付け、ヨダレをダラダラと垂らしながら店内でテーブルに並べてある料理の数々をじつと眺めるルフィの姿があった

その姿に店内にいたお客や店員は啞然とし、小さな子供に至っては泣き出しているではないか

「やめんかみつともない！！」

ナミはそんなルフィの頭を思いつきり叩いた

「だってよ〜、俺たちステーキ食えないんだぜ？」

「だってじゃない！もうステーキは諦めなさい。他にもお店はたくさんあるのよ？」

豚カツのさぼてんに、焼き肉の牛角だって駅前にあるじゃない」

「！？豚カツに焼き肉だと！？」

「とうまー！！豚カツ食いたいんだよー！！」

「土郎、早く牛角に行きましょう。焼き肉が私たちを待ってます」

「あの〜、インデックスさん？豚カツ定食なんか食べたなら今月のこれからの食費がピンチになっちゃうんですけど」

「セイバーも、焼き肉にしないで牛丼にしないか？今日は特盛にし

「てもいいぞ？」

「嫌なんだよ！！さぼてんの豚カツが食べたいの！！」

「私も嫌です。私のお腹は焼き肉を欲しがっているんです」

ちなみに、土郎と当麻がフォルクスにいたのは彼らがフォルクス前を通過しようとした時にすでに人だかりができていて野次馬で何があつたか見たかつたからである。

彼らは、コンビニでカップ麺や弁当、もしくはすき家の牛丼など安く抑えるつもりだった。レストランのステーキや豚カツ、焼き肉のランチセットを食べる余裕は彼らにはないのだ

「おーいみんな~~~~！！」

フォルクスの前で屯していたルフィ達に駅の方から数人が駆けてきた

「一夏「どうしたんだ？鈴？」

鈴音「大変よ！！駅前のモスにマックにケンタッキーに吉野家。ありとあらゆる店が私たち（桃源郷学園生徒）の入店を拒否してるわ！！」

ティアナ「ファーストフードだけじゃないわ、餃子の王将に、ガスト、さぼてんに牛角にくら寿司、ファミレス関係も閉まってるわ！！」

「~~~~何だつてエエエ！！??」

ルフィやインデックスたちは声を荒らげた。折角、豚カツや焼き肉が食べられると思っていたのにそのさぼてんや牛角が閉まっているのだから

智春「それに、サークルKやローソンだとかのコンビニも食べ物と飲み物は置いてなかった。雑誌と雑貨しか置いてない。スーパーも

立ち入り禁止になってる」

食品が置いてある、ありとあらゆる店が閉まっているようだ

ブルルルル…

誰かの携帯電話が鳴った

「私のね」

鳴ったのはゆりのケータイ

「もしもし？うん、えっそっちも！？」

そう、こっちもなのよ。

うん…分かった」

は電話を切った

ゆり「千堂君からの電話で海岸通りのレストランもほとんど駄目で開いていたところも先生が見張ってるらしいわ」

ブルルルル…

今度鳴ったのは大河のケータイだった。

「もしもし…？みのりん？」

どうやら相手は実乃梨のようだ

「うん、ええ…なんですって！？」

大河は突然声を荒らげた

「どうした？」

「う、うん。分かったわ。ありがとう」

実乃梨にお礼を言って大河は電話を切った

「今とつておきの情報を手したわ。みのりんがバイトしているお店も閉まってて、店長さんに理由を聞いたら、学園から“閉めるように、閉めなくても学生の立ち入りを禁止するように”って言われたいわ」

「……何イイ!?」「」

大和「やっぱりな……」

岳人「やっぱりって、こうなることを予想してたのか?」

大和「ああ、先生たちの数にも限りがある。だから店に圧力をかけて入店させないようにして見張る店を少なくしているんだ」

雄二「それに、この学園の理事には日本の政財界にこの人ありと言われている、三千院帝と荒神洋燈がいるからな……金に物を言わして脅しているに違いない」

スバル「あの2人に係ればレストランの一つや二つ潰すのなんて朝飯前よね」

「汚ねえよ!!俺たちは昼飯を食おうとしているだけだろ!?!何でここまでするんだよ?」

トリーが叫ぶ

「そつえば、ブルーサンダー青雷亭はどうなのでござるか?トリー殿?」

そんなトリーに点蔵が聞く

トリー「もち、やってるに決まってるんだろ?」

喜美「愚弟の言う通りよ。母さんの事だからそんな金に物を言わせた脅迫には応じないはずよ」

「……早くそれを言えよオオオオ!!!」「」

八二カミながら親指を立てるトリーとそれに同じた喜美にその場にいた全員がツッコんだ

神楽「とにかく、青雷亭に向かうアル!!」

「オオオオオオオ!!」

神楽たちは一先ずトリーと喜美の母が営んでいる青雷亭ブルーサンダーに向かった

その頃、駅前通りから横道に一本入ったところにあるラーメン屋“

熊井ラーメン”では…

ちなみにここは2Cの生徒、熊井の実家でもある

熊井「オウ、お前らさつさと中に入れ」

一子「良かった〜、ここは開いてたんだね」

クリス「先生たちの盲点だったみたいね」

ここには2Cの買い食い派生徒の約1/3が詰めかけていた。

熊井は制服の上から前掛けをかけて調理の準備を始めていた

内山「俺ラーメン」

竜児「俺もラーメンで」

慎「俺は又焼麺」

一子「私、ミニチャーハンと餃子のセット」

梓「チャーハン」

憂「天津飯とスープのセット」

と次々に料理の注文をする生徒たち

「待ってる、今すぐ作るから」

そういうと、熊井はキッチンの中へと入って行った

だが…

「よお、待ってたぞ」

キッチンの中にはなぜかフランキーが居た

「何でフランキーがここにいる？」

「もちろん、お前たちを捕まえるためだ。あいつらが、食べたしたと同時に捕まえてやる」

「……」

熊井は唇を噛みながら料理を作り始めた。すぐに伝えてはフランキーもほぼ同時に動き、逃げるまでのタイム差が無い。どこか隙をつけないかと判断してからの結果だった

そして、10分後…

「まずはラーメン持ってきたぞ」
料理が出来始めていた

「お〜、うまそう!」

「早く、早く!」

「早くしてくれよな、いつ来るか分からないから」

「お…お」

熊井はプルプルと震えながら、テーブルへと料理を置いていく

「どうしたの？」

「いや、なんでもない……」

内山「じゃあ料理も来たことだし、お先にいっただけ……」

ガシツ、と熊井は何故か箸を伸ばそうとしていた内山の腕をつかんだ

「何すんだよ？」

「……」

は熊井にそう聞いたが彼は黙ったまま。

だが、彼は小さな声で何かを言っているようだった。もちろんキツチンの中で様子をうかがっているフランキーにばれない為である

「何言ってるんだ？」

「に……げ……る」

「逃げる？」

「そこまでだ！……」

彼が熊井に聞き返した時、突如入り口の前にあった招き猫の置物が動き出して声を上げた

「こんな置物置いた覚えはないぞ！？」

「ちよつと待って！……あれ、置物なんかじゃない」

置物は立ち上がると人間の女性の大人くらいの高さになった。いや、元々からその高さだったのだ

「てめえら、やっぱりここに来ると思ってたぞ」

「クミちゃん（ヤンクミ）！？」
そう、久美子が中に入っていたのだ。彼女は殻を破るかのように招き猫の置物風の着ぐるみを脱いだ
ちなみにクミちゃんというのは、久美子の女子生徒たちからのあだ名である

「逃げるぞ！！」

「クソッッ！！あんなものに化けていやがったなんて！！」

「待てエエ！！」

フランキーは逃げる慎たちを追おうとした。

ガシッッ！！

だが、店を出たところでは足が動かなくなってしまった

「慎ちゃん！！みんな！！逃げるオオオ！！」

熊井が掴んでいたのである

「クマ（ちゃん）！！」

「俺はいいから、早く！！」

「待て！！！！」

店から久美子が出てきた

慎「すまん、クマ」

内山「この借りは必ず返す」

「クマちゃんの事、忘れないよ」

彼らは熊井の身を捨ててのリタイアに悲しみながらも、新たな店を求め走り始めていた

次回、CLANNADの古河パン・迷い猫のストレイキャッツ・バカテスの美春の父が登場！！
早苗さんのハイパーレインボーパンも！？
果たして彼らは無事に食事にありつけることができるのか！？

現在の成果

食事成功者 0

半食事成功者 (食べ物にはありつけたものの、腹が満たされていない者) 0

(上記2つは出された料理を完食で1人とカウント)
買い食い派、残り344人

安否不明者 0

第五十五話：プロジェクトP 挑戦者たち 『買い食いを巡る死闘 圧力』(後

今回はちょっとつまらなかったかもですね。状況説明を重点的に置
きましたから…

“あなたの声優は誰？ったー”なるものをやってみた。

HVライナーでやってみたところ、子安武人さん、本名でやってみたところ、豊崎愛生さんでした〜。

それより、買い食い編が終わった後の総集編が大変なことになりそうです。

どう大変かという露天風呂の話が下ネタだらけになってしまいました。銀魂の屁怒組の銭湯の話よりもヤバいです。

随分前に行った、カップリングのアンケートの結果ですが、次回発表しようと思います。投票者1人につき1組以上出来ているのでご安心を

現在の状況

北三浦市の多くのレストランが学園からの圧力により閉店していた
閉店していない店も、教師の見張りがあり近づくことが出来ない

また前回には書かれていなかったが、学園から約3・5km離れて
いる逗子市逗子駅前の商店街やスーパーも閉まってはいないが生徒
たちの立ち入りを禁止している

同時刻、駅前通りの喫茶店ラ・ペデイスでは…

「お父さん、ただいま」

「おお！！美春、マイエンジェル！！」

美春からお父さんと呼ばれたひげを蓄えた男性は、店に入ってきた
美春にいきなり抱きつこうとした

だが、近くにあったトレイで美春は父の顔を思いつき叩いた

「まったく、いつも抱きつこうとして…」

あなたも人の事は言えないと思いますけどね」

父「こんな、時間に。学校は大丈夫なのか？」

美春「大丈夫よ。用事があって抜け出してきただけだから」

父「用事って、私に会いに来てくれたのか！？」

「そんな訳ないでしょ！！」

このお父さん。本当に娘の事が好きな親バカなんですな

「ところで、先生たち来てないわよね？」

「先生たちって、学園のか？」

「そうよ、来てるの？」

「…いや、来ていないぞ」

答えるまでに数秒の間があったが、美春はそれに気づかなかったよ
うで

「お姉様！！ここは大丈夫みたいですよ！！」

と、店の前で待機していた美波や2A、2Bの買い食い派の面々を
店の中へと招き入れた。

「良かった〜」

「ここ開いてたのね」

「先生たちの盲点だったみたいね」

パライイイン

美春の父は次々に入ってくる生徒たちの姿を見て、誤って持ってい
たお皿を割ってしまった

「お父さん？何やってるの？」

「…なんでもない……」

「お待たせしました。注文はお決まりですか？」

美春の父は割れたお皿の処理を終えて、水を入れたグラスをテーブ
ルへと置いていく

「はい、私は…って」
注文をしようとした美波だったが
中には水が入っていたのだが、ドライアイスも入っていて煙をモクモクと出ているのだ

「お父さん！！これはいったいどういう事！？」
一歩間違えれば凍傷になりかねない危険物を飲ませようとした父に美春は抗議をした

「どづいづ事って、決まってるだろう

娘を誑かす女に出す料理や飲み物は無いという事だアアア！！！！」

「ハア！？」
意味の分からない父の叫びに美春は聞き返した

「午前中に、先生から連絡があつたんだよ。
生徒たちが授業を抜け出して私の所に結婚のあいさつに来るってね。
授業時間中に来る学園の生徒は全てお宅の娘さんと結婚したいと思つていますってな」

「んなアホな」

「おじさん、そんなデマ信じてるの？」

「デマじゃないだろう。現にここに君たちがいる」
父は鬼のような形相で獣のような唸り声をあげて席に座っている美波たちを指差した。

「居るって、私たち女ですよ？」

「男も女も関係あるかアアア！！マイエンジェル美春に手を出す馬

の骨はどんな奴でも許さん！！！！」

美春の父は次第に黒いオーラに包まれていった

「ねえ、なんか怖くない？」

「出ていけエエエ！！！！貴様らに喰わせる料理はねえ！！！！」

「清水さんつて、お父さんにそっくりだったんだね」

「誰がですか！！あんな豚！！私とお姉様の愛の語らいを邪魔するなんて！！！！」

（（（そっくりだと思っけどな…）））
と、美波たちは思った

喫茶店ラ・ペディス 店長の妨害により食事にならず失敗

その頃、駅前通りから少し離れたところにある喫茶店ストレイキヤ
ツツでは

「……誰か、居るみたいね」

「そうだな」

扉に耳を当てて文乃と巧が言った。

千世「誰がいるのよ、乙女一人だけじゃないの？」

「話声がするんだ、姉さんと誰かが話している」

「誰かって、お客さんじゃないのか？」

「でも、この状況だと先生が中にいるかもしれない」

「そつだよな…せめて客か先生か判断がつけばな…」

巧はさつきよりも強く耳に押し当ててみた

「……」

「……」

中から聞き取れたのは男性1人の声と彼の姉乙女の声…

「なんか楽しそうね」

「うん、やっぱりお客さんなのかな？」

「ねえ、窓から見たらどうなのよ？」

「そんな事して中にいる人が先生で見つかったらどうすんのよ!!」

「シッ!! 静かに!!」

巧は小声で文乃と千世に注意をした

その時である

「ヨホホホ……」

特徴のある笑い声、もう誰がいるのかお分かりであろう

「……ブルツク先生!?!」

「ヨホホホ、都築さんたち。やっぱり来ると思っていましたよ」

「巧、この人面白い人ね。この骨は本物なのかしら？」

「ハハハ……それは……」

巧は姉である乙女の大らかさというか天然なところに苦笑いした

「実は、これ本物なんですよ！！驚かせてしまったら申し訳ありませんね」

「まあ！世の中には変わった人もいるのね〜」

（（まあ、姉さん（乙女さん）も変わってるけどね……いい意味でだけど））

巧と文乃はそんな事を思った。乙女は趣味が“人助け”であり、書留を残して居なくなたかと思うと世界中に飛んでいくような人なのである

「いやあ、都築さんのお姉さんにパンツを見せてくださいと頼んでいたんですけどねエ。なかなか見せてもらえなくって

というわけで、芹沢さん……パンツ見せてもらってもよろしいですかねえ！？」

「誰が見せるか！！」

文乃は強く言い放ち、ブルツクを叩いた

「ブルツク先生、ここには私たちを捕まえに？」

「ええ、ですが私こんな事はしたくないんですよ。仕事上無理やりやらされているというか」

ブルツクは天を仰ぎながら言う

大吾郎「なら、俺たちは買い食いをしてもいいのか？」

ブルツク「ええ、もちろんですとも。お腹もすいていますよね」

希「ケーキ、外のみんなにも持って行く」

「にゃあ大変。巧たちが!!」

「!!とにかく逃げるわよ!!」

「ケーキはどうするの?」

「ケーキよりもこの状況を外に報告するが先よ!!」

千世、巧、家康、大吾郎、ストレイキャッツにて12:29確保。
文乃と希は勝手口から脱出

その頃、3Aの古河渚の両親が営む古河パンでは…

「おっさん、居るか?」

「お父さんただいま〜」

古河パンの店の前にいた渚の父、古河秋生の元に朋也や渚がやってきた。その後ろには杏やことみ、春原もいる

「おう、渚に小僧、それに演劇部の連中もおそろいで、どうしたんだ?」

「どうしたもこうしたも、昼食を買いに来たんだ」

「お父さん、先生たち来てませんか?」

「来てるぞ、まあそこで寝てるけどな」

秋生が

よくよく見るとその手には、齧りかけの七色に光る物体があった。

朋也「おっさん、もしかしてこれを!?!」

秋生「ああ、この教師どもに喰わせた。この店の最終兵器をな」

~~~~~回想中 約15分前の事~~~~~

「というわけで、ここには生徒の皆が来る可能性が大いにあるので見張らせてもらおうですよ」

「よろしく頼むじゃんよ」

「へえ、先生たちも大変なんだなあ」

「でもこんなことはしたくないのですよ」

「だけど、生徒たちに悪い事したらどうなるかを教えるのも立派な教師の仕事じゃん？」

「2人とも生徒思いの良い先生じゃねえか、いよつ、大先生!!」  
秋生は2人をおだてた

「そうだ。先生たちもパン一ついかがですか?ご馳走しますよ」  
秋生は店から2つのパンを持ってきて小萌と黄泉川に渡した

黄泉川「…これ、大丈夫なのか?パンとは思えないような光り方をしているじゃんよ」

普通のパンは光らないと思いますけどね

「ハイパーレインボーパンっていうんだ。七色に光っているだろ?見た目はアレだが、味は保障するぜ」

「お言葉に甘えて、いただきます」

パンとは思えないような異様な姿に不安に思いつつもカプツと黄泉

川と小萌はハイパーレインボーパンを食べ始めた

「……!?!?!」

だが、間もないうちに体が異常を覚え…

その場に倒れこんでしまった。恐るべし、ハイパーレインボーパン

「悪いな、俺は渚たちの味方なんだ」

~~~~~回想終了~~~~~

「酷い事するわね」

「先生たち平気なのか？」

「心配すんな、しばらくしたら元に戻るだろう」

「そういえば小僧、もう先客が来てるぞ。1人はお前や渚と同じクラスらしいが」

「私たちと同じクラス？」

「ああ、オレンジの髪をした巨乳の姉ちゃんだ。それにその仲間の麦わら帽の小僧にシスターみたいな服を着た女の子に…」

「……マズイ……!」

朋也たちが秋生の言葉に多少の危機感を覚え店に入ると、

ガツガツガツ!!

と、ルフィ、神楽、スバル、セイバー、インデックスが片っ端から店のパンを食べているではないか

「これじゃあ、私たちの食べるものがないじゃない!？」

「どうしてくれるんだよ、オッサン!!今日は朝から何も食べてないんだぞ!？」

「いやあ〜、まさかこんなに食べるとはな。でもパン屋としては嬉しい限りだ」

秋生は笑いながら一心不乱にパンを食べているルフィたちを見守っている

「ところで姉ちゃん、結構な額になるんだがお金はちゃんと持ってきてるのか？」

秋生が心配するのはお金を払ってくれるかどうかだ。ルフィだけでもう60個近く食べている。

「勿論、学園にツケよ」

ナミは屈託のない笑顔で言った

「俺たちも学園にツケをお願いします!!」

当麻と士郎も言った。インデックスは41個目、セイバーは37個目であり彼らには持ち合わせは無いようだ

ザザザザ...

小萌と黄泉川の持っていた無線機から音が聞こえる

『月詠先生、黄泉川先生、そちらの情報をお願いします』

…… 応答してください?月詠先生?黄泉川先生?』

『おかしいぞ、古河パンの2人から反応がない!!』

『様子を見に行くぞ!!』

「大変だ、先生たちが来るよ!!」

「早く逃げるネ!!」

無線機から聞こえたやり取りを聞いて

「おい、お前らちょっと待て」

朋也が店を出ようとしたルフィたちを止めた

「ん?どうしたんだ?」

「早く逃げないと先生たち来ちゃうかも」

「そんな事はどうでもいい。

“働かざる者食うべからず”って言葉知ってるよな?」

「知ってるよ、働きもしないニート野郎はご飯食べちゃダメってことだよね」

「...それ、インデックスさん(セイバー)に当てはまると思うんだけどな...」

「何か言った(いましたか)!!?」

「...なんでもありません」

当麻と士郎の小さな反抗は無かったことにされてしまった

「で、それがどうかしたの?」

「お前たちがこのパンを全て食べてしまったせいで、俺たちは食べなかった。だから俺たちが飯にありつけるまで手伝ってくれよな?」

「...なにイイイイ!!??」

ルフィたちは朋也や渚たちを手伝うことになってしまった。まあ他人の事も考えずに残さず食べてしまった彼らが悪いんですけどね

同時刻：

『こちら和定食まなみ、男女5名補導』

『こちら、大盛り食堂BIG MAMMY、食べすぎで動けなくなつた男子生徒7名補導』

『こちら揚げ物の竜王、男女5名補導、残り4名を追跡中』

『アイスクリーム屋スイーツバーにて女子4名を補導』

『しゃぶしゃぶとすき焼きの二子庵にて15名補導、3名追跡中』

『おでん屋福来にてダチヨウの真似をして遊んでいた5名を補導。うち一人火傷の模様』

と確保情報が理事長の元へと入ってきていた

「いやあ、実に気持ちいいねえ。生徒たちが私の思う壺になる姿というものは」

反買い食い派作戦本部には理事長が居て無線機から聞こえてくる声を楽しそうに聞いていた

『逗葉新道経由の横須賀駅・汐入駅行バスに生徒たちが乗り込んだ模様！！』

『こちらも、学園前駅発鎌倉駅行バスに生徒たちが乗り込んだとの情報！！』

一部の生徒たちが路線バスを使い、行動を始めたみたいですね

「ハツハ、ハツハ、やはりそう来ると思ってましたよ。この街（北三浦・逗子）が駄目なら他の街へと行くだろう。電車が使えない今、

路線バスとタクシーしか彼らには手段がないからね…面白くなってきたよ!!」

理事長は立ち上がると無線機を取り、

「機動部隊を出撃させなさい!!」

そう強く言い放った

『了解!!』

現在の成果

食事成功者 11 (神楽 新八 ルフィ ウソップ ナミ スバル

ティアナ 当麻 インデックス セイバー 土郎)

半食事成功者 0

(上の2つには捕まった者は含めないとする)

買い食い派、345人中残り299人

安否不明者 0

第五十六話：プロジェクトP 挑戦者たち 『買い食いを巡る死闘 家族愛』

今回のお話で学園がどの辺にあるか分かりますかね？

次回、情性的だったこの物語もついに動き出す！！

横須賀行のバスに乗り込んだトリーや大和たちに牙をむくのは！？

そして、真・風紀委員もついに動き出す！！

第五十七話 『買い食いを巡る死闘 対価』 ご期待ください

2か月ほど前に、アンケートを取ったカップリングが出来ましたのでここで発表します。

沖田×ティアナ 明久×瑞希 上条×美琴 一夏×シャルロット
一方通行×打ち止め キンジ×白雪 稟×シア 秀吉×九兵衛 鍵×深夏

のペアが文化祭イベントに参戦します

さらにハイスクールD×Dより一誠×リアス、境界線上のホライゾンよりトリー×ホライゾン、シロジロ×ハイデイが参戦します

それ以外のカップリングも参加するかも…

生徒たち約20名を乗せたバスは逗葉新道から横横（横浜横須賀道路）へと入り、一路横須賀へと向かっていた。ちなみにこのバスには現在、生徒たち以外の乗客はいない

「まさかバスに乗ってるとは思わないだろ!!」

「そうね、それにこのバス運賃が高いし」

「高いお金払って横須賀まで行く奴がいるなんて先生たちも思わないだろうしね」

三浦半島一帯のバスの初乗り運賃は170円なのだが、このバスは有料道路を通る関係で運賃が500円もするのだ。それに電車で学園から横須賀まで行くのに時間もかからず値段も電車の方が安いためこのバスを利用する者は普段は居ないのだ

ホライゾン「横須賀着いたら何食べるのですか？」

トリー「あつちには何でもあるからな」

点蔵「まあ、北三浦と逗子の殆どの店舗が閉まってるで御座るからな」

岳人「大和、大丈夫なのか？横須賀に行っても」

翔一「無駄足になるのは嫌だぞ？それに往復で1000円もかかるんだから」

大和「考えてみる。教師側は店を閉めさせなければならなかった。それはつまり、教師側は真・風紀委員を含めても人員が足りず北三浦と逗子の全ての店舗を抑えることは出来ないという事だ。」

「ちよっと待って。もし閉めさせた理由が人員が足りないからじゃなくて、横須賀や鎌倉に回すために北三浦の監視人数を減らしてい

たとしたら…」

京「先輩、大和の考えにいちやもんをつけないでください」

「……だけど、ネシンバラ先輩の言った事は一理ある。もし、あつちが俺たちが横須賀や鎌倉に移動する事を考慮しているとしたら…」

「その時は久里浜まで行っちゃう？フェリー出てるから千葉まで行けるよ？」

「バカね愚弟、フェリーに乗って千葉まで行ったとしても着くのは金谷。あんな僻地にレストランがあると思って？」

「言い過ぎですわ！あのような僻地でもレストランはあるはずですよ」

「そつだ、あんな僻地でも何かしらいいところはあるはずだ」

「さつきから聞いていると僻地、僻地とバカにしかしていない気がするので御座るが」

ほんとそつですよ。いいところですよ金谷も？一度しか行った事ないのですが金谷の近くの鋸山はハイキングにベストで地獄のぞきもスリルがあつて一度行ってみる価値はあると思いますよ！！

バスはカーブを曲がり。

「逗子のICインターチェンジだ。横須賀まであと半分だな」

大和がそう言ったその時…

バスが突然、追い越し車線側に傾き横転したのだ

バスに乗っていた大和たちは一瞬の浮遊感を感じ取ったのち、地面

にたたきつけられた

「いったあああ」

「事故か!？」

「おかしいわよ、衝突ならまだしもこんな直線区間で横転だなんて
「とりあえず、外に出よう。このバスはもう使えない」

バスは窓ガラスが割れ、内部には煙が立ち込めている。何が起ころ
か分からないため、大和たちはひとまず外に出ることにした

「やっぱり来ると思っていたわ」

高速道路のそばの木陰から誰かが姿を現した

「「「ロビン先生!？」」「」

「悪いけど、ここから先にはあなたたちを行かせないわ」

「もしかして、この横転事故ロビン先生がやったんですか？」

「勘がいいわね、その通りよ」

ロビンは大和の問いに微笑を浮かべながら答えた

「どういうこと? ロビン先生がこんな大きなバスを横転させること
なんてできるの?」

「知っているだろ? ロビン先生の能力は身体の一部を咲かせる能力
だ。1本や2本じゃ無理かもしれないが、何本もバスの片面に咲か
せて地面を同時に押せばバスはさつきみたいに横転する」

「でもバスを横転させたとはいえ、倒せるんじゃないか? 俺たち2

0人近くいるし」

「果たしてそうかしら？」

崖の上から新たに4人が下りてきた

「なんじゃ、ルフィはおらぬのか？」

ハンコック

「ルフィ君はおらぬが、骨のある奴はおりそうじゃのう」
ジンベエ

「……………」

ミホーク

「安心なさい、ヴァナタたち。ヴァターシたちはここを通さない！——」

イワンコフ

「……通さないのかよ！！——本取られたよ！！——」

いつものノリで、イワンコフにツッコミを入れる買い食い派の面々

「悠長に、ツッコミをしている場合でないで御座るよ」

「ああ、元も含めて王下七武海3人に革命軍幹部がいるから……—
筋縄じゃ通してもらえないだろう」

「逃げようとしても無理だね、北三浦の市街まで4・5キロはあるから」

「じゃあ、どうやって通してもらおうんだよ？」

「まともに戦ったとしても、勝てはしないだろうな。たとえば姉さんでも」

「ほう、大和。それはどういう意味だ？」

「こんな事は言いたくないんだけど、俺たちと場数や経験値が違ってるんだ。俺たちは地球の中でしか、下手すりゃ日本なのでしか戦ったことは無いが、先生たちは宇宙を股に掛ける海賊団の船長や一員なんだ」

「私たちは所詮井の中の蛙って事なのか？」

「……」

認めたくはないがそれは事実。クリスに問われて大和は渋々頷く

「トリッキーな方法はどうかしら」

「意表をつけて相手が一瞬怯んだ隙に攻められれば少しは変わるかもしれないけど……」

「意表を突く……ねえ……」

そうだ。良いアイデア思いついた!!」

どうやら、トリーが何かを思いついたようです

「とりあえず、ここにいる男は集まれ。せんせー、ちょっと作戦タイム下さーい」

トリーは笑顔でロビンたちに手を振って、許可もとらないうちに男子同士で円陣を組み作戦を話し始めた

「『ええええ!!???』」

「いやですうう！！絶対にいやですうう！！」

「俺たち、そんなキャラじゃないで御座るよ！？」

「その作戦には参加したくないです。イツセー君なら適役かもしれないけど」

「木場！？お前俺をそんな風に見てたのか！？」

「俺も反対です！誰がそんな真似…」

「…いや、向いてるかもしれないぞ！？」

「おい、キャップ、ガクト、モロ、何でそんな事言っただ！？そんなキャラじゃないだろ？」

「だけど実際、アニメの中でしてただろ？」

「…うっ…反論できない」

1分近くたったのち、円陣は解かれた

「作戦とやらは立て終わっダブルのかしら」

「ええ、立て終わりましたよ。いい作戦が」

前方に百代、一子、由紀江、クリス、祐斗、小猫、ゼノヴィア、点蔵、ウルキアガ、直政、ミトツダイラ等といった近距離武器使い
中間に京、朱乃、浅間等といった遠距離武器使い
そして後方に卓也、アーシア、喜美、ネシンバラなどのサポート・及び司令塔役がいるといった標準的な布陣である

前方と中間の間になぜか、一誠、大和、トーリの3人がいる

「チャンスは一度つきりだ。行けエエ！！」

トーリが叫ぶ

「トリー殿の言う通りにするで御座る!!」
「これが最初で最後のチャンスだ!!行くぞ!!」

「……なつつつ!?!」「」

「……きやあつつ……」

トリー達三人の後ろにいた浅間、アーシアたちは目の前の出来事に目を点にして声を上げる

「……なつつ……」「」

ハンコックにイワンコフ、ジンベエは思わず声を上げた。目の前の光景が信じられなかったからだ

今、この場で何が起きているか説明しよう……

大和、一誠、トリーが股間丸出しで仁王立ちになっているのだ!!

「……」

ロビンとミホークはこんな光景にも相変わらずの無口のままだ

「今だ!!俺たちに構わず攻め続ける!!」
股間を丸出しにしながら指令を出す大和

「見苦しいだけだ。恥と言うものがないのか?」

ジンベエは呆れながらそう呟いた

「手荒で良ければ止めさせるわよ?」

「先生卑怯よ、大和の握るなんて！！私もまだ数回しか握ったことないのに！！」

京はとんでもないことを暴露してしまっています

「おい、京…俺にはそんな記憶はないんだが…？」

大和は痛みに堪えながら京に聞く

「だって、大和が寝ているときに夜這いして…」

京は頬を赤く染め恥らいながら俯き言った。ほんとに恥らっているならそんな事しないと思いますけどね

「…こいつも変態だアアアツ！！！！」

「遊びの時間はそこまでだ」

だが、そのツッコミもミホークの重い一言で一気に変わった

「こいつらには少々きつい仕置きが必要な様だ」

ミホークは背に負った長刀に手をかける

「！！！！！！」

「……………」

無言のまま、横にそれを一振りした。

「な…何をしたんだ？」

「私たち無事よね？」

「ミホーク先生、一体何を？」

しかし、彼らの身体には傷一つついておらず変わったところはなかった。だが…

けたたましい音と共に彼らの背後のトンネルを覆っていた土や岩、木が崩れ落ちてきたのだ。その崩れた斜面は刃物で切り取られたかのように水平であった

「まさか、さっきの一振りですべて崩れたってどういうの？」

「あり得ない話だが、そう考えるのが妥当だろう」

「フッフッフ…アハハハハ！！！」

「面白い！！私は戦うぞ。元も含め王家七武海3人に革命軍幹部！目の前の強き者に私の身体は興奮している！！食事など今は二の次だ」

大和「姉さん、ノリノリだな…」

一子「お姉様が本気を出して戦える相手が5人もいて戦えるっていうんだから仕方ないわよ」

「そのバトル、私も参戦していいかしら？」

そう言ったのは意外にもリアスだった

百代「構わない、邪魔はしないでくれるか？」

リアス「ええ、もちろん」

「部長！？何でそんな急に！？」

「何でってイツセー、あなたに原因があるのよ？」

「俺ですか？？言ってる意味が分からないんですけど？」

リアス「あなた、ハンコック先生の胸をいつも汚らわしい目つきで見てるわよ？」

一誠「何でバレてたんですか！？おかしいな…部長のクラスとは美術の時間は別の曜日のはずなのに…口を滑らせてたのか…」

朱乃「アーシアやゼノヴィアから聞きましたのよ？美術の時間、いつもハンコック先生の胸を見ながら鼻を伸ばしてるそうですね」
祐斗「それにイツセー君、何度も授業時間中に石にされてるからね」

「私の可愛いイツセーを誑かす先生を一度懲らしめておきたいと思つたのよ」

「最強と謳われた剣士、鷹の目のミホークことミホーク先生とも前から一度お手合わせしてみたかったし」

「最強か、なら先生に勝ったら私たちが最強か？」

「まゆつちー、すげえチャンスじゃねえか！！日本通り越して世界最強だぜ？」

「そうですね、松風。私もモモ先輩と共に戦います」

「負けたら大変なことになりそうだけどね、ハンコック先生に石にされちゃうか、はたまたイワさんに性別を変えられちゃうか」

「例え性別が変わろうとも風間ファミリーは永久に不滅だ」

ホライゾン「もし、性別が変わったとしても、私たちの絆も不滅ですよね？」

喜美「勿論よ、性別なんてただの括りでしかないもの」

トリー「じゃあ、1・2・3年ABC組買い食い派連合軍、行くっか。頼りにしてるぜ？」

「『オオオオオオオオ!!!』」

12:40 横横・逗葉新道 逗子ICにて戦闘開始

12:45 海岸通り近くの海に面した公園

5時間目が始まるまで15分と迫る中、残りの買い食い派の8割近くは公園の砂浜に集まっていた。

だが彼らには諦めの色は見えてはいない。買い食い派の面々は午後の授業をボイコットする意思を固めていた

「とりあえず、現状を確認しましょ。今、満腹なのは誰?」
ナミの問いかけに、手を挙げたのは先ほどの11人のみ。

「まずいな…みんなもつと食べていると思ったんだが」

「俺たちに関してはお前らのせいだ。後から来るやつのも考えずに食べやがって」

「そうですね…反省してます」

「そうよ、あんた達のせいで小鷹は犠牲になったのよ」

「あなたたちのせいで春原が犠牲になったと言っても過言ではないわね」

「いや、僕たちは悪くないでしょ!?!よく思い出してみてください
よ…!」

さて、春原と小鷹が捕まった時何があったというのか?見てみることにしましょう

〳〵回想中 7分前の事〳〵

古河パンを出たルフィ、神楽、渚たちは食事ができるところを探していた。

その途中、3人で行動をしていた小鷹、夜空、星奈を見つけ、彼等もルフィたちと行動することになった

ところで、彼等は走っていた。何故なら…

「逃げる!!」

「デスメガネに見つかったネ!!」

デスメガネこと高畑に見つかり追われていたのだ。

「待ちなさい、君たち。僕からは逃げられないよ」

「誰が待つものか!!」

「待てって言われて待つバカは居ないわよ!!」

神楽やティアナ、ルフィ、ウソップは最後尾で高畑に攻撃を仕掛けながら逃げているが中々ダメージにはつながらない

「ちくしょう!!今度は!!いてえ!!?」

後ろを見ながら走っていたルフィは前で走っていた当麻たちが止まっているのにも気づかず、そのままぶつかってしまった

ルフィ「何で逃げねえんだよ!!ぶつかっちゃっただろ!!」

「囲まれたんだよ…俺たち」

「んあ?囲まれた?どういう意味だ、土郎?」

「もうこれで逃げることは出来まい」

曲がり角から一人の男が現れた

朋也「葛木…」

そう、生徒会顧問の葛木が現れたのだ

葛木「君たちもここまでだ。大人しく降伏しなさい」

高畑「さてどうする？君たちは本当に逃げられなくなったんじゃないのかい？」

ウソップ「おいおい、どうするんだ？困まれちまったぞ」

「こういう時は、決まっているだろう。奥の手だ」

「奥の手？まさか、あの2人に勝てる必勝法でもあるっていうのか」
「ええ、この状況で使える戦術が一つだけあるわ」

夜空と星奈は顔を見合わせる

「どうやら考えていることは一致したようだな」

「そのようね、協力しましょ」

「戦いに犠牲はつきものよ。大を生かすために小を贄に捧げるわ」
「

「へっ??」

「「というわけで小鷹、犠牲になれ（なりなさい）」
何を言われたのか理解に困っている小鷹の肩を二人は掴むと高畑の方へと突き飛ばした

「春原も私たちのために犠牲になってくれるわよね？」

杏は笑顔で春原に聞いた

「なる訳ないだろ！？誰が生贄になんか！！」

「煩いわね、さっさとなりなさい」

杏も春原を葛木へと笑顔で突き飛ばした

((羽瀬川に春原……君たちの尊い犠牲は無駄にしない…潔く死んでっくれ))

そう心で思いながら彼らは足早に去って行った

「とりあえず、2人確保」

「ですね」

葛木と高畑は淡々と彼らに手錠をかけて言った

「先生！！あいつらを捕まえてくれよ！！停学にしてくれ！！死刑にしてくれエエ！！」

小鷹と春原の涙を流しながらの空しい叫びが虚空に響くだけだった

〳〳回想終了〳〳

「明らかに肉が悪いな」

「ハア！？夜空だって私と一緒に小鷹を先生に差し出したじゃない

！！！」

「何をいつている？私はだな…」

夜空と星奈が口論を始めようとした次の瞬間

「「「お前ら、ここで何をしている？」「」「」

と、公園の入り口の方から声がかかった

その声に振り向くと、そこにいたのは

「真・風紀委員!?」
ルフィや神楽たちが声を上げる

そう、そこにいたのは反買い食い派の生徒集団“真・風紀委員”だったのだ。

次回へ続く!!

現在の成果

食事成功者 11

半食事成功者 (食べ物にはありつけたものの、腹が満たされていない者) 0

買い食い派、残り297人

安否不明者 29人 (風間ファミリー オカルト研究部 トーリ
たち11名 (逗子IC上で戦闘中))

次回、買い食い編がついに決着!? 勝つのはどっちか!?
逮捕者も!?

やばい…文章力が落ちてきている…

それに私、居酒屋でバイトをしているのですが、これからの時期忙しくなりそうで…年末までに買い食い編を終わらせて、混浴温泉編にはいりたい…

ちなみに、混浴温泉編のOPはNO PLANの“前略、露天風呂の上より”です。もう何をするかお分かりですよね？

銀時『今日は、本文に入る前に作者に聞きたいことがあります』
HV『なんででしょう?』

銀時『なんで、前回の投稿から今回の投稿まで3週間以上かかってんの?』

HV『大学の課題とバイトが忙しいんです。この前なんて7時間労働でしたし…それに…』

ハヤテ『それに、なんですか?』

HV『ごめんなさい、3DSしてました…』

『へえ〜、3DSねえ…。で、なにやってるのよ?』

『モンスターハンターとマリオカートです…チャナガブル今日初めて闘ったんだが、勝てる気がしない…ロアルドロスと戦ったときは水中戦得意になって思ったのに。』

イビルジョーやジンオウガ・ベリオロスと戦ってみたいんだが何時になることやら』

『作者ってモンハンの武器ってなんなの?』

『太刀一筋です。あと、モンハンのモンスターもこの物語の文化祭後に出てくるかも?』

第五十八話のエンディングはMetis『人間失格』ですよ

ルフィたち、作戦会議をしていた買い食い派の前に現れたのは反買い食い派の真・風紀委員だった

グギユウウルルウウ

さて、彼らの姿を見てか、買い食い派のまだ食事を済ませていない面々の腹がなった。勿論、頭が空腹でおかしくなつて真・風紀委員の面々が食べ物に見えたというわけではない

「お弁当美味しいわ」

「コンビニの弁当も中々いけますわね」

彼等は弁当や牛丼、ハンバーガー等を食べながら彼らの前に現れたのである

「な、なんでてめえら昼飯食つてんだよ!？」

ルフィはその光景に声を荒らげながら聞いた

「それはこつちのセリフだ。ングング…何故君たちは昼食を食べていない?」

「仕方ないわよ、シロ君。彼ら早弁してもうお弁当がないんだから。ア~~~~ン」

「プハツツ。それは残念ね〜、ングング……、昼休みなのに食べるものがないなんてかわいそうで泣けてくるわ。ングング」

彼等は厭味つたらしくお弁当を食べ、飲み物を飲みながら話している。六夏なんて口では泣けてくると言っているがドヤ顔で笑いなが

らコンビニの菓子パンを食べている。

グギユルルルル

「ヤベえ。さつき食ったばかりなのにもう腹が減ってきた」

「早えよ！…つい10分前に喰ったばかりだろ！？」

「待って、あなたたちほんとは買い食い派なんじゃないの？」

「何かといえはそんな事…言うと思ってたわ」

「これを見てみなさい」

ルフィたちに手渡されたのはレシートの数々。その日付は今日2011年6月7日で時間は全て午前4時からHR前の8時半と記載されている。

「これってつまり…」

「そう、俺たちは朝のHR前にこれを買った」

「だから私たちは校則違反をしていないのよ」

買い食いが制限されているのは8:45のHR開始から授業終了時まで。彼らの言う通り、朝に弁当を買うのは校則違反ではないのだ。その証拠に彼らが食べているマクドナルドのハンバーガーは朝マツクのものだ

「ちょっと待って下さい！！」

「どうしたのかしら？」

「それなら…今出歩いているのはどうなんですか！？」

「そうネ！…帰りのHRが終わるまで校則じゃ出歩くの禁止だったはずヨ！…！」

「そうですね、先輩たちも出歩いてるんですから私たちの事悪く言えないじゃないですか!？」

「残念ね、私たちのアラを探しているようだけどそれは無理よ」

「私たちは校長や理事、理事長から許可を得て出歩いているのよ? あなたたちと違って」

反買い食い派の面々はポケットの中から一枚の紙を取り出す。それは、昼休みを含めた授業時間内に学校の外へ出歩くことを許可する許可証。普段は“体調が悪い時に病院に行く”、“親戚の危篤”などが許可の対象となる

どうにかして、真・風紀委員の弱みを握りたいと思っていたルフィたちではあるが、真・風紀委員の面々はそれを見越したかのようにやり込めていく

「お前らもどうだ? 反買い食い派に入れば、美味しいお弁当やジュースが食べ放題で飲み放題ですぜい」

と、甘い言葉で近づくと総悟であったが、

「うわ~~~~手が滑った~~~~」

総悟は棒読みで弁当やサンドイッチがうつほど入ったビニール袋を放り投げた

「~~~~あつつつ!?!?」「~~~~」

彼らが喉から手が出るほど欲しがっていた弁当は、宙を舞い空中分解しながら海へと落ちる

「やべ~~~~、おとしちゃまった~~~~」

まだ棒読みで言う総悟。その顔は何処か勝ち誇っているようだ

「沖田先輩、落としてしまった分は仕方ないですわ。こつちにまだお弁当ありますわよ」

「そっか〜、じゃあ俺たち弁当食うからこれで。」

あつ、海に落としちやった奴は食べてもいいですぜイ」

ニヤリと厭味つたらしく笑った総悟は、新しい弁当を食べようと真・風紀委員の元へと戻って行く

神楽がポケットの中から何かを取り出した。それは…酢昆布であった。ちなみにこれもあらかじめ買ってあった物を持ってきたため校則違反にはならない

神楽は枯れ木を拾ってきて火を焚くと酢昆布をあぶり始めたのだ。他の買い食い派の面々も、酢昆布を串に刺しては焚火であぶり始め、幸せそうに食べていた

その姿は狂気と言ってもいいのかもしれない

「なつ…酢昆布をあんなにおいしそうに!?!」

「何で幸せそうに酢昆布を食べられるの?」

「よお、学園の犬」

神楽は酢昆布をくちやくちや音を立て食べながら

「なつ、誰が学園の犬よ!?!」

「お前らそんなところでビニール袋なんて持っていていいアルか?」

神楽はさっきの総悟のようにニヤリと厭味つたらしく笑うと

「うっ…」

自分の口の中に指を入れて喉のあたりを触り始めたのだ

「吐きそう、それ貸して!!」

神楽は真風紀委員の持っていたビニールを奪い取ると…

オボロロロロロ……

それに自分の吐瀉物をぶちまけたのだ

「ごめんごめん、エチケット袋と間違えちゃったヨ」

「気持ち悪いわ!」

「逃げるわよ!こっちまで気持ち悪くなりそう!」

「居なくなっただか?」

「汚いやり方とはいえ、追い払えましたね」

「いいんだ、これくらい。あっちだって汚い方法で俺らを降伏させようとしていたんだ」

「あれ?なにかしら?」

ゆりは、公園の入り口のあたりにビニール袋を見つけた

それはビニール袋に入った弁当やサンドイッチ、おにぎりだった。言っておくが、さつき神楽が吐瀉物をぶちまけたものではない。新品とほとんど変わらない姿であった

敵に塩を送るってわけじゃないけど、これでも食べて力をつけて元気が出たら、思う存分戦いましょ　立華かなで

ゆり「奏ちゃん…」

結弦「かなで…」

今の彼らにはかなでが本物の天使に見えたと言っても過言ではないであろう

だが、もう一枚紙が入っていて、そこには次のように書かれていた

PS . そのお弁当やパンの中に下剤を入れといたから。食った奴はザマア　by 沖田

この文を読んだ彼らは思った

沖田は…どこまでも最低な野郎だ…

ギョルルルルル…!!!

「「「OHhhhh!!!!!!NOオオオオ!!!!!!」」」

すでに我慢できずに食べ始めていた者の腹を強烈な便意が襲った
ちなみに、かなでは総悟によって弁当に下剤が仕込まれているのは知らない。ただ純粹に、買い食い派に少しでも栄養を取ってほしかったのだ

13時　下痢になってしまった人を除いて作戦は予定通り実行される作戦というのは至極簡単。大人数で駅前通りにある店3つに奇襲攻

撃を仕掛けると言ったものである

大盛り食堂BIGMAMMY前

「BIGMAMMY準備完了」

揚げ物竜王

「竜王、何時でも行ける!!」

しゃぶしゃぶとすき焼きの二子庵

「二子庵、準備整ったぜ」

「どこも準備完了のようだな。」

時計の秒針は刻一刻と時を刻み続ける

そして…

カチツツ…

午後1時、秒針と長針が重なり合った

『今だ!!突入しろオオ!!』

無線機から聞こえるルフィの叫び声とともに、彼らは走り出した

「よつやく現れましたね~~~~ですけど、食べさせませんよ~~~~
?..?」

BIGMAMMY入り口近くで新聞を読んでいた男が、急に声を上げた

「この声は児玉か!？」

「ええ、その通りですとも」

その新聞を読んでいた男とは英語教師の児玉だった。

「ようやく来ましたね、校則も守ろうとしない不良たち!! 貴様らのような奴が学校を駄目にするんだ!!」

児玉は、BIGMAMMYの入り口の前に陣取り、意地でも動かさうとしない

「児玉!! 退きやがれ!!」

「誰が不良共のいう事を聞くものか!! ここは誰一人、通しはせん!!」

「退かないと危ないわよ？」

「何が危ないだ。そんな不良の言う事...」
と、次の瞬間、児玉は倒れた。

「だから言わんこつちやない」

「作戦成功だね」

「児玉には悪いけど、食事のためだからね」

児玉とBIGMAMMYの扉の間には金属バットを持った

BIG MAMMYに入ろうとした達であったが、
シンシユンシユン！！
次の瞬間、

「かかったわね」

「……な……」

たちは、目を疑った。そこに居たのは胸を強調して、下着が今にも見えそうなほど短い丈のスカートを履いて、さらには猫耳、猫尻尾といった装飾品を付けたアラサー（？）教師、雪路・藤村大河・オリオトライの姿があった

「先生、そんな格好して恥ずかしくないの？」

「年齢つてものを考えようよ。少しは」

「うるさいわね！！これでもまだ20代よ！！」

「20代と言つてもあとちよつとで三十路だろうが」

「それを言つなああ！！」

「ちよつと、その人たち」

「へっ？」

「私たちの事？」

雪路と藤村大河とオリオトライは後ろから突然声を掛けられたので振り返つた

「その交番までいいかな？」

声をかけてきたのは、警察官だった

「何よ、警察が何の用？私たち、悪いこと何もしてないわよ？」

「そこにいる人から話を聞いてね、その子たちを誘拐しようとしているそうじゃないか？」

警察官が指差す先には、ジメジメとした気候の中、茶色いコートを着て、帽子を深くかぶった男が立っていた。深く帽子をかぶっているのとコートのせいでどんな容姿をしているのかは分からない

「ちょっと待って、私たちは教師と生徒の関係で……」

「そうなのかね？」

警察官は縛られているに聞いたが

「知りません」

「そんな痴女が教師だなんてあり得ません」

「私たち初めて会って、誘拐されそうになったんです」

「その人たちがHな事をしない？って変な誘惑してきて断ったんです。そしたらこうやってロープで縛られて……」

彼等は雪路たちから逃れられるチャンスだと思い、3人を誘拐犯扱いしていく

でも、25歳前後の女性が胸を強調させてネコミミのついた超ミニスカのメイド服を祭りやイベントでもないのに着ていたら確かに痴女かAVの撮影かと見間違えそうですよね

「未成年者略取の現行犯だね、交番で詳しく事情を聴かせてもらうか」

カチャリ……

次の瞬間、雪路たちの手首には手錠がかけられ警察に連行された

「待ちなさいよ！！私たちは本物の教師よ！？」

「教員採用試験だってちゃんと受けて受かったんだから！」

「本当のこと言いなさいよ！！！」

3人の叫びは空しく虚空に響くだけだった

「……おーい！！」「」「」

遠くから自分たちを呼ぶ声が聞こえる……公園で待機していたルフイたちがやってきたのだ

ところで、謎の男の正体はというと……

「店も見張りが強化されちまったし、俺に今できることはこれ位しかねえ。渚に、ガキ共！頑張れよ！！！」

渚の父、古河秋生だったみたいですね。

新八「今から、しゃぶしゃぶとすき焼きの二子庵に向かいます」

「店を支配できたのか！？」

神楽「IS使いの鈴たちや、アリアやファイアたちが戦って善戦中らしいヨ」

インデックス「私たちも加勢して反買い食い派を挟み撃ちで潰しちやおうっていう作戦なんだよ！」

「揚げ物竜王の方は？」

「まだ連絡がない……多分捕まったんだと思う」

「助けに行かなくていいのか？」

「モブの奴らには悪いが、奴らは見捨てる。今は二子庵に戦力を集中させる……！」

だが、二子庵に着いたルフィたちが目にしたのは異様な光景だった

「な…何だよこれ？」

「石になってる…」

善戦していたはずのアリア、ファイア、一夏たち14人が石像と化していたのである。誰かから逃げようとしていた感じであるが…

「とうまの力で何とかならないの？」

「そうよ、上条の魔力を打ち消す力なら元に戻せるはずよ！！」

「ああ、やってみる」

当麻は一夏たちを元に戻すため、右手で石造に触れようとした

「悪いけど、元に戻させはしないよ」

しかし、触れるまで10？といったところで、誰かに腕を強くつかまれてしまった

「フェイト！！」

フェイト・アーウェルクス、完全なる世界の構成員にしてネギのライバル、その強さは計り知れない

「フェイト、お前がこんな真似をしたのか！？」

「そう、僕が彼らを石にした。悪い行いをする生徒を肅正するのも教師の大事な仕事の一つだからね」

仲間を石にされ、怒りが込み上げている当麻とは裏腹にフェイトは

感情の起伏もなく淡々と話している

「彼ら（一夏たち）はよく頑張っていたよ、彼らのせいで反買い食
い派の教師と生徒10人が戦闘離脱した。だけど、僕には勝てな
かった」

あと、逗子ICに向かった人たちだけど、その人たちは降伏したよ」

サンジ「そんな、百代さんやリアスちゃんが負けたとでも!？」

「ああ、彼らも人質を取られたら降伏しちゃったよ」

「人質だつて？」

「簡単なことだ。ハンコツク先生が石化を使って、それを破壊しよ
うとしたら涙ながらにやめてくれって言ってたそうだ」

「そんなことまでしたの!？」

「フェイト、お前らのやり方は人の倫理も感情も全く感じられねえ
!!!」

「確かにそうかもしれないね、だとしたらどうするといふんだ?」

「まずは、お前のその幻想をぶち殺す!!」

「やった!!カミヤん」

当麻はフェイトの頬に渾身の一撃を加えた。だが…

「その程度?君の力は?」

仰け反りもせず、フェイトはその場に根を張ったかのように立った
ままである

インデックス「なんで！？とうまなら魔法障壁を破壊できるから効くはずじゃないの!？」

「考えが甘いね、君たちは。魔法使いが全て魔法や魔術に頼ってると思ってるのかい？」

それに功夫がなくてないよ。あとこれは只のパンチだ、魔力も何も付加していないよ」

「ぐはっっ!？」

フェイトのパンチで当麻の身体は吹き飛ばされ建物の壁に直撃、体中を叩きつけられた。建物には大きく亀裂が入っている

「さて、次の相手はだれかな？」

フェイトは当麻が気絶しかけているのを確認するとルフィたちへと歩み寄ってくる

「待て待て、フェイト君」

そんなフェイトに待ったをかける人物がいた

「なんだい、シルバース・レイリー」

シルバース・レイリー、ロジャー海賊団元副船長にして現桃源郷学園理事、そしてルフィの師匠である。その後ろには

「レイリー!？」

「おお、ルフィ。ここにいたのか」

「フェイト君、君のやり方で確保しては駄目だ。生徒に恐怖しか与えない」

「けれど、効率的かつ同時に確保ができる。この方法以外にいいや

り方があるっていうのかい？」

「例えば、こんな風にだ」

ドン！！！！

ルフィたちの後ろにいた買い食い派のほぼ6割近くが倒れこんでしまった

ルフィ「霸王色の覇気！！」

神楽「何ヨそれ？」

インデックス「本で読んだことがある！数百万人に1人の“王の素質”を持つ者にしか身に着けることができなない魔力でも超能力でもない威圧の力だって！！」

「そのとおりだ。」

さて、ルフィたちに2つの選択肢を与えよう。1つはこれ以上戦うことをやめて降伏すること。もう1つはこの危機的状況の中、戦い続ける。どっちを選ぶ？

言っておくが数分後には逗子ICに行った君の仲間のロビン君やハノンコックそれにジンベエも戻ってくる。

どうする、ルフィ？」

ルフィ「戦うに決まってるだろ！？」

神楽「おうヨ！！ナギに見せてもらったアニメでも言ってたネ！！戦い抜いて勝ち取った食べ物の味は涙が出るくらいおいしいって！！」

ベン・トーのことですね

セイバー「涙が出るほどおいしいのですか。食べてみる価値は十分にありますね」

スバル」

インデックス「とうまがやられちゃった分、私が敵を討って、とうまと一緒にその味を噛み締めたいんだよ」

「それでは始めるとしようか、今日最後の戦いを！！」

(ルフィ、やはり君にはその麦わら帽が似合いそうだ)

レイリーはそんなことを思いながら、剣を手にした

最終決戦が始まった

2時間後：午後3時20分過ぎ...

そこに立っていたのは、レイリーやフェイトにネギたちといった。反買い食い派の人間のみ。そう、ルフィたち買い食い派は敗北を喫してしまったのだ

「ハツハツ、ハツハツ、終わっちゃったかな？」

「それにしても、これはちょっとやりすぎなんじゃないかい？」

新八「お登勢さんに…理事長？？」

新八が声の主を確認する。それは理事のお登勢と指揮をしていた理事長であった

お登勢「やれやれ、こんなド派手やってくれて、建物も破壊されてるよ」

理事長「まあ、こんなことがあると、予感して住人達を避難させといたんだけどね」

どうやら、第五十五話の入店拒否や店を閉めているというのは大暴動に住人達が巻き込まれないようにするための理事長の配慮の一つだったんですね

「ところで、君たちに聞きたいことがある」

「なんだよ」

「何で、君たちはこんな真似をしたんだい？ 正攻法はあっただろうにさ」

「正攻法ですって？ そんなものある訳…」

「本当にそうかな。君たち、生徒手帳は持っているかい？」

「ええ、持ってますけど…」

「なら、そのp12を開いてみてごらん」

新八「p12？ 多分そこには学則が書いてあったと思うけど…」

神楽「生徒手帳なんて読むの初めてヨ」

ルフィたちは薄れゆく意識の中、生徒手帳の学則の指定されたページを見た。そこには次のように書かれていた

『第 条 生徒による、学則の改正・追加について

生徒により発案された学則の改正・追加案はその生徒が通う校舎の生徒の過半数以上の署名を集め校長若しくは理事に提出することにより提出された1か月以内の職員会議に掛けられる。会議で案が認められた場合、翌年よりその学則が適応される

また、発案者の生徒が通う校舎の生徒の八割以上の署名を集め、かつ緊急性が認められた場合、校長若しくは理事に提出した48時間以内に緊急の会議が開かれ認められた場合、1週間以内にその学則は適応される』

ちなみに、理事長が食堂が使えなくなると言ったのは1週間前つまり、その1週間の間に生徒八割の署名を集め提出すれば、緊急の職員会議に掛けられ認められる可能性は十分にあったのだってどうか、この校則があることを知ってる人、買い食い派の中に居なかったんですね？

「その校則は彼是5年は使われていないんじゃないかい？学生運動の頃は1日に何十もの学則や法案が提出されていたものだけどねえ」「ハツハツ、ハツハツ、そうだね、最後にこの校則に則った署名活動は2002年で校舎・教室内でサッカー・野球・バスケットキャッチボールを認めるっていう運動だったね。その時は20%ぐらいしか集まらなかったと思うよ？」

幾らなんでもそれは通らないと思いますけどね。窓ガラスや蛍光灯が割れるのが目に見えていますし

ちなみに、学則では禁止されていますがこれも代々破られ続けている校則の一つで、『窓ガラスや蛍光灯を割っては補習室や生徒指導室に連行されて説教』というのもこの学園の日常の一つなのである

かくして、買い食い派vs教師・反買い食い派の戦いは、教師・反買い食い派の勝利にて終わった

だが、その代わりに得るものは大きかった

その翌日6月8日から署名運動は始まり、9日の午前中には第一校舎生徒92%の署名を集めた。9日正午にその署名は提出され夕方緊急職員会議が開かれた

そして11日土曜日、普段は休みであるが臨時HRが行われ、次の学則が新たに加わった事が教師から生徒へと伝わった。

《内》が新たに加わった部分である。

“食事は弁当持参、購買・食堂での購入が原則。HR開始時刻（8：45）から授業終了時まで学校の外へ出歩いて食事をする事、また出前を頼む事を禁じる。《ただし、工事・メンテナンスなどでやむを得ない事情で使えない場合、特例として昼休み時間（12：15～13：00）の出歩いての買い食いを認める》”

特例ではあるが、彼等にとって大きな進歩であった。

さらに、6月17日

第一校舎の食堂は変わった

6月6日まで1階建だった食堂は倉庫だった地下1階を食堂に、長い事使われていなかった会議室の2階をパン・弁当類を販売する購買とフードコートへと改造。食堂の席数は2倍、働くパートの人数は3倍となり通路上で立ったまま食べたり開いている席を探す等といった生徒や教師の姿は見えなくなった

そう、理事長が食堂の使用を禁止にしたのは食堂のリニューアルのためだったのだ

そんな理事長は6月18日夜、パソコンの画面を見ながらあることを考えていた。

画面には桃源郷学園小中高第一校舎全生徒・全教師の個人情報や機密データが事細かに記されていた。それには、彼らが秘密にしたい、しているはずの情報もである

(彼らには、革命を起こせる力がある。革命を起こせるほどの熱意がある。その力を俺と共に…この国を変えるために)

次回、総集編！だけどやるのは水着着用禁止の混浴温泉裸祭り！男たちはその桃源郷に何を見るのか！？

偶には占いのコーナーをしちゃいましょう。次回第五十九話が投稿されるまでの運勢を占っちゃいます。(協力：桃源郷学園第二生徒会)

1位 おとめ座

スキンヘッドにしたら勉強も恋も仕事も人間関係も何もかもうまくイっちゃうよ！！北野武やマイケルムーアから映画主演も頼まれちゃうって！！スキンヘッドにしない人は：知らネ、二位を参考にしてください！！

近藤「マジで！？スキンヘッドにしちゃおっかな！？」

2位 うお座

あなたが電車に乗ってて前に女性が座ってたならその人絶対ノーパンだよ！！

ヒナギク「嫌よ！！何で痴女に遭遇しなきゃならないのよ！？」

3位 おひつじ座

KARAと少女時代の見分けがやっとつくようになるよ！！よかつたね

ブルック「ヨホホホ、良かったです。見分けがつかなくて困ってたんですよ」

4位 さそり座

街頭のティッシュ配りに遭遇しやすい一日、多く貰うという損はな

いよー！！
梓「あつ…どうも。…もうティッシュ貰ったの今日だけで100
個目です」

5位 かに座
街中で500円落ちてて拾おうとするけど、他の人に拾われちゃう。
まあ、500円見つけられただけハッピー
第「誰がそんな乞食のような真似をするか！！」

6位 いて座
ラッキーアイテムはバリカン。おとめ座の人の頭をスキンヘッドに
してあげよう
唯「私がスキンヘッドにしてあげるよ。任せといて、やったこと
ないけど！」

7位 ふたご座
トイレでトイレの神様を歌ったら本当に現れて綺麗なジャイアンを
押し付けられちゃうよ
長谷川「もう遅いよ…どうしろってんだよ、こんなジャイアン」
マダオ

8位 おうし座
気を付けて！！あなたが使おうとしているそのマヨ！！ケチャップ
が混入してるよ！
土方「本当だ！！誰だ！？俺のマヨにケチャップ入れた奴！！出て
こい！！」

9位 みずがめ座
青山テルマと帽子をかぶったゴリラの見分けがつかなくなっちゃう。
でも安心して、それ病気じゃないよ！
凜「バカにしてるの！？…ちよっと待って、あれ？どっちが青山

テルマだっけ！？あれ……？？」

10位 やぎ座

取っ手の取れるティファールの取っ手がつっても取れすぎちゃって料理が台無しに。料理は控えた方がいいよ！

漣「ああっ……！！せつかく作った晩ご飯が……！！」

11位 しし座

人間失格の歌を聞いて鬱になっちゃう。でもそれ自業自得だよ！

小鷹「……」

12位 てんびん座

おとめ座と間違われてスキンヘッドにされちゃう。生え際の後退は始まつてるからもう生えてこないかも！？負けないで……！！

明久「それどういう意味！？生え際が後退してもう生えてこないって！？ちよつと、何でバリカンを持ってんのさ！？僕てんびん座だよ……！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8541m/>

とある学園の無責任な日常

2011年12月18日05時46分発行